36

國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
MAY 27 1993
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

36

經集部 三

深浦正文
二宮守人 譯

解深密經凡例

本書中科節を分つに章・節・項・目・一・(一)・1・(1)・イ・(イ)・A・(A)・a・(a)・甲・(甲)・天・(天)を以てする。この中、章・節・項・目の四は各々一行を設ける事とし、それ以下は次の如き體裁による。

(一)(二)……本文中に追込み見出しとし、その中を(一)・(二)等に分つ。

(一)(二)……之より以下全部符號のみを本文の肩に記し、それの科節の文は夫々一纏めにして、脚註の中に出す事とした。而して(一)・(二)等の下に更に(1)・(2)等を分つ。

(1)(2)……この中に更に(1)・(2)等を分つ。

(1)(2)……この中に更に(イ)・(ロ)等を分つ。

(イ)(ロ)……この中に更に(イ)・(ロ)等を分つ。

(イ)(ロ)……この中に更に(A)・(B)等を分つ。

(A)(B)……この中に更に(A)・(B)等を分つ。

(A)……┐
(B)……┘この中に更に(a)・(b)等を分つ。

(a)……┐
(b)……┘この中に更に(a)・(b)等を分つ。

(a)……┐
(b)……┘この中に更に(甲)・(乙)等を分つ。

(甲)……┐
(乙)……┘この中に更に(甲)・(乙)等を分つ。

(甲)……┐
(乙)……┘この中に更に(天)・(地)等を分つ。

(天)……┐
(地)……┘この中に更に(天)・(地)等を分つ。

(天)……┐
(地)……┘

右の中、時として節・項・目並に(一)の中に一種或は全部を省略して、直ちに(一)或は(一)に移れる場合がある。之は文の長短又は重要性等を考慮して、かくなしたものである。

尚脚註の中に於て、科節の文を一纏めにして示したる場合は、常に※の符號を以て本文中の相當個所を示す事とした。

譯者誌

目次

（本丁）　（通頁）

解深密經解題……（一―三）……一

解深密經（五卷）……（一―二九）……三

卷の第一……（一―三二）……三

序品第一……三

第一章　三種成就を明す……三

第二章　三種圓滿を明す……三

第一節　世尊の住所圓滿……三

第二節　世尊の總別功德の圓滿……四

第一項　總德……四

第二項　別德……四

第三節　所被の眷の圓滿……五

第一項　大聲聞衆……六

第一目　數を標して來會を示す……六

第二目　廣く諸德を讚す……六

第三目　善く奉行する事を明す……六

第二項　菩薩衆……六

第一目　數を標して來會を示す……七

第二目　廣く諸德を讚す……一七
勝義諦相品第二……一九
[第一段　離言無二の相を明す]……一九
第一章　略して一切法無二の體を明す……一九
第一節　請問……一九
第二節　略答……一九
第二章　廣く一切法無二の體を明す……一九
第一節　徵問……一九
第二節　廣釋……一九
第一項　有爲の假施設を釋す……二〇
第一目　三相を遮す……二〇
第二目　有爲を設く所由を示す……二〇
第二項　無爲の假施設を遮す……二〇
第一目　三相を遮す……二〇
第二目　無爲を說く所由を示す……二〇
第三章　喩を擧げて重ねて示す……二一
第一節　徵問……二一
第二節　正說……二一
第一項　喩說……二一
第一目　善幻師の喩……二一
第二目　智と愚との所見異なるの喩……二一
第二項　合說……二三

第一目　愚者執實の喩に合す……三
第二目　智者了幻の喩に合す……三
第三項　總　結……三
第四章　頌を以て重說す……三
［第二段　超過尋思所行の相を明す］……三
第一章　法涌の起說……三
第一節　所見の事を陳ぶ……四
第二節　己が所念を述ぶ……四
第二章　世尊の應答……四
第一節　印可略說……四
第二節　自徵廣說……五
第一項　法　說……五
第一目　內自の所證……五
第二目　無相の所行……五
第三目　不可言說……五
第四目　絕諸表示……五
第五目　息諸諍論……五
第二項　喩　說……五
第一目　辛苦を習ふ者の喩……六
第二目　欲貪を習ふ者の喩……六
第三目　言說に著する者の喩……六
第四目　表示に著する者の喩……六

第五目　諍論に著する者の喩……二六
第三項　合説……二六
第三章　頌を以て重示す……二七
［第三段　超過諸法一異の相を明す］……二七
第一章　善慧の起説……二七
第一節　世尊の教化を讃す……二七
第二節　曾見の事を陳ぶ……二七
第一項　總じて一會の相を陳ぶ……二七
第二項　別して三類の執を叙す……二八
第三節　己が所念を述ぶ……二八
第二章　世尊の應答……二八
第一節　如來の印可……二八
第二節　如來の略答……二八
第三節　如來の正答……二九
第一項　自徵……二九
第二項　正答……二九
第一目　法説……二九
第二目　説喩……三一
第三目　合説……三二
第三項　總結……三二
第三章　頌を以て重説す……三二

〔第四段 遍一切一味の相を明す〕……三一
第一章 如來の告問……三一
第二章 善現の奉答……三二
第一節 略して告問に答ふ……三二
第二節 廣く所見を述ぶ……三三
第一項 自他の住所を明す……三三
第二項 他の記別を叙す……三三
第一目 總じて異解をなすことを陳ぶ……三三
第二目 別してその所解を陳ぶ……三三
第三節 己が所念を述ぶ……三五
第一項 上慢の執を述ぶ……三五
第二項 佛の所説を歎ず……三五
第三項 餘の境に非ることを顯はす……三五
第三章 世尊の正説……三五
第一節 印可略説……三五
第二節 自徵廣釋……三六
第一項 法説……三六
第一目 淸淨所緣に約して一味の相を顯はす……三六
第二目 通達に約して一味の相を示す……三六
第三目 無爲に約して一味の相を釋す……三六
第二項 喩説……三七
第三項 合説……三七

第四章　頌を以て重示す……三七
心意識相品第三……三八
第一章　廣慧の訪問……三九
第二章　如來の正答……三九
第一節　世尊の讃評……三九
第一項　其の所問を讃す……三九
第二項　勅聽許說……三九
第二節　問に應へて正しく答ふ……三九
第一項　心意識の秘密の義を明す……三九
第一目　根本識を明す……四〇
第二目　俱轉識を明す……四〇
第二項　秘密善巧の義を明す……四一
第一目　善巧の義を明す……四一
第二目　前問を決答す……四二
第三章　頌を以て重說す……四二

卷の第二……〔三二――五五〕……四四

一切法相品第四……四四
第一章　德本の請問……四四
第二章　如來の正說……四四
第一節　世尊の讃評……四四

第一項　其の所問を讃す……四四
第二項　勅聽許說……四四
第二節　問に對して正しく答ふ……四四
第一項　諸法の相を明す……四五
第一目　法說……四五
第二目　喩說……四六
第一項　秘密善巧の義を明す……四六
第一目　善巧の相を明す……四七
第二目　前問を決答す……四七
第三章　頌を以て重說す……四七
無自性相品第五……四九
第一章　勝義生の請問……四九
第一節　曾念の事を陳ぶ……四九
第一項　總じて所念を陳ぶ……四九
第二項　曾聞の敎を擧ぐ……四九
第一目　有敎……四九
第二目　空敎……五〇
第三項　昔の所疑を述ぶ……五〇
第二節　正しく請問を發す……五〇
第二章　世尊の正答……五〇
第一節　世尊の讃評……五〇
第一項　其の所問を讃す……五〇

第二項　勅聽許說……四九
第二節　問に對して正しく答ふ……五〇
第一項　三無性に依りて密意の教を解釋す……五一
第一目　三無性に依りて皆無自性を說く密意を辨ず……五一
第二目　初後に無性によりて無生無滅を說くことを辨ず……五一
第二項　流轉に約して三無性を立つることを辨ず……五二
第一目　有情の執に約して立意を辨ず……五二
第二目　流轉に約して立意を辨ず……五二
第三項　還滅に約して三無性を示說す……五三
第一目　生無自性性を示說す……五三
第二目　餘の二の無自性性を示說す……五三
第四項　一乘の密意を示して種姓の差別を顯す……五四
第一目　一乘の密意を說く……五五
第二目　趣寂と廻向の別を明す……五五
第五項　密意の教に於て諸の意解ある事を明す……五五
第一目　總じて意解の差別を標す……五六
第二目　別して意解の差別と明す……五六
第三目　義を結す……五六
第六項　頌を以て重說す……五九
第三章　菩薩の領解……六〇
第一節　廣く領解を申ぶ……六〇
第一項　總じて密意の教を歎ず……六〇
第二項　別して領解する所を述ぶ……六〇

第一目　蘊等の五門に約して三無性を頌す……六〇
第二目　苦等の四諦に約して三無性を頌す……六一
第三目　七科道品を約して三無性を頌す……六二
第三項　喩を擧げて了別を顯はす……六二
第一目　毘濕縛藥の喩……六二
第二目　彩畫の地の喩……六三
第三目　熟蘇の喩……六三
第四目　虛空の喩……六三
第二節　世尊の讃評……六三
第一項　所說を讃歎す……六三
第二項　印耳勸持……六四
第四章　校量して益を顯はす……六四
第一節　菩薩の請問……六四
第一項　一代敎を校量して三時となす……六四
第一目　第一時四諦有敎の法輪……六四
第二目　第二無相空敎の法輪……六四
第三目　第三時了義中道の法輪……六五
第二項　了義敎の勝益を問ふ……六五
第二節　世尊の正答……六五
第一項　如來の略答……六五
第二項　喩を擧げて重ねて說く……六五
第一目　喩說……六六
第二目　合說……六六

第五章　奉持の得益……六六
第一節　經名の奉持……六六
第二節　時衆の得益……六六

卷の第三……〔五六—八二〕……六八

分別瑜伽品第六……六八
第一章　瑜伽を分別す……六八
第一節　廣く止觀の相を辯ず……六八
第一項　止觀の依と住とを分別す……六八
第一目　菩薩の請問……六八
第二目　世尊の正答……六八
第二項　止觀の所緣の差別を分別す……六八
第一目　菩薩の請問……六八
第二目　世尊の正答……六八
第三項　止觀の求と善とを分別す……六九
第一目　正しく止觀の求と善とを分別す……六九
第二目　止觀に隨順する勝解作意を分別す……六九
第四項　二道の一異を分別す……七〇
第一目　正しく二道の異不を明す……七〇
第二目　心と影との一異を分別す……七〇
第五項　止觀の單と雙との修習を分別す……七一
第一目　正しく單と雙との修習を明す……七一
第二目　重ねて三種所緣の體を明す……七一

第六項　止觀の種を分別す……七二
第一目　觀の種類を分別す……七二
第二目　止の種類を分別す……七二
第七項　依法、不依法の止觀を分別す……七三
第一目　菩薩の請問……七三
第二目　如來の正答……七三
第八項　法を緣ずる總別の止觀を分別す……七三
第一目　總じて總別法を緣ずる止觀を分別す……七三
第二目　別して總法總法を緣ずる差別を明す……七四
第三目　總法を緣ずる諸緣を分別す……七五
第四目　位に約して得と通達とを分別す……七五
第九項　有尋伺等を分別す……七五
第一目　菩薩の請問……七五
第二目　世尊の正答……七五
第十項　止擧捨の相を分別す……七六
第一目　菩薩の請問……七六
第二目　世尊の正答……七六
第十一項　知法、知義を分別す……七六
第一目　所知の法を義とを明す……七六
第二目　能知の差別を明す……八〇
第三目　諸相を除遣することを明す……八一
第十二項　勝三摩地か攝することを明す……八三
第一目　菩薩の請問……八三
第二目　世尊の正答……八三

第十三項　止觀の因果業を明す……八三
第一目　止觀の因を明す……八三
第二目　止觀の果を明す……八四
第三目　止觀の業を明す……八四
第十四項　止觀の諸障差別を明す……八四
第一目　止觀を障ゆる繫と蓋とを分別す……八四
第二目　心散動法を分別す……八五
第三目　所治の十一障を分別す……八五
第十五項　勤修して菩提を證すること明す……八六
第一目　菩薩の請問……八六
第二目　世尊の正答……八六
第十六項　威德と引發することを分別す……八七
第一目　菩薩の請問……八七
第二目　世尊の正答……八七
第十七項　無餘の滅受を分別す……八九
第一目　菩薩の請問……八九
第二目　世尊の正答……八九
第二節　問に讚して學を勸む……九〇
第一項　問に讚す……九〇
第二項　學を勸む……九〇
第三節　頌を以って重說す……九〇
第二章　教に依って奉持す……九一
第一節　經名の奉持……九一

第二節　時衆の得益……九一

卷の第四……〔八三――一〇三〕……九五

地波羅蜜多品第七……九五

第一章　問答正說……九五
第一節　諸他を分別す……九五
第一項　二種の法を以て諸地を攝することを明す……九五
第一目　菩薩の請問……九五
第二目　世尊の正說……九五
第二項　十一地の名を釋す……九七
第一目　菩薩の請問……九七
第二目　世尊の正答……九七
第三項　諸地の所治を明す……九八
第一目　菩薩の請問……九八
第二目　世尊の正答……九八
第四項　殊勝安立を示す……一〇〇
第一目　菩薩の請問……一〇〇
第二目　世尊の正答……一〇〇
第五項　菩薩の生の殊勝なる因緣を明す……一〇〇
第一目　菩薩の請問……一〇〇
第二目　世尊の正答……一〇一
第六項　菩薩の三大願を行する因緣を明す……一〇一
第一目　菩薩の請問……一〇一

第 目　世尊の正答……一〇一
第二節　波羅蜜多を分別す……一〇一
第一項　正しく諸度を明す……一〇一
第一目　所學の多少を分別す……一〇一
第二目　三學の所攝を分別す……一〇二
第三目　福智の所攝を分別す……一〇二
第四目　五種の相を修學することを明す……一〇二
第五目　六度の無增減を分別す……一〇三
第六目　四度の無增減を分別す……一〇三
第七目　六種の次第を分別す……一〇四
第八目　六度の品類を分別す……一〇五
第九目　波羅蜜の得名を分別す……一〇五
第十目　廣大等の五相を分別す……一〇九
第十一目　因果俱に無盡なることを分別す……一〇九
第十二目　度を愛して果を愛すること非ることを分別す……一〇九
第十三目　最勝の威德を分別す……一一〇
第十四目　因・果・義利を分別す……一一〇
第十五目　衆生の自業の過失を分別す……一一〇
第十六目　般若を以て無性を取ることを差別す……一一一
第十七目　三種の波羅蜜多を分別す……一一一
第二項　修習の相を示す……一一三
第一目　麁重斷ずるによりて隨眠を顯示することを分別す……一一三
第二目　諸地の煩惱の相と失と德とを示す……一一三
第三項　一乘の密意を示す……一一三

第一目　菩薩の請問……一一四
第二目　世尊の正說……一一四
第三節　頌を以て重說す……一一四
第二章　奉持の得益……一一五
第一節　經名の奉持……一一五
第二節　時衆の得益……一一五

卷の第五……〔一〇四——一一九〕……一一六

如來成所作事品第八……一一六
第一章　問答して正說す……一一六
等一節　法身の相を明す……一一六
第一項　正しく法身の相を明す……一一六
第一目　菩薩の請問……一一六
第二目　世尊の正說……一一六
第二項　二乘に對して勝れたることを顯はす……一一六
第一目　二乘の轉依を解脫身と名くること明す……一一六
第二目　正しく二身に約して三乘との等差を明す……一一六
第二節　化身の相を明す……一一七
第一項　如來身生起の相を明す……一一七
第一目　菩薩の請問……一一七
第二目　世尊の正答……一一七
第二項　如來の三輪の相を明す……一一七
第一目　身輪の相を明す……一一七
第二目　語輪の相を明す……一一八
第三目　意輪の相を明す……一二四
第三節　如來の攝化の相を明す……一二五
第一項　如來の所行と如來の境界との差別を明す……一二五

第一目　菩薩の請問……一三五
第二目　世尊の正答……一三五
第二項　等正覺等の三に二相無きことを示す……一三五
第一目　菩薩の請問……一三五
第二目　正尊の正答……一三六
第三項　法身、衆生に於て因縁あることを明す……一三六
第一目　菩薩の請問……一三六
第二目　正尊の正答……一三六
第四項　法身の功徳は解脱身に異なることを明す……一三六
第一目　菩薩の請問……一三六
第二目　正尊の正答……一三六
第五項　衆生の身財をして圓滿ならしむる由を明す……一三七
第一目　菩薩の請問……一三七
第二目　正尊の正答……一三七
第六項　淨穢土の難易得を明す……一三八
第一目　世尊の正答……一三八
第二章　奉持の得益……一三八
第一節　經名の奉持……一三八
第二節　時衆の得益……一三九
佛垂般涅槃略說教誡經解題……〔一—七〕……一三三
佛垂般涅槃略說教誡經……〔一—八〕……一四一
四十二章經解題……〔一—九〕……一四九
四十二章經……〔一—一〇〕……一六九

佛藏經解題……〔一—四〕……一七九
佛藏經（三卷）……〔一—八〇〕……一八三
卷の上……〔一—二七〕……一八三
諸法實相品第一……一八三
念佛品第二……一八九
念佛品第三……一九三
念僧品第四……一九六
念戒品第五の一……二〇四
卷の中……〔二八—五三〕……二一〇
念戒品第五の二……二一〇
淨法品第六……二二三
往古品第七……二二八
卷の下……〔五四—八〇〕……二三六
淨見品第八……二三六
了戒品第九……二四六
囑累品第十……二五五
諸法無行經解題……〔一—二〕……二六三
諸法無行經（二卷）……〔一—三四〕……二六五

持世經解題……〔一――四〕……三〇二
持世經（四卷）……〔一――八五〕……三〇三
卷の第一……〔一――一四〕……三〇三
初品第一……三〇三
五陰品第二の一……三一七
卷の第二……〔一五――四四〕……三二七
五陰品第二の二……三二七
十八性品第三……三三八
卷の第三……〔四五――六五〕……三四七
十二入品第四……三四七
十二因緣品第五……三五一
四念處品第六……三五七
五根品第七……三六三
卷の第四……〔六六――八五〕……三六八
八聖道分品第八……三六八
世間出世間品第九……三七三
有爲無爲法品第十……三七四
本事品第十一……三七七
囑累品第十二……三八五

◇　◇

索引……卷末

解深密經解題

一、緒言

印度の大乘佛教について論ずるもの、何れも義淨の『南海寄歸傳』の記述に依つて云々するが普通である。その記述とは同書卷一にいふ。

所レ云大乘無レ過ニ二種一、一則中觀、二乃瑜伽、

とあるものそれである。即ちこれによれば、印度の佛教は、小乘においてこそ、かの上座・大衆本末を併せて二十部の分派があつたとはいへ、大乘にあつては、中觀系統と瑜伽系統との兩派を分てるに過ぎなかつたのである。いはゆる中觀系統とは、龍樹(Nāgārjuna)の『中觀論』を基點とせる思想であり、瑜伽系統とは、彌勒(Maitreya)の『瑜伽論』を基點とせる思想である。而して義淨の渡天は、唐の高宗の時代、即ち紀元第七世紀の後半で印度にあつては、佛教漸く衰微に赴かむとする直前に當つてゐたから、彼が見聞せる叙上の記事は、まさしく彼土の大乘の始終を表明せるものと見ることが出來る。寔に印度大乘は、これを通觀するに大體においてこの中觀・瑜伽の兩系を以て始終したと見ることにおいて、到底否み得ないであらう。

中に就いて、中觀系統は、今姑く別としてこれを措き、瑜伽系統は、如上彌勒の『瑜伽論』を基點に、無著(Asaṅga)・世親(Vasubandhu)によつて大成され、護法(Dharmapāla)・戒賢(Śīlabhadra)に至つてその研鑽精緻の極に達せる賴耶緣起、萬有唯識の法門で、それが支那に傳はつて、法相宗の名のもと、まさしく宗派的に結構され、爾來教界に及ぼせる影響甚大なるものとなつたのである。但し、かく重要なる法門の基點が『瑜伽論』にあつたとはいへ、もし更にこれを佛說としての經典に求めむか、まさしく『解深密經』を以てその根據としなければならぬのである。乃ちこの法門の大成されし唯識教學の組織には、古來六經にその思想を仰ぐといはれ、『華嚴』・『深密』・『如來出現功德莊嚴』・『楞伽』・『厚嚴』を以てその依憑とさるれど、『深密』以外の諸經は、何れも僅々一分の所依とするに止まり、一經全部を通じてその本據とすべきは、獨り『深密』あるのみといはれてゐる。これを以て見るも、『解深密經』がこの教學の構成に如何に重要なる地位を占めをるかを知るに難くはない。寔に萬有唯識、賴耶緣起の法門は、たゞ〳〵本經を母胎として開展し成立せるものといふべきで、この意味

より〳〵して本經こそは、印度における大乘教理史上一方の代表的經典としての高價を有せるものと、いはねばならぬのである。

二、成立年代

本經は、もとより佛說の形式を採れど、その成立せる、若くは出現せる年代は、佛滅よりして遙かに後代のことに屬する。それについては、大體の目標を立て得られぬではないが、もとより的確なる年代を指示することは出來ぬ。總じて經典――特に大乘經典の成立問題を定むることは、甚だ困難なる事柄に屬してゐるが、いはゆる本文批評を試むるに方つて、是非とも取扱はれねばならぬところのもので、經典研究における極めて重要なる態度である。されば、本經についても、またもとよりそれを閑却することが出來ないのである。

ところで、本經についてまづ注意せねばならぬ點は、それがかの龍樹の造とさるゝ『十八空論』の中に、『解節經』として引用されてゐることである。卽ち本經中の七種眞如の文が引用されてゐるのである。但し『解節經』は後に敍述する如く抄譯であつて全譯でなく、而してこの七種眞如を明せる處は、玄奘譯の分別瑜伽品中にあつて、『解節經』には無き部分である。そはともかく、本經の一分がかく『十八空論』中に引用されたることは、一往注意して置かねばならぬ。

然るに、この『十八空論』の撰者については、異議なきにあらず。まづ龍樹造といふは、麗藏所收のこの論に記せる撰號でこそあれ、他の『宋』・『元』・『明』の諸藏に收むるものにあつては、撰號を置いてゐない。且その一部の內容を檢するも、龍樹の他の著書においては、到底見ることの出來ないやうな思想が湛へられ、――例へば、佛陀において三身說を立つるが如き、また『起信論』における自性淸淨心を立つるが如き、或は種子熏習や七種眞如を立つるが如き、且又引用論中に『唯識論』とか『三無性論』とか明かに龍樹より後出の諸論を擧ぐるが如き有樣で、如何にするも龍樹の眞撰と見做されぬ趣きがある。尤もこの論一部の中心は、龍樹思想の特徵たる空にあり、卽ち十八空を以て一切皆空の旨を高調してゐれど、その解說の方法においては、かく龍樹の常格に類せずして、寧ろ唯識系統に類すること近く、殊にその十八空の說明においては　大に世親の『辨中邊論』に似同するところがある。恐らく、これ、無著・世親の學說に感化された何人かゞ、龍樹の空論を解說せむとして撰出したものといふべきであらう。

かく見來れば本經が、よし『十八空論』に引用されてゐればとて、仍て以てそれ

を龍樹以前の成立と見ることは決して出來ない。素より龍樹の眞撰として疑はれぬ他の論著には、本經の引用されてゐるところは、少しもないのである。然るに茲に興味多きは、本經序品を除ける他の全部が、彌勒の『瑜伽論』に連引されをることこれである。『瑜伽論』の成立は、一般に佛滅後九百年代のことゝいはれ、その說者を、當來佛たる彌勒とされてゐれど、これは寧ろ無著の述作にかゝるものでその彌勒とさるゝは、無著が彌勒を崇拜するの餘り、その主觀上の影像として彌勒を仰ぎしによるといはれてゐる。而して無著の年代は、まさしく佛滅後九百年代に相當してゐるから、もしこれによらば本經の成立は、龍樹以後無著以前、即ち大體佛滅後八百年代に擬せらるべきで瑜伽唯識の思想に關係深き『楞伽經』等と殆んど時を同じうして出現せるものではなからうかとも思はれる。但し、これについては、猶重ねて論究せねばならぬ點があるから、以下第四項の下において叙述することゝしよう。

三、譯本の種類

本經は、支那において前後四回の翻譯が行はれ、何れも現に存してゐる。即ち次のやうである。

一、{ 相續解脫地波羅蜜了義經 一卷 / 相續解脫如來所作隨順處了義經 一卷 }……劉宋 求那跋陀羅譯

二、深密解脫經 五卷……元魏 菩提流支譯

三、佛說解節經 一卷 陳 眞諦譯

四、解深密經 五卷 唐 玄奘譯

右の中、求那跋陀羅譯には、二の經名を出すも、この次下の異譯對照表にても知らるゝ如く、異れる部分の翻譯に對して、それ〳〵別の經名を附したのに過ぎないのであるから、古來この二者を通じて『相續解脫經』と名け、これを一經として取扱ふのである。

これら四譯の中、全譯は流支譯と玄奘譯との二種であつて、他の二種は何れも抄譯である。而して、一般に最も多く用ゐらるゝのは、玄奘譯である。これ譯者玄奘が、支那における法相宗の始祖たるに由るのみならず、その譯文が、餘他のそれよりも優れて巧妙なる全譯たるがためである。既に圓測の如きも、本經の『疏』卷一に、

然解深密諸所說處、文義明淨

と讚嘆せるくらゐである。本國譯が、この譯本を採れる所以も、偏へにこれがためである。

四、一部の特徵

本經を一見して、誰しも氣付く著しき特徵は、その表現が、他經の如く、世尊

穢土中の説法となさずして、實に他受用身たる盧舍那佛が、十八圓滿の華藏世界において、彌勒・文殊等の極位の大士を對告に演暢されたものとせる點である。換言すれば、應身應土の説法にはあらずして、報身報土の説法とせることである。隨つてその結末においても、他經の如く大衆「作禮而去」等の語を置かず、以て他受用身常恒説法の妙趣を示してゐるのである。――尤も、眞諦譯にあつては、その説處を王舍城（Rājagṛiha）耆闍崛山（Gṛidhrakūṭa）中の説法とし、更に同撰の『解節經疏』（これは夙に散逸して傳はつてゐないが、圓測の『深密疏』中に屢〻引用せるところによつて知ることが出來る。今のは、その卷一に引かれてゐる。）によれば毘舍離國（Vaiśālī）鬼王法堂とし、何れにせよ、世尊穢土中の説法として共に述べてゐるが、本經の面目よりすれば、やはり報身報土中の説法とせねばならぬのである。これ本經の、他經に超過して最も優秀なるものとして、法相教徒の古來大に誇負せるところである。例へば、良遍の『大乘傳通要錄』卷上に、この報身報土の説法てふことよりして、本經の殊に優秀なる所以を高調せるもの、即ち見るべきである。かくの如き次第であるから、本經の説時の如きについても、或は佛入涅槃前七年といひ（圓測の『深密疏』卷五に擧ぐる『解節經疏』の説）、或は同五年といふ（安然の『教時問答』卷二に擧ぐる菩提流支の説）、等の異説あれど、それらは何れも、世尊穢土中の説法としての沙汰でこそあれ、今報身報土の説法を奉ずる本宗の立場としては、これを論じないのを以て正統としてゐる。

次に本經について、今一の著しき特徵は、その始終に亘つて、他經におけるが如き「經」の性質たる事實の平叙をなさずして、專ら「論」の性質たる問答論攷――いはゆる阿毘達磨的描寫が試みられてゐる點である。これ本經の面目が、諸法の性相を決擇するにあるから、その叙述が、勢ひかゝる問答論攷の形式に出でざるを得ないわけである。この意味において本經は、經と見るよりも寧ろ論と見るの妥當なるを覺ゆる。尤も他經の中にも、幾分かゝる論的性質を帶びたるものがないではないが、そは經中、會〻さうした部分が交つてゐるに過ぎないので、一經全部に亘つて、かゝる性質を帶びたる經典は、他に多くこれを見られない。なほ本經は、先に一言せる如く、その序品を除いて、他の全部が、悉く『瑜伽論』卷七十五より卷七十八に亘り、攝決擇分中菩薩地の中に連引され、以て該處の説明に充てられてゐるのであつて、これを以て見ても本經が、論的性質の濃厚なるものたるを認めらるゝのである。蓋し惟ふに、『瑜伽』の教系は、かく本經がその中に引

用されをる點よりして、明かに本經より流出せるものといはねばならぬが、事實は、本經が『瑜伽』中に引用されをると見るよりも、元來『瑜伽』中の一部だつたものが、本敎系の淵源としての價値を附與せむがために、『瑜伽』より別出されて、それに序品が加へられ、以て經としての體裁を調へたものと見るべきではなからうか。既に『瑜伽』より抄出せる別行のものに、『菩薩地持經』・『菩薩善戒經』等と經名を附せるものが他にあり、特に『善戒經』の如きは、序分・流通分を附して、宛然佛說たるを裝へるものである。乃ちこれに准ずるに、本經もまた、それと同一事情に位せるものではないかと思はれる。既に述べし如く、本經の說主を報身となし、說處を報土となし、對告を極位の大士となす等、その化儀を常途と異にして、特に優秀なるかの如き表現に出てゐるのも、やはり努めて本經の價値を高調せむとせる手段たる以上、愈ゝこの瑜伽別出の推測を高めしむるものといはねばならぬ。要するに本經は、その成立を『瑜伽』と關聯して考察せらるべきであつて、古來かの「在世の『深密』、滅後の『瑜伽』」てふ樣のもと、本經と『瑜伽』とは、たとひ佛在世中の說なると滅度後の作なるとの相違あるも、兩者その內容にをいて決して左右あるにあらず、たゞ具略繁簡の相違あるのみとされてゐるのも、寔に尤もの次第といはねばならぬ。よつて、たとひ如上『瑜伽』別出の推測を誤りなりとするも、『瑜伽』より餘り遠からざる以前の成立たることは、到底否むことが出來ないのである。

五、題號の意義

さて、圓測の本經『疏』卷一によれば、もと本經には廣・略の二本があり、その廣本は十萬頌あつて、これは印度に止まり、東方に流傳せず、その支那に傳譯されたのは、略本千五百頌であるといふ。これ、かの『華嚴經』に三本の種類あつて、その中、上・中の二本は龍宮に止まり、たゞ下本のみ龍樹が閻浮に傳つたが、それすら十萬頌ある大部のものであつたから、それを略抄せるものが支那譯であるといふのと、同致の傳說である。蓋し、大乘經典の尊嚴を修飾すべく、かゝる尨大なる數量を沙汰せるものであらう。然るに、その支那に傳譯された本經の梵本の如何なるものなるかは、未だそれが何處にも發見されないから、知る由もないのである。これ寔に遺憾の至りであるが、如上の四種の譯本が、何れも同一の原本であつたてふことは、疑を容れない。卽ち四譯比較するに、大體にをいて殆んど一致せることによつて知らるゝのである。ところが、四譯何れもその題號の相違してゐることについて、聊か異樣に思はれる

のであるが、こは必ずしも相違してゐるのではなくて、同一原文中に含蓄された る意義の一面を、それぞれ譯出せるものと見るべきである。その旨圓測の『疏』卷一に詳述されてゐる。いはく、「言二解節一者、如二眞諦記一、解卽解釋、節謂堅結、堅是堅固、結縛猶如二木節及人骨節一、並有二堅固拘結纒縛一、此經所明甚深密義、難レ可二通達一、難レ可二解釋一、故非三凡夫新行菩薩所二能解了一、故說二此義一名爲二堅結一、此經能解故名二解節一、解節之義凡有二五種一、一深密義、如二法身等一、難レ可二通達一名爲二義節一、此經能釋故名二解節一、二者無明習氣心惑、凡夫二乘所レ不レ能レ破故、說二此惑一名爲二堅結一、由レ緣二眞實一能滅二此惑一、故說二眞實一名爲二解節一、三者智慧緣二此眞實一、亦說二此智一名爲二解節一、從レ境得レ名也、四者此經文句名爲二解節一、從二所顯一得レ名、五者一切三乘敎中所有微細難可了義聚在二此經一分明解釋、故說二此經一名爲二解節一、若具分別如二眞諦記一、所レ言相續解脫深密解脫、未レ見二說處一、准レ義釋者、涅謨折那、含二有二義一、一者解釋義如二上已說一、二者解脫義、故二本經皆云二解脫一、言二制地一者、含二有三義一、一者深密義、二者堅結義、如二上已釋一、三者相續義、是故二經一名二相續解脫一、名二深密解脫一、此上二釋准二眞諦一而可二了知一、言二相續一者、謂所知障堅結相續難レ可二解脫一、今一部釋甚深義、便能解二脫煩惱相續一、故名二相續解脫經一、卽當二眞諦記中第二煩惱解節義一、言二深密解脫一者、由二智慧力一緣二深密理一解二脫煩惱一、故言二深密解脫一、卽當二第三智慧解節一也、」と。その意卽ち知るべきである。

今『解深密經』てふ題號を解釋すれば、圓測の『疏』によるに、この題號を梵名にて「制地涅謨折那素怛纜」と表はす。これ卽ち、『翻譯名義大集』にいはゆる 'Saṁdhinirmocana-sūtra' の音表たるものである。就中「素怛纜」(sūtra) の經たることはいふまでもなく、而して「制地」(saṁdhi) は深密の義、「涅謨折那」(nirmocana) は解の義なれば、梵名のまゝにては、體(主格)用(賓辭)次第にて、『深密解經』と譯すべきであるが、漢文の法則に隨ひ、用體次第して『解深密經』とせるものである。而して、その解とは解釋、深密とは經中所說の義理を指し、本經は實に佛陀內證の極理たる甚深秘密の妙義を解釋せる經典との謂であるから、その內容の優秀を既に題號の上に顯はせるわけである。

六、譯出年時

玄奘が、本經を譯出せる年代については、圓測の『疏』を初め、諸文多くは貞觀二十一年(A.D. 647)と記してゐる。蓋し彼は、『開元釋敎錄』卷八の記載によるに、貞觀二十年より同二十二年に亘つて『瑜伽論』を譯出してゐるから、その中に殆んど全部引用されたる本經は、當然かの

論の譯出につれて、成れるものといふべく、よつてこれをその中途たる貞觀二十一年に擬して然るべきであらう。

七、異譯對照

さて、本經の四譯中、流支譯と玄奘譯とが全部であつて、他は抄譯であるてふこと、既に上述の如くであるが、然らばその四譯の出沒異同はどうであるかといふに、これを明瞭にするがために、まづ次に四譯對照の圖表を掲げよう。

經名	相續解脫經	深密解脫經	佛說解節經	解深密經
品名	○	序品第一	（通序之文）	序品第一
	○	聖者善問菩薩問品第二	不可言無二品第一	勝義諦相品第二
	○	聖者曇無竭菩薩問品第三	過覺觀境品第二	
	○	聖者善清淨慧菩薩問品第四	過一異品第三	
	○	慧命須菩提問品第五	一味品第四	
	○	聖者廣慧菩薩問品第六	○	心意識相品第三
	○	聖者功德林菩薩問品第七	○	一切法相品第四
	○	聖者成就第一義菩薩問品第八	○	無自性相品第五
	○	聖者彌勒菩薩問品第九之一 聖者彌勒菩薩問品第九之二	○	分別瑜伽品第六
	相續解脫地波羅蜜了義經	聖者觀世自在菩薩問品第十之一 聖者觀世自在菩薩問品第十之二	（依敎奉持之文）	地波羅蜜多品第七
	相續解脫如來所作隨順處了義經	聖者文殊師利法王子菩薩問品第十一	○	如來成所作事品第八

これによつて知らるゝ如く、眞諦譯は玄奘譯の勝義諦相品第二を四品に開けるものだけであつて、前後の諸品を缺いてゐる。但し序品第一に擬すべき通序の文と、地波羅蜜多品第七の終末に相當すべき依敎奉持の文とが加はつてゐる。また流支譯は、玄奘譯の勝義諦相品を四品に開けること、眞諦譯に同じく、而して具に前後の諸品も揃うて、總じて十一品を數へてゐる。また求那跋陀羅譯は、玄奘譯の最後の二品に相當するものだけであつて、前の諸品を缺いてゐる。そこで今玄奘譯八品の內容を述ぶれば次のやうである。

八、各品の概要

序品第一 こはいはゆる序分であつて、能說の敎主、受用の國土、所對の大衆等、何れも他經に超勝せることを示す。即ち如上他受用身たる盧舍那佛が、十八圓滿の華藏世界にをいて、彌勒・文殊等の極位の大士を對告として說法を始められようとする樣を叙してゐるのである。茲

し、説聽兩者相應稱可して、乃ち大法の演暢を見るわけであるから、今やまさしく甚深祕密の極理の開顯さるゝことの必然たる序景を示せるものである。かく敎主・説處等の餘經と著しく異れる點は、まさしく本經の特徴とすべきところで、仍つて以てその優秀さが誇負されてゐる次第である。曩きに一言せるところのやうである。

勝義諦相品第二　この品以下の七品はいはゆる正宗分であつて、就中この品には四段あり。初段に、如理請問菩薩の問に對し、解甚深義密意菩薩答へて、勝義諦即ち眞如は、言説を離れ分別を絶せる妙理たることを説く。この際能説の敎主は、默して一言も發せず、たゞ解甚深義密意菩薩が專ら應答せるばかりである。而もその應答たるや、佛説の所説と全く同等價値を有せるものとされるから、かの菩薩の應答こそは、畢竟佛陀の神力加被を受けての説法なりとして、古來かゝる他經に類例なき化儀に出でたる本經の價値が叫ばれてゐるわけである。第二段に佛陀は、法涌菩薩に對して、勝義諦は一切尋思の所行に超過せることを説き、第三段に、善清淨慧菩薩に對して、勝義諦は諸行の一異の性相を超過せることを説き、第四段に善現菩薩に對して、勝義諦は遍一切一味相なることを説く。要するにこの品は、諸法の實性たる勝義諦の眞相を詳かにせるもので、これ即ち唯識の妙理なるものである。

心意識相品第三　この品は、廣慧菩薩に對して八識の體相を述べ、暴流及び鏡面の譬喩を擧げて、阿賴耶識の生滅相續の樣を明し、以て生死の根源を悟り、唯識の由來を知らしむ。これ即ち唯識の事相なるものである。有名なる「阿陀那識甚深細、一切種子如二暴流一、我於二凡愚一不二開演一、恐彼分別執爲レ我」の頌は、即ち此處に擧げられてゐる。さればこの品は、前の勝義諦相品が勝義諦實性界を叙せるに對して、世俗諦現象界を示し、眞如を實性として、その上に依存する現象の諸法は、偏に阿賴耶識中の種子より生起せるものなるを説けるものにて、いはゆる賴耶緣起説の根據を此處に求むべきわけである。

ところで、こゝに注意すべきは、如上この品は、八識の體相を述ぶとはいへ、そはたゞ理論としての沙汰であつて、實際においては、阿賴耶識と前六識との相を示すのみにて、第七末那識に就いては、何等記すところがない、これはた何故であらうかといふことである。これについては、古來、或は八識中の初後を出して中間を略したのであるといひ、或はこは略本なればこれを缺くといふが如き會釋を以てこれを通じようとしてゐるが、そはもとよりすなほに受け容れらるべき説ではない。惟ふにこれ、本經成立の當時

にをいては、未だ末那識の說が成立しをらざりしことを暗示するものではなからうか。このことは、餘他の經論によつて、末那識說の發達の過程を考究することにをいて、明かに論證さるゝところである。

一切法相品第四　この品は、德本菩薩に對して、萬有の諸法何れも遍計・依他・圓成の三性を有せることを說き、以て雜染・清淨の法相を明かにする。

無自性相品第五　この品は、勝義生菩薩に對して、諸法無自性の所以を說く。先の三性は、遍計を情有、依・圓を理有となし、何れも有的見解に立てるものであるが、いふところの有は偏有でないから、また空の義あり。そこでかの三性の有によつて、相・性・勝義の三無性なる空的見解に立つて、諸法無自性となす。既に本來無自性であるから、清淨涅槃である。よつて、これ一乘とも名け得るわけである。さりながら、いふところの一乘とは、畢竟理性の所談でこそあれ、もし衆生の根機三乘の不同なるに就かば、五姓の差別あるを免れない。されば、有空の一方に偏せざる中道を以て諸法に對する正見とさるゝのである。かくの如くであるからこの品にあつては、佛陀一代の說法中、三時了不の相違あることも、機根の不同により、有空の立脚上止むを得ざるところであり、これ決して矛盾するところではないとて、設敎の密意が明かに開顯されてゐるのである。これ、かの有名なる三時敎判の誠證として、敎徒の尊重措かざる文據である。要するにこの品は、有空二邊を和し、一乘五姓を會し、三時了不を判ずる等、前品の三性說と相俟つて、實にこれ唯識の妙辯なるものである。

分別瑜伽品第六　この品は、慈氏菩薩に對して止觀の妙行を說く。卽ち、上來明す實性・現象の何れも、たゞこれ識性・識相にして、心外に別法なきことを觀じて、唯識所變の道理を悟らしむるのである。これ卽ち唯識の觀法なるものである。唯識所變の誠證として有名なる「識所變唯識所現」の文は、實にこの品に擧げられてゐるのである。

地波羅蜜多品第七　この品は、觀自在菩薩に對して、菩薩十地の修行を明し、その行法を分つて十波羅蜜とする。これ卽ち唯識の行位なるものである。

如來成所作事品第八　この品は、文殊師利菩薩に對して、三身滿德の大果を說き、說法利生の妙用を明す。これ卽ち唯識の佛果なるものである。

これを要するに、正宗分七品は、前四品を理論、後三品を實踐に區分すべく、而して理論の中、勝義諦相品は萬有の實性を明し、心意識相品乃至無自性相品は萬有の現象を明す。實踐の中、分別瑜伽品はその方法たり、地波羅蜜多品はその行位たり、而して、この二を源因として

到達すべき結果を示せるものが、如來成所作事品たるわけである。寔にその組織の整然、理路の明晰なること、多くの經典中その比を見ざるところである。特にその實際方面の中心たる止觀の說明詳細を極め、よつて以て、著しくその宗教的價値を認めらるゝわけである。今上來の所述を總括して圖示せば、次の如し。

經	卷	品	内容				
解深密經	卷一	一、序品					序分
		二、勝義諦相品	唯識之妙理	實性	理論		正宗分
		三、心意識相品	唯識之事相	現象			
	卷二	四、一切法相品	唯識之妙解				
		五、無自性相品					
	卷三	六、分別瑜伽品	唯識之觀法	方法	原因	實踐	
	卷四	七、地波羅蜜多品	唯識之行位	行位			
	卷五	八、如來成所作事品	唯識之佛果	結果			

以上の所述によれば、本經は、たゞ序・正二分のみにして流通の相見えず、よつて大に經論解釋の常規に違するやうに思はれる。そこで、古來これについて種々の解釋を立て、或は流通あるの義を叙し、或はそのなきの義を述べてゐる。惟ふに、無自性相品以下の四品には、何れも依敎奉持の文あつて、それら各品の結辭たるが如き趣きを呈せるも、未だ經末に、一部に通ぜる流通の文とては、これを認むることが出來ない。元來經論の三分解釋は、古來の通規とされてゐれど、必ずしも三分の具足を要とさるゝわけでなく、時に序分なきあり、また流通のなきもあり、但し正宗のみは缺いてならぬこと、當然の次第である。而して今本經にあつては、本宗の正統よりすれば、流通を立てない說を採つてゐる。『傳通要錄』卷上に、

凡一部五卷正宗七品、併說二一宗建立玄奧一

といへる如き、まさしくこの趣旨を示せるものである。蓋し惟ふに、本經の表現をば、他受用身の華藏世界における常恒說法となさむとせる以上、流通を立てざるを以て、そのまさしき面目とせねばならぬであらう。

九、本經の註疏

興福寺永超の撰せる『東域傳燈目錄』卷上の揭ぐるところによるに、本經の註疏として左の五種を出してゐる。

(一)解深密經疏　十　卷　玄範撰
(二)解深密經疏　十　卷　圓測撰
(三)解深密經疏　十一卷　令因撰
(四)解深密經疏　□　卷　璟興撰

(五)解深密疏　三　卷　元曉撰

但しこれらの中、現に存在してゐるのは、漸く圓測の『疏』のみである。而もそれとて、十卷中前九卷に止まり、第十卷は缺いて無いのである。圓測は、慈恩系統の唯識正派と稱するものよりして異轍と見做され、その所作は、多く排せられて顧みられぬのであるが、而もこの『疏』の如きは、本經註疏中の最高價値を有せるものとして、一般に依用されてゐるのである。その現形九卷は、『大日本續藏經』第一輯第三十四套・第三十五套に亘つて收攝されてゐる。なほこの『疏』によるに、

(六)解節經義疏　四　卷　眞諦撰

てふもののあつたことを傳へ、圓測自らも『疏』中に屢ゝ眞諦三藏『解節經疏』または『眞諦疏』等の名を以て引用してゐる。併し惜いかな、これまた現存してゐないのである。以上の外現存せるものを擧ぐれば、

(七)瑜伽論記　四十八卷（二十之上—二十一之上）　遁倫撰

(八)箋註解深密經　二卷　基辨撰

(九)解深密經講讚　七卷　德龍撰

等である。その中、遁倫のそれは、彼が『瑜伽論』を註釋して『記』を製するに方り、會ゝ本經が同論卷七十五より卷七十七に亘つて連引されてゐるのに對して、科節並に隨文解釋を加へて、幾分詳細に說明せるものである。『續藏經』第一輯第七十六套第三冊に收攝されてゐる。基辨のそれは、二卷中第一卷に料簡、卽ち本經に對する玄談を載せ、第二卷にをいて、本經最初の三品に冠導・傍註を施してゐる。それらは多く圓測の『疏』に依れるがやうである。而して本經第四品以下の冠導・傍註は缺いてゐる。德龍のそれは、本經の一部に通じて、各品の概要、科節並に解釋等を擧げてゐるもので、本經を究むるものに取つて、好個の伴侶たるを失はない。本書は『日本大藏經』方等部章疏第六中に收攝して刊行されてゐる。

なほ、近時本經の延書國譯として出されたるものに左の二種がある。

(一〇)國譯解深密經　五　卷　佐伯定胤譯

(一一)解深密經　五卷　東方書院版

何れも『國譯大藏經』中に收められてゐて(前者は國民文庫刊行會版、後者は東方書院版)、その體裁本文を國譯の上、それに脚註または頭註を施し、初學攻究の便にせるものである。また、『現代意譯佛敎經典叢書』中に收められたる

(一二)現代意譯解深密經　岩野眞雄譯著

は、單なる抄譯に過ぎぬものであるが、先の延書國譯と異つて純粹の意譯を試みたるところにその特徵を有してゐるのである。今、吾人の國譯またそれらの驥尾に附して、學者をして、容易に本經の全貌を窺知せしむることを得れば、寔に肇

者が望外の幸甚といふべきである。

猶、終りに臨み、本卷所收の拙稿にをいて、修文・編註の上に篤實なる助力を與へられた龍谷大學研究科生宮地廓慧・赤山得誓兩君に、厚く感謝の意を表したいと思ふ。

昭和八年三月五日

洛西迎陽書閣にて

譯者　深浦正文識

解深密經

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

卷の第一

序品第一

第[一]一章　三種成就を明す

[二]是の如く我聞く。[三]一時、[四]薄伽梵。

第二章　三種圓滿を明す

第一節　世尊[五]の住所圓滿

【第一、顯色圓滿】　最勝光曜の七寶莊嚴、大光明を放ち、普く一切無邊の世界を照す。

【第二、形色圓滿】　[六]無量の方所妙飾間列して、

【第三、分量圓滿】　周圓際無く、其の量測り難し。

【第四、方處圓滿】　三界所行の處に超過し、

【第五、因圓滿】　[七]勝出世間の[八]善根の所起なり。

【第六、果圓滿】　[九]最極自在の淨識を相と爲し、

【第七、主圓滿】　如來の所都なり。

【第八、[一〇]輔翼圓滿】　諸の大菩薩衆の雲集する所にして、

【一】　普通餘他の穢土の化儀による經典に於ては、卷頭の如是我聞等の文を信、聞・時・主・處・衆の所謂六事成就を以て說明するを其の通規とするも、本經は特に淨土の化儀によるものなれば六事の一々は穢土のそれらと到底同列に語るべきものに非ず、又世尊の功德圓滿は六事中には無き所なるにより、本經には之を用ゐざる所なりとす。

【二】　是の如く我聞く。これ第一に「總じて已聞を顯はす」なり。これ六事成就中の信聞の二成就に相當す。是の如くとは傳法の菩薩が佛說を信順して、曾て佛より聞きし所を少しの增減をも加へずして此處に述べ出すことを標するなり。

【三】　一時。第二に說教の時を示す。これ六事成就中の時成就に當れども、今の時は單なる時間の意味に非ずして、說聽の二者互に感應し會遇したる純熟の時節を意味す。

【四】　薄伽梵。第三に說教の主を示す。これ六事成就中の主成就に當る。薄伽梵(bhaga=vān)とはこれ佛の十號中の隨一にして、佛の衆德を攝する呼稱なり。

【五】　これ六事成就中の處成就に相當するも、本經の說處

【第九、眷屬圓滿】[一一] 無量の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・掲路茶・緊捺洛・牟呼洛伽・人非人等の常に翼從する所なり。
【第十、住持圓滿】[一二] 廣大の法味喜樂に持せられ、
【第十一、事業圓滿】[一三] 諸の衆生の一切義利を作し、
【第十二、攝益圓滿】 諸の煩惱の災横の纏垢を滅し、
【第十三、無畏圓滿】[一四] 衆魔を遠離し、
【第十四、住所圓滿】[一五] 諸の莊嚴に過ぎたる如來莊嚴の所依處なり。
【第十五、路圓滿】[一六] 大念慧行を以て遊路と爲し、
【第十六、乘圓滿】[一七] 大止妙觀を以て所乘と爲し、
【第十七、門圓滿】[一八] 大空・無相・無願の解脫を(以て)所入の門と爲し、
【第十八、依持圓滿】 無量の功德衆の莊嚴する所、[一九] 大寶華王衆の建立する所の大宮殿の中に住したまひき。

第二節　世尊の總別功德の圓滿

第一項　總　德

是の薄伽梵、最も淸淨なる覺あり。

第二項　別　德

【第一、一向無障の德】[二〇] 二(障)現行せず。
【第二、涅槃に趣入する德】 無相の法に趣き、
【第三、所化を觀察する德】[二一] 佛住に住し、

は特に十八圓滿を具せる他受用身の淨土なる華藏世界なりとする。
【六】 無量の方處云云。これ宮殿安布の形相を示すものなり。方處とは方角處所、間列とは間過羅列の略なり。
【七】 勝出世間。二乘の出世間に勝過せるを言ふ。
【八】 善根。三無數劫の因業に酬ひたる二智圓滿の無漏の善根なり。
【九】 最極自在の云云。繋縛を離れたるを自在と言ふ。淨識を相となすとは佛の淨土は佛果の純粹な大圓鏡智相應の淨無垢識所變の相なるを言ふ。
【一〇】 輔翼。法王たる如來に對して、法臣たる菩薩が輔翼し奉るなり。
【一一】 眷屬。これ佛法に怨敵を近づけざる外護の衆なり。之に八衆あり、八部衆と名く。但しこれ佛菩薩の神力により て化作する所なれば實體有るに非ずと言ふ。

1. 天、梵に提婆(deva)と言ふ。梵王・帝釋等の天上界の有情なり。
2. 龍(Nāga)八大龍王の事、これ水屬の王とせらる。
3. 藥叉(Yakṣa)輕捷と譯す。空中を飛行する鬼神なり。
4. 健闥婆(Gandharva)香神、

【第四、佛の相似事業を得する德】 一切佛平等性を逮得し、
【第五、障の對治を修する德】 無障の處に到り、
【第六、外道を降伏する德】[二二] 不可轉の法にして、
【第七、魔怨を降伏する德】[二三] 所行無礙なり、
【第八、教法を安立する德】[二四] 其の成立する所不可思議なり、
【第九、三世を記別する德】[二五] 三世平等の法性に遊び、
【第十、一切世界に於て受用變化の二身を示現する德】 其の身一切世界に流布し、
【第十一、一切の疑を斷ずる德】 一切法に於て智は礙滯する事無く、
【第十二、有情をして種々の行に入らしむる德】[二六] 一切(有情)の行に於て大覺を成就す、
【第十三、無倒に教誨する德】 諸法の智に於て疑惑有ること無く、
【第十四、自身の無染なる德】 凡そ所現の身分別すべからず、
【第十五、無量の智を與ふる德】[二七] 一切菩薩の正所求の智なり、
【第十六、自性身分の德】 佛の[二八]無二住の勝彼岸を得、
【第十七、受用身分の德】 相間雜せざる如來解脫妙智究竟し、
【第十八、眞如を證得する德】[二九] 中邊無き佛地の平等を證し、
【第十九、果相を證得する德】 法界を極め、
【第二十、自利無盡の德】 虛空性を盡し、
【第二十一、利他無盡の德】 未來際を極む。

第三節　所被の眷屬の圓滿

嗅香、尋香、香陰等と譯す。香臭を嗅ぎてその身を長養する者との意なり。天に奉侍して俗樂を司る神なり。

5. 阿素洛(Asura)非天と譯す。その果報天に類すれども、天の實德無きが故にこの名あり。

6. 揭路茶(Garuḍa) 金翅鳥と譯す。鳥神なり。龍を取りて食となし、兩翅相去ること三百三十六萬里、閻浮提を一足にて支ふと言ふ。因みに揭路茶の茶は大正本等には荼に作るも、三本並に宮本によりてかく改めたり。

7. 緊那洛(Kiṃnara) 歌神と譯す。健闥婆と同じく天に奉侍する樂神なるも彼の俗樂を司るに對して之は法樂を司る。

8. 牟呼洛伽(Mahoraga) 大腹行と譯す。これ地龍なり、或はこれ蟒神なり。無足腹行するが故にこの名あり。人非人とは八部衆、元來人に非るも、佛前に詣りて說法を聽く時には人形を變作するにより、之等を該攝して人非人と言ふ。

【二一】 住持。身の食によりて住持せらるゝ如く、諸佛菩薩は大乘甚深の法味を受けて喜樂することによりて住持せらるゝを言ふ。

第一項　大聲聞衆[一〇]

第一目　數を標して來會を示す

無量の大聲聞衆と俱なりき。

第二目　廣く諸德を讃す

【第一、心よく調順なる德】　一切調順にして、
【第二、佛種を紹隆する德】[一一]　皆是佛子なり、
【第三、心慧解脫の德】　心善く解脫し、慧善く解脫す、
【第四、戒善く清淨なる德】　戒善く清淨なり、
【第五、法樂を趣求する德】[一二]　法樂を趣求し、
【第六、聞持積集の德】　多聞聞持してその聞積集す、
【第七、三業皆善の德】　善く所思を思ひ、善く所說を說き、善く所作を作す、
【第八、[一三]諸慧を具足する德】　捷慧・速慧・利慧・出慧[一四]・勝決擇慧[一五]・大慧・廣慧及び無等慧の慧寶成就し、
【第九、三明を具足する德】[一六]　三明を具足し、
【第十、現法樂住の德】[一七]　第一の現法樂住を逮得し、
【第十一、勝福田の德】[一八]　大淨福田なり、
【第十二、威儀寂靜の德】　威儀寂靜にして、圓滿ならずと言ふことなし、
【第十三、忍辱柔和の德】　大忍柔和にして(三業を)成就し、(其の心)減すること無し。

第三目　善く奉行する事を明す

已に善く如來の聖教を奉行せり。

第二項　菩薩衆

【一三】　事業。佛は說法・神通等によりて有情を饒益するを以て事業とするなり。
【一四】　衆魔。天魔・蘊魔・死魔・煩惱魔の四これなり。
【一五】　諸の莊嚴に過ぎたる云云。「莊嚴の所依處」とは如來所居の淨土なり。この淨土は如上最勝光曜の七寶莊嚴を施したる所にして、これ菩薩等の諸の莊嚴の遠く及び得ざる所なりとす。
【一六】　大念慧行。念・慧・行は之々序の如く三慧に配すること を得。何者、聞力によりて所說を念持し、思力によりて理を決擇し修力によりて證果に趣入するが故なり。菩薩はこの三慧の路を履んで淨土に入る事を得るなり。
【一七】　大止妙觀云云。止とは奢摩他(Śamatha)の譯名にて禪定の異名。觀とは毘鉢舍那(Vipaśyanā)の譯名にして慧の異名。乘とは運載の義にしてこの止觀の二によりて運載せられて涅槃の彼岸に遊趣するを言ふ。
【一八】　大空無相云云。空解脫と無相解脫と無願解脫との三は、何れも無漏定を以て體となし、この定によりてよく涅槃の解脫に入る門となるが故に三解脫門と言ふ。一に空解脫とは遍計所執の人法の空な

第一目　數を標して來會を示す

復無量の菩薩摩訶薩有り。種々の佛土從り而も來つて集會す。

第二目　[三九]廣く諸德を讃す

(一)數　大

(二)德　大

【第一、精進大】[四〇]皆大乘に住し、
【第二、因大】[四一]大乘の法に遊び、
【第三、所緣大】[四二]諸の衆生に於て其の心平等なり、
【第四、時大】諸の[四三]分別及び不分別の種々の分別を離れ、
【第五、無染大】一切の[四四]衆魔怨敵を摧伏し、
【第六、作意大】一切の聲聞獨覺所有の作意を遠離し、
【第七、任持大】廣大の法味喜樂に持せられ、
【第八、清淨大】[四五]五怖畏を超え、
【第九、證得大】一向不退轉地に趣入す、

(三)業　大　一切衆生の一切の苦惱に逼迫せらるゝ事を息するの地にして而も現在前す。

第三目　上首を列す

其の名を解甚深義密意菩薩摩訶薩・如理請問菩薩摩訶薩・法涌菩薩摩訶薩・善清淨慧菩薩摩訶薩・廣慧菩薩摩訶薩・德本菩薩摩訶薩・勝義生菩薩摩訶薩・觀自在菩薩摩訶薩・慈氏菩薩摩訶薩・曼殊室利菩薩摩訶薩等と曰ひ、而も上首と爲す。

ることを觀じて二無我に達するもの、二に無相解脱とは圓成實相の眞如の無相なることを觀じて涅槃を證得するもの、三に無願解脱とは依他起相の三界の厭惡すべきことを觀じて之を願求せざること。

【二九】大寶華王衆。大とは勝の義、寶華王とは寶華中の王たる紅蓮華を意味し、衆とはその蓮華王の華葉の數多なるを意味し、以て佛陀法王所起の諸種の勝妙なる功德を喩顯す。

【三〇】二とは煩惱・所知の二障なり。

【三一】佛住に住し。佛は大悲住(卽ち佛住)に住して、晝夜常に世間を觀察し給ふなり。

【三二】不可轉の法。外道の爲に動轉せられず、却つて彼を降伏する法を有するの義。

【三三】所行。一切所對の境界を意味し、これ心を擾亂するが故に魔怨を譬ふ。

【三四】其の安立する所云云。卽ち微妙不可思議なる十二分教を施設する事。

【三五】三世平等法性に遊び。過現未三世の法を知るに無礙明了なる事、猶し現在の法を知るが如き事。

【三六】一切の行に於て云云。一切有情の根性の勝劣に隨つて適誼に救濟する事。

【二七】　一切菩薩の正所求の智。菩薩の所求を擧げて佛の能授を影顯す。

【二八】　無二住。法性の事。差別相無きを無二と言ひ、佛常に之に安住し給ふが故に住と言ふ。

【二九】　中邊無き。眞如は一切の二邊に非るはもとより、又二邊に對する中邊にも非ることを言ふ。

【三〇】　本經は如來他受用身の說法なる故、その對象は地上の菩薩のみなるべき筈なるも、今は特に佛の神力によりて聲聞にも之を聞かしむるものにして、これ本經が普爲一切乘の經典なる事を知らしむるなり。

【三一】　皆是佛子なり。佛子とは佛陀金口の說法を母として生じたるものの意にて、之あるによりて佛種を紹隆して絕えざらしむるなり。

【三二】　法樂。佛・菩薩の正法の大樂なり。

【三三】　諸慧。之に八慧あり。慧の勝れたる事を八方面より說明せるものなり。

【三四】　出慧、生死を出離する妙慧なり。

【三五】　勝決擇慧。よく涅槃の了因となる慧なり。

【三六】　三明。宿命明・天眼明・漏盡明之にして順次に過去・未來、現在の三際の愚を除きて無碍自在の智力を得るものなり。之を明と名くるはよく無明の闇を破するの義にして、慧の異名なり。

【三七】　第一現法樂住。現法樂住とはこれ禪定の七名中の隨一なり。禪定は現前に法樂を得て、安住して動かざらしむるものなるが故にこの名あり。この禪定は但色界にのみありて餘界には無し。因みに第一の二字は三本並に宮本等には一切に作れり。

【三八】　大淨福田。永く煩惱を離れたる事を以て良田のよく大果を得るに喩ふ。

【三九】　之を釋するに數・德・業の三大を以てす。その中數大は第一目に數を標する中の「無量」の言之に相當するが故に今之を重說せず、たゞ德・業の二大を出すと言ふ。

【四〇】　皆大乘に住し。精進は衆德の本にして、之によりて大乘に安住するものとす。

【四一】　大乘の法に遊び。諸の功德法を修して菩提を證するは大乘法を因とするが故なり。

【四二】　諸の衆生に於て云云。一切衆生を以て大慈悲の所緣の境となすなり。

【四三】　諸の分別及び不分別の云云。分別とは梵語劫波(Kalpa)の譯字にして、時間或は時節を意味す。菩薩は因行を修するに當りて時の長短(卽ち分別・不分別)を忘れ、三僧祇劫も猶し一念の如くなるを言ふ。

【四四】　衆魔怨敵。五欲の妙境を以て魔怨に譬ふるなり。

【四五】　五怖畏。不活畏・惡名畏・死畏・惡趣畏・法衆畏の之を五怖畏と名く。三業淸淨なるによりて之無し。

【四六】　之に十大菩薩あり。何れも正宗七品の對告衆なり。下に至りて知るべし。

第一段　離言無二の相を明す[一]

第一章　略して一切法無二の體を明す

第一節　請　問

爾の時如理請問菩薩摩訶薩、卽ち佛前に於て、解甚深義密意菩薩に問うて言はく、「[二]最勝子、一切法無二と言ふ、一切法無二とは何等か一切法なる、云何んが無二と爲すや」と。

第二節　略※　答

解甚深義密意菩薩、如理請問菩薩に告げて曰く、「善男子、(一)一切法とは略して二種有り、一には有爲、二には無爲なり、(三)是の中有爲は有爲に非ず無爲に非ず、無爲も亦無爲に非ず有爲に非ず」と。

第二章　廣く一切法無二の體を明す

第一節　徵　問

如理請問菩薩、復解甚深義密意菩薩に問うて言はく、「最勝子、如何んが有爲は有爲に非ず無爲に非ざるや、無爲も亦無爲に非ず有爲に非ざるや」と

第二節　廣　釋

解甚深義密意菩薩、如理請問菩薩に謂つて曰く、

【一】この一段は異生愚夫が離言無二の勝義諦に對して、差別の二相を執ずる事を遮す。

【二】最勝子。最勝なる佛を母として生れし子の意味。佛子と言ふに同じ。

※第二節　略答
「(一)一切法の義を答ふ
「(二)無二の義を答ふ

【三】有爲と無爲。有爲とは因緣の爲作を有するの義にして、一切の現象界の如幻生滅の事法を意味し、無爲とは之に反して、因緣の爲作を持たずして自然に常住なる本體界の理法を意味す。今この有爲と無爲を以て事理の一切法を該攝するなり。

第一項　有爲の假施設を釋す

第一目　三相を遮す

(一)有爲の執を遮す　「善男子、有爲と言ふは、乃ち是れ[四]本師[五]假施設の句なり。若し是れ本師假施設の句ならば、即ち是れ[六]遍計所執の言辭の所説なり。若し是れ遍計所執の言辭の所説ならば、即ち是れ究竟して種種の遍計の言辭の所説は、成實ならざるが故に、是れ有爲に非ず。

(二)無爲の執を遮す　[七]善男子、無爲と言ふは亦言辭に墮す。

(三)非有爲非無爲の執を遮す　[八]設ひ有爲無爲を離るとも、少かも所説有らば其の相亦爾り。

＊第二目　有爲を設く所由を示す

(一)然れども[九]事無くして而も所説有るに非ず。(二)何等をか事と爲す、(三)謂く諸の聖者は聖智聖見を以て名言を離るるが故に、現に等正覺し、即ち是の如き離言の法性に於て、[一〇]他をして現に等覺せしめんと欲するが爲の故に、名想を假立して之を有爲と謂ふ。

第二項　無爲の假施設を遮す

第一目　三相を遮す

(一)無爲の執を遮す　善男子、無爲と言ふは亦是れ本師假施設の句なり。若し是れ本師假施設の句なれば、即ち是れ遍計所執の言辭の所説なり。若し是れ遍計所執の言辭の所説なれば、即ち是れ究竟して種種の遍計の言辭の所説は、成實ならざるが故に、是れ無爲に非ず。

(二)有爲の執を遮す　善男子、有爲と言ふは亦言辭に墮す。

(三)非無爲非有爲の執を遮す　設ひ無爲有爲を離るとも少かも所説有らば其の相亦爾り。

第二目　無爲を説く所由を示す

(一)然れども事無くして而も所説有るに非ず。(二)何等をか事と爲す。(三)謂く諸の聖者は聖智聖見を

【四】本師とは、世尊釋迦佛。

【五】假施設とは、法の自相は決して言葉にて説き得べきものには非ざるも、强ひて假りに言葉を以て詮はすを言ふ。

【六】遍計所執。愚夫が妄分別によりて、假施設の言葉の上に起す所の實有の妄相を言ふ。（一切法相品參照）。因みに遍計所執の執の字は三本並に宮本等何れも集に作る。以下の諸處皆同じ。

【七】善男子、無爲と言ふは云云。愚夫は有爲の有爲に非るを聞きて、之に對して更に無爲の執を起すを遮す。

【八】設ひ有爲無爲を離るゝも云云。既に二句の遮を聞きて、更に雙非を執ずるを遮す。

※第二目　有爲を設く所由を示す。
- (一)總答
- (二)反結
- (三)正説

(次の第二項の第二目の下も之に同じ)

【九】事とは體事(ものがら)。妄分別の戯論を離れたる法性の體事なり。

【一〇】他をして現に云云。離

以て名言を離るるが故に、現に等正覺し、卽ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲の故に、名想を假立して之を無爲と言ふ」と。

言の法性は言亡慮絶なるに拘らず、之を說かざれば愚夫は尙更之を知るに由なき爲、佛は大悲心よりして已むを得ず之を宣說し給ふ。之を離言起說と言ふ。

第三章　喩を擧げて重ねて示す

第一節　徴　問

爾の時如理請問菩薩摩訶薩、復解甚深義密意菩薩摩訶薩に問うて言く、「最勝子、如何んが此の事に(於て)、彼の諸の聖者は聖智聖見を以て名言を離るるが故に、現に等正覺し、卽ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲の故に、名想を假立して或は有爲と謂ひ、或は無爲と謂ふや」と。

第二節　正　說

解甚深義密意菩薩、如理請問菩薩に謂つて曰く、

第一項　喩　說

第一目　善幻師の喩

「善男子、(譬へば)[一]善幻師或は彼の弟子、四衢道に住して、瓦礫・草葉・木等を積集し、種種の幻化の事業を現作す。所謂[二]象身・馬身・車身・歩身・[三]末尼・眞珠・琉璃・螺貝・璧玉・珊瑚(及び)種種の財穀庫藏等の身なり。

第二目　智と愚との所見異なるの喩

(一)* **愚者執實の喩**　若し(一)諸の衆生、愚癡・頑鈍・惡慧の種類にして曉和する所無くんば、(二)瓦礫・草葉・木等の上の諸の幻化の事に於て、(三)見已り聞き已つて、是の如きの念ひを作さん、『此の所見の者は實に象身有り、實に馬身・車身・歩身・末尼・眞珠・琉璃・螺貝・璧玉・珊瑚及び種種の財穀庫藏等

【一】善幻師或は云云。この中六の事あり。下の如き六事を喩顯す。
善幻師(幻師)――阿賴耶識
其弟子(幻資)――前七識
四衢道(幻處)――四諦
草葉等(幻緣)――名色等の緣
現作事業(幻事)――妄分別
象身等(幻相)――內外の諸境

【二】象身等。この四を象馬車步の四兵と言ひ、印度往時の軍事上の兵種なり。

【三】末尼眞珠等。之より以下は有情の熱望する諸種の財寶並に生活の資等を列す。末尼(maṇi)とは珠、寶、如意等

の身有り』と。(四)其の所見の如く、其の所聞の如く堅固に執著して、言說を隨起し、唯此れのみ諦實にして餘は皆愚妄なりとす。(五)彼れ後時に於て應に更に觀察すべし。

(二)*智者了幻の喩　(一)若し衆生有り、愚に非ず、鈍に非ざる善慧の種類にして曉知する所有らば、(二)瓦礫・草葉・木等の上の諸の幻化の事に於て、(三)見已り聞き已つて、是の如きの念ひを作さん。(1)『此の所見の者は實の象身無く、實の馬身・車身・步身・末尼・眞珠・琉璃・螺貝・璧玉・珊瑚及び種種の財穀庫藏等の身無し。(2)然るに幻狀の眼を迷惑する事有つて、中に於て大象身の想ひ、或は大象身の差別の想ひを發起し、乃至種種の財穀庫藏等の身の想ひ、或は彼の種類差別の想ひを發起す』と。(四)(其の)所見の如く、(其の)所聞の如く堅固に執著して、言說を隨起し、唯此れのみ諦實にして餘は皆愚妄なりとせず。是の如きの義を表知せんと欲するが爲の故に、亦此の中に於て言說を隨起す。(五)彼、後時に於て觀察を須ひざるが如く、

第二項　合　說

第一目　*愚者執實の喩に合す

(一)是の如く若し衆生有り、是れ愚夫の類、是れ[一四]異生の類にして、未だ諸聖の[一五]出世間の慧を得ず、一切法の離言の法性に於て了知すること能はずんば、(二)彼、一切の有爲無爲に於て、(三)見已り聞き已つて、是の如きの念ひを作さん。『此の所得の者は決定して實に有爲無爲有り』と。(四)其の所見の如く、其の所聞の如く堅固に執著して、言說を隨起し、唯此れのみ諦實にして餘は皆癡妄なりとす。(五)彼後時に於て應に更に觀察すべし。

第二目　智者了幻の喩に合す

(一)若し衆生有り、愚夫の類の類に非ずして已に[一六]聖諦を見、已に諸聖の出世間の慧を得、一切法の離言の法性に於て如實に了知せば、(二)彼、一切の有爲無爲に於て、(三)見已り聞き已つて、是の如き

謂し、寶玉の總名なり。

*(一)愚者執實の喩
- (一)能執の人を明す
- (二)所執の境を明す
- (三)正しく執を起す事を明す
- (四)執によりて言を起す事を明す
- (五)彼に觀察を勸むる事を明す

*(二)智者了幻の喩
- (一)能悟の人を明す
- (二)所悟の境を辨ず
- (三)正しく覺悟を明す
  - (1)實境の非有を悟る
  - (2)假境の非無を悟る
- (四)執を離れて言を起す事を明す
- (五)觀察を須ゐざる事を明す

*第一目　愚者執實の喩に合す
- (一)能執の人に合す
- (二)所執の境　合す
- (三)正しく執を起す事に合す
- (四)執によりて言を起す事に合す
- (五)彼に觀察を勸むる事に合す

(次の第二目の下の小科は之に反して知るべし)

【一四】異生。凡夫の異名。凡夫は煩惱によりて業を造り、

の念ひを作さん。『此の所得の者は決定して實の有爲無爲無し、然るに分別所起の行相有つて、猶し幻事の覺慧を迷惑するが如く、中に於て(有)爲無爲の想ひ、或は(有)爲無爲の差別の想ひを發起す』と。(四)(其の)所見の如く、(其の)所聞の如く堅固に執著して、言說を隨起し、唯此れのみ諦實にして餘は皆癡妄なりとせず。是の如きの義を表知せんと欲するが爲の故に、亦此の中に於て言說を隨起す。(五)彼後時に於て觀察を須ひず。

第三項　總　結

是の如く善男子、彼の諸の聖者は此の事の中に於て、聖智聖見を以て名言を離るるが故に、現に等正覺し、卽ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲の故に、名想を假立して之を有爲と謂ひ、之を無爲と謂ふ」と。

第四章　*頌を以て重說す

爾の時解甚深義密意菩薩重ねて此の義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰く、

(一)「佛の說きたまふ離言(法性)(一切法)無二の義は、　甚深にして愚(夫)の所行に非ず。
(二)(1)愚(夫)此れに於て　癡[一七]に惑はされ、　二に樂著[一八]して言に依つて戯論す。
(2)「彼、(1)或は　不定[一九]或は邪定、　流轉する事極めて長く生死に苦しむ、
(2)復是の如き正智の論に違せば、　當に　牛羊[二〇]等の類の中に生ずべし」

と。

第二段　[二]超過尋思所行の相を明す

第一章　法涌の起說

業によりて六趣を展轉して、次第に別異の生を受くる故に異生と言ふ。

【一五】　出世間の慧。出世間とは生死の世間に對して、常住の涅槃を意味す。この無漏の涅槃を得る爲の清淨無分別智を出世間の慧と言ふ。

【一六】　聖諦。苦・集・滅・道の四聖諦なり。

※第四章　頌を以て重說す
┌(一)理の甚深なる事を歎ず
└(二)戯論の因果を頌す
　┌(1)癡によりて戯論する事を示す
　└(2)戯論の苦果を示す
　　┌(1)總じて異熟果に約す
　　└(2)別して相似果に約す

【一七】　癡。梵に慕何(moha)と言ふ。道理に闇き事にて煩惱の異名なり。

【一八】　二に樂着す。二とは有爲無爲の差別の二相。

【一九】　不定或は邪定。三定聚とて一切の衆生を三種に該攝す。第一に正定聚とは定で顚倒を破して證悟するに定まれる聚類。第二に邪定聚とは定で證悟し得ざる聚類。第三に不定聚とは二者の何れとも定まらず、緣あれば證悟し緣無くんば證悟せざる聚類。

【二〇】　牛羊等。三惡趣中の傍生(畜生)なり。

爾の時〔二二〕法涌菩薩、佛に白して言さく、

第一節　所見の事を陳ぶ*

(一)世尊、此れ從り東方、七十二〔二三〕殑伽河沙に等しき世界を過ぎて世界有り、具大名稱と名け、是の中の如來を廣大名稱と號す。我、先の日に於て、彼の佛土從り發して此に來至す。(二)我、彼の佛土に於て曾て一處を見しに、七萬七千の外道幷に其の師首有り、同じく一會に坐して、(三)諸法の勝義諦の相を思はんが爲に、彼共に〔二四〕思議し、稱量し、觀察し、遍ねく推求する時、一切法の勝義諦の相に於て、竟に得ること能はず。(四)唯〔二五〕種種の意解、別異の意解、變異の意解を除くのみにして、互に相違背し、共に諍論を興し、〔二六〕口に矛攢を出し、更に〔二七〕相攢し已り、刺し已り、惱み已り、壞り已つて各各離散せり。

第二節　己が所念を述ぶ

世尊、我、爾の時に於て、竊かに是の念ひを作せり『如來の出世は甚奇希有なり、出世に由るが故に、乃ち是の如く一切の尋思の所行に超過せる勝義諦の相に於て、亦〔二八〕通達作證の得可きこと有り』と」と。是の語を說き已るや、

第二章　世尊の應答

爾の時世尊、法涌菩薩に告げて曰はく、

第一節　印可略說*

(一)『善男子、是の如し、是の如し、汝が所說の如し。(二)我(1)一切の尋思に超過せる勝義諦の相に於て、現に等正覺し、現に等覺し已つて、他の爲に宣說し、顯現し、開解し、施設し、照了す。

【二一】この一段は一切の外道が勝義諦に對して、邪思惟を以て尋思する事を遮す。

【二二】法涌梵に dharmodgata と言ひ、曇無湯とも譯す。これ般若會上の大菩薩にして、無碍の辯才を以て般若波羅蜜を說く。

※第一節　所見の事を陳ぶ
- (一)往來する處を陳ぶ
- (二)其の聚集せる事を見る事を陳ぶ
- (三)論諍の不決を陳ぶ
- (四)不決を相を陳ぶ

【二三】殑伽河沙に等しき云云。殑伽(gaṅgā)、又は恒河とも音譯す。殑伽の沙の數程無量なる事を喩顯するなり。因みに殑伽河の河の一字に三本並に宮本には之を缺く。

【二四】思議、稱量、觀察。一尋求上の諸相なり。

【二五】種々の意解等。意業相違の諸相。

【二六】口に矛攢を出す。口業違諍の相、矛攢とは共に「ホコ」なり。

【二七】攢し刺し等。身業乖異の相。

【二八】通達作證。眞如第一義諦に體達し、又之を實證する事。

※第一節　印可略說
- (一)印可
  - (1)自證
  - (2)悟他
- (二)略說

第二節　自徵廣說

何を以ての故に、

第一項　法　說

第一目　內自の所證

我が說く勝義は、是れ諸の聖者の[二九]內自の所證なり。尋思の所行は、是れ諸の異生の展轉の所證なり。是の故に法涌、此の道理に由つて當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相に超過す。

第二目　無相の所行

復次に法涌、我が說く勝義は[三〇]無相の所行なり。尋思は但有相の境界にのみ行ず。是の故に法涌、此の道理に由つて當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相に超過す。

第三目　不可言說

復次に法涌、我が說く勝義は言說(ごんせつ)す可からず、尋思は但言說の境界にのみ行ず。是の故に法涌、此の道理に由つて當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相に超過す。

第四目　絕諸表示

復次に法涌、我が說く勝義は諸の[三一]表示を絕す。尋思は但表示の境界にのみ行ず。是の故に法涌、此の道理に由つて當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相に超過す。

第五目　息諸諍論

復次に法涌、我が說く勝義は諸の諍論を絕す。尋思は但諍論の境界にのみ行ず。是の故に法涌、此の道理に由つて當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相に超過す。

第二項[三二]　喩　說

法涌、當に知るべし。譬へば人あつて、

【二九】內自の所證。勝義諦は理智冥合して言語道斷なる爲自の內心に體驗し直觀して之を證得し得る事。

【三〇】無相の所行。平等眞如法性は一切の諸相を絕したるもの、根本無分別智は理智冥合して、之と一つになる事によりて勝義諦を證得する事。

【三一】表示。見聞覺知の境界にして、言說の因となるもの。

【三二】この中五喩あり。序の如く上の內自の所證等の五法を反顯す。又出家樂、遠離樂、寂靜樂、正覺樂、涅槃樂の五種樂に配釋するも可なり。

第一目　辛苦を習ふ者の喩

その壽量を盡すまで辛苦の味を習ふも、三三蜜石蜜の上妙の美味に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はず、

第二目　欲貪を習ふ者の喩

或は長夜に於て、三四欲貪の勝解に由つて諸欲の熾火に燒燃せらるるが故に、內(心)に一切の色・聲・香・味・觸の相を除滅せる妙三五遠離の樂に於て、尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はず、

第三目　言說に著する者の喩

或は長夜に於て言說の勝解に由つて、世間の綺言說に樂著するが故に、內(心)の三六寂靜聖默然の樂に於て、尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はず。

第四目　表示に著する者の喩

或は長夜に於て、見聞覺知の表示の勝解に由つて、世間の諸の表示に樂著するが故に、永へに一切の表示を除斷せる三七薩迦耶滅の究竟(無餘)涅槃に於て、尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はざるが如し。

第五目　諍論に著する者の喩

法涌、當に知るべし、譬へば人有り、其の長夜に於て、種種の三八我所・攝受・諍論の勝解有るに由つて、世間の諸の諍論に樂著するが故に、三九北拘盧洲の無我所・無攝受・離諍論に於て、尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はざるが如く、

第三項　合　說

是の如く法涌、諸の尋思する者は、一切の尋思の所行に超へたる勝義諦の相に於て、尋思するこ

【三三】蜜石蜜。甘蔗汁を煎じて、之を曝して凝結せしめたるもの、現今の飴なり。

【三四】欲貪の勝解。勝解とは印可決定する心所の名。貪と相應して決定して境に愛着するなり。

【三五】遠離の樂。色界初禪に於て欲界の五境上の貪を遠離して得る樂受。

【三六】寂靜聖默然の樂。色界二禪に於て初禪の尋伺の散動を離れ、澄心寂靜なる樂受。

【三七】薩迦耶滅究竟涅槃。薩迦耶(sat-kāya)移轉身と譯す。吾人の五蘊和合の身體は因緣によりて生じたる以上、定で實有なるにも非ず、定で虛僞なるにも非ず、即ち定實と定僞とを二に非るが故に、之を移轉身と言ふ。如是き五蘊身を永く滅したる無餘の涅槃を薩迦耶滅究竟涅槃と言ふ。

【三八】我所・攝受。我所とは我所有の略なり。內の我に執する故に、外の萬物をば自我の所有なりとなして、之に執着するなり。攝受とは如是く我の所有として執着するが故に之を已に繋屬せしむるなり。

【三九】北拘盧洲。梵に uttar-

と能はず、比度すること能はず、信解すること能はず」と。

第三章　頌を以て重示す

爾の時世尊、重ねてこの義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰はく、

「內證と無相の所行と、　不可言說と、表示を絕すると、
諸の諍論を息むるとの勝義諦は、　一切の尋思の相を過す」

と。

第三段[四〇] 超過諸法一異の相を明す

第一章　善慧の起說

爾の時善淸淨慧菩薩、佛に白して言さく、

第一節　*世尊の教化を讚す

(一)「世尊、[四一]甚だ奇なり、乃至世尊、善く說きたまへり。(二)世尊の言ふが如く、勝義諦の相は微細甚深にして、諸法一異の法性を超過し、通達す可きこと難し。

第二節　曾見の事を陳ぶ

第一項　總じて一會の相を陳ぶ

世尊、我、卽ち此に於て曾て一處を見しに、衆の菩薩有つて、等しく正しく[四二]勝解行地を修行し、同じく一會に坐して、皆共に勝義諦の相と諸行の相との一異の性相を思議せり。

akura と言ふ。これ大海の中心に立てる須彌山の四方に在る四大洲の中、北方に在る大洲の名、この洲に住する者定壽千歲、衣食自然にして更に我所見無く、餘の三洲に勝れたる妙果報ありと言ふ。

【四〇】この一段は一類の菩薩が勝義諦に對して、一異の見を起すことを遮す。

＊第一節　世尊の教化を讚す
┌(一)佛の善說を讚す
└(二)略して所說を陳ぶ

【四一】甚た奇なり乃至云云。乃至の言は之を數ずるに、言葉を以て盡し得ざる事を表はす。

【四二】勝解行地。法相宗にては菩薩の修行の階位を四十一位と立つ。「瑜伽論」にては之を大別して七地を立て、その七地中第二地を勝解行地となす。之は四十一位中の十住、

第二項 *別して三類の執を叙す

此の會の中に於て(一)一類の菩薩は、是の如きの言を作さく、『勝義諦の相と[四三]諸行の相と都て異有ること無し』と。(二)一類の菩薩は復是の言を作さく、『勝義諦の相と諸行の相と都て異有ること無きに非ず、然れば勝義諦の相は諸行の相に異なり』と。(三)有餘の菩薩は疑惑し、猶豫して、復是の言を作さく、『是の諸の菩薩の(中)誰の言か諦實にして、誰の言か虚妄なるや、誰か如理に行じて、誰か如理に(行)ぜざるや』と。或は是の言を唱ふらく、『勝義諦の相と諸行の相と都て異有ること無し』と。或は是の言を唱ふらく、『勝義諦の相は諸行の相に異なり』と。

第三節　己が所念を述ぶ

世尊、我、彼を見已つて、竊かに是の念ひを作せり、『此の諸の善男子は愚癡・頑鈍・不明・不善にして、如理に行ぜず、勝義諦の微細甚深にして、諸行一異の性相を超過せるに於て、解了すること能はず』と」と。是の語を説き已るや、

第二章　世尊の應答

第一節　如來の印可

爾の時世尊、善清淨慧菩薩に告げて曰はく、

「善男子、是の如し、是の如し、汝の所說の如し。彼の諸の善男子は愚癡・頑鈍・不明・不善にして、如理に行ぜざれば、勝義諦の微細甚深にして、諸行一異の性相を超過せるに於て、解了すること能はず。

第二節　如來の略答

十行、十廻向の三十位に相當し、菩薩はこの位に於て勝解を以て萬行を行じて、菩提の資糧となす相顯はなるにより、之を勝解行地と名く。因みに勝解とは所觀の境を印可決定する作用の事にて、心所中の隨一なり。

※第二項　別して三類の執を叙す
- （一）一向一の執
- （二）一向異の執
- （三）一向に猶豫するの執

【四三】諸行。行とは遷流して無常なるの義。有爲法の異名なり。

何を以ての故に、善清淨慧、諸行に於て是の如く行ずる時を、能く勝義諦の相に通達し、或は勝義諦に於て、而も作證を得ると名くべきに非ざればなり。

第三節　如來の正答

第一項　自　徴

何を以ての故に、

第二項　正　答

第一目[四四]　法　説

(一)* **凡聖の迷悟に約して一異の執を破す**　(一)善清淨慧、若し勝義諦の相と諸行の相と都て異無しといはば、應に(1)今(イ)時に於て一切の異生皆已に[四五]見諦すべく、又(ロ)諸の異生皆應に已に無上方便安隱涅槃を得べく、(ハ)或は應に已に[四六]阿耨多羅三藐三菩提を證すべし。(2)若し勝義諦の相と諸行の相と一向に異なりといはば、(イ)已見諦の者は、諸行の相に於て應に除遣せざるべく、(ロ)若し諸行の相を除遣せずんば、應に[四七]相縛に於て解脱を得ざるべく、(ハ)此の見諦の者は、諸の相縛に於て解脱せざるに由るが故に、[四八]麁重縛に於ても亦應に(解)脱せざるべく、(ニ)二縛に於て解脱せざるに由るが故に、已見諦の者は、應に無上方便安隱涅槃を得ること能はざるべく、(ホ)或は應に阿耨多羅三藐三菩提を證すべからざればなり。(二)善清淨慧、(1)(イ)今時に於て諸の異生、皆已に見諦するにも非ず、諸の異生已に能く無上方便安隱涅槃を獲得するにも非ず、亦已に阿耨多羅三藐三菩提を證するにも非ざるに由つて、(ロ)是(イ)の故に勝義諦の相と諸行の相と都て異相無しといふは道理に應ぜず。(ロ)若し此の中に於て是の如きの言を作し、勝義諦の相と諸行の相と都て異無しといはば、此の道理に由つて當に知るべし、一切(皆)如理に行ずるに非ず、正理の如くならず。(2)善(イ)清淨慧、今時に於て見諦の者は、諸行の相

【四四】この一目は勝義諦の理と諸行の事とに就て、二者の一向一を執ずる者に六過、一向異を執ずる者に八過、合せて十四過を數へ、以て一異の二邊を破して、非一非異の中道の正義を詮はすものなり。

✻(一)凡聖の迷悟に約して一異の執を破す
- (一)反釋して執を破す
  - (1)凡に約して一向一の執を破す
    - (1)第一過
    - (2)第二過
    - (3)第三過　(三過)
  - (2)聖に約して一向異の執を破す
    - (1)第一過
    - ……
    - (5)第五過　(五過)
- (二)順釋して執を破す
  - (1)三の失無き事を擧げて一向一の執を破す
    - (1)順釋
    - (2)結非
      - (イ)理を以て總じて結す
      - (ロ)計を擧げて正しく破す
  - (2)五の失無き事を擧げて一向異の執を破す
    - (1)順釋
    - (2)結非
      - (イ)理を以て總じて結す
      - (ロ)計を擧げて正しく破す

に於て除遣すること能はざるに非ずして、然も能く除遣し。見諦の者は、諸の相縛に於て解脱すること能はざるに非ずして、然も能く解脱し、見諦の者は、麁重縛に於て解脱すること能はざるに非ずして、然も能く解脱す。二障に於て能く解脱するを以ての故に、亦能く無上方便安隱涅槃を獲得し、或は能く阿耨多羅三藐三菩提を證すること有るに由つて、(2)是(イ)の故に勝義諦の相と諸行の相と一向に異相なりといふは道理に應ぜず。(ロ)若し此の中に於て是の如きの言を作し、勝義諦の相と諸行の相と一向に異なりといはば、此の道理に由つて當に知るべし、一切(皆)如理に行ずるに非ず、正理の如くならず。

(二) 染淨と共相とに約して一異の執を破す　(一)復次に善清淨慧、若し(1)勝義諦の相と諸行の相と都て異無しといはば、諸行の相の四九雜染の相に墮するが如く、此の勝義諦の相も亦應に是の如く雜染の相に墮すべし。(2)善清淨慧、若し勝義諦の相と諸行の相と一向に異なりといはば、應に一切行の相の五〇共相を、勝義諦の相と名くるに非ざるべし。(二)善清淨慧、(1)今時に於て勝義諦の相は、雜染の相に墮するに非ず、諸行の共相を勝義諦の相と名くるに由つて、(2)是(イ)の故に勝義諦の相と諸行の相と一向に異相無しといふも道理に應ぜず。勝義諦の相と諸行の相と一向に異相なりといふも道理に應ぜず。(ロ)若し此の中に於て是の如きの言を作し、勝義諦の相と諸行の相と都て異有ること無しといひ、或は勝義諦の相と諸行の相と一向に異なりといふも、此の道理に由つて當に知るべし、一切(皆)如理に行ずるに非ず、正理の如くならず。

(三)* 法體と觀行と無我性等とに約して一異の執を破す　(一)復次に善清淨慧、(1)若(イ)し勝義諦の相と諸行の相と都て異無しといはば、勝義諦の相の諸行の相に於て差別有ること無きが如く、一切行の相も亦應に是の如く差別有ること無かるべし。(2)觀行を修する者は、諸行の中に於て其の所見の如く、其の所聞の如く、其の所覺の如く、其の所知の如く應に後時に更に勝義を求むべからず。(2)若(イ)し勝

【四五】見諦。無漏智を起して第一義勝義諦を見照する事。

【四六】阿耨多羅三藐三菩提。(anuttara-samyak-sambodhi)、無上正等正覺等と譯す、眞正に徧く一切の眞理を知りたる無上の佛智なり。

【四七】相縛。相とは境相即ち客觀の相分なり。縛とは煩惱によりて纏縛さるゝ事。迷倒の有情は諸法は如幻にして實體無きを知らず、對境を緣じて實我實法の執を起す。故に主觀の自分が客觀の相分を緣ずる場合、相分は境の實相を覆障して、見分の作用を拘束して、自在を得しめず。之を相縛と言ふ。

【四八】麁重縛。麁重(dausthulya)とは麁强沈重の義にて、煩惱、所知二障の種子を意味し、佛智の微細輕徽にしてよく理事に了達するに反するものなり。

*(二)染淨と共相とに約して一異の執を破す
- (一)反釋して執を破す
  - (1)染淨に約して一向一の執を破す(一過)
  - (2)共相に約して一向異の執を破す(一過)
- (二)順釋して執を破す
  - (1)順釋
  - (2)結非

義諦の相と諸行の相と一向に異なりといはば、應に諸行の[五一]唯無我性・唯無自性に顯現さるゝもの、是れ勝義の相に非ざるべし。又(二)應に倶時に別相成立すべし。謂く雜染の相及び清淨の相なり。(三)善(1)清淨慧、今の時に於て一切行の相皆差別有り、差別無きに非ず、觀行を修する者は、諸行の中に於て其の所見の如く、其の所聞の如く、其の所覺の如く、其の所知の如く復後時に於て更に勝義を求め、又卽ち諸行の唯無我性・唯無自性に顯現さるゝものを勝義の相と名け、又倶時に染淨二相の別相成立するに非ざるに由つて、(2)是(1)の故に勝義諦の相と諸行の相と都て異有ること無しといひ、或は一向に異なりといふも道理に應ぜず。(2)若し此の中に於て是の如きの言を作し、勝義諦の相と諸行の相と都て異有ること無しといひ、或は一向に異なりといふも、此の道理に由つて當に知るべし、一切(皆)如理に行ずるに非ず、正理の如くならず。

第二目 說*喩[五二]

善清淨慧、(一)螺貝の上に鮮白色性の、彼の螺貝と一相異相を施設し易からざるが如く、(二)螺貝の上の鮮白の色性の如く、金の上の黃色も亦復是の如し。(三)[五三]箜篌の聲の上の美妙の曲性の、箜篌の聲と一相異相を施設し易からざるが如く、(四)[五四]黑沈の上に有る妙なる香性の、彼の黑沈と一相異相を施設し易からざるが如く、(五)胡椒の上の辛猛利の性の、彼の胡椒と一相異相を施設し易からざるが如く、(六)胡椒の上の辛猛利の性の如く、[五五]訶梨の淡性も亦復是の如し。(七)[五六]蠹羅綿の上に有る柔輭の性の、蠹羅綿と一相異相を施設し易からざるが如く、(八)[五七]熟酥の上に有る所の[五八]醍醐(味)の、彼の熟酥と一相異相を施設し易からざるが如く、(九)又一切行の上の無常性・一切有漏法の上の苦性・一切法の上の[五九]補特伽羅無我性の、彼の行等と一相異相を施設し易かざるが如く、(一〇)又貪の上の不寂靜の相及び雜染の相の、此れ彼の貪と一相異相を施設し易からざるが如く、貪の上に於けるが如く、瞋・癡の上に於ても當に知るべし、亦爾り、

- (1)理を以て總じて結す
- (2)計を擧げて正しく破す

【四九】雜染相。たゞ染とのみ言ふ時には三性中の惡と有覆との二者なるも、雜染と言ふ時は三性に通じて、有漏法の全體を意味し。有漏の善と無記は惡性の煩惱と雜糅するが故なり。

【五〇】共相。自相に對して共相と言ふ。或物に就て、その物のみに局りて他に共通せざる相を自相と名け、他にも貫通せる相を共相と名く。例へば五蘊に就て、五蘊各々の事體はこれ自相なり。空無我等の理性の如きはこれ共相なり。(眞如勝義諦は一切の有爲諸行の眞實性にして、一切法に貫通するが故に共相と言はる。)

＊(三)法體と觀行と無我性等とに約して一異の執を破す
- (一)反釋して執を破す
  - (1)二相に約して一向一の執を破す
    - (1)法體に約して一向一の執を破す(一過)
    - (2)觀行に……(一過)
  - (2)二相に約して一向異の執を破す
    - (1)勝義諦所顯の無我性等に約して一向異の執を破す(一過)
    - (2)無我性等の別相成立に約して一向異の執を破す(一過)
- (二)順釋して執を破す

第三目　合　說

是の如く善清淨慧、勝義諦の相は諸行の相と一相異相を施設す可からず。

第三項　總　結

善清淨慧、我、是の如き微細(中)の極めて微細なる、甚深(中)の極めて甚深なる、通達し難き(中)の極めて通達し難き諸法一異の性相に超過せる勝義諦の相に於て、現に等正覺し、現に等覺し已つて、他の爲に宣說し、顯示し、開解し、施設し、照了す」と。

第三章　*頌を以て重說す

爾の時世尊、重ねてこの義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰はく、

(一)「[六〇]行界勝義の相は、　一異の性相を離れたり。
(二)若(1)し一異を分別せば、　彼れ如理に行ずるに非ず。
(2)衆生相の爲に縛せられ、　及び彼の麁重に縛せらる、
(三)要らず勤めて止觀を修せよ、　爾せば乃ち解脫を得ん」

と。

第四段　[六一]遍一切一味の相を明す

第一章　如來の告問

爾の時世尊、[六二]長老善現に告げて曰はく、「善現、汝、有情界の中に於て、幾ばくの有情か[六三]增上慢を懷きて、增上慢の爲に執持せらるるが故に、所解を記別すと知るや。汝、有情界の中に於て、幾

---

(1)順釋
(2)結非
(1)理を以て總結す
(2)計を擧げて正しく破す

【五二】　唯無我性唯無自性の所顯現。無我性とは、我とは體常一にして主宰の用あるもの、之に二あり。人身に於て之ありと執ずるを人我と言ひ、法に於て之ありと執ずるを法我と言ふ。然るに人身は五蘊假和合のものなり。法は因緣生如幻のものなり。共に我と執ずべきものに非ず。我と執ずるは凡夫の迷見による。この有我の迷見を去りたるを無我性と言ふ。無自性とは既に無我なる以上、定まれる自性無きが故に無自性と言ふ。眞如は如是き無我性、無自性によりて顯現せられたる眞實性なるが故に、所顯現と言ふ。

※第二目　喩說
(一)螺貝、白色一異の喩
(二)金、黄色一異の喩
(三)箜篌聲、曲性一異の喩
(四)黑沈、妙香一異の喩
(五)胡椒、辛味一異の喩
(六)訶梨、淡味一異の喩
(七)綿、柔輭性一異の喩
(八)熟酥、醍醐一異の喩
(九)理、事一異の喩
(十)煩惱性、相一異の喩

ばくの有情が増上慢を離れて、所解を記別すと知るや」と。

第二章　善現の奉答

爾の時、長老善現、佛に白して言く、

第一節　略して告問に答ふ

「世尊、我、有情界の中に(於て)少分の有情は、増上慢を離れて所解を記別すと知る。世尊、我、有情界の中に(於て)無量無數不可說の有情有つて、增上慢を懷き增上慢の爲に執持せらるるが故に、所解を記別すと知る。

第二節　廣く所見を陳ぶ

第一項　自他の住所を明す

世尊、我、一時に於て、[六四]阿練若大樹林の中に住せり。時に衆多の[六五]苾芻有つて、亦此の林に於て我に依近して住せり。

第二項　他の記別を叙す

第一目　總じて異解をなすことを陳ぶ

我、彼の諸の苾芻を見るに、[六六]日の後分に於て展轉聚集し、[六七]有所得の現觀に依つて、各(各)種種相の法を說いて所解を記別せり。

第二目　[六八]別してその所解を陳ぶ

(一)六門境界に約す　(一)中に於て一類は、蘊を(了)得するに由るが故に、蘊の相を(了)得するが故に、蘊の起を(了)得するが故に、蘊の盡を(了)得するが故に、蘊の滅

【五二】この十喩序の如く六境に約して非一非異を明し。謂く第一、二喩は色、第三喩は聲、第四喩は香、第五、六喩は味、第七、八喩は觸、第九、十喩は法に約す。

【五三】箜篌。梵に毘拏(vīṇā)と言ふ。琵琶の如き樂器の名なり。

【五四】黑沈。沈とは沈香(或は沈水香)の事。香木にして水中に置けば沈むが故にこの名あり。その色の黑きより黑沈とも言ふ。

【五五】訶梨。梵語訶梨勒(harītaki)の略。果樹の名なり。

【五六】蠹羅綿(tūla)。細綿と譯し、柔かき纖毛より成れる綿の事なり。

【五七】熟酥。充分精製せし酥。乳より酪を出し、酪より生酥を製し、生酥より熟酥を作ると言ふ。

【五八】醍醐。醍醐味なり。世間第一の上味。

【五九】補特伽羅無我。補特伽羅(pudgala)とは此の數取趣と譯す。數々五趣の果を取りて輪廻するの義にして、有情の依身の事。故に補特伽羅無我とは人無我と同義なり。

※會三章　頌を以て重說す

(一)理の甚深なる事を歎ず
(二)執に失ある事を顯はす

を作證(する道)を(了)得するが故に所解を記別す。(二)此の一類蘊を(了)得するに由るが故に、復一類有り、[七〇]處を(了)得するに由るが故に、復一類有り、[七一]緣起を(了)得するが故に(といふ)も、當に知るべし、亦爾り。(三)復一類有り、[七二]食を(了)得するに由るが故に、食の相を(了)得するが故に、食の起を(了)得するが故に、食の盡を(了)得するが故に、食の滅を(了)得するが故に、食の滅(を)作證する道を(了)得するが故に所解を記別す。(四)復一類有り、[七三]諦を(了)得するに由るが故に、諦の相を(了)得するが故に、(苦)諦の遍知を(了)得するが故に、(集)諦の永斷を(了)得するが故に、(滅)諦の作證を(了)得するが故に、(道)諦の修習を(了)得するが故に所解を記別す。(五)復一類有り、[七四]界を(了)得するに由るが故に、界の相を(了)得するが故に、界の種種性を(了)得するが故に、界の非一性を(了)得するが故に、界の滅を(了)得するが故に、界の滅(を)作證(する道)を(了)得するが故に、所解を記別す。

(二)* 七科道品に約す　復一類あり、(一)[七五]念住を(了)得するに由るが故に、念住の相を(了)得するが故に、念住の能(對)治所(對)治を(了)得するが故に、念住の修(習)を(了)得するが故に、念住の未だ生ぜざるは生ぜしむることを(了)得するが故に、念住の生じ已れるは堅住し忘れずして、倍修(習)し增廣(大)なることを(了)得するが故に所解を記別す。一類有り、念住を(了)得するが故に(所解を記別す)といふが如く、(二)復一類有つて、[七六]正斷を(了)得するが故に、[七七]神足を(了)得するが故に、[七八]諸根を(了)得するが故に、諸力を(了)得するが故に、[七九]覺支を(了)得するが故に(といふ)も、當に知るべし、亦爾り。(三)復一類有り、[八〇]八支聖道を(了)得するが故に、八支聖道の相を(了)得するが故に、八支聖道の能(對)治所(對)治を(了)得するが故に、八支聖道の修(習)を(了)得するが故に、八支聖道の未だ生ぜざるは、生ぜしむることを(了)得するが故に、八支聖道の生じ已れるは、堅住し、忘れずして、倍修(習)し增廣(大)なることを(了)得するが故に所解を記別す。

---

(1)一異を執ずる失を顯はす
(2)二縛を示す
(三)修習による得果を示す

【六〇】行界勝義。界とは性別の義。性類差別せる有爲の諸行を行界と言ひ、勝義諦は之等の諸行に遍在せる實性なるを、行界勝義と言ふ。

【六一】この一段は上慢の二乘が勝義諦に對して、有所得の偏執を起す事を遮す。

【六二】長老善現。善現とは梵に須菩提(subhūti)と言ふ。佛の十六弟子中勝空第一の人。これ聲聞なるが故に菩薩と言はずして長老と言ふ。因みに長老の二字は三本、宮本並に聖本寺何れも尊者に作る。以下の諸處皆同じ。

【六三】增上慢。七慢中の一。未だ眞如第一義諦を證得せざるに拘らず、已に之を得たりとなして高擧する事。

【六四】阿練若(Araṇya)、閑寂處、離聲處等と譯す。村を離れて一倶盧舍(五里)にして、比丘の靜觀に適する場所を言ふ。

【六五】苾芻(bhikṣu)、比丘とも音譯す。出家して具足戒を受けし者の總稱にして、乞士等と譯す。乞士とは自ら住營する事なくして、人より施物を得て淸淨に活命する者の意。

第三節　己が所念を述ぶ

世尊、我、彼を見已つて、竊かに是の念ひを作さく、

第一項　上慢の執を述ぶ

『此の諸の長老は有所得の現觀に依つて、各(各)種種相の法を說いて所解を記別す。當に知るべし、彼の諸の長老は一切皆增上慢を懷き、增上慢の爲に執持せらるるが故に、勝義諦の遍一切一味の相に於て、解了すること能はず』と。

第二項　佛の所說を歎ず*

(二)是の故に世尊、甚だ奇なり　乃至世尊、善く說きたまへり。(三)世尊の言ふが如く勝義諦の相は、微細(中)の最も微細なる、甚深(中)の最も甚深なる、通達し難き(中)の最も通達し難き、遍一切一味の相なり。

第三項　餘の境に非ることを顯はす

世尊、此の聖教の中に修行する苾芻すら、勝義諦の遍一切一味の相に於て、尙通達し難し、況んや諸の外道をや」と。

第三章　世尊の正說

第一節　印可略說

爾の時世尊、長老善現に告げて曰はく、

「是の如し、是の如し、善現、我、微細(中)の最も微細なる、甚深(中)の最も甚深なる、通達し難き(中)の最も通達し難き、遍一切一味の相たる勝義諦に於て、現に正等覺し、現に等覺し已つて、

【六六】日の後分。印度の時法、一日を晝三時（晨朝・日中・日沒）夜三時（初夜・中夜・後夜）の六時とす。日の後分とは晝三時中の第三日沒時にして、我國の申の刻に當る。

【六七】有所得の現觀。現觀とは之に三現觀、四諦現觀、六現觀等の種類あれども、何れも無漏慧によりて現前分明に諦理を觀照するによりてこの名あり。有所得の現觀とは、上慢の二乘が之を緣じて起す所の有分別の相對觀を言ふ。

【六八】この中六門境界と七科道品を以て聲聞乘の一切の敎說を該攝し、之に對して二乘が有所得の偏執を懷く事を明す。所謂六門境界とは五蘊、十二處、十二緣起、四食、四諦、十八界の六にして、何れも觀行を修する者が所觀の境とするものなるが故に、境界と言ふ。七科道品とは四念住、四正斷、四神足、五根、五力、七覺支、八聖道分（合して卅七あるが故に卅七道品とも言ふ）これにして、何れも涅槃に至る爲の道法なれば道品と名く。

※(一)六門境界に約す
(一)蘊の六相を得す
(二)處と緣起を例す
(三)食の六相を得す

他の爲に宣說し、顯示し、開解し、施設し、照了す。

第二節　自徵廣釋

何を以ての故に、

第一項　法　說

第一目　淸淨所緣に約して一味の相を顯はす

(一)*立理　(一)善現、我已に一切の蘊の中に於て、[六九]淸淨の所緣は是れ勝義諦なりと顯示し、我已に一切の處・緣起・食・諦・界・念住・正斷・神足・根・力・覺支(及び)道支の中に於て、淸淨の所緣は是れ勝義諦なりと顯示したればなり。(二)此の淸淨の所緣は一切の蘊の中に於て、是れ一味の相にして、別異の相無し。蘊の中に於けるが如く、是の如く一切の處の中、乃至一切の道支の中に於けるも、(亦)是れ(平等)一味の相にして、別異の相無し。

(二)結義　是の故に善現、此の道理に由つて當に知るべし。勝義諦は是れ遍一切一味の相なり。

第二目　通達に約して一味の相を示す

(一)立理　復次に善現、觀行を修する苾芻は、一蘊の眞如勝義法無我の性に通達し已れば、更に各別の餘の蘊と諸の處・緣起・食・諦・界・念住・正斷・神足・根・力・覺支(及び)道支の眞如勝義法無我の性を尋求せざるも、唯卽ち此の(一蘊の)眞如勝義に隨つて、無二の智を依止と爲るが故に、遍一切一味の相の勝義諦に於て、審察し趣證す。

(二)結義　是の故に善現、この道理に由つて當に知るべし、勝義諦は是れ遍一切一味の相なり。

第三目　無爲に約して一味の相を釋す

(一)*立理　(一)復次に善現、(1)彼の諸の蘊の展轉して異相なるが如く、彼の諸の處・緣起・食・諦・界・念住・正斷・神足・根・力・覺支及び道支の展轉して異相なるが如く、若し一切法の眞如勝義法無我の性

(四)諦の六相を得す
(五)界の六相を得す

【六九】　蘊。梵に塞建陀(skandha)、積集の義。色、受、想、行、識の五者何れも積集して各々自體を形成するが故に蘊と言ひ、この五蘊を以て有爲法の全體を攝す、この蘊に就て經中六相を出せり。

蘊──後の五相に通ずる總句
蘊の相──五蘊の自相なり
蘊の起──┐
蘊の盡──┘蘊上の生滅差別
蘊の滅──五蘊を滅して得る所の滅諦
蘊の滅作證──滅を證する道諦

【七〇】　處(āyatana)、これ生門の義。心々所を生ずる門との意にて、所依の六根と所緣の六境を該攝して十二處と言ふ。

【七一】　緣起(pratītyasamutpāda)　十二緣起なり。衆生が三世に涉りて六道に輪廻する相狀を無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二支を以て說明するもの。

【七二】　食(āhāra)。食物の人體に於けるが如く。之によりて諸根大種を滋長するの意にて、之に段食、觸食、思食、識食の四食を數ふ。

【七三】　諦(āryasatya)。聖者の觀見する至極の眞理を諦と

も亦異相ならば、(2)是れ則ち眞如勝義法無我の性(1)も亦應に因有つて、因從り生ずる所なるべし。(3)若し因從り生ぜば、應に是れ有爲なるべし。(3)若し是れ有爲ならば、應に勝義に非ざるべし。(4)若し(是れ)勝義に非ずんば、應に更に餘の勝義諦を尋求すべし。(二)善現、(1)此れに由つて(1)眞如勝義法無我の性は、因有りと名けず、因の所生に非ず、(2)亦有爲に非ず、(3)是れ勝義諦なり。(4)此の勝義を得て更に餘の勝義諦を尋求せざれ。(2)唯常常の時恒恒の時、如來の出世にも、若しくは不出世にも、諸法の法性安立し、(二)法界安住すること有り。

(二) **結義** 是の故に善現、この道理に由つて當に知るべし、勝義諦は是れ遍一切一味の相なり。

第二項 喩説

善現、譬へば種々非一の品類、異相の色(法)の中に(於て)、(二)虚空は相も無く、分別も無く、變異も無く、遍一切一味の相なるが如く、

第三項 合説

是の如く性を異にし、相を異にする一切法の中に(於ける)、勝義諦の遍一切一味の相も、當に知るべし、亦然り」と。

第四章 *頌を以て重示す

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も頌を説いて曰はく、

(1)「此の遍一切一味の相たる勝義諦は、諸佛の説くこと異ること無し。

(2)若し中に於て異つて分別すること有らば、彼、定んで愚癡にして(増)上慢に依る」

と。

云ふ。之に苦、集、滅、道の四諦あり。前二を以て迷界の果と因を説き後二を以て悟界の果と因を説く。この諦に亦六相あり。初の二相は先の蘊に準じて知るべし。後の四相は、遍知とは遍く知らるべき生死流轉の果たる苦諦永斷とは永く斷ぜらるべき流轉の因たる集諦作證とは涅槃を悟る滅諦修習とは無漏修習する道諦にて、序の如く四諦に相當す。

【七四】 界(dhātu)。一々の性類の差別せる義。或は各々自相を任持して他に混亂せしめざる義。之に六根、六境、六識を數へて十八界を成ず。この界に亦六相あり。第三の種々相とは同界中の種々の差別を言ひ、第四の非一性とは異界と相望して互に差別せるを言ふ。第五の滅とは滅諦、第六の滅作證とは道諦を言ふ。

＊(二)七科道品に約す
- (一)念住の六相を得す
- (二)五科の六相を例す
- (三)八聖道の六相を得す

【七五】 念住 (smṛty upasthāna)。小乘の觀法中に於ける毘鉢舍那道なり。毘鉢舍那の慧よく念をして、所觀の境に住せしむるが故に念住と言ふ。之に身、受、心、法の四ありて

四念住と言ひ、序の如く身(五蘊身)、受(苦樂の感情)、心(眼等の識)、法(一切諸法)に對して不淨、苦、無常、無我と觀じて次第に常、樂、我、淨の四倒を破す。

之に就て亦六相を得す。第三の能治所治とは能治の慧と念を以て所治の四倒を破する事。第四、五、六は修習の差別にして、第四の修とは總じて修習の方便を顯はし、第五の未生令生とは未生の念住を修習によりて生ぜしむる事。第六の生し已れるは等とは、念住を修習する事によりて益々之を增上せしむる事。

【七六】　正斷(samyak prahāṇa)。精進を體となして、よく懈怠を斷ずる故に正斷と言ふ。之に律儀斷、斷々、修斷、防護斷の四ありて四正斷と言ふ。

【七七】　神足(ṛiddhi-pāda)。神とは靈妙の義、足とは所依の義、身の足に依りて立つが如し、靈妙なる功德を生ずる所依となるものゝ意にて禪定を指す。これ欲、勤、心、觀の四によりて生ぜらるゝが故に、序の如く欲、勤、心、觀の四神足と言ふ。

【七八】　諸根、諸力(indriya bala)。この二共に信、勤、念、定、慧の五を以て體とするが故に五根、五力と言ふ。根とはよく善法を生ずる增長の義あるに名け、力とは根增長して更に障を破する力用あるに名く。

【七九】　覺支(bodhyaṅga)。覺とは智慧の簡擇による覺智、支とは因支、覺智を生ずる爲の因支なれば覺支と言ふ。念、擇法、精進、喜、安、定、捨の七あれば七覺支と言ふ。

【八〇】　八支聖道(aṣṭāṅga-mārga)。聖とは正の義、よく邪非を離るゝを言ふ。道とは運載の義、衆生をよく涅槃の岸に運載するを言ふ。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八支よくこの二義を具するが故に八支聖道と云ふ。

※第二項　佛の所說を歎ず
- (一)略して善說を讃す
- (二)所讃の敎を擧ぐ

※(一)立理
- (一)淸淨所緣を示す
- (二)一味の相を示す

【八一】　淸淨所緣。遍一切一味なる眞如を所緣とする事によりて、增上慢を離れて心に淸淨を得する事。

※(一)立理
- (一)勝義を反顯す
  - (1)蘊等の展轉して異相なる事を釋す
  - (2)勝義諦の四過を反顯す
    - (1)第一過……(4)第四過
- (二)勝義を順釋す
  - (1)勝順諦の四過を離るゝ事を順釋す
    - (1)離第一過……(4)離第四過
  - (2)理を以て重ねて成ず

【八二】　法界。法性と同義にして、眞如の異名なり。界とは因の義、よく因となりて淨法を生ずるが故に。或はこれ性の義、これよく諸法の所依性となるが故に。

※第四章　頌を以て重說す
- (一)勝義諦は諸佛の同說なる事を示す
- (二)異執は增上慢による事を示す

第一章 廣慧の請問

爾の時廣慧菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、世尊の[一]心意識の祕密(の義)に於て、善巧なる菩薩と說きたまふが如き、(其の)心意識の祕密(の義)に於て、善巧なる菩薩とは、何に齊つて名けて心意識の祕密(の義)に於て、善巧なる菩薩と爲し、如來は何に齊つて施設して、彼を心意識の祕密(の義)に於て、善巧なる菩薩と爲したまふや」と。是の語を說き已るや、

第二章 如來の正答

爾の時世尊、廣慧菩薩摩訶薩に告げて曰はく、

第一節 世尊の讃許

*第一項 其の所問を讃す

(一)「善い哉善い哉廣慧、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。(二)汝(1)今無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲の故に、(2)世間及び諸の天人・阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得せしめんが爲の故に斯の問を發す。

第二項 勅聽許說

汝應に諦に聽くべし、吾當に汝が爲に心意識の祕密の義を說くべし。

第二節 問に應へて正しく答ふ

第一項 心意識の祕密の義を明す

【一】心意識の祕密。心意識とは心(citta)とは集起の義、意(manas)とは思量の義、識(vijñāna)とは了別の義。通じて之を言はゞ、諸八識の一々皆この三義を具するも、別して言はゞ、心とは諸法の種子を集めて、之を起らしむる第八識に名け、意とは第八識を緣じて、恒に審に思量する事餘識に勝れたる第七識に名け、識とは麁なる六境を了別する前六識に名く。卽ち心意識には各々通別の二義ある事を知るべし。祕密とはこの心意識の法門は微細甚深にして幽穩なるが故に、下根の有情には之を開演せざる事。

*第一項 其の所問を讃す
- (一)總じて所問の深義を讃す
- (二)別して利他の爲に發問する事を讃す
  - (1)總益
  - (2)別益

*(一)種子識の相を明す
- (一)身分の生起を明す
- (二)後々相續の相を明す
- (三)二の執受を明す
  - (1)數を擧げて名を列す
  - (2)界に約して分別す

第一目　根本識を明す

(一)* **種子識の相を明す**　廣慧、當に知るべし、(一)六趣[二]の生死に於て、彼彼の有情、彼彼の有情衆の中に墮し、或は[三]卵生に在り、或は胎生に在り、或は濕生に在り、或は化生に在つて身分生起す。(二)中に於て最初に[四]一切種子の心識成熟し、展轉和合し、增長廣大して(三)二の[五]執受に依る。(1)一には有色の[六]諸根及び(其の)所依の執受にして、二には[七]相・名・分別の[八]言說戲論の習氣の執受なり。(2)有[九]色界の中には(此の)二の執受を具するも、[一〇]無色界の中には(此の)二種(の執受)を具せず。

(二)* **衆名の差別を明す**　廣慧、(一)此の識を亦阿[一一]陀那識とも名く、何を以ての故に、此の識は身に於て隨逐し、(諸根及び其の所依幷に諸法の習氣を)執持するに由るが故なり。(二)亦[一二]阿賴耶識とも名く、何を以ての故に、此の識は身に於て攝受し、藏隱して[一三]安危の義を同ふするに由るが故なり。(三)亦名けて心とも爲す、何を以ての故に、此の識は色・聲・香・味・觸等(の習氣)の積集し、滋長するに由るが故なり。

第二目　俱轉識を明す

(一)* **法說**　廣慧、(一)阿陀那識を依止と爲し、建立と爲るが故に六識身轉[一四](起)す。(六識身とは)謂く眼識と耳鼻舌身意の(五)識となり。(二)此(1)の中識有り、(1)眼(根)[一五]及び色(境)を緣と爲して眼識を生じ、(其の)(2)眼識と俱に隨行し、同時同境に分別(明了)の意識有つて轉(起)す。(2)(眼(1)識に於けると同じく又)識有り、耳・鼻・舌・身(の各根)及び聲・香・味・觸(の各境)を緣と爲して、耳・鼻・舌・身の(各)識を生じ、(其の)(2)耳・鼻・舌・身の(各)識と俱に隨行し、同時同境に分別(明了)の意識有つて轉(起)す。(三)廣慧、(1)若し爾の時に於て一の眼識轉(起)せば、即ち此の時に於て唯一の分別(明了)の意識有つて、眼識と所行(の境)を同ふして轉(起)す。(2)若し爾の時に於て二三四五の諸識身轉(起)せば、即ち此の時に於て唯一の分別(明了)の意識有つて、(一二三四)五の(諸)識身と所行(の境)を同

【二】　六趣生死。迷の衆生、その造る所の業によりて地獄、餓飢、畜生、修羅、人間、天上の六趣を輪廻して極まる所無き事。

【三】　或は卵生云云。受生の差別に胎生、卵生、濕生化生の四ありて四生と名く。

【四】　一切種子の心識。阿賴耶識の事。この識は藏識と譯さるゝが如く、この中に諸法を生ずべき潜勢力たる一切の種子を含藏するなり。

【五】　執受。阿賴耶の所緣の中、種子と五根の二を意味するものにして、執とは自體の中に攝して之を保持し、自己と運命を共にする事を言ひ、受とは之に二義あり、領受と覺受にして、領受とは領して自境とするに名け、覺受とはよく苦樂の覺知を生ぜしむるを言ふ。所で種子と五根の二境に就て、種子は覺受の義無きが故に、その他の諸義によりて執受と言はれ、五根は一切の諸義を具して執受と言はる。倘阿賴耶識は器界をも緣ずれども、之は執受に非るが故にこの中に說かず。

【六】　諸根及び所依。諸根とは、よく識を發して境を取らしむる增上の用ある、眼耳鼻舌身の五根にして、特に微細難見なる神經組織としての勝

ふして轉(起)す。

(二) **喩說**　廣慧、(一)譬へば大瀑水の流の、(1)若し一浪の生緣現前すること有れば、唯一浪のみ轉(起)し、(2)若しくは二(浪)若しくは多浪の生緣現前せば、(若しくは二浪若しくは)多浪の轉(起)すること有り、(3)然も此の瀑水の自類は恒に流れて、斷無く、盡無きが如く、(二)又善淨の鏡面の(1)若し一影の生緣現前すること有れば、唯一影のみ(生)起し、(2)若しくは二(影)若しくは多影の生緣現前せば、(若しくは二影若しくは)多影の生起すること有り、(3)(然も)此の鏡面轉變して影と爲るに非ず、亦受用滅盡することの得可きこと無きが如く、

(三) **合說**　是の如く廣慧、瀑流に似たる阿陀那識を依止と爲し、建立と爲るに由るが故に、若し爾の時に於て一の眼識の生緣現前すること有れば、卽ち此の時に於て一の眼識轉(起)し、若し爾の時に於て乃至五識身の生緣現前すること有れば、卽ち此の時に於て五識身轉(起)す。

第二項　祕密善巧の義を明す

第一目　善巧の義を明す

(一) **地前は佛の所說に非ずと遮す**　廣慧、是の如く菩薩は、[一六]法住智を依止と爲し、建立と爲るに由るが故に、心意識の祕密(の義)に於て善巧なりと雖も、然も諸の如來は此れに齊つて施設して、彼を心意識の一切の祕密(の義)に於て善巧なる菩薩と爲さず。

(二) **地上は是れ佛の所說なることを明す**　(一)廣慧、若し諸の菩薩[一七]內(心)に於てし、各別にし如實にして(1)[一八]阿陀那(の用)を見ず、阿陀那識(の體)を見ず、阿賴耶(の用)を見ず、阿賴耶識(の體)を見ず、積集(の用)を見ず、心(の體)を見ず、眼(2)(根)色(境)及び眼識を見ず、耳(根)聲(境)及び耳識を見ず、鼻(根)香(境)及び鼻識を見ず、舌(根)味(境)及び舌識を見ず、身(根)觸(境)及び身識を見ず、意(根)法(境)及び意識を見ざるを、是を勝義善巧なる菩薩と名く。(二)如來は施設して彼を勝義善巧

義根を意味す。所依とは、勝義根の扶助となる、麁にして可見なる肉團としての扶塵根を意味す。

【一七】 相、名、分別。相、名、分別、正智、如々を五法と名け爲、無爲の一切を該攝す。

相—所詮┐
名—能詮┘所緣┐
分別————能緣┘有漏┐
正智——————能緣┘有爲┐
如々————————無爲┘一切法

以て知る相、名、分別とは有漏法の全體なる事を。

【一八】 言說戲論の習氣。言說戲論の熏習によりて生じたる有漏の習氣を意味す。習氣とは熏習の氣分の義にて、種子の異名なり。但し、種子はよく現行を生ずる因たるに約する名なるも、習氣は現行によりて生ぜられたる果たるに約する名なり。

【一九】 有色界。色法の存在する世界の意にて、三界中の欲、色の二界なり。欲界とは婬欲と食欲と睡眠欲との强き有情の住する世界、色界とはその二欲を離れて殊妙なる色法のみの存する世界の事。

【二〇】 無色界。この世界には色法は少しも無く、深妙なる禪定に住する純精神的の世界なり。

なる菩薩と爲す。

廣慧、此れに齊(かぎ)つて名けて心意識の一切の祕密(の義)に於て善巧(ぜんぎやう)なる菩薩と爲す。如來此れに齊(かぎ)つて施設して、彼を心意識の一切の祕密(の義)に於て善巧なる菩薩と爲す」と。

第二目　前問を決答す

第三章　頌を以て重說す*

爾の時世尊は、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰はく、

(一)「[一九]阿陀那識は甚深にして(微)細なり、(二)一切の種子は瀑(水)流の如し。(三)我、凡(夫)と愚(夫)とに於ては開演せず、(四)彼分別し執(著)して我と爲さんことを恐るればなり」と。

※(二)衆名の差別を明す
- (一)阿陀那識を釋す
- (二)阿賴耶識を釋す
- (三)心の義を釋す

【一一】阿陀那識(ādāna vijñāna)、第八識の一名にして執持識と譯す。諸法の種子と五根を執持して之を失はざるが故にこの名あり。

【一二】阿賴耶識(ālaya)。之亦第八識の一名にして藏識と譯す。藏に三義あり。一に能藏、謂く諸法の種子を攝藏するなり。二に所藏、謂く七轉識の爲に熏藏さるゝなり。三に執藏、謂く第七識によりて我として愛執せらるゝなり。この三義によりて藏識と言ふ。

【一三】安危の義を同じうす。二者一體となりて生死の運命を共にする事。

※(一)法說
- (一)六識の根本識によりて轉ずる事を明す
- (二)五識の縁によりて生ずる事を明す
  - (1)眼識の縁生を明す
    - (1)諸縁を明す
    - (2)意識と俱なる事を明す
  - (2)餘の四識の縁生を明す
    - (1)諸縁を明す
    - (2)意識と俱なる事を明す
- (三)意識と前五識との俱轉の多少を明す
  - (1)意識と眼識との俱轉
  - (2)意識と二、三、四、五の識との俱轉

【一四】轉ず。轉とは轉起と熟字し「ヲコル」の意。

【一五】眼及び色を縁となして眼識を生ず、眼とは所依の眼根なり、色とは所縁の色境なり。

※(二)喩說
- (一)水浪多少の喩
  - (1)一縁一浪の喩
  - (2)多縁多浪の喩
  - (3)自類無斷の喩
- (二)鏡影多少の喩
  (この中亦三に分つも前の(一)に准じて知るべし)

【一六】法住智。如來の教法に安住して、法門を安立し施設する智の意にて、地前の止觀を指す。

※(二)地上はこれ佛の所說なる事を明す
- (一)總答
  - (1)根本識の三名に約す
  - (2)十八界に約す
- (二)別答

【一七】内に於てし云云。内に於てすとは内證する事。各別にすとは根本智は諸法の別智なる事。如實にすとは地前の如き不如實に非る事。

【一八】阿陀那を見ず云云。阿

陀那等の三は用に約し、阿陀那識等の三は體に約す。「見ず」とは地前の差別的の比知を簡んで、地上の無差別的の實證を言ふ。

※第三章　頌を以て重說す

(一)總じて深細を顯はす
(二)其の所以を述ぶ
(三)正しく不說を述ぶ
(四)其の所以を述ぶ

【一九】　阿陀那識は云云。この一偈は大正本に於て、一切の種子云云の第二句と我、凡と愚とに云云の第三句との位置を上　顚倒せるも、今は三本宮本並に明本によりてかく書改めたる所なり。これ成唯識論等に引ける所と符合するが故なり。

卷の第二

一切法相品第四

第一章　德本の請問

爾の時德本菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、世尊の諸[一]法の相に於て善巧なる菩薩と說きたまふが如き、(其の)諸法の相に於て善巧なる菩薩とは、何に齊つてか名けて、諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲し、如來は何に齊つてか施設して、彼を諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲したまふや」と。是の語を說き已るや。

第二章　如來の正說

爾の時世尊、德本菩薩に告げて曰はく、

第一節　世尊の讃評

第一項　其の所問を讃す*

「善い哉、德本、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。[二]汝(1)今無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲に(2)世間及び諸の天人、阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得せしめんが爲の故に斯の問を發せり。

第二項　勅聽許說

汝應に諦に聽くべし、吾當に汝が爲に諸法の相を說くべし。

第二節　問に對して正しく答ふ

【一】諸法の相。諸法を總攝するに就て有爲と無爲、有漏と無漏等あるも、今は特に迷悟斷證の上より之を該攝して三相となすが故に、諸法の相と言ふ。相とは體相の義なり。

※第一項 其の所問を讃す
(一)總じて問の深義を讃す
(二)別して利他の爲に發問する事を讃す

【二】遍計所執相。遍計とは周遍計度の義、凡夫は妄情によりて遍く一切緣生の諸法に對して、實我實法の計度分別を起す。この計度分別心の前に現はれし實我實法は、情執によりて現出せられたる情有理無の體性都無の法なれば、遍計所執相と言ふ。

第一項　諸法の相を明す

第一目　法　　說

（一）**數を標して名を列す**　謂く諸法の相に略して三種有り何等をか三と爲す。一には[二]遍計所執相、二には[三]依他起相、三には[四]圓成實相なり。

（二）* **次第に別釋す**　(一)云(1)何んが諸法の遍計所執相なる。(2)謂く一切法の名（言に依る）假安立の[五]自性と差別となり、[六]乃至言說を隨起せしむるが爲（に爾か）なり。(二)云何んが諸法の依他起相なる。(2)謂く(1)一切法の緣生の自性なり、(2)則ち此れ有るが故に彼有り、此れ生ずるが故に彼生ず。謂く[七]無明は行に緣たり、乃至純大苦蘊を招集す、(一)云(1)何んが諸法の圓成實相なる、(2)謂(1)く一切法の（所依たる）平等（一味）の眞如なり。(2)此の眞如に於て諸の菩薩衆、勇猛精進を因緣と爲るが故に、如理に作意し、無（顚）倒に思惟することを因緣と爲るが故に、乃ち能く通達す。此の通達に於て漸漸に修集し、乃至無上正等菩提を方に證すること圓滿なり。

第二目　喩　　說

（一）* **眩瞖と淨眼とを以て喩となす**　善男子、(一)眩瞖人の眼中所有の眩瞖の過患の如く、遍計所執相も當に知るべし、亦爾り。(二)眩瞖人の眩瞖の衆相の、或は[九]髮毛輪蜂蠅、[一〇]苣藤、或は復青黄赤白等の差別現前するが如く、依他起相も當に知るべし、亦爾り。(三)（清）淨なる眼の人の眼中の眩瞖の過患を遠離し、卽ち此の（清）淨眼の本性の所行に、亂境界無きが如く、圓成實相も當に知るべし、亦爾り。

（二）* **頗胝迦寶を以て喩となす**　善男子、(一)譬へば清淨なる[一一]頗胝迦寶の、(1)若し青染色と合する（時）は、則ち[一二]帝青（及び）大青の末尼寶の像に（但）似たりといふのみなるを、邪に（實の）帝青（及び）大青の末尼寶なりと執取するに由るが故に有情を惑亂し、(2)若し赤染色と合する（時）は、則ち琥珀の末尼寶の像に（但）似たりといふのみなるを、邪に（實の）琥珀の末尼寶なりと執取するに由るが故に有情

【三】　依他起相。他の衆緣に依りて生起せし一切爲有を依他起相と言ふ。これ衆緣によりて生起せし以上、全々無體なるにも非ず、又不易の實體あるにも非ず。之によりて之を非有似有とも假有實無とも言ふ。

【四】　圓成實相。圓滿し成熟せる諸法の實相なるが故に圓成實相と言ふ。これ法界に遍滿し、少しの轉變もなき不滅の眞理なるものなり。

※(二)次第に別釋す
- (一)遍計所執相を釋す
  - (1)請問
  - (2)正答
- (二)依他起相を釋す
  - (1)請問
  - (2)正答
    - (1)總じて體を出す
    - (2)事を指して別釋す
- (三)圓成實相を釋す
  - (1)請問
  - (2)正答
    - (1)正しく體性を示す
    - (2)修證の相を示す

【五】　自性と差別。自性とは自體の諸法の自體、差別とは自體の上の生滅・長短・高下等の種々相。

【六】　乃至。この中計度分別

を惑亂し、(3)若し綠染色と合する（時）は、則ち（一三）末羅羯多の末尼寶の像に（但）似たりといふのみなるを、邪に（實の）末羅羯多の末尼寶なりと執取するに由るが故に有情を惑亂し、(4)若し黄染色と合する（時）は、則ち金の像に（但）似たりといふのみなるを、邪に（實の）眞金の像なりと執取するに由るが故に有情を惑亂するが如く、（二）是の如く德本、(1)彼（1）の清淨なる頗胝迦（寶）の上の所有の染色相應するが如く、依他起相の上の遍計所執相の言說習氣も、當に知るべし、亦爾り。(2)彼の清淨なる頗胝迦（寶）の上の所有の帝青大青・琥珀・末羅羯多・（及び）金等の邪執（著）の如く、依他起相の上の遍計所執相の執（著）も、當に知るべし、亦爾り。(3)彼の清淨なる頗胝迦寶の如く、依他起相も當に知るべし、亦爾り。(3)彼の清淨なる頗胝迦（寶）の上の所有の帝青大青　琥珀・末羅羯多（及び）眞金等の相の、常常の時に於て、恒恒の時に於て、眞實有ること無く、無自性の性なるが如く、即ち依他起相の上に遍計所執相（ある）に由つて、常常の時に於て、恒恒の時に於て、眞實有ること無き無自性の性なる圓成實相も、當に知るべし、亦爾り。

第一項　祕密善巧の義を明す

第一目　善巧の相を明す

(一)※緣に約して三性を了知することを明す　復次に德本、(一)相[一四]と名と相應するを以て緣と爲るが故に、遍計所執相を而も了知す可し。(二)依他起相の上の遍計所執相の執（著）を以て緣と爲るが故に、依他起相を而も了知す可し。(三)依他起相の上の遍計所執相の執（著）無きを以て緣と爲るが故に、圓成實相を而も了知す可し。

(二)※三性を知るが故に三相を了知することを明す　善男子、(一)若し諸の菩薩能く諸法の依他起相の上に於て、如實に遍計所執相を了知せば、即ち能く如實に一切の[一五]無相の法を了知し、(二)若し諸の菩薩如實に依他起相を了知せば、即ち能く如實に一切の雜染相の法を了知し、(三)若し諸の菩薩如實に圓

の種々の差別を攝す。

【七】無明行に緣たり乃至云云。これ十二緣起の一々の緣起支が前後互に相關して緣となる事を示す。純大苦蘊とはその中最後の生、老死の二支に相當し、吾人有漏の依身は生、老、死の苦果の積集せる所なるを苦蘊と言ひ、之何等我々所を執ずべき義無きものなるを純と言ひ、この苦の無始無終なるを大と言ひしものなり。

※(一)眩瞖と淨眼を以て喩となす
- (一)眩瞖の過患の喩
- (二)眩瞖の衆相の喩
- (三)淨眼の本境の喩

【八】眩瞖。眼疾なり。之によりて種々の亂境界を現出す。

【九】髮、毛輪。眩瞖所生の相なり。毛が集まりてモヤ〳〵せる樣を言ふ。

【一〇】苣蕂。梵に阿提目多伽（atimuktaka）と言ふ。此方の胡麻なり。因みにこの二字は大正本には巨勝に作るも、元・明の二本によりてかく改む。

※(二)頗胝迦を以て喩となす
- (一)廣く四喩を辯ず
  - (1)青色と相應する喩

成實相を了知せば、即ち能く如實に一切の清淨相の法を了知す。

(三)※三相を知るが故に斷染證淨することを明す　善男子、(一)若し諸の菩薩能く依他起相の上に於て、如實に無相の法を了知せば、即ち能く雜染相の法を斷滅し、(二)若し能く雜染相の法を斷滅せば、即ち能く清淨相の法を證得す。

第二目　前問を決答す

(一)重ねて善巧の相を牒す　是の如く德本、諸の菩薩如實に遍計所執相、依他起相、(及び)圓成實相を了知するに由るが故に、如實に諸の無相の法、雜染相の法、(及び)清淨相の法を了知す。如實に無相の法を了知するが故に、一切の雜染相の法を斷滅し、一切の雜染相の法を斷滅するが故に、一切の清淨相の法を證得す。

(二)正しく前問を決す　此れに齊つて名けて、諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲し、如來此れに齊つて施設して、彼を諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲す」と。

第三章　頌*を以て重說す

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰はく、

(一)「若(1)し無相の法を了知せざれば　雜染相の法を斷ずること能はず。

(2)雜染相の法を斷ぜざるが故に、　微妙(淸)淨相の法を證することを壞す。

(二)諸(3)行の衆の過失を觀ぜざれば、　放逸の過失は衆生を害す。

(4)懈怠は一六住法、一七動法の中に(於て)、　一八無と有との失壞有り、憐愍す可し」

と。

(二)法喩合說
(4)(3)(2)赤色と相應する喩・綠色と相應する喩・黃色と相應する喩
(1)遍計に合す
(1)種子に約して合す
(2)現行に約して合す
(2)依他に合す
(3)圓成に合す

【一一】頗胝迦寶。頗胝迦(sphaṭika)は又多く玻璃と音譯す。赤玉或は白珠と譯し、此方の水精に當る。

【一二】帝青、大青の末尼寶。帝青とは梵に因陀羅尼羅(Indranīla)、大青とは(Mahānīla)、共に青釋天の有する青色の寶玉を意味す。末尼寶とは末尼(maṇi)とは珠、寶、如意寶等と譯し、珠の總名なり。

【一三】末羅羯多(Mārakata)。綠色の寶なり。よく諸毒を避くる力用ありと言ふ。

※(一)緣に約して三性を了知する事を示す
(一)遍計を了知す
(二)依他を了知す
(三)圓成を了知す

【一四】相と名と相應す。相とは所詮の體相、名とは能詮の言說。この二者互に繫屬するを相應と言ふ。

※(二)三性を了知するが故に三相を了知する事を明す

- (一)無相法
- (二)雜染相法
- (三)淸淨相法

【五】　無相の法。雜染相の法、淸淨相の法。妄情所起の遍計の諸法は體相都無なれば無相の法と名け、三性有漏の依他の萬法は善性惡性互に雜糅するが故に、雜染相の法と名け、圓成實相の眞如法は煩惱の纒垢を遠離せるが故に、淸淨相の法と名く。

※(三)三相を知るが故に斷染證淨する事を明す

- (一)雜染相の法を斷ず
- (二)淸淨相の法を證す

※第三章　頌を以て重說す

- (一)無相を了せざる失を頌す
  - (1)不了知に約して雜染を斷ぜざる失を示す
  - (2)不斷染に約して淨法を證せざる失を示す
- (二)重ねて衆行を觀せざる失を釋す
  - (1)放逸の失を明す
  - (2)懈怠の失を明す

【六】　住法。定心の境界なり。或はこれ常住の涅槃法とも見るを得べし。

【七】　動法。散心の境界なり。或はこれ生死の流轉法とも見るを得べし。

【八】　無と有との失壞あり。住法無く動法有り。故に淸淨道を失壞するなり。

※第一目　有敎

- (一)蘊の敎を明す
- (二)三の敎を類顯す
- (三)四諦の敎を示す
- (四)諸界の敎を辯ず
- (五)念住の敎を明す
- (六)五の敎を類顯す
- (七)八聖道の敎を示す

無自性相品第五

第一章　勝義生の請問

第一節　曾念の事を陳ぶ

第一項　總じて所念を陳ぶ

爾の時勝義生菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

「世尊、我曾し獨り靜處に在つて、心に是の如きの尋思を生じき。

第二項　曾聞の教を擧ぐ

第一目　有　教 *

(一)「世尊は無量の(法)門を以て曾て諸蘊所有の自相・生相・滅相・永斷・(及び)遍知を說きたまふ。(二)諸蘊を說きたまへるが如く、諸處・緣起・(及び)諸食(を說きたまふこと)も亦爾り。(三)無量の(法)門を以て曾て諸諦所有の自相・遍知・永斷・作證・(及び)修習を說きたまふ。(四)無量の(法)門を以て曾て諸界所有の自相・種種界性・非一界性・永斷・(及び)遍知を說きたまふ。(五)無量の(法)門を以て曾て念住所有の自相・能(對)治・所(對)治・(及び)修習の未だ生ぜざるは生ぜしめ、生じ已れるは堅住し忘れずして、倍修(習)し增長廣大するを說きたまふ。(六)念住を說きたまへるが如く、正斷・神足・根・力・覺支(を說きたまふこと)も亦復是の如し。(七)無量の(法)門を以て曾て八支聖道所有の自相・能(對)治・所(對)治・及び修習の未だ生ぜざるは生ぜしめ、生じ已れるは堅住し忘れずして、倍修(習)し增長廣大するを說きたまふ。

第二目　空　教

世尊は復一切諸法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと說き

---

*第一目　有教
- (一)蘊の教を明す
- (二)三の教を類顯す
- (三)四諦の教を示す
- (四)諸界の教を辨ず
- (五)念住の教を明す
- (六)五の教を類顯す
- (七)八聖道の教を示す

【一】以下有教の法門として六門境界と七科道品を出す。勝義諦相品中の第四段を參照すべし。

たまふも、

第三項　昔の所疑を述ぶ

(我)未だ審にせず。世尊、何の密意[二]に依つてか、是の如く一切諸法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと說くことを作したまふや。

第二節　正しく請問を發す

我今如來に斯の義を請問し(奉る)。惟願はくば如來、哀愍して一切(諸)法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと說きたまふ所有の密意を解したまへ」と。

第二章　世尊の正答

爾の時世尊、勝義生菩薩に告げて曰はく、

第一節　世尊の讃評

第一項　其の所問を讃す*

(一)善い哉、善い哉、勝義生、汝が尋思する所甚だ如理と爲す。(二)善い哉、善い哉、善男子、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。(三)汝(1)今無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲に、(2)世間及び諸の天人、阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得ぜしめんが爲の故に斯の問を發せり。

第二項　勅聽許說

汝應に諦に聽くべし、吾當に汝が爲に、(曾て)一切諸法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと說きし所の所有の密意を解釋すべし。

第二節　問に對して正しく答ふ

【二】密意。空教の法門は世尊自ら祕密の意趣を懷きて說き給へる所にして、もし文の當面に隨つて義を取らんとすれば其の眞意を得ざるを言ふ。

※第一項　其の所問を讃す
- (一)尋思する所を讃す
- (二)問の深義を讃す
- (三)利他の爲に發問する事を讃す
  - (1)總益
  - (2)別益

第一項　三無性に依りて密意の致を解釋す

第一目　三無性に依りて皆無自性を説く密意を辨ず

（一）總じて密意を標して三名を列す　勝義生當に知るべし、我[三]三種の無自性性に依つて、密意（みつち）を以て説いて、一切諸法は皆自性無しと言へるなり。（其の三種とは）所謂相無自性性、生無自性性、（及び）勝義無自性性なり。

（二）※體を示し相を辨ず　（一）善男子、(1)云何んが諸法の相無自性性なる、謂く諸法の遍計所執相なり。何を以ての故に、此れ假（設の）名（言）に由つて、安立して相と爲す。自相に由つて、安立して相と爲すものに非ず。是の故に説いて相無自性性と名く。(2)云何んが諸法の生無自性性なる、謂く諸法の依他起相なり。何を以ての故に、此れ他の縁力に依るに由るが故に有なり。自然に有なるに非ず。是の故に説いて生無自性性と名く。(3)云何んが諸法の勝義無自性性なる、(1)謂く諸法は生無自性性に由るが故に、説いて無自性性と名く。即ち縁生の法をも亦勝義無自性性と名く。何を以ての故に、諸法の中に於て、若し是れ清淨所縁の境界ならば、我、彼を顯示して以て勝義無自性性と爲す。依他起相は是れ清淨所縁の境界に非ず。是の故に亦説いて名けて勝義無自性性と爲す。(2)復諸法の圓成實相有り、（此れをも）亦勝義無自性性と名く。何を以ての故に、一切諸法の法無我性を名けて勝義と爲し、亦名けて無自性性とも爲すことを得、是れ一切法の勝義諦なるが故に、無自性性の所顯なるが故なり。此の因縁（いんねん）に由つて、名けて勝義無自性性と爲す。（二）善男子、(1)譬へば[四]空華（くうげ）の如く相無自性性も、當に知るべし。亦爾り。(2)譬へば幻像の如く生無自性性も、當に知るべし、亦爾り。一分の勝義無自性性も、當に知るべし、亦爾り。(3)譬へば虚空の惟是れ衆色の無なる性に顯はされて、一切處に遍ねきが如く、一分の勝義無自性性も、當に知るべし、亦爾り。法無我性の所顯なるが故に、一切（處）に遍ねきが故に。

【三】三種無自性性。この三種無自性性の法門は、先の三性の法門に依止して立てられたる所にして、三性が非空の肯定的立場に立脚するに對して、三無性は非有の否定的立場に立脚するものにして、二門相待ちて空有の二執を破して中道義を成立し、正しくこれ唯識不共の妙旨として珍重さるゝ所なり。一に相無性とは、遍計所執の實我實法の妄相は體性都無なるに名け、二に生無自性とは、依他の諸法は因縁和合して生ずるものなれば、決して自然生の義或は縁生の義無きものなるに名け、三に勝義無自性は、之に依他に約するものと圓成に約するものとの二種ありて、若し前者の場合なれば、依他法は勝義諦に非るが故に勝義無自性と名け（無とは非の義なり）、若し後者の場合なれば、圓成實の勝義諦は我法の二執を滅無せし所に顯はるゝ無相不可得のものなるに名く。（故にこの場合は勝義諦が無自性なりとの意に非ずして、無自性により顯はさるゝ勝義諦との意なり。）尚無自性性の後の性字は體性の義なればこれ無自性なる體性との意なり。

※（二）體を示し相を辨ず

(三)密意の義を結す　善男子、我、是の如きの三種の無自性性に依つて、密意を以て說いて、一切諸法は皆自性無しと言へり。

第二目　[五]初後の無性によりて無生無滅を說くことを辨ず

(一)相無性に約す　勝義生、當に知るべし、我、相無自性性に依つて、密意を以て說いて、一切諸法は生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと言へり。何を以ての故に、若し法の自相都て[六]所有無くんば、則ち生有ること無し、若し生有ること無くんば、則ち滅有ること無し、若し生も無く滅も無くんば、則ち本來寂靜なり、若し本來寂靜なれば、則ち自性涅槃なり、中に於て都て少分の所有も、更に其れをして般涅槃せしむ可き(もの)無きが故なり。是の故に相無自性性に依つて、密意を以て說いて、一切諸法は生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと言へり。

(二)勝義無自性性に約す　善男子、我亦法無我性所顯の勝義無自性性に依つて、密意を以て說いて、一切諸法は生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと言へり。何を以ての故に、法無我性所顯の勝義無自性性は、常常の時に於て、恒恒の時に於て、諸法の法性安住して無爲なり、一切の雜染相應せざるが故に、常常の時に於て、恒恒の時に於て、諸法の法性安住するが故に無爲なり、無爲に由るが故に、生も無ければ滅も無く、一切の雜染相應せざるが故に、本來寂靜にして自性涅槃なればなり。是の故に、我、法無我性所顯の勝義無自性性に依つて、密意を以て說いて、一切諸法は生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと言へり。

第二項　流轉に約して三無性を立つることを辨ず

第一目　有情の執に約して立意を辨ず

(一)反顯　復次に勝義生、有情界の中の諸の有情の類は別に遍計所執の自性を觀じて自性と爲るに由るが故に、亦彼別に依他起の自性及び圓成實の自性を觀じて自性と爲るに由るが故に、我三種の

(一)法說
- (1)相無自性
- (2)生無自性 ─ (1)依他に約す
- (3)勝義無自性 ─ (2)圓成に約す

(二)喩說
- (1)空華の喩
- (2)幻像の喩
- (3)虛空の喩

【四】空華とは、空中の華花の相のみありてその自體無きもの、眼翳によりて起る所なり。

【五】生無自性は、その體如幻生滅の當相として依他法なるが故に、無生無滅を成立する事能はざるなり。

【六】所有無しとは取つて以て自性とすべき何物も無しとの意にて、空と言ふに同じ。

【七】般涅槃(parinirvāṇa)とは此に圓寂と譯す。圓滿なる寂滅の涅槃との意なり。

無自性性を立つるには非ず。

(二) 直顯　然るに有情は依他起の自性及び圓成實の自性の上に於て、遍計所執の自性を[八]增益するに由るが故に、我、三種の無自性性を立つるなり。

第二目　流轉に約して立意を辨ず

(一) 遍計により言説を隨起す　遍計所執の自性の相に由るが故に彼の諸の有情は、依他起の自性及び圓成實の自性の中に於て、言説を隨起し、

(二) 言説によりて遍計に執著す　(是の)如く(是の)如くに言説を隨起す。是の如く是の如くに[九]言説熏習の心に由るが故に、[一〇]言説隨覺に由るが故に、[一一]言説隨眠に由るが故に、依他起の自性及び圓成實の自性の中に於て、遍計所執の自性の相に執著す。

(三) 執著によりて依他を生起す　(是の)如く(是の)如くに執著して、是の如く是の如くに依他起の自性及び圓成實の自性の上に於て、遍計所執の自性に執著す。是の因緣に由つて、當來世の依他起の自性を生ず。

(四) 依他によつて三雜染を生ず　此の因緣に由つて或は、[一二]煩惱雜染の爲に(汚)染せられ、或は業雜染の爲に(汚)染せられ、或は生雜染の爲に(汚)染せられて、

(五) 正しく生死流轉の相を示す　生死の中に於て長時に馳騁し長時に流轉して休息有ること無く、或は[一三]那落迦に在り、或は[一四]傍生に在り、或は餓鬼に在り、或は天上に在り、或は阿素洛に在り、或は人中に在つて諸の苦惱を受くるなり。

第三項　還滅に約して三無性を示說す

第一目　生無自性性を示說す

(一) 所被の機を擧ぐ　復次に勝義生、若し諸の有情本從り已來、未だ善根を種ゑず、未だ(罪)障を清

【八】增益。妄情によりて實我實法の執を加增する事。

【九】言說熏習。直ちに境を緣ずるに非ずして、意識の分別力によりて能詮の名言を緣じて、熏ぜられたる色心諸法の種子の事なり。これ三種熏習中の表義名言熏習なり。

【一〇】言說隨覺、名言を解する人天等が、言說の現行を媒介として、分別覺知する事によりて、煩惱を增長する事。

【一一】言說隨眠。名言を解せざる嬰兒、牛羊等が、言說の種子の隨眠力によりて煩惱を增長する事。隨眠とは有情を隨逐し阿賴耶識中に眠伏するの義にして、煩惱の種子を言ふ。

【一二】煩惱雜染、業雜染、生雜染。之を三雜染と言ふ、初に煩惱雜染とは貪、瞋、我見等の煩惱の事なり。業雜染とは煩惱によりて起す所の種々の惡業なり。生雜染とは惡業によりて感ずる所の生老病死の苦果なり。この三何れも眞如を雜亂し染汚するが故に雜染と言ふ。

【一三】那落迦(naraka)。或は那落等とも音譯す。地獄の事なり。

【一四】傍生。傍行の生類との意、畜生と言ふに同じ。

淨にせず、未だ[一五]相續を成熟せず、未だ多く勝解を修せず、未だ[一六]福德智慧二種の資糧を積集(しやくじふ)すること能はず。

(二)能被の法を示す　我、彼が爲の故に、生無自性性に依つて諸法を宣說するに、

(三)敎に依て修する事を示す　(一)彼、(1)是を聞き已つて、(2)能く一切の緣生の行中に於て、分に隨つて常も無く恒も無き、是れ不安隱にして變壞(へんゑ)の法なりと解了し已つて、(3)一切の行に於て心に怖畏(ふゐ)を生じ、深く厭患を起す。心に怖畏を生じ深く厭患し已つて、(4)諸の惡を遮止し、諸の惡法に於て能く造作せず、諸の善法に於て能く勤めて修習す。(5)善因を(修)習するが故に、未だ善根を種ゑざるをば能く善根を種ゑ、未だ(罪)障を淸淨にせざるをば能く淸淨ならしめ、未だ相續を(成)熟せざるをば能く成熟せしめたり。(二)此の因緣に由つて、多く勝解を修し、亦多く福德智慧二種の資糧を積集す。

第二目　餘の二の無自性性を示說す

(一)※所被の機を擧ぐ　(一)彼是の如く諸の善根を種ゑ、乃至福德智慧二種の資糧を積集すと雖も、然(二)も生無自性性の中に於て、未だ如實に相無自性性及び二種の勝義無自性性を了知すること能はず、(三)一切の行に於て未だ正しく厭ふこと能はず、未だ正しく欲を離れず、未だ正しく解脫せず、未だ遍ねく煩惱雜染を解脫せず、未だ遍ねく諸の業雜染を解脫せず、未だ遍ねく諸の生雜染を解脫せず。

(二)能被の法を明す　如來は彼が爲に更に法要を說く、謂く相無自性性及び勝義無自性性なり。其れをして一切の行に於て、能く正しく厭はしめんと欲するが爲の故に、正しく欲を離れしめんと欲するが爲の故に、正しく解脫せしめんと欲するが爲の故に、一切の煩惱雜染を超過せしめんと欲するが爲の故に、一切の業雜染を超過せしめんと欲するが爲の故に、一切の生雜染を超過せしめんと欲するが爲の故なり。

(三)※敎に依て修する事を明す　彼、(一)是の如き所說の法を聞き已つて、生無自性性の中に於て、能く

【一五】相續。有情の主體たる阿賴耶識なり。これ一類に相續して善惡業の果報を受くる主體なるが故なり。

【一六】福德智慧二種の資糧。福德とは布施、持戒等六度中の前五度にして、よく菩提に隨順する善根功德を言ふ。智慧とは第六度にして、正觀によりて起されたる正智なり。この二よく證果に至る資助糧道となるを資糧と言ふ。

※(三)敎によりて修習する事を明す
- (一)修習を示す
  - (1)聞法
  - (2)無常法を解了す
  - (3)怖畏厭患の相
  - (4)止惡修善の相
  - (5)三事を修得する相
- (二)益を示す

※(一)所被の機を擧ぐ
- (一)上を修得せし機相を擧ぐ
- (二)未了の法ある事を示す
- (三)未修得未滿足を示す

※(三)敎によりて修習する事を明す
- (一)修習を示す
- (二)益を示す

正しく相無自性性及び勝義無自性性を[一七]信解し、[一八]簡擇し、思惟して[一九]如實に通達す。依他起の自性の中に於て、能く遍計所執の自性の相に執著せず。言説不熏習の智に由るが故に、言説不隨覺の智に由るが故に、言説離隨眠の智に由るが故に能く依他起相を滅し、現法の中に於て、智力に持せられ能く永く當來世の因を斷滅す。(二)此の因緣に由つて、一切の行に於て能く正しく厭患し、能く正しく離欲し、能く正しく解脫し、能く遍ねく煩惱・業・生の三種の雜染を解脫す。

第四項　一乘の密意を示して種姓の差別を顯はす

第一目　一乘の密意を說く

(一)三乘同じくこの無生に依りて一涅槃を證する事を明す　復次に勝義生、諸の聲聞乘種性の有情も亦此[二〇]の(三種の無自性性)道、此の行迹に由るが故に、無上安隱の涅槃を證得す。諸の獨覺乘種性の有情及び諸の如來乘種性の有情も、亦此の(三種の無自性性)道、此の行迹に由るが故に、無上安隱の涅槃を證得す。

(二)聖道に約して方便を以て一乘と說く事を明す　一切の聲聞獨覺(及び)菩薩皆此の一[二一]妙清淨の(無自性性)道を共にし、皆此の一[二二]究竟清淨(の果)を同ふし、更に第二(の道并に果)無し。我、此(の道一果一なるもの)に依るが故に、密意を以て說いて、唯一乘のみ有りと言ふ。

(三)理實には三乘差別せる事を明す　一切の有情界の中に於て種種の有情の[二三]種性有ること無きには非ず。或は鈍根の性あり、或は中根の性あり、或は利根の性あつて有情差別す。

第二目　趣寂と廻向の別を明す

(一)*趣寂の聲聞は定て不成佛なる事を明す　(一)善男子、若し[二四]一向趣寂の聲聞種性の補特伽羅は、諸佛の施設したまふ種種の勇猛の加行方便の化導を蒙むると雖も、終に當に道場坐して阿耨多羅三藐三菩提を證得せしむること能はず。(二)何を以ての故に、(三)彼(1)(イ)本來唯下劣種性のみ有るに由るが

【一七】信解。これ五位中の資糧位なり。

【一八】簡擇思惟。五位中の加行位(四善根を修す)なり。因みに簡擇の簡の一字は三本並に宮本等には揀に作れり。

【一九】如實に通達す。五位中の見道通達位なり。

【二〇】この道、この行迹。三無性の教と理とによりて、よく無爲涅槃界に到達し得るが故に道と名け、又これ諸の聖者の遊履する所なれば行迹と言ふ。

【二一】一妙清淨道。三乘に一貫せる三無性の清淨道なり。即ち三乘は之を修する事によりて、各々自乘の涅槃を證得するものにして、更に餘道あるに非ず。よつて道の一なるに約して一乘と說く。

【二二】一究竟清淨。唯一無二にして究竟せる三無性の法門なり。三乘は同じく之を以て所證の果とするが故に、果の一なるよりして一乘と說く。

【二三】種性。三乘無漏の種子を意味するものにして、之が具不の差別に就て五種あり、五種性と言ふ。左圖の如し。

一菩薩定姓———頓悟
(有種性)

故に、一(2)向に慈悲薄弱なるが故に、一向に衆苦を怖畏するが故なり。(2)彼一向に慈悲薄弱なるに由つて、是の故に一向に諸の衆生を利益する事を棄背し、彼一向に衆苦を怖畏するに由つて、是の故に一向に諸行を發起する所作を棄背す。(3)我終に一向に衆生を利益する事を棄背する者と、一向に諸行を發起する所作を棄背する者とをば、當に道場に坐して能く阿耨多羅三藐三菩提を得べしとは説かず。(四)是の故に彼を説て名づけて、一向趣寂の聲聞と爲す。

(二)　廻向菩提の聲聞は定て成佛する事を明す　若し二五廻向菩提の聲聞種性の補特伽羅は、我亦異門を以て説いて菩薩と爲す。何を以ての故に、彼既に二六煩惱障を解脱し已つて、若し諸佛等の覺悟を蒙むる時は、所知障に於て其の心亦當に解脱を得可ければなり。(然れども)彼最初に自の利益の爲に、加行を修行して煩惱障を脱するに由つて、是の故に如來は、彼を施設して聲聞種性と爲す

第五項　密意の敎に於て諸の意解あることを明す

第一目　總じて意解の差別を標す

復次に勝義生、是の如く、我が二七善說善制の法毘奈耶をば最極清淨の意樂を以て説く所の善敎法の中に於て、諸の有情類の意解種種差別の得可きものあり。

第二目　別して意解の差別を明す

(一)　所依の敎を擧ぐ　善男子、如來は但是の如き三種の無自性性に依り、深き密意に由つて宣説する所の二八不了義經に於て、隱密の相を以て諸の法要を説く。謂く一切の法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと。

(二)※正しく意解の差別を擧ぐ　是の經の中に於て、(一)(1)若し諸の有情已に上品の善根を種ゑ、已に諸の(罪)障を清淨にし、已に相續を成熟し、已に多く勝解を修し、已に能く上品の福德智慧の資糧を積集するあり。(2)彼(1)(イ)若し是の如き法を聽聞し已つて、我が甚深なる密意の言説に於て如實に解了

- 獨覺定姓
- 聲聞定姓
  - ─ 不成佛
- 不定種姓
  - ─ 不定 獨覺、聲聞 ─ (有種性)
  - ─ 不定 菩薩、聲聞
  - ─ 不定 菩薩、獨覺
  - ─ 不定 菩薩、獨覺、聲聞 ─ 漸悟(有種性)
- 無姓有情 ─ 不成佛(無種性)

※(一)趣寂の聲聞は定で不成佛なる事を明す

- (一)標
- (二)徵
- (三)釋
  - (1)總じて三因を標す
    - (1)種姓に約す
    - (2)修習に約す
  - (2)二因によりて二失を顯はす
  - (3)二因を徵して不成佛を明す
- (四)結

【二四】一向趣寂の聲聞。五種姓の中の聲聞定姓並に聲聞獨覺不定姓は、一向に灰身滅智の空寂なる涅槃に趣入するを以て最終の目的となすが故に、この名あり。(獨覺定姓亦一向趣寂なる事言を待たず)

【二五】廻向菩提の聲聞。これ五種姓中の聲聞菩薩不定姓は、一應聲聞の果たる無餘涅槃を證得するも、未だ之に滿足せ

し、(ロ)是(イ)の如き法に於て深く信解を生じ、是の如きの義に於て無(顚)倒の(智)慧を以て如實に通達し、(ロ)此の通達に依つて善く修習するが故に、速疾に能く最極究竟を證し、(2)亦我が所に於て深く淨信を生じ、是れ如來の應正等覺にして一切法に於て現に正等覺すと知る。(二)若し(1)(一)諸の有情、已に上品の善根を種ゑ、已に諸の(罪)障を清淨にし、已に相續を成熟し、已に多く勝解を修するも、未だ上品の福德智慧の資糧を積集すること能はず、(2)其の性質直なり、(或は)是れ質直の類にして(3)思擇し、廢立するに力能無しと雖も、(4)而も自の二九見取の中に安住せざるあり。(2)彼(1)(イ)若し是の如き法を聽聞し已つて、我が甚深なる秘密の言說に於て、如實に解了する力能無しと雖も、然も此の法に於て能く勝解を生じ、(ロ)清淨の信を發し、此の經典は是れ如來の說なり、是は其れ甚深(なる眞如の理)を顯現し、甚深なる空性(の義)と相應して見難く、悟り難く、尋思す可からず、諸の尋思所行の境界に非ず、微細詳審なる聰明智者の解了する所なりと信じ、(2)此の(イ)經典所說の義の中に於て、自ら輕ろんじて而も住し、是の如きの言を作さく、『諸佛の菩提は最も甚深なりと爲し、諸法の法性も亦最も甚深なり。唯佛如來のみ能く善く了達したまふ、是れ我等が能く解了する所に非ず、(ロ)諸佛如來彼の種種なる勝解の有情の爲に、正法敎を轉じたまふ、諸佛如來は、無邊の智見あり、我等が智見は猶し三〇牛跡の如し』と。此(3)の經典に於て能く三一恭敬し、他が爲に宣說し、書寫し、護持し、披閱し、流布し、殷重に供養し、受誦し、溫習すと雖も、然も猶未だ其の修相を以て加行を發起すること能はず。是の故に我が甚深なる密意を以て說く所の言辭に於て通達すること能はず。(然れども)(3)此の因緣に由つて、彼の諸の有情亦能く福德智慧の資糧を增長し、彼の相續に於て、未だ成熟せざる者も亦能く成熟す。(三)若し(1)(一)諸の有情、廣說乃至、未だ上品の福德智慧の資糧を積集すること能はず、(2)性質直に非ず、(或は)質直の類にも非ずして、(3)思擇し廢立するに力能有りと雖も、(4)而も復自の見取の中に安住するあり。(2)彼(1)若し是の如き法を聽聞し已つて、

ずしてこゝに於て廻心して大乘に向ひ、菩薩行を修して菩提の果をも併せ得るが故に、廻向菩提と言ふ。(獨覺、菩薩不定姓並に菩薩、獨覺、聲聞不定姓も亦廻向菩提する事言を待たず。)

【二六】煩惱障・所知障。煩惱障とは、貪瞋等百二十八の煩惱によりて有情の身心を煩擾惱亂して人無我の理を障へ、之によりて涅槃を隱蔽するもの。所知障とは、その體亦百二十八の煩惱なるも、之は所知の境の上に實法の執見を起して法無我の理を障へ、之によりて菩提の妙智を得しめざるもの。(二乘はたゞ煩惱障を斷じて涅槃を證するも、菩薩は所知障をも斷じて菩提を得す。)

【二七】善說善制法毘那耶。善說の法(經藏と論藏)と善制の毘那耶(律藏)の意にて、三藏を意味す。

【二八】不了義經。實義を祕して方便の說をなし、明了に法性の實義を開顯せざる經典、即ち般若皆空を說く經典なり。

※(二)正しく意解の差別を明す
(一)法と義とに於て淨信ある人
(1)總じて機相を明す(五事を成就す)
(2)能受の相を明す

我が甚深なる密意の言説に於て如實に解了すること能はず、是の如き法に於て信解を生ずと雖も、然も其の義に於て言に隨つて執著し、一切の法は三二決定して皆自性無し、決定して不生不滅なり、決定して本來寂靜なり、決定して自性涅槃なりと謂ふ。(2)(イ)此の因縁に由つて、一切法に於て三三無の見及び無相の見を獲得す。(ロ)無の(イ)見(及び)無相の見を得るに由るが故に、一切の相は皆是れ無相なりと撥(無)し、諸法の遍計所執相、依他起相、(及び)圓成實相を誹撥す。(ロ)何を以ての故に、依他起相及び圓成實相有るに由るが故に、遍計所執相方に施設す可し、若し依他起相及び圓成實相に於て見て無相なりとせば、彼れ亦遍計所執相をも誹撥すればなり。(ハ)是の故に彼、三相を誹撥すと説く。(3)我(1)が(イ)(説く所の正)法に於て(正)法の想ひを起すと雖も、而も非(正)義の中に(正)義の想ひを起す。(ロ)我が(正)法に於て(正)法の想ひを起し、及び非(正)義の中に(正)義の想ひを起すに由るが故に、是法の中に於て持して是法なりと爲し、非義の中に持して是義なりと爲す。(2)彼(イ)(正)法に於て信解を起すが故に福德增長すと雖も、(ロ)然(イ)も非(正)義に於て執著を起すが故に智慧退失す。智慧退(失)するが故に廣大無量の善法を退失す。(ロ)復(A)有(A)情有り、他從り(正)法を謂つて(正)法と爲し、非(正)義を(正)義と爲るを聽聞して、若し其の見に隨へば、彼即ち(正)法に於て(正)法の想ひを起し、非(正)義の中に於て(正)義の想ひを起し、(正)法を執じて(正)法と爲し、非(正)義を(正)義と爲す。(B)此の因縁に由つて、當に知るべし、彼に同じく善法退失す。若(B)(A)し有情有つて其の見に隨はざれば、彼從り欻ち一切の諸法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと聞いて、便はち恐怖を生じ、恐怖を生じ已つて是の言を作さく『此れ佛語に非ず、是れ魔の所説なり』と。此の解を作し已つて是の經典に於て誹謗し、毀罵す。(B)此の因縁に由つて、大衰損を獲、大業障に觸る(べし)。(ハ)是の縁に由るが故に、我、一切の相に於て無相の見を起し、非(正)義の中に於て宣説して(正)義と爲ること有らば、是れ廣大なる業障を起す(所)

- (1)法と義とを倶に信ずる事を明す
  - (イ)總じて解了を明す
  - (ロ)別して法と義とに約す
    - (之を五位に配釋する事を得)
- (2)佛を信ずる事を明す
  - (イ)信解
  - (ロ)修證
- (二)法を信ずるも義に於て分を絶する人
  - (1)總じて機相を明す
    - (1)五事の具缺
    - (2)性類の差別
    - (3)思擇の有力無力
    - (4)自の見取中の住不
  - (2)能受の相を示す
    - (1)法に於て信を生ずる事を示す
      - (イ)總じて法を信ずる事を明す
      - (ロ)信知の相を示す
    - (2)義に於て分を絶することを示す
    - (3)修相の差別を明す
      - (イ)諸佛の内證に約す
      - (ロ)諸佛の教法に約す
  - (3)其の得益を辨ず
- (三)法を信ずるも義に於て見を起す人
  - (1)總じて機相を明す
  - (この中の小節は前に准じて知るべし)

の方便なりと說けり。(何を以ての故に)、彼、無量の衆生を陷墜し、其れをして大なる業障を獲得せしむるに由るが故なり。(四)善(1)男子、(1)若し諸の有情にして未だ善根を種ゑず、未だ(罪)障を淸淨にせず、未だ相續を(成)熟せず、多くの勝解無く、未だ福德智慧の資糧を(積)集せず、(2)性質直に非ず、(或は)質直の類にも非ずして、(3)思擇し廢立するに力能有りと雖も、(4)而も常に自の見取の中に安住するあり。(2)彼(1)若し是の如き法を聽聞し已つて、如實に我が甚深なる密意の言說を解(了)すること能はず、亦此の法に於て信解を生せず、是法の中に於て非法の想ひを起し、是義の中に於て非義の想ひを起し、是法の中に於て執(著)して非法と爲し、是義の中に於て執(著)して非義と爲して是の如きの言を唱ふらく、『此れ佛語に非ず、是れ魔の所說なり』と。(2)此の解を作し已つて、是の經典に於て誹謗し、毀罵し、撥して虛僞なりと爲し、無量の門を以て是の如きの經典を毀滅し、摧伏して、諸の此の經典を信解する者に於て、怨家の想ひを起す。(3)彼、先に諸の業障の爲に障へられ、此の因緣に由つて、復是の如きの業障の爲に障へらる。是の如きの業障は初には施設し易し、(然れども)乃し[三四]百千倶胝那庾多劫を齊るに至るまでも、出期有ること無し。

第三目　義を結す

善男子、是の如く我が善說、善制の法、毘奈耶をば最極淸淨の意樂を以て說く所の善教法の中に於て、是の如き等の諸の有情類の異解、種種差別の得可きもの有り」と。

第六項　※頌を以て重說す

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰はく、

(一)(1)(イ)「一切の諸法は皆(自)性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂(靜)たり。諸法の自性は恒に涅槃なり、　(2)誰の有智(の人)か密意無しとや言はん。

(2)相、生、勝義の(三)無自性を、是の如く我皆已に顯示す。若し佛の此の密意を知らずんば、正

- (2)能受の相を示す
  - (1)總じて法を信ずるも義に於て見を起す事を明す
  - (2)別して無見無相見を得る事を明す
    - (イ)正しく見を得る事を示す
    - (ロ)三相を撥無する事を示す
      - (イ)總示
      - (ロ)示由
      - (ハ)結成
- (3)其の過失を示す
  - (1)所計を定む
    - (イ)法義の二想を示す
    - (ロ)二想を以て是非を結す
  - (2)得失を辨ず
    - (イ)得を示す
    - (ロ)失を示す
      - (イ)自失を示す
      - (ロ)他失を示す
        - (A)彼の見に隨ふ人
          - (A)執を示す
          - (B)失を示す
        - (B)彼の見に隨はざる人
          - (A)執を示す
          - (B)失を示す
      - (ハ)失の所由を結す

道を失壞して（涅槃の果に）往くこと能はず。
諸（二）(1)の淨道に依つて淸淨なる者は、惟此の一（の無自性道）のみに依り、第二（の無自性道に依ること）無し。故に其の中に於て一乘を立つるも、（而も）有情の（種）性差別無きに非ず。
(2)衆生界の中の無量の生は、三五惟一身を度して寂滅に趣くのみ。（然れども如來は）三六大悲勇猛にして涅槃を證し、衆生を捨てず、（是れ）三七甚だ得難し。
(3)微妙難思の無漏（涅槃）界（の中に於て）（皆）解脫等ふして差ふこと無し。一切の義利を成（就）して惑と苦とを離る。三八二種に異說して常なり樂なりと謂ふ」
と。

第三章　菩薩の領解

第一節　廣く領解を申ぶ

爾の時勝義生菩薩、復佛に白して言さく、

第一項　總じて密意の致を歎ず

「世尊、諸佛如來の密意の語言は、甚奇希有なり、乃至微妙（中）の最も微妙なる、甚深（中）の最も甚深なる、（而して）通達し難き（中）の最も通達し難きものなり。

第二項　別して領解する所を述ぶ

第一目　蘊等の五門に約して三無性を領す

（一）五蘊に約して說く　（二）(1)（1）是の如く我今領解すらく、(2)『世尊所說の義は、若しくは分別所行の遍計所執相の三九所依の行相の中に於て、假名安立して以て色蘊の或は自性相或は差別相と爲し、假名安立して色蘊の生と爲し、色蘊の滅と爲し、及び色蘊の永斷、遍知の或は自性相或は差別相と爲

（四）法と義とに於て共に誹謗する人
- (1)總じて機相を明す（この中の小節は前に准じて知るべし）
- (2)能受の相を示す
  - （1）法と義とを俱に信ぜざる事を示す
  - （2）誹謗毀滅を示す
- (3)其の過失を示す

【二九】見取。自己の懷ける總ての惡見並にその所依の五蘊を以て、最勝にしてよつて以て能く涅槃に到達し得るとなす執着。

【三〇】牛跡。牛の步みし足跡なり。

【三一】恭敬、宣說、書寫、護持、披閱、流布、供養、受誦溫習、發起加行の十（一々の名目は諸書相違するもの多し。）を十法行と言ひ、これ經典に對する十種の行法にして、之を修する事によりて三慧の助伴となる無量の功德を得ると言ふ。
今この一類の行人は、法を信ずるが故にこの中前九法は修し得るも、義に於て分を絕するが故に第十は修し得ざるなり。

【三二】決定して皆無自性。不了義經に於て密意あるを知らざるものは、文に隨つて義を取るが故に、空を說くを聞け

す。是を遍計所執相と名く。世尊は此(の遍計所執相)に依つて、諸法の相無自性性を施設したまふ。(ロ)若しくは即ち分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是を依他起相と名く。世尊は此(の依他起相)に依つて、諸法の生無自性性、及び一分の勝義無自性性を施設したまふ』と。(二)是(1)の如く我今領解すらく、(2)『世尊所説の義は、若しくば即ち此の分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、即ち此の自性の無自性性、法無我の眞如の、清淨(智)の所縁なるを、是を圓成實相と名く。世尊は此(の圓成實相)に依つて、一分の勝義無自性性を施設したまふ』と。(二)色蘊に於けるが如く、是の如く餘蘊に於ても(亦)皆應に廣く説くべし。

(二)※餘門を例す　(一)諸蘊に於けるが如く、是の如く十二處の一一の處の中に於ても(亦)皆應に廣く説くべし、(二)十二有支[四〇]の一一の支の中に於ても(亦)皆應に廣く説くべし、(三)四種の食の一一の食の中に於ても(亦)應に廣く説くべし、(四)六界[四一]、十八界の一一の界の中に於ても(亦)應に廣く説くべし。

第二目　苦等の四諦に約して三無性を領す

(一)苦諦に約して説く　是の如く我今領解すらく、(2)(1)『世尊所説の義は、若しくは分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、假名安立して以て苦諦と苦諦の遍知の或は自性相或は差別相と爲す。是を遍計所執相と名く。世尊は此(の遍計所執相)に依つて、諸法の相無自性性を施設したまふ。(ロ)若しくは即ち分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是を依他起相と名く。世尊は此(の依他起相)に依つて、諸法の生無自性性、及び一分の勝義無自性性を施設したまふ』と。(三)是(1)の如く我今領解すらく、(2)『世尊所説の義は、若しくは即ち此の分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、即ち此の自性の無自性性、法無我の眞如の、清淨(智)の所縁なるを、是を圓成實相と名く。世尊は此(の圓成實相)に依つて、一分の勝義無自性性を施設し

ば空の一法に執着して、三性に於てたゞに遍計の無を空ずるのみならず、又依圓の有をも空ずる(之を惡取空と言ふ)。を言ふ。

【三三】無見無相見。無見とは總じて一切法を撥無する見を言ひ、無相見とは別して三相を撥無する見を言ふ。

【三四】百千倶胝那庾多劫。倶胝(Koṭi)とは此に或は十萬と譯し、或は一億等と譯す。那庾多(nayuta)とは此に十萬、百萬、億、兆等と譯す。如是く倶胝・那庾多共にその數を定むる事不定なるが故に、特に梵名を存して數の無量なる事を顯はす。劫とは具には劫波(Kalpa)にして時節、長時等と譯し、通常の年月日時を以て算し得ざる長遠の時間を意味す。

※第六項　頌を以て重ねて説く

- (一)無自性の密意を頌す
  - (1)昔の所説を擧げて總じて遮す
    - (1)昔の所説を擧ぐ
    - (2)總じて遮す
  - (2)今の決擇を擧げて正しく密意を示す
- (二)一乘の密意を頌す
  - (1)一乘を立つる密意を示す
  - (2)種々の乘ある事を示す
  - (3)所證の涅槃の相を示す

たまふ』と。

(二) 餘諦を例す　苦諦に於けるが如く是の如く餘諦に於ても(亦)皆應に廣く說くべし。

第三目　七科道品に約して三無性を領す

(一) 總じて四諦を以て念住等を例す　(四)聖諦に於けるが如く、是の如く諸の念住・正斷・神足・根・力・覺支、(及び)道支の中に於ても(亦)一一皆應に廣く說くべし。

(二)※別して(八聖道中の最後の)正定に約して說く　(一)(1)是の如く我今領解すらく、(2)(1)『世尊、所說の義は、若しくは分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、假名安立して以て正定と爲し、及び正定の能(對)治所(對)治、若しくは正修の未だ生ぜざるは生ぜしめ、生じ已れるは堅住し忘れずして倍修し、增長廣大なるものの或は自性の相或は差別の相と爲す、是を遍計所執相と名く。世尊は此(の遍計所執相)に依つて、諸法の相無自性性を施設し、(2)若しくは卽ち分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是を依他起相と名く。世尊は此(の依他起相)に依つて、諸法の生無自性性、及び一分の勝義無自性性を施設したまふ』と。(二)(1)是の如く我今領解すらく、(2)『世尊所說の義は、若しくは卽ち此の分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、卽ち此の自性の無自性性、法無我の眞如の、清淨(智)の所緣なるを、是を圓成實相と名く。世尊は此(の圓成實相)に依つて、諸法の一分の勝義無自性性を施設したまふ』と。

第三項　喩を舉げて了不を顯はす。

第一目　毘濕縛藥の喩

世尊、譬へば[四〇]毘濕縛藥を一切の散藥・仙藥の方の中に皆應に安處すべきが如く、是の如く世尊の此の諸法、皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なる無自性性に依る了義の言教は、遍ねく一切の不了義經に於て[四一]皆應に安處すべきなり。

【三五】　惟だ一身を度して云云。一向趣寂の聲聞種姓と獨覺種姓との機類なり。

【三六】　大悲勇猛にして云云。これ菩薩種姓の機類なり。この機は既に涅槃を證すと雖、涅槃に安住せず、利他の業用を起して、勇猛心を以て盡未來際有情を利樂するなり。(之を無住涅槃と言ふ。)

【三七】　甚だ得難し。之を以て一には二乘の種姓を簡び二には如來種姓の勝れたる事を詮はす。

【三八】　二種に異說して云云。苦惑を離るゝが故に常なり。苦を離るゝが故に樂なり。今この二種の異門を以て說いて常樂と言ふと。

※(一)五蘊に約して說く
- (一)色蘊に約して說く
  - (1)前二性を領す
    - (1)總じて領解を標す
    - (2)別して領解を釋す
      - (イ)所執性を明す
      - (ロ)依他性を明す
  - (2)第三性を領す
    - (1)總じて領解を標す
    - (2)別して領解を釋す
- (二)餘蘊を例す

【三九】　所依の行相。卽ちこれ

第二目　彩畫の地の喩

世尊、彩畫の地の、一切の彩畫の事業に遍ねく皆同一味にして、或は青、或は黄、或は赤、或は白に(於て)、復能く彩畫の事業を顯發するが如く、是の如く世尊の此の諸法の自性無く、廣說乃至、自性涅槃たる無自性性に依る了義の言教は、遍ねく一切の不了義經に於て皆同一味にして、復能く彼の諸經の中の不了なる所の義を顯發す。

第三目　熟蘇の喩

世尊、譬へば一切の成熟せる珍羞なる諸の餅果の內に、之に熟酥を投ずれば、更に勝れたる味を生ずるが如く、是の如く世尊の此の諸法の皆自性無く、廣說乃至、自性涅槃なる無自性性に依る了義の言教を、一切の不了義經(の中)に置けば、勝れたる歡喜を生ず。

第四目　虛空の喩

世尊、譬へば虛空の一切處に遍して、皆同一味にして、一切所作の事業を障へざるが如く、是の如く世尊の此の諸法の皆自性無く、廣說乃至、自性涅槃なる無自性性に依る了義の言教は、遍ねく一切の不了義經に於て、皆同一味にして一切の聲聞・獨覺、及び諸の大乘(菩薩)所修の事業を障へざるなり」と。是の語を說き已るや、

第二節　世尊の讚評

爾の時世尊、勝義生菩薩を歎じて曰はく、

第一項　所說を讚歎す

「善い哉、善い哉、善男子、汝今乃ち能く如來所說の甚深なる密意の言義を解す。復此の義に於て善く譬喩を作す、所謂世間の毘濕縛藥・雜彩畫地・熟酥、(及び)虛空なり。

依他起性なり。遍計所執は必ず獨り起らず、常に依他起を所依として、之が上に增益損減の二執を起すを以てなり。

※(二)餘門を例す
- (一)十二處を例す
- (二)十二緣起を例す
- (三)四食を例す
- (四)六界・十八界を例す

【四〇】　十二有支。有支とは、有とは因果相續して亡びざる無窮の生死の義にして、之に欲・色・無色の三有(三界とも言ふ)を數ふ。支とは因の義なり。よりて三有に沈淪する原因を有支と言ひ、之を十二義によりて說明するが故に十二有支と言ふ。これ十二因緣の異名なり。

【四一】　六界。或は六大と言ふ。地・水・火・風・空・識の六法これなり。この六法各々自己の分齊を保持して雜亂ぜざるを界と名く。

※(一)苦諦に約して說く

※(二)別して正定に約して說く
(右の二者の中の小節は前の第一目の(一)に准じて知るべし)

【四二】　毘濕縛藥(viśva)　此の方に適譯無し。故に梵名を存す。一の中に六味を具し、よく一切の病に効あり、又諸藥

第二項　印可勸持

勝義生、是の如し、是の如し、更に異有ること無し。是の如く、是の如く、汝應に受持すべし」と。

第四章　校量して益を顯はす

第一節　菩薩の請問

爾の時勝義生菩薩、復佛に白して言さく、

第一項 [四三]一代教を校量して三時となす

第一目　第一時四諦有教の法輪

(一)※正しく法輪を明す　「世尊(一)初め(第)一時(の中)に於て、(二)婆羅痆斯[四四]、[四五]仙人墮處施鹿林の中に在して、(三)惟[四六]聲聞乘に發趣する者の爲に(四)四諦の相を以て[四七]正法輪を轉じたまふ。

(二)校量して不了義なる事を顯はす　是れ甚だ奇にして甚だ希有なりと爲す。一切の世間、諸の天人等にして先に能く法の如く轉ずる者有ること無しと雖も、而も彼の時に於て轉じたまへる所の法輪は、有上なり、有容なり、是れ未了義なり、是れ諸の[四八]諍論の安足する處所なりき。

第二目　第二時無相空教の法輪

(一)※正しく法輪を明す　世尊(一)在昔、第二時の中に(於て)、(二)惟發趣して[四九]大乘を修する者の爲に、(三)一切の法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なるに依つて、隱密の相を以て正法輪を轉じたまふ。

(二)校量して未了義なる事を顯はす　(是れ)更に甚だ奇にして甚だ希有なりと爲すと雖も、而も彼の時に於て轉じたまへる所の法輪も、亦是れ有上なり、有容なり、猶未了義なり、是れ諸の[五〇]諍論の

の作用をして增長ならしむるものにして、藥中の甚とせらると言ふ。

【四三】この世尊一代の教說を校量せる一項は、法相宗の初昔今の三時教判の所依となるものにして、如是く經典中に之が明かなる典據を有する點は、餘宗の教判が人師の憶說によりて構成せられたると全くその趣を異にする所なりとす。

※(一)正しく法輪を明す
(一)說時を明す
(二)說處を明す
(三)所爲人を明す
(四)法輪を明す

【四四】婆羅痆斯(Vāraṇasī)。中天竺の國名。

【四五】仙人墮處施鹿林。地名なり。昔五百の仙人あり。空中を渡らんとせし時、偶々王の伴へる諸の婇女を見て欲心を起し、神通を失してこゝに墜落せしより此處を仙人墮處と名け、又曾て梵達多王がこの林を鹿に施與して遊止の場所とせられしより之を施鹿林と名く。(又鹿の多く住するよりして鹿野苑(mṛgadāva)とも名く。)

【四六】聲聞乘に發趣する者。憍陳如等の五比丘。

【四七】正法輪を轉ず。佛の說法し給ふ事を言ふ。輪に二義

安足する處所なりき。

第三目　第三時了義中道の法輪

（一）正しく法輪を明す　世尊（一）今第三時の中に於て、（二）[51]普ねく一切乘に發趣する者の爲に、（三）一切法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なる無自性性に依つて、顯了の相を以て正法輪を轉じたまふ。

（二）校量して了義教なる事を顯はす　（是れ）第一の甚奇にして最も希有なりと爲す。于今世尊の轉じたまふ所の法輪は、無上なり、無容なり、是れ眞の了義にして諸の[52]諍論の安足する處所に非ざるなり。

第二項　了義教の勝益を問ふ

世尊、若し善男子或は善女人にして、此の如來の一切法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本來寂靜にして自性涅槃なるに依つて、説かれたる甚深なる了義の言教に於て、聞き已つて信解し、[53]書寫し、護持し、供養し、流布し、受誦し、修習し、理の如く思惟し、其の修相を以て加行を發起すれば、幾所の福をか生ずるや」と。是の語を説き已るや、

第二節　世尊の正答

爾の時世尊、勝義生菩薩に告げて曰はく、

第一項　如來の略答

勝義生、是の善男子或は善女人の、其の生ずる所の福は無量無數にして喩知す可きこと難し。吾今汝が爲に略して少分を説かん。

第二項　喩を擧げて重ねて說く

あり。一に運轉の義、佛の説法は展轉して人に傳はる事車輪の如ければ法輪と言ふ。二に摧破の義、佛の說法はよく衆惡を摧破する事、輪王の轉寶のよく巖石を摧破する如くなれば法輪と言ふ。

【四八】諍論の安息處所。安息處所とは所依處の義、初時有教に於ては空を隱して偏に有を說くが故に未だこれ究竟ならず。よつて諸種の見解の相違ありて諍論の所依となり、竟に小乘廿部の分派を見るに至りしなり、

※（一）正しく法輪を明す
（一）說時を明す
（二）所爲人を明す
（三）法輪を明す

【四九】大乘を修する者。須菩提等の中根の者なり。

【五〇】諍論の安息處所。有を穩して偏に空を說くが故に、尙諍論の所依處となるなり。

※（一）正しく法輪を明す
（この下の小節は前に同じ）

【五一】普く一切乘云云。前二時の所被の機がたゞ聲聞乘或は大乘中根の者のみなりしに對して、第三時のそれは普く三乘に通ずる事を言ふものにして、これ本經獨自の立場なるよりして、本經を普爲一切

第一目　喩　説

爪上の土を大地の土に比するに、[五四]百分にして一に及ばず、千分にして一に及ばず、百千分にして一に及ばず、數・算・計・喩、(及び)鄔波尼殺曇分にしても亦一に及ばざるが如く、或は牛跡の中の水を四大海の水に比するに、百分にして一に及ばず、廣説乃至、鄔波尼殺曇分にしても亦一に及ばざるが如く、

第二目　合　説

是の如く諸の不了義の經に於て、聞き已つて信解し、廣説乃至、其の修相を以て加行を發起して獲る所の功德を、此の所説の了義經の教を聞き已つて、信解して集むる所の功德、廣説乃至、其の修相を以て加行を發起して集むる所の功德に比するに、百分にして一に及ばず、廣説乃至、鄔波尼殺曇分にしても亦一に及ばず」と。是の語を説き已りたまふや、

第五章　奉持の得益

第一節　經名の奉持

爾の時勝義生菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の解深密法門の中に於て、當に何をか此の教に名くべきや、我當に云何んが奉持すべきや」と。佛、勝義生菩薩に告げて曰はく、「善男子此れを勝義了義の教と名く。此の勝義了義の教に於て、汝當に奉持すべし」と。

第二節　時衆の得益

此の勝義了義の教を説きたまふ時、大會の中に於て六百千の衆生有つて、阿耨多羅三藐三菩提心

乘教と言ふ。

【五二】諍論の安息處所に非ず。第三時の説法は偏有に非ず偏空に非ず、中道了義の法門にして、勝義諦の一味の相を宣説するが故に、更に諍論を生ぜざるなり。

【五三】書寫、諷持等。十法行なり。

【五四】この中八分を以て功德の多少を校量す。即ち百分、千分、百千分、數分、算分、計分、喩分、烏婆尼刹曇分之なり。烏婆尼刹曇(upaniṣad)とは近少、微細等と譯し、印度の算法に於て數の極を意味す。

發し、三百千の聲聞は[五五]遠塵離垢して、諸法の中に於て[五六]法眼淨を得、一百五十千の聲聞は永く諸の漏を盡して心解脫を得、七十五千の菩薩は[五七]無生法忍を得たりき。

【五五】遠塵離垢。煩惱の種子なる惑塵を遠け、又その現行なる纏垢を離るゝなり。
【五六】法眼淨。如實に諸法の諦理を見照する淸淨眼なり。
【五七】無生法忍、生滅を遠離せる眞如法性の理體を無生法と言ひ、之を忍許する無漏の慧を忍と言ふ。初地に於て發得する所なり。

卷の第三

分別瑜伽品第六[一]

第一章　瑜伽を分別す

第一節　廣く止觀の相を辯ず

第一項　止觀の依と住とを分別す

第一目　菩薩の請問

爾の時[二]慈氏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、菩薩は何をか(所)依とし、何にか住して、大乘の中に於て[三]奢摩他毘鉢舍那を修するや」と。

第二目　世尊の正答

佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に知るべし、菩薩は[四]法假安立と及び阿耨多羅三藐三菩提の願を捨てざるを(所)依と爲し、(所)住と爲して、大乘の中に於て奢摩他毘鉢舍那を修す」と。

第二項　止觀の所緣の差別を分別す

第一目　菩薩の請問

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊の說きたまふが如く、四種の所緣の境事あり。一には[五]有分別影像所緣の境事、二には[六]無分別影像所緣の境事、三には[七]事邊際所緣の境事、四には所作成辦所緣の境事なり。此の四の中に於て、幾ばくか是れ奢摩他の所緣の境事なるや、幾ばくか是れ毘鉢舍那の所緣の境事なるや、幾ばくか是れ俱所緣の境事なるや」と。

第二目　世尊の正答*

【一】瑜伽(Yoga)。とは此に相應、隨順等と譯し三乘止觀の行を意味す。これ境と相應し、果に隨順する等の義あればなり。

【二】慈氏菩薩。梵に梅呾利耶、(maitreya)彌勒とも音譯す。)譯して慈と言ふ。慈氏とは慈を以て姓となす者との意なり。

【三】奢摩他・毗鉢舍那・奢摩他(śamatha)、此に止と譯す、これ禪定なり。毘鉢舍那(Vipaśyanā)、此に觀と譯す。これ智慧なり。

【四】法假安立。法とは上の三無性の法門並に下の十二分教等なり。これ佛の內證の法なるも、且く假の言說を以て施設するが故に假安立と言ふ。

【五】有分別影像所緣の境事。これ地前の毘鉢舍那を以て分別推求して緣ぜられたる差別の境界を言ふ。境事とは境界の體事(ものがら)の略なり。

【六】無分別影像所緣。これ地前の奢摩他を以て緣ぜられたる定心の境界なり。定は分別推求の用無きが故にこの名あり。

【七】事邊際所緣境事。これ十地に於ける止觀の所緣なる眞如の理法にして、眞如は一切の事法に遍滿する故にこの名あり。

佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、一は是れ奢摩他の所緣の境事なり、謂く無分別の影像なり。一は是れ毘鉢舍那の所緣の境事なり、謂く有分別の影像なり。二は是れ倶所緣の境事なり、謂く事邊際と所作成辦となり」と。

第三項　止觀の求と善とを分別す

第一目　正しく止觀の求と善とを分別す

(一)菩薩の請問　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、云何んが菩薩は是の四種の奢摩他毘鉢舍那の所緣の境事に依つて、能く奢摩他を求め、能く毘鉢舍那を善くするや」と。

(二)世尊の正答　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、(一)我が諸の菩薩の爲に說く所の法假安立の如きは、所謂契經・應頌・記別・諷誦・自說 因緣・譬喩・本事・本生・方廣・希法・(及び)論議なり。(二)(1)(イ)菩薩は此れに於て善く聽き、善く受け、言善く通利し、意能く尋思し、見能く通達し、(ロ)即ち善く思惟する所の法の如きに於て、獨り空閑に處(在)して作意し、思惟す。(ハ)是の如く正行に多く安住するが故に、(二)身の輕安及び心の輕安を起す、(ロ)內心に相續して作意し、思惟す。(ハ)是の如く正行に多く安住するが故に、身と心との輕安を獲得するを所依と爲るに由るが故に、(ロ)即ち善く思惟する所の法の如き內の三摩地所行の影像に於て、觀察し、勝解し、心相を捨離し、(ロ)(イ)即ち是の如きの三摩地影像の所知の義の中に於て、(ロ)能く正しく思擇し、最極に思擇し、周遍ねく尋思し、周遍ねく伺察する(所の)若しくは(ハ)忍、若しくは樂、若しくは慧、若しくは見、若しくは觀、是を毘鉢舍那と名く。(ニ)是の如く菩薩は能く毘鉢舍那を善くす」と。

第二目　止觀に隨順する勝解作意を分別す

(一)奢摩他に隨順する作意を明す　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、若し諸の菩薩、心を緣じ

【八】所作成辦所緣境事。これ佛地に於ける止觀所照の境界なり。如來は一切の所作を成辦し給ふが故にこの名あり。

※(二)世尊の正答
- (一)修習の所依の敎を出す
- (二)敎に依りて正しく修する事を明す
  - (1)總じて止觀の方便を明す
    - (1)聞慧
    - (2)思慧
  - (2)別して止觀の二門を釋す
    - (1)能く奢摩他を求む
      - (イ)正釋
        - (イ)所緣の境
        - (ロ)能緣の心
        - (ハ)德を示す
        - (ニ)名を結す
      - (ロ)前問を決答す
    - (2)能く毘鉢舍那を善くす
      - (イ)所緣に非ずと簡ぶ
        - (イ)觀の所依を辯ず
        - (ロ)所緣に非ずと簡ぶ
      - (ロ)境に依つて觀を發す
        - (イ)所觀の境
        - (ロ)能觀の行
        - (ハ)觀の異名
        - (ニ)前問の決答

て境と爲す内の思惟の心、乃至未だ身心の輕安を得ざれば、(是の如き)所有の作意を、當に何等とか名くべきや」と。佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、(そは)奢摩他の作意に非ず、是れ奢摩他に隨順する勝解相應の作意なり」と。

(二) 毘鉢舍那に隨順する作意を明す　「世尊、若し諸の菩薩乃至未だ身心の輕安を得ず、所思の如き所有の諸法の内の三摩地所緣の影像に於て、作意し、思惟すれば、是の如き作意を當に何等とか名くべきや」と。「善男子、(そは)毘鉢舍那の作意に非ず、是れ毘鉢舍那に隨順する勝解相應の作意なり」と。

第四項　二道の一異を分別す

第一目　正しく二道の異不を明す [一四]

(一) 菩薩の請問　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、奢摩他道と毘鉢舍那道とは當に異有りと言ふべきや、當に異無しと言ふべきや」と

(二) 世尊の正答　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に異有るに非ず、異無きに非ずと言ふべし。何が故に異有るに非ずとならば、(奢摩他は)毘鉢舍那所緣の境(が中)の(能緣の)心を以て所緣と爲るが故なり。何が故に異無きに非ずとならば、(毘鉢舍那所緣の境が中に於て)有分別の影像は、(奢摩他)所緣(の境)に非ざるが故なり」と。

第二目　心と影との一異を分別す

(一)* 定心所行の心と影との異不を分別す　(一)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、諸の毘鉢舍那三摩地所行の影像は、彼、此の心と當に異有りと言ふべきや、當に異無しと言ふべきや」と。(二)佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に異無しと言ふべし。(三)何を以ての故に、(四)彼の影像は唯是れ識なるに由るが故に、善男子、我が說く(所の)[一五]識の所緣は唯識の所現なるが故なり」と。(五)「世

【九】 以下を十二分教とて一切の經典を內容の上より十二種に分ちしものなり。謂く

(1)契經、梵に素呾纜(sūtra)、經典中直に法義を說ける長行の文なり。

(2)應頌、梵に祇．(geya)、前の長行の文に應じて重ねてその義を頌せるもの。因みに之が頌の字を大正本等には誦に作るも明本によりて之を訂正す。

(3)記別、梵に和伽羅(vyākaraṇa)、菩薩の死生の因果或は當成佛の事等を記すもの。

(4)諷誦・梵に伽陀(gāthā)、長行によらず直ちに偈頌を以て說くもの、從つて孤起頌とも言ふ。

(5)自說、梵に優陀那(udāna)、無問自說の略なり　問者無きに佛自ら說くもの。

(6)因緣、梵に尼陀那(nidāna)、佛の說法敎化の因緣或は衆生の見佛聞法の因緣を說くもの。

(7)譬喩、梵に阿波陀那(avadāna)、譬喩を以て說くもの、

(8)本事、梵に伊帝目多(itivṛttaka)、佛弟子の前世の事を說くもの。

(9)本生、梵に闍多伽(jātaka)、佛自身の前世の事を說くもの。

尊、若し彼の所行の影像、卽ち此の心と異有ること無くんば、云何んが[一六]此の心還つて此の心を見るや」と。(六)(1)善男子、此の中に[一七]少法として能く少法を見ること有ること無し。然るに卽ち此の心是の如く生ずる時、卽ち是の如き影像有つて顯現す。(2)善男子、善く瑩ける淸淨の鏡面に依つて、(本)[一八]質を以て緣と爲して還つて本質を見、而も我れ今影像を見ると謂ひ、及び(本)質を離れて別に所行の影像有つて顯現すと謂ふが如く、(3)是の如く心生ずる時、異有るに相似せる三摩地所行の影像顯現す」と。

(二)**散心所行の心と影との異不を分別す**　「世尊、若し諸の有情[一九]自性にして而も住し、色等を緣ずる(に其の)心の所行の影像は、彼、此の心と亦異無き耶」と。「善男子、亦異有ること無し。而るに諸の愚夫顚倒の覺に由つて、諸の影像に於て如實に唯是れ識(のみ)なりと知ること能はずして、顚倒の辨を作す」と。

第五項　止觀の單と双との修習を分別す

第一目　正しく單と双との修習を明す

(一)**一向に觀を修することを明す**　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、何に齊つてか、當に菩薩は一向に毘鉢舍那を修すと言ふべきや」と。佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、若し相續作意して唯心相を思惟するなり」と。

(二)**一向に止を修することを明す**　「世尊、何に齊つてか、當に菩薩は一向に奢摩他を修すと言ふべきや」と。「善男子、若し相續作意して唯[二〇]無間心を思惟するなり」と。

(三)**二種俱轉を明す**　「世尊、何に齊つてか、當に菩薩には奢摩他と毘鉢舍那と和合して俱に轉ずと言ふべきや」と。「善男子、若し[二一]正思惟する心一境性なり」と。

第二目　重ねて三種所緣の體を明す

(10)方廣、梵に毗佛略(vaipulya)、方正廣大の眞理を說くもの。唯大乘にありて小乘に通ぜず(異說あり)。

(11)希法、梵に阿浮達磨(adbhuta-dharma 阿毘達磨とも記す)、諸の辟聞・菩薩・如來の最極希有にして甚だ奇特なる法を說くもの。

(12)論議、梵に優婆提舍(upadeśa)、法理を論議決擇するもの。

【一〇】身輕安及び心輕安。麤重を遠離する事によりて得らるる身心の調暢安適の狀態。

【一一】三摩地(samādhi)、定の七名中の一。等持と譯す。心を一境に專注して平等に維持するものとの意なり。

【一二】所知の義。所觀の境なり。

【一三】忍、樂、慧、見、觀。忍とは忍可、樂とは愛樂、慧とは簡擇、見とは推求、觀とは觀察。この五を以て毘鉢舍那の多義を示すものにして、何れも義一名異にすぎざるなり。

【一四】これ止觀の體の同異に非ず。所行の境の同異なり。

※(一)定心所行の心影の異不を分別す

（一）**心相を明す**「世尊、云何んが心相なるや」と。「善男子、謂く三摩地所行の有分別の影像、毘鉢舍那の所緣なり」と。

（二）**無間心を明す**「世尊、云何んが無間心なるや」と。「善男子、謂く彼の影像を緣する心奢摩他の所緣なり」と。

（三）**心一境性を明す**「世尊、云何んが心一境性なるや」と。「善男子、謂く三摩地所行の影像は唯是れ其の識(のみ)なりと通達し、或は此れに通達し已つて、復(眞)如性を思惟するなり」と。

第六項　止觀の種類を分別す

第一目　觀の種類を分別す

（一）（一）**菩薩の請問**　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、毘鉢舍那に凡そ幾種有りや」と。

（二）***世尊の正答**　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「（一）善男子、略して[一三]三種有り。一には有相毘鉢舍那、二には尋求毘鉢舍那、三には伺察毘鉢舍那なり。（二）(1)云何んが有相毘鉢舍那なる。謂く純らに三摩地所行の有分別の影像を思惟する毘鉢舍那なり。(2)云何んが尋求毘鉢舍那なる。謂く慧に由るが故に、遍ねく彼彼の未だ善く解了せざる一切法の中に於て、善く(解)了せんが爲の故に作意し、思惟する毘鉢舍那なり。(3)云何んが伺察毘鉢舍那なる。謂く慧に由るが故に、遍ねく彼彼の已に善く解了せる一切法の中に於て、善く極解脱を證得せんが爲の故に作意し、思惟する毘鉢舍那なり」と。

第二目　止の種類を分別す

（一）（一）**菩薩の請問**　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の奢摩他に凡そ幾種有りや」と。

（二）**世尊の正答**　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、（一）即ち彼の無間心に隨ふに由るが故に、當に知るべし、此の中に亦三種有り。（二）復[一四]八種有り。謂く初靜慮、乃至非想非非想處に各一種の

（一）菩薩の請問
（二）世尊の略答
（三）菩薩の徵問
（四）世尊の應釋
（五）菩薩の重徵
（六）世尊の釋通　(1)法　(2)喩　(3)合

【一五】識の所緣云々。これ唯識建立の根本要文、妙瑜伽道の源流として、本經中特に重視せらるゝ一文なり。この中識所緣の識とは能緣の見分、所緣とは所對の相分。唯識所現の識とは能變の自體分、所現とは相見の二分は自體分より變現せられたるものなることを言ふ。以て知るべし。主觀の見分によりて緣ぜられたる客觀の相分は、決して心外の實法に非ずして、これ識の自體分より變現せられたる心内の假法なることを。

【一六】此の心還て云々。見らるゝ相分も見る見分も共にたゞこの心に外ならずんば、心が心を見る事となり、刀を以て刀を截り、眼を以て眼を見るが如き矛盾あるべし、これ如何ぞと問ふ。

【一七】少法として云々。如何に微塵程の少一物なりとも、實在的なる主觀客觀の關係に於て見る(實在視する)には非ずして、先天的なる唯識緣起法爾の道理として自然的に見。

奢摩他有るが故なり。(三)復四種有り、謂く[二四]慈悲喜捨の四無量の中に各一種の奢摩他有るが故なり」と。

第七項　依法、不依法の止觀を分別す

第一目　菩薩の請問

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、[二五]依法奢摩他毘鉢舍那と說き、復[二六]不依法奢摩他毘鉢舍那と說きたまへるが如き、云何んが依法奢摩他毘鉢舍那と名け、云何んが復不依法奢摩他毘鉢舍那と名くるや」と。

第二目　如來の正答

佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、

(一)*正しく二種を明す　「(一)善男子、若し諸の菩薩、先の所受所思の法相に隨つて、而して其の義に於て奢摩他毘鉢舍那を得るをば、依法奢摩他毘鉢舍那と名く。(二)(1)若し諸の菩薩、(先の)所受所思の法相を待たずして、但他の敎誡敎授に依るのみにて、而も其の義に於て奢摩他毘鉢舍那を得るあり。(2)謂く青瘀、及び膿爛等なり、或は一切の行は皆是れ無常なり、或は諸行は苦なり、或は一切の法は皆我有ること無し、或は復涅槃は畢竟寂靜なりと觀ずる、(3)是の如き等の類の奢摩他毘鉢舍那を、不依法奢摩他毘鉢舍那と名く。

(二)利鈍を分別す　法に依止して奢摩他毘鉢舍那を得るに由るが故に、我、隨法行の菩薩を施設す、是れ利根の性なり。法に依らずして奢摩他毘鉢舍那を得るに由るが故に、我、隨信行の菩薩を施設す、是れ鈍根の性なり」と。

第八項　法を緣ずる總別の止觀を分別す

第一目　總じて總別法を緣ずる止觀を分別す

ゆるなりとの意。

【二八】質。本質の事、鏡中に映りたる影像に對して、映されたる本體卽ち原質の事。

【二九】自性にして住す。定と相應せざる散心の狀態を言ふ。

【三〇】無間心。無間無斷の相續心。

【三一】正思惟する心一境性。正思惟を以て觀を示し、心一境性を以て止を示す。心一境性とは心を一處に定住する性の意にして定の七名中の一。

*(二)世尊の正答
- (一)敎を標して名を列す
- (二)別して三種を釋す
  - (1)有相毘鉢舍那
  - (2)尋求毘鉢舍那
  - (3)伺察毘鉢舍那

【三二】三種。(一)有相毘鉢舍那とは有分別の似法似義の境相を取る毘鉢舍那にして、これ分別觀なり。(二)尋求毘鉢舍那とはこれ尋求觀にして、麁相の慧を以て事理を尋求する毘鉢舍那なり。(三)伺察毘鉢舍那とはこれ伺察觀にして、細相の慧を以て事理を尋求する毘鉢舍那なり。

*(二)世尊の正答
- (一)三種奢摩他を明す
- (二)八種奢摩他を明す
- (三)四種奢摩他を明す

（一）**菩薩の請問**　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、別法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と説き、復總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と説きたまへるが如き、云何んが名けて別法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と爲し、云何んが復總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名くるや」と。

（二）* **世尊の正答**　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、(一)若し諸の菩薩各別の契經等の法を縁じて、所受・所思惟の如き法に於て、奢摩他毘鉢舍那を修するを、是を別法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名く。(二)(1)若し諸の菩薩即ち一切の契經等の法を縁じて、集めて一團・一積・一分、一聚と爲して作意し、思惟す。(2)此の一切法は[二八]眞如に隨順し、眞如に趣向し、眞如に臨入す。(又)菩提に隨順し、涅槃に隨順し、及び彼に趣向し、若しくは彼に臨入す。此の一切法は無量無數の善法を宣説すと是の如く思惟して、奢摩他毘鉢舍那を修するを、(3)是を總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名く」と。

第二目　別して總法を縁ずる差別を明す

（一）**菩薩の請問**　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、小總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那を説き、復大總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那を説き、又無量總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那を説きたまへるが如き、云何んが小總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名け、云何んが大總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名け、云何んが復無量總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名くるや」と。

（二）**世尊の正答**　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、(一)若し各別の契經、乃至各別の論議を縁じて、一團等と爲して作意し、思惟するを、當に知るべし、是を小總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名く。(二)若し乃至所受所思の契經等の法を縁じて、一團等と爲して作意し、思惟して各別を縁ずるに非ざるを、當に知るべし、是を大總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名く。(三)若し無量の如來の法教、無量の法句文字、(及び)[二九]無量の後後慧の照了する所を縁じて、一團等と爲して作意し、思惟して、乃至所受所思を縁ずるに非ざるを、當に知るべし、是を無量の總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那と名く」と。

【三三】　八種。欲・色・無色の三界を九地に分ち、欲界に一地、色・無色の二界にそれぞれ四地あり。この中欲界は散地なるが故に禪定無きも、後の二界八地に於てそれぞれ禪定と相應す。謂く初靜慮乃至第四靜慮(これ色界の四定)と空無邊處定・色無邊處定・無所有處定・非想非々想處定(これ無色界の四定)之なり。之を八種と言ふ。

【三四】　慈悲喜捨の四無量云々。よく樂を與ふるを慈と言ひ、よく苦を拔くを悲と言ひ、人の離苦得樂を見て喜悦するを喜と言ひ、如上の三に對して執着せざるを捨と言ふ。この四、普く無量の衆生を縁じ、無量の福を引き、無量の果を得るが故に四無量と言ひ、この各々の無量心に不散動の力あるによりて四禪定を數ふ。

【三五】　依法。利根の衆生の自ら法を分別了解して觀想を起すを言ひ、之を行ずるを隨法行と言ふ、

【三六】　不依法。鈍根の衆生の自ら法を分別する力能無く、他の教授教誡を信ずることによりて觀想を起すを言ひ、之を行ずるを隨信行と言ふ。

※(一)正しく二種を明す
┌(一)依法を明す
└(二)不依法を明す

第三目　總法を緣ずる諸緣を分別す

(一)菩薩の請問　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、菩薩は何に齊つてか、總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那を得ると名くるや」と。

(二)世尊の正答　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、五緣に由るが故に、當に知るべし、(其れを)得ると名く、(謂く)一には思惟する時に於て刹那刹那に一切[三〇]麁重の所依を融銷し、二には種種の(法佛等の)想を離れて[三一]樂法樂を得、三には十方無差別の相、無量の法光を解了す。四には(佛果の)所作成滿し、淨分に相應する無分別の相恒に現在前す、五には法身をして成滿を得しめんが爲の故に、後後の轉た勝妙なる因を攝受するをいふ」と。

第四目　位に約して得と通達とを分別す

(一)菩薩の請問　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、此の總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那は、當に何れ從りか名けて通達と爲し、何れ從りか名けて得と(爲すと)知るべきや」と。

(二)*世尊の正答　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、(一)初の[三三]極喜地從り名けて通達と爲し、第三の[三二]發光地從り乃ち名けて得と爲す。(二)善男子、初業の菩薩も亦是の中に於て隨學し、作意す。未だ歎ず可からずと雖も、(亦)應に懈廢すべからず」と。

第九項　有尋伺等を分別す

第一目　菩薩の請問

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の奢摩他毘鉢舍那を、云何んが[三四]有尋有伺三摩地と名け、云何んが無尋唯伺三摩地と名け、云何んが無尋無伺三摩地と名くるや」と。

第二目　世尊の正答

佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、

---

(1)標義
(2)示相
(3)總結

【二七】　青瘀及び膿爛等。五停心中の不淨觀の中、自身の不淨に就て九相あり。死、脹、青瘀、膿爛、壞、塗血、蟲噉、骨鎖、分散之なり。この中青瘀とは死屍の色の變ずるを言ひ、膿爛とは腐敗するを言ふ。

※(二)世尊の正答
(一)別法を緣ずる止觀を明す
(二)總法を緣ずる止觀を明す
(1)總じて集聚して思惟することを明す
(2)別して思惟の勝用を明す
(3)修相を以て得名を決す

【二八】　眞如に隨順し云々。行者所期の眞如(所證の理)、菩提(能證の智)、涅槃(寂滅の理)、轉依(所得の身)の四の一々に對して隨順・趣向・臨入の三相あり。この三相は止觀の麁より細に進む過程を示すものなり。

【二九】　無量の後々慧。能緣の智無量なれどもその中の最後の上々の智を意味す。

【三〇】　麁重の所依、二障の種子を麁重と言ひ、この種子を含藏する阿賴耶識を麁重の所依と言ふ。

(一)**第一釋**　「善男子、所取の如き尋伺の法相に於て、若し麁顯の領受觀察有る諸の奢摩他毘鉢舍那を、是を有尋伺三摩地と名く。若し彼の(法)相に於て麁顯の領受觀察無しと雖も、而も微細なる彼の[三五]光明の念の領受觀察有る諸の奢摩他毘鉢舍那を、是を無尋唯伺三摩地と名く。若し卽ち彼の一切の法相に於て、都て作意、領受、觀察無き諸の奢摩他毘鉢舍那を、是を無尋無伺三摩地と名く。

(二)**第二釋**　復次に善男子、若し尋求有る奢摩他毘鉢舍那を、是を有尋有伺三摩地と名け、若し伺察有る奢摩他毘鉢舍那を、是を無尋唯伺三摩地と名け、若し總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那を、是を無尋無伺三摩地と名く」と。

第十項　止擧捨の相を分別す

第一目　菩薩の請問

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、云何んが[三六]止相、云何んが[三七]擧相、云何んが[三八]捨相なるや」と。

第二目　世尊の正答

佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、若し心掉擧し、或は掉擧を恐るる時の諸の可厭の法の作意、及び彼の無間心の作意を、是を止相と名く。若し心沈沒し、或は沈沒を恐るる時の諸の可欣の法の作意、及び彼の心相の作意を、是を擧相と名く。若し一向正道に於て、或は一向觀道に於て、或は雙運轉道に於て、[三九]二の隨煩惱に染汚せらるる時の諸の無功用の作意、及び心[四〇]任運轉の中の所有の作意を、是を捨相と名く」と。

第十一項　知法、知義を分別す

第一目　所知の法と義とを明す

(一)**菩薩の請問**　慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆の

【三一】樂法樂。種々戲論の施設を遠離し、無分別智を證得して生ずる所の喜悅なり。

※(二)世尊の正答
┌(一)正しく所問に答ふ
└(二)初學を勸勵す

【三二】極喜地。これ十地中の初地にして、この位に於て初めて眞如に通達して、大歡喜を生ずるが故にこの名あり。

【三三】發光地。十地中の第三地にして、この位に於て定自在を得るによりて、無量の智光を發す所依となるが故にこの名あり。

【三四】有尋有伺三摩地等。所對の境を觀察する麁想を尋(求)と言ひ、その細想を伺(察)と言ふ。然して之等尋伺の有無によりて色・無色の上二界を分ちて三となし、之を三三摩地と言ふ。普通には之を以て定の高下を分別するも、今は然らずして觀上の麁細顯現の相を分別するものなり。

【三五】彼の光明の念。光明とは眞如無分別觀の功德を指し、念とは、前所說の總別の敎法を憶念する事を指す、故に光明の念とは無分別智相應の憶念を意味す。

【三六】止相。心を一境に定住して、之によりて掉擧(心の輕浮にして安靜ならざること)

[四一]知法知義とは、云何んが知法なる、云何んが知義なるや」と。

(二)*世尊の正答　佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「(一)(1)善男子、彼の諸の菩薩は五種の相に由つて法を了知す。(五種の相とは)一には[四二]名を知り、二には句を知り、三には文を知り、四には別を知り、五には總を知るなり。(2)(1)云何んが名と爲す、謂く一切染淨の法の中の所立の自性に於て、想を以て假りに施設するなり。(2)云何んが句と爲す、謂く卽ち彼の名の聚集する中に於て、能く隨つて諸の染淨の義を宣說する依持建立なり。(3)云何んが文と爲す、謂く卽ち彼の(名句の)二の依止する所の字なり。(4)云何んが彼に於て各別に了知する、謂く(彼の名句文の三)各別の所緣を作意するに由る。(5)云何んが彼に於て總合して了知する、謂く總合の所緣を作意するに由る。(3)是の如き一切(の名句文)を總略して一と爲して、名けて知法と爲し、是の如きを名けて菩薩の知法と爲す。(二)(1)(1)善男子、彼の諸の菩薩は[四三]十種の相に由つて義を了知す。(十種の相とは)一には[四四]盡所有性を知り、二には[四五]如所有性を知り、三には能取の義を知り、四には所取の義を知り、五には建立の義を知り、六には受用の義を知り、七には顚倒の義を知り、八には無(顚)倒の義を知り、九には雜染の義を知り、十には清淨の義を知るなり。(2)(イ)(イ)善男子、盡所有性とは、謂く諸の雜染(及び)清淨の法の中の所有の一切の品別の邊際、是を此の中の盡所有性と名く。(ロ)五數の蘊、六數の內處、六數の外處の如き是の如き一切なり。(ロ)(イ)如所有性とは、謂く卽ち一切の染淨の法の中の所有の眞如、是を此の中の如所有性と名く。(ロ)(A)此れに復七種有り。一には[四六]流轉眞如、謂く一切の行の[四七]無先後の(實)性なり。二には[四八]相眞如、謂く一切法の補特伽羅無我の(實)性及び法無我の(實)性なり。三には[四九]了別眞如、謂く一切の行唯是れ識なる(實)性なり。四には安立[五〇]眞如、謂く我が說く所の諸の苦聖諦なり。五には邪行眞如、謂く我が說く所の諸の集聖諦なり。六には清淨眞如、謂く我が說く所の諸の滅聖諦なり。七には正行眞如、謂く我が說く所の諸の道聖諦なり。(3)當に知るべし、此の中

を離れて、寂靜ならしむるものにして奢摩他道に當る。

【三七】擧相。心の作用を增長ならしめ、之によりて沈沒(心の惛昧なること)を離れしむるものにして、毘鉢舍那道に當る。

【三八】捨相。梵に優畢叉(upekṣā)。掉擧に非ず沈沒に非ざる心の中庸たる狀態なり。

【三九】二の隨煩惱。掉擧と沈沒(惛沈)の二なり。

【四〇】任運轉。任運とは特に造作加行を加へず自然なるを言ひ、轉とは轉起の略にして生起するを言ふ。

【四一】知法知義。法とは法體にして、普通任持自性と軌生物解との二義を以て解釋せらるゝ如く、各々その自性を維持して他物に混亂せず、從つて人をしてそれに對する知覺を生ぜしむるものとの意なり。知法とはこの法を了知する能詮の言詮等なり。次に義とは義用等と解釋せられ、法の上に具する諸種の依屬的性質を言ふ。この義を了知するを知義と言ふ。

*(二)世尊の正答
- (一)知法を明す
  - (1)總標して名を列す
  - (2)問答別釋す

流轉眞如、安立眞如、邪行眞如に由るが故に、[五一]一切の有情平等平等なり。相眞如、了別眞如に由るが故に、一切の諸法平等平等なり。清淨眞如に由るが故に、一切の聲聞の菩提と獨覺の菩提と(及び)阿耨多羅三藐三菩提と平等平等なり。正行眞如に由るが故に、正法を聽聞し、總境界を緣ずる勝れたる奢摩他毘鉢舍那に攝受せらるる慧平等平等なり。(ハ)能取の義とは、謂く內(界)の五色(根)處、若しくは心意識及び諸の心(所)法なり。(ニ)所取の義とは、謂く外(界)の六處なり。又[五二]能取の義も亦所取の義なり。(ホ)(イ)建立の義とは、謂く[五三]器世界なり。中に於て一切の諸の有情界を建立することを得可し、(ロ)謂く(A)一村田、若しくは百村田、若しくは千村田、若しくは百千村田、(B)或は一大地の海の邊際に至る、此の百、此の千、若しくは此の百千、(C)或は一の[五四]贍部州、此の百、此の千、若しくは此の百千、(D)或は一の四大州、此の百、此の千、若しくは此の百千、(E)或は一の[五五]小千世界、此の百、此の千、若しくは此の百千、(F)或は一の中千世界、此の百、此の千、若しくは此の百千、(G)或は一の三千大千世界、(A)此の百、此の千、若しくは此の百千、或は(B)此の拘胝、此の百拘胝、此の千拘胝、此の百千拘胝、(C)或は此の無數、此の百無數、此の千無數、此の百千無數、(D)或は三千大千世界の無數百千の微塵の量等、十方面に於ける無量無數の諸の器世界なり。(ヘ)受用の義とは、謂く我が說く所の諸の有情類は受用の爲故に資具を攝受す。(ト)顚倒の義とは、謂く卽ち彼の能取等の義に於て無常を常と計する想倒・心倒・見倒・(及び)苦を計して樂と爲し、不淨を淨と計し、無我を我と計する想倒・心倒・見倒なり。(チ)無(顚)倒の義とは、上と相違し、能く彼を對治す(るものなり)、應に其の相を知るべし。(リ)(イ)雜染の義とは、謂く三界の中の三種の雜染なり、(ロ)一には煩惱雜染、二には業雜染、三には生雜染なり。(ヌ)清淨の義とは、謂く卽是の如き三種の雜染(に於ける)所有の[五六]離繫の菩提分法なり。(3)善男子、是の如き十種は、當に知るべし、普ねく一切の諸義を攝す。(2)(1)復次に善男子、彼の諸の菩薩は能く五種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。(2)何等か

(1)名を釋す
(2)句を釋す
(3)文を釋す
(4)別を釋す
(5)總を釋す
(3)總じて知法を結す
(二)義を明す
(1)十種知義を明す
(1)總標して名を列ぬ
(2)十種の相を示す
(イ)盡所有性
(イ)正釋
(ロ)類釋
(ロ)如所有性
(イ)總じて眞如を體とする事を明す
(ロ)別して七種眞如を明す
(A)名を出して相を示す
(B)四平等に歸す
(ハ)能取の義
(ニ)所取の義
(ホ)建立の義
(イ)總じて建立の義を示す
(ロ)別して器世界の量を示す
(A)村田量
(B)大地量

五義なる、（謂く）一には遍知の事、二には遍知の義、三には遍知の因、四には遍知の果を得る（こと）、五には此れに於て覺了せしむる（こと）なり。(3)(イ)(イ)善男子、此の中遍知の事とは當に知るべし、即ち是れ一切の所知なり。(ロ)謂く或は諸の（五）蘊或は諸の內（界）の（六根）處、或は諸の外（界）の（六境）處、是の如き一切なり。(ロ)(イ)遍知の義とは乃至所有の品類差別の所應知の境なり。(ロ)謂く世俗の故に、或は勝義の故に、或は功德の故に、或は過失の故に、緣の故に、世の故に、或は生、或は住、或は壞の相の故に、或は病等の如くなる故に、或は苦集等の故に、或は眞如、實際、法界等の故に、或は廣略の故に、或は一向記の故に、或は分別記の故に、或は反問記の故に、或は置記の故に、或は隱密の故に、或は顯了の故に、(ハ)是の如き等の類、當に知るべし、一切を遍知の義と名く。(ハ)(イ)遍知の因と言ふは當に知るべし、即ち是れ能く前の二を取る菩提分法なり。(ロ)所謂念住、或は正斷等なり。(ニ)(イ)遍知の果を得る（こと）とは、謂く貪恚癡を永斷する毘奈耶、及び貪恚癡の一切を永斷する諸の沙門果、(ロ)及び我が所說の聲聞と如來と若しくは共・不共と世出世間との所有の功德を、彼に於て作證するなり。(ホ)此れに於て覺了せしむ（ること）とは、謂く即ち此の作證の法の中に於て、諸の解脫智（を以て）廣く他の爲に說き、宣揚し、開示するなり。(4)善男子、是の如きの五義は當に知るべし、普ねく一切の諸義を攝す。(3)(1)復次に善男子、彼の諸の菩薩は能く四種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。(2)何等か四義なる、一には心執受の義、二には領納の義、三には了別の義、四には雜染淸淨の義なり。(3)善男子、是の如きの四義は當に知るべし、普ねく一切の諸義を攝す。(4)(1)復次に善男子、彼の諸の菩薩は能く三種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。(2)何等か三義なる、一には文の義、二には義の義、三には界の義なり。(3)(イ)善男子、文の義と言ふは、謂く名身等なり。(ロ)(イ)義の義とは當に知るべし、復十種有り。(ロ)（謂く）一には眞實相、二には遍知相、三には永斷相、四には作證相、五には修習相、六には即

（C）贍部洲量
（D）四洲量
（E）小千界量
（F）中千界量
（G）大千界量
（A）百千量
（B）拘胝量
（C）無數量
（D）微塵量
へ）受用の義
ト）顚倒の義
（チ）無倒の義
（リ）雜染の義
（イ）總標
（ロ）列名
（ヌ）淸淨の義
（3）總じて十義を結す
(2)五種知義を明す
（1）總じて五種を標す
（2）徵起して名を列す
（3）次第に別釋す
ト）遍知の事
（イ）正釋
（ロ）類釋
ロ）遍知の義
（イ）正釋
（ロ）類釋
（ハ）總結

ち彼の眞實相等(の上の五相)の品(類)差別の相、七には[七二]所依能依相屬相、八には卽ち遍知等の障礙法の相、九には卽ち彼の隨順法の相、十には不遍知等及び遍知等の[七三]過患功德の相なり。(ハ)(イ)界の義と言ふは、謂く五種の界なり。一には器世界、二には有情界、三には[七四]法界、四には[七五]所調伏界、五には[七六]調伏方便界なり。(ロ)善男子、是の如きの五義は當に知るべし、普ねく一切の諸義を攝す。」と。

第二目　能知の差別を明す

(一)三慧の差別を明す　(一)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、若しくは[七七]聞所成の慧、其の義を了知し、若しくは思所成の慧、其の義を了知し、若しくは奢摩他毘鉢舍那の修所成の慧、其の義を了知す。此れ何の差別かある」と。(二)佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、(イ)聞所成の慧は文に依止し、但其の說の如くなるのみにして、[七八]未だ意趣を善くせず、未だ現在前せず、解脫に隨順すれども、未だ解脫を成ずる義を領受すること能はず。(ロ)思所成の慧も亦文に依る、唯說の如くなるのみならず、能く意趣を善くすれども、未だ現在前せず、轉た解脫に順ずれども、未だ解脫を成ずる義を領受すること能はず。(ハ)若し諸の菩薩の修所成の慧は亦は文に依り、亦は文に依らず、亦は其の說の如く、亦は(其の)說の如くならず、能く意趣を善くし、[七九]所知の事の同分の三摩地所行の影像現前し、極めて解脫に順じ、已に能く解脫を成ずる義を領受す。(2)善男子、是を三種の知義の差別と名く」と。

(二)*智と見との差別を明す　(一)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆の、知法知義(に於て)、云何んが智と爲し、云何んが見と爲すや」と。(二)佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「(1)善男子、我、無量の(法)門(を以て)、智と見との二種の差別を宣說せり。今當に汝が爲に略して其の相を說くべし。(2)若し總法を緣じて奢摩他毘鉢舍那を修する所有の妙慧を、是を

- (ハ)遍知の因
  - (イ)正釋
  - (ロ)類釋
- (ニ)遍知の果
  - (イ)無爲の果を釋す
  - (ロ)有爲の果を釋す
- (ホ)覺了の義
- (4)總じて五義を結す
- (3)四種知義を明す
  - (1)四種の義を標す
  - (2)徵起して名を列す
  - (3)總じて四義を結す
- (4)三種知義を明す
  - (1)總じて三種を標す
  - (2)徵起して名を列す
  - (3)次第に別釋す
    - (イ)文の義
    - ロ)義の義
    - (ハ)界の義
      - (イ)總標して名を列す
      - (ロ)總じて三義を結す
  - (イ)總標
  - (ロ)別名

【四二】名を知り云々。名句文とは名とは花・鳥等と言ふ如く、物の自體を詮はすものを言ひ、句とは花は美くし、鳥は速し等との如く、名を數但

名けて智と爲し、若し別法を緣じて奢摩他毘鉢舍那を修する所有の妙慧を、是を名けて見と爲す」と。

第三目　諸相を除遣することを明す

(一)*眞如に約して示す　(一)(1)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「(1)世尊、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆は、何の作意に由つて、(2)何等をか(3)云何んが諸相を除遣するや」と。(2)佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「(1)善男子、[八〇]眞如作意に由つて、(2)諸の法[八一]相及與び義相を除遣す。(3)(イ)若し其の名及び名の自性に於て無所得なる時、亦[八二]彼の所依の相をも觀ぜず、是の如く除遣す。(ロ)其の名に於けるが如く、句に於てし、文に於てし、(又)一切の義に於てするも、當に知るべし、亦爾り。乃至界及び界の自性に於て無所得なる時、亦彼の所依の相をも觀ぜず、是の如く除遣す」と。「(二)(1)世尊、諸の了知する所の眞如の義相、此の眞如の相をも亦遣る可きや不や」と。「(2)(1)善男子、了知する所の眞如の義の中に於て、都て相有ること無く、亦所得無し、當に何の所遣かあるべき。(2)善男子、我說かく、眞如の義を了知する時、能く一切の法義の相を伏す。此の了達は餘の能く伏する所に非ず」と。「(三)(1)世尊、世尊の說きたまへるが如き[八三]濁水器の喩、不淨鏡の喩、撓泉池の喩(に於て)は、自の面影の相を觀察するに任へず(と爲す)、(然れば)若し堪任る者(有れば)上と相違す。是の如く若し善く心を修せざること有らば、則ち如實に所有の眞如を觀察するに堪任ず、若し善く心を修すれば觀察するに堪任と。此れは何等の能觀察の心を說き、何の眞如に依つて而も是の說を作したまふや」と。「(2)善男子、此れは三種の能觀察の心を說く。謂く聞所成の能觀察の心、若しくは思所成の能觀察の心、若しくは修所成の能觀察の心なり。了別眞如に依つて是の如きの說を作せり」と。

(二)*諸空に約して示す　「(一)(1)世尊、是の如く法義を了知する菩薩、諸相を遣らんが爲に加行を勤修す。幾種の相有つてか除遣す可きこと難きや。(而して)誰か能く此れを除遣するや」と。(2)(1)善男

集めて美くしからざるもの或は速からざるものに非ず等と、意義の差別を詮はすものを言ひ、字とはイ・ロ・ハ等との如く、未だ意義を有せずして、名と句との所依となるものを言ふ。

【四三】この十種の相を五對に分つ事を得。謂く、第一と第二は事理一對、第三と第四は能所取一對、第五と第六は器界資具一對、第七と第八は顚倒無倒一對、第九と第十は染淨一對之なり。

【四四】盡所有性。一切所有の事法を意味す。

【四五】如所有性。一切所有の眞如性なり。

【四六】流轉眞如。無始無終に流轉する有爲諸行の實性たる眞如なり。

【四七】無先後の性。有爲法は永久に前滅後生するが故に決定的の前後無きなり。

【四八】相眞如。諸法の眞實相たる二無我によりて顯はさるる眞如。

【四九】了別眞如。了別とは識の作用なり。萬法唯識の實性たる眞如を言ふ。

【五〇】安立眞如等。以下の四は次第に四聖諦の實性たる眞如なり。所謂安立とはこれ小觀心の前に一味の眞理を安立し施設するの義なれば、四聖

子、十種の相有り、(而して)[八四]空(觀)能く除遣す。(ニ)何等をか十と爲す。(イ)(イ)一には法義を了知するが故に、種種の文字の相有り、(ロ)此れは[八五]一切法空に由つて、能く正しく除遣す。(ロ)(イ)二には安立眞如の義を了知するが故に、生滅住異の性、相續隨轉の相有り、(ロ)此れは[八六]相空及び[八七]無先後空に由つて、能く正しく除遣す。(ハ)(イ)三には[八八]能取の義を了知するが故に、顧戀身の相及び我慢の相有り、(ロ)此れは[八九]內空及び無所得空に由つて、能く正しく除遣す。(ニ)(イ)四には[九〇]所取の義を了知するが故に、顧戀財の相有り、(ロ)此れは[九一]外空に由つて、能く正しく除遣す。(ホ)(イ)五には受用の義、[九二]男女の承事と資具の相應とを了知するが故に、內(の六根處)の安樂の相、外(の六境處)の淨妙の相有り、(ロ)此れは[九三]內外空及び[九四]本性空に由つて、能く正しく除遣す。(ヘ)(イ)六には建立の義を了知するが故に、無量の相有り、(ロ)此れは[九五]大空に由つて、能く正しく除遣す。(ト)(イ)七には[九六]無色を了知するが故に、內の寂靜解脫の相有り、(ロ)此れは有爲空に由つて、能く正しく除遣す。(チ)(イ)八には相眞如の義を了知するが故に、補特伽羅無我の相、法無我の相、若しくは唯識の相、及び勝義の相有り、(ロ)此れは[九七]畢竟空、[九八]無性空、[九九]無性自性空、及び[一〇〇]勝義空に由つて、能く正しく除遣す。(リ)(イ)九には淸淨眞如の義を了知するに由るが故に、無爲の相、無變異の相有り、(ロ)此れは無爲空と[一〇一]無變異空とに由つて、能く正しく除遣す。(ヌ)(イ)十には卽ち彼の相の對治の空性に於て作意し、思惟するが故に、空性の相有り、(ロ)此れは[一〇二]空空に由つて能く正しく除遣す」と。「(ル)(イ)世尊、是の如き十種の相を除遣する時、何等をか除遣し、何等の相從りか而も解脫を得るや」と。「(ヲ)(イ)善男子、三摩地所行の影像の相を除遣し、雜染縛の相從り、而も解脫を得て、[一〇三]彼をも亦除遣す。(ロ)善男子、當に知るべし、勝れたるに就て是の如きの空(觀)、是の如きの相を(對)治すと說く。而も一一(の空觀)一切の相を(對)治せざるには非ず。譬へば無明は乃至老死の諸の雜染法を生ずること能はざるに非ざれども、勝れたるに就て但能く行をのみ生ずと說くが如し。是れ諸行の親近の緣なるに由るが故なり。此の中の道理も

諦に通じてこの名を附すべき所なるも、苦諦は最初にあるが故に總名を以て之に名くるなり。邪行眞如とは集諦の實性たる眞如なり。邪行とは無漏道諦の正行に對して煩惱業の集諦を言ふ。淸淨眞如とは滅諦の實性たる眞如なり。淸淨とは無漏還滅の果法を指す。正行眞如とは道諦の實性なる眞如なり。正行とは還滅の因を修習することを意味す。

【五一】　一切の有情平等平等。一切の有情等しくこの三眞如を有する點より見て平等なり。

【五二】　能取の義も亦云々。能緣の心法も他の識が之を緣ずる時には所緣となることを言ふ。

【五三】　器世界・有情界。人畜等の一切の有情を有情界を言ひ、有情のよつて以て住する山川國土草木等の一切を器世界と言ふ。これ有情を容るゝ器なればなり。

【五四】　贍部洲・四大洲。須彌の四方に各々一の大洲あり、之を四大洲と言ひ、その中南にあるを南贍部洲(梵語(Jambu-dvīpa.)又は南閻浮提とも譯す)と言ひ、これ吾人の現住する所なり。

【五五】　小千界等の三。印度古代の宇宙觀に於て、須彌山を中心として七山八海を交互に

當に知るべし、亦爾なり」と。
(三)(1)爾の時慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「(イ)世尊、此の中何等の空か是れ一〇四總空の性相なるや。(ロ)若し諸の菩薩是を了知し已らば、失壞有ること無く、空の性相に於て增上慢を離れん」と。(2)爾の時世尊、慈氏菩薩を歎じて曰はく、(イ)(1)(イ)「善い哉、善い哉、善男子、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問し、諸の菩薩をして空の性相に於て、失壞有ること無からしむ。(ロ)何を以ての故に、善男子、若し諸の菩薩空の性相に於て失壞すること有らば、便ち一切の大乘を失壞すと爲せばなり。(ロ)是の故に汝應に諦に聽き、諦に聽くべし。當に汝が爲に總空の性相を說くべし。(2)善男子、若し一〇五依他起相及び圓成實相の中の一切品類の雜染清淨に於て、遍計所執相の畢竟じて遠離せる性、及び此の中に於て都て無所得なる、是の如きを名けて大乘の中に於ける總空の性相と爲す」と。

第十二項　勝三摩地を攝することを明す

第一目　菩薩の請問

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、此の奢摩他毘鉢舍那は、能く幾種の勝三摩地を攝するや」と。

第二目　世尊の正答

佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、我が所說の如く無量の聲聞、菩薩、(及び)如來に無量種の勝三摩地有り。當に知るべし、一切皆此の所攝なり」と。

第十三項　止觀の因果業を明す

第一目　止觀の因を明す

「世尊、此の奢摩他、毘鉢舍那は、何を以てか因と爲すや」と。「善男子、清淨の一〇六尸羅清淨の聞思所成の正見を以て其の因と爲す」と。

繞らし、更に鐵圍山を以て外廓となす一つの世界を一須彌界と言ひ、之を千合したるを小千世界と言ひ、之を更に千合したるを中千世界、之を更に千合したるを大千世界と言ふ。故に大千世界の數量は一〇〇〇〇〇〇〇〇〇なり。之に三千の字を冠するは三種の千より成れることを示はす。

【五六】 離染の菩提分法。煩惱の繫縛を離るゝ爲の念住等の卅七道品なり。菩提分法とは分とは因の義これ菩提を得る因なるが故に。或は支分の義、これ卅七の支分より成れるが故に。

【五七】 以下十七因を以て差別を示す。「……故に」を數へて知るべし。

【五八】 緣。因緣、增上緣、等無間緣。所緣緣の四緣なり。

【五九】 世。過・現・未の三世なり。

【六〇】 或は生等。生住滅の有爲の三相なり。

【六一】 病等。病・癰・箭・惱害の四なり。これ四種厭背想とて人生に於ける四種の苦惱を意味す。

【六二】 苦集等。四諦なり。

【六三】 眞如・實際・法界等。これ眞如の衆名なり。等とは空・無我・無相等を等取す。

【六四】 廣略。佛の廣略の說法

第二目 *止觀の果を明す

「(二)世尊、此の奢摩他毘鉢舍那は、何を以て果と爲すや」と。「(二)(1)善男子、善清淨の戒、[一〇七](善)清淨の心、(及び)[一〇八]善清淨の慧を以て其の果と爲す。(2)復次に善男子、一切の聲聞、及び如來等の所有の世間及び出世間の一切の善法は、當に知るべし、皆是れ此の奢摩他毘鉢舍那所得の果なり」と。

第三目 止觀の業を明す

「世尊、此の奢摩他毘鉢舍那は、能く何の[一〇九]業をか作すや」と。「善男子、此れは能く二縛を解脫するを(以て)業と爲す、所謂相縛及び麁重縛なり」と。

第十四項 止觀の諸障差別を明す

第一目 止觀を障ゆる繫と蓋とを分別す

(一)五種の繫を分別す 「世尊、佛の所說の如き五種の繫(縛)の中に(於て)、幾ばくか是れ奢摩他の障、幾ばくか是れ毘鉢舍那の障、幾ばくか是れ倶の障なるや」と。「善男子、身と財とを顧戀するは、是れ奢摩他の障なり。[一一〇]諸の聖教に於て欲するに隨ふことを得ざるは、是れ毘鉢舍那の障なり。相雜住することを樂むと、少(善根)に於て喜足するとは、當に知るべし、倶の障なり。第一に由るが故に、造修すること能はず。第二に由るが故に、所修の加行究竟に到らざるなり」と。

(二)*五種の蓋を分別す 「(一)(1)世尊、[一一一]五蓋の中に於て、幾ばくか是れ奢摩他の障、幾ばくか是れ毘鉢舍那の障、幾ばくか是れ倶の障なるや」と。「(2)善男子、掉擧と惡作とは是れ奢摩他の障なり。惛沈と睡眠と疑とは是れ毘鉢舍那の障なり、貪欲と瞋恚とは當に知るべし、倶の障なり」と。「(二)(1)(1)世尊、何に齊つてか奢摩他道の圓滿清淨を得ると名くるや」と。「(2)善男子、乃し所有の惛沈と睡眠とに至るまでも正しく善く除遣す、是に齊つて奢摩他道の圓滿清淨を得ると名く」と。「(2)(1)世尊、何に齊つてか毘鉢舍那道の圓滿清淨を得ると名くるや」と。「(2)善男子、乃し所有の掉擧と惡作とに至るま

なり。

【六五】一向記等。之を四記と言ひ、他よりの問に對する四種の答法なり。一に一向記とは「一切有情は皆死すべきや否や」の問に對しては一向に「然り死すべし」と記すが如し。二に分別記とは「死する者は皆生ずべきや否や」の問に對しては「煩惱ある者は當に生じ無き者は當に生ぜず」と煩惱の有無を分別して記すが如し。三に反問記とは「人は勝となさんか劣となさんか」との間に對しては「何れの所に比せん」と比較の對象を反問して記すが如し。四に置記とは捨置記の略にて「石女の兒は白きや黑きや」との間に對しては捨置して記さざるが如し。

【六六】毘奈耶(Vinaya)。滅或は調伏と譯す。輕重の罪過を滅し、三業の所作を調和制伏するの義。三藏中の律藏なり。

【六七】沙門果。沙門(Śramaṇa)の道を修して得る所の四果なり。一に預流果とは三界の見惑を斷じて、初めて聖道の法流に入る位を言ひ、二に一來果とは欲界九品の思惑中前六品を斷じて後三品を殘せるが故に、人天の間を一往來すべき位を言ひ、三に不還果とは更に後三品をも斷じて、

でも正しく善く除遣す、是に齊つて毘鉢舍那道の圓滿淸淨を得ると名く」と。

第二目　心散動法を分別す

(一)菩薩の請問　「世尊、若し諸の菩薩は、奢摩他毘鉢舍那現在前する時に於て、應に幾種の心散動法を知るべきや」と。

(二)*世尊の正答　「(一)善男子、應に知るべし、五種あり。一には作意散動、二には外心散動、三には內心散動、四には相散動、五には麁重散動なり。(二)(1)善男子、若し諸の菩薩大乘相應の作意を捨て、聲聞獨覺相應の諸の作意の中に墮在するあり、當に知るべし、是を作意散動と名く。(2)若し其の外の[二二]五種の妙欲の諸の雜亂相の所有の尋思の隨煩惱の中に於て、及び其の外の所緣の境の中に於て、心を縱にして流散するあり、當に知るべし、是を外心散動と名く。(3)若し惛忱及以び睡眠に由り、或は沈沒に由り、或は[二三]愛味三摩鉢底に由り、或は隨一の三摩鉢底の諸の隨煩惱に染汚せらるるに由るあり、當に知るべし、是を內心散動と名く。(4)若し外相に依つて內の[二四]等持所行の諸相に於て、作意し、思惟するを相散動と名く。(5)若し內の作意を緣と爲して、所有の諸受を生起し、麁重の身に由つて我を計し、慢を起すあり、當に知るべし、是を麁重散動と名く」と。

第三目　所治の十一障を分別す

(一)菩薩の請問　「世尊、此の奢摩他毘鉢舍那は、初の菩薩地從り乃至如來地に(於て)、能く何の障をか對治するや」と。

(二)*世尊の正答　「(一)[二五]善男子、此の奢摩他毘鉢舍那は初地の中に於て、惡趣の煩惱と業と生との雜染障を對治し、第二地の中にては、微細の誤犯現行する障を對治し、第三地の中にては、欲貪の障を對治し、第四地の中にては、定愛及び法愛の障を對治し、第五地の中にては、生死涅槃を一向に背趣する障を對治し、第六地の中にては、相多く現行する障を對治し、第七地の中にては、細相現行

最早欲界に還來せざる位を言ひ、四に阿羅漢果とは更に色・無色の上二界の一切の思惑を斷盡せる、聲聞乘の極位を言ふ。

【六八】一には心執受の義云々。(一)一心執受とは心とは阿賴耶識。この阿羅耶識が執受する所の五根卽ち身體を指して心執受と言ふ。(二)領納とは苦樂の感情を領受し納得することにてこれ受の心所なり。(三)了別とはこれ八識心王なり。(四)雜染淸淨とはこれ染淨一切の諸法なり。この四は序の如く身受心法の四念住の境なり。

【六九】名身等。これ能詮の名身・句身・文身なり。身とは積集の義にて、名句文の各々聚りて自體を形成することを指す。或はこれ有體の義にて、名等の三各々自體有る事を指す。

【七〇】義の義。所詮の義理の差別なり。

【七一】偏知の相等。之等の四は序の如く苦集滅道の四諦なり。(前既に說くが如し)

【七二】所依能依相屬相。大種と所造の色。五根と五識、能詮と所詮。之等の二者所依となり能依となりて互に繫屬して離れざるを言ふ。

【七三】過患功德。下遍知等は煩の過患遍知等は智慧の功德

する障を對治し、第八地の中にては、無相に於て功用を作し、及び有相に於て自在を得ざる障を對治し、第九地の中にては、一切種の善巧なる言辭に於て自在を得ざる障を對治し、第十地の中にては、圓滿法身を證得するを得ざる障を對治す。(二)(1)善男子、此の奢摩他毘鉢舍那は、如來地に於て、極微細、最極微細なる煩惱障及び所知障を對治す。(2)能く是の如き(二)障を永害するに由るが故に、究竟して著無き(法空觀)と礙無き(人空觀)との一切(二空)の智見を證得し、所作成滿の所緣　依つて、最極淸淨の法身を建立す」と。

第十五項　勤修して菩提を證することを明す

第一目　菩薩の請問

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、云何んが菩薩は奢摩他毘鉢舍那に依つて、勤めて修行するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を證得するや」と。

第二目　世尊の正答

(一)* 正明　(二)(1)佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「(1)(イ)善男子、若し諸の菩薩已に奢摩他毘鉢舍那を得て、二六七眞如に依つて、所聞所思の如き法中に於て、勝定の心に由つて、善く審定せる、善く思量せる、善く安立せる眞如性の中に於て、内に正しく思惟す。(ロ)(イ)彼、眞如に於て正しく思惟するが故に、心は一切の細相の現行に於て、尙能く棄捨す。何に況んや麁相をや。(ロ)善男子、細相と言ふは、(A)謂く二七心二八所執受の相、或は領納の相、或は了別の相、或は雜染淸淨の相、(B)或は二九內相、或は外相、或は內外相、(C)或は我當に一切の有情を利することを修行すべしと謂ふの相、三〇(D)或は正智の相、或は眞如の相、(E)或は苦集滅道の相、(F)或は有爲の相、或は無爲の相、(G)或は有常の相、或は無常の相、(H)三一或は苦有變異性の相、或は苦無變異性の相、三二(I)或は有爲異相の相、或は有爲同相の相、三三(J)或は一切は是れ一切なりと知り已つて、一切を有するの相、(K)或は補特伽羅無我の相、或は法無我の相な

なり。

【七四】法界。梵に達磨馱都(dharma-dhātu)と言ふ。法とは諸法、界とは差別の義。各々自體ありて互に差別せる一切萬有を總攝して法界と言ふ。

【七五】所調伏界。佛・菩薩によりて調伏せらるゝ有情に上中下の機根差別せるを言ふ。

【七六】調伏方便界。佛・菩薩が所化の有情を調伏するに當りて隱密・顯了・攝受・折伏等の諸種の方便を施設し給ふを言ふ。

*(一)三慧の差別を明す
- (一)菩薩の請問
- (二)世尊の正答
  - (1)正示
    - (1)聞慧
    - (2)思慧
    - (3)修慧
  - (2)結義

【七七】聞所成の慧等。經教を見聞するによりて生ぜし智慧を聞所成の慧と言ひ、理を思惟するによりて生ぜし智慧を思所成の慧と言ひ、禪定を修するによりて生ぜし智慧を修所成の慧と言ふ。この三を三慧と言ひ、その中前二は散慧にしてよく修慧を生ずる緣となり、修慧は定慧にしてよく斷惑證理の力能を有す。

【七八】未だ現在前せず。これ後の修慧の場合より推すに

り。彼、現行するに於て(眞如觀の)心能く棄捨す。(ハ)彼、既に多く是の如きの行に住するが故に、時時の間に於て、其の一切の繫蓋散動に從つて善く心を修治す。(2)(イ)是從り已後、七眞如に於て七各別なる自內所證の一二四通達智生ずること有り、(是を)名けて一二五見道と爲す。(ロ)(イ)此れを得るに由るが故に、菩薩の一二六正性離生に入り、如來家に生じ、初地を證得すと名く。(ロ)又能く此の地の勝德を受用す。彼、先の時に於て奢摩他毘鉢舍那を得たるに由るが故に、已に二種の所緣を得たり。謂く有分別影像の所緣、及び無分別影像の所緣なり。彼、今時に於て見道を得るが故に、更に事邊際の所緣を證得す。(3)復後後の一切地の中に於て一二七修道を進修す。卽ち是の如き三種の所緣に於て、作意し、思惟す。(2)(1)譬へば人有つて其の細楔を以て麁楔を出すが如く、是の如く菩薩は、此の楔を以て楔を出す方便に依つて內相を遣るが故に、一切の雜染分に隨順する相を皆悉く除遣す。相を除遣するが故に、麁重をも亦遣る。(2)一切の相と麁重とを永害するが故に、漸次に彼の後後の地の中に於て、煉金法の如く、其の心を陶煉し、(三)乃至阿耨多羅三藐三菩提を證得し、又所作成滿の所緣を得るなり。

(二) **結義**　善男子、是の如く菩薩は內の止觀に於て正しく修行するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を證得す」と。

第十六項　威德を引發することを分別す

第一目　菩薩の請問

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、云何んが修行して菩薩の廣大なる威德を引發するや」と。

第二目　世尊の正答

(一) **總標して名を列す**　「善男子、若し諸の菩薩善く六處を知れば、便ち能く菩薩の所有の廣大なる威德を引發す。(六處とは)一には善く心生を知り、二には善く心住を知り、三には善く心出を知り、

「未だ所知の事の同分三摩地所行の影像現在前せず」の略なり。(次の思慧の場合亦同じ)

【七九】 所知の事の同分三摩地云々。同分とは同一の義。勝れたる定を相應することによりて、所知の所緣の境界と同一の影像が現起してその眞相を認識すること。これ理智冥合の境界なり。

※(一)眞如に約して示す
- (一)正しく諸相を除遣する三義を示す。
  - (1)菩薩の請問
    - (1)能除の作意を問ふ
    - (2)所除の法を問ふ
    - (3)除遣の儀式を問ふ
  - (2)世尊の正答
    - (1)能除の作意を答ふ
    - (2)所除の法を答ふ
    - (3)除遣の儀式を答ふ
      - (イ)名に約して答ふ
      - (ロ)句等を例釋す
- (二)眞如相も遣るべきや否やを分別す。
  - (1)菩薩の請問
  - (2)世尊の正答
    - (1)所遣に非ることを示す
    - (2)能伏の法無きことを示す
- (三)餘處の異文を通ず。

四には善く心增を知り、五には善く心滅を知り、六には善く方便を知るなり。

(二)* 次第に別釋す　(一)(1)云何んが善く心生を知る、(2)(イ)謂く如實に[一二八]十六行心生起の差別を知る、是を善く心生を知ると名く。(ロ)十六行心生起の差別とは、一には[一二九]不可覺知堅住器の識生ず、謂く阿陀那識なり。二には[一三〇]種種行相所緣の識生ず、謂く頓に一切の色等の(六)境界を取る分別の意識、及び頓に內(の六根)外(の六境)の境界を取る覺受なり。或は[一三一]頓に一念、瞬息、須臾に於て、現に多の定に入り、多の佛土を見、多の如來を見る分別の意識なり。三には[一三二]小相所緣の識生ず。謂く欲界繫の識なり。四には[一三三]大相所緣の識生ず、謂く色界繫の識なり。五には[一三四]無量相所緣の識生ず、謂く空と識との無邊處繫の識なり。六には[一三五]微細相所緣の識生ず、謂く無所有處繫の識なり。七には[一三六]邊際相所緣の識生ず、謂く非想非非相處繫の識なり。[一三七]八には無相の識生ず、謂く出世の識及び滅を緣ずる識なり。九には苦俱行の識生ず、謂く地獄の識なり。十には[一三八]雜受俱行の識生ず、謂く欲(界)に行ずる識なり。十一には喜俱行の識生ず、謂く初二靜慮の識なり。十二には樂俱行の識生ず、謂く第三靜慮の識なり。十三には不苦不樂俱行の識生ず、謂く第四靜慮從り乃至非想非非想處の識なり。十四には染汚俱行の識生ず、謂く諸の煩惱及び隨煩惱相應の識なり。十五には善俱行の識生ず、謂く[一三九]信等の相應の識なり。十六には無記俱行の識生ず、謂く彼(の善染)と俱に相應せざる識なり。(二)(1)云何んが善く[一四〇]心住を知る、(3)謂く如實に了別眞如を知るなり。(三)(1)云何んが心出を知る、(2)謂く如實に二種の縛を出づることを知る、所謂相縛及び麁重縛なり。此れは能く善く應に其の心をして、是の如き從り出でしむべきことを知るなり。(四)(1)云何んが善く心增を知る。(2)謂く如實に能く相縛麁重縛を(對)治する心の、彼增長する時、彼積集する時、亦增長することを得、亦積集することを得ると知るを、善く心增を知ると名く。(五)(1)云何んが善く心滅を知る、(2)謂く如實に彼の所對治の相及び麁重に雜染せらるる心の、彼衰退する時、彼損滅する時に此れも亦衰退し、此れも

一┌(1)菩薩の請問
　└(2)世尊の正答

※(二)智と見との差別を明す
┌(一)菩薩の請問
└(二)世尊の正答
┌(1)廣を示して略說を許す
└(2)正しくこの差別を示す

【八〇】眞如作意。眞如を緣ずる無分別智と相應する作意。作意とは心所の隨一にして、一切の心所に隨伴して、心を警覺して所緣の境に趣かしむる作用あるもの。

【八一】法相及與び義相を除遣す。法相とは前の三種知義中の文の義に當り、義相とは義の義に當る。除遣すとは無分別智によりてこの二者の相を惑亡することにして、之によりて理智冥合して眞如に證達する事を得るなり。

【八二】彼が所依の相。これ名の所依となる能緣の識のこと。名は識によりて施設さるゝが故なり。眞如無分別智はたゞに所緣の名の相のみならず、能緣の識の相をも惑亡す。

【八三】濁水器の喩云々。濁水を盛れる器、塵埃の掛れる鏡、波の立てる池に於ては自身の面影を寫し得ざる如く、煩惱に汚され、闇昧にして散動なる心に於ては眞如を見得ざることを喩顯す。

亦損減すと知るを、善く(心)減を知ると名く。(六)(1)云何んが善く方便を知る、(2)謂く如實に[一四一]解脫、[一四二]勝處、及與び[一四三]遍處の或は修、或は(除)遣を知るなり。

(三)總じて六處を結す　善男子、是の如く菩薩は、諸の菩薩の廣大の威德に於て、或は已に引發し、或は當に引發し、或は現に引發するなり」と。

第十七項　無餘の滅受を分別す

第一目　菩薩の請問

慈氏菩薩、復佛に白して言さく「世尊、世尊の說きたまふが如く、[一四四]無餘依涅槃界の中に於て、一切の諸受無餘に永滅す。何等の諸受か此に於て永滅するや」と。

第二目　世尊の正答

(一)略して二受を答ふ　「善男子、要を以て之を言はば、二種の受有つて無餘に永滅す。何等をか二と爲す、一には[一四五]所依麁重の受、二には[一四六]彼の果たる境界の受なり。

(二)*廣く二受を釋す　(一)(1)所依麁重の受に當に知るべし、四種有り。一には[一四七]有色所依の受、二には[一四八]無色所依の受、三には[一四九]果已成滿麁重の受、四には[一五〇]果未成滿麁重の受なり。(2)果已成滿の受とは、謂く現在の受なり。果未成滿の受とは、謂く未來の因受なり。(二)(1)彼の果たる境界の受にも亦四種有り。(2)一には[一五一]依持の受、二には[一五二]資具の受、三には[一五三]受用の受、四には[一五四]顧戀の受なり。

(三)*其の永滅を釋す　(一)(1)有餘依涅槃界の中に於て果未成滿の(惑業相應有漏の)受一切已に斷滅し、彼の(能)對治の[一五五]明觸生の受を領し、[一五六]共有(の受)[一五七]或は復彼の果已成滿の受を領受す。(2)又二種の受一切已に(斷)滅して、唯現に明觸生の受を領受す。(二)無餘依涅槃界の中に於て、般涅槃する時、此れも亦永く(斷)滅す。

第三目　結　義

※(二)諸空に約して示す
- (一)十七空を以て十相を除遣することを示す
  - (1)菩薩の請問
  - (2)世尊の正答
    - (1)總標して數を擧ぐ
    - (2)徵起して別釋す
      - (イ)一切法空
        - (イ)所除の相を示す
        - (ロ)能除の空を示す
      - (ロ)相空無先後空
      - (ハ)內空無所得空
      - (ニ)外空
      - (ホ)內外空・本性空
      - (ヘ)大空
      - (ト)有爲空
      - (チ)畢竟空・無性空・無性自性空・勝義空
      - (リ)無爲空・無變異空
      - (ヌ)空々
        - (ロ)乃至(ヌ)の下の小科はイ)のそれに同じ
    - (3)除遣の相と所得の解脫を示す
- イ)菩薩の請問
- ロ)世尊の正答

是の故に說いて、無餘依涅槃界の中に於て、一切の諸受無餘に永(斷)滅すと言ふ」と。

第二節　問に讃して學を勸む

第一項　問に讃す

爾の時世尊、是の語を說き已つて、復慈氏菩薩に告げて曰はく、「善い哉、善い哉、善男子、汝今善く能く圓滿最極淸淨の妙瑜伽道に依止して、如來に請問す汝。

第二項　學を勸む＊

(一)汝瑜伽に於て已に決定の最極善巧を得、吾已に汝が爲に圓滿最極淸淨の妙瑜伽道を宣說せり。(二)所有の一切の過去未來の正等覺者の、已說し當說することも皆亦是の如し。(三)諸の善男子若しくは善女人皆應に此れに依つて、勇猛精進して當に正しく修學すべし」と。

第三節　頌を以て重說す＊

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰はく、

「(一)(1)(イ)法假立の瑜伽の中に於て、若し放逸を行ずれば大義を失し、
此の法及び瑜伽に依止して、若し正しく修行すれば大覺を得す。
有所得を見て【一五八】免離を求め、若し此の見を謂つて法を得と爲さば、
慈氏、彼、瑜伽を去ること遠きこと、譬へば大地の虚空との如し。
(2)(イ)【一五九】利生堅固にして而も作さず、悟り已つて勤修して有情を利す、
智者此れを作して劫量を窮め、便ち最上離染の喜を得。
(ロ)若し人【一六〇】欲の爲に而も法を說かば、彼、欲を捨て還つて欲を取ると名く、
愚癡は法の無價寶を得て、反つて更に遊行して而も乞匃す。

- (イ)正しく所問に答ふ
- (ロ)外の疑難を釋す
- (二)總空の性相を分別す
  - (1)菩薩の請問
    - (1)正しく問を發す
    - (2)已が所念を述ぶ
  - (2)世尊の正答
    - (1)問を讃して許說す
      - イ)讃問
        - (イ)問に益あることを讃す
        - (ロ)歎由を示す
      - ロ)許說
    - (2)問に依つて正說す

【八四】空。梵に舜若多(śūnyatā)と言ふ。因緣所生の人法二者何れも我と執すべきものに非ず、畢竟じて空無なるを言ふ。

【八五】一切法空。佛所說の一切法を空觀するなり。

【八六】相空。有爲の四相を空觀するなり。

【八七】無先後空。一切有爲の諸行は無始以來前滅後生するが故に、確固たる前後の性の如きもののあるに非ずとて、固然たる實在的の前後の性を空觀するを言ふ。卽ちこれ無先後卽空或は無先後と言ふ空(これ持業釋)の意なり。

【八八】能取。よく色等の境を取る眼等の六處。

(三)諍諠雜戲論の(執)著に於て、應に捨てて上精進を發起すべし、
諸天及び世間を度せんが爲に、此の瑜伽に於て汝當に學すべし」
と。

第二章　教に依つて奉持す

第一節　經名の奉持

爾の時慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の解深密法門の中に於て、當に何をか此の教に名くべきや。我、當に云何んが奉持すべきや」と。佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、此れを瑜伽了義の教と名く。此の瑜伽了義の教に於て、汝當に奉持すべし」と。

第二節　時衆の得益

此の瑜伽了義の教を說きたまふ時、大會の中に於て、六百千の衆生有つて阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三百千の聲聞は、遠塵離垢して諸法の中に於て法眼淨を得、一百五十千の聲聞は、諸漏を永盡して心に解脫を得、七十五千の菩薩は、廣大の瑜伽作意を獲得したりき。

【八九】　內空及び無所得空。內空とは內(身內)の六處を空觀し、之によりて顧戀身の相を遣る。無所得空とは外(身外)の諸法を空觀し、之によりて我慢の相を遣る。我慢とは無我を我と恃みて他に對して高擧するなり。

【九〇】　所取。眼等の六根に取らるゝ色等の六境。

【九一】　外空。外の六境を空觀す。

【九二】　男女の承事。男女の僕婢の事。

【九三】　內外空。合して根(內)境(外)の二者を空觀我・我所の二見を遣るなり。

【九四】　本性空「本性たる常空」(これ持業釋)の意味。謂く諸法は假緣の和合するによりて且く空ならざるに似たれども、その本性を尋ぬれば本來空なり。之あたかも水を熱すれば湯となるも、熱することを止むれば本性たる元の冷水て歸るが如し。

【九五】　大空。これ或は十方空と名け、十方無邊の世界を空觀す。

【九六】　無色を了知するが故に云々。前の第六を以て有色界の法を空ぜしに對して、今之を以て無色界の法を空ずるなり。寂靜解脫の相とはこの界の行者無色定を得て內心寂靜なるが故に、之を以て解脫涅槃なりと謂ふを言ふ。

【九七】　畢竟空。諸法は畢竟不可得なりと除す所無く空じ去るを言ふ。

【九八】　無性空。實有の法は少性たりとも得べきものなしと空觀す。(これ持業釋)

【九九】　無性自性空。無性を以て法の自性となすと空觀す。

【一〇〇】　勝義空。諸法の實相たる眞如を空觀す。

【一〇一】　無變異空。佛は大悲心によるが故に有情を利樂せしむるも、少しも利樂の想をなさず、有放有棄有捨にして變異すること無きを言ふ。

【一〇二】　空空。若し空を說くを聞いて空に執着する時は還つて有執となるが故に、この空をも空觀するなり。

【一〇三】彼をも亦除遣す。解脱の知見をも解脱するなり。

【一〇四】總空。上の十七空の總體に通じて全一なる空。

【一〇五】依他起相及び云々。唯識中道教に於ては三性中の遍計の無法を空ずるのみにして依圓の有法は空ぜず。これ空教に於ては空に執ずるが故に遍計の無法のみならず、依圓の有法をも空ずる（惡取空）とは全く趣を異にする所なり。

【一〇六】尸羅(śīla)戒或は清涼と名く。これよく三業の所作を制禦してそれより生ずる熱惱を消散せしむるの意なり。

※第二目　止觀の果を明す

(一)菩薩の請問
(二)世尊の正答
(1)第一釋
(2)第二釋

【一〇七】善清淨心。心とは奢摩他の定なり。卽ち上の戒と下の慧とを合して戒・定・慧の三學を成ず。

【一〇八】善清淨慧。これ毘鉢舍那なり。

【一〇九】業。業とは業用。因果間の直接的關係より派生せられたる間接的の關係を言ふ。

【一一〇】諸の聖教に於て云々。所欲の如く充分に聖教を得て教意を分別する能はざるなり。

※(二)五種の蓋を分別す

(一)正しく五蓋を分別す
(1)菩薩の請問
(2)世尊の正答
(二)二道の圓滿清淨を分別す
(1)止を明す
(1)菩薩の請問
(2)世尊の正答
(2)觀を明す
(1)菩薩の請問
(2)世尊の正答

【一一一】五蓋。蓋とは眞實義を覆蓋するの義にて內的の煩惱を意味す。之に五あり。貪欲蓋、瞋恚蓋、惛沈睡眠蓋（心をして闇昧重膺ならしむ）、掉擧惡作蓋（身心操動して所作の事に於て憂惱あらしむ）、疑蓋これなり。

※(二)世尊の正答

(一)數を標し名を列す
(二)次第に別釋す
(1)作意散動……(5)麁重散動

【一一二】五種の妙欲。人は五境を緣じて勝妙なるものとなして欲心を起すが故に之を五妙欲の境と言ふ。

【一一三】愛味三摩鉢底。三摩鉢底(samāpatti)、此に等至と譯す。身心の平等に安和なる位に至らしむるの義にして、定の七名中の一。之に對して愛着を起すを愛味三摩鉢底と言ふ。

【一一四】等持。梵に三摩地(samādhi)と言ふ。亦定の七名中の一。

※(二)世尊の正答

(一)十地の所治の障を明す
(二)佛地の所治の障を明す
(1)二障を明す
(2)所證を明す

【一一五】この諸地の治障は後の地波羅蜜多品中に正しく明す所なるも、今は特にその功を止觀に歸するが故にこゝにも之を出す所なり。

※(一)正明

(一)因位の勤修を明す
(1)正しく勤修を明す
(1)地前位
イ)正しく思惟する相を明す
ロ)諸相を除遣することを明す
(イ)麁細の相を除遣することを標す
(ロ)別して廿二の細相を示す
(A)所執受等の四種の相
(B)內等の三相
(C)利他の相
(D)正智如々の相
(E)四諦の相
(F)有爲無爲の相
(G)常無常の相
(H)苦變異等の相
(I)有爲同異の相
(J)一切を知る相
(K)二無我の相
(ハ)善く心を修治することを明す
(2)見道位
(イ)正しく見道を明す
ロ)初地の相を示す
(イ)三種の名を得ることを示す
(ロ)勝德を受用することを示す
(3)修道位
(2)喩を擧げて重ねて示す
(1)入地の喩
(2)後々の地の喩
(二)果位の圓滿を明す

【一六】七眞如に依つて云々。「七眞如」とは所觀の境、「所聞所思の如き法」とは所依の敎法、「勝定の心」とは能觀の修慧なり。

【一七】以下廿二の細相あり。之を十一段(科段參照)に分ち更に四類に攝め得る。次の如し。

第一、二段――自利
第三段――利他
第四段――根本智の境
第五、十一段―後得智の境

【一八】心所執受等の四相。序の如く身受心法の四念住の境なり。前の(六八)を見よ。

【一九】內等の三相。五根を內と名け、五境を外と名け、二者合して內外と名く。

【二〇】或は正智の相、或は眞如の相。これ能觀の智と所觀の理となり。

【二一】苦有變異性相、苦無變異性相。初のは三受中の苦樂二受、後のは捨受なり。

【二二】有爲異相々、有爲同相々。有爲の諸法、もし自相に約すれば、色の變礙、心の了別等各々不同なるを異相々と言ひ、若し共相に約すれば、苦、無常等の義等しく遍滿せるを同相々と言ふ。

【二三】一切はこれ一切なりと云々。「一切はこれ一切なりと知る」とは一切法に對する能知の智なり。「一切を有するの相」とは所知の相なり。

【二四】通達智。眞如に通達する根本無分別智なり。

【二五】見道。三道(見道・修道・無學道)中の第一、分別起の二障を斷じて初めて無漏智を發して眞理を見照する位なり。之を道と名くることはこれ佛果に趣入する道路なるが故なり。

【二六】正性離生。煩惱を斷じて無漏智を得るを正性と言ひ、之によりて異趣異生に流轉することを離脫するを離生と言ふ。

【二七】修道。三道中の第二、前既に見道に於て一分の眞理を照見したるも、更に無漏智を修習して倶生起の二障を斷ずる位なれば修道と言ふ。

*(二)次第に別釋す
(一)善く心生を知る
　(1)菩薩の請問
　(2)世尊の正答
　　(1)總じて十六行心を答ふ
　　(2)別して十六行心を釋す
(二)善く心住を知る
　(1)菩薩の請問
　(2)世尊の正答
(三)善く心出を知る
(四)善く心增を知る
(五)善く心減を知る
(六)善く方便を知る
((三)―(六)の下の小科は(二)の下のそれに同じ)

【二八】十六行心。行とは有爲の異名。卽ちこれ十六の有爲心なり。この十六行心を下圖の如くに統攝することを得。

1, 2 ― 六八二識の識體を出す
3 ― 欲界繫の識
4 ― 色界繫の識
5, 6, 7 ― 無色界繫の識
8 ― 非繫の識
（3―8）― 繫・非繫に約す
13――9 ― 五受に約して示す
16――14 ― 三性に約して示す

【二九】不可覺知堅住器識。卽ち阿陀那識なり。阿陀那識は所緣・行相共に不可知なるが故に不可覺知と言ひ、一類に相續して間斷無きが故に堅住と言ひ、諸の器世界を變現する識なるが故に器識と言ふ。

【三〇】種々行相所緣識。卽ち第六識なり。この識はその所緣に三世十方の一切法に亘り能緣の行相亦それに隨つて三量(現實・比量・非量)に通ずるが故にかく名く。

【三一】頓に一切の色等の境界云々。この中を意識の作用の上より三分することを得。
1. 頓に量切の色等の境界云々とはこれ五倶の意識なり。
2. 頓に內外の境界を取る云々とはこれ獨頭の意識なり。こゝに所謂覺受とは覺悟領受の義にて識の作用を顯はす語なり。
3. 頓に一念瞬息須臾に云々とはこれ無漏定中の意識なり。謂く、後得無漏定自在力によりて一時に多定に入る等の妙用をなすなり。後得智は有漏心に對する時は無分別と名くるも、正體智に對する時には有分別と名く。故にこゝに分別の意識と言ふ。

【三二】小相所緣識。欲界の第八識は狹少なる執受の境を緣ずるが故にかく名く。

【三三】大相所緣識。色界の第八識は廣大なる執受の境を緣ずるが故にかく名く。

【三四】無量相所緣識。無色界は定の高下に從つて四階を立つ。その中の初二階たる空と

識との無變處に於ては、第八識は無量の執受の境を緣ずるが故にかく名く。

【一三五】微細相所緣識。無色界の第三階なる無所有處の第八識は微細なる執受の境を緣ずるが故にかく名く。

【一三六】邊際相所緣識。無色界の第四階なる非想非非想處の第八識は最極微細なる執受の境を緣ず、然してこの非想非非想處は三界中の最後邊にあればかく名く。

【一三七】八には無相識云々。出世識とは道諦の無漏を緣ずる識なり。緣滅の識とは滅諦涅槃の理を緣ずる識なり。この二共に有漏の戲論の相を離れたる識なるが故に無相識と言ふ。

【一三八】雜受倶行識。苦樂捨の雜受と倶起するなり。

【一三九】信等。信等の善の十一の心所なり。

【一四〇】心住。心のよつて以て住所となす眞如實性、即ち七眞如中の了別眞如なり。

【一四一】解脫。即ち八解脫にして、三界雜染の繫縛を棄捨する八種の禪定なり。

【一四二】勝處。八勝處なり。勝智勝見を發して貪愛を捨つる爲め所依となる八種の禪定なり。

【一四三】遍處。十遍處なり。一切萬有を總合して一對象として觀ずる方法十あり。青、黃、赤、白、地、水、火、風、空、識之なり。例へば青色に住すれば萬有盡く靑相なりと觀ずるが如し。

【一四四】無餘依涅槃(anupadhiśeṣa nirvāṇa)、とは生死の因たる惑業のみならず、更にその餘の有漏の依身の苦果までも斷無することによりて顯はるゝ涅槃なり。

【一四五】所依麁重の受。內の六根を所依として生ずる受なり。これその體有漏にして煩惱の麁重あるによりて、不調柔の性の爲に隨逐せらるゝが故にこの名あり。

【一四六】彼の果たる境界の受。外の六境は內の六根の勢力によりて引生せられたる增上果たり。この六根の增上果たる六境を緣じて境とする受を彼の果たる境界の受と名く。

※(二)廣く二受を釋す
(一)所依の麁重受を釋す
(1)總標して名を列す
(2)釋を逐ふて重釋す
(二)彼が果の境界受を釋す
(1)總標
(2)列名

【一四七】有色所依の受。有色の五根を所依として有する五識相應の受なり。

【一四八】無色所依の受。無色の心法を所依として有する意識相應の受なり。

【一四九】果已成滿麁重の受。過去の惑業によりて生じたる現在の果受。

【一五〇】果未成滿麁重の受。現在の惑業によりてよく未來の果を感ずる因受。

【一五一】依持の受。有情を依持する器世界を緣ずる受。

【一五二】資具の受。衣藥等の資生の具を緣ずる受。

【一五三】受用の受。前の器界と資具とを親しく受用する受。

【一五四】顧戀の受。財物を顧戀する受。

※(三)其の永滅を釋す
(一)有餘の滅・不滅を釋す
(1)第一釋
(2)第二釋
(二)無餘の求滅を釋す

【一五五】明觸生の受。明とは無漏の異名。この無漏の明觸より生ぜられたる盡無生智相應の受なり。

【一五六】共有(の受)。共相の境たる器界を緣ずる依持の受なり。資具・受用を緣ずる受もあれども略して說かず。たゞ顧戀の受は貪煩惱と相應するが故に有餘涅槃界中には無し。

【一五七】或はまた彼の果已成滿の受云々。果已成滿受や中有麁重と無麁重との二あり。その中無麁重のもののみ之を領受す。有色所依の受無色所依の受もあれども略して說かず。

※第二項　學を勸む
(一)所說の圓妙を示す
(二)諸佛の同を示す
(三)精進して修學する事を勸む

※第三節　頌を以て重說す
(一)得失を辨ず
(1)自利の得失
(1)總じて瑜伽の道と順との得失を示す
(2)別して有所得の失を示す
(2)利他の得失
(1)智者利生の得
(2)愚者說法の失
(二)修學を勸む

【一五八】免離。三本並に宮本には之を免離に作る。

【一五九】利生堅固云々。菩薩は深固の慈悲心によりて終日利生すれども少しも利生の想をなさゞるなり。

【一六〇】欲。名聞利養なり。

卷の第四

[一]地波羅蜜多品第七

第一章　問答正說

第一節　諸地を分別す

第一項　二種の法を以て諸地を攝することを明す

第一目　菩薩の請問

爾の時[二]觀自在菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛所說の菩薩の[三]十地の如き、所謂極喜地・離垢地・發光地・焔慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地なり、復佛地を說いて第十一と爲したまふ。是の如きの諸地は、幾種の清淨(かありて)幾分の所攝なるや」と。

第二目　世尊の正說

(一)總じて二種を標す　爾の時世尊、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に知るべし、諸地は[四]四種の清淨、十一(種)分の(所)攝なり。

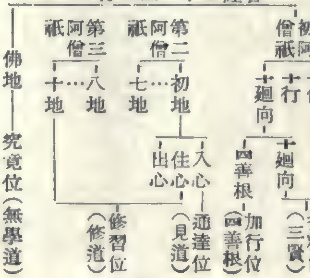
(二)※別して二種を廣釋す　(一)(1)云何んが名けて四種の清淨能く諸地を攝すと爲す。(2)謂く增上意樂清淨初地を攝し增上戒清淨第二地を攝し、增上心清淨第三地を攝し、增上慧清淨は、後後の地に於て轉た勝妙なるが故に、當に知るべし、第四地從り乃至佛地を攝す、(3)善男子、當に知るべし。是の如きの四種の清淨普ねく諸地を攝す。(二)(1)云何んが名けて十一種分能く諸地を攝すと爲す。(2)(一)(イ)謂く諸の菩薩先に[五]勝解行地に於て、[六]十法行に依つて極めて善く勝[七]解忍を修習せるが故に、(ロ)彼の(勝解行)地を超過して、菩薩の[八]正性離生に證入す。彼の(初歡喜地の)諸の菩薩、是の因緣に由つて、

【一】地波羅蜜多品。菩薩の十地の位次と六波羅蜜多の行とを明す(これ相違釋なり)一品なるが故に地波羅蜜多品と言ふ。

【二】觀自在菩薩。梵に阿縛盧枳低濕伐邏(avalokiteśvara)と言ふ。觀自在とは事理に於て自在に觀達するの義。

【三】十地。

菩薩四十一段の行位



右圖に示すが如く、十地とは見道・修道に於ける行位にして、初地に於て入見道すると同時に初めて無漏の眞智を發得し、後々の諸地に於て十勝行によりて、十重障を斷じて、十眞如を證し、將に佛果に至らんとする二大阿僧祇間の行位を言ふ。所謂十地の地とは所依の義にして、十勝行の車を運行せしむるに所依の十地あり

此の(第一)分圓滿す。(2)(イ)而れども未だ微細の毀犯誤つて現行する中に於て、正知にして而も行ずること能はず。是の因縁に由つて此の(第二)分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の(第二離垢地の)諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の(第二)分圓滿す。(3)(イ)而れども未だ世間の圓滿なる九等持、等至及び圓滿なる一〇聞持陀羅尼を得ること能はず。是の因縁に由つて此の(第三)分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の(第三發光地の)諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の(第三)分圓滿す。(4)(イ)而れども未だ獲得する所の一一菩提分法に随つて、多く修習して住せしむること能はず。心未だ諸の一二等至愛、及與び法愛を捨つること能はず。是の因縁に由つて此の(第四)分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の(第四焰慧地の)諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の(第四)分圓滿す。(5)(イ)而れども未だ諸諦の道理に於て、如實に觀察すること能はず。又未だ生死涅槃に於て、一向一三背趣の作意を棄捨すること能はず。又未だ方便所攝の菩提分法を修すること能はず。是の因縁に由つて此の(第五)分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の(第五極難勝地の)諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の(第五)分圓滿す。(6)(イ)而れども未だ生死流轉に於て、如實に觀察すること能はず。又彼に於て多く厭(背の心)を生ずるに由るが故に、未だ多く一四無相作意に住すること能はず。是の因縁に由つて此の(第六)分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の(第六現前地の)諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の(第六)分圓滿す。(7)(イ)而れども未だ無相作意をして、無缺無間に多く修習して住せしむること能はず。是の因縁に由つて此の(第七)分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證

て、よく衆生を佛果の彼岸に運載するが如し。

【四】四種清淨。清淨とは十地に於て修習する無漏の異名。四種とは(一)増上意樂清淨、初地に於て無倒に作意(意樂は作意を以て體となす)を以て眞理を照見するなり。(二)増上戒清淨。第二地に於て一切に微細の誤犯を遠離して持戒清淨なるを言ふ。(三)増上心清淨、心とは定なり。第三地に於て勝定を成就して、よく清淨慧を發する所依となるなり。(四)増上慧清淨、第四地以後清淨の智慧彌々勝妙となるなり。増上とは增勝の義にして、特にその地に於て勝れたる事を意味す。一々の地に皆この四種清淨無きに非ず。

※(二)別して二種を廣釋す
(一)四種清淨を明す
(1)徵
(2)釋
(3)結
(二)十一種分を明す
(1)徵
(2)釋
(1)第一分
(イ)地前の勤修
(ロ)證入圓滿
(2)第二分
(イ)未圓滿相

得す。彼の（第七遠行地の）諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の（第七）分圓滿す。(8)(イ)而れども未だ無相住の中に於て、功用を捨離すること能はず。又未だ【一五】相に於て自在なることを得ること能はず。是の因縁に由つて此の（第八）分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の（第八不動地の）諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の（第八）分圓滿す。(9)(イ)而れども未だ異名と衆相と訓詞との差別、一切品類の宣說法の中に於て、大自在を得ること能はず。是の因縁に由つて此の（第九）分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の（第九善慧地の）諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の（第九）分圓滿す。(10)(イ)而れども未だ圓滿法身を現前に證受するを得ること能はず。是の因縁に由つて、此の（第十）分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の（第十法雲地の）諸の菩薩、是の因縁に由つて、此の（第十）分圓滿す。(11)(イ)而れども未だ遍ねく一切所知の境界に於て、【一六】無著無礙なる妙智妙見を得ること能はず。是の因縁に由つて、此の（第十一）分の中に於て、猶未だ圓滿せず。(ロ)此の分をして圓滿を得せしめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。（第十一の佛地は）是の因縁に由つて、此の（第十一）分圓滿す。此の（第十一）分圓滿するが故に、一切の（十一）分に於て皆圓滿することを得。(3)善男子、當に知るべし、是の如きの十一種分普ねく諸の（十一）地を攝す」と。

第二項　十一地の名を釋す

第一目　菩薩の請問

観自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、何の縁あつてか最初を極喜地と名け、乃至何の縁あつてか說いて佛地と名くるや」と。

第二目　世尊の正答

(ロ)勤修圓滿
　(3)第三分
　　(11)……(3)
　(11)第十一分
　　(3)―(11)の下の（小科は(2)の下のそれに同じ。）
(3)結

【一五】勝解行地。瑜伽論によるに菩薩の修行の階位を分つに七地あり。その第二位を勝解行地と名く。これ甚深殊勝の信解を起して敎法に於て印可決定するの地の謂にして、五位中にては資量・加行の二位に當る。

【一六】十法行。書寫・供養等の經典に對する十種の行法なり。

【一七】勝解忍。勝解によりて起す忍なり。忍とは安忍の義、道理に安住して之を忍知する無分別智を意味す。

【一八】正性離生。
【一九】等持等至。（分別瑜伽品參照）

【二〇】聞持陀羅尼。陀羅尼(dhāraṇī)とは此に總持と譯す。總じて無量の善法を任持して散失せしめざること、今所聞の法義を任持して忘失せしめざるを聞持陀羅尼と言ふ。

【二一】菩提分法。卽ち卅七道品なり。分とは因の義、菩提を得する因法なるが故に菩提分法と名く。或はこれ支〃の義、菩提を得する爲の卅七の

佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、[17]大義(利)を成就して、未曾得の出世間心を得、大歡喜を生ず、是の故に最初を極喜地と名く。一切微細の犯戒を遠離す、是の故に第二を離垢地と名く。彼の所得の三摩地及び聞持陀羅尼は、能く無量の智光(を發する)の依止と爲るに由つて、是の故に第三を發光地と名く。彼の所得の菩提分法に由つて、諸の煩惱(の薪)を燒く、(其の)智火焰の如し、是の故に第四を焰慧地と名く。卽ち彼の菩提分法に於て、方便修習すること最極艱難なるに、方に自在を得るに由つて、是の故に第五を極難勝地と名く。現前に諸行の流轉を觀察し、又無相に於て多く修する作意方に現在前す、是の故に第六を現前地と名く。能く遠く(二乘及び世間所行の道を離れ)無缺無間(斷)の無相作意に證入し、[18]淸淨地と共に相隣接す、是の故に第七を遠行地と名く。無相に於て無功用を得るに由つて、諸相の中に於て現行の煩惱の爲に動ぜられず、是の故に第八を不動地と名く。一切種に於て說法自在にして、[19]無礙廣大の智慧を獲得す。是の故に第九を善慧地と名く。麁重身の廣(大)なること虛空の如く、法身の圓滿して(此れを覆ふこと)譬へば大雲の皆能く遍ねく覆ふが如し、是の故に第十を法雲地と名く。最極微細の煩惱及び所知の(二)障を永斷し、無著無礙にして、一切種の所知の境界に於て、現に正等覺するが故に、第十一を說いて佛地と名く」と。

第三項　諸地の所治を明す

第一目　菩薩の請問

觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「此の諸地に於て幾ばくの[20]愚癡有り、幾ばくの[21]麁重有つてか所對治と爲るや」と。

第二目　世尊の正說

佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、

支分なるが故に菩提分法と名く。

【一二】等至愛。貪煩惱によりて禪定に對して愛着を起すものにして、先の瑜伽品に所謂愛味三摩鉢底なり。

【一三】背趣。二乘は作意してたゞ生死を厭背し涅槃を欣趣するも、大乘の菩薩は生死涅槃一向無差別と觀して之を背趣せざるなり。

【一四】無相作意。眞如無相無分別觀の作意なり。前五地にては有相觀多く無相觀少きも、第六地にては無相觀多く有相觀少く、更に第七地に入れば純無相觀となる。

【一五】相に於て自在云々。諸佛菩薩は方便を以て自在に金銀財穀等の相を變作するも、八地の菩薩は未だ之が自在を得ざるを言ふ。

【一六】無着無礙。煩惱障を離るゝが故に無着なり。所知障を離るゝが故に無碍なり。

【一七】大義。自利々他の二の殊勝の功德なり。

【一八】淸淨地。七地以前は有漏無漏雜起するも、八地以上は純無漏相續するが故に淸淨地と言ふ。

【一九】無礙。大正本には無罪に作るも、三本並に宮本によりてかく訂正す。

（一）總じて所對治の數を標す　善男子、此の諸地の中二十二種の愚癡と、十一種の麁重と有つて所對治と爲る。

（二）地に約して次第に別釋す　謂く初地に於て二の愚癡有り、一に補特伽羅及び法に執著するの愚癡、二には惡趣雜染の愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第二地に於て二の愚癡有り、一に微細誤犯の愚癡、二には種種業趣の愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第三地に於て二の愚癡有り、一には欲貪の愚癡、二には圓滿聞持陀羅尼の愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第四地に於て二の愚癡有り、一には等至愛の愚癡、二には法愛の愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第五地に於て二の愚癡有り、一には一向に作意して生死を棄背するの愚癡、二には一向に作意して涅槃に趣向するの愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第六地に於て二の愚癡有り、一には現前に諸行の流轉を觀察するの愚癡、二には相多く現行するの愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第七地に於て二の愚癡有り、一には微細相現行するの愚癡、二には一向に無相を作意し方便するの愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第八地に於て二の愚癡有り、一には無相の於へに功用を作さしむるの愚癡、二には相の於へに自在なるの愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第九地に於て二の愚癡有り、一には無量の說法と無量の法句文字と後後の慧辯との於へに、陀羅尼自在なるの愚癡、二には辯才自在なるの愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。第十地に於て二の愚癡有り、一には大神通の愚癡、二には微細祕密なるに悟入するの愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。如來地に於て二の愚癡有り、一には一切所知の境界の於へに、極めて微細にして著するの愚癡、二には極めて微細にして礙ふるの愚癡及び彼の麁重を所對治と爲す。

（三）諸地を安立す　善男子、此の二十二種の愚癡及び十一種の麁重に由るが故に、諸地を安立し、而して阿耨多羅三藐三菩提は彼の繫縛を離る」と。

【一〇】愚癡。梵に慕何(moha)事理に暗昧なる事にて無明の異名なり。然も今は單に無明のみならず、無明所生の諸種の眷屬をも總括して愚癡と言ふ。

【一一】麁重。先の愚癡が煩惱の現行なりしに對して、之はその種子にして、之あるによりて所觀の境に於て自在を得る能はず。故に又無堪任性とも言ふ。

第三目　菩薩の菩提を讃歎することを明す

觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、阿耨多羅三藐三菩提は甚奇希有なり、乃至大利大果を成就し、諸の菩薩をして能く是の如き大愚癡の羅網を破り、能く是の如き大麁重の稠林を越え、現前に阿耨多羅三藐三菩提を證得せしむ」と。

第四項　殊勝安立を示す

第一目　菩薩の請問

觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如き諸地は、幾種の殊勝の安立する所なるや」と。

第二目　世尊の正答

佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、

(一)總標して名を列す　善男子、略して八種有り、一には増上意樂清淨、二には心清淨、三には[二二]悲清淨、四には[二三]到彼岸清淨、五には[二四]見佛供養承事清淨、六には成熟有情清淨、七には[二五]生清淨、八には[二六]威德清淨なり。

(二)※勝劣を分別す　善男子、(一)初地の中に於て所有の増上意樂清淨乃至威德清淨あり。後後の諸地乃至佛地(の中に於て)所有の増上意樂清淨乃至威德清淨あり。當に知るべし。彼の諸の清淨展轉して増勝なり。唯佛地に於て生清淨を除く。(二)又初地の中の所有の功德は、上の諸地に於ても平等に皆有れども、當に知るべし、自地の功德は殊勝なり。(三)一切菩薩の十地の功德は皆是れ有上なり。(而して)佛地の功德は當に知るべし、無上なり」と。

第五項　菩薩の生の殊勝なる因緣を明す

第一目　菩薩の請問

觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊は何の因緣の故に、菩薩の生は諸有の生に於て、最も殊

【二二】　悲清淨。悲とはこれ慈悲喜捨の四無量中の一にして、衆生の苦を拔く菩薩利他の無漏の大行なり。淸淨の義は前に釋する所の如し。

【二三】　到彼岸清淨。到彼岸とは梵に波羅蜜多(pāramitā)と言ふ。菩薩は之によりて、よく生死の此岸より涅槃の彼岸に到ることを得る行法なるが故に、到彼岸と名く。之に六種或は十種あり。後に至りて知るべし。因みに到彼岸の到の字を三本並に宮本には至に作れり。

【二四】　見佛供養承事清淨。見佛とは佛の三身を見奉ること。供養とは佛に對して利供養(香華等)、行供養(修行)の三種を(衣服臥具等)、恭敬供養(香華等)、行供養(修行)の三種を供養し奉ること。承事とは臣の王に事ふる如く、佛に對して給侍、迎送等の事をなすことを言ふ。

【二五】　生清淨。菩薩は利有情の爲に涅槃に住せずして、常に除災生・隨類生等の種々の生を受くるを言ふ。

【二六】　威德清淨。菩薩は十八神變・六神通等によりて大威德を示現するを言ふ。

※(二)勝劣を分別す
(一)諸地に於て展轉して増勝なることを明す
(二)自地の功德の殊勝を明す
(三)功德の有上無上を明す

勝なりと爲すと說きたまふや」と。

第二目　世尊の正答

佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、四の因緣の故に。（謂く）一には極淨善根の集起する所なるが故に、二には故意思擇力の所取なるが故に。三には諸の衆生を悲愍して濟度するが故に。四には自ら能く無染にして、他の染を除くが故なり」と。

第六項　菩薩の三大願を行ずる因緣を明す

第一目　菩薩の請問

觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊は何の因緣の故に、諸の菩薩は[二七]廣大願・妙願・勝願を行ずと說きたまふや」と。

第二目　世尊の正答

佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(一)「善男子、四の因緣の故に。(二)(1)謂く諸の菩薩は(一には)[二八]能く善く涅槃の樂住を了知し、能く速證するに堪ふれども、(2)(二には)而も復[二九]樂住を速證することを棄捨し、(3)(三には)[三〇]無緣無待に大願心を發して、(四には)(4)諸の有情を利益せんと欲するが爲の故に、多くの種種なる長時の大苦に處す。(三)是の故に我、彼の諸の菩薩は廣大願・妙願・勝願を行ずと說く」と。

第二節　波羅蜜多を分別す

第一項　正しく諸度を明す

第一目　所學の多少を分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の諸の菩薩、凡そ幾種の所應學の事

【二七】廣大等の三願。廣大の有情を緣じて之を度せんとの願を廣大願と言ひ、これ二乘等の測量し得ざる深妙の願なるを妙願と言ひ、又これ一切に超えたる殊勝の願なるを勝願と言ふ。

※第二目　世尊の正答
- （一）總標して數を擧ぐ
- （二）別して四緣を釋す
  - (1)涅槃を證するに堪能なり
  - (2)樂住を速證する
  - (3)大願心を發す
  - (4)除災生を受く
- （三）總じて四緣を結す

【二八】善く涅槃の樂住を云々。解脫を得るによりて速かに生死を捨てゝ涅槃に安住することを得るなり。

【二九】樂住を速證することを棄捨す。大悲の故に涅槃に住せざるなり。

【三〇】無緣無待に大願心を發す、無緣の大悲によるが故に報恩等の事を期待せざるなり。

かあるや」と。

(二)世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、菩薩の學事に略して六種有り。所謂布施・持戒・忍辱・精進・靜慮(智)慧の到彼岸なり」と。

第二目　三學の所攝を分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如き六種の所應學の事の(中)、幾ばくか是れ[三]増上戒學の所攝、幾ばくか是れ増上心學の所攝、幾ばくか是れ増上慧學の所攝なるや」と。

(二)世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に知るべし、初の(布施持戒忍辱の)三は但是れ増上戒學の所攝、(第五の)靜慮の一種は但是れ増上心學の所攝、(第六の智)慧は是れ増上慧學の所攝なり。而して我、(第四の)精進は一切(の戒定慧)に(普)遍すと說く」と。

第三目　福智の所攝を分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如き六種の所應學の事の(中)幾ばくか是れ[三]福德資糧の所攝、幾はくか是れ智慧資糧の所攝なるや」と。

(二)世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、若し増上戒學の所攝なる者は、是を福德資糧の所攝と名け、若し増上慧學の所攝なる者は、是を智慧資糧の所攝と名く、(而して)我、精進靜慮の二種は一切(の福德智慧の二資糧)に(普)遍すと說く」と。

第四目　五種の相を修學することを分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、六種の所(應)學の事の中に於て、菩薩は云何んが應に當に修學すべきや」と。

(二)※世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「(一)善男子、五種の相に由つて、應に當に修學す

【三】増上戒學等。戒學と心學(=定學)と慧學との三は佛者の因位に於て修學すべき所なるが故に之を三學と言ふ。(之を完了して無學の果位に到達す。)

【三】福德資糧、智慧資糧。聖道を修するによく資助糧道となるべき善根功德を資糧と言ふ。その中布施等の前五波羅蜜による一切の善根を福德資糧と名け、第六の智慧波羅蜜による妙智を智慧資糧と言ふ。

※(二)世尊の正答
- (一)總標して數を擧ぐ
- (二)次第に別釋す
  - (1)猛利に信解す
  - (2)十法行を行ず
  - (3)菩提心を護る
  - (4)善知識に親近す
  - (5)無間に勤修す

べし。(二)(五種の相とは)(1)一には最初に[三三]菩薩藏の波羅蜜多と、相應する微妙なる正法教の中に於て、猛利に信解し、(2)二には次に十種の法行に於て、聞・思・修(の三慧)所成の妙智を以て、精進して修行し、(3)三には菩提之心を隨護し、(4)四には眞の[三四]善知識に親近し、(5)五には無間に善品を勤修す」と。

第五目　六度の無增減を分別す

(一) **菩薩の請問**　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故に、是の如きの所應學の事を施設するに、但六數のみ有るや」と。

(二)※**世尊の正答**　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(一)「善男子、二の因緣の故に。(卽ち)一には諸の有情を饒益するが故に、二には諸の煩惱を對治するが故なり。當に知るべし、前の三は有情を饒益し、後の三は一切の煩惱を對治す。(二)(1)前の三は諸の有情を饒益すとは、謂く諸の菩薩は布施に由るが故に、資具を攝受して有情を饒益し、持戒に由るが故に、損害・逼迫・惱亂を行ぜずして、有情を饒益し、忍辱に由るが故に、彼の損害・逼迫・惱亂するに於て、堪能忍受して有情を饒益す。(2)後の三は諸の煩惱を對治すとは、謂く諸の菩薩は精進に由るが故に、未だ一切の煩惱を[三五]永伏せず、亦未だ一切の[三六]隨眠を永害せずと雖も、而も能く勇猛に諸の善品を修し、彼の諸の煩惱は善品の加行を傾動すること能はず、靜慮に由るが故に煩惱を永伏し、般若に由るが故に隨眠を永害す」と。

第六目　四度の無增減を分別す

(一) **菩薩の請問**　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故に、所餘の波羅蜜多を施設するに但、[三七]四數のみ有るや」と。

(二)※**世尊助伴の義を以て無增減を釋す**　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(一)「善男子、前六種の波羅蜜多の[三八]與に助伴となるが故なり。(二)(1)(イ)謂く諸の菩薩は、前の三種の波羅蜜多所攝の有情に於て、諸

【三三】菩薩藏。經開藏と合して二藏と名くる中一切の大乘經を菩薩乘と名く。藏とは行者の修因得果の法を含藏するの義なり。

【三四】善知識。知識とは知識者の略にしてその心を知りその形を識る者、卽ち朋友或は親友の義なり。善とはそれに益を與へそれを善道に導くの謂なり。

※(二)世尊の正答
- (一)總じてこの因緣を敍す
- (二)重ねて二緣を釋す
  - (1)前三は饒益有情
  - (2)後三は退治煩惱

【三五】永伏・永害。煩惱の現行を抑厭するを伏と名け、煩惱の種子を掃蕩するを害と名く。

【三六】隨眠。これ煩惱の種子なり。種子は有情に隨逐しつつ、阿賴耶識の中に眠伏するが故に隨眠と名く。

【三七】四數。方便・願・力・智の四種波羅蜜にして、これ六波羅蜜の第六智慧波羅蜜を開きたるもの。この兩者を合して十波羅蜜を數ふ。

※(二)世尊、助伴の義を以て無增減を釋す
- (一)總合
- (二)別釋

の〔三九〕攝事方便善巧を以て、而も之を攝受して善品に安置す。(2)是の故に我、方便善巧波羅蜜多は、前の三種の與に助伴と爲ると說く。(2)(1)(イ)若し諸の菩薩現法の中に於て煩惱多きが故に、〔四〇〕無間を修するに於て、堪能有ること無く、羸劣なる意樂の故に、下界の勝解の故に、內の〔四一〕心住に於て堪能有ること無く、菩薩藏に於て聞緣して善く修習すること能はざるが故に、所有の靜慮は出世間の慧を引發すること能はず、彼便ち少分狹劣なる福德資糧を攝受して、未來世の煩惱輕微ならんが爲に、心に正願を生ず、是の如きを願波羅蜜多と名く。(ロ)此の願に由るが故に、煩惱微薄にして能く精進を修す。(2)是の故に我、願波羅蜜多は、精進波羅蜜多の與に、而も助伴と爲ると說く。(3)(1)(イ)若し諸の菩薩善士に親近し、正法を聽聞し、如理に作意するを因緣と爲るが故に、劣意樂を轉じて勝意樂を成じ、亦能く上界の勝解を獲得す、是の如きを力波羅蜜多と名く。(ロ)此の力に由るが故に、內の心住に於て堪能なる所有り。(2)是の故に我、力波羅蜜多は靜慮波羅蜜多の與に、而も助伴と爲ると說く。(4)(1)(イ)若し諸の菩薩菩薩藏に於て、已に能く聞緣して善く修習するが故に、能く靜慮を發す。是の如きを智波羅蜜多と名く。(ロ)此の智に由るが故に、能く出世間の慧を引發するに堪へたり。(2)是の故に我、智波羅蜜多は慧波羅蜜多の與に、而も助伴と爲ると說く」と。

第七目　六種の次第を分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故に、六種の波羅蜜多を宣說したまふに、是の如く次第するや」と。

(二)世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、能く後後の引發依と爲るが故に。謂く諸の菩薩若し身財に於て顧悋する所無くんば便ち能く淸淨の禁戒を受持し、禁戒を護らんが爲に便ち忍辱を修し、忍辱を修し已つて、能く精進を發し、精進を發し已つて、能く靜慮を辦じ、靜慮を具し已つて、便ち能く出世間の慧を獲得す。是の故に我、波羅蜜多を說くに是の如く次第す」と。

- (1)方便を以て三度を助く
  - (1)釋
  - (2)結
- (2)願を以て精進を助く
  - (1)釋
    - (イ)願の體相を釋す
    - (ロ)助伴の義を釋す
  - (2)結
- (3)力を以て靜慮を助く
  - (1)釋
    - (イ)力の體相を釋す
    - (ロ)助伴の義を釋す
  - (2)結
- (4)智を以て般若を助く
  - (1)釋
    - (イ)智の體相を釋す
    - (ロ)助伴の義を釋す
  - (2)結

【三八】與に。與の字は大正本に由に作るも、三本並に宮本によりてかく訂正す。

【三九】攝事。菩薩は利他の願心より布施・愛語・利行・同事の四を以て有情を攝して以て道を受けしむるを四攝事（或は四攝法）と言ふ。

【四〇】無間。四修の一なる無間修のことにて大精進を以て間斷なく修するを言ふ。

【四一】心住。心の住所たる眞如の意。即ち唯識眞如なり。

第八目　六度の品類を分別す

（一）**菩薩の請問**　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如き六種の波羅蜜多に、各幾種の品類差別有りや」と。

（二）**世尊の正答**　佛、觀自性菩薩に告げて曰はく、（一）善男子、各三種有り。（二）施の三種とは、[四二]一には法施、二には財施、三には無畏施なり。(2)戒の三種とは、[四三]一には轉捨不善戒、二には轉生善戒、三には轉生饒益有情戒なり。(3)忍の三種とは、一には[四四]耐怨害忍、二には[四五]安受苦忍、三には[四六]諦察法忍なり。(4)精進の三種とは、一には[四七]被甲精進、二には轉生善法加行の精進、三には饒益有情加行の精進なり。(5)靜慮の三種とは、一には（虚妄）分別無くして寂靜なり、（一切の相を遠離して）極寂靜なり、（諸の染汚を離れて）無罪なるが故に、煩惱の衆苦を對治する樂住なる靜慮、二には功德を引發する靜慮、三には[四八]饒益有情を引發する靜慮なり。（智）(6)慧の三種とは、一には世俗諦を緣ずる慧、二には勝義諦を緣ずる慧、三には饒益有情を緣ずる慧なり」と。

第九目　波羅蜜の得名を分別す

（一）※**五相の因緣を辯ず**　（一）觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故に、波羅蜜多を說いて波羅蜜多と名くるや」と。（二）佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、五の因緣の故に、一には無染著の故に、二には無顧戀の故に、三には無罪過の故に、四には無分別の故に、五には正迴向の故に。(2)(1)無染著とは、謂く波羅蜜多の諸の相違の事に染著せざるなり。(2)無顧戀とは、謂く一切の[四九]波羅蜜多の諸の果異熟及び報恩の中に於て、心に繋縛無きなり。(3)無罪過とは、謂く是の如き波羅蜜多に於て、間雜染法無くして非方便の行を離るるなり。(4)無分別とは、謂く是の如き波羅蜜多に於て、言詞の如く自相に執著せざるなり。(5)正迴向とは、謂く是の如き所作所集の波羅蜜多を以て、無上大菩提の果を迴求するなり」と。(3)「世尊、(1)(イ)何等をか名けて、波羅蜜多の諸の相違の事

※(二)世尊の正答
- (一)總じて品類を標す
- (二)正しく六度に各ゝ三あることを示す
  - (1)布施の三品
  - ……
  - (6)智慧の三品

【四二】一には法施等。法を說いて他を度するを法施と言ひ、財を捨てゝ食を救ふを財施と言ひ、虎狼水火等の諸種の厄難を救ひて怖畏無からしむるを無畏施と言ふ。

【四三】一には轉捨不善戒云々。之等の三序の如く攝律儀戒、攝善法戒、攝善生戒の三聚淨戒に相當するものにして、次の如き意義を有す。

第一――消極的（止惡）┐自利
第二――積極的（作善）┘
第三―――――――――利他．
（この事は後の諸度にも通じて言ふことを得べし）

【四四】耐怨害忍。怨害を受くる事は自ら作せし先業の報なりと觀じて、之を忍受すること。

【四五】安受苦忍。菩提の果を欣求するが故に百千拘胝の大苦をも安んじて忍受すること。

【四六】諦察法忍。前二忍の忍は忍受の義なるも、今の忍は安忍或は忍知の義にて、智の異名なり。智力よく一切法を

と爲すや」と。(ロ)(イ)「善男子、當に知るべし、此の事に略して[五〇]六種有り。(ロ)(A)一には喜んで財富自在なる諸の欲樂を樂欲する中に於て、深く功徳なり及與び勝利なりと見、(B)二には所樂に隨つて身語意を縱にし、而して現行する中に於て、深く功徳なり及與び勝利なりと見、(C)三には他の輕蔑するに堪忍せざる中に於て、深く功徳なり及與び勝利なりと見、(D)四には勤修せずして欲樂に著する中に於て、深く功徳なり及與び勝利なりと見、(E)五には憒鬧に處する世雜亂の行に於て、深く功徳なり及與び勝利なりと見、(F)六には見聞・覺知・言說・戲論に於て、深く功徳なり及與び勝利なりと見るなり」と。(2)(イ)「世尊、是の如き一切の波羅蜜多に、何の果異熟かあるや」と。(ロ)(イ)「善男子、當に知るべし、此れにも亦略して[五一]六種有り。(ロ)一には大財富を得、二には善趣に往生し、三には無怨無壞にして諸の喜樂多く、四には衆生の主と爲り、[五二]五には身に惱害無く、[五三]六には大宗葉有り」と。(3)(イ)「世尊、何等をか名けて、波羅蜜多の間雜染法と爲すや」と。(ロ)(イ)「善男子、當に知るべし、略して四種の加行に由る。(ロ)一には無悲の加行の故に、二には不如理の加行の故に、三には不常の加行の故に、四には不慇重の加行の故に。(ハ)不如理の加行とは、謂く餘の波羅蜜多を修行する時、餘の波羅蜜多に於て遠離し、失壞するなり」と。(4)(イ)「世尊、何等をか名けて、非方便の行と爲すや」と。(ロ)「善男子、若し諸の菩薩、波羅蜜多を以て衆生を饒益する時、但財物のみを攝して衆生を饒益して便ち喜足を爲し、而して其れをして不善處を出して善處に安置せしめず、是の如きを名けて、非方便の行と爲す。(ハ)何を以ての故に、(ニ)善男子、衆生に於て唯此の事を作すを、實の饒益と名くるに非ざればなり。(ホ)譬へば糞穢の若しくは多きにもあれ、若しくは少きにもあれ、終に能く香潔と成らしむること有ること無きが如し。(ヘ)是の如く衆生は行苦に由るが故に、其の性是れ苦なり。方便して但財物のみを以て、暫相饒益して樂と成さしむ可きこと有ること無し。唯妙善法の中に安處せしむること有るのみ、方に第一の饒益と名くることを得可し」と。

正思擇して眞如を觀察するが故に諦察法忍と名く。

【四七】被甲精進。その心の勇悍なることを甲冑を被れる戰士に譬ふ。

【四八】饒益有情を云々。六神通を起し自在に金銀魚米等を變現して、飢饉疾疫等の有情の衆苦を拔濟する所依となる禪定なり。

※(一)五相の因縁を辯ず
- (一)菩薩の請問
- (二)世尊の正答
  - (1)數を標して名を列す
  - (2)別して五相を釋す
    - (1)無染着の相…(5)正廻向の相
  - (3)間に隨つて重ねて釋す
    - (1)諸の相違の事を分別す
      - (イ)菩薩の請問
      - (ロ)世尊の正答
        - (イ)總標して數を擧ぐ
        - (ロ)次第に別釋す
          - (A)施度に違する事…(F)慧度に違する事
    - (2)諸の果異熟を分別す
      - (イ)菩薩の請問
      - (ロ)世尊の正答

(二)※總別の七種の清淨を分別す

(一)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如き一切の波羅蜜多に幾ばくの清淨か有るや」と。(二)1)(1)佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、我終に波羅蜜多は、上の五相を除いて餘の清淨有りと說かず。(2)然るに我即ち是の如き諸の事に依つて、總と別と（を以て）當に波羅蜜多の清淨の相を說くべし。(2)(1)(イ)總じて一切波羅蜜多の清淨の相を說かば、當に知るべし、七種有り。(ロ)何等をか七と爲す。(イ)一には菩薩此の諸法に於て、他に知られんことを求めず。(ロ)二には[五四]此の諸法に於て、見已つて執著を生ぜず。(ハ)三には即ち是の如き諸法に於て疑惑を生ぜず、謂く能く大菩提を得ると爲んや否やと。(ニ)四には終に自讃毀他して輕蔑する所有らず。(ホ)五には終に憍傲放逸ならず。(ヘ)六には終に少かの所得有るに於て、便ち喜足を生ぜず。(ト)七には終に此の諸法に由つて、他に於て嫉妬慳悋を發起せず。(2)(イ)別して一切波羅蜜多の清淨の相を說かば、亦七種有り。(ロ)何等をか七と爲す。(イ)(A)謂く諸の菩薩、我が所說の七種の布施の清淨の相の如く、清淨の施を隨順し修行す。(即ち)(B)一には施物清淨に由つて、清淨の施を行ず。二には戒清淨に由つて、清淨の施を行ず。三には[五五]見清淨に由つて、清淨の施を行ず。四には[五六]心清淨に由つて、清淨の施を行ず。五には[五七]語清淨に由つて、清淨の施を行ず。六には智清淨に由つて、清淨の施を行ず。七には[五八]垢清淨に由つて、清淨の施を行ず。(C)是を七種の施清淨の相と名く。(ロ)(A)又諸の菩薩は(一には)能く善く、律儀の一切學處を制立することを了知し、(二には)能く善く[五九]所犯を出離することを了知し、(三には)[六〇]常尸羅(を具し)(四には)堅固尸羅(を具し)(五には)常作尸羅(を具し)(六には)常轉尸羅(を具し)(七には)一切所有の學處を受學す。(B)是を七種の戒清淨の相と名く。(ハ)(A)若し諸の菩薩(一には)自の所有の[六一]業果の異熟に於て、深く依信を生じて一切の所有の不饒益の事現在前する時も、憤發を生ぜず、亦反罵せず、瞋らず、打たず、恐れしめず。弄せず、(二)には種種の不饒益の事を以て、反つて害を相加へず、(三には)怨結を懷かず、(四には)若し諫誨する時は恚惱せしめ

- (イ)總標して數を擧ぐ
- (ロ)次第に列名す

(3)諸の間雜染法を分別す
- (イ)菩薩の請問
- (ロ)世尊の正答
  - (イ)總標して數を擧ぐ
  - (ロ)次第に列名す
  - (ハ)重ねて不如理の加行を釋す

(4)非方便の行を釋す
- (イ)問
- (ロ)答
- (ハ)徵
- (ニ)釋
- (ホ)喩
- (ヘ)合

【四九】波羅蜜多の諸の果異熟。諸の波羅蜜多の善業に應酬して生じたる無記の果なり。

【五〇】六種。この六種は次第に慳・悋・犯戒・瞋恚・懈怠・散動・惡慧を意味し、序の如く布施等の六波羅蜜に相違するものなり。

【五一】六種。之亦その次第の如く六波羅蜜の果異熟なり。

【五二】五には云々。これ禪定波羅蜜の果異熟なり。定力よく煩惱の敵を伏するが故に身に損害無きなり。

ず、(五には)亦復他の來りて諫誨するを待たず、(六には)恐怖と有染愛の心とに由つて、而も忍辱を行ぜず、(七には)[六二]作恩を以て而も便ち放捨せず。(B)是を七種の忍清淨の相と名く。(ニ)(A)若し諸の菩薩(一には)[六三]精進平等の性に通達し、(二には)勇猛に勤精進するに由るが故に、自擧して他を陵がず、(三には)大勢力を具し、(四には)大精進を具し、(五には)堪能なる所有り、(六には)堅固勇猛にして、(七には)諸の善法に於て終に軛を捨てず、(B)是の如きを名けて七種の精進清淨の相と爲す。(ホ)(A)若し諸の菩薩、(一には)[六四]善く相に通達する三摩地靜慮有り、(二には)[六五]圓滿三摩地靜慮有り、(三には)[六六]倶分三摩地靜慮有り、(四には)[六七]運轉三摩地靜慮有り、(五には)[六八]無所依三摩地靜慮有り、(六には)[六九]善修治三摩地靜慮有り、(七には)菩薩藏に於て聞緣修習する無量の三摩地靜慮有り、(B)是の如きを名けて七種の靜慮清淨の相と爲す。(ヘ)(A)若し諸の菩薩(一には)[七〇]増益損減の二邊を遠離し、中道を行ずるを、是を名けて慧と爲す。(二には)此の慧に由るが故に、如實に解脫門の義を了知す、謂く空、無願、無相の三解脫門なり。(三には)如實に有自性の義を了知す、謂く遍計所執、若しくは依他起、若しくは圓成實の三種の自性なり。(四には)如實に無自性の義を了知す、謂く相・生・勝義の三種の無自性性なり。(五には)如實に世俗諦の義を了知す、謂く[七一]五明處に於てなり。(六には)如實に勝義諦の義を了知す、謂く七眞如に於てなり。又無分別にして諸の戲論を離れ、純一現趣に多く住する所なるが故に、無量の總法を所緣と爲るが故に、及び毘鉢舍那の故に。(七には)能く善く[七二]法と隨法行とを成辦す。(B)是を七種の慧清淨の相と名く」と。

(三)※五相に五種の業ある事を分別す　(一)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如きの五相に、各何の業が有るや」と。(二)佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、當に知るべし、彼の相に五種の業有り。(2)謂く(1)(一には)諸の菩薩、無染著の故に、現法の中に於て、修習する所の波羅蜜多に於て、恒に常に殷重に加行を勤修し放逸有ること無し。(2)(二には)無顧戀の故に、當來の不放逸の

【五三】　六には云々。これ智波羅蜜の果なり。智よく五明の學を解するが故に宗族門葉大いに榮ゆるなり。

※(二)總別七種の清淨を分別す
- (一)菩薩の請問
- (二)世尊の正答
  - (1)總じて七種清淨の義を標す
    - (1)清淨は前五相に離れざることを明す
    - (2)正しく七種を標す
  - (2)總別の七種を示す
    - (1)總の七種を釋す
      - (イ)總じて七種を標す
      - (ロ)徵起して別釋す
        - (イ)第一……
        - (ト)第七……
    - (2)別の七種を釋す
      - (イ)總じて七種を標す
      - (ロ)徵起して別釋す
        - (イ)施の七相
          - (A)總じて七種を標す
          - (B)別して七種を釋す
          - (C)總結
        - (ロ)戒の七相

因を攝受す。(ヌ)(三には)無罪過の故に、能く正しく極善圓滿、極善清淨、極善鮮白の波羅蜜多を修習す。(ル)(四には)無分別の故に、方便善巧波羅蜜多、速に圓滿することを得。(ヲ)(五には)正廻向の故に、一切の生處に波羅蜜多及び彼の可愛の諸の果異熟皆無盡なることを得、乃し無上正等菩提に至る」と。

第十目　廣大等の五相を分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如き所說の波羅蜜多(に於て)、何者か最廣大なるや、何者か無染汚なるや、何者か最明盛なるや、何者か不可動なるや、何者か最清淨なるや」と。

(二)世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、無染著の性、無顧戀の性、正廻向の性を最廣大となし、無罪過の性、無分別の性を無染汚と(爲し)、所作を思擇するを最明盛と爲し、已に無退轉法地に入れる者を不可動と名け、若し十地の攝、佛地の攝なる者を最清淨と名く」と。

第十一目　因果俱に無盡なる事を分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に告げて曰はく、「世尊、何の因緣の故に、菩薩所得の波羅蜜多の、諸の可愛の果及び諸の異熟ば、常に盡くること有ること無く、波羅蜜多も亦盡くること有ること無きや」と。

(二)世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、展轉して相依つて生起し、修習すること間斷無きが故なり」と。

第十二目　度を愛して果を愛するに非る事を分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故にか、是の諸の菩薩は波羅蜜多を深信し愛樂して、是の如き波羅蜜多所得の可愛の諸の果異熟に於てするに非ざるや」と。

(A)釋
- (ハ)忍の七相
- (ニ)精進の七相
- (ホ)禪定の七相
- (ヘ)智慧の七相

(B)結

(ハ)―(ヘ)の下の小科は(ロ)の下のそれに同じ)

【五四】この諸法に於て云々。眞の六波羅蜜はその一々に於て三輪の執着を空ずるにあり。且く施波羅蜜に就て、能施(與ふる施主)、所施(與へらるゝ相手)、施物(與ふる物柄)の三輪に執着せざる時に清淨の施となるが如し。

【五五】見清淨。我・我所の見を離れて惠施を行ずるなり。

【五六】心清淨。憐愛の心を以て惠施を行ずるなり。

【五七】語清淨。舒顏含笑愛語して惠施を行ずるなり。

【五八】垢清淨。貪・瞋等の煩惱の纒垢を離れて惠施を行ずるなり。

【五九】所犯を出離する。懺悔法なり。

【六〇】常尸羅等。上の二相は律法の了知に約するに對し、以下の五相は實際的の受持に約す。

【六一】業果の異熟に於て云々。善惡の諸行を因として生じた

（二）世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、五の因緣の故に。（謂く）一には波羅蜜多は是れ最增上の喜樂の因なるが故に、二には波羅蜜多は是れ、其れ究竟して一切自他を饒益する因なるが故に、三には波羅蜜多は是れ當來世の彼の可愛の果の[74]異熟因なるが故に、四には波羅蜜多は諸の雜染の所依の事に非ざるが故に、五には波羅蜜多は是れ畢竟變壞の法に非ざるが故なり」と。

第十三目　最勝の威德を分別す

（一）菩薩の請問　觀自在菩薩、言さく、「世尊、一切の波羅蜜多に、各幾種の最勝の威德有りや」と。

（二）世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に知るべし、一切の波羅蜜多に各四種の最勝の威德有り。一には此の波羅蜜多に於て正しく修行する時、能く[75]慳悋と犯戒と心憤と懈怠と散亂と見趣との所治を捨つ。二には此れに於て正しく修行する時、能く無上正等菩提の眞實の資糧と爲る。三には此れに於て正しく修行する時、現法の中に於て、能く自ら有情を攝受し饒益す。四には此れに於て正しく修行する時、未來生に於て、能く廣大無盡の、可愛の諸の果異熟を得るなり」と。

第十四目　因・果・義利を分別す

（一）菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如き一切の波羅蜜多は、何の因、何の果、何の義利か有るや」と。

（二）世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、是の如き一切の波羅蜜多は、大悲を因と爲し、微妙なる可愛の諸の果異熟と、一切の有情を饒益するとを果と爲し、無上廣大の菩提を圓滿するを大義利と爲す」と。

[76]第十五目　衆生の自業の過失を分別す

る無記の果を業果の異熟と言ふ。然してこの物在の果は決して偶發的のものには非ずして、曾て自ら成ぜし業の結果なりと深く緣起の正理を仰信するをば「深く依信を生す」と言ふ。

【六二】作恩を以て便ち放捨せず。一度衆生を饒益して足れりとなさず、更に餘事を以て饒益し永久に之を廢捨せざること。

【六三】精進平等性。菩薩の精進は一切所作の事の中に於て平等に運轉して、緩に過ぎず急に過ぎざること。

【六四】善く相に通達する三摩地靜慮。これ俗諦の相に通達する定なり。

【六五】圓滿三摩地靜慮。これ勝義諦圓滿の眞如を緣ずる定なり。

【六六】俱分三摩地靜慮。通じて眞俗二諦を緣ずる定なり。

【六七】運轉三摩地靜慮。これ有漏作意を運轉せしむる所依となる定の意にて、加行智相應の定なり。

【六八】無所依三摩地靜慮。無所依なる空理を緣する所依となる定の意にて、根本智相應の定なり。

【六九】善修治三摩地靜慮。善く種々の差別の諸行を修治する所依となる定の意にて、後

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、(復)佛に白して言さく、「世尊、若し諸の菩薩一切無盡の財寶を具足し、大悲を成就せば、何に緣つてか、世間に現に衆生の貧窮の得可き有りや」と。

(二)※世尊の正答　(一)佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(イ)「善男子、是れ諸の衆生の自業の過失のみ、(ロ)若し爾らずんば、菩薩は常に他を饒益する心を懷き、又常に無盡の財寶を具足せるに、若し諸の衆生に自の惡業の能く障礙を爲すこと無くんば、何んぞ世間に貧窮の得可き有らんや。(二)譬へば餓鬼の大熱渇の爲に、其の身を逼迫せられて、大海の水悉く皆涸竭せりと見るが如きは、大海の過に非ずして是れ餓鬼の自業の過なるのみ。(三)是の如く菩薩の施す所の財寶は、猶し大海の如く過失有ること無し、是れ諸の衆生の自業の過なるのみ。猶し餓鬼の自の惡業力もて果有ること無からしむるが如し」と。

第十六目　般若を以て無性を取ることを分別す

(一)菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、菩薩は何等の波羅蜜多を以て、一切法の無自性性を取るや」と。

(二)世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、般若波羅蜜多を以て、能く諸法の無自性性を取る」と。

(三)菩薩の疑難　「世尊、若し般若波羅蜜多能く諸法の無自性性を取らば、何が故に有自性性を取らざるや」と。

(四)世尊の釋通[七七]　「善男子、我終に無自性性を以て、無自性性を取るとは說かず。然るに無自性性は諸の文字を離るる自內の所證なり。言說文字を捨てゝ而も能く宣說す可からず。

(五)結義　是の故に我、般若波羅蜜多は能く諸法の無自性性を取ると說く」と。

第十七目　三種の波羅蜜多を分別す

得智相應の定なり。

【七〇】 增益損減云々。三性中に於て人若し有に執ずれば遍計の無法をも有なりと計度す。之を增益と言ふ。人若し空に執ずれば依圓の有法をも空捨す。之を損減と言ふ。この偏有偏空の二邊を離れたる非有非空の妙理を中道と言ふ。

【七一】 五明處。一に聲明、言說文字の學。二に工巧明、技術工藝の學。三に醫方明、醫學。四に因明、論理學。五に內明、自家の敎學、佛敎にては三藏・十二分敎を以て內明となす。以上の五何れも各々の義を開闡し證明すれば五明と名け、これ道を修する者の必須の科業なり。

【七二】 法と隨法行。法とは所證の涅槃、隨法行とは法に隨順して實際的に修行する能證の八支聖道なり。

＊(三)五相に五種の業あることを分別す
- (一)菩薩の請問
- (二)世尊の正答
  - (1)總じて五業を標す
  - (2)別して五種を釋す
    - (1)第一……
    - (2)第五……

【七三】 廣大等。行相の廣大な

(一) 菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、佛所說の[七八]波羅蜜多、[七九]近波羅蜜多、[八〇]大波羅蜜多の如き、云何んが波羅蜜多、云何んが近波羅蜜多、云何んが大波羅蜜多なるや」と。

(二) 世尊の正答　佛觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、若し諸の菩薩、無量の時を經て(布)施等を修業し、善法を成就す、而るに諸の煩惱猶故らに現行し、未だ制伏すること能はずして、然も彼(の煩惱)の爲に伏せらる、謂く勝解行地に於て[八一]輭と中との勝解轉ずる時、是を波羅蜜多と名く。復無量の時に於て布施等を修行し、漸く復增上して善法を成就すれども、而も諸の煩惱猶故らに現行す。然れども能く(此れを)制伏して、彼に伏せらるるに非ず、謂く初地從り已上是を近波羅蜜多と名く。復無量の時に於て(布)施等を修行し、轉た復增上して善法を成就し、一切の煩惱皆現行せず、謂く八地從り已上是を大波羅蜜多と名く」と。

第二項　修習の相を示す

第一目　麁重斷ずるによりて隨眠を顯示する事を分別す

(一) 諸地に三種隨眠ある事を示す　(一)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、此の諸地の中の煩惱、隨眠に幾種が有る可きや」と。(二)佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、略して三種有り。(2)(1)(イ)一には[八二]害伴隨眠、(ロ)謂く前五地に於けるなり。(ハ)何を以ての故に、(ニ)善男子、諸の不俱生(分別起)の現行の煩惱は、是れ俱生煩惱の現行の助伴なり。彼爾の時に於て永く復有ること無し、(ホ)是の故に說いて害伴隨眠と名く。(2)(イ)二には[八三]羸劣隨眠、(ロ)謂く第六第七地の中に於けるなり。(ハ)微細なる現行、若しくは修(道の力)に伏せられて現行せざるが故なり。(3)(イ)三には微細隨眠　(ロ)謂く第八地已上に於けるなり。(ハ)此れ從り已去、一切の煩惱復現行せず、唯所知障のみ有つて依止と爲るが故なり」と。

(二)※正しく麁重斷の所顯示を示す　(一)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、此の諸の隨眠は、幾

ゐを廣大と言ひ、自性無染の無分別智の行相を無染汚と言ひ、以上の二者共に十地に通じてこの義あり。又勝れたる思擇力を以て六波羅蜜を行ずるを明盛と言ひ、之は前七地に於てこの義あり。又現行の煩惱の爲に心の動かされざるを不可動と言ひ之は八・九の二地に局りてこの義あり。

【七四】 異熟因、無記の果を感得すべき原因となる善惡の二業。

【七五】 慳恪犯戒等。これ次第の如く布施等の六波羅蜜所治の六弊なり。

【七六】 以上の諸門は通じて六波羅蜜に就て辯ずるも、以下の第十五・六の二門は特に布施と般若との二に就ての疑義を釋明するなり。

※(二)世尊の正答
- (一)法說
  - (イ)順釋
  - (ロ)反釋
- (二)喩說
- (三)合說

【七七】 然るに無自性々は云々。無自性々とは決して無自性なる固然たる實境ありて、之に向つて了解認識を起すと言ふ如きものではなくして、正し

種の麁重を斷じてか顯示せらるゝや」と。(三)佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、但二種に由るのみ。(2)謂く[八四]皮に在る麁重を斷ずるに由るが故に、彼の(害伴羸劣の)初の二を顯はし、復膚に在る麁重を斷ずるに由るが故に、彼の第三(の微細)を顯はし、若し骨に上る麁重を斷ずれば、我永に一切の隨眠を離ると說く、位佛地に在り」と

(三) 麁重斷の劫量を分別す　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、幾ばくの不可數劫を經てか、能く是の如きの麁重を斷ずるや」と。佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、三大不可數劫、或は無量劫を經るなり。所謂年月・半月・晝夜・一時・半時・須臾・瞬息・刹那の量劫數ふ可からざるが故なり」と

第二目　諸地の煩惱の相と失と德とを示す

(一) 菩薩の請問　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の諸の菩薩、諸地の中に於て、生ずる所の煩惱は、當に何の相、何の失、何の德ありと知るべきや」と。

(二)※世尊の正答　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、(一)(1)「善男子、無染汚の相なり。(2)何を以ての故に、(3)是の諸の菩薩は初地の中に於て、定んで一切諸法の法界に於て已に善く通達す。此の因緣に由つて、菩薩は要ず知りて方に煩惱を起す、知らざるが爲には非ず。(4)是の故に說いて無染汚の相と名く。(二)(1)自身の中に於て苦を生ずること能はず。故に(2)過失無し。(三)(1)菩薩は是の如き煩惱を生起して、有情界に於て能く苦の因を斷ぜしむ。(2)是の故に彼に無量の功德有り」と。

(三) 菩薩の讚歎　觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「甚だ奇なり、世尊、無上菩提に乃ち是の如き大功德利有つて、諸の菩薩の生起せる煩惱をして、尙一切有情・聲聞・(及び)獨覺の善根に勝れしむ、何に況んや其の餘の無量の功德をや」と。

第三項　一乘の密意を示す

へこれ對境に對する横執を離れ、空有の相を離れたる正智による絕對的なる內證の所觀である。如是く無自性々が內的の實證法たる以上、之に相對する有自性を以て問ふも問意を成ぜざるなりとの意。

【七八】波羅蜜多。これ地前の初阿僧祇所修の六度なり。

【七九】近波羅蜜多。これ第二阿僧祇所修の六度にして、これ漸く菩提の果に近づけるが故に近と名く。

【八〇】大波羅蜜多。これ第三阿僧祇修の六度にして、八地以上は任運無功用にして一々の行中に無量行を修するが故に大と名く。

【八一】輭と中との勝解。輭とは下品、中とは中品なり。地前には未だ上品の勝解無きが故に。

※(一)諸地に三種隨眠あることとを示す。
- (一)菩薩の請問
- (二)世尊の正答
  - (1)總じて三種を標す
  - (2)別して三種を釋す
    - (1)害伴隨眠
      - (イ)標名
      - (ロ)配位
      - (ハ)徵結

第一目　菩薩の請問

觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、世尊の若しくは聲聞乘、若しくは復大乘も、唯是れ一乘なりと說きたまふが如き、此れ何の密意(みっち)があるや」と。

第二目　世尊の正說

(一) **一乘の密意を示す**　佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、我、彼の聲聞乘の中に於て、種種の諸法の自性を宣說するが如きは、所謂五蘊、或は內(界)の六(根)處、或は外(界)の六(境)處なり。是の如き等の類をば大乘の中に於て、即ち彼の法は同一法界、同一理趣なりと說くが故に、我乘の差別性を說かず。

(二) **謬解の失を示す**　中に於て或は言の如く義に於て、妄りに分別を起して[八五]一類は增益(ぞうやく)し、一類は損減すること有り。又諸乘差別の道理に於て互に相違せりと謂つて、是の如く展轉して遞(たがひ)に諍論を興す。

(三) **密意の義を結す**　「是の如きを名けて此の中の密意と爲す」と。

第三節　頌を以て重說す

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰はく、

(一)[八六]「諸地の攝(せふ)と[八七]想と所對治と、　殊勝と生と願と及び諸學と、
佛この大乘を說くに依由つて、　此れに於て善く修して大覺を成ず。
(二)諸法の種種の性を宣說し、　復皆同一理趣なりと說く。
謂く下乘或は上乘に於てなり、　故に我、乘に異性無しと說く。
(2)言の如く義に於て妄りに分別して、　或は增益し或は損減すること有り。

(二)正釋
(ホ)結名
(2)羸劣隨眠
(イ)標名
(ロ)配位
(ヘ)正釋
(3)微細隨眠

（(3)の下の小科は(2)のそれに同じ。）

【八二】害伴隨眠。害伴とは伴類を除去するの意にて、見道以前に於ては俱生と分別との二障互に隨伴して起るも、初町に於て入見道すると同時に今まで隨伴せし分別起の二障を斷盡するが故に、この初地以上に於て有する俱生の二障を害伴隨眠と言ふ。こゝに所謂俱生並に分別(經には不俱生と言ふ)とは、大凡上に說く十地に於て斷ずる諸障を總攝して、我執より起る煩惱障と法執より起る所知障との二種となす。然るにこの二障共に分別起のものと俱生起のものとの二種あり。分別起とは邪師邪教邪思惟の緣によりて生ずる後天的の惑を言ひ、俱生起とは之等の緣を假らずして自然に起る先天的の惑を言ふ。然して分別起はその力强

此の二種互に相違せりと謂つて、愚癡に意解して乖諍（けじやう）を成ず」と。

第二章　奉持の得益

第一節　經名の奉持

爾の時觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の解深密法門の中に於て、此れをば何の教とか名け、我當に云何んが奉持すべきや」と。佛、觀自在菩薩に告げて曰く、「善男子、此れを諸地波羅蜜多了義の教と名け、此の諸地波羅蜜多了義の教に於て、汝當に奉持すべし」と。

第二節　時衆の得益

此の諸地波羅蜜多了義の教を說きたまふ時、大會の中に於て、七十五千の菩薩有つて、皆菩薩の[八八]大乘光明三摩地を得たりき。

きが故に却つて斷じ易く、見道の一剎那に於て頓斷さるゝに對して、俱生起はその力弱きが故に反つて斷じ難く、修道の長時に於て漸斷さるゝなり。之を十地に配して圖示するに

煩惱障（分別・俱生）　所知障（分別・俱生）

初地 ─ 入心 ── 見道
　　　 住心
　　　 出心
第二地
……
第十地 ─────── 修道
滿心金剛無間道

【八三】 麁劣隨眠・微細隨眠。この二者共に先の害伴隨眠より別出して、別名を附したるものにして六七の二地に於けるものはその過失弱きが故に麁劣隨眠と名け、八地以上に於けるものは微細にして知り難きが故に微細隨眠と名くるなり。

*(三)正しく麁重斷の所顯示を示す
(一)菩薩の請問
(二)世尊の正答
　(1)總標
　(2)別釋

【八四】 皮膚骨。上の三隨眠の深淺をこの三者を以て示すなり。

*(二)世尊の正答
(一)無染汚の相
　(1)標名
　(2)反結
　(3)正釋
　(4)總結
(二)過失あることなし
　(1)釋
　(2)結
(三)無量の德あり
　(1)釋
　(2)結

【八五】 一類。一類の一は元・明の二本に二に作る。

*第三節　重頌
(一)三段の大意を頌す
(二)一乘の密意を頌す
　(1)一乘の意を述ぶ
　(2)謬解の失を述ぶ

【八六】 諸地の攝と想と云々。攝乃至願は長行中に於て十地を說く第一節中の六項を指し、諸學とは長行中に於て波羅蜜を說く第二節の全體を指す。

【八七】 想。これ名の異名なり。一切の名句文は想より生ずるが故に能生に從つて名となせるなり。

【八八】 大乘光明三摩地。大乘不共の妙法門を照す妙智の所依となる定なり。

卷の第五

如來成所作事品第八[一]

第一章　問答して正說す

第一節　法身の相を明す

第一項　正しく法身の相を明す

第一目　菩薩の請問

爾の時曼殊室利(まんじゅしり)[二]菩薩摩訶薩、佛に請問して言さく、「世尊、佛所說の如來の[三]法身の如き、如來の法身に何等の相か有るや」と。

第二目　世尊の正說

佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、

(一)法身の相を明す　善男子、若し諸地の波羅蜜多に於て、善く出離を修し、(二)轉依(てんね)[四]成滿す。是を如來の法身の相と名く。

(二)※不可思議を明す　(一)當に知るべし、(1)此の相は二の因緣の故に不可思議なり。(2)無戲論(むけろん)[五]の故に、無所爲の故に。(二)而るに諸の衆生は戲論に計著し、所爲有るが故に(爾らず)と。

第二項　二乘に對して勝れたる事を顯はす

第一目　二乘の轉依を解脫身と名くる事を明す

(一)法身と名けざることを示す　世尊、聲聞・獨覺所得の轉依を法身と名くるや不や」と。「善男子、法

【一】如來成所作事。如來とは梵に多陀阿伽陀(tathāgata)と言ひ、佛の十號中の一なり。眞如の道に乘じて固より果に來るが故に如來と名け、或は眞如より來生して三界を化益するが故に如來と名く。(今は後取に據る)成所作事とは佛は大悲心を以て諸の有情を利樂せんと欲するが故に、普く十方に於て或は化身化士或は神變神通等を現じて、本願に應同したる所作の事を成辦し給ふなり。

【二】曼殊室利(mañjuśrī)。此に妙吉祥と譯す。舊に文殊師利と言ふに同じ。

【三】法身。所證の涅槃(理)と能生の菩提(智)を具する佛の眞身を法身と言ふ。身とは理智顯現して有爲(智)無爲(理)一切功德法の所依なり。體性なるの義なり。故にこれ三身中の自性身・受用身の二者を攝するもの(三を總相の法身と言ふ)にして、たゞ自性身のみを指して法身と言ふ場合(之を別相の法身と言ふ)と趣を異にするなり。

【四】轉依。轉とは轉捨し轉得すること。即ち煩惱所知の二障の種子を轉捨して、序の如く涅槃と菩提との二妙果を轉得するなり。依とは所依の義にて、第八識を指し。第八

身と名けず」と。

(二) 解脫身と名くることを示す　世尊、當に何の身とか名くべきや」と。「善男子、[六]解脫身と名く。

第二目　正しく二身に約して三乘との等差を明す

解脫身に由るが故に、一切の聲聞・獨覺と諸の如來と平等平等なりと說く。法身に由るが故に、差別ありと說く。如來の法身差別有るが故に、無量の功德、最勝の差別、算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり」と。

第二節　化身の相を明す

第一項　如來身生起の相を明す

第一目　菩薩の請問

曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、我當に云何んが應に如來生起の相を知るべきや」と。

第二目　世尊の正答

佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、(一)「善男子、一切如來の[七]化身の作業は、[八]世界の起るが如く、一切の種類は如來功德衆の莊嚴する所にして、住持を相と爲す。(二)當に知るべし、化身の相は生起有り、法身の相は生起有ること無し」と。

第二項　如來の三輪の相を明す

第一目　身輪の相を明す

(一) 菩薩の請問　曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく「世尊、云何んが應に化身を示現する方便善巧を知るべきや」と。

(二) 世尊の正答　佛、曼殊室利菩薩に告げて曰さく、「善男子、[九]遍ねく一切の[一〇]三千大千佛國土の中

識は如是き轉捨と轉得との所依なるが故に轉依と名く。

※(二)不可思議を明す
- (一)正しく不思議を明す
  - (1)總標して數を擧ぐ
  - (2)次第に名を列す
- (二)衆生の謬執を明す

【五】無戲論・無所爲。四句百非の相を離れたるを無戲論と言ひ、惑業の爲作を離れたるを無所爲と言ふ。

【六】解脫身。二乘の依身は煩惱障を解脫して、涅槃の理を得たるのみなるが故に解脫身と言ふ。佛の依身が更に所知障をも斷じて、菩提の智を得て無量の功德の所依たるに同じからず。

※第二目　世尊の正答
- (一)喩を擧げて化身生起の相を辨ず
- (二)二身の生起の相の有無を辨ず

【七】化身。應化身なり。地前の菩薩並に二乘・凡夫の化益の爲に對機に應じたる種々の身を化作して感得せしむるを言ふ。

【八】世界の起るが如く。世界は必ず衆生の業增上力に酬ひて起るが如く、如來身亦佛陀の因位所修の願行に住持せられて生起するなり。

【九】遍く一切三千大千等。佛陀の始より終に至る一期の

に於て、[11]或は衆の推許せる增上王家、或は衆の推許せる大福田家に同時に入胎し、誕生し、長大し、[12]受欲し、出家し、苦行を行ずることを示し、苦行を捨て已つて等正覺を成ず、(是の如く)次第に示現するを、是を如來の化身を示現する方便善巧と名く」と。

第二目　語輪の相を明す

(一)※三種の言音の差別を明す　(一)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、凡そ幾種の一切如來身に住持せらるる言音差別有つてか、此の言音に由つて、所化の有情の未だ成熟せざる者は、其れをして成熟せしめ、已に成熟せる者は、此れを緣じて境と爲し、速かに解脫を得るや」と。(二)佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、如來の言音に略して[13]三種有り、一には契經、二には調伏、三には本母なり」と。(三)世尊、云何んが契經、云何んが調伏、云何んが本母なるや」と。(四)(1)(イ)「曼殊室利、若し此の處に於て、我、攝事に依つて諸法を顯示す、是を契經と名く、(ロ)謂く四事に依り、或は九事に依り、或は復二十九事に依る。(3)(イ)(イ)云何んが四事なる。(ロ)一には聽聞の事、二には歸趣の事、三には修學の事、四には菩提の事なり。(ロ)(イ)云何んが[14]九事なる。(ロ)一には施設有情の事、二には彼の所受用の事、三には彼の生起の事、四には彼の生じ已つて住するの事、五には彼の染淨の事、六には彼の差別の事、七には能宣說の事、八には所宣說の事、九には諸の衆會の事なり。(ハ)(イ)云何んが名けて[15]二十九事と爲す。(ロ)謂く(一には)雜染品に依つて諸行を攝するの事、(二には)彼次第に隨轉するの事、(三には)即ち是の中に於て補特伽羅の想を作し已つて、當來世に於て流轉する因の事、(四には)[16]法の想を作し已つて、當來世に於て流轉する因の事有り。(五には)情淨品に依つて[17]念を所緣に繫くるの事、(六には)即ち是の中に勤めて精進するの事、(七には)心安住するの事、(八には)現法樂住の事、(九には)一切の苦緣を超ゆる方便の事、(十には)彼の遍知の事、此に復[18]三種あり、(即ち)顚倒を遍知する所依處の故に、有情の想に依る外の有情の中の邪行を遍知す

間を八相に分ち、特にその中の成道を中心とするが故に之を八相成道と言ふ。即ち降兜率・入胎・出胎・出家・降魔・成道・轉法輪・入滅之なり(諸書出沒異同多し。)今本經のこの一文は上の八相に全く符合するに非るも又大差なきを知るべし。

【一〇】三千大千佛國土。化身所行の處たる化土の事。三千の義は前既に釋する所の如し。

【一一】或は衆の推許せる增上王家乃至大福田家。增上王家とは刹利種、大福田家とは婆羅門種、この二者共に人趣に於ける最增上の階級なり。

【一二】受欲。妃を娶り婇女を侍せしめて欲樂を享受するなり。

※(一)三種の言音の差別を明す
- (一)問
- (二)答
- (三)徵
- (四)釋
  - (1)契經
    - (1)總標して略說す
    - (2)三種の名を列す
    - (3)次第に別釋す
      - (イ)四事
        - (イ)徵起
        - (ロ)列名

る所依處の故に、(及び)內(心)に增上慢を遍知する所依處の故なり。(十一には)修の依處の事、(十二には)作證の事、(十三には)修習の事、(十四には)[一九]彼をして堅固ならしむるの事、(十五には)[二〇]彼の行相の事、(十六には)[二一]彼の所緣の事、(十七には)[二二]已斷未斷の觀察善巧なるの事、(十八には)[二三]彼の散亂の事、(十九には)彼の[二四]不散亂の事、(二十には)[二五]不散亂依處の事、(二十一には)[二六]劬勞加行を修習するの事、(二十二には)[二七]勝利を修習するの事、(二十三には)[二八]彼の堅牢の事、(二十四には)[二九]聖行を攝するの事、(二十五には)[三〇]聖行の眷屬を攝するの事、(二十六には)[三一]眞實に通達するの事、(二十七には)[三二]涅槃を證得するの事、(二十八には)善說法の毘奈耶の中に於て、[三三]世間の正見すら一切の外道所得の正見の頂を超昇するの事、及び(二十九には)卽ち此れに於て修せずして退するの事有り。善說法毘奈耶の中に於て、修習せざるが故に、說いて名づけて退と爲す。見の過失の故に、名づけて退と爲すには非ず。(2)(イ)曼殊室利、若し是の處に於て我、聲聞及び諸の菩薩に依つて、[三四]別解脫及び[三五]別解脫相應の法を顯示す、是を調伏と名く」と。(ロ)(イ)「世尊、菩薩の別解脫は幾相の所攝なるや」と。(ロ)(イ)「善男子、當に知るべし、七相あり。(ロ)一には[三六]受(戒)の軌則の事を宣說するが故に、二には[三七]他勝に隨順する事を宣說するが故に、三には毀犯に隨順する事を宣說するが故に、四には有犯の自性を宣說するが故に、五には無犯の自性を宣說するが故に、六には[三八]所犯を出ることを宣說するが故に、七には[三九]律儀を捨することを宣說するが故なり。

(3)(イ)曼殊室利、若し是の處に於て我十一種の相を以て、決了し分別して諸法を顯示す、是を本母と名く。(2)何等をか名づけて十一種の相と爲す。一には世俗の相、二には勝義の相、三には菩提分法所緣の相、四には(彼の)行相、五には(彼の)自性の相、六には彼の果相、七には彼の領受開示の相、八には彼の障礙法の相、九には彼の隨順法の相、十には彼の過患の相、十一には彼の勝利の相なり。

(ハ)(イ)(イ)世俗の相とは當に知るべし、(此れに)三種あり、(ロ)一には補特伽羅を宣說するが故に、二には

- (ロ)九事
- (ハ)廿九事
- (ロ)(ハ)の下の小科は(イ)の下のそれに同じ)
- (2)調伏
  - (1)總標して略說す
  - (2)七種の相を明す
    - (イ)菩薩の請問
    - (ロ)世尊の正答
      - (イ)總標して數を擧ぐ
      - (ロ)次第に名を列す
- (3)本母
  - (1)總じて十一種を標す
  - (2)徵起して名を列す
  - (3)次第に別釋す
    - (イ)世俗の相
      - (イ)總標して數を擧ぐ
      - (ロ)次第に名を列す
    - (ロ)勝義の相
    - (ハ)菩提分法所緣の相
    - (ニ)行相
      - (イ)總じて八行觀を標す
      - (ロ)徵起して名を列す
      - (ハ)次第に別釋す
        - (A)諦實

遍計所執の自性を宣説するが故に、三には[四〇]諸法の作用事業を宣説するが故なり。(ロ)勝義の相とは當に知るべし、七種の眞如を宣説するが故なり。(ハ)菩提分法所緣の相とは當に知るべし、遍ねく一切種の所知の事を宣説するが故なり。(ニ)(イ)行相とは當に知るべし、八行觀を宣說するが故なり。(ロ)云何んが名けて八行觀と爲す耶。一には諦實の故に、二には安住の故に、三には過失の故に、四には功德の故に、五には[四一]理趣の故に、六には流轉の故に、七には道理の故に、八には總別の故なり。(ハ)(A)諦實とは謂く諸法の眞如なり。(B)安住とは謂く、或は補特伽羅を安立し、或は復諸法の遍計所執の自性を安立し、或は復[四二]一向、分別、反問、(及び)置記を安立し、或は復隱密と顯了との記別の差別を安立するなり。(C)過失とは謂く我、諸の雜染法に無量の門の差別の過患有りと宣言す。(D)功德とは謂く我、諸の清淨法に無量の門の差別の勝利有りと宣說す。(E)(A)理趣とは當に知るべし、(此れに)六種あり。(B)一には眞義理趣、二には證得理趣、三には教導理趣、四には[四三]二邊を遠離する理趣、五には不可思議理趣、六には意趣理趣なり。(F)流轉とは所謂三世[四四]三有爲相及び[四五]四種の緣なり。(G)(A)道理とは當に知るべし、(此れに)四種あり。一には[四六]觀對道理、二には[四七]作用道理、三には[四八]證成道理、四には[四九]法爾道理なり。(B)觀待道理とは謂く、若しくは因若しくは緣、能く諸行を生じ、及び隨說を起す、是の如きを名けて觀待道理と爲す(2)作用道理とは謂く若しくは因若しくは緣、能く諸法を得し、或は能く成辦し、或は復生じ已つて諸の業用を作す、是の如きを名けて作用道理と爲す。(3)(a)證成道理とは謂く若しくは因若しくは緣、能く所立、所說、所標の義をして成立することを得せしめ、(敵論者をして)正しく覺悟せしむ、是の如きを名けて證成道理と爲す。又此の道理に略して二種有り、[五〇]一には清淨、二には不清淨なり。[五一]五種の相に由つて名けて清淨と爲し、七種の相に由つて不清淨と名く。

(ト)(甲)(甲)云何んが五種の相に由つて名けて清淨と爲す。一には現見所得の相、二には依止現見所得

(B)安住
(C)過失
(D)功德
(E)理趣
- (A)總じて六種を標す
- (B)次第に名を列す

(F)流轉
(G)道理
- (A)總標して名を列す
- (B)次第に別釋す
  - (A)觀待道理
  - (B)作用道理
  - (C)證成道理
    - (A)總標して名を列す
    - (B)二相を廣示す
      - (甲)清淨の五種の相を示す
        - (甲)徵起して列名す
        - (乙)次第に別釋す
          - (天)現見可得の相

の相、三には自類譬喩所引の相、四には圓成實の相、五には善清淨言教の相なり。(乙)(天)現見所得の相とは謂く一切の行は皆無常の性なり、一切の行は皆是れ苦の性なり、一切の法は皆無我の性なりと、此れを世間現量の所得と爲す。是の如き等の類を、是を現見所得の相と名く。(地)依止現見所得の相とは謂く一切の行は皆[五二]剎那の性なり、[五三]他世有の性なり、[五四]淨不淨業無失壞の性なり。(何を以ての故に)、彼の能依の麁なる無常の性は、現に可得なるに由るが故に、諸の有情の種種の差別は、種種の業に依つて現に可得なるに由るが故に、(及び)諸の有情の若しくは樂若しくは苦は、淨不淨の業を以て依止と爲ること現に可得なるに由るが故なり。此の因緣に由つて不現見に於ても、比度を爲す可し。是の如き等の類を、是を依止現見所得の相と名く。(玄)自類譬喩所引の相とは謂く內外の諸行聚の中に於て、諸の世間の共に了知する所の[五五]所得の生死を引いて、以て譬喩と爲し、諸の世間の共に了知する所の所得の生等の種種の苦相を引いて、以て譬喩と爲し、諸の世間の共に了知する所の所得の不自在の相を引いて、以て譬喩と爲し、又復外に於て諸の世間の共に了知する所の所得の衰盛を引いて、以て譬喩と爲す。是の如き等の類を當に知るべし、是を自類譬喩所引の相と名く。(黄)圓成實の相とは謂く卽ち是の如きの現見所得の相、若しくは依上現見所得の相、若しくは自類譬喩所得の相の、所成立に於て決定して能く成ず。當に知るべし、是を圓成實の相と名く。(宇)善清淨言教の相とは謂く一切智者の宣說する所の涅槃究竟寂靜と言ふが如き、是の如き等の[五六]類を當に知るべし、是を善清淨言教の相と名く。(丙)善男子、是の故に、此の五種の相に由るが故に、善く清淨の道理を觀察すと名く。清淨に由るが故に應に修習すべし」と。(丁)(天)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、一切智の相とは、當に(此れに)幾種有りと知るべきや」と。(地)佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、(天)「善男子、略して五種有り。(地)一には若し世間に出現すること有らば、一切智の聲普ねく聞へざること無し。二には[五七]三十二種の大丈夫の相を成就す。三には[五八]十力を具足して、能く一

- (乙)不清淨の七種の相を明す
  - (甲)徵起して列名す
  - (乙)體を示し相を辨ず
- (戊)三量に約して結す
  - (天)總じて五種を標す
  - (地)次第に列名す
  - (玄)總結
- (天)問
- (地)答
- (丙)修習を勸む
- (丁)一切智者の相を示す
- (地)依止現見可得の相
- (玄)自類譬喩所引の相
- (黄)圓成實の相
- (宇)善清淨言教の相

切衆生の一切の疑惑を斷ず、四には[五九]四無所畏を具足して、正法を宣說し、一切の他論の爲に伏せられずして、而も能く一切の邪論を摧伏す。五には善說法毘奈耶の中に於て、八支聖道、四沙門(果)等皆現に得可きなり。(玄)是の如く(衆)生の故に、(三十二)[六〇]相の故に、疑網を斷ずるが故に、他に伏せらるるに非ずして能く他を伏するが故に、聖道、沙門(果)を現に得可きが故に、是の如きの五種を當に知るべし、名けて一切智の相と爲す。(戊)善男子、是の如く證成道理は、[六一]現量に由るが故に、[六二]比量に由るが故に、[六三]聖教量に由るが故に、(卽ち)五種の相に由つて名けて清淨と爲す。

(乙)(甲)云何んが七種の相に由つて不清淨と名くる。一には[六四]此餘同類可得の相、二には[六五]此餘異類可得の相、三には[六六]一切同類可得の相、四には[六七]一切異類可得の相、五には[六八]異類譬喩所得の相、六には[六九]非圓成實の相、七には[七〇]非善清淨言教の相なり。(乙)(天)若しくは一切法の意識の所識の性、是を一切同類可得の相と名け、若しくは一切法の相性、業法、因果の異相なる、是の如き一一の異相に隨つて、各各の異相を決定し展轉するに由つて、是を一切異類可得の相と名く。(地)(天)善男子、若しくは此餘同類可得の相に於てし、及び譬喩の中の一切の異類の相有る者は、此の因緣に由つて所成立に於て決定に非ざるが故に、是を非圓成實の相と名く。又此餘異類可得の相に於てし、及び譬喩の中の一切の同類の相有る者は、此の因緣に由つて、所成立に於て決定せざるが故に、亦非圓成實の相と名く。(地)圓成實に非ざるが故に、善く清淨の道理を觀察するに非す。清淨ならざるが故に、應に修習すべからず。(玄)若しくは異類譬喩所引の相、若しくは非善清淨言教の相は、當に知るべし、體性皆清淨ならず。(丙)法爾道理とは謂く如來の出世にもあれ、若しくは不出世にもあれ、法性安住せる[七一]法住法界なり。是を法爾道理と名く。(丁)[七二]總別とは謂く先に總じて一句の法を說き已つて、後後の諸句に(於て)差別し、分別し、究竟し、顯了にす。

(天)一切の同異類の體を定む
(地)非圓成實相の義を分別す
(天)正しく二種の相を明す
(地)不可修習を示す
(玄)體性の清淨ならざることを結す

(H)總別
(ホ)自性の相
(ヘ)彼が果相
(ト)領受開示の相
(チ)彼が障碍法の相
(リ)彼が隨順法の相
(ヌ)彼が過患の相
(ル)彼が勝利の相

【三】三種。卽ちこれ三藏なり。(一)契經とは梵に素怛纜(sūtra)と言ふ。聖人の言はよく眞理に契會し義を貫き機を

(ホ)自性の相とは謂く我が所說の[七三]有行(相)有(所)緣の所有の能取の菩提分法なり、謂く念住等なり、是の如きを名けて彼の自性の相と爲す。(ヘ)彼の果相とは謂く若しくは世間、若しくは出世間の諸の煩惱斷(の果)及び所引發の世(間)出世間の諸果の功德なり。是の如きを名けて彼の果相を得すと爲す。(ト)彼の領受開示の相とは謂く卽ち彼に於て、解脫智を以て而も之を領受し、及び廣く他の爲に宣說し、開示す。是の如きを名けて彼の領受開示の相と爲す。(チ)彼の障礙法の相とは謂く、卽ち菩提分法を修するに於て、能く隨つて障礙する諸の染汚法なり、是を彼の障礙法の相と名く。(リ)彼の隨順法の相とは謂く卽ち彼に於て、多く作す所の法なり、是を彼の隨順法の相と名く。(ヌ)彼の過患の相とは當に知るべし、卽ち彼の諸の障礙法の所有の過失なり、是を彼の過患の相と名く。(ル)彼の勝利の相とは當に知るべし、卽ち彼の諸の隨順せる法の所有の功德なり、是を彼の勝利の相と名く」と。

(二)*不共陀羅尼の義を明す　(一)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「唯願はくば世尊、諸の菩薩の爲に契經・調伏・本母の不共外道[七四]陀羅尼の義を略說し、此の不共(外道)陀羅尼の義に由つて、諸の菩薩をして如來所說の諸法甚深の密意に入ることを得しめたまへ」と。(二)佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、汝今諦に聽け、吾當に汝が爲に不共(外道)陀羅尼の義を略說し、諸の菩薩をして吾が所說の密意の言詞に於て、能く善く悟入せしむべし。(三)(イ)善男子、若しくは雜染の法にもあれ、若しくは清淨の法にもあれ、我、一切皆作用無く、亦都て補特伽羅有ること無しと說く。一切種(皆)所爲を離るるを以ての故に、雜染の法先に染にして後に淨なるに非ず、清淨の法後に淨にして先に染なるに非ず。(2)凡夫異生麁重の身に於て、諸法と補特伽羅との自性と差別とに執著し、隨眠と妄見とを以て緣と爲すが故に、我(及び)我所を計す。此の妄見に由つて我見・我聞・我嗅・我甞・我觸・我知・我食・我作・我染・我淨と謂ふ、是の如き等の類、邪加行に轉ず。(3)若し如實に知ること有らば、是の如き者は便ち能く麁重の身を永斷し、一切の煩惱の住せざる、最極清淨にして諸の戲論を

攝すること經の緯を持するが如きに譬ふ。(二)調伏とは梵に毘奈耶(vinaya)と言ふ。三業の所作を調和し制伏するの義にてこれ律藏の事なり。(三)本母とは梵に摩呾理迦(mātṛkā)と言ふ。諸義を決了し分別して種々の道理を生ずる母胎なるが故にこの名あり。この論藏に相當す。

【一四】九事。これ序の如く。(一)五蘊　(二)十二處　(三)十二緣起　(四)四食　(五)四諦　(六)十八界　(七)七佛並に佛弟子　(八)七科道品　(九)人天の八衆を意味す。

【一五】廿九事。

1 五蘊　2 緣生　3 人執　4 法執 ── 流轉に約す
5 聞慧　6 思慧 ── 欲界
7 未至定　8 根本定 ── 色界
（欲界・色界）── 定に約す
9 ── 順解脫分
10──13 四諦に約す ── 順決擇分
14──15 ── 見道
（順解脫分・順決擇分・見道）── 修證の事を明す
（定に約す・修證の事を明す）── 還滅に約す

切衆生の一切の疑惑を斷ず、四には[六九]四無所畏を具足して、正法を宣說し、一切の他論の爲に伏せられずして、而も能く一切の邪論を摧伏す。五には善說法毘奈耶の中に於て、八支聖道、四沙門（果）等皆現に得可きなり。(玄)是の如く（衆）生の故に、（三十二）[六〇]相の故に、疑網を斷ずるが故に、他に伏せらるるに非ずして能く他を伏するが故に、聖道、沙門（果）を現に得可きが故に、是の如きの五種を當に知るべし、名けて一切智の相と爲す。(戊)善男子、是の如く證成道理は、[六一]現量に由るが故に、[六二]比量に由るが故に、[六三]聖敎量に由るが故に、（即ち）五種の相に由つて名けて清淨と爲す。

(乙)(甲)云何んが七種の相に由つて不清淨と名くる。一には[六四]此餘同類可得の相、二には[六五]此餘異類可得の相、三には[六六]一切同類可得の相、四には[六七]一切異類可得の相、五には[六八]異類譬喩所得の相、六には[六九]非圓成實の相、七には[七〇]非善清淨言敎の相なり。(乙)(天)若しくは一切法の意識の所識の性、是を一切同類可得の相と名け、若しくは一切法の相性、業法、因果の異相なる、是の如き一一の異相に隨つて、各各の異相を決定し展轉するに由つて、是を一切異類可得の相と名く。(地)(天)善男子、若しくは此餘同類可得の相に於てし、及び譬喩の中の一切の異類の相有る者は、此の因緣に由つて所成立に於て決定に非ざるが故に、是を非圓成實の相と名く。又此餘異類可得の相に於てし、及び譬喩の中の一切の同類の相有る者は、此の因緣に由つて、所成立に於て決定せざるが故に、亦非圓成實の相と名く。(地)圓成實に非ざるが故に、善く清淨の道理を觀察するに非ず。清淨ならざるが故に、應に修習すべからず。(玄)若しくは異類譬喩所引の相、若しくは非善清淨言敎の相は、當に知るべし、體性皆清淨ならず。(ロ)法爾道理とは謂く如來の出世にもあれ、若しくは不出世にもあれ、法性安住せる[七一]法住法界なり。是を法爾道理と名く。(H)總別とは謂く先に總じて一句の法を說き已つて、後後の諸句に（於て）差別し、分別し、究竟し、顯了にす。

(天)一切の同異類の體を定む
(地)非圓成實相の義を分別す
　(天)正しく二種の相を明す
　(地)不可修習を示す
(玄)體性の清淨ならざることを結す

(H)總別
(ホ)自性の相
(ヘ)彼が果相
(ト)領受開示の相
(チ)彼が障碍法の相
(リ)彼が隨順法の相
(ヌ)彼が過患の相
(ル)彼が勝利の相
三種。即ちこれ三藏なり。

【一三】(一)契經とは梵に素呾纜(sūtra)と言ふ。聖人の言はよく眞理に契會し義を貫き機を

(ホ)自性の相とは謂く我が所説の[七三]有行(相)有(所)緣の所有の能取の菩提分法なり、謂く念住等なり、是の如きを名けて彼の自性の相と爲す。(ヘ)彼の果相とは謂く若しくは世間、若しくは出世間の諸の煩惱斷(の果)及び所引發の世(間)出世間の諸果の功德なり。是の如きを名けて彼の果相を得すと爲す。(ト)彼の領受開示の相とは謂く卽ち彼に於て、解脫智を以て而も之を領受し、及び廣く他の爲に宣說し、開示す。是の如きを名けて彼の領受開示の相と爲す。(チ)彼の障礙法の相とは謂く、卽ち菩提分法を修するに於て、能く隨つて障礙する諸の染汚法なり、是を彼の障礙法の相と名く。(リ)彼の隨順法の相とは謂く卽ち彼に於て、多く作す所の法なり、是を彼の隨順法の相と名く。(ヌ)彼の過患の相とは當に知るべし、卽ち彼の諸の障礙法の所有の過失なり、是を彼の過患の相と名く。(ル)彼の勝利の相とは當に知るべし、卽ち彼の諸の隨順せる法の所有の功德なり、是を彼の勝利の相と名く」と。

(二)* 不共陀羅尼の義を明す (一)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「唯願はくば世尊、諸の菩薩の爲に契經・調伏・本母の不共外道[七四]陀羅尼の義を略說し、此の不共(外道)陀羅尼の義に由つて、諸の菩薩をして如來所說の諸法甚深の密意に入ることを得しめたまへ」と。(二)佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、汝今諦に聽け、吾當に汝が爲に不共(外道)陀羅尼の義を略說し、諸の菩薩をして吾が所說の密意の言詞に於て、能く善く悟入せしむべし。(二)(1)善男子、若しくは雜染の法にもあれ、若しくは淸淨の法にもあれ、我、一切皆作用無く、亦都て補特伽羅有ること無しと說く。一切種(皆)所爲を離るるを以ての故に、雜染の法先に染にして後に淨なるに非ず、淸淨の法後に淨にして先に染なるに非ず。(2)凡夫異生麁重の身に於て、諸法と補特伽羅との自性と差別とに執著し、隨眠と妄見とを以て緣と爲すが故に、我(及び)我所を計す。此の妄見に由つて我見・我聞・我嗅・我甞・我觸・我知・我食・我作・我染・我淨と謂ふ、是の如き等の類、邪加行に轉ず。(3)若し如實に知ること有らば、是の如き者は便ち能く麁重の身を永斷し、一切の煩惱の住せざる、最極淸淨にして諸の戲論を

擇すること經の緯を持するが如きに譬ふ。(二)調伏とは梵に毘奈耶(vinaya)と言ふ。三業の所作を調和し制伏するの義にてこれ律藏の事なり。(三)本母とは梵に摩呾理迦(mātṛikā)と言ふ。諸義を決了し分別して種々の道理を生ずる母胎なるが故にこの名あり。この論藏に相當す。

【一四】九事。これ序の如く。(一)五蘊 (二)十二處 (三)十二緣起 (四)四食 (五)四諦 (六)十八界 (七)七佛並に佛弟子 (八)七科道品 (九)人天の八衆を意味す。

【一五】廿九事。

1 五蘊 2 緣生 3 人執 4 法執 — 流轉に約す

5 聞慧 6 思慧 — 欲界

7 未至定 8 根本定 — 色界

(欲界・色界) — 定に約す

9 順解脫分

10——13 四諦に約す 順決擇分

14——15 見道

(順解脫分・順決擇分・見道) — 修證の事を明す

(定に約す・修證の事を明す) — 還滅に約す

離れたる、無爲の(所)依止を獲得し、加行有ること無けん。(四)善男子、當に知るべし、是を不共(外道)陀羅尼の義を略說すと名く」と。(三)爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も頌を說いて曰はく、

(1)「一切の雜染淸淨の法は、　皆作用も數取趣も無し、
由つて我、所爲を離れ、　染汚も淸淨も先後に非ずと宣說す。
(2)麁重の身に於て隨眠と(妄)見を緣と爲して、　我及び我所を計す。
此れに由つて妄りに我見等、　我食・我爲・我染淨と謂ふ。
(3)若し如實に知らば、　是の如き者は乃ち能く麁重の身を永斷し、
染淨無く戲論無き、　無爲の(所)依止を得て加行無からん」

と。

第三目　意輪の相を明す

(一)※如來心生起の相を分別す　(一)爾の時曼殊室利菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、云何んが應に諸の如來心生起の相を知るべきや」と。(二)佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、夫れ[七五]如來は、心意識の生起の所顯に非ず。然るに諸の如來には、無加行(むけぎやう)の心法生起すること有り。當に知るべし、此の事猶し變化の如し」と。(2)(二)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、若し諸の如來の法身、一切の加行を遠離(をんり)せば、既に加行無し、云何んが而も心法生起すること有るや」と。(三)佛、曼殊室利菩薩告げて曰はく、(イ)「善男子、先に修習する所の方便般若(はんにや)の加行力の故に、心生起することと有り。善男子、(ロ)譬へば正しく無心睡眠に入つて、(其の)覺悟するに於て、而も加行を作すに非ずして、先に作す所の加行の勢力に由つて、而して覺悟するが如く、又正しく[七六]滅盡定の中に在つて、(其の)定を起つに於て、而も加行を作すに非ずして、先に作す所の加行の勢力に由つて、

23——18 修道
27——24 無學道
（以上）慧に約す
28 勝を示す
29 退不退を決す
（以上）勤修を勸む

【一六】法想。大正本には是想に作るも、三本並に宮本によりて法想と改む。
【一七】念を所緣に繫ぐるの事。これ定を修する爲の前方便の加行なり。
【一八】三種。次第の如く欲色無色の三界の苦を知るなり。
【一九】彼をして云々。眞見道なり。四諦の理を見照して永く所得の得無漏智を退轉せしめざるが故に堅固と言ふ。
【二〇】彼の行相の事。相見道緣行能の相なり。
【二一】彼の所緣の事。相見道所緣の境界なり。
【二二】已斷未斷觀察善巧の事。已斷の見惑と未斷の修惑とを善巧に觀察するなり。
【二三】彼の散亂。見道の定を出でて未だ修道の定に入らざる間の散心なり。
【二四】不散亂。これ定なり。

還つて定從り起つが如し。睡眠及び滅盡定從り心の更に生起するが如く、(八)是の如く如來は、先に修習せる方便般若の加行力に由るが故に、當に知るべし、復心法生起すること有り」と。

(二) 化身の有心、無心を分別す　曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來の化身は當に有心と言ふべきや、無心と爲んや」と。佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、是れ有心にも非ず、亦無心にも非ず、何を以ての故に、[七七]自依心無きが故に、依他心有るが故なり」と。

第二節　如來の攝化の相を明す

第一項　如來の所行と如來の境界との差別を明す

第一目　菩薩の請問

曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來の所行と如來の境界との此の二種は、何の差別か有るや」と。

第二目　世尊の正答

佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、(一)「善男子、如來の所行とは謂く一切種の如來の共に有する、不可思議の無量の功德衆に、莊嚴せらるる清淨の佛土なり。(二)(1)如來の境界とは謂く、一切種に五界の差別あり。(2)何等をか五と爲す。一には有情界、二には世界、三には法界、四には調伏界、五には調伏方便界なり。(3)是の如きを名けて二種の差別と爲す」と。

第二項　等正覺等の三に二相無きことを示す

第一目　菩薩の請問

曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來の[七八]成等正覺・轉正法輪・入大涅槃、是の如きの三種、當に何の相なりと知るべきや」と。

【二五】不散亂依處の事。定と倶せして定の所依となる法なり。
【二六】劬勞加行を修習するの事。欲界の修惑を斷ずる無間道なり。因みに大正本にはこの上に「棄てずして」の語あるも、三本並に宮本に從つて之を除く。
【二七】勝利を修習するの事。色・無色二界の修惑を斷ずる無間道なり。
【二八】彼の堅牢の事。修道の最後なる金剛無間道なり。
【二九】聖行を攝するの事。これ無漏行たる眞智なり。
【三〇】聖行の眷屬を攝するの事。これ無漏行の心々所なり。
【三一】眞實に通達するの事。これ無學果なり。
【三二】涅槃を證得するのこと。般涅槃するなり。
【三三】世間の正見すら云々。世間の正見とは順解脫分の善根なり。これ未だ無漏を得ざるも正法に順ずるが故に外道の正見の最勝のものを超勝するなり。
【三四】別解脫。梵には波羅提木叉(pratimoksa)と言ふ。これ戒律の別名なり。受戒の作法に依りて五戒乃至具足戒を受けて身口の惡業を別々に解脫するが故に別解脫と名く。
【三五】別解脫相應の法。別解

第二目　*世尊の正答

佛、(一)曼殊室利菩薩に告げて曰はく、(1)「善男子、當に知るべし、此の三は皆二の相無し。(2)謂く等正覺を成ずるに非ず。等正覺を成ぜざるに非ず。正法輪を轉ずるに非ず。正法輪を轉ぜざるに非ず。大涅槃に入るに非ず。大涅槃に入らざるに非ず。(二)何を以ての故に、如來の法身は究竟して(淸)淨なるが故に、如來の化身は常に示現するが故なり」と。

第三項　法身、衆生に於て因緣

第一目　菩薩の請問

曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、諸の有情類は但化身に於てのみ見聞奉事して、諸の功德を生ず。如來(の法身及び受用身)は彼(の有情)に於て何の因緣か有るや」と。

第二目　世尊の正答

佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、如來(の法身及び受用身)は是れ彼の(化身の)[七九]增上と所緣との因緣なるが故に、又彼の化身は是れ如來力に住持せらるるが故なり」と。

第四項　法身の功德は解脫身異なることを明す

第一目　菩薩の請問

曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、等しく加行無くんば、何の因緣の故にか、如來の法身は諸の有情の爲に大智光を放ち、及び無量の化身の影像を出したまひ、聲聞・獨覺の解脫身には、是の如き事無きや」と。

第二目　*世尊の正答

(一)佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、(1)善男子、譬へは等しく加行無けれども、日月輪の水火二種の頗胝迦寶從りは大光明を放ち、餘の水火の頗胝迦寶には非ざるが如し。謂く[八〇]大威德の有情に住

脫に隨順してよくその助伴となる諸の方便行なり。
【三六】受軌則の事。受戒の儀式なり。
【三七】他勝。梵に波羅夷(Pārājika)と言ふ。善法が他の惡法に勝たるの意にて、殺生・偸盜・邪婬・妄語の四重罪の事なり。
【三八】所犯を出づる、犯戒し已りて懺悔によりて還淨するなり。
【三九】律儀を捨す。これ捨戒とて所得の戒を捨離するなり。
【四〇】諸法の作用事業。依他の萬法なり。
【四一】理趣。眞智所照の無倒の道理なり。
【四二】一向・分別・反問・置記。四種記論なり。前已に註する所の如し。
【四三】二邊を遠離す。二邊とは增益・損減の二執或は斷常の二見なり。
【四四】三有爲相。有爲の流轉遷流の相たる生住滅の三なり。
【四五】四種の緣。これ四緣なり。一に因緣とは諸法の直接的原因なり。二に等無間緣とは前念の心々所が開避すること によりて後念の心々所を引導するを言ふ。三に所緣々とは心々所は必ず所對の境の滅緣して起る。この所對の境を所緣々と言ふ。四に增上緣と

持せらるるが故に。諸の有情の業増上力の故に。(二)又彼の善工業者の雕飾する所の末尼寶珠從りは、印文の像を出すも、所餘の雕飾せざる者從りは(出ださ)ざるが如し。(三)是の如く無量の法界を緣ずる方便般若の極めて善く修習し、磨瑩し、集成せる如來の法身は、是れ從り能く大智光明を放ち、及び種種の化身の影像を出すも、唯彼の(聲聞、獨覺の)解脫身從りは、斯の如き事有るに非ず」と。

第五項　衆生の身財をして圓滿ならしむる由を明す

第一目　菩薩の請問

曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、世尊の、如來と菩薩との威德住持は、諸の衆生をして欲界の中に於て、刹帝利、婆羅門等の大富貴の家に生れ、人身、財寶圓滿せずといふこと無く、或は欲界の天、色無色界(等)の一切の身財の圓滿を得可からしむと說きたまふが如き、世尊、此の中に何の密意か有るや」と。

第二目　世尊の正答

佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、

(一) 所說を擧げて密意を述ぶ　「善男子、如來と菩薩との威德住持は、若しくは道にもあれ、若しくは行にもあれ、一切の處に於て能く衆生をして、身財皆圓滿することを獲得せしむるとは、卽ち所應に隨つて彼が爲に、此の道と此の行とを宣說するに、若し能く[五〇]此の道と此の行とに於て、正しく修行する者有らば、一切の處に於て獲る所の身財圓滿せずといふこと無く、若し衆生有つて、此の道と(此の)行とに於て遠背し、輕毀し、又[五一]我が所に於て損惱の心及び瞋恚の心を起さば、命終し已つて後、一切の處に於て得る所の身財下劣ならずといふこと無し。

(二) 問はざる所を擧げて義を結す　曼殊室利よ、是の因緣に由つて當に知るべし、如來及び諸の菩薩の威德住持は、但能く身財をして圓滿ならしむるのみに非ず、如來と菩薩との住持せる威德は、亦衆

は法の生ずるに當りて之を障礙せず或は之に力を與ふるを言ふ。凡そ前三緣も亦この義あれども、彼等は特殊の義によりて別緣を立つるが故に、その三緣を除く餘の一切の緣を增上緣と名く。

【四六】觀對道理。長に對して短を成じ、短に對して長を成ずる如く、相對背反の一は必ず他に待籍すると言ふ不變の道理を觀對道理と名く。

【四七】作用道理。因緣所生の有爲法には必ず事業を成辨する作用あるを言ふ。

【四八】證成道理。現量・比量・聖教量によりて證明し成立せられたる眞正の道理を言ふ。諸行無常・諸法無我の如し。

【四九】法爾道理。佛の出世・不出世に關せず元より法界に安住する自爾の道理を言ふ。例へば地水火風の四大にそれぞれ堅濕煖動の性あるが如く、又善因によりて樂果を招き惡因よりて苦果を招くが如し。

【五〇】一には清淨二には不清淨。因明の立破に於て、無過の眞能立を清淨と言ひ、有過の似能立を不清淨と言ふ。

【五一】五種の相。清淨なる無倒の道理を知る爲の五つの樣式なり。第一の現見所得の相とは現量なり。第二の依止現見所得の相とは比量なり。第

生の身財をして下劣にもならしむるなり」と。

第六項　淨穢土の難易得のことを明す

第一目　菩薩の請問

曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、諸の穢土の中に(於て)、何の事か得易く、何の事か得難きや。(又)諸の淨土の中に(於て)、何の事か得易く、何の事か得難きや」と。

第二目　世尊の正答

佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、

(一)穢土の難易得の事を示す　(一)「善男子、諸の穢土の中に(於て)は、八事は得易く、二事は得難きなり。(二)(1)何等をか名けて八事は得易しと爲す。一には外道、二には有苦の衆生、三には種姓家世興衰の差別、四には諸の惡行を行ず、五には尸羅を毀犯す、六には惡趣、七には下乘、八には下劣意樂の加行の菩薩なり。(2)何等をか名けて二事は得難しと爲す。一には增上意樂の加行の菩薩の遊集する所、二には如來の世に出現することなり。

(二)淨土の難易得は上に反することを明す　曼殊室利、諸の淨土の中に(於て)は、上と相違す。當に知るべし、八事は甚だ得難く、二事は得易しと爲す」と。

第二章　奉持の得益

第一節　經名の奉持

爾の時[八三]曼殊室利菩薩、佛に白して言さく、「世尊、此の解深密の法門の中に於て、此れをば何の敎とか名くるや、我當に云何んが奉持すべきや」と。佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、此れを如來成所作事了義の敎と名く。此の如來成所作事了義の敎に於て、汝當に奉事すべし」と。

五の善淸淨言敎の相とは聖敎量なり。第三の自類譬喩所引の相とは同喩なり。第四の圓成實の相とは無過の眞能立なり。

【五二】刹那の性。現見の無常相によりて不現見の刹那性を比知するなり。

【五三】他世有の性。現見の苦相によりて不現見の他世に於ける善惡の業果の實有を比知するなり。

【五四】淨不淨業無失壞の性。現見の無我性(不自在性)によりて不現見の淨・淨業は必ず當來の果を乘きて失壞無きことを比知するなり。

【五五】所得の生死等。內外の諸行に於ける生死・相・苦相・不自在相を以て次第に無常・苦・無我を喩知せしめ、又外の諸行に於ける興衰を以て重ねて無常を喩知せしむるなり。

【五六】類。大正本には類に作るも三本並に宮本によりて類と改む。

【五七】三十二種大丈夫の相。大丈夫の具する三十二種の身相を言ひ、之を具する者は家に在りては輪王となり、家を出づれば無上覺を成就すと言ふ。(一)足安平相(二)千輻輪相(三)手指纖長相(四)手足柔輭相(五)手足縵網相(六)足跟滿足相(七)足

第二節　時衆の得益

是の如來成所作事了義の教を説きたまへる時、大會の中に於て七十五千の菩薩摩訶薩有つて、皆圓滿法身の證覺を得たりき。

趺高好相(八)腨如鹿王相(九)手過膝相(一〇)馬陰藏相(一一)身縱廣相(一二)毛孔生靑毛相(一三)身毛上靡相(一四)身金色相(一五)常先一丈相(一六)皮膚細滑相(一七)七處平滿相(一八)兩腋滿相(一九)身如師子相(二〇)身端直相(二一)肩圓滿相(二二)四十齒相(二三)齒白齊密相(二四)四牙白淨相(二五)頰如師子相(二六)咽中津液得上味相(二七)廣長舌相(二八)梵音深遠相(二九)眼色如紺靑相(三〇)眼睫如牛王相(三一)眉間白毫相(三二)頂成髻相これなり。

【五八】十力。佛所具の十種の勝れたる力能なり。一に知處非處智力とは處とは道理の義事の理否を知り分る智力なり。二に知三世業報智力とは一切衆生の三世の因果業報を知る智力なり。三に知諸禪解脫三昧智力とは諸の禪定及び八解脫、三三昧を知る智力なり。四に知根上下智力とは衆生の機根の上下勝劣を知る智力なり。五に知種々解智力とは一切衆生の種々の和解を知る智力なり。六に知種々界智力とは世界の衆生の種々の境界同じからざるに於て如實に普く知る智力なり。七に知一切至所道智力とは五戒十善の行は人間天上に至り八正道の無漏法は涅槃に至る等の如く、各各その行因の至る所を知る智力なり。八に知天眼無碍智力とは天眼を以て衆生の生死及び善惡の業緣を見るに障碍無き智力なり。九に知宿命無漏智力とは衆生の宿命を知り又無漏の涅槃を知る智力なり。十に知永斷習氣智力とは一切の妄惑の餘氣を永く斷じて生ぜしめざるに於て能く如實に知る智力なり。

【五九】四無所畏。佛は衆生の化益に當りて四無所畏を具して些の怖心無きを言ふ。一に一切智無所畏とは世尊大衆の中に於て我は正等覺者なりと師子吼して些の怖心無きこと、二に無漏無所畏とは世尊は大衆の中に於て我一切の煩惱を斷盡せりと師子吼して些の怖心無きこと。三に說障道無所畏とは世尊大衆の中に於て佛道を障碍する法を師子吼して些の怖心無きこと、四に說盡苦道無所畏とは世尊大衆の中に於て盡苦の道を師子吼して些の怖心無きを言ふ。

【六〇】相の故に。三本並に宮本はこの語を缺く。

【六一】現量。分別推求を用ゐざる直觀的量知なり。

【六二】比量。意識の分別力によりて已知の事に比較して未知の事を量知するなり。

【六三】聖教量。聖教を以て尺度となし標準となして事實の正否を量知するなり。

【六四】此餘同類可得の相。以下の四は因明論理學の三支作法(宗・因・喻の三者を以てする三段論法)による立量上の過失なり。之に總じて三十三過あり。然して今の四はこの中の六不定中の前五不定に相當するものなり。所謂前五不定とは(一)共不定、(二)不共不定、(三)同分異全不定、(四)異分同全不定、(五)五俱分不定なり。大凡三支作法に於て因なるものは喩(喩に同品と異品とあり。前者は宗因の二義に順ずるものを言ひ、後者は之に反するものを言ふ。)中の同品に對しては必らず多少の關係を有し、異品に對しては毫末も關係無きを要す。然るに若し(一)異品に遍し(共不成)、(二)同品に遍せず(不共不定)、(三)同品に一分遍し、異品に遍し(同分異全)、(四)同品に遍し異品に一分遍し(異分同全)、(五)同品異品俱に一分遍し(俱分)たる場合の如き、皆過失となりと眞正の立量たり得ざるものなり。(五不定一々の實例は後に示す所の如し)

さてこゝに所謂此餘同類可得の相とは、五不定中の(三)同分異全不定と(五)俱分不定との二者に相當するものにして、この中前者は「聲は勤勇無間の所發に非るべし(宗)、無常

性なるが故に(因)、電と虚空等の如く(同喩)、瓶等の如く(異喩)」なる立量にして、之に於ては無常性故の因は同喩中の空には轉ぜず、たゞ此餘の電にのみ轉じて同類とする事を得るなり。又後者は「聲は常なるべし(宗)、無質碍なるが故に(因)、虚空と極微の如く(同喩)、瓶と心々所の如く(異喩)」なる立量にして、之に於ては無質碍故の因は同喩中の極微には轉ぜず、たゞ此餘の虚空にのみ轉じて同類とする事を得るなり。如是き二者を此餘同類可得の相と言ふ。

【六五】　此餘異類可得の相。これ五不定中の(四)異分同全不定に當るものにして、「聲は是を勤勇無間の所發なるべし(宗)、無常性なるが故に(因)、瓶等の如く(同喩)、電と虚空等の如く(異喩)」なる立量即ちこれなり。之に於て無常性故の因は異喩中の電には轉ずるが故に異類とする事を得ず、此餘の虚空のみに轉ぜずして異類とする事を得るなり。

【六六】　一切同類可得の相。これ(一)共不定に相當するものにして、「聲は常なるべし(宗)、所量性なるが故に(因)、瓶等の如く(同喩)、虚空等の如く(異喩)」なる立量これなり。之に於て因の所量性故はたゞに同喩の瓶のみならず、異喩の虚空にも轉ずるが故に、一切を同類となす事を得るなり。

【六七】　一切異類可得の相。これ(二)不共不定に相當するものにして、「聲は常なるべし(宗)、所聞性なるが故に(因)、虚空等の如く(同喩)、瓶等の如く(異喩)」なる立量これなり。之に於ては聲以外一として所聞なるもの無きが故に、所聞性故の因は虚空等にも瓶等にも轉ぜず、一切を異類となす事を得るなり。

【六八】　異類譬喩所得の相。これ三十三過中の四相違の一なる相違因の過失に相當するものなり。即ち「聲は常なるべし(宗)、所作性なるが故に(因)、虚空の如く(同喩)、瓶等の如く(異喩)」なる立量に於て、所作性故の因は同喩の虚空の上に轉ぜざるが故に、「それの如く常なるくし」の宗を立つる事を得ず、却つて異喩の瓶等の上に轉ずるが故に、異類譬喩の「瓶等の如く無常なるべし」の宗を立つる事を得。即ち「聲は無常なるべし(宗)、所作性なるが故に(因)、瓶等の如く(同喩)、虚空等の如く(異喩)」との反對の結果を見るに至るものこれなり。

【六九】　非圓成實の相。前四相の如き不定の過失ある時は完全なる立量をなす事を得ずして、有過の似能立に墮するを言ふ。

【七〇】　非善清淨言教の相。三十三過中の自教相違の過失に相當するものにして、自教の聖者所説の清淨の言教に相違するものを言ふ。たとへば佛教徒にして「因果の法則は謬なり」と言ふが如し。

【七一】　法住。諸法の中に在りて安住するの義にて眞如法性の事なり。

【七二】　總別。總とは略說、別とは細說。

【七三】　有行有緣云々。上の第四の行相を有するが故に有行と言ひ、第三の所緣を有するが故に有緣と言ふ。今この二者を有する自性相を加へて相と所緣と自性との不離の三法を成ずる。

※(二)不共陀羅尼の義を明す

- (一)菩薩の請問
- (二)世尊の正答
  - (1)勸聽許說
  - (2)如來の正說
    - (1)染淨の體を示す
    - (2)流轉い相を示す
    - (3)還滅の相を示す
  - (3)略說の義を結す
- (二)頌を以て重說す

(この下の小科は(二)ノ(2)の下のそれに同じ)

【七四】　陀羅尼(dhāraṇī)。此に總持と譯す。增上の念慧力によりて能く總じて無量の佛法を任持して忘失せしめず、一法の中に一切法を持し一文の中に一切の文を持する等の功用あるを言ふ。

※(一)如來心生起の相を分別す

- (一)菩薩の請問
- (二)世尊の正答
  - (1)正明
  - (2)釋難
    - (1)難
    - (2)釋
      - (イ)法
      - (ロ)喩
      - (ハ)合

【七五】　如來は心意識の云々。心意識の生起あるものは必ずこれが熏習を受くて流轉變動をなす。佛は入涅槃以後常住不變なるが故に之が生起による熏習の相なし。故に心意識の生起によりて如來の意輪を顯はす事を得ざるなり。

【七六】　滅盡定。梵に(nirodha-samāpatti)と言ふ。前七識の心々所を滅盡して起らしめざる無心定なり。非想非々想處の聖者心々所の勞慮を厭ひ假に涅槃に入る想をなしてこの定に入るなり。

解深密經　終

【七七】自依心・依他心。自身の見聞覺知の爲に起す緣慮心を自依心と言ひ、利生の爲に起す非緣慮心を依他心と言ふ。

※第二目　世尊の正答

(一)如來の所行を釋す

(二)如來の境界を釋す

(1)總じて五種を標す

(2)徵起して列名す

(三)總じて二種の差別を結す

【七八】成等正覺云々。これ八相成道中の最後の三なり。

※第二目　世尊の正答

(一)正しく二相無きことを釋す

(1)總標

(2)別釋

(二)二相無き所由を示す

【七九】增上と所緣との因緣。增上の因緣とは化身獨り起らず、必ず法身の增上緣を受くるを言ふ。所緣の因緣とは如來自受用身の第八識より顯現したるもの、之を疎所緣々となして化身の聲名句文等を現ず。故に所緣の因緣ありと言ふべし。

※第二目　世尊の正答

(一)喩說

(1)胈胝迦寶の喩

(2)末尼寶の喩

(二)合說

【八〇】大威德の有情。日天子・月天子なり。

【八一】この道・この行。道とは涅槃に至る道路なり。行とは之が實際的修行なり。

【八二】我が所。能說の佛なり。

※(一)穢土の難易得の事を示す

(一)總じて二種を標す

(二)隨徵列示す

(1)八事の易得を示す

(2)二事の難得を示す

【八三】曼殊室利菩薩。三本並に宮本にはこの下に摩訶薩の三字あり。以下之に同じ。

佛垂般涅槃略說教誡經解題

一、本經の題名

本經は、原本既に散逸して、その梵名を知ることが出來ない。漢譯では、一般に『佛遺教經』として知られてゐるが、別名を『佛垂般涅槃略說教誡經』とも、また『佛臨涅槃略誡經』ともいはれてゐる。『出三藏記集』二（正・五五・一一a）・『歷代三寶紀』八（正・四九・七八b）・『大唐内典錄』三（正・五五・二五三a）・『古今譯經圖記』三（正・五五・三五九b）等には『遺教經』として出し、前三には、その下に「一名佛垂般涅槃略說教誡經」と註してをり、法經等の七卷本『衆經目錄』三（正・五五・一二八c）、所謂『仁壽錄』たる五卷本『衆經目錄』一（正・五五・一五四b）、同じく『靜泰錄』一（正・五五・一八七a）・『開元釋教錄』四（正・五五・五一二c）・同一二（正・五五・六〇四a）・同一九（正・五五・六八八a）等には、『佛垂般涅槃略說教誡經』として出し、『開元釋教錄』のみはその下に、「亦云佛臨涅槃一名遺教經」と註記されてゐる。『佛臨涅槃略誡經』といふのは、『大唐内典錄』九（正・五五・三二三a）・『大周刊定衆經目錄』一四（正・五五・四六七c）に出で、何れも「一名遺教經」と註してゐる。なほこの他に『佛垂涅槃略誡經』とも呼ばれたことが、『大藏聖教法寶標目』五（『昭和法寶總目錄』二・八〇五c）の所記によつて知られる。

以上の如く、本經には種々の異名が存するのであるが、何れにしても、その示す所は、要するに、本經所說の教法が、佛陀入涅槃時遺弟に遺された最後の教誡であることを示さむとするにあるのである。本經の最後に於て佛によつて

「汝等且く止めよ。復た語るを得ること勿れ。時將に過ぎむと欲す。我れ滅度せむと欲す。是れ我が最後に教誨する所なり。」

と述べられてゐるやうに、本經は正に佛陀入寂の直前に一代說法の要髓を說かれた遺教なりとするが故に、これを『佛遺教經』とも、『佛垂般涅槃略說教誡經』とも、また『佛臨涅槃略誡經』等とも名くるのである。

二、本經の成立

さきにも一言せる如く、本經には、これに相當する梵本を見ず、また多くの漢譯經典中にても、特に優れて文辭莊嚴、叙述巧妙であり、宛も漢人の著作を讀むが如き感すらあり、加ふるに本經が、單に一回だけ羅什によつて出されしのみ

で、前後にその譯出を見ないことと、及び本經を西暦第一世紀の終頃出世せる馬鳴の『佛所行讃』五の「大般涅槃品」(正・四・四七c—四九c)と對比するに、文體に於て韻文と散文との相異はあるが、首尾文段全然吻合することとよりして、本經は、羅什が、『佛所行讃』のかの文を散文體を以て譯出したものではなからうかといはれてゐる(『新佛教』一〇・六、渡邊海旭氏「佛遺教經は馬鳴の作歟」)。最近境野黄洋氏は『思想』七九號に於て發表された「『佛遺教經』と『佛所行讃』について」てふ論文に於て、東晋の寶雲 (A.D.376—449)の譯した『佛本行經』七の「大滅品」(正・四・一〇七a—一〇八c)に出づる涅槃時遺戒を叙する一段が、また本經に吻合することよりして、寧ろ本經によつて『佛所行讃』や『佛本行經』のかの個所が僞されたとみる方が至當であらうと述べてをられる。もしさうだとすれば、本經は、馬鳴の時代卽ち紀元第一世紀の前後には、すでに成立してゐたものと想定されるわけである。本經・『佛所行讃』及び『佛本行集經』のかの個所が、密接不離の關係にあることは、その本文を對照すれば一見極めて明瞭であつて、この點に於ては疑ふ餘地はないが、その成立の前後といふ點に於ては、なほそこに研究の餘地がありはしないかと思はれる。飜譯の年代からいつても、三本殆んど同時代の譯出であるから、他に何等かの積極的の證明の擧らない限り、三本の中何れか一を以て他の二本の源流と定むることは、なかなか容易ではない。いまは且くこの點に關して疑問を殘し、學者の後勘を俟つこととして、こゝには、たゞ本經の成立が、何等かの意味に於て前記二經に關係を有することのみを示し、以て本經成立の思想的系統を彷彿せしむるに止めて置かう。

三、本經の流傳

印度に於ける本經流傳の狀況に就いては、詳かでない。漢譯藏經中に『遺教經論』一卷なるものがあつて、世親(天親)若くは馬鳴の釋、眞諦の釋といはれてをれど、こはすでに宇井伯壽氏の論ぜられた(『印度哲學研究』六「眞諦三藏傳の研究」九二頁)やうに、眞諦譯に『遺教論』一卷なるものがあつたため、それと混同された結果、かくいはるるに至つたものであつて、實は漢人の何人かの述作に外ならないのである。眞諦譯の『遺教論』なるものは、『歷代三寶紀』一四(正・四九・一二〇a)では、小乘阿毘曇の部に收められてゐるが、現存しないため、その內容は解らない。單に論名のみより想像すれば、或は本經の註釋であつたかとも思はれる。こは恐らく最初より世親釋として譯出されたものであらうが、早くすでに

この譯本が失はれてゐたために、名稱上の近似より、漢土述作無作者名の『遺敎經論』がこれと混同されたのであらう。『遺敎經論』が元來無作者名であつたといふことは、これを馬鳴作としてゐた者の存することによつても想像し得られる。（これを馬鳴作としたことは、前述の如く、本經の經本そのものが馬鳴と因緣を有つてゐることと、何等か關係がありはしないであらうか。）

本經の漢譯は、後秦弘始三年（A.D. 401）十二月長安に來り同一五年（A.D. 413）四月同じく長安に沒した鳩摩羅什（Kumārajīva）によつて爲された。但し彼の譯出が何年のことであつたか、明確な記錄を缺いてゐる。いま國譯せむとする本經亦この漢譯に外ならないが、これによつて知られるであらうやうに、この羅什譯本經は、譯文極めて流麗であつて、同譯の『維摩詰所說經』や『阿彌陀經』等と倶に、數多き彼の譯經中の最も秀逸なるものゝ一である。

本經一度び羅什によつて譯出さるゝや、多くの人々によつて講讀翫味されたものゝ如く、爲めに註疏を製する者相踵いで出でた。今日吾々が知り得るもののみにても、支那佛敎史上前後を通じて、二十人を降らないほどの多數に及んでゐるのである。本經の如き片々たる一經にしてかほどに敬重されたのは、他に多くその類を見ない所といはねばならぬ。以下、支那及び我國に於ける本經流傳の概要、並びに註疏の主なるものを伺ふこととしよう。

『大唐內典錄』四（正・五五・二六三c）・『高僧傳』八（正・五〇・三七九b）によるに、南齊の代（A.D.479—502）、山陰法華山の沙門慧基（A.D.412—496）は『遺敎經子注經』なる疏を著はしたやうであり、また『出三藏記集』一二（正・五五・八五c）・『歷代三寶紀』一一（正・五五・九六b）等によれば、同じ頃南齊の竟陵文宣王蕭子良も疏一卷を製してゐる。更に同じ頃、『寶頂經』等數多の經典を閉目誦出して有名な太學博士江泌處女尼子の誦出した中に、慧基の疏と同じ名前のもの一卷があつたことが、『歷代三寶紀』一一（正・四九・九六c）によつて知られる。南齊の終より梁初にかけて活動した寶亮（A.D. 444—509）は、『涅槃經』『勝鬘經』等と倶に、本經を講ずること屢〻であつたといひ（『高僧傳』八）、東魏の慧光（A.D.468—537）も亦本經を重んじ、『勝鬘經』『仁王經』の疏と共に本經の疏をも著し（『續高僧傳』二一）、梁より隋に涉つて『十誦律』の講學者として有名なる智文（A.D. 509—599）もよく本經を講じたやうである（『續高僧傳』二一）。北齊より隋にかけて活動し、殊に隋の文帝によつて重んぜられた靈裕（A.D.518—605）の數多き疏記の中、

また本經の疏が含まれてゐたといふ（『續高僧傳』九）。

以上の諸註疏は、單に文献に記錄を留むるのみであつて、今日見ることを得ないのであるが、先に一言せる陳の眞諦譯世親造の『遺教論』と混同されて、今日眞諦譯世親造（若くは馬鳴造）として藏經中に存在する

（一）『遺教經論』一卷（正・二六、卍藏二二・一）

は、或はこれら諸註疏中の一であるかも知れないのである。

唐の貞觀十三年（A.D.639, 一說十四年又は十八年）、太宗皇帝は、詔して寫經生十人を派遣して本經を書寫せしめ、經初に「佛遺教經施行勅」なる御製勅文を付した本經を、五品以上の宮官及び州刺史に各々一卷宛交附し、以て僧尼を鞭韃し遵奉せしめたといふ（『佛祖統紀』三九等）。宋の元照の『遺教經論住法記』の記事によれば、玄奘の弟子にして律藏に通じてゐたといはれる懷素に『義疏』があり、また宋の景德年中（A.D.1004—1007）には、金陵圓覺大師の『疏』一卷が出たが、何れも元照の當時すでに佚して世に行はれなかつたとのことである。また智圓（A.D.976—1022）は『疏』二卷・『疏科』一卷を造り、雪谿は『記』を撰して智圓の『疏』に更に註釋を加へ、允堪（A.D. —1061）は『注』一卷・『科』一卷・『統要鈔』二卷の著あり、仁岳（A. D. 992—1064）は『助宣記』三卷を造つたことが、義天の『新編諸宗教藏總錄』三（正・五五・一一七三b）や元照の『遺教經論住法記』等によつて知られるが、これらは何れも今日殘つてゐないやうである。宋の眞宗皇帝（A.D. 998—1022 在位）の如きも、自ら註を爲してこれを刊行し、廣く天下に頒布したといふ。所謂『御註遺教經』なるものがこれであつて、眞宗の天禧三年（A.D. 1019）、『御註四十二章經』と倶に入藏されてゐる（『佛祖統紀』四四）。宋の中葉、淨源（A.D.1011—1088）あつて

（二）『佛遺教經論疏節要』一卷

を著した。後、これに明の袾宏の補註せるものが現存して、『縮藏』調帙九・『卍字藏經』三四套・一〇冊並びに『大正藏經』四〇卷等に收められてゐる。淨源にはこの外に『節要科』一卷・『廣宣鈔』一卷があつたやうである（『新編諸宗教藏總錄』三）が、この二は現今見られない。同じ頃元照（A.D.1048—1116）は

（三）『遺教經論住法記』一卷

を、稍々後れて觀復は紹興十四年（A.D. 1144）

（四）『遺教論記』三卷

を著し、何れも『大日本續藏經』第一輯・八六套・三冊に收められてゐる。元照・觀復と同じ頃、禪宗曹洞派の祖守遂は「兵火の餘に於て草衣木食して學者の爲に三

經（『佛遺教經』・『四十二章經』・『僞山警策』）を釋し」たと傳へられてゐる（道霈『佛祖三經指南』自序）から、當時本經はすでに「佛祖三經」の一として崇重されてゐたことが解るのである。而して守遂の註に更に後に明の了童が補註せるものが、卽ち『大日本續藏經』第一輯五九套・一冊に收めらるゝ

（五）『佛遺教經補註』一卷

である。

明代に入つては、智旭（A.D.1599—1655）が『四十二章經』『八大人覺經』と倶に本經を解釋し、彼の『佛祖三經解』中に收め、

（六）『佛遺教經解』一卷

と題した。同じ頃、道霈亦『四十二章經』・『僞山警策』と倶にその著『佛祖三經指南』中に本經の註を出した。卽ち

（七）『佛遺教經指南』一卷

がそれである。この二は何れも『大日本續藏經』第一輯・五九套・二冊中に編入されてゐる。なほ明代に於て、袾宏や了童が本經を尊信してゐたことは、彼等が何れも前代の註疏に補註してゐることによつても知らるゝであらう。

我が國に於ても、本經は古くから重んぜられ、殊に禪家に於ては、「佛祖三經」の一として普ねく讀誦されて來た所である。特に最近佛教の通俗化の風潮に乘じて、平易簡明なる本經の如きは、道俗緇素を簡ばず、弘く講讀さるゝに至つたやうである。註釋書としては故前田慧雲博士の

（八）『佛遺教經講話』一卷

や高島米峰氏の

（九）『佛遺教經講話』一卷

の外、佛教大學通信講義中に於て故薗田宗惠氏の執筆された

（十）『佛遺教經講義』一卷

等あり、何れも通俗平明を旨として解釋され、初學者に取つての好參考書である。

なほ、本經の國譯は、本多日生氏編輯の『大藏經要義』中、大正六年（A.D.1917）刊行の卷四に

（一）『佛垂般涅槃略說教誡經』

として出され、また同年發行、國民文庫刊行會刊行『國譯大藏經』經部第十一卷に山上曹源氏が

（二）『國譯佛垂般涅槃略說教誡經』

として出され、昭和四年（A.D.1929）東方書院發行の『昭和新纂國譯大藏經』經典部第六卷中に出されてゐる

（三）『佛垂般涅槃略說教誡經』

等がある。純粹口語邦譯としては、佛教聖典叢書刊行會出版『現代意譯佛教道德經集』中に

（四）『佛垂般涅槃略說教誡經』

として大正十一年（A.D.1922）里見達雄氏が出され、また大正十四年（A.D.1925）佛教協會刊行の

佛垂般涅槃略說教誡經[一]

[二]釋迦牟尼佛、[三]初轉法輪に[四]阿若憍陳如を度し、最後の說法に[五]須跋陀羅を度したまふ。應に度すべき所の者は皆已に度し訖つて、[六]娑羅雙樹の間に於て將に[七]涅槃に入らむとしたまふ。其の時中夜寂然として聲無し。諸の弟子の爲に略して法要を說きたまふ。

[八]『汝等比丘、我が滅後に於て當に[九]波羅提木叉を尊重珍敬すべし。闇の明に遇ひ貧人の寶を得たるが如し。當に知るべし、此は則ち是れ汝が大師なり。若し我世に住るとも此に異ること無からむ。一切の淨戒を持たむ者は、販賣貿易し、田宅を安置し、人民・奴婢・畜生を畜養することを得ざれ。一切の種殖及び諸の財寶は皆當に遠離して火坑を避くるが如くすべし。草木を斬伐し、土を墾し、地を堀り、湯藥を合和し、吉凶を占相し、[一〇]星宿を仰觀し、盈虛を推步し、曆數算計することを得ざれ。皆應ぜざる所なり。身を節し、[一一]時に食して、淸淨に自活せよ。世事に參預し、[一二]使命を通致し、呪術し、仙藥し、好を貴人に結び、親厚[一三]媟嫚することを得ざれ。皆作すべからず。當に自ら端心正念にして度を求むべし。[一四]瑕疵を苞藏し、[一五]異を顯し、衆を惑はすことを得ざれ。[一六]四供養に於て、量を知り、足ることを知れ。趣に供事を得て應に稸積すべからず。此に則ち略して持戒の相を說かむ。戒は是れ[一七]正順解脫の本なり。故に波羅提木叉と名く。此の戒に依因れば諸の[一八]禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得む。是の故に比丘、當に淨戒を持つて毀犯せしむること勿れ。若し人あつて能く淨戒を持たば、是れ則ち能く善法を有せむ。若し淨戒無くむば諸善功德皆生ずることを得ず。是を以て當に知るべし、戒を第一安穩功德所住の處と爲す。

汝等比丘、已に能く戒に住すれば、當に[一九]五根を制すべし。放逸にして[二〇]五欲に入らしむること

【一】經名並に譯者に關しては本書中の解題を見よ。

【二】以下の一節、本經の序分に當る。

【三】初轉法輪。轉輪聖王の有する輪寶が、四天下を廻轉して諸の怨敵を碾摧するが如く、佛の教法も亦一切の衆生界を廻轉して諸の煩惱を摧破するが故に、かの聖王の輪寶に擬して佛の教法を法輪(Dharma-cakra)といひ、佛が教法を宣說されることを轉法輪といふ。初轉法輪とは佛成道直後鹿野苑に於て阿若憍陳如等の爲に宣べられた教說をいふ。

【四】阿若憍陳如(Ājñāta-kauṇḍinya)。阿若は已知と譯す、憍陳如は彼の屬してゐた種族の名である。佛の初轉法輪に於て教を受けし五比丘中に於て最初に解脫して佛教を知つた、故に彼を呼んで阿若憍陳如といふたと傳へられてゐる。

【五】須跋陀羅(Subhadra)。最後に佛の弟子となつた人、佛入涅槃の直前娑羅雙樹間に於て聞法得悟したといふ。

【六】娑羅雙樹。拘尸那(Kuçanagara)城外阿利羅跋提(Ajitavati)河の邊にあつた娑羅(Çala)樹の林で、四方各〻二株づゝ雙生してゐたから雙樹

勿れ。譬へば牧牛の人の杖を執つて之を視、縱逸にして人の[二一]苗稼を犯さしめざるが如し。若し五根を縱にすれば唯五欲の將に[二二]崖畔無くして制すべからざるのみに非ず、亦惡馬の轡を以て制せずんば將當に人を牽ゐて[二三]坑陷に墜ちむとするが如し。[二四]劫害を被るが如きは苦しみ一世に止る。五根の賊は[二五]禍殃累世に及ぶ。害を爲すこと甚だ重し。愼まざるべからず。是の故に智者は制して隨はず。之を持すること賊をして縱逸ならしめざるが如くせよ。假令之を縱にするとも皆亦久しからずして其の磨滅を見む。此の五根は心を其の主と爲す。是の故に汝等當に好く心を制すべし。心の畏るべきは、毒蛇・惡獸・怨賊よりも甚し。大火の[二六]越逸なるも未だ喩ふるに足らず。[二七]喩へば一人手に蜜の器を執り、[二八]動轉輕躁して但蜜のみを觀て深き坑を見ざるが如し。譬へば狂象の鈎なく、猿猴の樹を得て、[二九]騰躍跳躑して禁制すべきこと難きが如し。當に急ぎて之を挫き、放逸ならしむることなかれ。此の心を縱にすれば、人の善事を喪ふ。之を一處に制すれば事として辦ぜざることなし。是の故に比丘、當に勤めて精進して其の心を折伏すべし。

汝等比丘、諸の飲食を受くることは當に藥を服むが如くすべし。[三〇]好きに於ても惡きに於ても、增減を生ずること勿れ。趣に身を支ふるを得て以て飢渴を除け。蜂の花を採るに但其の味のみを取つて色香を損ぜざるが如し。比丘も亦爾り。人の供養を受くれば取つて自ら惱を除け。多く求めて其の善心を壞ることを得ることなかれ。譬へば智者は牛の力の堪ゆる所の多少を[三一]籌量して、分を過えて以て其の力を竭さしめざるが如し。

汝等比丘、晝は則ち心を勤めて善法を修習し、時を失せしむること勿れ。[三二]初夜・後夜にも亦廢すること有ること勿れ。中夜に誦經して以て自ら消息せよ。睡眠の因緣を以て一生空しく過して得る所無からしむることなかれ。當に無常の火諸の世間を燒くことを念じて、早く[三三]自度を求め、睡眠すること勿かるべし。諸の煩惱の賊の常に人を殺さむと伺ふは怨家よりも甚し。安んぞ睡眠して

と名く。佛この樹下に入滅したまふた時、樹葉一樣に白色を呈し、白鶴の群集せるに似た所より、又鶴林の名である。

【七】涅槃(Nirvāṇa)。愛盡離滅等と定義され、迷ひの因たる愛欲を滅したるをいふ。これに二種あつて、一を有餘涅槃(Sopadhi-çeṣa-nirvāṇa)といひ、他を無餘涅槃(Nirupadhi çeṣa-nirvāṇa)といふ。有餘涅槃とは生死の因たる惑業を盡して猶有漏の依身の苦果を餘すをいひ、佛の菩提樹下に於ける成道は正しくこれ有餘涅槃である。次に無餘涅槃とは、惑業と倶に依身の苦果を滅して餘す所なき涅槃をいひ、佛娑羅雙樹林中の涅槃が正しくこれである。よつていまこゝにいふ涅槃は無餘涅槃の意である。

【八】以下最後までが本經の正宗分であつて、『遺敎經論』では、これを更に六段に區分してゐる。以下數節は、その中の第一修習世間功德分と名けらるゝ一段である。以下科段名目は凡て『遺敎經論』に從ふ。

【九】波羅提木叉(Prātimokṣa)別解脫等と譯さる。比丘・比丘尼の受持すべき制戒の根本條目であつて、普通、一戒を持てば一解脫を得るといふ

自ら警寤せざる可けむや。煩惱の毒蛇睡つて汝が心に在り。譬へば(三四)黒蚖の汝が室に在つて眠るが如し。當に持戒の鉤を以て早く之を(三五)摒除すべし。睡蛇既に出でなば乃ち安く睡るべし。出でざるに而も眠るは是れ無慚の人なり。慚恥の服は諸の莊嚴に於て最も第一と爲す。慚は鐵鉤の如く、能く人の非法を制す。是の故に比丘、常に當に慚恥して、暫くも替つることを得ることなかれ。若し慚恥を離るれば、則ち諸の功德を失ふ。有愧の人は則ち善法あり。若し愧無くむば諸の禽獸と相異ること無からむ。

汝等比丘、若し人有り、來つて(三六)節節に支解するも、當に自ら心を攝めて瞋恨せしむること無かるべし。亦當に口を護つて惡言を出すこと勿るべし。若し恚心を縱にすれば、則ち自ら道を妨げ功德の利を失す。忍の德たること持戒苦行も及ぶ能はざる所、能く忍を行ずる者は乃ち名けて有力の大人と爲すべし。若し其れ歡喜して惡罵の毒を忍受すること甘露を飲むが如くなる能はざる者は入道・智慧の人とは名けざるなり。所以は何んとなれば、瞋恚の害は能く諸の善法を破り、好名聞を壞く。今世・後世の人見ることを憙はず。當に知るべし、瞋心は猛火よりも甚し。常に當に防護して入るを得しむること無かるべし。功德を劫ふ賊は瞋恚に過ぎたるは無し。(三七)白衣の、受欲にして行道の人に非ず、法として自ら制する無きものすら、瞋は猶怨むべし。出家行道無欲の人にして而も瞋恚を懷くは甚だ不可なり。譬へば淸冷の雲の中に(三八)霹靂の火を起すは應にあるべき所に非るが如し。

汝等比丘、(三九)當に自ら頭を摩すべし。已に飾好を捨て、(四〇)壞色の衣を著し、(四一)應器を執持して乞を以て自活す。自ら見ること是の如し。若し憍慢を起さば當に疾く之を滅すべし。(四二)憍慢を增長するは尙世俗白衣すら宜しき所に非ず。何ぞ況んや出家入道の人の解脫の爲めの故に自らその心を降して乞を行ずるをや。汝等比丘、(四三)諂曲の心は道と相違す。是の故に宜しく應に其の心を質直にす

風に、戒每に各〻解脫の德があるからかく名くるといはれてゐる。

【一〇】星宿を仰觀すとは、五星六曜二十八宿等の星を觀て運勢を占ふことをいふ。盈虛を推步すとは、月の滿ちかげによつて吉凶を推測することをいふ。

【一一】一定の時間に食事すること。印度では、比丘は一日の中、正午に一回食事をして他の時には全く食事をしないといふのが古くからの習慣であつた。

【一二】國と國との間の交際をとりもつこと。

【一三】蝶蝶。なれなれしくして禮を失すること。

【一四】瑕疵。缺點過失。

【一五】異を顯すとは、奇を衒つて、種種奇異の所行を爲すをいふ。

【一六】四供養。飮食・衣服・臥具・湯藥の四に於て供養をなすこと。

【一七】正順解脫。戒はよく吾人をして邪業を離れて眞如法性の理に隨順し諸の繫縛を解いて輪廻を脫せしむるの本なるが故にかくいふ。

【一八】禪定(Dhyāna)。禪は禪那の略で梵語の音譯であり、定はその義譯である。心を一境に專注することをいふ。

べし。當に知るべし、諂曲は但[四四]欺誑たることを。入道の人は則ち是の處無し。是の故に汝等、宜しく應に端心にして質直を以て本と爲すべし。

[四五]汝等比丘、當に知るべし。多欲の人は利を求むること多きが故に苦惱も亦多し。少欲の人は求むること無く、欲すること無ければ則ち此の患無し。直爾に少欲のみなりとも尙修習すべし。何に況んや少欲の能く諸善功德を生ずるをや。少欲の人は則ち諂曲して、以て人の意を求むること無し。亦復た諸根の牽く所と爲らず。少欲を行ずれば心則ち[四六]坦然として憂畏する所無し。事に觸れて餘あり。常に足らざること無し。少欲有らば則ち涅槃あり。是れを少欲と名く。

汝等比丘、若し諸の苦惱を脫せむと欲すれば、當に知足を觀ずべし。知足の法は卽ち是れ富樂安隱の處なり。知足の人は地上に臥すと雖も猶安樂なりとす。不知足の者は天堂に處ると雖も亦意に稱はず。不知足の者は富めりと雖も而も貧し。知足の人は貧しと雖も而も富めり。不知足の者は常に五欲の爲に牽かる。知足の者の憐愍する所爲り。是を知足と名く。

汝等比丘、若し寂靜[四七]無爲安樂を求むれば、當に[四八]憒閙を離れて閑居に獨處すべし。靜處の人は[四九]帝釋諸天の共に敬重する所なり。是の故に當に[五〇]己衆他衆を捨てて、空閑に獨處し、苦の本を滅せんことを思ふべし。若し衆くを樂はば衆くの惱を受く。譬へば大樹の衆鳥之に集らば則ち枯折の患あるが如し。世間の縛著は衆苦に沒す。譬へば老象の泥に溺れて自ら出づる能はざるが如し。是を遠離と名く。

汝等比丘、若し勤めて精進すれば、則ち事として難き者無し。是の故に汝等當に勤めて精進すべし。譬へば小水の常に流るれば則ち能く石を穿つが如し。若し行者の心數數懈廢すれば、譬へば火を鑽るに未だ熱からずして而も息むれば、火を得むと欲すと雖も火得べきこと難きが如し。是を精進と名く。

【一九】五根(Pañcendriyāṇi)。眼・耳・鼻・舌・身の五官。

【二〇】五欲(Pañcakāmaguṇā)。五妙欲ともいふ、五根の對象たる色・聲・香・味・觸の所謂五境をいひ、これらは五根を通して吾々の欲を起さしむるが故に五欲といはれる。

【二一】苗稼。いねのなへ。

【二二】崖畔。崖はさかひ、畔はあぜのこと。倶に制約・規範を意味する。

【二三】坑陷。地面がくぼみて出來た穴。

【二四】劫害。劫奪の害。

【二五】禍殃は二字倶にわざはひの意。累世は代々の意。

【二六】越逸。とびこえる、はねあがる等の意で、大火の盛に燃ゆる貌。

【二七】以下の一節「喩如一人手執蜜器」の八字、大正藏經所收の本經には缺けてゐる。いま別本によりて補つておく。

【二八】動轉輕躁。心落ちつかずしてさわがしいこと。

【二九】騰躍跳躑。喜んでおどりあがること。

【三〇】好き食物は多く攝り、惡き食物は少く攝るやうなことをしてはならぬ、恰も藥の目的は專ら治病にあつて好惡によつて聊かも增減すべきでないが如く、比丘の食物に於ても、その要は偏へに身を支

汝等比丘、[五一]善知識を求め、[五二]善護助を求めて、而も[五三]忘念せざれ。若し忘念せずむば、諸の煩惱の賊則ち入る能はず。是の故に汝等、常に當に念を攝めて心に在くべし。若し念を失すれば則ち諸の功德を失す。若し念力堅强ならば、五欲の賊の中に入ると雖も爲に害せられず。譬へば鎧を著けて陣に入らば、則ち畏るる所無きが如し。是を不忘念と名く。

汝等比丘、若し心を攝むれば心則ち定に在り。心定に在るが故に能く世間生滅法の相を知る。是の故に汝等、常に當に精勤して諸の定を修集すべし。若し定を得れば心則ち亂れず。譬へば水を惜む家の善く堤塘を治するが如し。行者も亦爾り。智慧の水の爲の故に善く禪定を修し、[五四]漏失せざらしむ。是を名けて定と爲す。

汝等比丘、若し智慧有らば則ち貪著無し。常に自ら省察して失有らしめざれ。是れ則ち我が法中に於て能く解脫するを得む。若し爾らざるものは旣に道人にあらず。又白衣にも非ず。名くる所無し。實に智慧は則ち是れ老・病・死の海を度る堅牢の船なり。亦是れ[五五]無明黑闇の大明燈なり。一切病苦の良藥なり。煩惱の樹を伐るの利斧なり。是の故に汝等、當に聞・思・修の慧を以て自ら增益すべし。若し人智慧の照有らば、[五六]天眼無しと雖も而も是れ明見の人なり。是れを智慧と爲す。

汝等比丘、若し種種に[五七]戲論すれば其の心則ち亂る。復た出家すと雖も猶ほ未だ得脫せず。是の故に比丘、當に急かに亂心の戲論を捨離すべし。若し汝寂滅の樂を得むと欲すれば、唯當に善く戲論の患を滅すべし。是れを不戲論と名く。

[五八]汝等比丘、諸の功德に於て常に當に一心に諸の放逸を捨つること、怨賊を離くるが如くすべし。大悲世尊の利益せむと欲する所は皆以て究竟す。汝等但當に勤めて之を行ずべし。若くは山間にも在れ、若くは空澤中にもあれ、若くは樹下・閑處・靜室にも在れ、所受の法を念じて忘失せしむること勿れ。常に當に自ら勉めて精進して之を修すべし。爲す無くして空しく死すれば、後に憂悔を致

ふるにあつて、好惡によつて量の加減を爲すべきではない、との誡めである。

【三一】 器量。はかる。

【三二】 初夜・後夜。一夜を三時に分つて初夜・中夜・後夜とする。

【三三】 自度。自身を濟度すること。

【三四】 黑蚖。黑いまむし、又は黑いやもり。

【三五】 摒除。しりぞけのぞく。

【三六】 節節支解。四肢即ち手足をキレ〲に切斷すること。

【三七】 白衣。在俗の人をいふ。印度にては出家沙門は色染の衣を用ひ、婆羅門及び在俗の人は白衣を纒ふたが故に、普通在俗の人のことを白衣といふ。

【三八】 霹靂。雷が急激にはげしく鳴ること。

【三九】 出家たる者は常にその頭を撫でゝ、何故にかく頭を剃つてゐるのかと反省すべきであるとの意であらう。

【四〇】 壞色の衣。袈裟のこと。青・黃・赤・白・黑の五正色を避けて他の不正色を以て染壞するが故にかくいふ。

【四一】 應器(Patra)。鉢・容器。法に應ずる食器の義、或は自已の食量に應ずる食器の義を以て應器と譯す等といふ。

【四二】 こゝの原文大正藏經所

さむ。我は良醫の病を知つて藥を說くが如し。服すると服せざるとは醫の咎に非ざるなり。又善く導くものの人を導きて善く導くが如し。之を聞きて行ぜざるは導くものの過に非ざるなり。[五九]汝等若し[六〇]苦等の四諦に於て疑ふ所有らば、疾く之を問ふべし。疑を懷きて決を求めざるを得ることなかれ。』

爾の時世尊、是の如く三たび唱へたまふに、人問ひたてまつる者無し。所以は何んとなれば、衆疑無きが故なり。

爾の時、[六一]阿㝹樓駄、衆の心を觀察して佛に白して言さく、『世尊、月は熱からしむ可く、日は冷かならしむ可しといへども、佛の說きたまへる四諦は異らしむべからず。佛の說きたまふ苦諦は實に苦なり、樂ならしむべからず。集は眞に是れ因、更に異の因なし。苦若し滅すれば即ち是の因滅す。因滅するが故に果滅す。苦を滅するの道は實に是れ眞の道なり。更に餘の道無し。世尊、是の諸の比丘は四諦中に於て決定して疑なし。[六二]此の衆の中に於て[六三]所作未だ[六四]辦ぜざる者あらば佛の滅度を見て當に悲感あるべし。若し初めて法に入る者有らば、佛の所說を聞いて即ち皆得度せむ。譬へば夜電光を見れば即ち道を見ることを得るが如し。若し所作已に辦じ、已に苦海を度せる者あらば但此の念を作す、世尊の滅度一へに何ぞ疾かなる哉と。』阿㝹樓駄是の語を說きて衆中皆悉く四聖諦の義に了達すと雖も、世尊此の諸の大衆をして皆堅固ならしめむと欲して、大悲心を以て復び衆の爲に說きたまふ。

『汝等比丘、憂惱を懷くこと勿れ。若し我れ世に住まること[六五]一劫なりとも、會すれば亦當に滅すべし。會うて而も離れざることは終に得べからざるなり。自利利人の法は皆具足せり。若し我れ久しく住まるとも、更に益する所無からむ。應に度すべき者は若くは天上・人間皆悉く已に度せり。其の未だ度せざる者には皆亦已に得度の因緣を作せり。自今已後、我が諸の弟子[六六]展轉して之を行

收の本經では「調長憍慢」とあるも、いま別本によつて「增長憍慢」と改めて讀んで置いた。

【四三】諂曲。へつらひて殊更に心を曲げ從ふこと。

【四四】欺誑。あざむきたぶらかすこと。

【四五】以下數節、正宗分中の第二で、成就出世間大人功德分と名けらるゝ一段である。蓋し上に述べた諸德は、何れも世間的德目であつて、必ずしも出世間的、宗教的德行ではないが、これに反し以下所述の諸德は何れも大人即ち菩薩の修すべき出世間的德行なるが故にかく名けたものであらうといはれる。而して以下所述の、少欲・知足・遠離・精進・不忘念・禪定・智慧・不戲論の八は八大人覺と呼ばれてゐる。

【四六】坦然。平安な貌。

【四七】無爲(Asaṃskṛitam)。作爲することのないことをいひ、所謂はからひを離れた所をいふ。

【四八】憒鬧。身心動亂して落ち着かないこと。

【四九】帝釋(Çakra)。具さには釋迦提婆因陀羅(Çakra Devānām Indra)といふ、忉利天の主神といはれる。

【五〇】己衆他衆。家族の者と他人と。

ぜば、則ち是れ如來の[六七]法身常に在りて滅びざるなり。是の故に當に知るべし、世は皆無常にして會はば必ず離るゝことあり。憂を懷くこと勿れ。世相是くの如し。當に勤めて精進して早く解說を求め智慧の明を以て諸の癡闇を滅すべし。世は實に[六八]危脆にして牢强なる者無し。我れ今滅を得ること惡病を除くが如し。此は是れ應に捨つべき罪惡の物なり。假に名けて身と爲す。沒して生死病死の大海に在り。何ぞ智者之を除滅するを得ること怨賊を殺すが如くにして、而も歡喜せざること有らむや。

[六九]汝等比丘、常に當に一心に[七〇]出道を勤求すべし。[七一]一切世間動・不動の法は皆是れ[七二]敗壞不安の相なり。汝等且く止めよ。復た語るを得ること勿れ。時將に過ぎむと欲す。我れ滅度せむと欲す。是れ我が最後に敎誨する所なり。」

【五一】善知識。善き友のこと。知識とは、その心を知りその形を識るとの邊よりかく名くといふ。

【五二】善護助。よき助け手。

【五三】忘念。忘はゆるかせにする意か、若くは「妄」の誤りであらう。

【五四】漏(Āçrava)。煩惱のこと、三界の有情は眼耳等の六瘡門より日夜に煩惱流注漏泄して止まないからかく名くといふ。

【五五】無明(Avidyā)。智慧なきこと。十二因緣に於てはその第一位に置かれ、一般に一切煩惱惑迷の根本的原理とされてゐる。

【五六】天眼(Divyaçakṣu)。天的の眼の意。眼根淸淨となつて、麤細遠近の一切の諸色又は未來に於ける生死の相を前知するといはれる。

【五七】戲論(Prapañca)。意義のない言論、又は非理の言論をいふ。また狂言・冗談等をもいふ。

【五八】以下一節は、正宗分中の第三で、顯示畢竟甚深功德分と名けらるゝ一段である。蓋し釋尊一化四十餘年に於ける利益衆生の法門の究竟甚深なる功德を示すものとみたのであらう。

【五九】以下數節は、正宗分中の第四で、顯示入證決定分と名けらるゝ一段である。即ち佛弟子何れも入諦得果し決定して一點の疑なきことを示すが故である。

【六〇】苦等の四諦。苦(Duḥkha)・集(Samudaya苦を生ずる原因根據)・滅(Nirodha,苦の原因の滅したる狀態即ち涅槃のこと)・道(Mārga,滅に至るの道)の四は佛敎に於ける最も重要な根本的原理であつて、眞實不虛なりとの邊より、これを四聖諦又は四諦と呼ぶ。

【六一】阿冕樓陀(Aniruddha,阿那律・阿泥盧豆等とも音譯さる。佛の從弟に當り、天眼第一といはれ、十大弟子の一人である。

【六二】以下數節は、正宗分中の第五で、分別未入上上證爲斷疑分と名けらるゝ一段である。即ち以下は、釋尊が、未だ上上の證位に至らない弟子等が佛の滅度に對して疑惑せんことを慮つて說かれた所であるからかく名けるのである。

【六三】所作(Kṛita)。なすべきこと、即ち佛弟子たるもののなすべきこと。

【六四】辨ずる(Kṛi)。爲す、そなふるの意。

【六五】一劫。劫(Kalpa)とは、印度に於ける時間の最大單位であつて、年月日時を以ては到底算することが出來ないといはれ、二種の例を以て示されてゐる。即ち一は、方四十里の倉に充滿した罌子の實を、三年每に一粒宛出して、その盡くるまでの時間を一劫といふといひ、他は、方四十里の大盤石を天人が三年每に羽衣を以て一度宛撫で、遂に撫で

盡きて終ふまでを一劫といふとされてゐる。

【六六】展轉。互に、順次に等の意。

【六七】法身(Dharmakāya)。法と一致せる佛の眞身、本體身をいふ。即ち四大五蘊假和の肉身以上の永遠なる佛の本體をいふ。

【六八】危脆。危くしてもろいこと。

【六九】以下一節は、正宗分中の第六で、離種種自性淸淨無我分と名けらるゝ一段である。蓋し化現の佛身滅度し、種々の自性の見即ち我見を離脱して淸淨無我の涅槃に入らせたまふことを說き明すとみたが爲であらう。

【七〇】出道。生死を出づる道。

【七一】一切世間動不動法。欲・色・無色の所謂三界を總稱して一切世間といひ、この三界中、欲界は壽命等凡て不定であるから動法といひ、色・無色の兩界は壽命等の長久なるより不動法といふと解されてゐる。

【七二】敗壞。やぶれくづれること。

佛垂般涅槃略說教誡經　終

四十二章經解題

一、本經の傳譯

『四十二章經』の漢譯に就いて、本國譯の依用せる高麗藏本所收の本經の卷頭に掲げたる作者不詳の序文によれば、後漢の孝明帝（A. D. 58—75 在位）一夜夢に、金色にして項に日光のある神人、飛んで殿前にありとみて、意中甚だこれを悦し、明日群臣にかの神人の何者なるかを諮うた所、通人傅毅なる者が、そは恐らく天竺の佛であらうと告げたから、帝は張騫等十二人を遣して、大月支國に至つて佛經を寫取せしめた。『四十二章經』はその時かの地に於て書寫し得たものであるといふのである。こゝにその時の使者の一人として張騫の名を出したのは、恐らく誤りであらうけれども、孝明帝が使を月支國に遣して法を求めしめたといふことは、他にもこれを徵すべき文献があつて、何人も疑ふことの出來ない事實であると思はれる。しかしながら、單にこの序文の記述のみを以てしては、到底本經の譯者・譯時・譯處等の詳細なる消息は得られないから、以下しばらくこれらの點に關する記錄を調査してみよう。

（一）　現存最古の經錄たる梁の僧祐の『出三藏記集』第一（正・五五・五 c）には

四十二章經一卷舊錄云二孝明皇帝四十二章一安法師所レ撰錄闕二此經一

右一部凡一卷、漢孝明帝夢見二金人一、詔遣二使者張騫羽林中郎將秦景一、到二西域一、始於二月支國一遇二沙門竺摩騰一、譯二寫此經一還二洛陽一、藏在二蘭臺石室第十四間中一、其經今傳二於世一、

とあつて、これだけならば、使者が月支に於て本經を譯寫して還つたといふ意味にも解される。

（二）　隋の費長房の『歷代三寶紀』四（正・四九・四九 c—五〇 a）には

後漢四十二章經一卷

右一經一卷［—（三）・（宮）］、明帝世中天竺國婆羅門沙門迦葉摩騰譯、……永平年隨二遂蔡愔一至二自洛邑一、於二白馬寺一翻二出此經一、依レ錄而編、即是漢地經之祖也、舊錄云、本是外國經抄、元出二大部一、撮レ要引レ俗似二此孝經一［—（三）・（宮）］十八章、道安錄無、出二舊錄及朱子行漢錄一、僧祐出三藏集記又載、但大法初傳人未二歸信一、致レ使下摩騰蘊二其深解一、不中復多翻上、後卒二雒陽一、載二其委曲一備二朱子行漢錄及高僧名僧等［—（宮）］傳諸雜記［—（宮）］錄［十等（三）・（宮）］一、寶唱又云、是竺法蘭譯、此或據下其與二攝摩騰［—（三）・（宮）］同時來［—

來時(三)・(宮)」と耳、

とあり、唐の道宣の『大唐内典錄』第一(正・五五・二二〇c)及び『續大唐内典錄』第一(正・五五・三四三c)等これと同文を掲げ、また智昇の『開元釋教錄』第一(正・五五・四七八a)も亦殆んど同樣の記事を出してゐる。これらによれば、本經は迦葉摩騰(Kāśyapamataṅga)が雒陽白馬寺に於て飜譯する所であつて、梁の寶唱の撰出に係る所謂『寶唱錄』に、本經を竺法蘭(Dharmarakṣa)譯としてゐるのは、竺法蘭が摩騰と同時に來つたからであると述べて、竺法蘭譯とする說を寧ろ斥けてゐるかの如くに思はれる。

(三) 本經を竺法蘭の譯とする說は、上に掲げた『歷代三寶紀』の文に於て指摘されてゐる『寶唱錄』の外に、隋の法經等の七卷本『衆經目錄』第六(正・五五・一四四b)・隋の彥悰等の五卷本『衆經目錄』第二(正・五五・一六一b)及び道宣の『大唐内典錄』第一(正・五五・二二〇b)・同第九(正・五五・三二五c)等にも見えて居り、就中法經等の『七卷錄』及び彥悰等の『五卷錄』には

四十二章〔經〕一卷　後漢永平年〔十(三)〕沙門竺法蘭等譯

等の如くなつてゐる。竺法蘭の名の下に「等」の一字の存せることは注意すべき所である。

(四) 最後に本經を以て迦葉摩騰・竺法蘭の共譯とする說は、『歷代三寶紀』第四(正・四九・五〇a)の竺蘭傳中に

明帝世翻、初共ㇾ騰出㆓四十二章㆒、騰卒蘭自譯、

とあるを始めとして、『大唐内典錄』第一(正・五五・二二一a)・『續大唐内典錄』(正・五五・三四四a)・『古今譯經圖紀』第一(正・五五・三四八b)・『大周刊定衆經目錄』第八(正・五五・四一六a)・『開元釋教錄』第十三(正・五五・六一五c)・『至元法・寶勘同總錄』第七(『昭和法寶總目錄』二・二二〇a)等何れも皆共譯のことを記してゐる。

かく、本經の譯者に關しては四種の異說が存するのであるが、これらの異說を綜合して考ふるに、恐らく第四の騰・蘭共譯說が事實を傳ふるものではなからうか。卽ち、本經は、初めの程は騰・蘭兩人の共譯であつたが、後に至つては蘭のみによつて譯成されたものとみるのが適當であると思はれる。かくて、飜譯着手の功を以ていへば騰の譯となるも、その完成の功を以ていへば正しく蘭の譯とするが至當であることゝなる。そこで、後世經錄の編纂者が本經の譯者を定むるに當つても、騰譯とすると蘭譯とするとの二種を生じたのではなからうか。法經等の『衆經目錄』等に於て「竺法蘭等譯」として「等」の一字を存することは、いかにもこの共譯のことを認めてゐるやうに思はれるし、『歷代三寶紀』の著者等が、一方に於ては、『寶唱錄』所載の竺法蘭說

を斥けてゐる如き記事を掲げておきながら、而も他方、法蘭傳に於ては騰・蘭共譯の事實を記してゐる如きも、少くともその當時までは、共譯の事實が認められてゐたからに相違なからうと思はれる。

ところで、もし以上の如く、本經を以て騰・蘭の共譯であるとするならば、第一の『出三藏記集』の記事はいかに見るかといふに、かの記事に於ては、使者が月支國に於て『沙門竺摩騰に遇ひ、此の經を譯寫して洛陽に還る」と記されてはゐるもの丶、實は「此の經を書寫して洛陽に還つた」ことを誤り誌したものと見るか、若くは、本經の翻譯がすでに使者の月支滯留中に着手されてゐたことを示すものと見るか、何れかに見るの外はあるまい。かく考ふることが許さる丶かどうかは、いま卒かに斷定の限りではなく、後日の討究に俟たねばならぬ所であるが、兎に角、こ丶には、上に擧げた諸種の資料よりして、本經を騰・蘭共譯とするのが最も妥當であるやうに思はれることだけを叙ぶるに止め置く。

次に本經翻譯の年代に就いては、『古今譯經圖紀』第一（正・五五・三四八b）の迦葉摩騰の傳記中に

以㆓永平十年歳次丁卯㆒、於㆓白馬寺㆒譯㆓四十二章經一卷㆒

として、まさしく永平十年(A. D. 67)の譯出としてゐるのであるが、これは恐らく、本經の翻譯者たる摩騰・法蘭の來漢の年時を以て本經譯出の年時に擬したまでゞあると思はれるから、その基く所は、摩騰・法蘭の來漢年時でこそあれ、それとは別途に本經翻譯の年代を傳へたものではなからう。そこで、結局、現存の資料中、本經譯出の年代を直接に傳へてゐるものはないわけであつて、何れも摩騰・法蘭の來漢の時を以て且らく本經譯出の年代に充てゝゐるまでゞある。

ところで、この摩騰・法蘭來漢の年時に關しては、一般には明帝の永平十年說が行はれてゐて、多くの文献何れもこれに從つてゐるやうであるが、必ずしもこの說のみが行はれてゐたわけではなく、かの道宣の撰出に係る『廣弘明集』第九（正・五二・一四七c）所載の北周甄鸞の『笑道論』には永平十八年(A. D. 75)とする『老子化胡經』の說を出してゐるから、この說も亦後世まで行はれてゐたことを知り得る。この『老子化胡經』の十八年說は、單にその傳說が古いばかりでなく、その前後の歷史的事情とも比較的よく調和する所から、最近この說を採用せむとする學者が存するに至つた（『宗教研究』第四卷・第六號、松本文三郎氏「漢明求法の紀年に就いて」參照）。

以上の異說中何れを採るかによつて、本經翻譯の年代も略〻推定されるわけであるが、いま且らく從來の說に從ひ摩騰・

法蘭來漢の時を永平十年とする說を採るとして、『高僧傳』第一（正・五〇・三二二。一三ａ）に摩騰が來漢の後「少時にして雒陽に卒す」とあるのが事實であるとすれば、彼は永平十年若くは十一年頃に沒したものと想像し得るから、騰・蘭によつて共譯され來つた本經は、摩・騰沒時の頃には既に大半の譯出が果されてゐたものと察すべく、而して彼の歿後の譯出は、法蘭一人の手に係つたことゝなるわけである。或は摩騰の在世中、何かの都合で本譯の完了を果せなかつたから、後の部分だけ法蘭の單譯となつたとも考へられる。何れにせよ、もともと本經の如き小部の飜譯にさほど多くの時日を要したとも思はれぬから、結局、本經飜譯の完了は永平十年か若くは十一年頃とみて大過なからうと思はれる。もし　摩騰・法蘭來漢の年時に關する異說中、永平十八年說を採用するとすれば、さきと同じ手續きによつて、本經の譯了を十八年か若くは十九年頃と推定して然るべきであらう。

要するに本經の飜譯年代に就ては、直接にこれを傳へる確實な資料を缺いてゐるのであるから、たゞ摩騰・法蘭來漢の年代を確定することによつて、間接的に推定するより外に途がないわけである。いまは且らく摩騰・法蘭來漢の時を永平十年とした場合と永平十八年とした場合との二を並べ擧げるに止めて、その決定的な判定を後日に讓ることゝする。

次に本經の譯處に就いては、『歷代三寶紀』第四（正・四九・四九。）等によれば、洛邑白馬寺であつたといはれてゐる。白馬寺といふのは、『歷代三寶紀』第四（正・四九。四九ａ）に

寫㆓得佛經四十二章㆒幷獲㆓畫像㆒載以㆓白馬㆒還㆓達雒陽㆒因起㆓伽藍㆒名㆓白馬寺㆒諸州競立報㆓白馬恩㆒

四

とあるもので、實に支那に於ける佛敎寺院の起源をなすものである。

以上述べた所を以てすれば、本經はまさしく支那佛敎史上に於ける最初の飜譯經典であつて、而も最初の寺院たる白馬寺に於て譯出された、佛敎史に取つては極めて由緒深い經典といはねばならぬ。元よりこれより以前漢土に佛敎の傳はつた消息がないわけではないが、それらは何れも一部民間の流布たるに過ぎなかつたので、殊に經典の譯出といふ點に於ては何等の消息をも聞かないのであるから、その公式の傳來としては、やはり明帝の時における本經の譯出を以てその最初に擬せねばならぬわけである。

こゝに注意すべきは、一部の學者の間に於て、本經が漢土に於ける僞作經典であるとする說の存することである。この說の主なる根據としては大體次の三點にあるやうである。

（一）本經が道安の經錄に存しなかつたと『出三藏記集』に記されてゐること。

（二）本經が飜譯直後蘭臺（漢代帝室の文庫）の石室中に緘藏されたと諸書に記されてゐて、この緘藏の事實が飜譯の趣旨に相應しないこと。

（三）本經が、形式及び內容に於て『孝經十八章』及び『老子道德經』に似てゐる點より、道敎の影響によつて生れたものと考へ得ること。

しかしながら、吾人は單にこれだけの理由を以て本經が漢土に於ける僞作經典であると斷定すべく、甚だ躊躇せざるを得ないのである。何となれば、

（一）の道安の經錄に存しなかつたてふことは、僞作說をなすものゝ比較的有力なる根據ではあるが、しかしこれは、本經が元來一部の纒つた經典ではなくして、諸經の引抄より成れるものであるために、彼が故意に省略したのではなかつたらうかとも考へられ、またさうでないまでも、何らかの事情で脫したのであるかも知れないし、兎に角本經が、道安の經錄編纂時代に全然無かつたといふことはどこにも明言されてゐないのであるから、何か他の積極的な根據の擧らない限り、この根據は極めて消極的なものであり、從つて薄弱であると思はれる。況むや、既に學者によつて指摘された如く、『後漢書』卷六〇下襄楷傳に見ゆる後漢桓帝（A. D. 147—167 在位）への襄楷の上表文中に、既に本經よりの引用と推定される文章が存するに於てをやである。即ちかの上表文中の文章とは次の一節である。

或言、老子入ニ夷狄一爲ニ浮屠一、浮屠不レ三ニ宿桑下一、不レ欲三久生ニ恩愛一、精之至也、天神遺以ニ好女一、浮屠曰、此但革囊盛レ血、遂不レ眄レ之、其守一如レ此、乃能成レ道、今陛下婬女豔婦極ニ天下之麗一、甘肥飮美單ニ天下之味一、奈何欲レ如ニ黃老ニ乎、

この文中、「浮屠桑下に三宿せず」等といふは、本經（高麗藏本）の第二章に、また「天神遺はすに好女を以てす」等といふは同じく第二十四章に據つたものと想定され、これによつて、後漢桓帝の時代に、たとひ現形のまゝではないにしても、少くともこれに類似した本經が存してゐたてふことを推定し得るやうである。もしこの推定にして誤らずとせば、本經が既に後漢時代に存してゐたことを證するかかる積極的な證據の存する限り、よし遙か後代の道安の經錄に見えなかつたからてふ消極的の證據が存したとて、決して本經を以て道安以後の僞作に係るものと斷定することは出來なからうと思ふ。

次に（二）の本經が飜譯直後、漢代帝室の書庫たる蘭臺の石室中に緘藏されたといふことが、飜譯の趣旨に相應しない

とみるのは、一應尤もではあるが、しかし翻つて考ふるならば、このことは單に經典を尊重する精神より出でたものに外ならないとも解釋されはしないだらうか。傳ふる所によれば、嘗て迦膩色迦(Kaniṣka)王は、かの所謂第四回結集に於て爲された『大毘婆沙論』等をば、赤銅板に鏤刻し石函に收めて窣堵波の中に封緘し、容易にこれを他見せしめなかつたといふことであるが、印度と支那との間、諸種の事情の相異はあつたらうが、いまの場合とその精神に於ては全く同一ではなからうかと想像する次第である。要するにこの第二の根據も亦極めて薄弱であるといはざるを得ない。

次に(三)の本經が形式・內容に於て道教の經書に類似してゐるといふことに就いては、或は支那趣味に投ぜむために摩騰・法蘭等が大部の經典中より特に本經の如き內容の文を抄出し、形式及び內容に於て『孝經十八章』等に類似せしめたものと見られるかも知れぬが、しかしこのことによつて本經が、その由つて來る原本を有せず、漢土に於て道教の影響によつて生れた僞作經典であると直ちに斷定することは出來ないであらう。『歷代三寶紀』第四(正・四九・四九。)に

舊錄云、本是外國經抄、元出二大部一、撮レ要引レ俗、似二此孝經一十八章一、

とあることは、強ち妄誕浮說として斥くべき所ではなからう。

上來述べし所によつて、本經を支那撰述の僞作經典であるとするかの三種の根據は、何れも極めて薄弱であつて、到底かの說を支持することの出來ないことが明かになつたと思ふ。よつて吾人は、やはり本經が引抄經として摩騰・法蘭等によつて譯出されたものであるとする從來の說を信じたいと思ふのである。

序でながら本經の各章が、いかなる經典より引抄されたるかを想定せむとする者の爲に、嘗て鈴木宗奕氏が『哲學雜誌』第二百六十九號以下に揭げられた「四十二章經の傳來及び其成立に就いて」と題する論文中に擧げられた對照表に、聊か卑見を以て補正を加へたものを示せば左(本丁第七頁)の如くである。

なほ『歷代三寶紀』第五(正・四九・五七c)には、本經が後に吳(A. D. 222—280)の支謙によつて重譯されたことを傳へてゐる。このことに就いては、次項に於て一言したいと思ふから、こゝには論述を避けて置かう。

更に『出三藏記集』第四(正・五五・三六c)・『歷代三寶紀』第五(正・四九・六一a)・『開元釋敎錄』第二(正・五五・四九二c)同第十五(正・五五・六四四b)等によれば、失譯人名の下に『五十二章經』なる經が出てゐて

四十二章經 高麗藏本章節	巴利語經典	漢譯經典
1.	D.N.16, Mahāparinibhāna S., etc.	長阿. 2, 遊行經等.
2.		
3.	D.N. 34, Dasuttara S. A.N. 10, 210, Dasadhammā S.	長阿. 10, 十上經. 增一阿. 43, 1. 雜阿. 37, 34. 十法經.
4.		
5.		
6.	S. N. 7, 1, 2, Akkosa S.	雜阿. 42, 8.
7.	S. N. 7, 1, 4, Bilaṅgika S.	雜阿. 42, 10.
8.		
9.	A. N. 9, 20, Velāmo S.	增一阿. 19, 3, 中阿. 155. 須達多經.
10.		
11.		
12.		
13.		
14.		
15.		
16.		
17.		
18.		
19.		
20.		
21.		
22.		
23.		
24.	S. N. 4, 3, 4—5, Suttavassāni S.——Dhītaro S.	雜阿.9,17,七年經.雜阿.39,12,魔女經. 方廣大莊嚴經9,降魔品.
25.		
26.		
27.	S. N. 35, 127, Bhāradvāja S.	雜阿. 43, 2, 賓頭盧經.
28.	A. N. 7, 68, Aggi S.	增一阿.33,10,枯樹經.中阿.5,木積喩經
29.		法句譬喩經. 1, 敎學品
30.		小品般若經7. 深功德品 ?
31.		撰集百緣經千.南本涅槃經11,聖行品
32.		
33.	A. N. 6, 55, Soṇa S. Mv. V. 1, 1—19	增一阿. 13, 3, 耳經. 中阿. 123, 沙門二十億經. 雜阿.9, 80, 二十億耳經. 四分, 39. 五分, 21.
34.		
35.		
36.	A. N. 8, 29, Akkhāṇā S.	增一阿.36,1,非時.中阿.124,八難經
37.		
38.		
39.	M. N. 18, Madhupiṇḍika S.	中阿.115,蜜丸喩經.增一阿.35,10,甘露法味經.
40.		
41.		
42.		

五十二章經舊錄所レ載、別有二孝明四十二章一等とある。これによれば、この經は、今の『四十二章經』と何等か關係を有せるものであつたやうに思はれる。併し『出三藏記集』に於てすでに闕本の部に收められ、而してそは舊錄によつて載せてゐるに過ぎないものであるから、今日そのいかなるものなりしかを知るに由ない所である。

本經の西藏譯は、北京版大藏經中には存しないやうであるが、ナルタン版大藏經のA帙に存し、西藏名を

"ḥPags-Pa-Dum-Bu Çi-gñis-Pa-Shes-Bya-Baḥi-mDo"

と名けられてゐる。この經の卷末に附せる跋文には、まづ本經の漢譯の因緣を誌した後、次の如く述べてゐる。

是の如き事情の下にあつて、此の經は昔西藏には未だ飜譯せられざりしものなるによつて、支那の甘殊爾部に存したるを、乾隆帝（gNam-sKyoṅ Goṅ-Ma）の勅命に依つて文殊の語（Mañjuḥi-sKad）即ち滿洲語に譯し、十戒持者 Sudhaga-Çri-Yanḥadsa なるものと十戒持者 Dhya-Nāri-Çtaṁ-Byā-Sa との二人によつて藏語に共譯せられたり。蒙古語には博士Pradsño-Dar-ya-Bjā によつて譯されたり。施主Hḥid-Lḥin なるものが銀一百兩を施與して印刻するを得たり。云々

即ちこれによつて、かの西藏語譯は漢譯を更に飜譯せる滿洲語譯よりの複譯なることが知らるゝのみならず、本經が淸の高宗の代乾隆年間（A.D. 1736—1795）に勅命によつて滿洲語に飜譯されたてふことが解るわけである。

本經の國譯には、延書のものでは、國民文庫刊行會の『國譯大藏經』中、大正六年（A.D. 1917）出版の經部第十一卷の中に山上曹源氏の譯せる

（一）　國譯佛說四十二章經

があり、また本多日生氏の『大藏經要義』中、大正七年（A.D. 1912）刊行の第七卷には

（二）　四十二章經要義

として出されてゐる。また東方書院刊行の『昭和新纂國譯大藏經』中、昭和四年（A.D.1929）出版の經典部第一卷に收められてゐるものに

（三）　國譯四十二章經

がある。

純粹口語譯としては、大正十一年（A.D.1922）『現代意譯佛教經典叢書』第三冊に收められた里見達雄氏の譯せる

（四）　現代意譯四十二章藏

や、大正十三年（A.D.1924）『現代意譯根本佛教聖典叢書』第六卷に於て高畠寛我氏の出せる

（五）　意譯四十二章經

等があり、大正十四年（A.D. 1925）佛教

協會刊行の（六）新譯佛教聖典中にも極めて達意的な邦譯が收められてゐる。

西暦一八七一年、S. Beal 氏は本經を英譯してその著 "Catena of Buddhist Scriptures from the Chinese" の中に收め、また一九〇六年鈴木大拙氏は同じく英譯して "Sermons of a Buddhist Abbot" 中に收め、また L. Feer氏は一八七八年本經を佛譯して "Le Sūtra en quarante-deux Articles" と名けて出版してゐる。

二、本經の異本

漢譯『四十二章經』の異本には、大體三種が考へられる。卽ち、その第一種は所謂高麗藏・宋藏・元藏等に收められてゐるものであり、第二種は所謂明藏に收められてゐるもので、宋の眞宗皇帝（A.D. 998—1022在位）の『註四十二章經』（『大日本續藏經』五九套・一冊所收）の依れるものであり、第三種は宋（A. D. 960—1279）の中期卽ち第十一世紀の終より第十二世紀の前半にかけて活動したと思はれる禪宗曹洞派の祖師守遂が、その著『佛說四十二章經註』（『大日本續藏經』五九套・一冊所收）に於て依憑せるものや、明の道霈の『佛祖三經指南』上（『大日本續藏經』五九套・二冊所收）の所釋の本經等、禪家に於て一般に廣く讀誦されてゐるものがそれである。いま便宜上、この三種を序での如く「麗藏系」・「明藏系」及び「守遂系」と呼んで置く。以下この三系の異本に就いて、その性質・內容の大略を窺ふことゝしよう。

第一の麗藏系の本經は、その內容よりするも、またその藏本の性質よりするも、最も本經の古形を存するものと認められ、かの摩騰・法蘭所譯の本經は、たとひこれと全然同じでないまでも、恐らくこれと殆んど異らぬものであつたらうと思はれる。

第二の明藏系の諸本は、さきの麗藏系の諸本に比較するに、その懸隔實に甚しいものがあり、しかもそれが單に語句の間に止らずして、形式及び內容にまでも及んでゐる點に於て、大いに注目に値する。いまその相異の甚しい點二三を指摘するならば、まづ本經の本文に入る前に、序ともいふべきものとして、麗藏系の諸本では、本國譯の初に見るが如く、本經の傳來に關する記事が出てゐるのであるが、明藏系に於てはこれと全く異つた次の一文が揭げられてゐる。

爾時世尊、旣成道已、作二是思惟一、離レ欲寂靜、是最爲レ勝、住二大禪定一、降二諸魔道一、今轉二法輪一度二衆生一、於二鹿野苑中一、爲二憍陳如等五人一、轉二四諦法輪一、而證二道果一、時復有二比丘一、所說諸疑陳

レ佛進止、世尊教詔一一開悟、合掌敬諾而順二尊勅一、尒時世尊、爲說二眞經四十二章一、

更に明藏系に於ては、最後の第四十二章が甚しく增補されてゐる上に、その最後に

諸大比丘、聞二佛所說一、歡喜奉行、

といふ一句を加へて本經を結んでゐる。これ恐らく、本經に、一部の纒れる經典と同じく、後世所謂序・正・流通の三分の形式を具備せしめたものであつて、この點より見るもこの明藏系は、確かに麗藏系よりも後に成つたものと考へられるのである。明藏系がその內容に於て麗藏系と甚しく相異する點は、前者に處々大乘的思想を示す文が加へられてゐることである。いまそれを例示するならば次のやうである。

	麗藏系		明藏系
一	第一章	佛言辭親出家爲道名曰沙門	佛言辭親出家識心達本解無爲法名曰沙門
(二)	第二章（明藏系）		佛言出家沙門者斷欲去愛識自心源達佛深理悟佛無爲內無所得外無所求心不繫道亦不結業無念無作無修無證不歷諸位而自崇最名之爲道
(三)	第一〇章	佛言天下有五難貧窮布施難豪貴學道難制命不死難得覩佛經難生値佛世難	佛言天下有二十難貧窮布施難豪貴學道難判命不死難得覩佛經難生値佛世難忍色離欲難見好不求難有勢不臨難被辱不瞋難觸事無心難廣學博究難不輕未學難除滅我慢難會善知識難見性學道難對境不動難善解方便難隨化度人難心行平等難不說是非難
(四)	第四	佛言吾視諸侯之位如過客視金玉之寶如礫石視㲲素之好如弊帛	佛言吾視王侯之位如塵隙視金玉之寶如瓦礫視紈素之服如弊帛視大千世界如一訶子視四耨水如塗足油視方便如筏寶聚視無上乘如夢金帛視求佛道如眼前

華、視求禪定如須彌柱、視求涅槃如晝夜寤、視倒正者如六龍舞、視平等者如一眞地、視興化者如四時木、

(一)の明藏系中の「識心達本」及び(二)の同じく「識自心源」は明かに唯心緣起又は如來藏緣起の傾向を示してゐると見られ、道霈の如きも『佛祖三經指南』上に於て(二)のかの句を解釋して

言ニ心源ニ者、一心之源、乃如來藏性也、

と明言してゐるほどである。また(二)の「內無レ所レ得、外無レ所レ求、心不レ繫レ道亦不レ結レ業、無念無作無修無證、不レ歷ニ諸位ニ而自崇最、名レ之爲レ道」の文、及び(三)の「見性學道難」の文の如きは、般若空若くは禪宗的の空思想を示すものであり、更に(四)の「視ニ大千世界ニ如ニ一訶子ニ」等の文は平等一如不二の深理を高調せるものと思はれる。而して麗藏系に於ては、それらの思想は少しも見られず、單に小乘的の斷欲去愛を以て終始してゐるのである。

かくの如く、明藏系の本經は麗藏系のそれに比して著しく大乘的思想が混入してゐるのであるが、この混入改竄は果していかなる事情によつて爲されたのであらうか。宋の眞宗皇帝はその『註四十二章經』の序(『大日本續藏經』五九套・一冊・二五丁左)に於て

其有ニ相傳之疑誤累句之難ニ分、亦用辨明庶臻ニ演暢ニ、

と叙べてゐるが、これよりすれば、或は眞宗皇帝がその註を爲すに當つて本文に多少の修正を加へたかも知れない。しかし今日明藏系諸本に於て見らるゝかの大乘的思想の混入を、全部眞宗皇帝に歸せむとするは、到底考へられないことであらう。然らばこれは何時の時代何人によつてなされたものかといふに、吾人は遺憾ながらいまのところこの點に就いて何等の手懸りをも得てゐないのである。しかし或る人々の如く、明藏系の諸本を以て、宋代(A.D. 960—1126)に於ける禪宗隆盛の結果と見て、その成立年代をかの時代に置かむとすることは或はどうかと疑ふのであつて、元來古くより存した明藏系が、この時代に至つて、かの禪宗的風調に驅られて多く採用さるゝに至つたに過ぎないのではなからうか。現に角、明藏系の本經は古くより存してゐたと考ふる餘地がなほあらうかと思はれる次第である。吾人はかゝる點に關して、學者の指教を得むことを偏へに冀うて止まない。

第三の守遂系は、序文として明藏系と

殆んど同一のものが掲げられてゐるが、最後に「諸大比丘、聞ニ佛所說一歡喜奉行」の句を缺いてゐることは彼と異つてゐる。而して章句の異同に於ては麗藏系並に明藏系との間に實に甚しいものがある。まづ守遂系に於ては、麗藏系の第十七章及び明藏系の第十七章(?)の

佛言、一日行常念レ道行レ道、遂得ニ信根一、其福無量、

といふ一章に當る章と、麗藏系の第三十五章、明藏系の第三十五章(?)の

佛言、人爲レ道亦苦、不レ爲レ道亦苦、惟人自レ生至レ老、自レ老至レ病、自レ病至レ死、其苦無量、心惱積レ罪、生死不レ息、其苦難レ說、

に當る一章とを全然缺いてゐる。語句の相異に至つても亦實に甚しく、仔細に點檢すれば一章としてさきの兩系に一致する章がないといふ有樣である。而してその差異は單に語句の增減に止まらずして、內容の上に大いに及んでゐる。すでに明藏系に於て見られる麗藏系との內容上の相異は、そのまゝ守遂系に於ても繼承されてゐるわけであるが、更に守遂系に於てのみ見らるる內容上の相異を示すならば大略次の如くである。

		麗藏系・明藏系	守遂系
(一)	第九章	佛言……飯辟支佛百億不如以三尊之敎度一世二親敎千億［一(明)］不如飯一佛學願求佛欲濟衆生也飯善人福最深凡人事天地鬼神不如孝其親矣［＝二親(明)］二親最神也	佛言……飯百億辟支佛不如飯一三世諸佛飯千億三世諸佛不如飯一無念無住無修無證之者 (『大日本續藏經』五九套・一冊・三十六丁右)
(二)	第一五章	佛言吾何念念道吾何行行道吾何言言道吾念諦道不忽［＝忘(明)］須臾也	佛言吾法念無念念行無行行言無言言修無修修會者近爾迷者遠乎言語道斷非物所拘差之毫釐失之須臾 (『大日本續藏經』五九套・一冊・三十七丁右)
(三)	第一六章	佛言覩天地念非常覩山川念非常覩萬物形體豐熾念非常執心如此得道疾矣	佛言觀天地念非常觀世界念非常觀靈覺卽菩提如是知識得道疾矣 (『大日本續藏經』五九套・一冊・三十七丁右)

（四）	第三六章	佛言……既處中國値奉佛道難既奉佛道値有道難〔十既値有道之君（明）〕生菩薩家難既生菩薩家以心信三尊値佛世難	佛言……既生中國値佛世難既値佛世遇道者難既得遇道興信心難既興信心發菩提心難既發菩提心無修無證難（『大日本續藏經』五九套・一冊・三十八丁左）
（五）	第四〇章	佛言人爲能拔愛欲之根譬如摘懸珠一一摘之會有盡時惡盡得道也	佛言沙門行道無如磨牛身雖行道心道不行心道若行何用行道（『大日本續藏經』五九套・一冊・三十九丁右）

これを見るに、(一)・(二)・(四)に於て、守遂系には無所住般若空の思想が著しく顯はれて居り、(三)に於ては唯心緣起若くは煩惱卽菩提の思想が伺はれる(五)に至つては全然異つた文章になつてゐる。これらによれば、守遂系はさきの明藏系に於て始めて現はれてゐる大乘教的潤色の傾向を、更に增大せしめたもの﹅如くである。守遂系の本經が、一般に、明藏系の本經に更に大乘的思想の潤色加味を帶びたものであると見られてゐるのはこれがためである。しかしながら、上述の如く、章節に於て全然缺けてゐる個所や、全く異つた文章のものを出してゐる點や、殊に麗藏系の第二十一章に相當する守遂系の第二十三章が

佛言、人繫二於妻子舍宅一、甚二於牢獄一、……透二得此門一、出塵羅漢、

とあつて、「出塵羅漢」の語を出してゐる如きは、果してこれが、初めから大乘的思想をもつて明藏系の本經を改作せむとする意圖に出でたものであるかどうか吾人をして甚だ疑はしむる所である。この點に於て吾人は、明藏系に對してと同様に、守遂系に對しても、その大乘的潤色を宋代禪宗隆盛の影響としてみる見方をしばらく差控へたいと思ふ次第である。

經錄の傳ふる所によれば、『四十二章經』は後に吳（A.D. 222—280）の支謙によつて重譯されたといはれてゐる。卽ち先に一言指摘する所の如く、『歷代三寶紀』五（正・四九・五七c）の支謙の條下に

四十二章經 第二出、與二摩騰譯者少異、文義允正辭句可レ觀、見二別錄一

とあるものがそれである。しかしこの支謙譯とされた『四十二章經』なるものは、今日傳つてゐないのみでなく、『出三藏記集』の支謙の條下にも載せられてゐないものである。よつて學者の中には、これは摩騰の所譯とさるべき本經の一異本が、

支那南方地方に於て偶〻支謙譯として傳へられてゐて、『歴代三寶紀』の著者費長房がこの傳說に煩はされた結果であつて、全く彼の誤れる鑑識に外ならないと說いてゐるものもある。しかし更に進んで考ふるならば、この南方に於て一異本が支謙譯とされてゐたことそのこと自體には、何か事實上の根據があつたのではなからうか。もしさうだつたとするならば、それは恐らく支謙が摩騰等所譯の本經に更に增删訂正を加へたことであつたと見ることが一の推測の方法であらう。そこで、南方に於ては、費長房が『歴代三寶紀』を撰した開皇十七年(A.D.597)頃には、この支謙の增删訂正せる『四十二章經』が、支謙譯として流布してゐたものではなからうかと思はれる。支謙譯の體裁內容がいかなるものであつたかは、現在支謙譯としての本經が存しないから、何等確言し得ないわけであるが、この點に關して唯一の推定の手懸りと見るべきは、梁の慧皎がその著『高僧傳』第一(正・五〇・三二三a)の竺法蘭傳中に記せる次の文である。

江左唯四十二章經、今見在、可二二千餘言一、漢地見二存諸經一、唯此爲レ始也、

これは、勿論摩騰譯としての『四十二章經』に就いて述べてゐることであつて、決して支謙譯としてのそれに就いてゞはないのであるが、慧皎が『高僧傳』を著した頃、卽ち梁の天監十八年(A.D.519)頃、南方に於て行はれてゐた本經が二千餘言であつたといふことがこれによつて解るわけである。ところでこの二千餘言とされる本經が、現在摩騰等の所譯として傳はつてゐる三種の異本たる麗藏系・明藏系及び守遂系の何れに當るかを考へてみるに、明藏本の二六〇四字は恐らくこれに當てることが不可能であつて、麗藏本の二三六五字と守遂本の二三一二字との二本をこれに當て得るであらう。慧皎が「二千餘言」と斷じた『四十二章經』が、この二本中の何れであつたかは元より斷言の限りではないが、もしこの二本中の後者卽ち守遂本であつたとするならば、さきに紹介せる如く、麗藏本と守遂本との間には、文章及び內容の上に相異あつて、明かに後者は前者に增删訂正を施したものであるから、これらの事情を綜合して考ふるならば、費長房が「與二摩騰譯一者少異、文義允正、辭句可レ觀」と言つた支謙譯『四十二章經』なるものは、或はこの所謂守遂系本經と同一のものだつたのではなからうかと思はれる。而して南方に於て、この所謂守遂系の本經が、一部ではその增删訂正の功に從へて支謙譯とされてゐたために、費長房がこれを採つて以て支謙譯なる一本を別出したのではなからうかとの想像がつかぬでもない。もしかくの如き事情であつたとした

ならば、『出三藏記集』の支謙の條に『四十二章經』が出されてゐないことを會通することもさほど困難ではなからうし、從つてまた『歷代三寶紀』中に本經の支謙譯を出せることが、强ち費長房の誤れる鑑識とのみ見做すことも出來なからう。但し、以上の所說は、元より想像の上にも更に想像を逞しうした一個の臆測に過ぎないのであるから、吾人も特にこれを主張せむとしてゐるわけでは更々なく、偏へに後日の討究と識者の批敎とを俟つ所ではあるが、しかもこの問題が更に學者によつて考究されむとする際において、以上吾人の推度せる如き事情が全然有り得なかつたかどうかてふことだけは、一應考慮されむことを望んで置きたいのである。

後世禪宗に於て『遺敎經』『潙山警策』と共に、「佛祖三經」の隨一として依憑されてゐるのは、守遂系の本經であつて、明の永覺が道霈の『佛祖三經指南』の序(『大日本續藏經』五九套・二冊・一七〇丁右)に

禪家有二所謂佛祖經者一、不レ知レ昉レ自二何時一、然傳習已久、

と言つてゐるやうに、何時の頃誰によつてかく三經として纒められたものか明かでない。しかし道霈がかの著の自序に於て

昔大漢遂禪師於二兵火之餘一、草衣木食爲二學者一釋二三經一、

と記してゐるのが事實とすれば、かの守遂の時代即ち西曆第十二世紀の初頭には、旣に三經として纒められてゐたものと見て差支なからう。

三、本經の講讀

印度・西域に於ける本經の講讀がいかなる狀態であつたかに就いては、全く文獻の徵すべきものがない。

本經一度び摩騰・法蘭によつて漢譯さるゝや、特に最初の佛敎經典たるの故と、內容がよく當時の人心に投じたるが爲とを以て、明帝以下諸人によつて大に尊崇せられしものゝ如く、爲に本經が漢の帝室の書庫たる蘭臺の石室中に緘藏されたてふことは、すでに一言した如くである。『出三藏記集』第二（正・五五・五b）には本經のことを叙して後

竊尋二兩漢之季世一、搆二亂離一、西京蕩覆墳典皆散、東都播遷載籍多亡、子政所レ覩其文雖レ沒、而顯宗所レ寫厥篇猶存、

とあり、こゝにいふ所の顯宗とは後漢明帝のことであるから、明帝が本經を尊信してこれを書寫してゐたことが知られる。またその下には、

四十二章經一卷舊錄云二孝明皇帝四十二章一、安法師所レ撰錄闕二此經一、

とし、またさきに一言せる『五十二章經』なる經名を諸經錄が出せる個所にも

五十二章舊錄所レ載、別有二孝明四十二章經一

等として、何れも本經の名に孝明帝の名が冠されてゐるのも、恐らく帝の歸信若くは書寫の故を以て古くはかく呼ばれてゐたものであらうと想像される。かくて幾くならずして本經が、少くとも後漢の有識者によつてよく讀誦されたことは、さきにも一言せる如く、後漢桓帝へ奉つた襄楷の上表文中に本經の數章が引かれてゐることよりして推察し得る所である。而して慧皎が『高僧傳』を著せる天監十八年(A. D. 519)頃には、すでに南方支那にまでも流布してゐたこと明かである。

その後約五百年を經て、宋の眞宗帝(A. D. 998—1022 在位)本經を尊信すること殊に篤く、大中祥符六年(A.D.1013)四明法智の弟子なる崇矩を內殿に召して本經を講ぜしめ、爲に紫袍を賜うたことが『佛祖統記』四四(正・四九・四〇五 a)に見えてゐる。而して眞宗は自らも亦本經の註釋を製し

(一)　註四十二章經一卷

と題した。普通『御註四十二章經』と呼ばれてゐるものが卽ちこれである。これは明藏系の本經に憑つたもので、極めて簡明ではあるが要を得てゐるから、學佛初學者には恰好の參考書である。本書は眞宗の天禧三年(A.D.1019)『御註遺教經』と共に初めて入藏された。『大正大藏經』三九卷及び『大日本續藏經』五九套・一冊に收められてゐる。『新編諸宗敎藏總錄』一(正・五五・一一七二 b)によれば、同じ頃、智圓(A.D. 976—1022)が本經に就いて『注』一卷・『正義』一卷を述作し、稍後れて仁岳(—A.D.1064)が『通源記』二卷・『科』一卷を作つたやうであるが、それらは何れも現存してゐないやうである。またさきにも述べた如く、宋の中期卽ち西曆第十二世紀の初頭の頃、禪宗曹洞派の祖守遂が、すでに「佛祖三經」の一として本經を讀誦し、兵火騷亂の餘にあつた草衣木食して本經を講じたと傳へられてゐる。彼が本經を註したものに、後明の了童が補註を加へたものが

(二)　佛說四十二章經註一卷

として、『大日本續藏經』五九套・一冊に收められてゐる。この註釋の憑れる本經は、さきに守遂系の本經として特出して置いた如く、麗藏系・明藏系の何れとも異つたものであり、その點に於て特にこの註釋は重要なものと見られる。また『至元法寶勘同總錄』第十(『昭和法寶總目錄』二・二三七 a)に、現存してはゐないが、「失造人名」として『注四十二章經』一卷なるものを出してゐる。以上の如きことより察するに、宋・元兩代に於ける本經の講究は相當に旺んであつて、註釋書も多く出たやうである。蓋し宋代以後、禪宗が特にその宗風を發揚して斷然他宗を壓し、獨りその勢力を擅にするの時に當

つて、一面にはかの宗が偏へに實踐を重んずるがためと、他面にはその徒が徒らに高遠をのみ憬れて卑近を談ずるを恥ぢたるを矯めむがために、本經の如き專ら浮情を防ぎ實踐を重んぜしむるを目的とする日常切實の教訓が尊重さるゝことゝなつたのであらう。

明代に入つては智旭(A.D.1599—1655)が

(三) 佛說四十二章經解　一卷

を著はした外、かの道霈が、有名な『佛祖三經指南』中の一として、福王の弘光元年(A.D. 1645)に著せる

(四) 四十二章經指南　一卷

があり、何れも『大日本續藏經』五九套に收められてゐる。淸代の初め、康熙十九年(A.D. 1680)續法が著せる

(五) 四十二章經疏鈔　五卷

も亦『大日本續藏經』五九套・一冊—二冊に收められてゐる。なほさきに本經西藏譯の跋文によつて述べて置いた如く、高宗の代(A.D. 1736—1795)には勅命によつて本經の滿洲語譯を出し、それによつて更に西藏語譯を產んだほどで、明・淸代に於ける本經の講究は非常に旺んなるものであつた。

わが國に於ても特に禪宗にては『佛祖三經』の一として本經が古くから玩讀され、また最近に及んでは佛教思想の通俗化が唱導されたためか、本經が一般民衆の間によく流布さるゝに至つたのである。元文三年(A.D. 1738)光謙(靈空)古雲の編せる『佛遺教經解俗談』の附錄として

(六) 四十二章經解事義

があり、また町田香空は

(七) 增冠傍註四十二章經　一卷

を著はしてその著『增註佛祖三經指南』上の中に收めてゐる。最近には大內靑巒の

(八) 四十二章經講義　一卷

を始めとして、釋宗演の

(九) 佛祖三經講義

の中のものや、高島米峰氏の

(一〇) 四十二章經講話　一卷

等があり、何れも通俗平明に解釋されてゐて、本經を讀む者に取つて良好な參考書たるものである。

四、本經の內容

本經は元より一部の纏つた經典ではなく、各章何れも他の經典よりの引抄に過ぎないのであるから、組織立つた構想を有つてゐるわけではない。殊に上述の如く、異本の間に內容上の甚しい相異が存するのであるから、一概して論ずることは出來ないが、いま且らく、本國譯所依の本經たる高麗藏本に就いてその內容を一瞥してみやう。

さきに、本經の各章がいかなる經典よ

り引用されたかを示さむとして掲げて置いた對照表によつても知られる如く、本經の各章何れも『阿含』中のもの多く、從つてかの經中に說かれたる斷欲去愛の精神は亦以て本經を一貫してゐるゝと言つてよい。まづかの經が多く苦・無常・無我を說くと同樣、本經に於ても亦これを說いてゐる。卽ち本經第三十五章に於ては

「人、生より老に至り、老より病に至り、病より死に至る、其の苦無量なり。心惱み、罪を積ぬ。生死息まず。其の苦說き難し。」

と說いて、人生の苦相を示し、天地山川一として無常ならざるものなきを言ひ(第十六章)、更にこれを切實に示して人の命は呼吸の間にありと說く(第三十七章)。第十八章には無我を說いて身中の四大を以て我と執ずることの迷を明してゐる。而してかくの如き迷妄苦惱は果して何より來るかに就いて第三十一章にこれを說いて

「人、愛欲より憂を生じ、憂より畏を生ず。愛無くんば卽ち憂無し。憂へずんば卽ち畏無し。」

といふ。愛欲を以て苦惱の根元とするが故に、本經は專ら愛欲の恐るべきことを說いて、或はこれを香木の自らを燒くに譬へ(第十九章)、或は刀に附着せる蜜に譬へ(第二十章)、或はまた炬火の手を燒くに譬へてゐる(第二十三章)。而して愛欲中最も强烈なる色欲に就いては、或は釋尊の降魔のことを出し(第二十四章)、或はもしかくの如く强烈なる欲にして「二あらば、普天の民能く道を爲す者無からむ」とまで極言し(第二十二章)、愼んで女人を視るべからず、もし視るならば老ひたるを母とおもひ、長じたるを姉とし、少きか妹とみるべきことを敎へ(第二十七章)、人をして愚蔽ならしむるものは愛欲に外ならないとして(第二章)この愛欲に纏はれたるわが意の終に信ずべからざることを說く(第二十六章)。また妻子に對する執着は、その罪終に赦さるゝことなく(第二十一章)、たとひ斷根を以て情欲を制せむとするも邪心止まずんば何等の益なきことを說く(第二十九章)。

然らば吾々はかくの如き愛欲に對していかに處すべきか。そはひたすら精進して愛欲を滅するにあるといふ。「欲を斷じ空を守れば、卽ち道眞を見」(第十一章)「心垢盡きなば、乃ち魂靈の從來する所、生死の趣向する所を知る」といひ、かくの如き道德の存する所を以て諸佛國土といふとする(第十三章)。この本經の佛國土觀は注意すべきであらう。かくて諦道を念じて須臾も忽にせず(第十五章)、一日の行に常に道を念じ(第十七章)、恰も流木の兩岸に滯らず直流するが如く(第二十五章)、また大火を已て却ふが如く

(第二十八章)、或は兵の敵に對する場合の如く(第三十二章)、乃至は懸珠を摘む時の如く(第四十章)、或は負重の牛の泥を除ふが如く(第四十一章)であるならば、遂に衆苦を免るゝことを得るのである。さりながら、たとへ精進するとも、極端に走ることはまたこれを愼しむべきであつて、飽くまでも中道に處すべく、彈琴の譬喩や(第三十三章)鍛鐵の譬喩(第三十四章)を出してこれを示してゐる。かくの如き說相何れも所謂小乘教的ではあるが、而もまた中には、慈悲忍辱の行を說いて惡に抗するに惡を以てすべからざるをいひ(第五・六章)、布施を高調し(第八・九章)、悔過の要を力說する(第四章)あたりは、所謂大乘教的傾向さへ窺はれ、殊に第九章に於て「佛を學びて佛たるを願ひ求め、衆生を濟はむと欲するもの」卽ち所謂菩薩に對する布施を以て最高の布施としてゐる如きは大いに注目に値ひすべき所であらう。

以上はたゞ本經の大要を概說したに過ぎないのであつて、本經の各章がいかに卑近なる事例を藉りて修道上の切要なる教訓を垂れてゐるかは、たゞ各章の一々に就いて味讀實踐せむとする者の獨り味ひ得る所である。本經(第三十九章)にもすでに佛の經教は恰も蜜丸を甞むるが如く、「其の義皆快く、行ずれば道を得る」と說かれてある。げに本經の如き日常卑近の教誡を眞に遵奉佩帶するものこそ、誠に佛教の盡きせぬ醍醐味を識るものと謂ふべきであらう。嘗て明の永覺は、『佛祖三經指南』の序に於いて、當時の學佛者が徒らに「高遠を浮慕して卑近を談ずるを恥ぢ、此等の書を見ては輒ち頭を掉つて顧みず、妄りに上根上智と以爲ひ、此に及ぶを屑しとせざる」の妄を誡めて

九仭功必始於一簣、若舍一簣而談九仭、雖童稚亦知其必無成也、

と說き、かの迦葉尊者が力行頭陀のことを教へてゐられるが、いま更めて本經の國譯を世に送らむとするに當り、また彼のこの慈誨を採つて、以て本經解題の最後を莊嚴し、動ともすれば机上の空談に終始せむとする現代學佛者の内省の一縁ともならむことを冀うて止まざる次第である。

昭和八年三月五日

譯者 深浦正文 識

四十二章經

【序】(一)昔、漢の孝明皇帝、夜夢に神人を見たまふ。身體に金色を有し、項に日光あり。飛んで殿前にあり。意中欣然として、甚だ之を悅し、明日群臣に問ひたまふ『此れ何の神爲るや』と。通人傅毅てふもの有りて曰く、『臣聞く、天竺に道を得たる者有り、號して佛と曰ふ。輕擧にして能く飛ぶ。殆くは其の神ならむ』と。是に於て、上悟り、卽ち、使者張騫・羽林中郞將秦景・博士弟子王遵等十二人を遣し、大月支國に至り佛經を寫取せしむ。四十二章は第十四石函中に在り。登塔寺を起立し、是に於て道法流布す。處處に佛寺を修立す。遠人化に伏して臣妾爲るを願ふもの稱げて數ふ可からず。國內淸寧にして、(三)含識の類、恩を蒙り、賴を受くるもの今に絕えず。

【第一章】(四)佛言はく、親を辭して出家し、道を爲すを名けて(五)沙門と曰ふ。常に(六)二百五十戒を行じ、(七)四眞道の行を爲し、進志淸淨なれば(八)阿羅漢を成ず。阿羅漢とは能く飛行變化し、壽命に住り、天地を動かす。次を阿那含と爲す。阿那含とは壽終り、魂靈(一〇)十九天に上つて、彼に於て阿羅漢を得。次を(一一)斯陀含と爲す。斯陀含とは一たび上り、一たび還りて、卽ち阿羅漢を得。次を(一二)須陀洹と爲す。須陀洹とは七たび死し、七たび生れて、便ち阿羅漢を得。愛欲斷ずれば、譬へば四肢の斷たれて復た之を用ゐざるが如し。

【第二章】(一三)佛言はく、鬚髮を除きて沙門と爲り、道法を受くれば、世の資財を去り、乞ひ求めて足るを取り、(一四)日中に一食し、樹下に一宿して、愼んで再びせされ。人をして(一五)愚弊ならしむる者は愛と欲となればなり。

【第三章】(一六)佛言はく、衆生十事を以て善と爲し、亦十事を以て惡と爲す。身に三、口に四、意に

【一】經題及び譯者に關しては本國譯解題を見よ。
【二】この序文中に叙べられてゐる事柄、並びに本經の異本中に全然これとは異つた序文を揭げたもの〻あることに就ては、本國譯解題中に述べて置いた通りである。
【三】含識。「心識を含有するもの」の意、卽ち衆生のこと。
【四】第一章。佛教行者の最究竟位とされてゐる阿羅漢の位に至る四種の道程、卽ち須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢の所謂四沙門果に就て、そのいかなるものなるかゞ說明される。通常は修行の次第に從つて須陀洹・斯陀含等の順序でいはれるのが普通であるが、いまこの章では證入の結果よりして逆に阿羅漢・阿那含等の順序で叙べられてゐる。
【五】沙門(Çramaṇa)。「勤息」等と譯される。修行者の意、
【六】二百五十戒。佛陀によつて制定された戒律の條目は普通二百五十箇條と概算されてゐる。『四分律』その他律部の諸本を參看、
【七】四眞諦(Catvāry āryasatyāni)。所謂四聖諦のこと、卽ち(一)苦—生・老・死等の苦、(二)集—苦の原因卽ち愛・取

三なり。身の三とは、殺と盜と婬となり。口の四とは、兩舌と惡罵と妄言と綺語となり。意の三とは、嫉と恚と癡となり。[一七]三尊を信ぜず、邪を以て眞と爲す。[一八]優婆塞は[一九]五事を行じて、懈退せず、十事に至つては必ず道を得るなり。

[二〇]【第四章】佛言はく、人には衆の過有り、而も自ら悔ひ、頓に其の心を止めずんば、罪身に來歸すること、猶水の海に歸して自ら深廣と成るがごとし。惡有つて非なることを知り、過を改めて善を得れば、罪日に消滅して後、道を會得するなり。

[二一]【第五章】佛言はく、人愚かにして、吾に爲すに、不善を以てせば、吾[二二]四等慈を以て、護りて、之を濟はむ。重ねて惡を以て來らば、吾重ねて善を以て往かむ。福德の氣、常に此に在るなり。害氣殃を重ぬれば、反つて彼に在り。

[二三]【第六章】人有り、佛の道を守り大仁慈あるを聞きて、惡を以て來るに、〔佛は〕善を以て往きたまふ。故らに來り罵るも佛は默然として答へたまはず。之を愍みたまへばなり。癡冥狂愚〔の者〕をして然かせしめ、罵ること止みて〔後、佛は〕問うて曰はく、『子[二四]禮を以て人に從はむに、其の人納れずんば、實に禮は如之にするや。』曰はく、『持ち歸らむのみ。』『今子我を罵れども、我亦納れず。子自ら持ち歸らば、子が身を禍はさむのみ。猶響の聲に應じ、影の形を追ひて、終に免離することと無きがごとし。惡を爲すを愼め。』

[二五]【第七章】佛言はく、惡人の賢者を害するは猶天を仰いで而も唾せむに、唾天を汚さずして、還つて己が身を汚し、風に逆つて人に坋くに、塵彼を汚さず還つて身に坋するがごとし。賢者は毀つ可からず、過必ず己を滅さむ。

[二六]【第八章】佛言はく、夫れ人道を爲さむには務めて博く愛せよ。博く哀みて、施せ。德は施より大なるは莫し。志を守り、道を奉ずれば其の福甚だ大なり。人の道を施すを覩て、之を助けて歡喜

等、(三)滅—苦の滅即ち涅槃、(四)道—苦の滅に至る道、—これら四に關する眞理をいふ。

【八】阿羅漢(Arhat)「價する」・「相應する」等の意を有する動詞 'arh' から來た名詞で「應供」・「應眞」等と譯され、またときには「怨賊」を意味する 'ari' と「殺害」を意味する 'han' との結合と解されて「殺賊」とも譯されることがある。前者の場合は「供養に價する者」の意であらう、後者の場合には「煩惱の賊を殺斷した者」の意とされてゐる。要するに佛教に於ける證果の最究竟位のものをいふ。後に大乘佛教興つて小乘佛教と對立するに及んで、阿羅漢は小乘佛教の理想とする所としてむしろ貶斥されるに至つたが、本來はさうではなく、一般に佛教修行者の理想とした所である。本經に於ても後の個所(第九章)では阿羅漢の上に更に辟支佛や菩薩に相當するものをも認めて必ずしも阿羅漢を究極の位とはしてゐない趣も認められるが、しかしこの章の解釋にはさう嚴密な教相學的規定を豫想しないで、本來の意味に於て理解した方がいゝと思はれる。

【九】阿那含(Anāgāmin)。「不還」と譯す。再び欲界に還

すれば、亦福報を得む。質ねて曰く、[二七]彼の福當に滅ずべからざるか。佛言はく、猶炬火の、數千百人各〻炬を以て來り、その火を取けて去り、食を熟き、冥を除くも、彼の火は故の如くあるが若し。福も亦之の如し。

[二八]【第九章】 佛言はく、凡人百に飯せむよりは、一[二九]善人に飯せむに如かず。善人千に飯せむよりは、[三〇]五戒を持てる者一人に飯せむに如かず。五戒を持てる者萬人に飯せむよりは、一須陀洹に飯せむに如かず。須陀洹百萬に飯せむよりは、一斯陀含に飯せむに如かず。斯陀含千萬に飯せむよりは、一阿那含に飯せむに如かず。阿那含一億に飯せむよりは、一阿羅漢に飯せむに如かず。阿羅漢十億に飯せむよりは、[三一]辟支佛一人に飯せむに如かず。辟支佛百億に飯せむよりは、三尊の教を以て、其の一世二親を度するものに[飯せむに]如かず。教ふるもの千億よりは、一の、佛を學びて、佛たるを願ひ求め、衆生を濟はむと欲するものに飯せむに如かず。[三二]善人に飯するは福最も深重なり。凡人の天地鬼神に事ふるは、其の親に孝なるに如かず。二親は最も神ければなり。

[三三]【第十章】 佛言はく、天下に五の難きことあり。貧窮にして布施せむとするの難、豪貴にして道を學ぶの難、命を制けて死せざらむとするの難、佛經を觀るを得るの難、佛世に生れ値はすの難なり。

[三四]【第十一章】 沙門有り、佛に問ふ、何の緣を以て道を得、奈何にして[三五]宿命を知るや。佛言はく、道は形無ければ、之を知らむとするも益無し、要は當に志行を守るべし。譬へば磨鏡の、垢去りて明存すれば卽ち自ら形見るゝが如く、欲を斷じ空を守れば卽ち道眞を見、宿命を知らむ。

[三六]【第十二章】 佛言はく、何をか善と爲すや。唯道を行ずることのみ善なり。何をか最大となすや。志道と合ふは大なり。何をか多力となすや。忍辱は最も健し。忍ぶ者には怨無し。必ず人に尊ばる。何をか最明となすや。心の垢除り、惡行滅し、內淸淨にして瑕無く、未だ天地有らざるより、今

ることのない位に進んだもの。四沙門果の第三位である。

【一〇】 十九天。道霈の『佛祖三經指南』では、欲界六天(四天王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天)を一天とし、これに色界の十八天(梵衆天・梵輔天・大梵天・少光天・無量光天・光音天・少淨天・無量淨天・遍淨天・無雲天・福生天・廣果天・無想天・無煩天・無熱天・善見天・善現天・色究竟天)を加へて十九天としてゐるが、一説にはまた、不還果の人は欲界の中に死して色・無色界の中に生じ彼處に於て漏盡して復た來生しないといはれてゐるから、こゝにいふ十九天とは、色界の十八天に無色界の四天(空無邊處・識無邊處・無所有處・非想非非想處)を總括して一天とみたものを加へていつたものであるともいはれてゐる。諸天に就て詳くは『俱舍論』世間品・同『頌疏』八等を參照。

【一一】 斯陀含(Sakridāgāmin)。「一來」と譯す。一度死して天上界に生れ、更にもう一度人界に還來して後阿羅漢を證得するが故にかく名けらる。四沙門果の第二である。

【一二】 須陀洹(Srotāpanna)。「預流」と譯す、始めて聖者の流類に參預するものゝ意で、

日に逮るまで、十方の所有ること、未だ之の萠を見ざるより、知らざること無く、見ざること無く、聞かざること無きを得、[三七]一切智を得るは明と謂つ可きか。

[三八]【第十三章】　佛言はく、人愛欲を懷いて道を見ざるは、譬へば濁水の[三九]五彩を以て其の中に投じ、力を致して之を攪さば、衆人共に水の上に臨むも、能くその影を覩る者無きが如し。愛欲もて心中を交錯すれば濁と爲るが故に道を見ず。水澄み、穢除り、清淨無垢なれば卽ち自ら形見る。猛火を釜の下に著け、中の水踊躍すれば、布を以て上を覆ひ、衆生照臨するも亦其の影を覩る者無し。心中本三毒の涌沸して内に在る有り。五蓋外を覆うて、終に道を見ず。要するに心垢盡きなば乃ち魂靈の從來する所、生死の趣向する所を知る。諸佛國土といふも道德の在る所のみ。

[四〇]【第十四章】　佛言はく、夫れ道を爲す者は、譬へば炬火を持ちて冥き室の中に入るに、其の冥卽ち滅して而も明のみ猶在るが如し。道を學び、諦を見れば、愚癡都て滅す。見ざること無きを得るなり。

[四一]【第十五章】　佛言はく、吾何をか念ずる、道を念ずるなり。吾何をか行ずる、道を行ずるなり。吾何をか言ふ、道を言ふなり。吾[四二]諦道を念ずるに、忽に須臾せざるなり。

[四三]【第十六章】　佛言はく、天地を觀て[四四]非常と念じ、山川を觀て非常と念じ、萬物の形體豐熾なるを觀て非常と念じ、執心此の如くんば道を得ること疾し。

[四五]【第十七章】　佛言はく、一日の行に、常に道を念じ、道を行ずれば、遂に[四六]信根を得む。其の福無量なり。

[四七]【第十八章】　佛言はく、熟自ら身中の[四八]四大を念ぜよ。自らに名けて名を有すれども、都て無と爲す。[四九]吾我は寄りて生ず、生も亦久しからず。其の事幻の如きのみ。

[五〇]【第十九章】　佛言はく、人の情欲に隨つて華名を求むるは、譬へば、香を燒きて、衆人其の香を

四沙門果の第一である。

【一三】　第二章。愛・欲を去らむとする出家沙門の生活を具體的に指示する。明藏本等の異本には、この第二章の前に次の文が一章として加つてゐる。佛言、出家沙門者、斷レ欲去レ愛、識ニ自心源一、達ニ佛深理一、悟ニ佛無爲一、內無レ所レ得、外無レ所レ求、心不レ繫レ道、亦不レ結レ業、無念無作、無修無證、不レ歷ニ諸位一而自崇最、名レ之爲レ道。

【一四】　日中とは正午のこと。印度に於て佛教徒は一日の中に正午に一度食事を取りそれ以外の時刻には食を取ることが禁ぜられてゐる。また佛教徒は隨處に野宿するのが本格となつてゐて、同一處に一宿と限られ二宿三宿することが禁ぜられてゐるが故に「樹下に一宿」するといはれる。

【一五】　愚弊。「愚蔽」ノ同意か。愚蔽はおろかにしてくらきことをいふ。

【一六】　第三章。十惡業を斥けて十善業を勸め、佛・寶・僧を信じて顚倒の妄見に執はれないことを敎ふ。

【一七】　三尊。佛教に於ては佛・法・僧の所謂三寶のこと。

【一八】　優婆塞（Upāsaka）。在家の佛教信者。

聞けども然も〔そは〕香の〔自ら〕以て熏り自ら燒えたるが如し。愚者は流俗の名譽を貪り、道眞を守らず。華名は己を危くするの禍なり。其の悔ゆるは後の時に在り。

[五一]【第二十章】佛言はく、財・色の人に於けるや、譬へば小兒の刀を貪りて刃の蜜を甜めむに、一食の美さに足らずして、然も舌を截るの患有るが如し。

[五二]【第二十一章】佛言はく、人の妻子寶宅の患に繋らるゝは、牢獄・[五三]桎梏・鋃鐺よりも甚し。牢獄には[五四]原赦有り。妻子〔に對する〕の情欲は、虎口の禍有りと雖も己は猶甘心もて焉に投ず、其の罪、赦さるゝこと無し。

[五五]【第二十二章】佛言はく、愛欲は色より甚しきは莫し。色の欲爲る其の大なること外に無し。[五六]賴に一有るのみにて、假し其が二あらば、普天の民能く道を爲す者無からむ。

[五七]【第二十三章】佛言はく、愛欲の人に於けるは、猶炬火を執りて風に逆ひて行くに、愚かなる者炬を釋さずんば必ず手を燒くの患有るが如し。[五八]貪婬・恚怒・愚癡の毒人の身に處在り。早く道を以て斯の禍を除かずんば、必ず危殃あらむ。猶愚貪のもの炬を執りて自ら其の手を燒くがごとし。

[五九]【第二十四章】天神王女を佛に獻じて、以て佛意を試み、佛道を觀むと欲す。佛言はく、『革囊衆穢のみ。爾來るも何か爲む。以て、斯の俗もて、[六〇]六通を動かすこと難かる可し。去ね、吾爾を用ゐず。』と。天神踰佛を敬す。因つて道の意を問ふ。佛爲に解釋したまふに、卽ち須陀洹を得たり。

[六一]【第二十五章】佛言はく、夫れ道を爲す者は、猶木の水に在つて流に尋ひて行くに、左に岸に觸れず、亦右に岸に觸れず、人の取る所と爲らず、鬼神の遮る所と爲らず、[六二]洄流の住むる所と爲らず、亦腐敗せずんば、吾其の海に入るを[六三]保せむが如し。人の道を爲すや情欲の惑はす所と爲らず、衆くの邪なるものの誑はす所と爲らず、精進して疑無くんば、吾其の道を得るを保せむ。

【一九】五事。優婆塞の守るべき道として不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五が規定されてゐて、これを五戒と呼ぶ。

【二〇】第四章。悔過の要を說く。

【二一】第五章。惡に抗するに惡を以てすべからざることを說く。

【二二】四等慈。(一)慈―樂を與ふること、(二)悲―苦を拔くこと、(三)喜―他人の離苦得樂をみて慶ぶこと、(四)捨―取着なきことの四、普通四無量心といふ。

【二三】第六章。前章と同樣の趣旨を事例を以て說く。

【二四】禮。禮物、進物。

【二五】第七章。惡人のつひに善人に勝つべからざることを譬喩を以て明す。

【二六】第八章。博愛の精神を以て弘く布施すべきことを說く。

【二七】布施を行ずる人をみてこれを隨喜する人も亦福報を得るとするならば、最初の布施を行ずる人の功德が後の喜隨する人によつて奪はれ減じはしないかといふ問。

【二八】第九章。いかなる人に布施することがより多くの功德となるかを說く。そしてそれは「佛を學びて佛たるを願

【[六四]第二十六章】佛沙門に告げたまはく、愼んで汝が意を信ずること無かれ。意終に信ず可からず。愼んで色と會すること無れ。色と會すれば卽ち禍生ず。阿羅漢道を得て乃めて汝が意を信ず可きのみ。

【[六五]第二十七章】佛、諸の沙門に告げたまはく、愼んで女人を視ること無かれ。若し見無くして視るも、愼んで與に言ふこと無かれ。若し與に言はば、心を勅め正しく行じて曰く、『吾は沙門爲り。濁世に處るも、當に蓮花の泥に汚されざるが如くなるべし。』と。老ひたる者は母と以爲ひ、長じたる者は姉と以爲ひ、少き者は妹と爲ひ、幼き者は子として、之を敬ふに禮を以てせよ。意殊に當に諦かに惟觀すべし。頭自り足に至るまで自ら內に視よ、「卽ち」『彼の「女の」身は何の有ぞや、唯惡露と諸の不淨種を盛るにこそ。』と。以て其の意を釋れ。

【[六六]第二十八章】佛言はく、人道を爲し、情欲を去るは、當に草に[六七]大火の來るを見て已て却ふが如くすべし。道人愛欲を見れば必ず當に之を遠くべし。

【[六八]第二十九章】佛言はく、人有り、婬情の止まざるを患へ、斧刃の上に踞りて、以て自ら其の[六九]陰を除かむとす。佛之に謂ひて曰はく、『若し陰を斷せむよりは心を斷ぜむに如かず。心は[七〇]功曹爲り。若し功曹を止めば從ふ者も都て息まむ。邪心止まずんば陰を斷ずとも何の益かあらむ。斯れ須らく卽ち死すべし。』と。佛言はく『世俗の倒見は斯の癡人の如し。』と。

【[七一]第三十章】婬なる童女有り。彼男と誓ふ。期に至るも「彼の男」來らず。「童女」自ら悔いて曰く、『欲は、吾、爾の本[七二]意なることを知れり、[七三]「意は」思・想を以て生ず、吾爾を思想せずんば、卽ち爾は生ぜざらむ。』と。佛、道を行きつゝ之を聞きたまひ、沙門に謂ひて曰はく、『之を[七四]記せよ、此は[七五]迦葉佛の偈なり、流れて俗間にあり。』と。

【[七六]第三十一章】佛言はく、人愛欲從り憂を生じ、憂從り畏を生ず。愛無くんば卽ち憂無し。憂へ

ひ求め、衆生を濟はむと欲するもの」、卽ち後世の所謂菩薩に供養することが最も勝れた功德なることゝする。この點、所謂菩薩を理想とする大乘佛敎の趣旨の顯著に見えてゐることを注意すべきである。

【二九】善人。この場合には、五戒を持つといふほどにも至らないが、しかし世間的にみて善い性質をもつた人。

【三〇】五戒。前掲註釋〔二四〕五事を見よ。

【三一】辟支佛(Pratyeka-buddha)。「獨覺」又は「緣覺」と譯される。本來は「獨覺」と譯さるべき語で、無師獨悟した聖者を指したものであらうが、後には他の爲に說法しない獨善主義の聖者を意味するやうになり、大乘佛敎に於ては聲聞(Śrāvaka)と並べて二乘と稱し極力貶斥されるやうになつた。これを「緣覺」と異譯したのは梵語'Pratyeka'が「因緣」を意味する'Pratyaya'と相似する點に基いたか、又は獨覺は必ず十二因緣を觀ずる修行をなすとする點から考へた意味上の義譯か、何れかであらう。

【三二】以下の文章は前文との連絡稍ゝ不自然に想はれるが、或は何かの誤であるかも知れない。

ずんば卽ち畏無し。

[七七]【第三十二章】佛言はく、人道を爲すは、譬へば一人の萬人と戰ひ鉀を被り兵を操り、門を出でゝ戰はむと欲するに、意怯にして膽弱きものは乃ち自ら退走し、或ものは半道にして還り、或ものは格鬪して死し、或ものは大勝を得て還り國高く遷るが如し。夫れ人能く其の心を牢く持し、精銳進行して流俗狂愚の言に惑はずんば、欲滅し、惡盡き、必ず道を得む。

[七八]【第三十三章】沙門有り、夜經を[七九]誦すること甚だ悲しけれど、意に悔疑有りて欲生じ、歸らむと思ふ。佛沙門を呼びて之に問ひたまはく、『汝家に處りて將に[八〇]何をか修め爲るや。』對へて曰く、『恒に琴を彈ぜり。』と。佛言はく、『絃緩ければ何如。』曰く、『鳴らず。』『絃急なれば何如。』曰く、『聲絕す。』『急緩中を得れば何如。』『諸音普ねく悲し。』と。佛沙門に告げたまはく、『道を學ぶも猶然り。執心[八一]調適すれば道は得可きなり。』と。

[八二]【第三十四章】佛言はく、夫れ人道を爲すは、猶し鍛はるゝ所の鐵の漸く深しくして垢を棄て去りて器と成さば必ず好きがごとし。道を學ぶこと以て漸く深しく、心の垢を去りて精進就道せよ。暴しければ卽ち身疲る、身疲るれば卽ち意惱む、意惱めば卽ち行退く、行退けば卽ち罪を修す。

[八三]【第三十五章】佛言はく、人道を爲すは亦苦なり。道を爲さざるも亦苦なり。惟ふに、人生より老に至り、老より病に至り、病より死に至る、其の苦無量なり。心惱み、罪を積ぬ。生死息まず。其の苦說き難し。

[八四]【第三十六章】佛言はく、夫れ人三惡道を離れ、人爲るを得ること難し。既に人爲るを得るも、女たるを去けて男に卽くこと難し。既に男爲るを得るも、[八五]六情の完具すること難し。六情已に具すとも、中國に生るること難し。既に中國に處るも、佛道に値ひ奉ること難し。既に佛道を奉ずるも、有道の君に値ふこと難し。[八六]菩薩の家に生ずること難し。既に菩薩の家に生ずるも、心を以て

【三三】第十章。この世に於て最も難きことゝされる五のことを擧ぐ、異本にはこれらの外に更に十五難を加へて二十難として出してあるものもある。なほその種の異本中には、第三難が「命を棄てゝ必ず死するの難」となつてゐるものもある。

【三四】第十一章。道は概念的に規定さるべきものでなく、日々夜々の實踐によつて始めて身證さるゝものなることを說く。

【三五】宿命(Pūrvanivāsa)。宿世の境遇。

【三六】第十二章。善・最大(最も大なることがら)・多力(强きこと)・最明(最も賢明なること)の四に就いてそれ〳〵いかなることをいふべきかを示す。

【三七】一切智(sarvajña)。一切法を了知する智慧卽ち佛智のこと。

【三八】第十三章。煩惱を去つて本來具有の佛性を開覺すべきことを水の譬喩を以て說き、最後に佛國土といふも結局そうした煩惱の除かれ道德の存する所をいふに過ぎないことを述べる。

【三九】五彩。靑・黃・赤・白・黑の五種の色彩。

【四〇】第十四章。迷・悟の二

三尊を信じ、佛世に値ふこと難し。
[八七]【第三十七章】佛諸の沙門に問ひたまはく、『人の命は幾くの間に在りや。』と。對へて曰く、『數日の間に在り。』と。佛言はく、『子未だ能く道を爲さず。』と。復た一沙門に問ひたまふ、『人の命は幾くの間に在りや。』と。對へて曰く、『飯食の間に在り。』と。佛言はく、『子未だ能く道を爲さず。』と。復た一沙門に問ひたまふ、『人の命は幾くの間に在りや。』と。對へて曰く、『呼吸の間にあり。』と。佛言はく、『善い哉、子は道を爲せる者と謂つ可し。』と。
[八八]【第三十八章】佛言はく、弟子吾を去り離るゝこと數千里なりとも、意に我が戒を念ずれば必ず道を得む。吾が左側に在りとも意邪に在らば終に道を得ざらむ。其の實は行ずるに在り。近けれども而も行ぜずんば何ぞ萬分にも益せむや。
[八九]【第三十九章】佛言はく、人道を爲すは、猶し蜜を食ふに中も邊も皆甜むるが如し。吾が經も亦爾り。其の義皆快し。行ずれば道を得む。
[九〇]【第四十章】佛言はく、人道を爲し能く愛欲の根を拔くは、譬へば懸珠を摘むが如くすべし、一一之を摘めば會盡くる時有り。惡盡くるとき道を得るなり。
[九一]【第四十一章】佛言はく、諸の沙門道を行ずるは、當に牛の負ひて深き泥の中を行くに、疲極れども敢て左右に顧ず、泥を離れむと欲するに趣きて以て自ら蘇息するが如くなるべし。沙門は情欲を視ること彼の泥よりも甚しかれ。心を直くし、道を念ずれば、衆苦を免る可し。
[九二]【第四十二章】佛言はく、吾諸侯の位を視ること[九三]過客の如く、金玉の寶を見ること礫石の如く、[九四]氎・素の好しきを視ること[九五]弊帛の如し、と。

境を對比するに一室に於ける明・暗に譬へて說く。
【四一】第十五章。佛は身・口・意の三業に於て須臾も道を離れないことを說く。
【四二】諦道(Satya ?)。道・道理。
【四三】第十六章。一切法の無常を觀ずべきことを說く。
【四四】非常(Anitya)、無常に同じ。
【四五】第十七章。常時に道を念ずれば信を獲ることを說く。守遂系の本經にはこの一章を缺いてゐる。
【四六】信根(Çraddhendriya)。敎學上では所謂五根の第一であつて、勤(Virya)・念(Smriti)・定(Samādhi)・慧(Prajñā)の四と共に善法を生ずる本となればこれを根(Indriya)といふ。
【四七】第十八章。身命の無我なることを說く。
【四八】四大。Catvāri mahābhūtāni, 地(Prithivi)・水(Ab)火(Tejo)・風(Vāyu)の四をいふ。これらは、本來、序での如く、堅性・濕性・煖性・動性を意味し、これらの諸性質はそれ自身は時間的ならざる普遍者であるが故に大(Mahābhūta, 普遍的なるもの)と呼ばれる。後世では地・水等を物質的要素を表すものとみ

て、堅・濕等の性質そのものを表すものとはみてゐないやうである。この個所は何れによつて解釋してもいゝやうであるが、何れにもせよ、その範圍を我々の肉身に限定してゐるのである。

【四九】吾我（Ātman）。常一主宰の意で、自主獨立に存在するやうな、實體を意味する。こゝでは勿論我々の肉身に顯して言つてゐるのである。

【五〇】第十九章。虛名を貪ることは即ち身を亡すことに外ならないことを、香木の自ら燒いて芳香を放つに譬へて說く。

【五一】第二十章。財欲・色欲の恐るべきことを說く。

【五二】第二十一章。妻子・家財に對する執着の恐るべきことを說く。

【五三】桎梏。足かせと手かせと。

【五四】原赦。罪をゆるすこと。銀鐺。くさり。

【五五】第二十二章。色欲の最も恐るべきことを說く。

【五六】色欲の如き大きな欲が世に一つしかないのは幸ひであつて、もし同じ樣な欲が二つもあれば天下に誰一人として道を習修する者はなからうとの意。

【五七】第二十三章。愛欲の身を亡すことを炬火の譬喩を以て說く。

【五八】貪婬（貪欲、Lobha, rāga）・恚怒（瞋恚、Dveṣa, pratigha）・愚癡（Moha, mūḍhi）の三を三毒といふ。

【五九】第二十四章。佛陀が美女の誘惑に打勝たれたことを叙する。多くの經典に說かれてゐる佛陀の降魔の一段の大要を摘出したものであらう。

【六〇】六通（Ṣaḍabhijñā）。六種の超人間的神秘力。（一）神境智證通（Ṛiddhi-vidhi-jñāna-abhijñā）、境涯を自在に變現し空中等をも自由に遊步し得る力。（二）天耳智證通（Divya-çrotra-j.）清淨にして人間的ならざる天的の耳によつて天上及び人界の遠近の聲を聞く力。（三）他心智證通（Para-citta-j.）、他人の心を如實に知る力。（四）宿命智證通（Pūrva-nivāsānusmṛiti-j.）、宿世の境遇を追念する力。（五）死生智證通（Cyutyupapatti-j.）、また天眼智證通（Divya-cakṣu-j.）ともいひ、清淨にして人間的ならざる天的の眼によつて衆生の死生及び宿業の善惡幸不幸を知る力。（六）漏盡智證通（Āçrava-kṣaya-j.）四諦の一々を如實に知り諸の煩惱盡きて滅びることを知る力。

【六一】第二十五章。道を學ぶ者の遂に諸惡の爲に惑はされざることを流木の譬喩を以て說く。

【六二】洄流。水のうづまき。

【六三】保する。保證する。

【六四】第二十六章。阿羅漢道を得るまでは人の心の信ずべからざることを說く。

【六五】第二十七章。沙門の婦人に對する態度を說く。

【六六】第二十八章。情欲を遠離すべきことの要を說く。

【六七】『大正大藏經』の本文では「大」の字が「火」の字になつてゐる。いまは異本によつてかく改めておく。

【六八】第二十九章。欲心は肉體の上にその根源があるのではなくて、心の上にその根源があることを、一の事例を擧げて說く。

【六九】陰。男女の根をいふ。こゝでは男根のこと。

【七〇】功曹。支那の官名であつて、平時にはいまの警視總監の如き職掌で、戰時にはいまの參謀總長の如き役をするといふ。要するにこゝでは指揮官といふほどの意味に於て用ゐられてゐるやうである。

【七一】第三十章。欲の本は意・思想にあることを一の事例を引いて說く。

【七二】意。意識、善惡・愛憎等の如くものごとを分別することをいふ。

【七三】思・想。「思」は心をして造作せしむる作用、即ち心を驅つて種々の業を作さしむる作用である。「想」は對象に向つて差別の相を取ることをいふ。

【七四】記す。記憶する。

【七五】迦葉佛（Kāçyapa-buddha）。釋迦佛より以前にこの世に出でられたといふ所謂過去七佛の第六番目の佛である。釋迦佛自身が七佛中の第七佛に當るから、迦葉佛は即ち釋迦佛直前の佛である。

なほ、異本にはこの三十章に當る文が缺けてゐて、この迦葉佛の偈は、第二十九章に於て、陰を斷ぜむとした人に對して釋迦佛が迦葉佛の偈として說き示されたことになつてゐる。そしてそこに出る偈は次の如くなつてゐる。

欲生ニ於汝意一　意以ニ思想一生
二心各寂靜　非レ色非非レ行

【七六】第三十一章。憂・畏ハ根源愛欲に外ならぬことを說く。

【七七】第三十二章。精進努力の要を說く。

【七八】第三十三章。一の事例を擧げて中道の要を說く。

【七九】甚だしく悲哀の調子で以て經を誦してゐたといふ意味か。

ここの個所は明藏本では次の如くなつてゐる。

夜誦レ經、其聲悲緊欲二悔思返一

【八〇】何。大正藏經本には「阿」となつてゐる。「何」の誤か。

【八一】調適。調和適順、卽ち中道を得たるをいふ。

【八二】第三十四章。修道の要は偏へに心垢を去るに在つて、徒らに身を苦しむるは却つて害あるを說く。

【八三】第三十五章。人世の苦相を脫く。守遂系の本經にはこの一章を缺いてゐる。

【八四】第三十六章、佛道を修する爲に障碍となる八事を說く。

【八五】六情。六根卽ち眼・耳・鼻・舌・身・意の六をいふ。

【八六】明藏にはこの前に「旣に有道の君に値ふも」といふ一句が加つてゐる。

【八七】第三十七章。事例を擧げて人生の無常なる相を說く。

【八八】第三十八章、實踐窮行の要を說く。

【八九】第三十九章。佛の經敎は何れも皆眞實なるが故に、よく信受して奉行すべきことを說く。

【九〇】第四十章。不撓不屈の印神を以て着實に修道精進すべきことを說く。

【九一】第四十一章。專念に精進して情欲に沒すべからざることを說く。

【九二】第四十二章、佛の名譽や財物に對して無欲なることを說く。

【九三】過客。旅人のこと。ここでは、諸侯の位も、旅人の轉々として所定めざるが如く、無常にして果敢ないものであるとの意かと思はれる。

【九四】氎・素。氎は地質細と厚くして紬に似た毛布であるといふ。素は白色の生絹をいふ。

【九五】弊帛。破れ絹。この一句後に明藏には次の文章が加つてゐる。

視二大千世界一如二一訶子一、視二四耨水一如二塗足油一、視二方便一如二筏寶聚一、視二無上乘一如二夢金帛一、視レ求二佛道一如二眼前花一、視レ求二禪定一如二須彌柱一、視レ求二涅槃一如二晝夜寤一、視二倒正者一如二六龍舞一、視二平等者一二一眞地一、視二興化者一如二四時木一。諸大比丘、聞二佛所說一、歡喜奉行。

守遂系の本經では全く異つた次の文がこの一章に當る部分に存してゐる。

佛言、沙門行レ道無レ如二磨牛一、身雖レ行レ道、心道不レ行、心道若行何用レ行レ道、

四十二章經　終

佛藏經解題

一、經錄抄

一、出三藏記集第二に「佛藏經三卷一名選擇諸法或爲二卷」を羅什譯三十五部二百九十四卷中に數へてゐる。

二、隋法經等撰衆經目錄・大乘毘尼藏錄・衆律一譯部に「佛藏經四卷、後秦弘始年沙門羅什於長安譯」を合十二部三十二卷中に數へてゐる。

三、隋靜泰撰衆經目錄第一・大乘律單本一十九部三十五卷中に「佛藏經四卷七十八紙、後秦弘始年羅什於長安譯」とある。

四、同錄第一の別處に大乘律單本一十四部三十卷をあげたる中に「佛藏經四卷後秦弘始年羅什於長安譯」

五、大唐内典錄第三・後秦傳譯佛經錄第七・羅什譯九十八部合四百二十五卷中に「佛藏經三卷、亦名選擇諸法經、或四卷、見二秦錄、弘始七年六月十二日出」とある。

六、同錄第六・大乘律單重翻本幷譯有無錄合三十四部一百一十一卷二千二十二紙中に「佛藏經四卷六十九紙、後秦弘始年羅什於常安譯」とある。

七、同錄第九・歷代衆經舉要轉讀錄第四・大乘律合二十部三十一卷四百三十紙中に「佛藏經四卷六十九紙、後秦羅什於常安譯」と。

八、大周刊定衆經目錄卷第六・大乘律五十四部の劈頭に「佛藏經一部四卷、或三卷、亦名選擇諸法經、右秦弘始七年羅什譯、出達磨欝多羅錄及長房錄」

九、同錄第十三見定流行入藏錄卷上・大乘毘尼藏二十三部四十九卷中に「佛藏經一部四卷、或三卷、亦名選擇法經」と。

十、古今譯經圖紀卷第三・羅什譯九十八部經合四百二十一卷中に「佛藏經四卷」と。

十一、開元釋教錄第十二・有譯有本錄中菩薩三藏錄之二・大乘經重單合譯下・菩薩調伏藏二十六部五十四卷の中に「佛藏經四卷、一名選擇諸法經、或二卷、或三卷、姚秦三藏鳩摩羅什譯單本」

十二、同錄第十九・入藏錄上・大乘律二十六部五十四卷五帙の條中に「佛藏經四卷、一名選擇諸法經、或三卷、或二卷七十紙」

十三、貞元新定釋教目錄第六・總集群經錄上之六・羅什譯七十四部三百八十四卷の中に「佛藏經四卷、一名選擇法經或三卷、或二卷、弘始七年六月一三日出見二秦錄及僧祐錄」

十四、同錄第二十二・有譯有本錄中菩

薩三藏錄之三・菩薩調伏藏二十七部五十五卷五帙の中に「佛藏經四卷……」十五、至元法寶勘同總錄第八・菩薩調伏藏二十八部五十六卷五帙の中に「佛藏經……與蕃本同」とあれば梵本が對比されたものと見ゆる。

二、內容とその主張

この經が羅什譯として大乘律の中に重きをなしてゐたことは、大藏聖教法寶標目に「佛藏經四卷、右佛說は初の諸法實相品に諸法の無生無滅無相無爲を說き、次の念佛品に無分別を念ずるは卽ちこれ佛を念ずるなり、諸法實相を見るを名づけて佛を見るとなすと說き、次に念法品次に念僧品あり。第二卷淨戒品に破戒の比丘には十憂惱箭有りと說いて種々破戒の罪相を訶叱し、第三卷淨法品に深く不淨說法は大罪報を得と戒め、往古品、淨見品には佛が昔因に累劫修學すれども有所得を以ての故に諸佛の授記を蒙らずと說けり。此經の戒勅切に至れり。凡そ學佛の者は宜しく熟觀して誦すべし」とあるによつて知られる。之によつて經の內容も盡されてゐるわけで、此終りに更に了戒品第九と囑累品第十がついてゐる。

この經は別に菩薩の律儀について何も說いてゐない。戒本の一般とは全く趣を異にしてゐるが、この經を一貫する主張として、諸法實相無生無滅の理解のないものはよし二百五十戒は持つてゐても之を破戒と斥ひて、戲論分別を離れたるを以て持戒と名づけ、小乘の既成敎團の人人が「我はこれ持戒すれども、餘人は然らず」といふて他人を輕んじて心に恭敬なく、我はこれ多聞にして、彼は多聞に非ず」といふ我慢心に捕はれてゐるのを徹底的に彈訶し、また時に世人が愚にして之等小乘僧の「猿の群れに等しき」を見て忉利天なりと謂へる」を嘲笑してゐる。

大乘僧が勃興せんとするに際し、小乘の舊僧團が可なり之を壓迫した事情が想見せられる。特に破戒比丘と增上慢人と不淨說法と及び特に貪著する者の三種の人を以て諸法實相から遠離したるものとなし、不淨說法者は尼乾子の論を受け世利に貪著するものと喝破して、舊僧團の人人を却て外道に與するものとし、自らを持戒者なりと任ずるこの大勇猛心ありて大乘僧團の基礎をつくる事ができたのである。また「多く供養をうくるが故に法は當に疾く滅すべし」といへるも舊僧團が世人から非常なる有利な供養をうけてゐた事を察知する事ができる。之に對して十憂惱箭ありと說いて「もし人ありて百歲のあいだ如是の十不善の罪を成就するも、破戒比丘が一日一夜他の供養を受けたる罪は彼よりも多し」といつてゐる。無論この破戒比丘とは舊僧團の人々をさしたのである。また「年少の比丘に多く

利根あり」といひ、また「如是の人々一處に集り共に徒侶をなすも人衆すでに少なく勢力また弱し」といへるは青年僧が微力を以て敢て大乘の新僧團を起さんとする狀勢を想見せしむるに足る。之に對し「自稱羅漢」が「他人の實相を行ふを遮ぎり」たゞ世俗に墮して第一實義から遠ざかつたこと、又この大乘經を疑經と惡口した事がかいてある。上來、大乘戒本の一々の說相はかいてないが、菩薩の僧團が聲聞僧團から別に獨立せねばならぬ所以を忌憚なく論じ盡してゐる所にこの經が大乘律としての意義と價値を認める事ができる。

三、國譯につき

この國譯は石井亮薫、飛鳥井舜達兩氏を煩はしたり。

昭和八年三月三十一日

譯者 二宮守人 識

佛藏經 奉入龍華經一に選擇諸法と名づく

姚秦龜茲の三藏[一]鳩摩羅什 譯す

巻の上

諸法實相品 第一

此の如く我聞けり、一時佛、[二]王舍城耆闍崛山の中に住して、大比丘の僧と俱なりき。皆是れ衆の知識する所なり。及た無邊の大[三]菩薩摩訶薩衆、無量無數なりき。爾時に舍利弗、三昧より起ち行いて佛の所に詣り、偏に右の肩を袒ぎ、頭面に禮を作して佛に白して言さく、

希有なり[四]世尊よ、如來の說き玉ふ所の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむ。佛、舍利弗に告げたまはく、汝何なる利を見てか歎じて「希有なり、如來の說く所の一切の諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむ」と云ふや。

[五]舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、我靜處に在りて每に是の念を作せり。世尊は乃ち名相なき法に於てよく名相を以て說き、無語言の法に語言を以て說きたまへり。是の事を思惟して希有の心を生ぜり、と。

佛、舍利弗に告げたまはく、如是如是 是の事希有にして第一希有なり。是を諸佛の[六]阿耨多羅三藐三菩提と謂ふ、舍利弗よ、譬へば巧なる畫師の虛空に畫きて種々の色相を現ずるが如し。意に於て云何、この畫師を希有なりとせんや、いなや。

希有なり世尊よ、

【一】 鳩摩羅什。支那後秦代の譯經家にして龜茲國の人後秦弘始十五年四月十三日長安にて卒す時に七十、東晋義熙九年なり。Kumarajiva 又は究摩羅什、鳩羅什婆、鳩摩羅耆婆等に作り略して羅什と云ふ印度に在りて家は世々國相たり。

【二】 王舍城（Rājagriha巴Rajagaha）。中央印度摩揭陀國上代の首府漢字音で羅閱祇、祇伽羅等佛の屢々止住し敎化せし所現今パトナ市の南方。

【三】 菩薩摩訶薩。菩薩は佛果を志求する者を言ふ菩提薩埵の略、菩提は佛道の名也薩埵は秦に大心衆生と言ふ大心ありて佛道に入るより菩提薩埵と言ふ。摩訶薩Mahāsattva摩訶薩埵の略、摩訶は大。薩埵は有情也即ち大有情と譯す可し。

【四】 世尊。佛の德號にして衆德圓備し、よく世間を利し世に尊重せらるより此の名あり婆伽婆(具福者)の義譯にして佛十號の隨一とし一に佛十號の總稱名なりとも言ふ。又世尊とは、路迦那他(Lokanatha)。並に路迦𭀔瑟吒(Lokajyeatha) の譯語として用ひられる。

【五】 舍利弗(Śāriputra)。佛十大弟子の一人隨一にして智慧第一と稱せらる又具さに舍

舍利弗よ、如來所得の阿耨多羅三藐三菩提は、一切法は[七]無生無滅[八]無相[九]無爲なりと說きて人をして信解せしむること倍に希有なりとせん、所以はいかんとなれば、名相なき法は無念無得にして亦修するところ有ることなし。不可思議にして心の所依に非ず、戲論あることなし。是れ戲論の依止すべき處にあらざればなり。覺もなし觀もなくして攝する所有るなし。心に在らず、得所得にあらず。此もなく彼もなく分別あることなし。無動無性にして本來自ら空なり。念ふべからず出すべからずして、一切世間の信ずること能はざる所なり。是の如き名相なき法を名相を以て說くことかくの如し。舍利弗よ、一切諸法は無生無滅無相無爲にして、人をして信解せしむることは倍に希有なりと爲す。

舍利弗よ、譬へば人ありて[一〇]須彌を嚼咽して能く消盡せしめ、虛空を飛行して以て患と爲さざるが如し、意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや。

希有なり世尊よ、

舍利弗よ、諸佛所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむることは倍に希有なりと爲す。

舍利弗よ、譬へば火城の縱廣深淺、各〻一[一一]由旬なり。四門より焰を出す。人乾草を負ふてその中を過ぐるに、猛風焰を吹きて其の身を燒爆せんとす。是の人能く火をして草を燒かず、及た身を燒かざらしめ、中より出づることを得て本の如くにして異なきが如し。意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや。

希有なり世尊よ、

舍利弗よ、如來所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむることは倍に希有なりと爲す。

利弗多羅奢利補怛羅と譯し別に舍利子、秋露子、身子等の譯名あり。舍利とは小鳥の一種にして母の名稱なるも譯語にては身骨の義と同一なるより身子とせるなり。

【六】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyak-sambodhi)。佛の無上の覺知を言ふ。略して阿耨三菩提阿耨菩提と云ふ、譯して無上正遍智、無上正等覺、無上正眞道等と云ふ。

【七】無生滅(術語)。涅槃の眞理は、生滅なければ無生無滅と言ふ。依て無生の理を觀じて煩惱を破する也。

【八】無相。眞理の衆相を絕するを言ふ。又涅槃の男女等の相をはなるゝをいふ。

【九】無爲(Asaṃskṛta)。爲は造作の義、因緣の造作なきを無爲と云ふ。又生住異滅の四相の造作なきを無爲と云ふ。法性、實相、法界、涅槃等との異名なり。

【一〇】須彌(Sumeru-parvata)。世界の中央金輪上に屹立せる高山。或は須彌樓、修迷樓、蘇迷盧に作り、略して單に迷盧meruとも云ふ。譯して又妙高、妙光とせり。

【一一】由旬(yojana)印度の里法に於ける單位、踰闍那踰繕那、由延とも云ふ。聖王一日の行程にして支那の四丁里に

舍利弗よ、譬へば人ありて石を以て桄と爲し、海の此の岸より度りて彼の岸に至らんとするが如し。意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや、

希有なり世尊よ。

舍利弗よ、如來の所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむることは倍に希有なりと爲す。

舍利弗よ、譬へば人ありて〔二〕四天下と及び諸の須彌山河草木を負ふて、蚊脚を以て梯となし登りて梵天に至らんとするが如し。意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや、

希有なり世尊よ、

舍利弗よ、如來の所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむることは倍に希有なりと爲す。

舍利弗よ、譬へば藕絲を須彌山に懸けて虛空に在らしむるが如し。意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや。

希有なり世尊よ、

舍利弗よ、如來の所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむること倍に希有なりと爲す。

舍利弗よ、譬へば劫盡の大火の燒かん時、人一唾を以て能く此の火を滅し、又一吹を以て世界及び諸の天宮を還成するが如し。意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや。

希有なり世尊よ。

舍利弗よ、如來の所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむること倍に希有なりと爲す。

當り、現時の八九英里なり。

〔二〕四天下。須彌山の周圍に存在する四大州を云ふ。即ち七金山、大鐵圍山、との間なる大鹹海中に在る四箇の大州を云ふ即ち東方の弗婆提(Purvavideha)南方の閻浮提(Jambudvipa)西方の瞿耶尼(Amragodāniya)北方の欝單越(Uttarakuru)之を四天下と稱す。我が此の娑婆世界は實に南方閻浮提中にあり。

舍利弗よ、恒河の廣大なること無量とせんや、いなや、是の如し世尊よ、舍利弗よ四天下の中普く大雨を雨らし、滴恒河の如くならんに、人ありて手を以て此の雨滴をうけて遺落する所なからんに意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや、

希有なり世尊よ、

舍利弗よ、如來の所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむること倍に希有なりと爲す。

舍利弗よ、須彌山を廣大なりとせんや、いなや、高大なり世尊よ、

舍利弗よ、四天下の中普く大石を雨らすに皆須彌の如くならんに、人ありて手を以て此の石を承接し、遺落すること芥子の如きも有ること無しとせば、意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや、

希有なり世尊よ、

舍利弗よ、如來の所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむること倍に希有なりと爲す。

舍利弗よ、譬へば人ありて一切衆生を以て左手の中に置き、右手に[一三]三千世界山河草木を接擧して皆能く此の一切衆生をして同じく心を喜樂せしめ其の意を異らざらしむるが如し。意に於て云何ぞや、希有なりとせんや、いなや、

希有なり世尊よ、

舍利弗よ、如來の所說の一切諸法は無生無滅無相無爲にして人をして信解せしむること倍に希有なりと爲す。

舍利弗よ、[一四]如來の所說の諸法は無性空にして所有なく、一切世間の信解し難き所なり。何を以

【一三】三千世界。Trisāhasramahāsāhasram-lokadhātvah 大千世界の事。一世界たる日、月、須彌山、四天下、四天王夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天、色界、初禪の梵世天を千箇合したるを一小千世界。色界第二禪天之を覆ふ。此の小千世界を千箇合したるを一中千世界。色界第三禪天之を覆ふ。此の中千世界千箇合したを大千世界と云ふ。色界第四禪天之を覆ふ。中に百億の一世界と百萬の二禪、一千の三禪天あり之を三千大千世界。

【一四】如來　佛十號の一。梵語には多陀阿伽度、多陀阿伽陀怛多蘗多に作る、釋迦牟尼佛又釋迦牟尼如來と稱す、成實論卷一に如來とは、如實道に乘じ取りて正覺を成ず故に如來と云ふ。

ての故に、舍利弗よ、是の法は想なくして諸想を離れ、念なくして諸念を離れ、取もなく捨も無く、戲論もなく、惱熱もなし。此岸に非ず、彼岸にも非ず。陸地にも非ず、癡に非ず明にも非ず。無量の智を以て乃ち解することを得べし。思量を以て能く知り得る所に非ず。行もなく相も無く惱熱あることなし。念なく諸念を過えたり。心もなく諸心を過えたり。向も無く背も無く、縛も無く解もなし。妄もなく妄法もなし。癡もなく癡法も無し。癡網あるなく名なく、言なく。說なく不說なく、盡なく不盡なし。行なく行相なく、道なく[一五]道界もなし。離なく諸離を過えたり。思惟なし雜糅なし。取ならず捨ならず。得も不可得もなし。諸の滯着を除き、貪恚癡を除く。實に非ず虛妄に非ず。常に非ず無常に非ず。明に非ず不明に非ず。闇に非ず照に非ずして心に在らず性あるなく作本より空なり。能く魔を降伏し、煩惱を降伏し、五陰を降伏し、十二入を降伏し、十八界を降伏し、五陰ありと說く者を降伏し、十二入有りと說く者を降伏し、十八界ありと說く者を降伏し、衆生有りと說く者、人有りと說く者、壽有りと說く者、命有りと說く者、有有りと說く者、無有りと說く者を降伏し、一切の諸の邪行あるものを降伏す。

舍利弗よ、我が此の聖法は、皆能く一切の貪著乃至法有りと說く者、諸法如實の相を樂まざる者、佛法に逆ふ者を降伏す。

所以は何となれば、舍利弗よ、若し衆生の我を說く者、人を說く者、衆生を說く者、斷滅を說く者、常を說く者、有を說く者、無を說く者、諸法を說く者、假名を說く者、邊を說く者あらば、皆佛に違逆し、佛と共に諍ふものなり。舍利弗よ、乃至法に於て少し許りも得するものは皆佛と共に諍ふなり。佛と諍ふ者は皆邪道に入る。我が弟子に非ず。若し我が弟子に非ざれば、即ち[一六]涅槃と共に諍ふなり。佛と共に諍ふなり。法と共に諍ふなり。僧と共に諍ふなり。

舍利弗よ、是の如きの見の人は、我則ち出家受戒することを聽さず。舍利弗よ、是の如きの見の

【一五】道果。菩提涅槃の事。大小乘に通用す。法華經藥草喩品に「漸々修業して皆道果を得ると。四十二章經に憍陳如等五人のために四諦の法輪を轉じて道果を證せしむと。

【一六】涅槃。nirvāṇa (巴) nibbāna) 具に涅槃那、直譯に滅。元來の意義は物の消滅する事にして大毘婆沙論卷十三に「若し一燈涅槃することあれば即ち之を記して一燈已に滅すと云ふ」と。倶舍論、卷六に「經に喩を說いて言く、燈焰の涅槃するが如く心解脫も亦爾りと、此經の意の說く燈の涅槃する如しとは唯燈焰に謝するのみにして別に物あることなきなり「是の如く世尊心に解脫を得るも、唯諸蘊滅して更に所有なし」とある如きは燈明消えて滅無せるを涅槃と云ひしなり。

人には我則ち、一の飲水をも受けて以て自ら供養することを聴さざるなり。

舍利弗よ、若し人、是の如きの不善の貪著事を除捨して我が法の中に於て出家求道せば、涅槃を念はざれ、涅槃を以て念と爲さざれ。涅槃を貪らず。畢竟空の法に於て驚かず、畏れず、是人すら尙ほ諸法を斷ぜんが爲めに、故に勤行精進す。何況んや是の如きの不善の貪著をや。謂く我に著し、衆生に著し、人に著し、法に著するをや、是の人諸の貪著を斷ぜんが爲の故に但だ勤めて[一七]無相三昧を修習して、無相三昧に於ても亦相を取らず。是の人一切諸法の相に通達せば皆是れ一相にして所謂無相なり。

舍利弗よ、是則ち聖法の中に於て柔順の法忍を爲すと名く、是の柔順の[一八]法忍を得れば乃ち是れ我が弟子なりと名く。能く供養を消し身を受くること空しからざるなり。所以は何となれば、舍利弗よ、我が是の眞實相の法は入るべからず、取るべからず、捨つべからず、貪るべからず、說くべからず、語言の道を斷せり。歡無く喜なく、喜びを貪る心をも斷ぜり。衆緣と衆因緣の合離せるに非ず。道なく道を斷じて無道に至るなり。諸の語言論議音聲を斷ず。形も無く、色もなく、取も無く、著も無く、用も無し。實も無く、妄もなく、闇も無く、明も無し。壞もなく、諍もなく、合もなく、散もなし。動もなく念もなく、分別あることなく示すこと得べからず。垢にあらず、淨にあらず、名にあらず、相にあらず、心數の法にあらず、心の解する所にもあらず。我が此の法の中には男もなく女もなく、天もなく龍もなく、夜叉もなく、[一九]乾闥婆もなく、[二〇]鳩槃茶もなく、[二一]毘舍闍もなし。斷なく常なく、我なく衆生もなく人もなし。來なく去なく、出もなく入もなし。戒なく犯なく、淨もなく垢もなし。三昧あることなく、定もなく定根もなし。禪もなく禪根もなし。知なく見なく、貪もなく諍もなし。道なく道果もなし。慧なく慧根もなし。明もなく非明もなし。解脫もなく非解脫もなし。果もなく得果もなし。無力非力もなく、所畏もなく、無所畏もなし。念もな

【一七】無相三昧。三三昧の一。涅槃無相を觀ずる行に相應して起る定心を言ふ。

【一八】法忍・忍辱(Ksāntih)の一つなり。忍辱とは六波羅蜜、十波羅蜜の一他の屈辱を忍耐すること。梵語羼提の譯。又安忍、忍と翻ずこれに生忍法忍あり、菩薩生忍を行ずれば、無量の福德を得、法忍を行ずれば、無量の智慧を得」と。

【一九】乾闥婆(Gandharva)。八部衆の第六、或は健達縛乾沓和、乾沓婆、彥達嚩等に作り、尋香、食合、香行、若くは香陰と譯す。帝釋天の樂神なり。註維摩經卷一に羅什の說に「天の樂神なり、地上の寶山中に處す。天に在りて樂を作さんと欲する時は此神の體上に相出づ然る後天に上る」なりと。

【二〇】毘舍闍(Piśāca)。羅刹に類せる鬼神の一種。又畢舍遮に作り、譯して癲狂鬼又は食血肉鬼と云ふ。或は噉精鬼と云ふことあり。龍神と共に廣目天に隨ひ西方を守護す。或は東方天王(持國)の所領の鬼とせり。胎藏界外金剛部院(南方)に餓鬼形として八位を圖す。

【二一】鳩槃茶(Kumbhāṇḍa)增長天二部鬼類の一、或は吉

く念根もなし。坐なく行なくして威儀あるなし。此もなく彼もなく憶想分別なし。〔二二〕菩提もなく、〔二三〕菩提分もなく、智もなく、非智もなし。地なく水なく、火なく風なし。罪なく福なく、法なく非法なく、苦なく樂なし。諸の一切戲論の根本を拔く。一切永に離れて冷うして烟なし。舍利弗よ、要を擧げて之を言はゞ、我が法は悉く一切の諸念、一切の諸見、一切の〔二四〕諸結、諸の增上慢を破す。一切の諸の憶念する所を念はず、一切の種々の語言を除斷す。我が是の法の中には常もなく無常もなく、苦もなく樂もなく、垢もなく淨もなく、斷もなく常もなく、我もなく衆生もなし。人なく壽者なく、命者なく、生なく滅なし。何を以ての故に、舍利弗よ、如來は法に於て都て所得なくして所滅あり。故に名づけて涅槃と爲す。亦涅槃を得るものあるを見ず。舍利弗よ、佛も亦涅槃を念はず、涅槃を以て念と爲さず、亦涅槃に貪著せず、是の故に當さに知るべし、是を第一奇特希有と爲す。所謂、如來一切法は無生無滅無相無爲と說き、人をして信解せしむること倍希有なりと爲すなり。

念佛品　第二

爾時に舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、此の法の中に於て云何なるをか〔一〕惡知識とせんや、云何なるをか〔二〕善知識とせんや。

佛、舍利弗に告げたまはく、若し比丘ありて餘の比丘に敎ふるに、比丘よ汝當さに佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、施を念じ、天を念ずべし、比丘汝當さに身を觀ずべし、取は是れ身相にして所謂不淨なり。當さに一切諸の有爲の法は皆悉く無常なりと觀じ、一切の法は空にして我あることなしと觀ずべし。比丘よ、汝當さに所緣の相を取りて心緣の中に繫け、專ら空の相を念ずべし。當さに善根を樂ふべし。當さに取は不善法の相なるべし。取は不善法の相なるのみ。斷ぜし

槃茶、拘辨茶、弓槃茶、恭畔茶、鳩滿拏、鳩槃陀に作る、或は冬瓜の梵名なる鳩摩拏(Kumāṇḍa)より轉訛せるものと、冬瓜鬼の譯名あり又厭眉鬼若くは甕形と言ふ。又は鳩槃陀とは陰囊のことなりといふと、圓覺經に「大力鬼王」の名とす。

【二二】菩提(Bodhi)。舊に道と譯して新に覺と譯す道は通の義、覺とは覺悟の義所通所覺の境に事理の二法あり理とは涅槃なり煩惱障を斷じて涅槃を證する一切智は三乘に通ずる菩提なり。事とは一切有爲の諸法、所知障を斷じて諸法を知る一切種智は唯佛の菩提。

【二三】菩提分(Poḍhyaṅga)。總じては四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺、八正の三十七道品に名け、別しては三十七道品中の七覺支に名く。分とは支分の義、七種又は三十七科の道行支分するが故に分と名く。又分とは因の義、七種又三十七科の道行、共に菩提に順趣するが故に、菩提分と名く。

【二四】諸結。結とは(bandhana)の譯煩惱の別名、結使とも云ふ煩惱とは有情を結縛して生死の苦を出でざらしむるが故に云ふ。斷結成道と云ふ

めんが爲の故には觀念修習せよ、謂く[三]貪欲を斷ぜんが爲には不淨の相を觀ぜよ、[四]瞋恚を斷ぜんが爲には慈心の相を觀ぜよ、[五]愚癡を斷ぜんが爲には因緣の法を觀ぜよ、常に淨戒を念じて深く空の相を取り、勤行精進するを四禪を得たりと爲す。專心に道を求め不善の法は皆是れ衰惱なりと觀ぜよ、善法を觀ずるは最も是れ安隱なり。一心に修道し分別し諦觀せよ。善不善の法は取の相のみと諦らむ。唯涅槃を觀ずれば安隱寂滅なり。唯涅槃を愛すれば畢竟清淨なり、と。

是の如く敎ふれば名けて邪敎とせん。謂く是れ正敎にして而も是れ邪敎なり。舍利弗よ、是の如く敎ふる者は名けて惡知識とせん。是の人を名けて我を誹謗し外道を助くる者とせん。亦他人の爲に邪道を說く者とせん。舍利弗よ、是の如きの惡人は、我乃ち一の飮水をも受けて以て自ら供養することを聽さず、我が敎を說く者は受くることを許さざればなり。

舍利弗よ、我が法の中に於て多く是の如き[六]增上慢の敎あり。舍利弗よ、若し敎を受く者にして戒を受けて五歲、悉く是の如きの敎へられし所を捨つること能はず、是の敎の中に於て心を勤めて精進し、自ら無所得を得ることあらんも、比丘往いて恣問せずんば、我此人に說かん、五歲有りと雖も猶邪見と名けん、外道の法を雜へ魔敎を順行する者なりと。

舍利弗よ、若し比丘ありて是敎を受け已りて、空無所得の法を聞いて卽ち自ら我先きに受くる者は皆是れ邪見なりと覺知し、空無所得の法に於て疑なく悔なく、深入通達して一切我見人見に依らずとせば、舍利弗よ、我此人に說いて名づけて清淨の梵行を得たりとせん。

舍利弗よ、若し比丘ありて是の如きの無所得の忍を成就せば、現に未だ[七]無餘涅槃を得ずと雖も、我是人に記せん、彌勒佛の時當さに初會に在り、時に彌勒佛歡喜して三たび、是人能く釋迦牟尼佛の法の中に於て無所得忍を成就せりと唱ふべし、と。

舍利弗よ、若し人ありて是の如きの敎を受け已りて、[八]空無所得の法を聞き卽ち時に驚畏せば是の

が如きは是なり。結の字義に繫縛、合苦、雜毒の義有り。

【一】惡知識、惡知識は人に知られたる惡人惡き師友。

【二】善知識。善知識は知識とは其の心を知り其の形を識る義。知人卽ち朋友の義。博知識に非ず。善とは我に益を爲し我を善道を導くものを云ふ。これに三種あり。一、外護の善知識は我をして缺乏怖畏なからしめ安穩に道を修せしむること。二、同行の善知識は我と道を同じて互に相切瑳し策發する事を得るもの。三、敎授の善知識は聖言を宣傳して我を訓戒し惡を去り善に趣かしむる事。

【三】貪欲。

【四】瞋恚。

【五】愚癡。

貪(rāga)瞋(devesa)癡(moha)の三毒に同じ。卽ち貪とは一切順情の境を引取する貪欲、瞋毒とは一切違情の境に對して違忿する瞋恚。癡毒とは一切事理の法に迷ふて無明不了なる愚癡、

【六】增上慢。七慢の一。未得に於て得と云ひ心を高擧ならしむる事。慢とはMāna と云ひ己を恃み他に對して高擧する煩惱。

人愍むべし。救者あるなく依者あるなくして、直ちに地獄に趣かん。何を以ての故に、舍利弗よ、佛の教の中に於て驚き疑ひ畏るゝ者は、是人は則ち惡道を具足せる者と爲すなり。所以は何となれば我常に自ら説けり、[九]有所得は是れ惡道分なりと。何を以ての故に、舍利弗よ、佛所得の法には差別あることなし。是と非見と若し差別すべくんば、是れ有所得ならずや、舍利弗よ、人寧ろ五逆の重惡を成就せんよりは[一〇]我見・衆生見・[一一]人見・[一二]壽見・[一三]命見・陰入界見・貪ニ著持戒ニ著持戒見、貪ニ著三昧ニ著ニ三昧見、依ニ於佛想ニ得ニ於法想ニ、於僧斷事成就身見を成就せざれ。何を以ての故に、佛法の中に於て身見を成就せば僧數に在らざればなり。舍利弗よ、佛弟子衆は心に分別なし。舍利弗よ、佛弟子衆は不善なる者なく、破戒者なく、破見者なく、破威儀者なきなり。

舍利弗よ、何等をか惡不善とやせん、佛衆中に於て僧數に在らざるを惡不善と名づく。謂く、心心數の法諸緣と合し、眞實無き事に但だ分別を作す。分別を以ての故に有所得を計す。是人の乃至所有る言說も心心相續す。乃至善不善の法も聖法の中に於ては惡不善と名づく。何を以ての故に、舍利弗よ、所有樂處中に必ず苦有り。如來の法は是の苦樂を滅するなり。

舍利弗よ、如來の得る所は是の中に欲もなく亦非欲もなし。樂もなく苦もなく、思もなく想もなく修もなし。乃至亦空想もなし。何を以ての故に舍利弗よ、若し空想を計すれば、卽ち是れ我想、衆生想なり。是れ常想なるものなり。是れ斷想なるものなり。何を以ての故に、舍利弗よ、所有る想に隨へば、則ち諸想を生ず、是れ皆邪に墮せるなり、舍利弗よ、空は無念に名づけ、是れに名づけて空と爲すなり。空念も亦空ず。是れを名づけて空となす。舍利弗よ、空の中には善もなく惡もなく、乃至亦空想もなし。是の故に空想と名づく。舍利弗よ、諸の有爲の法は知るべく解すべし。空は知るべからず亦解すべからず、思量すべきに非ず。是の故に空と名づく。舍利弗よ、空は念得に非ず。何を以ての故に、空は無想の故に、是の故に空と名づく。舍利弗よ、何故に空行を空する

七慢とは慢、過慢、慢過慢、我慢、增上慢、卑慢、邪慢。
【七】無餘涅槃。無餘涅槃の略稱。Sopadhiśesa-nirvāṇa無餘涅槃に對す。旣に煩惱障を斷じたるも異熟の果體たる餘依卽ち現在の身心を有するを言ふ。壽命盡きて生死界より解脫せる謂ゆる灰身滅智の狀態は無餘依涅槃(Nirpadhiśesa-nirvāṇa)と稱す。
【八】無所得。無相の眞理を體し心中執着する所なく、分別する所なきを無所得。
【九】有所得。執着の心我心を以て諸法中に於て相を取るが故に有所得。
【一〇】我見、實我ありと執ずる妄見。
【一一】人見等。二三二頁參照。
【一二】壽見
【一三】命見　二三二頁參照。

ことを說くや。一切の諸想を念せず、乃至空想をも亦復念ぜず、是を空行と名づく。舍利弗よ、想の名は乃至心に所念あらば卽ち名づけて想と爲す、所念なきものを乃ち無想と名づく、諸想を離るゝが故に名づけて無想と爲す。所取の想に隨ふは皆是れ邪見なり。何を以ての故に、舍利弗よ、聖法の中に於て寂滅を得んことを計するは皆邪見に墮せるなり。何況んや言說をや、何況んや說く者をや。是の如きの空法何を以て說くべきや、舍利弗よ、諸佛は何が故に諸の語言を說いて名づけて邪と爲すや、一切の法に通達すること能はざるものは、是れ則ち皆言說の覆ふ所となる。是故に如來は、諸の語言は皆是れ邪たることを知る。乃至少しばかりも言語有れば其の實を得ず。舍利弗よ、諸佛の[一四]阿耨多羅三藐三菩提は皆是れ無想無念なり。何を以ての故に、如來は法に於て體性を得ず、亦念を得ず。舍利弗よ、如來は何が故に念處ありと說くや。舍利弗よ、經に說けり。若し人四念處を得ば、是の人能く諸法の體性を得。能く自身を得、我を得、人を得。是處(ことはり)あることなしと。法の別相は空なることを示さんが故に四念處を說くなり。四念處の性は[一五]無性無處。無念無說にして貪著あることなし。念性尙なし、何況んや念處をや、是の故に如來は說いて念處と名づくるなり。

　舍利弗よ、諸法に若し決定の體性、毛髮を折りて百分の一の如きものありとせば、是れ則ち諸佛は世に出でず。亦終に諸法の性空なりと說かず。舍利弗よ、諸法は實に空にして無性一相なり。所謂無相にして如來は悉く見る。如來は是れを以て念處ありと說く。舍利弗よ、念處を名づけて、無處・無非處・無念・無念業・無想・無分別・無意・無意業・無思・無思業・無法・無法相と爲す。皆合散なし。是故に賢聖を名づけて無分別者と爲す。是れを念處と名づくるは如來是れを以て有念處を說き、無所有に隨順するが故なり。名づけて念處と爲すは念佛に隨順するを名づけて念處と爲せばなり。

　舍利弗よ、云何が名づけて念佛とやせん。無所有を見るを名づけて念佛と爲すなり。舍利弗よ、諸佛は無量にして思議すべからず。稱量すべからず。是の義を以ての故に、無所有を見るを名づけ

【一四】阿耨多羅三藐三菩提。一八四頁參照。

【一五】無性。性は體なり一切諸法に實體なきを無性といふ。法華經「知二諸法ノ常ニ無性一」と。

て念佛と爲すなり。實に無分別と名づくるは諸佛の無分別なり。是の故を以て言へば無分別を念ずること卽ち是れ念佛なり。

復次に諸法の實相を見るを名づけて見佛と爲すなり。何等をか名づけて諸法の實相とや爲す。所謂諸法は畢竟空にして無所有なり。是の畢竟空無所有の法を以て念佛するなり。

復次に是の如きの法の中には、乃至小念すら尚不可得なり。是を念佛と名づく。

舍利弗よ、是の念佛の法は語言の道を斷じ、諸念に過出せり。不可得の念を是を念佛と名づくるなり。

舍利弗よ、一切の諸念皆寂滅の相なり。是の法に隨順すれば、これ則ち名づけて念佛を修習すと爲すなり。色を以て念佛すべからず。何を以ての故に、色を念ぜば取相貪味して識と爲せばなり。形も無く色も無く、緣もなく性もなし。是を念佛と名づく。是の故に當さに知るべし。分別あることなく、取もなく捨もなきが是れ眞の念佛なりと。

念法品　第三

爾時に舍利弗、佛に白して言さく。世尊よ、云何が人の爲にまた是の法を說くを惡知識とせんや。世尊よ、云何が人の爲にまた是の法を說くを善知識とせんや、と。

佛、舍利弗に告げたまはく、若し比丘ありて他の比丘に教へんに、比丘よ汝今當さに知るべし、佛事の空を念じ所緣處を念ずるは是れ應さに念とすべからず。汝が念ずる處の空念も亦復空ぜよ、是れ無性空にして能く色想を斷じ、能く取想を斷ずと。是の人爾時無想を得ず何況んや念をや、是の人爾時都て無所有にして寂滅無性なり。諸想集らずして一切の法を滅す。是れ則ち名づけて念佛を修習すと爲す。念佛とは名づけて善不善一切の覺觀を破するを爲す。覺もなく觀もなく、寂然無

想なるを名づけて念佛と爲す。何を以ての故に應さに覺觀を以て諸佛を憶念すべからず。覺も無く觀もなきを名づけて清淨の念佛と爲せばなり。此の念の中には乃ち微細の心、心念業もなし。況んや身口業をや。又念佛する者は諸想を離る。諸想心に在らざれば分利なく、名字なく、障礙なく、欲なく、得なくして覺觀起らず。何を以ての故に、舍利弗よ、念ずる所に隨つて起る一切の諸想は皆是れ邪見なり。舍利弗よ、無所有に隨へば覺もなく觀もなく生もなく滅もなし。是に通達する者を念佛を爲すと名づく。是の如きの念の中には貪もなく著もなく、逆もなく順もなく、名もなく想もなし。舍利弗よ、想もなく語もなきを乃ち念佛と名づく。是の中には乃ち微細の小念すらなし。何況んや麁なる[一]身口意業をや。身口意業のなき處には、取もなく捨もなし。諍もなく訟もなく念もなく分別もなし。[二]空寂無性にして諸の覺觀を滅す。是を念佛と名づくるなり。

舍利弗よ、若し人是の如きの念を成就する者にして四天下の地を轉ぜんと欲せば、意に隨つて能く轉ず。亦能く百千億の魔を降伏す。況んや無明に弊へられ虛誑より緣起せる無決定の相をや。是の法は是の如く想もなく戲論もなし。生もなく滅もなくして說くべからざるなり。分別すべからずして闇もなく明もなし。魔若しくは魔民の能く測らざる所なり。但だ世俗の言說を以て敎化する所あり、と。而も是の言を作さく、汝佛を念ずる時小想をも取ること莫れ、戲論を生ずる莫れ。分別ある莫れ、何を以ての故に、是の法は皆空にして體性あることなし。一相をも念ずるべからず。所謂無相なり。是を眞實の念佛と名づく。所謂無生無滅無相無爲なり。何を以ての故に、如來は名づけて色と爲さず、名づけて想と爲さず、名づけて念と爲さず、分別と名づけず、逆ならず順ならず、取ならず、捨にもあらず。定にあらず慧にもあらず。明にもあらず無明にもあらず。如來は說くべからず、思議すべからず無相なり。汝今取相を樂む莫れ。戲論を樂むなかれ。佛は諸法に於て執なく[三]量なし。法の執すべく著すべきあるを見ず。是の人、佛に於て尙得ず。何況んや念に於てをや、と。

【一】身、口、意、身業(Kāya)身所作の業。口業(vāca)口所說の業。意業(cetna)意所起の業。

【二】空寂。諸相なきを空、起滅なきを寂と云ふ。

【三】量とは宗、因、喩の三支を比量とし因明の作法には立量とも云ふ。二量とは(一)に現量、眼識を以て色を見耳識を以て聲を聞く如きを言ふ。(二)に比量煙を見て火あるを知る如く巳知の法を以て未知の法を比顯する。三量とは(一)に現量、(二)に比量、(三)に聖教量なり。四量とは三量に譬喩量を加ふるなり、人生の無常は小泡の無常の如しと、喩を以て顯はすを云ふ。五量とは上の四は義准量を加ふ。若し法の無我なるは准じて必ず無常なるを知る如し。六量とは五量に無體量を加ふ。此の室の中に入て主の不在を見て所在の處を知る如し。

舍利弗よ、是の如く敎ゆる者を名づけて善知識と爲す。第一義の中には決定して是れ善知識、是れ惡知識と云ふことあるなし。

復次に舍利弗よ。若し比丘ありて餘の比丘に敎へんに、比丘よ、汝當さに諸法を分別し觀察すべし。亦復法の相を念ずる莫れ、と。是の比丘是の如く修習して心に繫著なく、則ち能く諸法の一相なるに通達せば所謂無相なり。是の人尙ほ法想を生せず。況んや我人の想をや。

舍利弗よ、意に於て云何ぞや。法想を念ずる者是の人能く、一切法を滅するや、いなや。

いなり、世尊よ、

舍利弗よ、如し樹に根なくして能く枝葉ありて華果實や、いなや、

いなり、世尊よ、

是の如し。舍利弗よ。若し人諸法の根本を得ずして、是の人能く諸の法想を生ずるや、いなや、

いなり、世尊よ

舍利弗よ、若し人、法想を念ぜざるを得ずんば是の人能く一切法を滅するや、いなや。

いなり世尊よ。

是の人、法に於て法想を得ざることを得ず。滅に於ても亦[四]無生[五]無滅を分別せざることを得ず。是の人爾時、不生不滅なれども涅槃を得たる者と名づけず。亦復涅槃を得ることなしとも名づけず、と。

舍利弗よ、是の如く敎ゆるものを[六]善知識と名づく。第一義の中には善知識もなく、惡知識もなきなり。

舍利弗よ、若し人、是の如きの相を成就せば、世間に希有なるところ、顚倒せざることを得。眞實の見の故なり。是を正見と爲すなり。

【四】無生。
【五】無滅。一八四頁參照。
【六】善知識。一九〇頁參照。

復次に舍利弗よ、正見とは、名づけて正作・正行・正道・正解と爲す。顚倒あることなく如實に見る。是の故に如來は說いて正見と名づく。

舍利弗よ、若し衆生ありて顚倒あることなく實の如くに觀る者は則ち正見あるなり。若し我想・人想・衆生想を生ずる者は、當さに知るべし是の人は皆是れ邪行なり、と。

舍利弗よ、佛及び弟子は、我ありと說かず、人ありと說かず、衆生をも說かず、壽命を說かず、斷常を說かず。是の故に佛及び弟子は名づけて正見と爲す。何を以ての故に、正觀して顚倒せざるが故なり。

舍利弗よ、一切凡夫は、此の事の中に於て能く入るものなし。何を以ての故に、一切凡夫は都て正見なければなり。但だ正見に隨順して柔順忍を得るものあるも、如實なる能はず。舍利弗よ、是を正見邪見の區別と名づく。實の如く見る故に、名づけて正見と爲す。世樂の因を見て財利を增長するは是れ世間の正見なれども、是れ皆欺誑にして生死を免れず。舍利弗よ、佛は世間の正見を說いて是れ懈怠下劣の法なりと說くなり。賢聖は此の念を作さざれ、此れは是れ正見なり、これは是れ邪見なりと。所以は何となれば、一切の諸見は皆虛妄より緣起すればなり。

舍利弗よ、若し是の念を作して、是はこれ正見なりと云はゞ、是の人は即ち邪見なり。

舍利弗よ、聖法の中に於ては、一切諸見の根本を拔斷し、悉く一切の諸の語言の道を斷ず。虛妄の中には手に觸閡するものなきが如し。

諸の沙門の法も皆應さに是の如くなるべし。

念僧品　第四

舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、何等をか聖衆とせんや。

舍利弗よ、若し人ありて能く信解して一切諸法の無生・無滅・無起・無相なるに通達せんに、是の如きの忍を成就すとも尚ほ我を得ざれ。況んや[一]須陀洹・[二]斯陀含・[三]阿那含を得んや、況んや[四]阿羅漢を得んや、況んや復法を得んや、況んや男女を得んや、何況んや道を得んや、況んや是の如き等の事を得んや、是の聖衆と名づくる是れも亦得ざれ、

復次に舍利弗よ、衆生にして少しばかりも能く無生・無滅・無相の法を信解せん者、若しくは能く無生・無滅・無相の法を信解せん者とは、心に顚倒なく共に相ひ知解せん。法を以て和合して後有を受けず。諸の世間は但だ虚妄より緣起せることを知る。是の人は則ち更らに是の身に任せず。是の因緣を以て說いて聖衆と名づくるなり。是の人是の語言に於て亦復諸の名相を謂ふことを得ず、但だ相もなく戲論もなき事を集む。是を僧寶、應受供養と名づく。顚倒なき眞實義を得るが故なり。是の人是の方便を以て念僧するも是の事も亦空なり。

舍利弗よ、是の如く敎ゆる者は[五]善知識と名づく。舍利弗よ、一切語言の道を斷ずるを名づけて聖衆と爲す。何を以ての故に、聖法の中に於て語言によりて眞實義を說けばなり。是の如きの語言も亦不可得なり。是の故に當さに知るべし。諸の語言を斷ずるを名づけて聖衆と爲すなり。舍利弗よ或は人ありて言はん、若し此の中に於て言說もあるなく、定もあるなくんば、いかでか名づけて僧とやせん、と。舍利弗よ、我此の中に於て是の如きの答を有たん、衆僧を名づけて如實の事を示すもんとせん、此の事は決定して又不可得なり、倶に同じく一の學、一の忍、一の味なり。是の事も亦世俗の語を以ての故に說くなり。第一義にはあらず。第一義の中には定んで實に名づけて僧法常不壞と名づくるものあるなし。聖人若し說いて是の法ありと云はゞ、是れを則ち汚となす、所以は何となれば、若し人、是の如きの分別を作して、是は男なり是は女なり、是は[六]天なり、是は[七]龍なり、是は夜叉なり、是は[八]乾闥婆なり、是は[九]鳩槃荼なり、是は法なり、是は非法なり、と。是の分

【一】須陀洹。聲聞四果の初なる預流果の梵名、卽ち聲聞の階次にして四向四果とは預流果(Srotāpanna 初果)一來果(Sakridāgamin 2果)不還果(Anāgāmin 3果)阿羅漢果(Arhat 4果)の四果と其の各々の因道たる預流向、一來向、不還向、阿羅漢向の四向とを云ふ。是等の階次を分つは斷惑の淺深に由る。預流果(須陀洹Srotāpanna)。この果の因道たる預流向より遊んで第十六心に至れば修道の始めにして梵語の須陀洹は舊譯に於て入流と云ひ新譯には預流と云ふ。「大毘婆沙論卷四十六に流は謂く聖道なり預は謂く入なり」と須陀洹の翻名に(一)修無漏(二)逆流(三)觸債。

【二―四】一三五頁參照。

【五】善知識。一九〇頁參照。

【六】天。梵語提婆(deva)。の譯名にして印度に於ける諸神の總稱なり。善業を修せし者は死して天となり修せざる者は鬼趣に墮す。天は人に善事を勸め佛道を外護す。

【七】龍(nāga)。八部衆の一梵に那伽に作り龍王又は龍神とも稱せらる龍に四種あり(一)天の宮殿を守り持して落ちざらしむ、(二)雲を興し雨を致す者、(三)地龍は江を決

別を作し已りて種々の事を得、種々の事を得るが故に是の言を作す。是は坐なり、是は臥なり、是は行なり、是は住なり、と。聖人は諸法の實相を得るが故に亦、是は男なり、是は女なり、是は天なり、是は龍なり、乃至、是は法なり、是は非法なりと分別せず。分別せざるが故に種々の法を得ず。種々の法を得ざる者、能く是の說を作して是は坐なり、是は臥なり、是は行なり、是は住なりといふや、いなや、

いななり、世尊よ。

舍利弗よ、若し人にして是は男、是は女、是は天、是は龍、乃至是は法、是は非法なりと云はゞ是の人の所は虛妄には非ずや、

虛妄なり世尊よ。

舍利弗よ、若し是の虛妄に入らざれば名づけて聖衆と爲す。顚倒せざるが故に名づけて聖衆と爲すなり。

舍利弗よ、所有善からざるもの、所有知るべきもの、所有得べきもの、是の如きの一切の諸の不善の法は皆名相を以て本となす。此の賢聖の法の中には諸の名相を斷ず。又名相を念ぜず。名相を得ず、云何んが當さに是れ聖、是れ衆と云ふべきや、諸の名相を斷ずるを名づけて聖衆と爲せばなり、若し法に處有れば破すべく斷ずべし。賢聖の法の中には名もなく相もなく語言あるなし。諸の語言を斷じ、合散あることなし。若し僧無くんば則ち聖衆を破らんと云はゞ、是も亦得ず。所謂名相、虛妄想の故なり。種々の邪見に著し、是の邪見によりて更らに後身を受く。諸の見に貪著すれば則ち五陰生ず。舍利弗よ、〔一〇〕五陰は皆是れ虛妄貪著なり。是を惡道と名づけ、是を邪見と名づく。賢聖衆はこの事あるなし。但だ虛妄の緣の故に〔一一〕三界の起ることを知る。是の事を知るが故に名づけて聖衆となすなり。

し瀆を開く、(四)に伏藏して轉輪王、大福人の藏を守る。

【八】乾闥婆。

【九】鳩槃茶。一八八頁參照。

【一〇】五陰は又五蘊と云ふ。又五陰、五衆、五聚とも云ふ。色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊と稱す蘊とは、梵語、塞建陀(Skandha)の譯にして積集の義なり。

【一一】(三界Trayodhātavaḥ)。迷の衆生生死輪廻の境界を欲界(Kāma-dhātu)色界(rūpa-dh.)無色界(arūpa-dh.)の三に區分したるを云ふ又三有とも云ふ有とは迷の因果亡びざる意なり。

舍利弗よ、凡そ所有【三】見は聖衆の中に於ては皆不可得なり。謂く我見・衆生見・壽命見・人見・男見・女見・天見・地獄見・畜生見・餓鬼見・陰入界見・具聲見・鼓聲見・地聲見・水火風聲見・持戒聲見・毀戒聲見・正道聲見・邪道聲見・垢聲淨聲・禪定三昧・八聖道聲・須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果聲見・解脫聲見・得果聲見・佛聲見・法聲見・僧聲見・滅聲見・涅槃聲見なり。

舍利弗よ、是を虛妄音聲等の見と名づく。賢聖衆は第一義に於て是の見を得ず。種々の音聲一相なるに通達す。所謂無相にして違もなく諍もなく不顚倒の法忍を成就するが故に、名づけて聖衆と爲すなり。

舍利弗よ、是の不顚倒の法忍とは卽ち是れ無相なり。無相の故に取もなく捨もなく、逆もなく順もなく、生もなく滅もなし。是の中自然に歸滅して修もなく壞もなく、起もなく得もなきなり。此彼分別せざるが故に心常に捨離す。所以は何となれば、是の忍の中には此岸もなく彼岸もなし。分別もなく非分別もなく、無相に通達し、是の忍を成就するなり。名づけて聖衆と爲す。破和合の故に名づけて聖衆と爲す。

舍利弗よ、我餘經に說けり。若し人法を見れば是れ我を見ると爲す、と。如來は法に非ず亦非法にも非ず。何を以ての故に、愚人及び諸の外道を調達せんがために、皆色身を以て佛を見はす。舍利弗よ、如來は應さに色身を以て見るべからざるなり。亦復音聲を以て見るべからざるなり。

舍利弗よ、若し人、色身を以て佛を見れば是れ佛を去ること遠し。所以は何となれば、佛とは色を見るに名づけざるに名づけて佛を見ると爲すなり。

舍利弗よ、若し人能く諸法の無相を見れば、名もなく、觸もなく、憶もなく、念もなく、生もなく、滅もなし、戲論あることなく一切の法を念はず。涅槃を念はず。涅槃を以て念と爲さず。涅槃を貪らず。諸法を信解すれば皆是れ一相なり。所謂無相なり。舍利弗よ、是を眞見と名づく。佛と

【三】見(darsana)。(一)慧の心所の一作用にて對境の是非得失を推度し分別するを言ふ。(二)對境を緣ずることを言ふ。(三)眼を以て色境を取ることを云ふ。

は一切法に求なく、戯論なく、生なきを謂ふなり。此の事の中に於て念ぜず分別せず、是を佛を見ると名づく。若し人ありて此の法の中に於て憶想分別なく取もなく捨もなく、貪もなく違もなく、想もなく想業もなく、言説を貪らず、法の假名を知り皆所有なく、説言の道を斷じ、差別あることなし、亦戯論もなくんば、是を無生無想の行者と名づく。世間の中に於て名づけて聖衆と爲すなり。

舍利弗よ、何なる法を見るが故に名づけて佛を見ると爲すや、所謂無想・無分別・無戯論にして一切の法を受けざるなり。若しは空門、若しは寂滅門、若しは離門を以てしても、見を念ぜず、見を得せず、是の事も亦得ず、所謂名字なり。是の處（ことはり）も亦得ず所謂涅槃なり。何を以ての故に、舍利弗よ、我尚ほ涅槃を念ぜず、云何して汝等當さに涅槃を念ずべし涅槃を得べしと説くべきや。舍利弗よ、若し人涅槃を得れば、是の人は如來に隨はざる出家にして[三]六師に隨ふ出家なり。舍利弗よ當さに知るべし。是の人は是れ法賊の我が法の中に入ると爲すなり。當さに知るべし是の人は我が法を汚辱せるなり。當さに知るべし是の人は是れ大賊たること大城邑の中に大賊あるが如し、と。所以は何となれば、是の如きの癡人尚ほ涅槃を得ず、何況んや我人をや。

舍利弗よ、是の如きの癡人は我れ手を以て遮せん。我が弟子に非ず、衆數に入らしめず、我は彼が師に非ず。

舍利弗よ、若し諸法の無生無滅無念無想なるを知れば是れ法忍を得たるものなれども尚涅槃を得ず、何況んや我人をや。

舍利弗よ、佛も是の如く説いて名づけて法を見ると爲す。能く是の事を見るを名づけて佛を見ると爲す。

舍利弗よ、云何なるかを名づけて佛とやせん、一切法は如にして不異不壞なり。是を如來と名づく。若し人是の法の中に於て疑悔あるなくんば、是を聖衆と名づく。

【三】六師。天竺外道の六師なり、釋尊の當時婆羅門教の教團中、勢力の隆盛なりし六人の教派を言ふ。富蘭那迦葉(Pūrana kāśyapa.)末伽黎瞿倶賒黎子(Maskarāgośāli-putra.)刪闍耶毘羅胝子(Saṃjayavairatti-putra.)阿耆多翅舍欽婆羅(Ajitakeśa Kambara.)迦羅鳩馱迦旃延(Krakudakatyayana.)尼乾陀若提子(Nirgranthajnati-putra.)なり。

舍利弗よ、過去世の中に一の癡人ありて獼猴を識らず。一の大林に入りて獼猴の群叢して一處に聚るを見る。是の人曾て[一四]忉利天あることを聞けり。便ち謂ひて是を忉利の諸天と爲す。卽ち樹林を出でゝ本の聚落に還り、多くの人數中にて是の言を作せり。汝等曾て忉利天を見たりやいなや、と。衆人答へて曰く、未だ曾て見ざるなり、と。卽ち時に語つて曰く、我已に見ることを得たり、汝見んことを欲するやいなや、と。皆見んことを欲すと言ふ。卽ち大衆を將いて彼の林中に詣り獼猴の群を示し、汝等觀よ、これ忉利の諸天なりと、衆人皆忉利天に非ず、これは是れ獼猴の林中に樂しみ住せるものなり、汝癡倒の故に獼猴を識らず、又亦忉利の諸天をも識らざるなりと言へり。

舍利弗よ、是の人空しく大衆を將いて彼の林中に詣れり。是の如く舍利弗よ、未來世に於て當さに比丘ありて[一五]白衣の家に至りて此の言を作すべし。汝、佛聖衆を見たてまつり佛法を聽かんと欲するやいなや、と。中に白衣にして佛法を信ずるものありて、皆見たてまつり佛法を聽受せんことを欲すと言ふ。舍利弗よ、中に白衣ありて語言に貪樂して塔寺に入る。諸の比丘ありて言說を好み能く諸經に通ず。語言に依止して文飾を樂しむ。是の諸の沙門隨順して說を爲し是れ眞の道なりと謂へり。但だ衆數を充たせること放牛の如きの人なり。但だ讀經を樂みて眞際に入らず。但だ人意を悅びて名利を貴ぶ。世事に善巧にして淨說法ならず。但だ能く語りて世間の道を行ず。威德あることなくして涅槃の因を破れり。聖默然を捨てて禪定を樂まず、晝夜常に談論諍訟を好めり。厚き被褥に臥して尙ほ一念も禪定に隨順することなし。何況んや能く沙門果を成ずることを得んや。是の人睡眠して常に俗心と相應す。初夜後夜に順忍を修せずして下法を樂しむ。是の人亦多く供養衣服飮食を得たり。何を以ての故に、是の人常に惡魔の爲に攝せられて淺近の語を樂しむ。第一義に於ては勤學すること能はず。第一の深經を誦持すること能はず。聞けば則ち驚畏して淳濃を捨てて糟粕を取る。諸の凡夫ありて利養を得るを見ては貪著の心を生じ、是の念を作して言はく、我等も

【一四】忉利天（Trayastriṃśat-deva）。欲界六天の第二、須彌山の頂上なり。梵名を多羅夜登陵舍と稱す。三十三天と譯す。忉利とは梵名の略なり。中央の六城に帝釋天止住し、四方に各八城在りて其眷屬たる天衆之に止住す。合して三十三となる是れ名稱の起りし所以なり。

【一五】白衣。沙門を緇衣と云ふに對して在俗の人を白衣と云ふ。印度にては沙門を除き人皆白衣を用ふ、故に俗士を指して白衣と稱するなり。卽ち西域記卷二に「衣裳服玩旣は栽製する所なし、鮮白を貴び雜彩を輕んず」と云ひ涅槃經會疏卷十四に「西域の俗穿白を貴ぶ故に白衣と言ふ」とせり。

亦當さに是の言論を習ふべしと。

舍利弗よ、是の人は無上の法寶を捨てゝ邪見に墮在せるなり。是れ沙門の[一六]旃陀羅なり。諸の白衣ありて往いて其の所に詣れば、此の如きの惡人は而かも說法を爲す。利養を以ての故に佛及び法と僧とを稱讚す。但だ活命を求めて財の奴僕と爲り、衣食に貪重にして己が樂しむ所を讚す。若し布施を行ぜば天上に生ずることを得ん、佛法の中に於ては施を下法と爲す、讚するを以て最と爲すなりと。而も此の言を作す、大施の因緣は天上に生ずることを得ると。語言を知らず、義趣を解せず。但だ初入淺近の下法を知るのみ。我人に貪著して第一義を捨てたり。

舍利弗よ、是の如きの說法は或は時に人ありて信を生じて出家せんも、諸の惡人と共に和合し、第一義の深義を勤むること能はず。有所得者は我人・壽者・命者ありと說き、無所有の法を憶想分別して[一七]阿毘曇[一八]修妬路の中に於て自ら議論を爲し或は斷常を說き、或は有作を說き、或は無作を說く。

舍利弗よ、我が法は爾時に外道の法多く、諸の衆生をして正見の心を壞せしめん。

是の如く舍利弗よ、我が清淨の法は是の因緣を以て漸々に滅盡せん。

舍利弗よ、我久しく生死に在りて諸の苦惱を受けて成ぜし所の菩提も、是の諸の惡人爾時に毀壞せん。

舍利弗よ、若し比丘ありて、是の有所得の見、我見、人見を捨つること能はずんば、如來隨宜の所說を解せざらん。而も決定して我人の法ありと言はゞ、是の如きの人には、我則ち一の飲水をも受くることを聽かさざらん。或は時に是の人、空法を聞くことを得て、信心淸淨にして驚疑せず。卽便還りて應さに衆人を導引して實相義に入らしむべし。便ち應さに出家して[一九]具足戒を受くべし。何を以ての故に、舍利弗よ、若し人是の如きの見を捨てずんば、是を外道と名づけん。舍利弗よ、我、世俗の因緣を以て假りに我ありと說けども第一義には非ざるなり。若し人ありて言はん、我も

【一六】旃陀羅（Caṇḍāla）。印度にて最も低き階級に屬する賤民。首陀羅族の父と婆羅門族の母との間に生れ常に屠殺等の業を營む者を云ふ。玄應音義卷三には「或は旃尼羅と云ふ。此に嚴熾と云ふ謂く屠殺者の種類の名なりと、一に主ニ殺人一と云ふ、獄卒なりとしてゐる。

【一七】阿毘曇（abhidharma）。三藏の一なる論を言ふ論藏を舊經譯家にては阿毘曇と云ひ無比法と翻す。これ無漏智は世間に比類すべきもののなき義新譯家にしては阿毘達 abhidharma（巴 abhi-dhamma）漢字音で阿鼻達磨、阿毘曇、毘曇に作る勝法、無比法、向法」と譯し對法と翻す、對は對觀、對向、の義にして無漏智は四諦の理を對觀して涅槃の果に對向するの義。論藏は無漏の智慧を生ずる方便たるべき法門を含有して又所依となすを以て此の名を附す。

【一八】修妬路、（修多羅 Sūtra）（巴 sutta）佛の說ける教法を記述せしもの十二部經又は三藏の隨一なり。修妬路、素呾纜に作り、線、條、綖、又は教條の義にして經、契經　直接、聖教、法本、善語教等の譯あり雜阿毘曇心論卷八に修多羅とは五義あり、一に出

生。諸義を出生するが故に、二に泉涌。義味盡くることなき故、三に顯示。諸義を顯示するが故に、四に繩墨。諸の邪正を辯ずるが故に、五に結鬘。諸法を貫穿するが故に」、とせり。

亦復世俗の因緣を以て我ありと說くと、是の人若し能く無生無滅無相の法に通達せば、我が所說に相違せざる者にして、是れ我が弟子なり。

舍利弗よ、若し人ありて言はんに、如來は何が故に世の因緣に隨つて無我の法に於て[二〇]人ありと說き玉ふや、如來は應さに世間の爲の故に不實の語を作すべからず。又諸經の中多く人ありと說けり。佛の所說は應さに虛なるべからざるなり、と。

舍利弗よ、應さに是の人に答ふべし。佛、諸法は皆空にして無主、無性なりと說くは、但だ是れ虛妄にして、第一義には非ず。如來は第一義を以てせざるが故に我人ありと說けるなり。聖人の語は貪著する所なし。智慧なき人は、佛と等しきことなく、亦過ぐる者なし、と。

舍利弗よ、如來の智慧は不可思議にして、是の智慧を以て衆生の心を知るなり。寧ろ當さに人ありて佛と等しくんば、佛大龍大法の王の爲に應さに難言すべからず。佛はある人には一切世間常に我と共に諍ひ、我常に世間と諍はずと說くなり。

舍利弗よ、我ありと說く者は甚だ哀愍すべきなり。此の中に法もなく、我もあるなし。多く衆生ありて如來隨宜の所說を解せず。法寶に違逆して多く[二一]惡趣に墮せん。

舍利弗よ、我邪見を知るを而も邪見と爲さざるなり。能く邪見を知るは卽ち是れ正見なればなり。

舍利弗よ、邪見は終に正見に變作せず、見は見を知らざればなり。

舍利弗よ、諸佛如來の阿耨多羅三藐三菩提は一切世間の信じ得難き所なり。我、諸天一切世間に於て、是れ最も信ずべく信ずべからざるに非ざるなり。

舍利弗よ、我が所說の法は[二二]彼岸に至らんが爲めなれども是の中に亦彼岸に至るものなし。我が所說の法は諸行を盡さんが爲なれども、是の中に亦諸行を盡すものなし。我が所說の法は寂滅の爲の故なれども、是の中に亦寂滅ある者なし。我が所說の法は解脫の爲の故なれども、是の中に亦解

【一九】具足戒。比丘、比丘尼の受持する完全なる戒を云ふ。說に上座部の律は二百二十七戒、比丘尼の律は三百四十八戒あり。普通に五百戒と言ふ。

【二〇】有人。三本、宮本には有我ある人といふ如し。

【二一】惡趣。衆生が惡業の因を以て趣くべき所、卽ち地獄畜生などこれに種々あり三惡趣は地獄、餓鬼、畜生。四惡趣は三惡趣に修羅を加ふ。五惡趣は三惡趣に人、天を加へ修羅を天に屬せしむ。

【二二】彼岸とは、梵語、波羅蜜(pāramitā)の譯語たる到彼岸の略名なるべし。卽ち飜譯名義集卷四に波羅蜜の語を解して「生死を此岸とし煩惱を中流として彼岸として涅槃を彼岸として菩薩は無相の智慧を以て禪定の船に乘じて航して涅槃の彼岸に到ると云ふ。

脫あるものなし。我が所說の法は諸智の爲の故なれども、是の中に亦諸智あるものなし。我が所說の法は淨垢の爲の故なれども、是の中に亦淨垢あるものなし。舍利弗よ、如來は天の爲に說法して亦天あるなし。人の爲に說法して亦人あるなし。衆生の爲に說法して亦衆生あるなし。

舍利弗よ、如來は明と解脫とを說けども、是の中に明及び解脫なし。我、念佛を說けども佛念すべからず。我空行を說けども空行すべからず、亦念すべからず。

舍利弗よ、是を如來所說の經法章句と名づく。是の中に說く者あるなし。諸の惡人等にして此の章句を得て他人の爲に說かば、亦復、我を以て佛と爲さんも、如來聖衆の功德あることなく、而も自ら僧數と爲すは、舍利弗よ、譬へば獼猴の群の[二三]忉利天に似ざるが如し。是の如きの衆惡人、我が聖衆には似ざるなり。

舍利弗よ、是の諸の惡人は、但だ音聲語言を以て自ら沙門なりと謂ふも癡人の獼猴の群を見て忉利天と云ふが如きに似たり。

舍利弗よ、中に出家の人ありて問難を喜樂す。善き師の、名色を說いて寂滅にして語言の道を斷ずと爲すに値ふことを得て、起なく、失なく、無相に通達す。是の如く無生[二四]無滅[二五]無相の法を聞くことを得て驚畏せざる者は、當さに知るべし是の人已に曾て無量の諸佛を供養し、能く我が法を知りて聖衆と名づくべきなり、と。

淨戒品　第五の一

佛、舍利弗に告げたまはく、破戒の比丘に十憂惱の箭ありて堪忍すべきこと難し。比丘十憂惱の箭を成就せば、則ち佛法に於て滋味を得ず。說法を憎む者は親近を樂はず。何等をか十と爲す。

舍利弗よ、破戒の比丘は僧の和合するを見て喜びの心を生ぜず。何を以ての故に、和合の[一]布薩は

【二三】忉利天。二〇一頁參照。

【二四】無滅｝
【二五】無相｝一八四頁參照。

【一】布薩(uposatha)。(巴 uposatha) 比丘比丘尼に取りては說戒懺悔する儀式にして在家に取りては各週の安息日の式典なり。梵語にて具さに優波婆素陀と云ひ、略して優婆々沙、優婆々娑、布薩陀婆、優補陀婆、布沙他、逋沙他、布灑他、褒灑陀と言ふ。譯して共住、善宿、近住、長養、淨住等とせり。

必ず我を驅りて出せばなり。是の惡比丘は自ら過あることを知りて常に憂惱を懷き、持戒者に於ては瞋恨して喜ばず。舍利弗よ、是を破戒比丘の初憂惱の箭と名づく。必ずや惡道に墮せん。

復次に舍利弗よ、破戒の比丘は衆の憎惡し、親近するを欲せざる所なり。惡牛の利角は人に捨遠せらるゝが如し。過の惡比丘は自ら過あることを知りて常に憂惱を懷く、舍利弗よ、是を破戒の比丘の二憂惱の箭と名づく。必ずや惡道に墮せん。

復次に舍利弗よ、破戒の比丘は、比丘衆に逢見して自ら惡心に同ぜざるを知りて捨離し、愧耻を懷くが故に衆に入る能はず。舍利弗よ、是を破戒の比丘の三憂惱の箭と名づく。必ずや惡道に墮せん。

復次に舍利弗よ、破戒の比丘は毒惡の心盛にして化喩すべからず。尙ほ外道の戒法あることなきが如し。況んや淨戒に於てをや、其の破戒の因緣を以て人は親近せず。舍利弗よ、是を破戒の比丘の四憂惱の箭と名づく。必ずや惡道に墮せん。

復次に舍利弗よ、破戒の比丘は他の財物を以て自ら其の身を養ふ、我此の人を說いて重擔者と爲す。所以は何となれば、行者得者は應に供養を受くべし。破戒の比丘は是れ行者に非ず、是れ得者にも非ず。是の故に舍利弗よ、破戒の比丘は當さに百千億萬の劫數に於て身肉を割截して以て施主に償ふべし。若し畜生に生じなば身は常に重きを擔はん、所以は何んとなれば、一髪を折りて千億分と爲し、破戒の比丘は尙ほ其の一分の供養をも消し能はざるが如し。況んや能く他の衣服・飮食・臥具・醫藥を消さんや。

舍利弗よ、破戒の比丘、聖法の服を著すとも尙ほ應さに寺に入ること一步をもすべからず、何況んや一飮の水乃至床榻を受くるを得んや、何を以ての故に、舍利弗よ、是の如きの惡人は天人の中に於ては是を大賊と爲す。一切世間は皆應さに遠離すべし。舍利弗よ、是の敗壞の人は卽ち是れ怨家なり。如來は悉く一切世間皆我が所に至るを聽せども、破戒の人は如來手もて遮り、我が弟子に

非ず。何況んや一日我が法の中に住するをや、と。舍利弗よ、譬へば死人・死蛇・死狗の如く最も臭穢と爲す。清淨の諸天も遊戲せんと欲する時、應さに見ることを得べからず。若し見れば則ち遠ざかる。是の如く舍利弗よ。破戒の比丘は彼の三屍の如く臭穢不淨なり。智者は遠離して、同事[二]・布薩[三]・[四]自恣をともにせず。舍利弗よ、破戒の比丘は我が法の中に於て是を不吉なりと爲す。持戒の比丘は此の破戒の比丘を見れば、卽ら時に遠離せん、何を以ての故に、若し破戒の比丘の手に觸るゝ所のもの、及び受くる所の物、持戒者に於ては則ち毒惡と爲す。舍利弗よ、正に三屍の臭穢をして地に滿たしむるも、我能く中に於て[五]四威儀を行ぜんも、此の破戒の比丘と須臾も共に住すること能はず。何を以ての故に、舍利弗よ、是れ沙門の中の卑陋下賤と爲す。沙門中の朽壞弊惡と爲す。沙門中の粃糠と爲す。沙門中の垢と爲す。沙門中の濁と爲す。沙門中の汚となす。沙門中の曲と爲す。沙門中の龜と爲す。沙門中の聖道を失へるものと爲す。是の如きの人等、我が法の中に於て出家求道して重罪を得るなり。舍利弗よ、是の如きの人を我が法の中に於ては是れ逆賊なりと爲す。是れ法賊なりと爲す。是れ欺誑詐僞の人なりと爲す。但だ活命を求めて衣食に貪重す、是則ち名づけて世樂の奴僕と爲す。舍利弗よ、譬へば黃門の男に非ず、女にも非ざるが如し。破戒の比丘も亦復是の如し。在家とも名づけず、出家とも名づけず。命終の後には直ちに地獄に入らん。舍利弗よ、譬へば蝙蝠の、鳥を捕へんと欲する時は則ち穴に入りて鼠となり、鼠を捕へんと欲する時は則ち空に飛んで鳥となるが如し。而も實には大鳥の用(はたらき)あることなく、其の身臭穢にして但だ闇冥を樂しむ。舍利弗よ、破戒の比丘も亦復是の如し。旣に布薩自恣に入らず。亦復王者の使役にも入らず。白衣とも名づけず、出家とも名づけず。屍を燒ける殘木は復用に當らざるが如し。是の如きの比丘には戒品・定品・慧品・解脫品・解脫知見品あることなく、但だ破淨戒品を具足するあり。大微妙の音聲・戒聲・定聲・慧聲・解脫聲・解脫知見聲を出すこと能はず。但だ毀戒弊惡の音聲を出すのみ。諸の同惡

【二】同事。四攝の一菩薩が衆生の根緣に應じて示現し、事業を同じうして巧に衆生を攝取するを言ふ。

【三】布薩。二〇五頁參照。

【四】自恣。每年雨期に修する夏安居の末日に於て大衆互に見、聞、疑の三事に就き罪を指摘し懺悔修福するを云ふ。梵名鉢刺婆刺拏(Pravāraṇa)といひ隨意又自恣と譯す。

【五】四威儀。日常人の起居動作に四種の區別あるを云ふ。行(caṅkramaṇa)とは房舍又は山川聚落等の地も步むこと。住(tiṣṭhat)一處に住立すること。坐(āsana)とは牀上等に宴坐して臥(śayana)とは橫臥して睡眠すること。卽ち吾人の行動一切を總稱して……と云ふなり。

と倶に惡聲を出し、但だ衣服飲食床臥を論じ、布施樹木華果を受取り、貴人の使と爲り、及た國土の吉凶安危を論じ、衆事諸の不善の語を戲笑す。常に日夜に於て塵染を伺求す。比丘是の如く身業も不淨口業も不淨、意業も不淨なれば當さに地獄に墮すべし。

舍利弗よ、是の破戒の比丘は闇冥を樂しむことかの蝙蝠の如し。正經を說くを聞いては以て憂ひとなす。所以は何となれば、如實の說の故なり。世間の人は實說を喜ばずして但だ意に順ふを樂しむ。是の如きの比丘は說法に於ては心淸淨ならず。重ねて更らに罪を爲して地獄を增益せん。舍利弗よ、是を破戒の比丘の五憂惱の箭と名づく。必ずや地獄に墮せん。

復次に舍利弗よ、破戒の比丘に羞恥あるなく、諸根散亂して不淨を成就す。身口意業の淨ならざる威儀は、著する所の衣服も皆不如法なり。妄語を好み喜び口を護ること能はず。心常に馳騁して垢穢に染まれり。舍利弗よ、新瓦器に盛るに屎尿、臭爛の膿血を以てするが如し。後に不淨を去りて梅檀の香を著くとも、復[六]梅檀を去れば是の如きの瓦器に何等の氣ありや、

世尊よ、是の新瓦器は先きに盛れる屎尿の臭氣堅く著きて、唯臭氣ありて梅檀の香りなきなり。

舍利弗よ、人淸淨の信を以て諸根を等しうして出家學道し、惡知識に遇ふて其の敎へに隨はん、舍利弗よ、何等をか惡知識と爲す、惡知識とは常に調戲を好み輕躁にして羞ることとなし。言語散亂にして諸根を攝めず。心專一ならずして癡なること白羊の如し。是の如きの惡知識に親近せば、[七]須陀洹果・[八]斯陀含果・[九]阿那含果・[一〇]阿羅漢果を失ひ、乃至生天の樂をも失はん。況んや涅槃の道をや、但だ能く破法の罪業を修集して、破法者と共に事に從ふ。是の人不淨の身業、不淨の口業、不淨の意業、不淨の持戒を成就し、身死するの後惡趣に入らん。云何なるをか惡趣となす。惡趣とは名づけて地獄・畜生・餓鬼・阿修羅の道と爲す。復惡道ありて[一一]阿由勒蟲・婆伽羅目呿蟲・浮彌修遮迦蟲・修脂目迦蟲の如し。是の人多く此の諸蟲の中に生ぜん。

【六】梅檀(candana)。本草綱目に謂ふ所の白檀又は檀香にして檀香科に屬す。

【七―一〇】須陀洹果。…等一三五頁參照。

【一一】阿由勒蟲等。如何なるか不明なり。

舍利弗よ、是の人惡知識に隨へば若し人中に生ぜば、父母に生れながらにして離れ、死亡し喪失し、親里衰惱し國土破壞せん。[二] 八難の中に生じて八樂處を捨せん。多く怒癡を欲して常に戲調を好み、輕躁にして羞なく、言語散亂し、心を攝むること能はずして癡なること白羊の如く、貪欲瞋恚愚癡の爲めに壞せられ、聾瘂盲瞎にして手脚攣躄し、惡知識と共に無佛の處に生ぜん。若し佛世に値ふとも、目は見ることを喜ばず、法を聞くことを喜ばず、佛衆と共に和合せざらん。是の惡業を起して、惡人と生を共にして下劣の法を樂しまん、正見の中に於ては邪見の想を生じ、邪見の中に於て正見の想を生ぜん。是を下欲・下忍・下慧と名づく。

舍利弗よ、下慧の人は終に厭離滅道涅槃生心を爲すこと能はず。舍利弗よ、惡知識に遇ふては是の如きの諸の衰惱の患を得、是の相貌あらん。是の人是の諸の深き經法を聞かば、驚疑怖畏して深坑に墮するが如くならん。則ち大罪深坑の塹中に墮せるなり。何を以ての故に、舍利弗よ、經の中に說けるが如し。破戒の比丘に大重罪あり。何の因緣の故に名づけて破戒と爲すや。所受の戒を破して敎語すべきこと難く、行に常准なく、多く違逆する所あり。常に貪著を行じて多く雜揉の行あり。貪瞋癡を行じて諸の雜語を樂しむ。名づけて破戒と爲すなり。復多くの事務を樂しみ、多くの諷誦を樂しみ、多くの睡眠を樂しむあり。言ふ所順ならずして次第あることなし。不清淨を說きて我人壽者命者に貪著す。是の故に名づけて弊惡の比丘と爲す。節量を知らず、沙門の法を知らず、[三] 婆羅門の法をも知らず。醫術販賣を行じて利を求むることを樂しみ、國の使となりて諸家に汚染せらるゝことを樂しみ、白衣とともに給使作務して諸の樹葉華果を以て奉上することを樂しみ、白衣の爲めに外道の法を說くことを好み、心常に出世間の法を捨離す。未だ二十に滿たざるに具足戒を受け、受戒の事の中に諸の具せざることあり。形體缺少にして法に應はざるに米穀錢帛金銀を受生し、敎誨に順はずして、逆ひに師命を拒む、自ら身を知らず他の人をも知らず、貴賤の差別をも

【二】 八難(Aṣṭavakṣaṇāḥ)。佛に値遇し敎法を聞くを得ざる境界に八種あるを云ふ八難處とも言ふ。(一)地獄(naraka̤ḥ) (二) 畜生 (tiryañcaḥ) (三)餓鬼 (Nretāḥ) (四) 長壽天(dīrghāyuṣo)(五)邊地(pratyantojanpadaṁ)(六)聾盲瘖瘂 (Indriyavaikalyaṁ) (七) 世智辯聰 (mithyādarśanaṁ) (八) 佛前佛後 (tathāgatānāmanutpādaḥ) 此八處に生ずる者つねに衆苦を受け善事を修すべき閑暇なき故八無暇、八不閑、八非時とも言ふ。

【三】 婆羅門 (brāhmaṇa)。印度に於ける四姓の一、或は婆羅賀摩拏、婆羅欱末拏に作り淨、行、淨志、外意、承習、靜胤等と譯す、自ら梵天の後裔と稱し四吠陀を讀誦し祭祀を行ひ、四姓中の最上位に居る。

分別すること能はず、好みて妄語を喜び 一四 戒取に貪著す。行事散亂にして心專一ならず。面に瞋相ありて慳貪不信なり。恩義を知らずして多く貪欲を懷く、睡眠し、戲調し、疑悔し、瞋恨し、罪惡を覆藏し、自ら專ら執することを好み、嫉妬諂曲にして慚愧する所なし。自ら大放逸にして憍慢・我慢・大慢・邪慢なり。好んで欺誑を行じて其の身を讚美す。多く方便を作して利養の門を開く。白衣を陵踐し僞りて親厚を現ず。勢に因りて財を得以て衆人に誇る、戒品・定慧解脫品・解脫知見品を毀ち破り、佛法衆に於て心定信ならず。業報を信ぜずして現利を尊ぶ。後世なしと謂ひて諸の疑悔多し。志性淺弱にして常に驚怖を好む。舍利弗よ、是を弊惡の比丘と名づく。是の如きの癡人は我が法の中に於ては便ち是れ屎尿臭穢よりも不淨なるなり。是の人心口意の業を成就して命淸淨ならざるが故に、命終の後惡道に墮在して大地獄に入らん。是の如きの比丘は諸佛如來及び弟子衆の常に遠離する所なり。餘の道を好む者も、滅度を求むる者も亦皆近よらず。舍利弗よ、譬へば栴檀を不淨の器に置きて不淨と同じうせんに、復用ふるに堪えざるが如し。是の如く舍利弗よ、若しは在家出家にして是の人に親近して行ずる所を習效せば、亦戒品を破りて、久しからずして惡に同ぜん。顏色毀悴して 一五 威儀を破り失はん。命終の後には地獄の中に生ぜん。

舍利弗よ、是の如きの惡人は諸佛如來も及た弟子衆も、幷に餘の道を求め滅度を好む者も皆遠離する所とならん。舍利弗よ、譬へば栴檀を不淨の器に置けば復用ふるに任えざるが如し。是の如く、舍利弗よ、若しは在家出家にして以て塗身すと雖も猶不淨を雜ふるが如し。舍利弗よ、是の惡比丘も亦復是の如く、衆中に坐し聖法の服を著すると雖も、然も是の比丘惡相猶ほ現ず。梵行の比丘はこの不淨を見て遠ざけて近よらず。他の遠離するを見て心則ち瞋恨すれば、是の因緣を以て死しては地獄に入らん。舍利弗よ、是を破戒の比丘の六憂惱の箭と名づく。必ずや地獄に墮せん。

【一四】 戒取（戒禁取）。四取の一。四取とは欲取、見取、戒禁取、我語取とす。取とは執取、執持等の義にして三有虛妄の生に執着して能く諸有を取るが故也。戒禁取とは、戒禁を緣じて起るもの。

【一五】 威儀。二〇六頁參照。

卷の中

淨戒品 之餘

復次に舍利弗よ、破戒の比丘は佛の所說の是の如きの經を聞きて、心淸淨歡喜信樂ならず、自ら過あることを知りて便ち此の經を疑ふ。我等の爲めに說きて餘人のためにせず。何を以ての故に、我等の如き比丘に此の事あるが故にと、舍利弗よ、是の如き上妙無比の法に破戒の比丘は乃ち瞋恨を生ず。法を說く者に於ても心多く不信なり。是くの如き佛所說の經を聞くことを得るも違逆して受けず。而も此の言を作さん。此れ佛說に非ずと教へて餘人に語る。何を以ての故に、破戒の比丘は修道を樂しまざればなり。修道の比丘は佛語に逆らはず。これ皆破戒愚癡の惡法なれば、謂ひて心に信ぜずして佛語に違逆せるなり。是くの如きの比丘は自ら過あることを知れるなり。但だ瞋恨を生じて憍慢佷戾なり。惡邪慢心にして佛法僧を謗るなり。

舍利弗よ、此の比丘に隨つて是の諸經を聞き、違逆して信ぜざれば、心無上菩提[一]に通達せず。教へて諸人に語り、佛の所說にあらずとせん。佛是の人を說いて則ち謗法とせん、謗法を以ての故に沙門に非ず。釋種子に非ずと爲す。應さに是等の比丘を滅擯すべし。若しは百千萬億の諸佛三輪示現すとも悟らしめ道果[二]を得しむること能はず。何を以ての故に、舍利弗よ、是の如きの惡人は此の法の中に於て自ら障道を作し、復生分なく信心あることなし。但だ衣食を好み世利に貪樂す。我此の人に說かん、必ずや地獄に墮せん、と。

舍利弗よ、我今明了に汝に告げん。若し人にして是くの如きの法寶に違逆せば、好生處に於て永く分あることなく、但だ惡處に生じて常に盲にして目なからん。舍利弗よ、是の諸の比丘は憍慢熾盛にして定んで說くこと能はず。我が正法を破せん。其の餘の衆人は自活する能はずして、利養の

【一】無上菩提。三菩提又は五種菩提の一、佛の悟、菩提は智なり。佛の智は最上無上なるが故にいふ。即ち菩薩が等覺、妙覺の位に至りて道場に坐して一切の煩惱を滅し妙覺果滿の證に至ること。

【二】道果。菩提涅槃の事。大小乘に通用す、法華經藥草喩品に「漸々修業して皆道果を得」とし四十二章經に憍陳如等五人のために四諦の法輪を轉じて道果を證せしむとあり。

爲めの故に隨つて我が法を破せん。舍利弗よ、是の如くにして法寶は爾時に破滅せん。何を以ての故に、是くの如きの法寶は一切諸佛皆共に恭敬し、諸の[三]辟支佛、[四]阿羅漢等も亦た皆恭敬す。破戒の比丘、增上慢の者は定んで說法せず。諸の比丘等は爾時皆共に我が法を輕慢して而も共に遠離せん。多く慳貪を懷きて專ら生業を求め、財利を貴びて嫉妬に縛せられ、常に諍訟を好みて、互ひに怨隙を生ぜん。相ひ敬順せずして威儀あることなし。志性輕躁にして猶ほ獼猴の如し。威儀を輕易して諸の惡業を行ず。[五]沙門の法を退きて賢聖より遠離す。

舍利弗よ、是くの如きの惡人は瑕疵を覆藏し、多欲多求にして財を以て自活す。惡魔は心を知りて爲めに方便（たより）を作し、其の乖異するものをして各共に散壞せしむ。一味の僧寶分れて[六]五部と爲る。既に五部あれば則ち諍訟を生ず。互ひに相ひ是非して過失を論說す。舍利弗よ、如今の比丘は互ひに相ひ教化し、互ひに相ひ恭敬し、心を同じうして共に行じ、佛語に隨順せり。爾時の比丘は相ひ教化せず、相ひ恭敬せず、惡を作すを見れば、恐れて捨て去り、法を以て共に相ひ教誨すること能はず。或は時に多聞深智なるものありと雖も、猶ほ憍慢を懷きて餘人を輕賤す。各〻是とする所を以て自ら其の輪を立て、相ひ見ることを喜ばず、況んや能く教へを受けんや。

舍利弗よ、如來在世の[七]三寶は一味なれども、我が滅度の後には分れて五部と爲らん。舍利弗よ、惡魔は今に於ては尙ほ身を陰せるが猶きも、[八]調達を佐助（たす）けて我が法僧を破らんとす。如來の大智現在世せるが故に、弊魔は其の大惡を成ずること能はざるなり。當來の世には惡魔身を變じて沙門の形となり、僧の中に入りて種々に邪說せん。多くの衆生をして邪見に入らしめ、爲めに邪法を說かん。謂く彌樓陀羅迦樓鬪事。五分事・念念滅事・一切有事・有我事・有所得事なり。

爾時に惡魔是の如き等の邪の貪著事を說く。是の如きの事は、諸佛及び佛弟子の所說に非らず。爾時に惡人、魔の爲に迷はされ、各〻所見を執して、我は是なり、彼は非なりとす。舍利弗よ、如

【三】辟支佛。（梵Pratyeka-buddha.）舊稱辟支佛、又は辟支迦羅新稱、鉢刺翳伽佛陀。舊譯緣覺、新譯獨覺。緣覺とは一は十二因緣の理を觀じて斷惑證理し一は飛花落葉の外緣に因て自ら無常を覺悟して斷惑證理するを言ふ。獨覺とは無佛の世に於いて宿因の萠す所或は飛花落葉を觀じて獨り自ら覺悟すればなり。

【四】阿羅漢。一二三一頁參照。

【五】沙門（Śramaṇa）。妻子眷屬に別れて出家學道せる者を總稱す。又は桑門、娑門、喪沙、沙門那、舍、囉、摩拏に作り息心、功勞、靜志等の義あり又佛の異名を大沙門と稱す。

【六】五部。曇無德部。摩訶僧祇部。彌沙塞部。薩婆多部。迦葉維部等を指すか？。

【七】三寶（tri-ratna）。佛教徒として尊重すべき佛（buddha）法（dharma）僧（sangha）の三を佛寶法寶僧寶と稱す。

【八】調達（Devadatta）。釋迦牟尼佛の從弟にしてその化導を防げし者として知らる、提婆達兜、諦婆達多、地婆達多、提婆達に作り又略して調達提婆に作る天熱天授又は天與と譯す。斛飯王の子、一說に白飯王の子難陀の弟。

來豫め未來世の中を見るに、是の如きの破法の事あるが故に、是の深經を說きて、悉く惡魔の諸の執著する所を斷ず。

舍利弗よ、爾の時に當り、閻浮提の內は多く是れ增上慢にして、小しく善順を作して便ち得道すと謂へり。命終の後には當さに惡趣に墮すべし。何を以ての故に、是の人長夜に自ら得道を謂ひ、亦復他の人に說いて得道すと稱し、冐りに聖人の供養せらるゝ所の事を受く。是の人を諸の天人世間に於て大惡賊と爲す。是の如きの癡人は第一實義を說くを聞かば、驚疑怖畏すること深坑に墮するが如くならん。

舍利弗よ、諸の比丘ありて此の事を樂しむ者、相ひ共に集りて諸佛の[九]無上菩提を破壞せん。爾の時に增上慢の人、偏執する者多し。惡魔又復在家出家の者の心を迷惑し、非法を執せしむ。正法を說く者は援助少うして、則ち散壞して復立つことを得ざらん。舍利弗よ、爾の時に世間に年少の比丘ありて多く利根あり。所以は何となれば、諸の出家せるもの、有餘煩惱にして、人中に還生し、卽ち復出家せるなり。是の諸の比丘、難問することを喜樂し、佛法の第一實義を推求すれども、舍利弗よ、爾の時に增上慢の者は、魔に迷惑せられて但だ活命を求むるのみ、實には是れ凡夫なれども、自らは羅漢なりと稱す。諸の年少の比丘等に謂ひて曰く、身口意を善くすること、此は是れ佛法の第一實義なり。淨戒を護り、經法を讀誦し、多聞を勤修せよ。是を順忍の因緣と名づく。所謂心を淨め佛を信ずるなり。又第一實義あり。汝當さに心緣中に繫け、專ら涅槃を念じ三種の苦を滅すべし。則ち能く五陰・十二入・十八界を厭離するなり。汝等當さに靜處に於てこの陰界入の法は、悉く皆無常なりと觀じ、自ら其の身の種々の不淨を觀ずべし。汝等能く是の如く觀ずれば、當さに須陀洹果を得べし。又能く是の五陰等の法に於て、深く[一〇]無常・[一一]苦・[一二]空・[一三]無我の堅牢あるなきを觀ずれば、則ち斯陀含を得、轉た復深く觀ずれば、阿那含を得、阿羅漢を得るなり。是を第一實義と稱せらる。

【九】無上菩提二一〇頁參照。

【一〇】無常。梵語阿儞怛也(Anityn)。世間の一切の法は生滅遷流して刹那も住することなきを言ふ。これに二種あり。刹那無常、相續無常。

【一一】苦。梵語、豆佉(Duḥkha)。身心を逼惱するを云ふ。

【一二】空。因緣所生の法。究竟して實體なきを云ふ。

【一三】無我(Anātman.)。又非我とも云ふ。常一の體にて主宰の用ある者を我となす。人身に於て此ありと執するを人我、法に於て此ありと執するを法我、他に於て此あるを他我と云ふ。然るに人身は五蘊の假和合なり、常一の我體あるなし法は因緣生なり、亦た常一の我體あるなし、人我なく法我なければ自我他我なきは言をまたず。此の如くして畢竟して我あることなし是れ究意の眞理なり。(大乘義章二)に「法無二性實一故曰二無我一」と。

と爲す、と。是の中年少の比丘は復た問ふ。佛法の中に於て阿羅漢果は便ち是れ第一義なりや。我等も亦是の事と知れば、阿羅漢を得て是れ第一義なるや、今此の五陰は、憶念する者生ずるとせんや、憶念せざる者生ずるとせんや。

答へて曰く、是の五陰は憶念すれば生じ、憶念せざれば生ぜざるなり。

復問ふ、憶念と[一四]五陰と異なりとせんや、いなや、

答へて曰く、五陰の如く憶念も亦爾なり。

復問ふ。若し五陰の如く憶念も亦爾なりとせば、誰れが是れ五陰を念ずる者なりや。

答へて言く、若し五陰を念ずることなきものは、則ち涅槃なし。實に五陰を念ずる者あらば、是の故に八直の聖道を修して涅槃に入る者あるなり、と。

舍利弗よ、未來世の中に多く比丘ありて此の忍を成就せんに、舍利弗よ、爾時に會中に多くの諸の天衆ありて、佛法の第一實義を聞かんと欲す。是の増上慢者の所説を聞きて、心に疑悔を生ずること深坑に墮するが如くにして、咸是の言を作す。咄なる哉、釋迦牟尼佛の法今將に速かに滅せんとす、と。

舍利弗よ、中に善根を成就せる比丘あり、是の比丘癡人にして空しく老ひて増上慢なる者なりと謂へり。若し五陰の相、[一五]十二入、[一六]十八界の相あらばこの語を受けず、喜ばず、悦ばずして座より起ちて去らん。舍利弗よ、爾の時に諸天は心に大いに歡喜し四方に唱へて云はん、釋迦牟尼佛猶ほ好き弟子在る有り、と。是の諸人等善根少なからずして、是の不淨の所説に、我見、人見と謂ふを聞くを喜ばず。諸天此れを聞きて皆大に歡喜し、是の利根の者を稱揚讃歎して、喜樂問難し、必ずや皆無生法忍を成就せん、と。是の如きの人等、一處に合集し、共に徒侶と爲る。人衆既に少なければ勢力も亦弱し。舍利弗よ、爾時に我が諸の眞子、父の種族に於て尙ほ愛語なし。況んや供養を

【一四】　五陰。一九八頁參照。

【一五】　十二入（又十二處と云ふ）。（一）眼處、（二）耳處、（三）鼻處、（四）舌處、（五）身處、（六）意處、（七）色處、（八）聲處、（九）香處、（十）味處、（十一）觸處、（十二）法處なり。即ち六根六境なり。處とは、梵語で阿耶怛那、（āyatana）の譯にして生長門の義。心心所のために六根は所依となり、六境は所緣となりて其作用を生長するが故に處と稱したるなり。

【一六】　十八界。眼界、耳界、鼻界、舌界、身界、意界、色界、聲界、香界、味界、觸界、法界、眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、意識界。即ち六根、六境、六識なり。界とは、梵語、馱都（dhātu）の譯にして種族、種類の義、種族は自類を相續して生ずる義。種類は各別の品類あるを云ふ。即ち十八の種類、自性相續して存在するを界と稱したるなり。

得て止りて塔寺に住せんや。舍利弗よ、汝且さに之れを見るべし。爾時に如來便ち輕微を爲す。我が滅度の後我が諸子等、善寂、[17]無所得の忍を成就せん時も亦輕賤ならん。我見の故を以て無數劫に於て諸の怨敵を摧き、諸の一切の[18]天王、人王を化して心をして清淨ならしめたり。爾る所以は、我が諸子をして父の位に安んずることを得せしめんがためなり。

舍利弗よ、如來は今一切世間、天人を以て證とせん。如來は法の如く[19]阿耨多羅三藐三菩提を得て、無上の法輪を轉ず。沙門・[20]婆羅門、若しは天・魔・梵の轉ずること能はざる所なり。舍利弗よ、是の如きは現の事なり。如來の滅後我が此の阿耨多羅三藐三菩提を、我が諸の弟子等は廣く流布せんと欲す。是の諸の惡人は證明すること能はず、亦復、無畏を施與すること能はざるなり。

舍利弗よ、譬へば、蜜瓶を四衢の道に置きて而も是の言を作す、若し人能く一毛頭ばかりも食ふ者は、常に老死せずと。爾時に諸天世人各〻刀杖を以て是の瓶を衞護す。時に衞護するもの各〻是の言を作す。若し或は人ありて一毛頭ばかりも食ふ者は、我等當さに剎すべし。

舍利弗よ、中に一人ありて竊に是の念を作せり。是の瓶中の蜜、一毛頭ばかりも食はゞ則ち老死せず。我今何ぞ死を惜んで噉はざる、若し噉ふことを得已れば、則ち諸の衞護者を畏れず、亦常に老病死なきを得べきなり、と。是の如く心を定めて壽命を惜しまず。直ちに瓶の所に詣る。諸の衞護者各〻刀杖を持して競ふて之れを殺さんと欲す。舍利弗よ、是の人若し能く刀杖未だ及ばざるに、一渧だも食はゞ則ち衰患を免れ、復老死なきが如し。

是の如く舍利弗よ。多く惡人、魔及び魔民ありて我が法を滅せんと欲す。如來の滅後若し人ありて、能く空法に隨順して無疑に通達し、則ち諸法に於て心無所得にして上忍を成就せん。爾時に惡人の爲めに輕んぜられ、其の道を沮壞せらるゝと雖も、是の人若し能く身命を惜しまずして勤行精進せば、諸法の[21]無生無作に通達し、則ち生老病死を度脫することを得ん。舍利弗よ、蜜瓶は是れ

【一七】無所得。一九一頁參照。
【一八】天王。天衆に王たるを云ふ。四天王には東、南、西、北、の四天王ありて日月、諸星を臣僚とし、忉利天には帝釋天これが王となりて三十三天の天衆を領し、兜率天には釋迦牟尼の降生前之が天王となりしが如き欲界に於て色界、初禪天王に在りて、尸棄大梵天王となり、梵輔、梵衆の諸天を領する。
【一九】阿耨多羅三藐三菩提。一八四頁參照。
【二〇】婆羅門。二〇八頁參照。
【二一】衆生。無作。一八四頁參照。

第一義の法なり。諸天世人の瓶を衞護せる者は則ち是れ惡人にして、魔事を行ずることを樂しみ自ら大利を失ひ、亦他人の實相を行ずる者を遮して大利を失はしむるなり。

舍利弗よ、增上慢者は皆これ魔の黨にして魔事を助成し、皆共に無生滅の法を譏訶するなり。又舍利弗よ、不淨說者は我見・人見・衆生見・五陰・十二入・十八界見にして、未だ得ざるを得たりと謂ひ、心に道を得たりと計し、涅槃を得たりと計する者も、咸な亦、是の如きの正法を譏訶するなり。何を以ての故に、是の人空に貪著するが故なり。亦是れ魔衆にして、魔に迷惑せられて我が正法を以て而も魔事となす。舍利弗よ、若しは在家、出家にして、是の無我・無人・無衆生の畢竟空の法を聞きて驚疑して畏るゝ者は、當さに知るべし、是の人は魔の敎化を受けたるものなりと。是の像比丘を是れ盜法の惡威儀者と爲す。舍利弗よ、是の人は則ち是れ我見・衆生見・有見・無見・常見・斷見にして、皆是れ魔の民にして佛の弟子に非ざるなり。何を以ての故に、我れ經中に說けり。一切世間皆空にして、我無く我所なく、人も無く衆生もなく、常もなく定もなく不壞の法もなし、と。是の如きの惡人は、亦復皆共に是の經を讀誦して他人の爲めに說きては、而も心・我見・人見に貪著せん、是くの如きの癡人を名づけて苦因を造作するものと爲す。名づけて兩端を反覆するものと爲す。名づけて鬪亂して僧を破するものと爲す。名づけて道法を汚染するものと爲す、名づけて沙門中の濁と爲す。名づけて醜陋にして穢惡なるものとなす。名づけて但だ言說あるものと爲す。名づけて假僞の沙門と爲す。名づけて沙門中の貧なるものと爲す。名づけて重擔を擔ふものとなす。名づけて諸佛を欺誑するものと爲す。名づけて逆罪を得るものと爲すなり。

舍利弗よ、是人を名づけて大惡逆賊となし、名づけて惡知識と爲し、名づけて破戒となし、名づけて邪見となし、名づけて外道となし、名づけて無實行となし、名づけて惡伴となし、名づけて殺鬼となし、名づけて癩瘡となし、名づけて臭穢となし、名づけて燒熱となし、名づけて諂曲と爲し、

名づけて墮在黑闇と爲し、名づけて入獨榛林となし、名づけて墮生死流となし、名づけて互出惡者となし、名づけて地獄となし、名づけて畜生となし、名づけて餓鬼と爲し、名づけて阿修羅となし、名づけて不入道者となし、名づけて欺誑人者となし、名づけて自讚己者となし、名づけて行占相者となし、名づけて大聲喚呼となし、名づけて因利求利となし、名づけて汚染他家となし、名づけて常調戲者となし、名づけて散亂心者となし、名づけて貪所害者となし、名づけて瞋所害者となし、名づけて癡所害者となし、名づけて好面欺者となし、名づけて褒懷處者となし、名づけて無解脫者となし、名づけて憂惱縛者となし、名づけて非沙門、形像の沙門、沙門の[三二]旋陀羅、沙門の臭穢、沙門の糟粕と名づけ、名づけて難滿となし、名づけて難養となし、名づけて壞威儀者となし、名づけて無羞恥者となし、名づけて截斷頭者となし、名づけて身體壞者となし、名づけて袈裟繫頭となし、名づけて自入闇冥者となし、名づけて多貪欲者となし、名づけて多瞋恚者となし、名づけて多愚癡者となし、名づけて五蓋纏覆となし、名づけて沒者となし、名づけて虛者空者となし、名づけて癡者となすなり。

舍利弗よ、云何なるをか空と名づくるや。諸佛讃善人の相を退失す。故に名づけて空となす。一切の沙門の功德、沙門の事法を退失す。故に名づけて空となす。云何なるをか虛となすや、聖法の外に在るが故に名づけて虛となす。空・無相・無願の法を遠離するが故に名づけて虛となすなり。

舍利弗よ、是の如きの惡人は能く魔をして喜ばしむ。虛妄の法に貪著し堅く執するが故に。同じく凡夫に於ても備足して罪惡ある人の相を具へ、[三三]法忍を得たる者に似ず。沙門の事法も沙門の功德も、百千萬分の尙其の一もなし。舍利弗よ、是の故に名づけて空者虛者となすなり。但だ深く世間の利樂に貪著す。是れ沙門に非ずして自ら沙門と稱するなり。應さに供養を受くべからざるに而も供養を受く。名づけて常賊、立幢相賊となし、名づけて自在殺害人賊と爲す。是の人の食ふ所は一

【三二】旋陀羅。二〇二頁參照。

【三三】法忍、忍辱(Kṣānti)の一つなり、忍辱とは六波羅蜜、十波羅蜜の一他の屈辱を忍耐することなり。梵語羼提の譯。又安忍、忍と翻ず。忍辱に二種あり一に生忍、二に法忍なり菩薩生忍を行ずれば無量の福德を得、法忍を行ずれば無量の智慧を得と云ふ。

口も皆清淨ならず。唯だ道に向ふものと[二四]道果を得たる者とのみありて能く供養を消さん、是の人これなし。是の故に名づけて不淨食者となす。舍利弗よ　是の故に名づけて空者虛者と僞すなり。

意に於て云何ぞや、若し人、殺生・偸盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪嫉・瞋恚・邪見ならんに、是の人を是れ常に殺生するとせんや、いなや、常に奪命せるとせんや、いなや。いななり世尊よ。在家の殺生は常には奪命せず、殺生する時は少なく、殺生せざる時は多し。舍利弗よ、意に於て云何ぞや。若し人偸盜せんに、偸盜する時多きや、盜まざる時多きや。

世尊よ、盜まざる時多し。

舍利弗よ、意に於て云何ぞや、若し人邪婬ならんに邪婬の時多きや、邪婬せざる時多きや。

世尊よ、邪婬せざる時多し。

妄語・惡口・兩舌・綺語・貪嫉・瞋恚の時多きや、瞋恚せざる時多きや、

世尊よ、瞋恚せざる時多し。

舍利弗よ、是の十不善道の中何ものか罪重きや、

世尊よ、十不善の中にては、邪見の罪重し。何を以ての故に。世尊よ、邪見は垢にして常に心に著し、心をして清淨ならしめざればなり。

舍利弗よ、我今汝に告げん。若し人一日に百千萬億の衆生を殺し、一日に百千萬億の金銀寶物を偸盜し、邪婬しては晝夜息めず、妄語しては常に人を欺誑し、口業の不淨なること一として實語なく、兩舌しては常に和合を破り亦破る者を助く。惡口にして口常に惡逆にして乃至柔軟なる一語をも說かず。綺語しては根本あるなし、人此の事を問へば餘の無量の語言を以て干亂す。貪嫉しては他の物の中に於て非法の心を生ず。瞋恚しては因緣あることなくして、橫ざまに瞋恚を起し恨を滿心に懷く。邪見しては非道を行ずる事を樂しむ。舍利弗よ、意に於て云何ぞや。若し人是の如きの

【二四】道果。二一〇頁參照。

不善の法を成就せば、罪多しとせんや、いなや。

甚だ多し、世尊よ。

舍利弗よ、我今汝に告げん。若し人百歳も是の如きの十不善の罪を成就せんに、破戒の比丘、一日一夜も他の供養を受くれば、罪彼よりも多し。何を以ての故に、是の殺生者は、多くの人の知る所、多くの人に識られて人の惡み賤しむ所なり。人皆是の殺奪命者なるを知る。罪人穢濁にして是れ汚染なるもの、不善無徳にして人の離るゝ所の者なり。又舍利弗よ、殺生の人多く他の命を奪ふとも或は厭心を生じ自ら是ならざるを知りて當さに罪報を得べし。人皆惡無戒穢濁なるを知れば、此の人に於ては功徳を望まざる所なり。乃至毛を折りて百分の一をだもせんや。況んや福田と謂ひて之れを供養せんや。

又舍利弗よ、是の殺生の人の其の家の妻子は、人皆な知悉し共に恭敬せず。尙ほ坐せしめず、何況んや供養をや。殺生の人は財を以て自活し、妻子を養育す。或は時に沙門婆羅門を供養す。此の業の報を以て賢聖に遇ふことを得。比丘・比丘尼、爲めに道法を說き、敎へて殺生を離れその殺生を捨てしむ。佛法の中に於て出家することを得て障礙あることなし。出家を得已て善知識に近づき沙門果を得、是の人現世に罪報を受くること輕く、聖道を障へずして[二五]三塗を免がることを得ん。

舍利弗よ、我が法の中に於て諸の比丘あり、是れ沙門に非らずして自ら沙門なりと云ひ、是れ梵行に非ざるに自ら梵行なりと言ひ、諸の善根を斷じて、入涅槃を障へ、迷惑して道を失ひ、道の因果を破し、諸の善法を破し、外道の事を行じて惡道に入りては諸の惡賊多からん。空しく生じて命を受くるも猶ほ死人のごとし。形色毀悴して正威儀を失ふ。我が法の中に於ては名づけて汚染と爲す。名づけて法賊と爲す。名づけて逆人と爲す。名づけて魔使と爲す。猶ほ行厠の如く亦死狗の如し。像沙門の如く沙門の服を同じうして沙門の事なし。

【二五】三塗。一、火塗（地獄）、二、血塗（畜生）、三、刀塗（餓鬼）の稱。

舍利弗よ、譬へば、野干の師子の群に在るが如く、亦黃門の[二六]轉輪聖王衆の中に在るが如し。亦獼猴の諸天に在るが如く、亦復驢の象王衆に在るが如し。亦盲人の天眼衆に在るが如く、亦蝙蝠の金翅鳥衆に在るが如し。

舍利弗よ、破戒の比丘にして我が衆中に在らば百千萬億諸の天の大衆は、此の比丘の衆に在りて坐せるを見て、皆大に憂惱して是の言を作さん。是の如きの惡人何ぞ布薩を用ひん、是れ魔の黨類にして無上の佛道と聞きて、白衣に向つて說かんと欲する者なりと。復佛法を信樂する諸[二七]龍鬼神等ありて高聲に大いに喚ぶ。是の惡比丘、何故に此に於て其の身生陰藏あるや、惡馬の調善馬の中に在るが如きに似たりと。是の如きの癡人自ら謂らく、我が惡を見知するものあるなし、自ら此に藏れて天下を欺誑せんと。是を一切天人中の賊と爲す。衆共に見已りて更に大に笑はん。

舍利弗よ、是の如きの罪惡の比丘を、是を諸天の所知の惡賊と爲す。白衣には異ることなく供養を受け、迎送禮拜合掌恭敬せらる。弊人愚癡にして猶ほ死屍の如し。著する所の衣服は皆これ偷得したるもの、鉢中の所食は皆これ盜取したるもの、人の與ふるものなければなり。乃至少しばかりの水も亦これ盜みて得たるものなり。

舍利弗よ、破戒の比丘の至る所の方は、若しは東方、南西北方に至るも皆これ地を偷みて行くなり、何を以ての故に、是の人の所有の威儀行法も、皆これ偷盜假竊の所作にして、行立坐臥・來去視瞻・屈申俯仰・著衣持鉢、今但だ略して[二八]身口意の業を說けり。所有の施作皆これ偷盜なり。若しこの人の髮を剃ることあるも賊髮を剃ると爲さん、要を擧げて之れを云はゞ、破戒の比丘施作する所あらんも皆これ賊作なるなり。

舍利弗よ、弊惡の比丘は、乃至大小の便利澡手まで皆これ賊法なり。何を以ての故に、舍利弗よ、閻浮提の內は皆これ國土及び諸の大臣、人民の所有と非人に屬するなり。是の惡比丘、中に於て賊

【二六】轉輪聖王。二三六頁參照。

【二七】龍。一九七頁參照。

【二八】身口意業。身業(Kāya)口業(vāc)意業(cetas)身業とは、身所作の業。口業とは口所說の義。意業とは意所起の業。

を爲せばなり。

舍利弗よ、若しは王、大臣も惡賊の所に於て功德を望まず。我に等しと云はず。我に勝ると言はず。破戒の比丘聖法の服を著すれば、是の人の所に於て功德を得んことを望み。是の故に聽して國土に止住せしむ。若し其の惡なるを知らば、乃至地に唾して亦復聽さゞるべし。是の故に舍利弗よ、弊惡の比丘の勤身、所作は皆これ賊作なり。名づけて常賊・大賊・立幢賊と爲す。打ちて一切世間の人を害するものなり。何を以ての故に、惡として作さゞるなきが故なり。是の故に舍利弗よ、是の惡比丘を諸の一切天人世間に於て是れ大賊なりと爲す。舍利弗よ、若し人ありて、これ一切天人世間の大賊なりとせば、是の人能く一の飲水をも消すや、いなや。

いななり、世尊よ。舍利弗よ、意に於て云何ぞや。是の人は是れ大惡人に非ずや。是の如し、世尊よ。舍利弗よ、破戒の比丘は、諸の一切天人世間に於て大惡罪あり。是の義を以ての故に、我この偈を說かん。

寧ろ燒石を噉らひ　洋銅を呑飮まんよりは、無戒を以て人の信施を食はざれ、と。

舍利弗よ、是の破戒の比丘は、無色無德にしてまた志願なし。身心熱毒にして惡聲を喜見し、獨處を樂はず。或は時に獨處し、或は時に獨行せんも、身則ち戰き懼れ、淨戒なる者を見ては僻藏し避回し、心怯え、自ら愧ぢ、見んことを喜欲せず。供養を受くる時も驚疑怖畏し、心常に馳騁して諸の想念多し。深く財利を貪り、美食を愛樂す。是の如きの比丘は、命終の後必ずや地獄に入らん。舍利弗よ、是れを破戒の比丘の七憂惱の箭と名づく。必ずや地獄に入らん。

復次に舍利弗よ、破戒の比丘は衆閙に在るを樂しみ、散亂にして多く語り、性嫉妬を好む。破戒のものと共に以て親友となる。常に論說破戒惡事を樂しみ、以て喜樂と爲して羞耻を知らず。深經に違逆して、心疑ひて信ぜず。或は時に是の如き等の經を聞かんも、疑逆諍競して聽受する

ことを樂はず。東西に顧望して心專一ならず。手を以て口を掩ひ、虛空を仰視し、坐より起ちては佛法の敎を謗り、瞋恨の心を懷きて說法する者を罵らん。是の如き等の過惡の因緣を以て、命終の後には深く地獄に入らん。舍利弗よ、是を破戒の比丘の八憂惱の箭と名づく。必ずや地獄に墮せん。

復次に舍利弗よ、破戒の比丘は、但だ樂しみて[二九]和上阿闍梨を尊重して其の功德を讃し、以て名利を求め、持戒者と稱し、因て以て自活し執事し便附す。宜しきに隨つて善巧し、羞恥あるなきこと尙ほ黑鳥の如し。僧の因緣を爲して多く衣服を求む。飮食口に恣にして自力肥盛し、慚愧を知らず、言に次第なし。手脚麁燥し、顏色毀悴せん、婦女を視んことを樂ひ男子に近よらず。是の如きの惡人は衆の輕賤する所なり。天龍鬼神も稱讃せず。乃至諸佛も亦歎說したまはず。心性急促にして常に瞋恚を好み、衆僧と事を斷じ、爲めに勢力を恃つ。舍利弗よ、是の如きの破戒の比丘は、多僧中に於て威勢あることを求め、未だ問はざるに答へて常に他の過を求む。淨戒者を見ては是れ欺誑なりと謂ひ、求道を勤むる者とは其の法に同ぜず。別異を喜樂し、諍ふ者をば助け喜ぶ。舍利弗よ、是れを破戒の比丘の九憂惱の箭と名づく。必ずや地獄に墮せん。

復次に舍利弗よ、破戒の比丘は他事を好樂し、その理に任事す。鬪諍する者あれば以て喜樂と爲す。衣服を以て身を嚴り、他の威儀を學ぶ。好臥具を求め利養し身を安んじ、人に稱讃せらるゝを樂ぶ。檀越を護り惜み、及た住處を悋む。好き比丘の來りて我が過を見んことを恐る。持戒者を憎みて破戒に親附す。常に布施することを讃して持戒・忍辱・[三〇]精進・禪定・智慧を讃せず。寂滅遠離獨處を讃せず。常に好みて持戒者の過を譏論す。亦頭陀を行ずる者を稱讃せずして、或は指して其の事を說き、或は惡口して橫に加へ、或は憶想妄說す。種々に依怙して數々親族を問ひ、少因緣を以て貪の爲めに說法し、常に曲心を以て驚疑を懷き、衆に憎惡せられて久しくして益々賤なり。持戒者

【二九】和上阿闍梨。二三四頁參照。

【三〇】精進。又勤と云ふ。小乘七十五法中大善地法の一なり勇猛に善法を修し惡法を斷ずる心の心作用。禪定。二三四頁參照。

に於ては常に好んで讃說し、苦切の實語者には親近することを欲せず。意に是の如き等の經を聞くことを喜ばず。是の如きの經を好く持し讀誦する者、是の經を說くを聞きて心に歡喜する者も亦見ることを喜ばず。又持戒の法を讃するを聞くことを喜ばず。是等の經を說けども來りて聽受せず。設來りて聽受するも久しからずして卽ち還らん。多く白衣と知識を作し、常に持戒の比丘とを論說することを樂しむ。自在を得るを以て輕行暴惡なり。舍利弗よ、是を破戒の比丘の十憂惱の箭と名づく、必ずや惡道に墮せん、舍利弗よ、我が滅度の後、是の如き等の人閻浮提に滿ち專ら利を求むることを行じて以て自ら生活せん。

淨法品　第六

佛、舍利弗に告げたまはく、昔[一]迦葉佛我に豫記して言はく、釋迦牟尼佛、多く供養を受くるが故に、法當さに疾く滅すべしと。舍利弗よ、我が法は實に多供養を以ての故に後に當さに疾く滅すべし。舍利弗よ、譬へば貧人の大寶藏を得て心則ち大いに樂しむが如し。是の如く舍利弗よ、未來世の中に多くの比丘ありて、白衣に親近してその供養を受け、漸く相ひ狎習て與に事を執る。心便ち歡喜し以て悅樂なりと爲す。なほ貧人の大寶藏を得るが猶し。是の如きの癡人は世利世樂奴僕を貴ぶ。若し此の、多くの人に供養せられんを見ては心に便はち之れ阿羅漢を得たりと謂ひ、少知識を見ては便はち惡人なりと謂ふ。是の如きの比丘は利養の爲めの故に、上佛道を捨て、樂しむ所のものに隨ひ卽ち其の事を成ぜん。

舍利弗よ、如來は今に於て、是の癡人の爲に是の如き等の經を說く。何を以ての故に、破戒の比丘は是の經說を聞いて則はち悔心を生じ、當さに持戒に還り、大賊となりて他の供養を受けざるべし。

【一】迦葉佛。迦葉波。迦攝波。梵音カーシユヤパ(Kāsyapa)飮光と譯す。釋尊に授記し玉ひし過去佛として有名なり。

舍利弗よ、若し比丘ありて見の經を聞くことを得て心清淨ならず、喜ばず、樂しまざれば、是れ則ち名づけて弊惡の比丘と爲さん。何を以ての故に、舍利弗よ、淨戒の比丘は法として樂しまざることなければなり。若しは布施を說き、若しは持戒を說き、若しは忍忍を說き、若しは精進を說き、若しは[二]禪定を說き、若しは知慧を說き、若しは是の如き厭畏の經法を說かんに心皆喜樂せん。

舍利弗よ、三種の人ありて是の經を說くを聞いて心則はち憂惱せん。何等をか三と爲す。一には破戒の比丘、二には[三]憎上慢の人、三には不淨說法なり。復三種の人ありて是の如きの經を聞いて心則は憂惱せん。何等をか三と爲す。一には[四]人見、二には[五]命見、三には[六]我見なり。

舍利弗よ、我今明了に汝に告げん。好き善知識の如く慈愍の心を以て人の爲めに利を求め、樂を求め、安隱を求めよ。汝等一心に我が法を聽受して、常に善利を求め心放逸なること勿れ。

舍利弗よ、不淨說法者に五の過失あり。何等をか吾と爲す。一には自ら盡く佛法を知れりと云ひ、二には佛經を說かん時、諸經の中に出づると相違する過失、三には諸法の中に於て心疑ひて信ぜず、四には自ら知れる所を以て他の經法に非ずとす。五には利養の爲の故に人のために說法するなり。舍利弗よ、是の如く說く者は、我此の人は當さに地獄に墮して涅槃に至らざるべしと說かん。

復次に舍利弗よ、說法の比丘處(あり)て大衆に在り。法を信樂するもの丶爲に高座を敷く。佛の正法を捨て、外道を說き、文辭を嚴飾す。我久しく勤苦して是の法寶を求めしに、而も此の惡人は捨置して說かず。但だ經中相違の語義を以て、互に相ひ是非して正法に順ぜず。聖法の中に於て高心自大なり。意に隨つて說いて利養を求めんが爲にす。舍利弗よ、若し比丘、法を說きて外道の義を雜へんに、善き比丘の勸めて道を求むる者あらば、應さに坐より去るべし。何を以ての故に、舍利弗よ、有信の[七]白衣高座を敷置せば、應さに外道の語義を演說すべからざればなり。若し去らざれば善き比丘にあらず。亦復、佛敎に隨ふ者と名づけず。舍利弗よ、法を說くことは甚だ難し、と是の如く說

【二】禪定。二三四頁參照。
【三】憎上慢。
【四】人見。｝二三二頁參照。
【五】命見。
【六】我見。二二六頁參照。
【七】白衣。二〇一頁參照。

く者は、われ此の人を說いて名づけて外道・[八]尼犍の弟子と爲さん。佛弟子に非ず。是の說法者命終の後、當さに尼犍子道に生ずべし。何等か是れ尼犍子道なる。邪見は是れ尼犍子道なり。何等をか邪見と爲す。謂く是れ地獄・畜生・餓畜なり。何を以ての故に、舍利弗よ、身未だ法を證せずして而も高座に在らば、身自ら知らずして人に敎ふる者なり、必ずや地獄に墮せん。

舍利弗よ、是の如きの因緣を如來は悉く知れり。我が諸の弟子は種々の門、種々の因緣、種々の諸見を以て我が正法を滅せん。

舍利弗よ、若し衆生ありて、是の如きの經[九]第一義空・無所有の法を聞いて心に歡喜するものあらば、當さに知るべし是の人は眞に我が弟子なり、と。

舍利弗よ、過去世に五百の盲人ありて道路を行けり。一大城に到り飢渴して乏しきこと極まる。一の盲人をして外に在りて物を守らしめ餘は城に入りて飲食を求む。未だ之れ久しうせざる間、一の誑人ありて物を守れる者の所に至り語りて言へり。咄なる人かな。何を以て獨り住せるや。答へて言く、我に多くの伴ありて城に入りて食を乞へはなり。誑人語りて言へり、汝知れりや、いなや、彼の間大いに衣食瓔珞花香雜物を施し、意に隨つて得べきことを。汝若し須むれば汝を將いて彼に詣らんと。答へて言はく、可なり、と。誑人盲を將いて少しく本處を離れ盡く其の物を奪ふ。諸盲乞食し得已りて還る。誑人復諸の盲人に語りて言へり。汝等大會施に値ふことを得たりや、いなや、答へて言へり、値はざるなり、と。誑人語りて言はく、汝得る所を此に置くべし。我汝等を將いて大施會に詣らんと。諸盲盡く共に物を一處に留め、誑人に隨つて去れり。誑人盡く五百の盲人を將いて大深坑に臨み之れに語りて言く、此の地平好にして大施會あり、汝等各面を廻らして東行し他の施物を受くべし、と。即ち一時に坑に墮して死せり。

舍利弗よ、當來の比丘好みて外經を讀み、說法の時に當りては文辭を莊校し衆をして歡樂せしむ

【八】尼犍。尼犍子又は尼犍弗怛羅、尼犍陀子等と云ふ梵音ニルグラントハプトラ(Nirgranthaputra)離繫子無慚子と譯し外道の一派也苦行を以て涅槃に入るの勝因となし常に髮を拔き、衣服を著けず形を露し貯畜する所なく手を以て食を乞ひ得るに隨つて食ふ。佛徒稱して露形外道と云へり。

【九】第一義空(Paramārtha-śūnyatā)。十八空の一。涅槃は最勝の妙義なれば第一義と云ひ、凡情の有をはなれたれば空と云ふ。

悪魔爾時に衆人を助け惑はし善法を障礙せん。若しは音聲語言に貪著し文辭を巧飾するものあり。若しは復人の好みて外道の經を讀む者あらば、魔皆迷惑して心をして安隱ならしめ、若し比丘の佛法を修する者あらば疑惑を生ぜしめ、咸衆人をして復供養せざらしむ。或は比丘ありて若しは二若しは三、已に佛經を讀めば、便はち外道の經法を求めしめ、先きに看るものよりは讃して善好なりと云ふ。是の諸人等魔の爲めに惑はされ慧眼を覆障せられ、深く利養を貪りて、諸の外書を看る。猶群盲の誑の爲めに欺かれて皆深坑に墮して死せしめらるゝが如し。

舍利弗よ、諸の生盲の人は卽ち是れ比丘の、佛の無上道を捨てゝ外道の經書を求むるなり。誑人は是れ悪魔なり。深坑は是れ邪道なり。

舍利弗よ、群盲人の所得の物を捨てゝ大施に詣らんと欲して而も深坑に墮せるが如く、我が諸の弟子も亦復是の如し。麁衣食を捨てゝ大施を逐ひ好き供養を求む。世利を以ての故に大智慧を失ひ、而も深坑の〔一〇〕阿鼻地獄に墮す。

復次に舍利弗よ、不淨説法者は如來の隨宜の意趣を知らず。自ら善く解せずして而も人の爲めに説く。是の人現世に五の過失を得。餘の人は知らず。唯天眼を得たる比丘と及び諸天とのみ知る所なり。何等をか五と爲す。一には説法の時心に怖畏を懷き人の我を難ぜんことを恐る。二には內に憂怖を懷きて而も外には他の爲に説く。三には是れ凡夫にして眞智あることなし。四には説く所不淨にして但だ言辭あるのみ。五には言に次第なくして處々抄撮す。是の故に衆に在りて心恐怖を懷く。是の如きの凡夫に智慧あることなく心に決定なし。但だ憍慢微小の因緣を以て名聞を求む。疑悔心に在りて人の爲に説く。是の人長夜に自ら〔一一〕貪欲・〔一二〕瞋恚・〔一三〕愚癡の毒箭を受けん。何を以ての故に、舍利弗よ、是の人定んで諸法を知ること能はずして而も他の爲めに説き、心喜樂せず、若し樂むとも速かに失はん。舍利弗よ、我、不淨法に此の過咎ありて正道を得ざることを知れり。是の

〔一〇〕阿鼻地獄。二二九頁參照。

〔一一〕貪欲。〔一二〕瞋恚。〔一三〕愚癡。一九〇頁參照。

事を一切比丘は知らず。諸天も知らず。唯た我のみ知れるなり。

復(また)不淨說法の比丘ありて如來隨宜の所說を解せず、而も他人の爲に說く。諸經の中の無我・無人・無衆生・無壽命を而も此の人自ら論辭を以て說いて言はく、有我・[14]有人・有衆生・有壽命なりと。卽ち佛を謗り法を謗り僧を謗るなり。三寶を謗る罪は諸天世人の知り能はざる所にして、唯佛のみ知れり。舍利弗よ、是の人をも亦不淨說法と名づくるなり。我其の過を知れり。諸の神通者及び諸天衆も皆知ること能はず。唯佛のみ知れり。我今汝のために譬喩して解說せん。

若し人佛道の[15]義相を知らずして、而も他人の爲に不淨說法せば、この人幾(いくは)くの不善事を成就するや。舍利弗よ、意に於て云何ぞや。閻浮提の衆生寧ろ多しとせんや、いなや、甚だ多し世尊よ。舍利弗よ、若し惡人ありて盡く其の命を奪はんに、是の人罪を得ること寧ろ多しとせんや、いなや。甚だ多し、世尊よ。是の如く癡人、佛道を知らずして、而も他人の爲に不淨說法せば、罪これよりも多し。何を以ての故に、是の人の不淨說法は無上の佛道を破し、亦過去と未來と今の佛とを謗ればなり。何を以ての故に、舍利弗よ、若し過去に諸佛ありとも、一切法は皆畢竟空にして、我無く、人無く、衆生なく、壽者なく、命者なしと說き、舍利弗よ、未來の諸佛も一切法は皆畢竟空にして我なく、人なく、衆生なく、壽者なく、命者なしと說かん。舍利弗よ、今現在の十方恒河沙世界の諸佛も、一切法は畢竟空にして、我なく人なく、衆生なく、壽者なく、命者もなしと說くなり。舍利弗よ、是れを諸佛の無上の法と名づく。謂く一切法は體性あることなく、無所得の空なり。本性寂滅にして生もなく滅なく、性相あることなく自相皆空なり。如來はたゞ諸の憶想分別を斷ぜんが爲の故に說く。而も諸佛の菩提は分別あることなきなり。

舍利弗よ、何等をか分別と爲すや。謂く分別とは、[16]我見・[17]人見・[18]衆生見・[19]壽見・[20]命見・[21]斷見・[22]常見なり。凡夫は是の諸の分別を成就せり。若し人にして是の如きの分別あることなくんば、

【一四】有人。ある人と云ふ如し。

【一五】義相。義理と相伏。

【一六】我見、五蘊の假に和合せる心身をさして常一の義なりと見るを云ふ又身見とも云ふ。

【一七―二二】人見等。二三二頁參照。

能く悉く一切法の空にして我なく、人なく、衆生なく、壽者なく、命者なきことを了知せん。是の故く念ずる時心歡喜を得べし。[二三]第一義空を聞きて驚かず畏れず、是の人則ち五陰の虛妄にして眞實あるなきを知り、十二入、十八界の虛妄にして眞實あるなきを知る。是の人も亦涅槃を分別せずして涅槃を念ぜず。我能く涅槃を念ずとも云はず、法の寂滅を得て分別せざるを以て、是の法の寂滅せる處もまた分別せず。亦また得ざるなり。舍利弗よ、是を順忍と名づく。是の人是の[二四]順忍第一義の中に於ても亦自相を得ず。舍利弗よ、何等か是れ順忍の相なる。所謂無相是れ順忍の相なり。舍利弗よ、意に於て云何ぞや。若し人此の順忍に於て尙ほ相を得ずとせば、是の人若し我相・人相衆生相・壽相・命相を得んや。是の處あることなし。若し人、是の如きの知慧を成就せば、應さに供養を受くべく、是を佛子と名づけ、是を不住定に入ると名づく。舍利弗よ、是を佛法の第一義門にと名づく。謂く憶想分別なく此もなく彼もなし。而も是の癡人、大衆の中に在りて邪見を說き、自ら憶想を以て分別して人に敎へ、これは是れ佛法、これは是れ聖道なり、と。是の如きの癡人を、則ち過去未來現在の諸佛を誹謗すと爲す。是の如き癡人を[二五]惡知識と名づけ、[二六]善知識とは名づけず。舍利弗よ、怨みて命を奪ふと雖も但だ一身を失ふのみなり。是の如きの癡人の不淨說法は、千萬億劫に諸の衆生の爲に大衰惱を作す。是の人の癡冥は佛菩提の本心を覆ひ、貪著還復熾盛にして相續不斷ならん。貪著を以ての故に五道に往來す。善を還路なくして生死斷ぜず。是の故に舍利弗よ、不淨說法者の罪を得ること極めて多し。亦衆生の爲に惡知識と作り、亦過去と未來と今の佛を謗る。舍利弗よ、此を閻浮提の衆生に置けば、人の悉く三千大千世界の衆生の命を奪ふが若し。不淨說法者の罪は此れよりも多し。何を以ての故に、是の人皆諸佛の[二七]阿耨多羅三藐三菩提を破し爲に魔事を助く。亦衆生をして百千萬世に於て諸の衰惱を受けしめ、但だ能く縛を作して解せしむること能はず。當さに知るべし是の人を諸の衆生に於て惡知識と爲すことを。是を大衆の中に於て妄

【二三】 第一義空。二二四頁參照。

【二四】 順忍。五忍の一即ち菩薩進趣の位次。伏忍、信忍、順忍無生忍、寂滅忍等を五忍と云ふ。忍とは、忍可安忍の義にして智、理を忍可し安忍する程度の差別に於て建立したるものなり。順忍とは、信忍より更に進んで勝慧を起し無生に順じて觀じ未だ正しく無生忍を得ざるが故に順忍といふ。

【二五】 惡知識。人に知られたる惡人、惡き師友。

【二六】 善知識。二二九頁參照。

【二七】 阿耨多羅三藐三菩提。一八四頁參照。

語して諸佛を誹毀すと爲す。是の因緣を以て大地獄に墮せん。多くの衆生に教ゆるに邪見の事を以てす。是の故に名づけて惡邪見者とせん。舍利弗よ　我見・人見・衆生見は多く邪見に墮す。見を斷滅する者は多く疾く道を得ん。何を以ての故に、是れ捨し易きが故なり。是の故に當さに知るべし。是の人寧ろ自ら利刀を以て舌を割かんよりは、應さに衆中に於て不淨說法せざれ。

往古品　第七

佛、舍利弗に告げたまはく、過去久遠無量無邊不可思議阿僧祇劫に、爾時に佛有り。大莊嚴　如來[一]・應供[二]・正遍知[三]・明行足[四]・善逝[五]・世間解[六]・無上士[七]・調御丈夫[八]・天人師[九]・佛[一〇]・世尊[一一]と號す。其の佛の壽命六十八百萬億歲にして六十八百萬億の大弟子衆あり。其の佛の滅後　舍利の流布すること、我が滅後の如く異りあることなし。其の佛の滅後の大弟子衆、中に於て一日に百の比丘涅槃に入る者、二百、三百、四百、五百の涅槃に入る者あり。一日の中に或は十萬億の比丘の涅槃に入る者あり。是の如く展轉して、其の佛の所有多知多識の大神通衆三月の中に皆涅槃に入れり。舍利弗よ、大莊嚴佛の正法流布して多く諸の天人の共に供養する所なり。舍利弗よ、大莊嚴佛及び大弟子の滅度の後、漸くはして多くの人ありて沙門の法の安隱快樂なるを知りて出家學道す。而も佛の演說する所の甚深の諸經の等なき空義を知ること能はず。多くは惡魔の爲に迷惑せられ、時に說法せば心決定せず、說も淸淨ならず。我人、衆生、壽命ありと說きて一切諸法の空寂なるを說かず。其の佛の滅後して百歲の後に諸の弟子衆分れて五部となる。一を普事子と名づけ、二を苦岸と名づけ、三を薩和多と名づけ、四を將去と名づけ、五を跋難陀と名づく。舍利弗よ、此の普事比丘・苦岸比丘、薩和多比丘・將去比丘・跋難陀比丘の是の五比丘を大衆師と爲す。其の普事は、佛の所說の眞實の空の義無所得の法を知る。餘の四比丘は、皆邪道に隨ひ、多く有我を說き、多く有人を說く。舍利弗よ、普事

【一】如來。一八六頁參照。
【二―一一】應供等二三八頁參照。

比丘は四部のために輕ぜられ勢力あること無し、多くの人に惡み賤しめらる。四の惡比丘は多人衆に教ふるに邪見の道を以てす。佛法の中に於て相恭敬せず、相違逆する故に佛法を滅す。舍利弗よ、若し人ありて、普事比丘の所說の空の法を知りて信受して逆はずんば、我知る此の人曾て先世に於て五千の佛を供養し、六十八億那由他の人ありて已に涅槃に入れることを。何を以ての故に、舍利弗よ、此の人過去世に諸佛の所に於て諸の善根を種えたり。無所得空の法を修習し應に涅槃に入る可し。

舍利弗よ、是の苦岸比丘・一切有比丘・將去比丘・跋難陀比丘は皆有所得を計し、我人衆生壽命ありと說き徒衆熾盛なり。是の四惡人は多く在家出家をして邪見に住せしめ、第一義無所有畢竟空の法を捨てしめ。外道[一二]尼犍子の論に貪著す。舍利弗よ、是の四惡人の所有在家出家の弟子常に相隨逐し乃ち法盡くるに至る。舍利弗よ、是の中に人ありて、法事に非らざるを知れども受けて以て法となし、心を勸めて之れを行ずるとも尙ほ順忍を得ず況んや[一三]須陀洹果を得んや、是の人尙ほ供養事を消すことを作さず。何況んや能く順忍を生ぜんや。舍利弗よ、爾の時に在家出家の弟子、多く惡道に墮して善道に至らず、是の諸の惡人佛の正法を滅す。多くの人に大衰惱事を與ふ。又是の惡人命終の後、[一四]阿鼻地獄に墮し。仰臥すること九百萬億歲、伏臥すること九百萬億歲、左脇に臥すること九百萬億歲、右脇に臥すること九百萬億歲なり、熱鐵の上に於て燒然燋爛せられ是の中に死を退きて更に生ず。炙地獄・大炙地獄・济地獄・黑繩地獄、皆上の如き歲數諸の苦惱を受く。黑繩地獄に於て死し還りて阿鼻大地獄の中に生ず。

舍利弗よ、是の因緣を以て若しは在家出家にして此の人に親近せる、及び[一五]善知識并びに諸の檀越凡そ六百四百萬億の人あり、此の[一六]四師と俱に生じ俱に死す。大地獄に在りて諸の燒煮を受く。

此の如く舍利弗よ、是の人の所有善知識家、諸の[一七]檀越家・弟子諸師・隨順の行者、凡在其の數皆

【一二】尼犍子。二二四頁參照。
【一三】須陀洹果。一九七頁參照。
【一四】阿鼻地獄(Avici)。八熱地獄の第八無間地獄とも云ふ。閻浮提の地下二萬由旬に在りて、此の地獄に墮する有情は苦を受くること間斷なし、長阿含經卷十九に「云何が無間地獄と名くるや、其諸の獄卒罪人を捉つて其皮を剝ぎ足より頂に至る、其皮を以て罪人の身を纏ひ火車輪に著けこれを駕して熱鐵地を輾り、周行往返す身體碎爛皮肉墮落す苦痛辛酸萬毒並び至る餘罪未だ異らずして死せず是の故に無間地獄となすと。
【一五】善知識。博知識の意に非ず。一、正法を說いて人をして佛道に入らしめ解說を得せしむる人高德賢者のこと。二、すべて佛道に緣を結ばしむる人のこと善知識に三種の善知識あり。一、外護の善知識。我をし缺乏怖畏なからしめ安穩に道を修する事を得せしむる事。二、同行の善知識。我と道を同じて互に相切蹉し策發することを得るもの。三、敎授の善知識。聖胥を宣傳して我を訓戒し惡者去り善に赴かしむるもの。
【一六】四師。五比丘の中普事

地獄に生ず。舍利弗よ、汝等は其の多少を知ることを能はず、唯だ如來のみありて乃ち能く之れを知れり。此の惡人とともに大地獄に墮し倶に生じ倶に死せるもの、凡そ六百四萬億の人あり。是の如く展轉して一劫に苦を受け、大劫將に燒けんとす、故に地獄に在り。何を以ての故に、舍利弗よ、諸の如來の阿耨多羅三藐三菩提を破せる其の罪甚だ重くして輕しと爲さず。大劫若し燒けば、是の四惡人及び六百四萬億の人此の阿鼻大地獄より他方に轉生して大地獄に在り。何を以ての故に。

舍利弗よ、重罪足せば、其報少なからず。他方に在りて無數百千萬億[一八]那由陀歲に大苦惱を受け世界に還生す。是の四罪人及び六百四萬億人、并びに及太餘の人の罪未だ畢らざる者、彼の命終に於て此の間の大地獄に還生す。舍利弗よ、是の四罪人及び六百四萬億の衆生、久久にして地獄の苦惱を免れ人中に生ずることを得ると雖も、五百世に於ては生ずるより盲なり。然る後に一切[一九]明佛如來・[二〇]應供・[二一]正遍知・[二二]明行足・[二三]善逝・[二四]世間解・[二五]無上士・[二六]調御丈夫・[二七]天人師・[二八]佛・[二九]世尊に値ふことを得。

舍利弗よ、一切明佛の聲聞の弟子一億那由他なり。爾の時人民の身の長け三百九十六肘、佛身一倍にして常に圓照を光すこと十萬億由旬なり。

舍利弗よ、是の人一切明佛の法の中に於て出家し、十萬億歲勤行精進すること頭然を救ふが如くして順忍を得ず。況んや道果を得んや。何を以ての故に、舍利子よ。阿耨多羅三藐三菩提を破れる罪業因緣を起こせる法應に當に爾るべし。命終の後還阿鼻大地獄の中に生ず。先きに起せる重不善業の因緣を以てなり。舍利子よ、是の諸人等、是の如く展轉し、乃至我今其の中間に於て九十九億の佛に値ふことを得たり。諸の佛所に於て順忍を得ず。何を以ての故に、佛深經を說けども是の人信ぜず。賢聖持戒の比丘を破壞違逆謗毀し、其の過惡を出し法を破る業因緣を起す。法應に當に爾

比丘を除く四比丘を云ふ。

【一七】檀越。梵音ダーナパチ(Dānapati)施主と譯す。布施を行ふ人のこと。

【一八】那由陀。梵名ナユウタ(Nayuta)數名にして百阿由多を一那由多とす萬億と云ひ千億と云ひ又數千萬と云ふ。

【一九—二九】如來。應供等二三八頁參照。

るべし。

舍利弗よ、汝且に之を觀るべし。聖人を誹謗して聖語を信ぜずんば、是の無量無邊の苦惱を受けて解脫することを得ざらん。舍利弗よ、諸の衆生ありて破法の罪業を起し違逆して信ぜざるもの其の數無量に。九十九億の佛所に於て[三〇]阿僧祇劫に乃ち一人の涅槃に入るもの無からん。舍利弗よ、誰か能く諸佛の教を破し信ぜずして違逆なるものぞ。但だ凡夫愚癡及び增上慢の惡比丘、幷びに諸の不淨說法の比丘なり。何を以ての故に。舍利弗よ、是の三種の人は行者と名づけず、得者と名づけず。是の人如來の法を信ぜざるが故に毀謗違逆す。

舍利弗よ、若し汝、何者か是れ苦岸の比丘なる、不淨說法なると謂はば、即ち調達の癡人是れなり。汝、何者かこれ一切有の比丘、不淨說法なると謂はば、即ち拘迦離比丘是れなり。舍利弗よ、汝、何者か是れ將去比丘不淨說法なると謂はば、即ち迦羅比丘是れなり。汝、何者か是れ跋難陀比丘不淨說法なると謂はば、即ち裸形の沙門、波利摩陀是れなり。舍利弗よ、汝、爾の時の淸淨如實に諸佛の菩提を說き無量の衆生を利益するものぞと謂はば、即ち是れ[三一]富樓那彌多羅尼子の所說淸淨なり。諸の隨學する者は五千の佛に値ふことを得、六十八億那由他の人ありて皆已に滅度せり。

舍利弗よ、若し人實語する者は何者ぞとせば、是れ最上の法師、法義を決了する淸淨の說者と爲し當に說くべし。富樓那是れなりと。舍利弗よ、富樓那は、定心決了し所說無難なり。疑ふ所あるなくして論義を生ず。舍利弗よ、若し人實に說いて何者か是れ一切因緣の法師なるといはば當に說くべし富樓那是れなりと。舍利弗よ、富樓那世々に生ずる所、常に衆生のために佛事を作す。九十億の諸佛の法の中に於て常に法師と作りて淸淨に說法す。皆諸の佛所に於て其の形壽を盡し、常に梵行を修して淸淨に說法す。舍利弗よ、富樓那も亦六佛法の中に於て法師と作り、亦我が法に於て大法師と作り、[三二]阿羅漢を成じ心に解脫を得。若し人實に說いて、何れの人か世々に諸佛を供養

【三〇】阿僧祇劫。阿僧祇(asaṃkhya)大數の名目。漢字音、具さに阿僧祇耶、阿僧企耶に作る、略して僧祇と云ひ、譯して無數、無數央、又は數の極とせり。多く劫數を計量するに用ふ。大毘婆沙論第百七十七第七說に解釋し、第一說第二說具にこれ算數智の及ぶ所に非ざるが故に阿僧祇と名づく。劫とは kalpa の略、譯して分別、時節。通常の年月日を以て算し能はざる遠大の時節を分別する稱なり。故に大又大時と譯す。(智度論三十八)に「劫簸。秦言ニ分別時節ㄧ。」又「時ノ中最少ハ者六十念中之一念ナリ。大時名ㇾ劫。」

【三一】富樓那。彌多羅尼子、前五世紀、略して富樓那。(Pūrṇamaitrāyaṇīputra)滿慈子滿願子と譯す、佛十大弟子の一說法第一と稱せらる。

【三二】阿羅漢又は阿羅訶、阿黎呵、阿盧漢略して羅漢と云ふ。梵音アルハン(arhan)應供、殺賊、無生、離惡と譯す。聲聞四果の一三界の見思の煩惱を斷盡し盡智、無生智、を得て無學位に住し世間の供養を受くる堪へる聖者、聲聞の究竟位。

して諸の善根を種ゆるものと云はば當に說いて富樓那是れなりと、舍利弗よ、富樓那は九十億の諸佛の法の中に於て心を勸めて學を求め決定して議論し、深き智慧あり。是の故に如來は諸の法師に於て說いて第一となす。舍利弗よ、若し我れ一日一夜、富樓那の功德を稱說すとも盡きず。若し一日一夜を過ぐるとも亦復盡きず。何を以ての故に、富樓那の法施は俗因緣無く利養を貪らず。富樓那法師は四無礙智を得たり。唯だ如來を除きて、諸の世間の中に言辭、義理、能く勝るもの無し。舍利弗よ、我今汝に告げん。若し人阿耨多羅三藐三菩提を得て人のために說法せんと欲せば、卽ち無量無邊の福德を得て、亦能く無量の衆生を利養せよ。舍利弗よ、若し人、破壞違逆にして是の法を信ぜずんば、卽ち無量の重罪の因緣を起さん。何を以ての故に、舍利弗よ、惡に惡報あり。善に善報あればなり。我れ此の故を以て、今是の經を以て汝に囑累す。當に四衆の爲に廣說し分別すべし。舍利弗よ、若し是の經を聞き心信歡喜せば、卽ち無量無邊の福德を得ん。若し聞いて信ぜず、心に喜樂せざれば、卽ち無量無邊の重罪を得ん。

舍利弗よ、當に知るべし是の人を名づけて破戒比丘、若しくは[三三]增上慢不淨說法者と爲す。

舍利弗よ、若し人是の如きの敎に違逆する者は、世世に生ずる所、常に盲にして無目ならん。

舍利弗よ、我今明了に汝に告げん。我今說く所は陶師の坏器を愛護するが如きに非ず。我今分明に廣く四衆の爲めに、第一義畢竟空の法を說かん。堅固なる者は在れ堅固ならざる者は破けよ。何を以ての故に、舍利弗よ、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得て邪見惡人の爲めに說法せず、我見人見衆生見、壽命見者の爲めに說法せず。何を以ての故に、是の諸の貪著を皆邪見と名づく。舍利弗よ、是の如く、我見、人見は順想を得ず。況んや道果を得んや。舍利弗よ、若し[三四]我見、[三五]人見、[三六]衆生見、[三七]壽命見、[三八]斷見、[三九]常見の者、能く順忍を得、能く道果を得ば是の處あることなし。是の故に舍利弗よ、若し人是の如きの見を成就せば、我が法の中に於いては、則ち諸の供養を受くることを

【三三】增上慢。七慢の一。未得に於て得と謂ひ、心を高擧ならしむるを云ふ。慢とは(māna)と云ひ已を恃み他に對して高擧する煩惱、七慢とは一に慢、二に過慢、三に慢過慢、四に我慢、五に增上慢、六に卑慢、七に邪慢。

【三四】我見。五見の一、十隨眠の一實我ありと執着する謬見を云ふ。

【三五】人見。は我執にして大乘を學ぶる初心の凡夫の所起に約し人我見に依りて起る邪執に五種を數へ(一)虛空は是れ如來の性なりと謂へりとし(二)に眞如涅槃の性は唯だ是れ空なりと謂へりとして(三)に如來の藏は色心の法の自相差別ありと(四)に如來藏の自體の具さに一切世舊の生死等の法ありと(五)に「衆生は始めありと故に復た如來所得の涅槃に終盡ありて還りて衆生となると謂へり」。

【三六】衆生見。四相(我相、人相、衆生相、壽相)の一にして、衆生が妄に五蘊の法集りてこの我が身を成ずと謬解する。

【三七】壽命見。壽者相、壽者とは妄計して我一期の果報を受く、一期の果報は卽ち若しは長、若しは短なる壽命とな

聽さず、是れ行者に非ず。亦得者に非ず但だ我が法に於て自ら活命を求むるのみ。舍利弗よ、我外道に說きて佛法に入らしめんと欲せば、應に四月を試るべし。何を以ての故に、諸の外道の人は、多く我見・人見・衆生見・壽命見・斷見・常見あればなり。舍利弗よ、我が諸の弟子には、我見・人見・衆生見・壽命見・斷見・常見あることとなし、我が諸の弟子は、但だ空・無相・無願・無所得の忍を說き、識の無所得を說く。舍利弗よ、若し是の如きの忍を成就する者あらば、我見の人の出家受戒することを聽し。供養を受けて衣服飮食臥具醫藥を得ん。若し人是の忍無くんば、應に先きに之を試みて先に敎へて諸法無我に歸せしむべし。舍利弗よ、若し此の忍に於いて心歡喜せず、第一義空を說くを聞きて驚疑譏訶し、我見を說くを聞きては心則ち歡喜せば、當に知るべし是の人は、魔の爲に使はれ、若しは外道を先きとするものなりと。舍利弗よ、智者は此に於て應に憂を生ずべからず、但だ此の人に於て悲心を生ずべし。何を以ての故に、舍利弗よ。若し人是の如きの惡を成就せば、獲る所の惡報說いて盡すべからず、當に此の人に於て利益の心を生ず可し。

敎ゆるに諸法[四〇]無我、諸法の空寂、諸法の無作にして受くる者あることなきを以てす。是の人若し佛法を愛し、是の事を聞いて心に喜樂すること得る者は、其の餘の空行の比丘・無所得者、皆應に示敎利喜して其の心を安慰ならしむべし。爲めに諸法の無所有空を說き、若し聞いて驚畏せば、應に衆中に於て其の和上阿闍梨に語る可し。

經中に說けるが如き行空の行者、又能く諸法の別相を了知す、我與に師となさん。我見・人見・顚倒邪見・持戒に貪著する者は師となさずと。如來は正見を具する者に共に[四一]布薩することを聽許し、破戒邪見の人、破威儀者には共に布薩することを聽許せず。長老の弟子よ、空寂無所有の法を說くを聞きて心に信樂せずんば志外道に在り。佛は外道とともに布薩することを聽さず。是の人、若し當に是の見を捨てずんば、應に聽して何事に入らしむべからず。亦其の欲するものを受けず、是の

るもの。

【三八】斷見。常見の對、二見、三種見、七見等の一、我身を觀じて一度死すればそのまゝ斷滅して生ずることなしと執着する妄見。

【三九】常見。斷見の對、二見、三種見、七見の一、世界は永久不變なると共に我身も又死すとも再び生れて無窮に今の狀態を相續すと執着す邪見。

【四〇】無我(anatman)。外道の執する實我及び凡夫の妄情に存する我の空無なる事を云ふ。三法印並に涅槃、四德の一。之に二種あり、一に人無我、二に法無我となり。

【四一】布薩。二〇五頁參照。

如く作し已つてなほ故に捨てざれば、當に然るべし是の人道に在ることを得ず、便ち是れ永く棄てん。應に其の［四二］和上阿闍梨に說くべし。

應に復た畜ふべからずと。若し僧にして是の如くして則ち我を供養せば、亦善く外道邪見を破すると爲す。是を清淨の說戒布薩と名づく。舍利弗よ、我今明了に汝に告げん。若し人是の我見・人見・衆生見・有無の見を受くれば、是の人をば我を供養すと名づけず。我に隨つて出家受戒すと名づけず。是を六師に隨逐する出家と名づく。［四三］六師を以て師となせばなり。若し人此の淸淨の實法に於いて忍を得ること能はずして、而も供養を受くれば是の人の得る所は則ち邪受と爲す。舍利弗よ、是の人我が法の中に於いて出家し淨戒を護持すと雖も、而も第一義空無所得の法に於いて、心に信解せず驚怖疑悔す。當に知るべし是の人は但だ持戒［四四］多聞［四五］禪定を貴ぶのみ、舍利弗よ、是の人をば、我が供養し恭敬し尊重すとは名づけず。何を以ての故に、

舍利弗よ、無始の世來、衆生にして四禪を得ざるものあるなし。若し但だ四禪を得るを知りて、沙門の利をなすと謂ふ者は、是の人何ぞ我を供養すと名づけん。是の故に舍利弗よ。我今明了に汝に告げん。當來の世人、我が法の中に於いて種々に貪著し、種々に邪見して我が法を毀壞せん。

舍利弗よ、若し人但だ持戒多聞禪定を貴ぶのみならば、當に知るべし是の人は沙門の諸法を淨行すること能はず。我則ち此の人を說いて名づけて沙門婆羅門となさず。

舍利弗よ、若し人一切法無我に於いて如實に無我を知らば一切法本來無所有空にして、能く如實に無所有空を知れば、是れ卽ち持戒を以て上となし多聞を以て上となし禪定を以て上と爲さず。

何を以ての故に、舍利弗よ、諸法の實相は無生無起なり、中に於いて法として上と爲すべき者なればなり。舍利弗よ、是の諸法如實の中には、持戒者もなく、破戒者もなし、何況んや貪著を、而も以て上と爲さんや。舍利弗よ、是を諸佛の阿耨多羅三藐三菩提と名づけ、一切法無相自相空、無

【四二】和上。和尙(術語) Upādhyāya の敎師の意。阿闍利(術語) Ācārya 新稱には、阿遮利耶と云ふ軌範師、正行など譯す、軌範となりて弟子の行爲を矯正する德僧の敬稱。

【四三】六師。二〇〇頁參照。

【四四】多聞。經を多く聞いて忘れざるを言ふ。五會法事讃卷本に「不簡多聞淨戒」と云ひ唯信文意に「多聞は聖敎を廣く聞き信ずるなり」と佛弟子中阿難尊者を多聞とす。

【四五】禪定。六度の一禪は梵語、禪那の略、定は譯名、思惟修、新譯に靜慮と言ふ。思惟修とは所對の境を思惟して硏習する義。靜慮とは體寂靜にして能く審慮する義也。定とは梵語三昧の譯心境に定止して散動を離るゝ義也。

我無人と謂ふ。若し是の忍あらば、是れを行者と名づけ、是れを得者と名づけ、是の人を名づけて信を以て出家すと爲す。應に供養清淨布薩を受くべし。是の人を則ち人中の天と爲さん。

舍利弗よ、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は唯だ是の一義所謂離なり。何等をか離と爲す。諸欲諸見を離るるなり、欲とは卽ち是れ[四六]無明なり。見とは卽ち是れ憶念なり。何を以ての故に、一切法は憶念を本と爲す。所有念相卽ち見是れ見と爲す。舍利弗よ、善法の中の見も、我も亦之を說いて名づけて邪見と爲す。何を以ての故に、舍利弗よ、離欲せば寂滅の中に法もなく非法もなし。善もなく惡もなし。是の事皆空なり。諸結一切の憶念を遠離す。是の故に離と名づく。舍利弗よ、[四七]無上道の中には諸欲永く息めり。何等か諸欲なる。謂く、邪、不善の念、若しは我、若しは我所、作相事相なり、是を阿耨多羅三藐三菩提中の諸欲永く息むと名づく。

【四六】無明(Avidyā)。煩惱の別名、法に於て明了なる所なきを言ふ。明は智慧、學慧の義なる事。雜集論述記卷三に無明は梵語にて阿毘迦羅(Vikāra)と言ふ如し之に六義あり、一に非の義、二に無の義、三に異の義、四に惡の義、五に少の義、六に離の義。是の如く非明、無明、異明、惡明、小明、離明の故に無明と名づくと。

【四七】無上道。佛果の名、阿耨多羅三藐三菩提の譯なり無上菩提。

卷の下

淨見品　第八

佛、舍利弗に告げたまはく、我過ぎし世を念ふに〔一〕阿耨多羅三藐三菩提を求めて三十億の佛に値へり。皆釋迦牟尼と號せり。我時に皆轉輪聖王〔二〕となりて盡形まで供養し、諸の弟子に及ぶまで衣服飮食臥具醫藥を以つてせり。阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲なり。而も是の諸佛は我に記して、如來世に於て當さに作佛を得べしと云はず。何を以ての故に、我が〔三〕有所得なるを以ての故なり。

舍利弗よ、我過ぎし世を念ふに八千佛に値ふことを得たり。皆定光と號せり。我時に皆轉輪聖王となりて盡形まで供養し、諸弟子に及ぶまで衣服飮食臥具醫藥を以てせり。阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲なり。而も是の諸佛、皆我に汝來世に於て當さに作佛を得べしと記せず。何を以ての故に、我が有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過ぎし世を思ふに六萬の佛に値へり。皆光明と號せり。我時に轉輪聖王となりて盡形まで供養し、諸弟子に及ぶまで衣服飮食臥具醫藥を以てせり。阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲なり。而も是の諸佛も亦た我に、汝來世に於て當さに作佛を得べしと記せず。何を以ての故に、我が有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過ぎし世を念ふに三億の佛に値へり。皆弗沙と號す。我時に皆轉輪聖王となりて〔四〕四事供養せり。皆我に記せず。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過ぎし世を念ふに萬八千の佛に値ふことを得たり。皆山王と號し劫を上八と名づく、我皆此の萬八千の佛所に於て剃髮して法衣を著し、阿耨多羅三藐三菩提を修習せり。皆我に記せず。

【一】阿耨多羅三藐三菩提一八九頁參照。

【二】轉輪聖王、(Cakravarti-rāja)。全世界を統御する大王、梵語にて斫迦羅伐辣底遏羅闍と言ひ斫迦羅は輪、伐辣底は輪轉遏羅闍は王の義、即ち輪を轉ずる王の意、轉輪は善治の意音譯には倚斫迦羅跋囉底、遮加越羅遮迦越等譯して轉輪聖帝輪王、飛行皇帝など。

【三】有所得、一九一頁參照。

【四】四事供養。供養を行ふに四種類あるを云ふ。即ち衣服、飮食、臥具湯藥なり。又は衣服飮食、湯藥房舍をいふことあり。

有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過ぎし世を念ふに、五百佛に値ふことを得たり。皆華上と號せり。我時に皆轉輪聖王と作りて悉く一切を以て諸佛と及び諸弟子とを供養すれども皆我に記せず。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過世を憶ふに五百の佛に値ふことを得たり。皆威德と號す。我悉く供養すれども、皆我に記せず。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過世を念ふに二千佛に値ふことを得たり。皆憍陳如と號す。我時に皆〔五〕轉輪聖王となりて、悉く一切の供具を以て諸佛を供養すれども皆我に記せず。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過去を念ふに九千の佛に値へり。皆迦葉と號す。我四事を以て諸佛及び弟子衆を供養せり。皆我に記せず。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過去を念ふに萬劫の中に於て佛の出づることあるなし。爾時に初の五百劫に九萬の辟支佛あり。我形壽を盡すまで悉く皆衣服飲食臥具醫藥を供養し尊重讃歎せり。次の五百劫に復四事を以て八萬四千億の諸の〔六〕辟支佛を供養し、尊重讃歎せり。舍利弗よ、是の千劫を過ぎ已つて復辟支佛なし。我時に閻浮提に死し、梵世中に生じ大梵王と作れり。是の如く展轉すること五百劫の中常に梵世に生じて大梵王と作る。〔七〕閻浮提に生ぜず。是の五百劫を過ぎ已つて閻浮提に下生し、閻浮提を治化す。命終して〔八〕四天王天に生る。中に於て命終して〔九〕忉利天に生れ〔一〇〕釋提桓因と作る。是の如く展轉して五百劫を滿じ、閻浮提に生じて五百劫を滿ず。梵世に生じて大梵王と作る。

舍利弗よ、我九千劫の中に於て但だ一たび閻浮提に生じ九千劫の中に但だ天上に生ず。劫盡燒する時、光音天に生ず。世界成じ已りて還梵世に生ず。九千劫中都て人中に生ぜず。舍利弗よ、是の九千劫中に諸佛も辟支佛もあることなく、多くの諸の衆生は惡道に墮在せり。

【五】轉輪聖王。二三六頁參照。

【六】辟支佛。二一一頁參照。

【七】閻浮提。二五七頁參照。

【八】四天王。欲界六天の第一たる四天王の主にして須彌四州の守護神故に護世天（Lokapāla）。須彌山の半腹第四層級を住所とし東方に持國天王、南方に增長天王、西方に廣目天王、北方に多聞天王。

【九】忉利天。二〇一頁參照。

【一〇】釋提桓因。二四五頁參照。

舍利弗よ、是の萬劫過ぎ已つて佛ありて出世す。號して普守[一一]如來[一二]應供[一三]正遍知[一四]明行足[一五]善逝[一六]世間解[一七]無上士[一八]調御丈夫[一九]天人師[二〇]佛[二一]世尊と曰ふ。我、爾時に於て梵世に命終し閻浮提に生じ、轉輪聖王と作りて號して共天と曰ふ。人壽九萬歲なり。我形壽を盡して一切の樂具を以て彼の佛及び九十億の比丘を供養すること九萬歲に於てせり。阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲めなり。是の普守佛も亦我に、汝來世に於て當さに作佛を得べしと、說かず。何を以ての故に、我爾時に諸法の實相に通達すること能はず。計我、有所得の見に貪著せり。

舍利弗よ、是の劫の中に於て百佛の出づることあり、名號各異なり。我時に皆[二二]轉輪聖王となり盡形まで諸弟子に及ぶまで供養せり。阿耨多羅三藐三菩提を求めんがためなり。而も是の諸佛も亦我に、汝來世に於て當さに作佛を得べしと記せず。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過去を念ふに第七百[二三]阿僧祇劫の中に千佛に値ふことを得たり。皆[二四]閻浮提と號す。我形壽を盡して四事供養すれども亦我に記することなし。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過世を念ふに亦第七百阿僧祇の中に於て、六百二十萬の諸佛に値ふことを得たり。皆見一切義と號す。我時に皆轉輪聖王と作り、一切の樂具を以て盡形まで供養し諸弟に及ぶまでせり。亦我に記せず。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過世を念ふに、亦第七百阿僧祇劫の中に於て八十四佛に値ふことを得たり。皆帝相と號す。我時に皆轉輪聖王と作る。一切の樂具を以て盡形まで供養し諸弟子に及ぶまでせり。亦我に記せず。有所得を以ての故なり。

舍利弗よ、我過世を念ふに亦第七百阿僧祇劫の中に於て六十五佛に値ふことを得たり。皆曰明と號す。我時に皆轉輪聖王と作る。一切の樂具を以て盡形まで供養し諸弟子に及ぶまでせり。亦我に記せず。有所得を以ての故なり。

【一一】如來。一八六頁參照。
【一二】應供。(Arhat) 一切の惡を斷じて人、天の供養を受くるに堪えたる人。
【一三】正遍知。眞正に遍く一切法を知る。
【一四】明行足。(Vidyā-caraṇa-sampanna)。行足とは。脚足の義、戒定慧を指す、佛は戒定慧の脚足に依て阿耨多羅三藐三菩提を得れば明行足。(百六九)
【一五】善逝(Sugata)。如實に彼岸に去つて再び生死界に退没せざる意。
【一六】世間解(Lokavid)。世間の有情のことを知る。
【一七】無上士。無上の士天なり、人中最勝、之に過ぎたるものなければ無上士と云ふ。
【一八】調御丈夫。(百七三)。一切の可度の丈夫を調御して修道に入らしむるを云ふ。
【一九】天人師。(百七四) 天と人との教師なれば天人師と。
【二〇】佛一切諸法を明了に覺知する意。
【二一】世尊。一八三頁參照。
【二二】轉輪聖王。二三六頁參照。
【二三】阿僧祇却。二三六頁參照。
【二四】閻浮提、二五七頁參照。

舍利弗よ、我過去を念ふに亦第七百阿僧祇劫の中に於て六十二佛に値ふことを得たり。皆善寂と號す。我時に皆轉輪聖王となる。一切の樂具を以て盡形まで供養す。亦我に記せず、有所得を以ての故なり。是の如く展轉し、乃至定光佛を見て乃ち[二五]無生忍を得たり。即ち我に記して言はく、汝來世に於て阿僧祇劫を過ぎて當さに作佛を得て釋迦牟尼如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と號すべし、と。舍利弗よ、我過世を念ふに十二億の轉輪聖王ありて皆頂生と字す。又舍利弗よ、過世に三十億の轉輪聖王ありて皆摩訶那摩陀那と名づく。舍利弗よ、我過世を念ふに四十億の轉輪聖王ありて皆摩訶提婆と字す。舍利弗よ、我過世を念ふに一億の轉輪聖王ありて皆億螺と字す。舍利弗よ、我過世を念ふに一億の轉輪聖王ありて皆稱尾と字す。舍利弗よ、我過世を念ふに一萬の轉輪聖王ありて皆照明と字す。舍利弗よ、我過世を念ふに二萬の轉輪聖王ありて名字各ゝ異なり。舍利弗よ、我過世を念ふに十六億の轉輪聖王ありて名字各ゝ異なり。是の諸王等は我餘處に於て阿難の爲めに說けり。舍利弗よ、意に於て云何ぞや。汝是の諸王と謂ふは豈異人ならんや。即ち我が身是れなり。舍利弗よ、我過去を念ふに、時に世に佛あり。號して善明と曰へり。

[二六]彌勒菩薩時に轉輪聖王と作り、字を照明と曰へり。初め阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。時に衆生の壽八萬千歲なり。其の善明佛三會に說法す。初會に九十六億の人一時に得道す。第二大會に九十四億の人一時に得道す。第三大會に九十二億の人一時に得道す。時に王、佛の三會說法に度人無量なるを見て心に大に歡喜し、即ち萬歲に於て一切を佛及び弟子に供養し、發心して阿耨多羅三藐三菩提を求む。未來世に於て衆生度し易く、我當さに成佛して壽命限量あること、比丘僧數の圍遶すること是の如くなるべしと。舍利弗よ、我此の事を知る。これに過ぎたること無量なることを。舍利弗よ、彌勒發心し四十劫已りて、我乃ち無勝佛の所に發心し、初めて善根を種え、我千歲に於て一切の樂具を以て是の佛を供養し、五百張の疊を而も以て奉上せり。是の佛の滅後七寶の塔を起

【二五】無生忍。三忍又五忍等の一。無生の法を忍可したるを云ふ。忍は忍可、忍耐の意にして智慧、法に安ずるを云ふ。諸經論中に此忍位を說くに一準ならず。(大智度論卷五十)に「無生忍とは無生滅の諸法實相中に於て信受通達して無礙不退なり」と。(大乘義章卷十二に仁王經)に依ては「無生忍とは境に從て名となす理寂不起を稱して無生といふ。慧此理に安ずるを名づけて無生忍と云ふ。

【二六】彌勒(Maitreya)。大乘の菩薩。又梅咀麗耶逝底履彌帝隸に作り、慈氏と譯す。字は阿逸多(Ajita)と言ひ、無勝又は莫勝と譯せらる。現兜率天の內院に住し、當來の世に於て人壽萬歲の時此土に出て釋迦牟尼に次ぎて八相成道し龍華樹下に於ける三會說法に依りて前佛の化に洩れたる衆生を度脫せしむ乃りて補處の彌勒、賢劫千佛の第五佛と稱せらる。

せり。高さ一由旬にして縱廣半[二七]由旬なり。皆金銀琉璃頗梨車栗馬瑙眞珠を以て成ずる所なり。心常に發願して、衆生苦惱して救度する者なく惡法に遭値して多く惡趣に墮せば我爾時(そのとき)に當さに佛道を成ずべしと。

舍利弗よ、汝且(ま)さに之れを觀るべし。阿耨多羅三藐三菩提は甚だ修習し難し。舍利弗よ、我阿耨多羅三藐三菩提を修習して[二八]無央數の世に苦惱を受く。我若し說かば汝聞いて愁悶せん。我が諸の受くる所の勤苦憂惱は皆阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲めなり。舍利弗よ、汝薩和檀菩薩・求善法菩薩・常悲菩薩・不放逸菩薩・常精進菩薩を觀よ、若干の諸佛を供養して諸の苦惱を受け、猶ほ阿耨多羅三藐三菩提は得難きことを。何況んや是の諸の癡人乃ち一念も爲めに涅槃を求むるものなきをや。舍利弗よ、是の如く行ずる者も猶ほ甚だ難し、況んや行ぜざる者をや。是の故に舍利弗よ、我今明了に汝に告げん。下法を以てしては上法は得られず。上法を用ふれば乃ち上法を得。何等か下法なる。謂く[二九]身惡業・[三〇]口惡業・[三一]意惡業なり。下法を名づけて心を勤めて善法を修習すること能はざるものとなす。下法を名づけて懈怠嬾墮にして受くる所の戒を破するものとなす。舍利弗よ、是を下中の下なるものと名づく。又下中の下なる者は我が法の中に於て出家すとも[三二]有所得の見・我見・人見・衆生見を生ず。何を以ての故に、舍利弗よ、如來は此に於て了了に現知す。有所得者は乃ち[三三]順忍なし。況んや[三四]道果を得んや。舍利弗よ、若し有所得者は、百千萬億の諸佛[三五]三輪を以て是の人に示現すとも、若し當さに是の見を捨てずんば、なほ人の一口の飲食をも消さず。況んや道果を得んや。舍利弗よ、我見・人見にして涅槃を得ば、一切凡夫は皆應さに滅度すべし。何を以ての故に、我見・人見は皆是れ邪見にして諸の凡夫人は多く我我所の見・人見・衆生見に貪著すればなり。是の故に一切の凡夫應さに涅槃を得べし。舍利弗よ。若し人念を作して我あり人有りて、是の人若し當さに是の見を捨てずして涅槃に入ることを得ば、一切の凡夫は應さに聖道を得べし。何を以ての故に一切の

【二七】由旬。一八九頁參照。

【二八】無央數。阿僧祇の譯、無盡無數の義、以下二三一頁阿僧祇劫參照。

【二九—三一】身惡業、口惡業、意惡業とを三惡行と稱し集異門足論卷三、大毘婆沙論卷百十二、倶舍論卷十六、順正論理、卷四十一等には身惡業とは加行、根本後起に亘りて一切の不善の身業を言ひ。口惡業とは亦加行、根本、後起に亘りて一切の不善の語業を言ひ、意惡業とは一切の不善の思を言ふ。又意に於ける貪、瞋、邪見のことを言ふ。阿毘達磨雜集論卷七には惡行に三あり謂く身貪、瞋、癡なりこの三つに依止するに由るが故に身口意の惡行を行ずと。

【三二】有所得の見。有と言へば有を捕へ、無と言へば無に滯りすべて心に一物を存して執着することを云ふ。

【三三】順忍。二二七頁參照。

【三四】道果。二二〇頁參照。

【三五】三輪。佛陀の身口意のはたらき。

凡夫は皆是れ我見・人見なれば、是の故に我見・人見にして涅槃に入らば、一切の凡夫皆聖道に入り、聖道の中に於て則ち所として少きなし。舍利弗よ、若し人念を作して我見なるものありて則ち涅槃あらば、是の人是の聖道を得るに餘念を須ひざるべし。何を以ての故に、一切の凡夫は我見・人見にして所として少きことなきが故なり。是の如きの癡人に是の過失あり。謂く諸の凡夫皆聖道に入らん。聖道は無繫なり。是の人修する時應さに殺生すべし。諸の五欲を受けて[三六]五逆罪を起すべし。是の故に癡人は聖道の中に於て五逆罪あり。何を以ての故に、一切の凡夫は皆有我有衆生と説くが故なり。若し人是の如きの言を作して五逆罪を成就せば涅槃に入らず、我人を説く者は涅槃に入ることを得と云はゞ、即ち是れ妄語にして亦謗佛なり。我が法の中に於ては又能く清淨なる出家たることを得ざるなり。

舍利弗よ、我今明了に汝に告げん。有所得者に涅槃あるくとなし。有所得者にして若し涅槃あらば、これ則ち諸佛は世に出でたまはずして一切の凡夫人皆涅槃に入らん。何を以ての故に、一切の凡夫人は皆[三七]我見・[三八]人見あり、皆有所得にして皆これ邪見なればなり。舍利弗よ、汝且らく我を觀るべし、幾ばくの時に有所得の見、賢聖の行に非ざるを成就して、諸佛我に授記して、汝來世に於て當さに作佛を得べしと言ひたまはざることを。舍利弗よ、我是の如く行じて猶ほ記を得ざりき。況んや是の癡人但だ持戒・[三九]多聞・[四〇]禪定等を以て、我見・人見・衆生見を生ずるものをや。舍利弗よ、我此の人を說きて行者と名づけず、得者とも名づけざるなり。何を以ての故に、舍利弗よ、長夜に是の如きの邪見に貪著せば滅度を得ざるが故に。是の如きの癡人は是の念を作さず、我等何にして行を試みずして無我人法を修習せん、我等或ひは衆の苦聚を斷ずるを得んと。舍利弗よ、譬へば生れながらの盲人の走りて惡狗を避けて深き火坑に墮するが如し。

舍利弗よ、我癡人と謂へるは是の如く我見・人見・有所得の見を修習し、是の諸見を以て望んで清

【三六】五逆罪。恩田に違逆し福田に違逆する五種の暴惡なる罪、五無間業とも言ふ。(一)殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血の稱(小乘)(二)殺父母、破和合僧、出佛身血、殺阿羅漢、破羯磨僧(阿闍梨依りて懺悔する作法を行へるものを妨ぐる)の稱(小乘)(三)破壞塔、燒經藏、盜三寶財物、謗三乘法、言非聖教、打罵訶責驅使一切出家人、殺父母、出佛身血、破和合僧、殺阿羅漢、撥無因果、常行十不善行の稱(大乘)

【三七】我見。二二六頁參照。

【三八】人見。二三二頁參照。

【三九、四〇】多聞、禪定。九十九頁參照。

淨ならんと欲するものなり。是の人貪著する所に隨つて卽ち是の事を以て涅槃を得んと欲すとも、我是の人に當さに惡道に墮すべしと說かん。

舍利弗よ、譬へば盲人の深き火坑に於て安隱の心を生ずるが如し。是の如きの癡人は我人の見、有所得の見に於て安隱の心を生ず。是の人長夜に著する所に隨はゞ、之れが爲めに欺誑せられ還是の事に著し、我が法の中に於て而も供養を受くれば、是の如きの癡人は長夜に衰惱して惡道の中に墮せん。

舍利弗よ、譬へば大灌頂王の、自ら治むる所の國の中に於て威勢自在ならんに、是の人は應さに奪ふべし、是の人は應さに驅るべし、と。若し諸民衆ありて王の意に順はず、王の過惡を說きて人心を沮壞し、能く城を護らずして謀りて反判せんと欲するに、王是の人の是れ大賊たることを知りて大衆の中に於て惡聲鼓を打ちて、其の罪を苦治し驅擯して出さしむるに、その能く忠を盡して城を護らざるを以て是の苦惱を得るが如し。

舍利弗よ、佛も亦是の如し。無量劫に於て阿耨多羅三藐三菩提を修習して大法王となり、法の國土に於て大威力あり、諸弟子の中に法味を知るものありて、乃ち命を失ふに至るも我が敎を毀たず、諸天世人の能く壞する者なく、所受の敎中に自ら惡逆ならず、亦他を敎へず、我衆中に於て大偉力ありて自在を敎を立て爲めに法城を護り、惡賊を毀壞して入ることを得しめず、竊かに如來所說の密法を受けて、諸の怨賊邪見の者に向つて說くなり。

舍利弗よ、[四一]如來は現在善く法城を護る。四大弟子智慧深遠なり。今我が法城は破壞を懼れず。若し法城に障礙を作す者あらば是れ大賊の法城を毀壞するもの、我が密法を盜みて[四二]外道に向つて說くものと爲す。是の人常に我が所に來至して我と共に語るとも其の敎法を示して密要を說かざるなり。是の人爲めに所示の敎法に出家受戒せんことを求めば、我是の人の後に應さに得道すべきこと

【四一】如來(tathāgata.)。佛十號の一、語にて多陀阿伽度多陀阿伽陀怛他櫱多に作る釋迦牟尼佛と稱す。又釋迦牟尼如來と稱す。成實論卷一に「如來とは如實道に乘じ取りて正覺を成ず故に如來と云ふ」。

【四二】外道。印度にて佛敎者が他の敎門を呼びたる語梵語に底體迦(tirthika)と稱して正說者、苦行者の意を有するもの、佛敎の內道に對して外道とす。

を知る。出家せしめて四月の中に試ることを聽す。何を以ての故に、法城を護らんが爲めの故なり。又未來世の賊をして更らに起らざらしめんが故なり。是の如く如來は善く法城を護りて便を得ざらしむ。所謂佛の敎を受けしめ本の惡邪を捨てしむるなり。諸の比丘衆皆應さに歡喜すべし。聽して出家せしめ受戒を得しめ已りて、天人世間動轉すること能はざるなり。

舍利弗よ。何等かこれ試るべきものとせん。謂く外道の人及び外道の法を樂しむものなり。舍利弗よ、何等か是れ外道の法を樂しむとなす。所謂有所得者・我見者・人見者・衆生見者・貪者・邪者・自相空の法に於て心に疑ひを生ずる者、種々の邪虛妄の法を受行して[四三]第一義空に入ること能はざる者、諸の邪道を行ずる者、是の人を名づけて外道の法を樂しむものと爲す。舍利弗よ、種々の色衣を以て試るべからず。若しは白衣の人、若しは袈裟を著せるもの、是の如き不善の有所得の見あらば、皆外道と名づく。我が法の中に於て出家受戒せば是の人應さに試るべし。何を以ての故に、有所得者は我が法の中に於ては即ち是れ邪見なればなり。是を大賊、一切世間天人中の賊と名づく。是を一切世間の怨家、諸佛の大賊と名づくるなり。舍利弗よ、是の邪見の人、我則ち出家受戒することを聽さず。舍利弗よ、一切法は無我なり。若し人中に於て忍を生ずること能はず、一切法空[四四]無我・無人・無衆生・無壽命なるを信解すること能はずんば、我が法の中に於て受くる所の供養は名づけて不淨と爲す。是の人則ち是れ佛を供養せず。法を供養せず、僧を供養せず、强いて我が法に入るなり。形は是れ沙門、心は是れ外道なり。盜法の人と爲す。舍利弗よ、未來世に於て當さに比丘ありて身を修めず戒を修めず、戒を修めず、心を修めず、慧をも修めざるべし。是の人如來の所說、如來の所行を輕笑せん。如來は常に第一義空に於て恭敬供養し常に是の行を樂しむ。是れ諸い比丘、如來所行の眞際の畢竟空の法を輕笑するなり。舍利弗よ、爾時に若し苦行の比丘あらば亦共に輕笑せん。今我弟子に空を行ずる者あらば、我其の善を讚して其の心を安慰せんも、爾時に是の人、

【四三】第一義空。二二四頁參照。

【四四】無我(anātman)。外道の執ずる實我及び凡夫の妄情に存する我の空無なるを云ふ。三法印並に涅槃四德の一之に二種あり。一に人無我とは實の人實の衆生と云ふ如き常一主宰の我の空無なるを言ひ。二に法無我とは堅實なる諸法の空無なるを言ふ。

空を行ずることを輕蔑して、但だ堅牢ならざることを求む。有我及び有諸法の是の如き等の事を以て衆心をして喜ばしむ。若し[四五]一切諸法空なりと說く者は亦是の人を輕んず。何を以ての故に、舍利弗よ、法應さに爾るべきなればなり。衆生の善根本の相を斷ぜんと欲すれば、則ち眞實の妙法を現ずれども世間に在りては受くる者あるなし。譬へば癡の[四六]栴檀の香を以て猥木に同ずるが如し。

舍利弗よ、迦葉佛說き玉へり。未來世の中に釋迦牟尼佛の諸弟子衆、利養を以ての故に、諸の[四七]白衣の爲めに第一義空を說く、爾時に多く在家出家在りて愚癡にして受けず違逆して信ぜず。而も反つて誹謗して大利を失はん。是の因緣を以つて當さに惡道に墮すべしと。

舍利弗よ、爾時に多く相違の諍論あらん。我論・人論・衆生論・壽者論・命者論なり。善法を欲する者少なく但だ利養を樂しむ。實には是れ愚癡にして自らは智ありと謂へり。互に相ひ違逆して常に共に諍訟して、斷事あるを樂しみて怨嫉の心を生ず。是の人[四八]沙門の法を捨てゝ但だ利養を求む。多く事務するを樂しみて營む所一に非ず。常に他人の長短を伺求することを樂しみて、自らは其の過を隱して功德を稱說す。今の比丘の功德を覆藏して自ら過惡を出すが如し。爾時に當り咸ともに重戒を護持すること能はず、曉らむる所無き故なり。儀則を破りて而も言はん、諸法空・自相空何れが能く作す所と。那羅の戲人種々に變現し、知る所なき者は之れを見て大に笑ふが如し。何を以ての故に、戲法の其の術隱るるを知らざるが故に、希有の心を生じて驚怪して大に笑ふなり。

是の如く舍利弗よ、爾時に眞實の比丘空寂の法を說けども活命を求むる者は咸共に嗤笑するなり。何を以ての故に、是の人佛法の義を知らざる故に、空法を說くを聞いては驚疑怖畏せん。舍利弗よ。汝此の人を見よ、安隱の處に於ては衰惱の心を生じ、衰惱の處に於ては安隱の心を生ず。是の人顚倒して善法には逆行し惡法には順行す。舍利弗よ、是の如きの癡人、多く[四九]慳貪・[五〇]瞋恚・[五一]愚癡を懷き、具さに三不善根を行ず。舍利弗よ、我、持戒の比丘を利益せんが爲めに二百五十經を說く。是

【四五】諸法空。色心等の一切の諸法は常住のものに非ずして悉く皆空寂に歸すと云ふ。道行般若經卷五「諸法皆空にして之を求むるに了に得べからず」と。

【四六】栴檀。二〇七頁參照。

【四七】白衣。二〇一頁參照。

【四八】沙門。二一一頁參照。

【四九—五一】慳貪、瞋恚、愚癡、貪(rāga)瞋(doresa)癡(moha)の三毒に同じ即ち貪とは一切順情の境を引取する貪欲、瞋毒とは一切違情の境に對して違忿する瞋恚、癡毒とは一切事理の法に迷つて無明不了なる愚癡。敎乘法數卷八、大明三藏法數卷十二に、二乘の人涅槃を忻ふは貪欲、生死を厭ふは瞋恚中道に迷ふは愚癡。菩薩廣く佛法を求めんとするは貪欲、二乘を呵惡するは瞋恚、未だ佛性を了せざるは愚癡なりと云ふ。

の如きの癡人は乃ち世間の小因緣を以て在家に向つて說き乃至書寫し以て白衣に示す。

舍利弗よ、是の如きの癡人は說いて言はん、諸法空・自相空、何れが能く作す所ぞと。何を以ての故に、是の如きの癡人は尙ほ慳貪の煩惱を除くこと能はず。何況んや能く[五二]無明を斷ぜんや。舍利弗よ、爾時に持律の比丘善く學すること能はず、諸の說法する者も善く學すること能はず、[五三]修妬路を讀誦する者も亦善く學せざるなり。舍利弗よ、云何なるをか名づけて持律比丘の善學する能はざるとや爲ん。如來の經中說いて[五四]三學あり。善戒學・善心學・善慧學なり。是の三學の中に於て善く學すること能はず、但だ多聞の因緣を以て他人を輕慢す。是の人則ち善法を障礙するものと爲す。是の如きの癡人尙ほ如法に咨問すること能はず。況んや畢竟空無所有の中に於て能く精進を發さんや。

舍利弗よ　爾時に破戒比丘樂しみて白衣の爲めに執事し、使命を宣通し、病を療治する法をなし、以て自ら生活す。舍利弗よ、汝今此の惡人を觀よ、我が法の中に於て出家受戒し供養を受くることを得、而も反つて我を以て怨と爲す。舍利弗よ、爾時に[五五]四天王・[五六]釋提桓因・[五七]大梵天王乃至百千萬億の諸天、我が法の中に是の如き毀壞するものあるを見て皆大に憂愁し啼泣し涕零す。舍利弗よ、是れ實に應さに我に依止すべからざるに、而も白衣の爲めに營みて事務を執る。何を以ての故に、釋迦牟尼佛の弟子に乃至諸天龍神も尙ほ應さに爲めに給使を作さざるべし。諸天龍神、我が弟子に於てはために給使を作す。是の如きの癡人に親近せらるゝ白衣、若し能く修習して諸法第一義空に通達せんとすとも是の處あることなし。

舍利弗よ、爾時に破戒比丘は乃至一杯の酒を得んが爲めに諸の白衣と佛法を演說す。意に於て云何ぞや。多く貪恚癡にして多く讀經を樂しむ。外經の利を貪りて不淸淨を行ず。是の人能く無所有畢竟空の法を信解することを得んや。能く沙門果を具足することを得るや、いなや。いなり世尊

【五二】無明。二三五頁參照。

【五三】修妬路。二〇二頁參照。

【五四】三學。佛教にて習學すべきものゝ都べてを戒(Sīla)定(pamādhi)慧(prajñā)を云ふ。又三勝學とも云ふ。戒學とは身口の惡を止め非を防ぐの戒律定學とは心意の散亂を防ぎ安靜ならしむるを云ふ。慧學とは惑を破り眞理を證するの道。仍て佛道修行の全體の總稱。

【五五】四天王。二三七頁參照。

【五六】釋提桓因。又釋迦提婆、釋迦因陀羅、釋迦維因陀羅、除羯羅因陀羅、釋迦提桓因陀羅と言ひ新に釋迦提婆因陀羅、釋迦提婆因達羅と言ひ。梵音では、(Śakradevānām Indra)即ち釋羅は能提婆は天、因陀羅は主又帝と譯し能天主。須彌山の頂上に住して忉利天即ち三十三天の主なり。略して帝釋天(Śakra)(巴Sakka)。

【五七】大梵天王は梵天(Brahman.)。十二天の一色界初禪天の主にして又三界の主たり。色界大梵天中の高樓閣中に住す名を尸棄(Sikhin 火又は持髻と譯す)と稱す。

よ。舍利弗よ、若し比丘ありて趣ち衣服飲食臥具醫藥を得、持戒清淨にして衆鬧散亂の語言を樂しまず、外義を貪らず、晝夜に精勤なること頭の然ゆるを救ふが如く、一心に[五八]八直正道を勤行せんに、是の人すら空無所得の法に於て尙ほ通達すること難し。況んや是の癡人の深欲あるなく信解あるなきをや。舍利弗よ、汝是の人を觀よ、如來の無上の義を知らざるが故に我が正法を破り、自ら已身の爲めと及び他人のために大衰惱を作すことを。是の如きの大賊は世間の怨家なり。此の經の中には應さに遠離すべしと說く、是の人佛に於て尙ほ恩を知らず。自ら我等の出家せる所を念ひ、此の法の中に於て應さに行ずべからざる處は則ち應さに行ずべからず。是の故に舍利弗よ、如來は未來世の中に此の惡を止めしめんと欲するが故に是の如きの經を說くなり。若し比丘ありて受く所の戒を破り、毀ちて威儀を破りまた正見を破らん。是の經を聞くを得て怖畏し戒に反かん。何を以ての故に破戒の人は應さに彈指の頃に於ても聖人の相に住し袈裟の中に在るべからず。若し此の經を聞いて心歡喜するものは、是の人を名づけて諸佛を供養し佛道を守護すと爲す。何を以ての故に、舍利弗よ、是を佛道の[五九]眞際と名づく。若し善男子善女人にして沙門の法を得んと欲する者、是の經を聽かんが爲めには應さに百千萬億由旬を過ぐべし。何を以ての故に、諸佛如來は久しうして乃ち出世し、世に出づると雖も、時ありて乃ち之れを說き玉へばなり。

了戒品　第九

佛、[一]舍利弗に告げたまはく、三種の人ありて、是の經を說くを聞いて心樂せず。何等か三なる。一には破戒比丘、二には[二]增上慢の人、三には不淨說法及び我に貪著する者なり。是の人、此の實相に隨順せる深經に遠離し、生盲の部黨具足充滿す。是の故に、舍利弗よ、我是の經を以て重ねて汝に[三]屬類す。所以は如何ん。是の經、如來滅後に於いて、能く淸淨持戒の比丘をして心に喜樂を

【五八】八直聖道(āryāṣṭāṅgika-mārga.)。三十七道品の一部具さに八正道又は八聖道分、正道は又由行、遊行、道行、直行、直道、賢聖道とも言ふ。(一)正見、(二)正思惟、(三)正語、(四)正業、(五)正命、(六)正精進、(七)正念、(八)正定の八支の稱。菩薩の涅槃に至る修行方法也。
(1)samyag-dṛṣṭi.
(2)S.-saṅkalpa.
(3)S.-vāca.
(4)S.-Karmānta.
(5)S.-ājīva.
(6)S.-vyāyāma.
(7)S.- smṛiti
(8)S.-samādhi
彈指、非常に短き時間の謂ひ、或は二十瞬間を一…と云ひ、又一…に六十八刹那ありとも云ふ。

【五九】眞際。眞意際。

【一】舍利弗。一八三頁參照。

【二】增上慢。二三二頁參照。

【三】屬類。佛陀が弟子に附囑して聖法を後世に流布す可きを命じ玉ふ事を云ふ。法華文句中に、囑トハ是レ佛所ニ付囑スル類トハ是レ頌レハシテ爾ッ宣傳セシム又屬累とも書く。

生ぜしむ。是の如きの深經は、清淨戒の者は常に攝持する所にして、毀破戒の者は常に遠離する所なり。所以は如何ん。癡人は眞實の正語を說くを聞いて、則ち以て苦と爲せばなり。

舍利弗よ、破戒比丘の成ずる所の相貌は、如來此に於いて已に具さに廣說せり。舍利弗よ、破戒比丘の法は、應さに持戒律儀を樂まず、愚癡の人は智慧を喜ばず、慳人は布施を說くことを聞くを欲せず、增上慢の者は此の無憍慢の法を聞くを欲せず、若し聞かば驚畏して深坑に墮する如くならん。世利を好む者は美味に貪著し、訾食を訶するを聞かば心則ち憂惱せん。若し人好んで外の經書を讀む者は、則ち其の中に於いて堅實の想を生じ、語に貪著する者は樂みて散亂を說かん。辭を嚴飾し、說を巧美にするを樂しむ者は、佛の第一義に於いて則ち淨心なし。又此の法に於いて敬せず信ぜざらん。舍利弗よ、譬へば、[四]不男の人の男子の用なく、男子の中に至りて不男の想を生じ、而も是の念ひを作すが如し。是の諸人等は我の如く異ることなし、と。是の如く好んで外の經書に著する者は、常に樂しみて文辭を嚴飾巧美し、佛の第一義に於いて心恭敬せず。舍利弗よ、其の中に人ありて清淨の經を說かんに、此の人の所に於いても亦恭敬せずして清淨持戒の[五]比丘を輕慢せん。何を以ての故に、舍利弗よ、[六]外道の經書に眞實語なし、法應に憍慢貢高自大なるべし。何を以ての故に、是の事を厭離と爲さず、寂滅と爲さず、得道と爲さず、涅槃と爲さざるや。是の人信等の善根を毀壞せるが故に、一切處に於いて有功德を信ぜず、不男の人の諸人の中に於いて皆己の如しと謂ふが如し。

舍利弗よ、生盲の人の諸色の所謂黑色白色を見ざるが如し。黑白の色を見ざる者は、好色を見ず、醜色を見ず、青黃赤白紅紫縹色を見ず、長短麁細深淺等の色を見ず、日月星宿を見ず。日月星宿を見ざるもの、是の如きの盲人便はち是の念ひを作さん。黑白色なければ、黑白色を見る者無し。好醜色もなく、青黃紫縹、長短麁細深淺、日月星宿の色なければ、日月星宿を見る者なし。餘人も皆

【四】不男の人。完全の男性を成さざるもの。之に五種の人あり。舊譯には(一)生不男、生來男根の發育せざるもの。(二)犍不男、刀を以て男根を去りしもの。(三)妬不男、他の婬を見妬心ありて根の勃發するもの(四)變不男、男に會へば女根起り、女に食へば男根起るもの。新譯に二解あり。(一)扇搋(無根)此の中に本性、損壞の二種あり。(二)半擇迦(有根なれども不具なるもの)次に五種の不男通じて半擇迦と名け、扇搋は無根に限る。

【五】比丘(Bhiksu)。苾芻と云ふ。出家して具足戒を受けし者の通稱なり。男を比丘と云ふ。

【六】外道。佛敎外に道を立つるもの。邪法にして眞理の外なるもの。三種外道、六師外道、或は九十五種、九十六種の外道等あり。

亦是の如くならん、と。盲人の心倒(さかさま)にして、一切處に於いて皆黑闇と謂ふ。舍利弗よ、破戒比丘、增上慢の人、外道の論に墮せる比丘も亦復是の如く、深佛法に於いて心信樂せず通達すること能はず。諸法空無所有を聞いて信ぜず、樂しまず、通達すること能はず。舍利弗よ、是の如きの諸人は汝等を畏れて邪際の中に入り正法を得ず。是の正法を以て名づけて眞實の[七]沙門と爲す。汝、所得の法を是の人信せざること、猶盲人の白黑等の色無しと謂ふが如し。舍利弗よ、是の人、是の如く邪際の中に入り、外道の論を求め、衆闇の語を樂しみ、煩惱惡性惡法を增長す。是の人、諸法の空を信ずること能はず、何況んや通達するをや。

舍利弗よ、意に於いて云何ぞや。[八]野干師子と作(な)る。能く已に吼え今吼え當に吼ゆるとせんや、師子の行を作して、今行し當に行し已に行ずとせんや、いなや。いななり、世尊よ。何を以ての故に、野干の色力音聲師子に及ばず。野干但だ能く野干の聲を作す。若し聲を作さんと欲せば、但だ野干の聲の出ずるあり、師子の聲にあらず。是の如く舍利弗よ、破戒の比丘、增上慢の比丘、自ら此の事を以て上と爲し、不淨說法者は[九]尼犍子の論を受け、若し一事を執せば堅持して捨てず、世利を貪り貴び、經書を讀むことを樂しむ。諸法實相に通達すること能はず。若し能く[一〇]無相の法を信受するものは是の處(ことはり)あることなし。舍利弗よ、若し比丘ありて耆年有德ならんに、比丘中の龍深智慧あり、是の人、能く無所有[一一]自相空の法、無我無人の法を信ず。何を以ての故に、是の人、衆鬧雜語を樂しまず、讀經睡眠多事を樂しまず、白衣の爲めに營みて事務を執らず、使命をなして文書を持送せず、醫術を行はず、醫方を讀まず、販賣を爲さず、[一二]世間の語言を論說することを樂しまず、但だ樂しみて[一三]出世間の語を說くことを欲す。是の人、能く一切法の空を信ず。一切法の不起不壞に於いて是の人則ち眞實際を證す。則ち能く如實に、正師子吼す。野干の吼に非ざるなり。舍利弗よ、若し比丘ありて外經の義に著せば、是の人微妙の佛法を捨てゝ外道の語言を誦持すと爲す。大

【七】沙門。五十四頁次參照。

【八】野干。野狐の事なり。智論十四に狐爲ニ獸王一睛ニ獅子吼一死話、卽ち一野狐あり。山中の行者の讀誦する、術書を解して終に百獸を制して迦夷城に行いて王女を嫁らんとせしが智臣の計に陷ち、獅子の吼聲に象上より墜ちて死すと。

【九】尼犍子。七九頁次參照

【一〇】無相。眞理の衆相を絕するを云ふ。又涅槃の意なり。無量義經に、涅槃は無相となす。十相無きが故に無相となす。(一)色相(二)聲相(三)香相(四)味相(五)觸相(六)生住壞相(七)男相(八)女相等の相なきが故に。

【一一】自相空。廣說十八空、略說七空中の一。因緣所生の法、究竟して實體なきを空と云ふ。自相とは自體を局る相。

【一二】世間。出世間の稱に對す。世は遷流の義、破壞の義、覆眞の義、等あり、間は中の義。世の中に墮する事物を世間と云ふ。又間隔の義。卽ち世界と云ふに同じ。大要二種あり、(一)有情世間、生あるものを云ふ。(二)器世間、國土を云ふ。又註維摩經不二品に曰く、世間は三界(欲界、色界、無色界)也とある。

【一三】出世間。世間の稱に對

衆の爲めに說くは、但だ野干の吼を作すなり。舍利弗よ、是の如きの惡人を名づけて朽壞の沙門と爲す。何を以ての故に、是れ外道の義は佛法に非ざるが故なり。舍利弗よ、外道の法に著せる比丘は、應さに自ら是れ佛弟子なりと稱すべからず。何を以ての故に、沙門[一四]釋子は尼犍子の語を說かず、大衆の中に於いて但だ佛說を說けばなり。舍利弗よ、若し人不淨語に著して師子吼を作さんと欲せば、但だ野子の鳴を爲すのみ。是の人、佛法の第一義を解すること能はざればなり。

舍利弗よ、我今明了に汝に告げん。若し人持戒・禪定[一五]・智慧を具足し、慳ならず、貪ならず、恚癡に染まず、諂曲を懷き、厭惡の心あらず、言必ずや眞實にして、常に獨處を樂しみ、睡眠を樂しまず。空[一六]無相・無願・無生[一七]・無滅の行を樂しみ、離欲の心を生じて佛法の第一義を解せん。世語を好まずして出世の語を樂しみ、盡く諸戒を持ち、一切の惡事及び惡智識悉く皆遠離せん。是の如きの法に住せば則ち能く空無所有のを解せん。

何を以ての故に、舍利弗よ、是の行を名づけて大人の所行と爲す。是れ貪樂利養の所行に非ず、是れ愚癡常人の所行に非ず、是れ糟糠沙門の所行に非ず、是れ假名沙門の所行に非ざればなり。舍利弗よ、諸法の實相は畢竟空寂にして卽ち是れ佛道なり。世の財利を好み、貪つて不淨の法を說く者の及び能はざる所なり。

舍利弗よ、是の地を大智者の地と名づく。是は外道に貪樂する者の地に非ず、我見人見を說く者の地に非ず。舍利弗よ、若し實に有我有人ならば、我人(がにん)を說く者應さに實相あるべし。實の如く應さに問ふべし。若し我有らば、是れ何色と爲さんや、靑黃赤白なりや、身中に在りとせんや、身外に在りとせんや、遍く身に在ること油の麻に在るが如しとせんや。舍弗利よ、麻中に油有れば出づべし示すべし。若し我內に在りて有我を說く者は應さに說くべし應に示すべし。麻中より油を出し油を示すが如し。第一義の中には我を求めて得べからず。是の故に當さに知るべし。若し我人あり

す。世間とは有漏の別名にして之より解脫出離したるを出世間と云ふ。滅道諦の無漏法、之より普通の世俗とし、佛法のことを出世間と云ふ。

【一四】釋子。二五九頁參照。

【一五】禪定。二三四頁參照。

【一六】無相。二四八頁參照。

【一七】無生。一八九頁參照。

と說く者は、是の人、尙沙門の戒無きが猶し。況んや沙門の地をや。舍利弗よ當に知るべし、是の如きの邪貪著者は所謂、著我・著衆生・著壽命者にして、則ち頂墮と爲す。是の人、是の如く邪貪著の故に尙利養を貪る心を除くこと能はず。況んや細煩惱をや。

舍利弗よ、空に通達せる者は、若し[18]貪欲・瞋恚・愚癡・利養の爲めに覆はるゝとせんに、是の處あることなし。亦頂墮せず。舍利弗よ、我心を計する者は壽命ありと謂ふ。壽命は因緣の故なり。則ち利養の爲めに牽かれて道を[19]障礙す。舍利弗よ、[20]我見者、[21]人見者は我が法に於いて出家し道を爲すと雖も、是の如きの癡人、淸淨の中に於いては則ち出家に非ず。何を以ての故に、尼犍子の出家は皆我心を計して有所得なるが故なり。舍利弗よ、所得者は、無始の世より常に此の見あり。若し出家を得ると雖も猶ほ有は絕えず。是を外道に因る出家と名づく。聖法に因る出家と名づけず。何を以ての故に、弊人は大法を信樂すること能はず、淸淨の大法に於いて眞實の想なし。舍利弗よ、是の如き破法の重罪は餘殃に因緣して未だ盡きず。諸法の實相を信解すること能はず。不善の業を起し、或は[22]八直聖道を謗り、或は淨戒の比丘に於いて惡心を生じ、妄りに其の過を出し、或は破戒・破見・破命・破威儀と言ひ、或は他の過を見ずして妄りに是非を生じ、或は濁恚・嫉心を以て他の惡名を說き、或は佛經の義理を知ること能はずして佛法に非ずと謂ふ。是の如きの惡人は破法の惡業を成就す。佛の第一義に於いて通達せず、入らず、喜ばず。是の如きの重罪餘報の因緣、勤めて精進すと雖も、猶ほ所緣の相を取ること能はず。何況んや繫心能く道果を得んや。又深く我見、人見に依止す。是の如きの見は、乃至諸佛も猶亦其の根本を拔くこと能はず。何況んや聲聞をや。舍利弗よ、若し人是の如く不善の邪見に貪著する者あらば、我見・人見・[23]衆生見・壽見・[24]命見と謂ひ、又第一義空に於いて驚疑して畏るゝものは、當さに知るべし。是の人、先世に破法の罪緣を成就すと。舍利弗よ、若し人是の如く惡邪不善に貪著せば、貪我・貪人・貪壽命者と謂ふ。是の人百千萬億の諸

【一八】貪欲、瞋恚、愚癡。二四四頁三毒の項參照のこと。
【一九】障礙。
【二〇】我見。二二六頁參照。
【二一】人見。二三二頁參照。
【二二】八直聖道。二四六頁參照。
【二三】衆生見。二三二頁參照。
【二四】命見。壽命見なり。壽命見は二三二頁參照のこと。

佛[二五]三輪を以て示現すとも、悟らしめ、道果を得しむること能はず。舍利弗よ、寧ろ利刀を以て舌を割いて應さに他事を見ずして其の過を妄說し、破戒・破見・破命・破威儀ならざらんには。

舍利弗よ、未來世に於いて當さに比丘ありて善く二百五十戒を護るべし。是の人、我慢の心生じて是の念を作す。我は是れ持戒、餘人は爾らず、と。他人を輕んじて心に恭敬なし、我は是れ多聞、彼は多聞に非ず、と。舍利弗よ、爾の時に多く比丘ありて、但だ、持戒多行・[二六]阿蘭若行を貴び、能く戒品を善く護り、所說の行に隨ひ、心を勤めて讀經し、佛法に通ぜんことを求む。是の如きの人等、多聞慢、阿練若慢を生ず。而も瞋恚を好み心常に垢濁なり。深く慳貪・瞋恚を懷き毒心頑鈍無知なり。小因緣を以て而も大事を起す。是の人瞋恚に心覆はれ、互に過を相出し、破戒・破見・破命・破威儀なりと謂ふ。舍利弗よ、是の如きの僧中に好き比丘あり。心に偏黨なく處りて中間に在り、而も亦之に同じて彼の惡中に在り、互に相譏論し諍訟息まず。安隱に坐禪し讀經することを得ず。在家、出家も皆亦嬈動す。是の如く舍利弗よ、爾時に多く比丘あり、一歲・二歲・三歲乃至九歲、上座を輕慢して恭敬あるなし。是の人出家受戒すとも多く不如法なり。[二七]和上阿闍梨に習効し亦恭敬なし。舍利弗よ、爾時に年少の比丘及び先の出家、依止あることなく共に十歲の比丘言ふ處徒衆を輕慢す。其の諸の徒衆皆恭敬・威儀・法則なく、亦不如法なり。舍利弗よ、時の諸の惡人、貪欲・瞋恚・愚癡を具足し、互に相輕慢し恭敬あることなし。相違逆する故に我が法則ち滅せん。舍利弗よ、時の諸の癡人多く破法の罪業を起す。此の罪を起し已はつて當さに惡道に墮せん。

舍利弗よ、我今明了に汝に告げん。自ら己を利することを求むる善き比丘は、爾の時に當りて應さに衆に入りて乃至、一宿もせざるべし。唯だ[二八]阿羅漢の煩惱已に斷ぜると及び病比丘の中に於いて緣有るものを除く。何を以ての故に、舍利弗よ、當さに爾の時の人、貪欲・瞋恚・愚癡の毒盛にして、活きず怖畏して常に逼切せらるべし。利を求むる善人は常に應さに山林の空靜に處し、乃至命を畢

【二五】 三輪。二四〇頁參照。

【二六】 阿蘭若(araṇya (巴)araññam)。比丘の住所、漢字音阿練若、阿蘭那、阿蘭那、阿蘭攘拏、阿練茹、阿蘭拏、阿蘭撰、阿蘭若迦に作る。無諍聲、寂靜處、遠離處等と譯す、森林、原野、沙磧等の義也。

【二七】 和上阿闍梨。二三四頁參照。

【二八】 阿羅漢。二三一頁參照。

【二九】 如來。一八六頁參照。

【三〇】 白毫相。(Ūrṇā-lakṣaṇa)。佛身に具足せる三十二相の一。兩眉間の間に存する細毛の事。故に又眉間毫相と稱す。長阿含經卷一に。眉間の白毫は柔軟細澤にして、引けば長さ一尋、放てば則ち右旋し、螺は眞珠の如し、とあり。其の因業に關しては無上依經卷下に「菩薩、善衆生の三學法を修するを見れば其の美を稱讚し毀呰も起さず、誘者あるを見ては遮制守護す、此業緣も以て白毫相を得。とあり。又十住毘婆沙論卷八に、和倘・阿闍梨の供養すべき所、父母、兄弟及び尊重すべき所に隨ひて、善能く護備するが故に。一々孔一毛生毛右旋相、白毛莊嚴面相を得、とあり。

ること野獸の死するが如くなるべし。

舍利弗よ、我今明了に汝に告げん、我が此の眞法久しく世に住せざるべし。何を以ての故に、衆生の福德善根已に盡き濁世近きに在り。自利を求むる善比丘は應さに是の如きの厭心を生ずべし。我當さに云何が法の破亂するを見ん、此の沙門惡世の難を見る時、我當さに心を勤め精進して早く道果を得べし、と。舍利弗よ、我が法諸の難事なからんとせば、衣食・臥具・醫藥を念はざれ。汝等但だ當さに佛道を勤行すべし。世間の財利・供養を貴ぶ莫れ。

舍利弗よ、汝今善く聽け、我當さに汝に說くべし。若し一心に行道する比丘あらんに、千億の天神皆共に心を同じうして、諸の樂具を以て共に供養せんと欲す。舍利弗よ、諸の人の坐禪比丘を供養すること天神に及ばず。是の故に、舍利弗よ、汝自ら供を得ざるを憂念すること勿れ。佛の眞の敎化に當さに隨順して行ずべし。第一義空を以て人の過惡を出す莫れ。何を以ての故に、舍利弗よ、大嶮難とは所謂空を得ることなり。或は比丘あり、我が法に因つて以て出家受戒す。此の法の中に於いて勤行精進し、諸天神、諸人念ぜずと雖も、但だ能く一心に道を勤行するものは終に亦衣食の須ゆる所を念はざれ。所以は如何ん。[二九] 如來の福藏は無量にして盡き難ければなり。

舍利弗よ、如來の滅後、[三〇]白毫相の中の百千億分、其の中の一分を以て舍利及び諸弟子を供養せんに、舍利弗よ、設ひ一切の世間の人をして皆共に出家せしめ、法に隨順して行ぜしむとも、白毫相の百千億分に於いて其の一をも盡さず。舍利弗よ、如來の是の如きの無量の福德、若し諸の比丘、得る所の飯食及び須ゆる所のもの趣ち皆足ることを得ん。舍利弗よ、是の諸の比丘、應に是の如きの念を爲すべし。應さに須ゆる所の物に於いて諸の邪命、惡法を行ずべからずと。舍利弗よ、若し

[三一] 納衣の比丘、糞掃中に於いて弊故を拾ひ取りては、應さに是の心を生ずべし。此を以て寒きを障へ及聖道を修めん。我今此の弊故を以て縫て [三二]僧伽梨と作して著し、勤行精進せん、若し凡夫を以

【三一】 納衣。又は糞掃衣。人の棄てて顧みざる糞掃 等しき賤物を拾取し縫納して法衣となせるもの。之比丘十二頭陀行の一なり。釋氏要覽上には納衣に五種ありと、(一)火燒衣(二)水漬衣(三)鼠咬衣(四)牛嚼衣(五)嬭母棄衣、以上の衣は天竺の人(印度の人)忌み棄てて用ひず故に共に納れて衣と成すなり、と。

【三二】 僧伽梨。(Saṃghāti)。大衣重複衣と譯す。三衣の一說法、又は城に入つて托鉢するときに用ふ。大衣は、九條、十一條、十三條(已上兩長一短、下品となす)。十五條、十七條、十九條(已上三長短中品となす)。二十一條、二十三條、二十五條(已上四長短上品となす)。之を三品九條の袈裟とす。

【三三】 須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅果(次頁)。綜じて四果と稱す。聲聞乘の聖果の差別である、舊譯は、梵名を以て、(一)須陀洹果 Srotāpanna-phala (二)期陀含果 Sakṛdāgāmi (三)阿那含果 Anāgāmi (四)阿羅漢果 Arahat. 新譯は前三果 翻名を以て、(一)預流果(二)來果(三)不還果(四)阿羅漢果と云ふ。(一)須陀洹果は一九七頁次參照。(二)斯陀含果、譯して一

ては乃至一夜も應さに此れを著すべからず、と。

是の比丘、淨く浣ぎて縫ひて著す。若し此の比丘、此の納衣に於いて貪著の心を生ぜば即ち應に之を捨つべし。我著することを聽さず、何況んや餘の衣をや。何を以ての故に、舍利弗よ、是の比丘此の衣の中に於いて比丘に非ざるの法を生ぜば、是の比丘復應に著すべからざるなり。何況んや餘の物をや。舍利弗よ、是の時比丘寧ろ赤熱の鐵鍱を以て自ら其の身に纏ふとも、應に此の納衣を著すべからず。何を以ての故に、此の衣中に於いて心に染愛するが故なり。舍利弗よ、納衣の比丘應さに是の念を作すべし。此の納衣を著するを以て寒熱を遮り、以て修道を助く、我今復餘の衣を著せず、當さに[三三]須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢を得べし、と。舍利弗よ、是の如きの納衣の比丘、專ら道を求むれば、我則著することを聽さん。

舍利弗よ、乞食の比丘よ、應さにこの諸法の中に於て分別する所無かるべし。常に其の心を攝して散亂せしめずして聚落に入るべし。諸の禪定を以て自ら莊嚴し、乞食し得已はつて心染汚せざれ。所得の食を持して聚落より出で、洋水の邊修道すべき處に在りて、食を一面に置き、洗脚して坐し、食を以て前に著き、應さに厭離の想・不淨の想・屎尿の想・臭爛の想・變吐の想・塗瘡の想・厭惡の想・子肉の想・臭果の想・沈重の想を生ずべし。又身中に於いて應さに、死想・靑想・膿想・爛壞想を生ずべし。舍利弗よ、比丘應さに是の如きの想を生ずべし。貪著なき心を以て然る後乃ち食せよ。但だ身を支へ飢渴病を除くを以て、修道を得しむと。應さに是の念を作すべし。我此の食を食ひて先の苦惱を破して後の苦を生ぜず。心に快樂を得て調適にして惱なし。身體輕便にして行歩安隱ならん。又念ぜよ、此の食を食ひ已つて、我應さに當に須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・[三四]阿羅漢果・[三五]無生法忍を得べし、と。

舍利弗よ、比丘是の如くして食はゞ、我乞食するを聽さん。舍利弗よ、若し乞食の比丘、得る所

來と云ふ。人欲界九地の思惑中、前の六品を斷じ三品を殘す、其の後三品の思惑の爲に欲界の人間と天界(六欲天)とに一度受生するなり。故に一來と云ふ。(三)阿那含果、舊に不來、新譯には不還云ふ。欲界九地の思惑を滅盡して再び還來せざる位なり。爾後受生するも色界、無色界なり。(四)阿羅漢果、殺賊、應供、不生と譯す。上非想處に至る一切の思惑を斷じ盡せる聲聞乘の極果なり。尙阿羅漢については九四頁參照のこと。

【三四】阿羅漢果。前頁參照。

【三五】無生法忍。略して無生忍とも云ふ。無生法とは生滅を遠離せる眞如實相の理解なり。此の理に安住して動かざる無生法忍と言ふ。初地及び七、八、九地の位に於て得べき悟なり。

【三六】無餘涅槃。一九一頁參照のこと。

【三七】須陀洹。一九七頁參照。

【三八】三惡道。二〇三頁參照。

【三九】三學。二四五頁參照。

【四〇】檀越(dānapati)梵語にして施主の義。

【四一】修妬路等。皆十二部經の一なり。一、修多羅(Sūtra)契經、法義を說ける長行の文(普通の經文)なり。二、祇夜(Geya)重頌と譯す。頌とは文

の食に於いて食味の心を生じ、以て甘美なりとなし、而も是の念を作せ。我是の食を食つて當さに好色、氣力の充盛するを得べし。是の念を作さゞれ。我此の食を食つて勤めて聖道を行ぜんと。是の如きの比丘、我乃ち一飮水をも受くることを聽かず。何に況んや飯食をや。舍利弗よ、若し食中に於いて過惡を見ず、道に出づるを見ずして便ち食はゞ、寧ろ自ら手を以て股肉を割きて噉ふべし。何を以ての故に、我行者、得者に他の供養を受くることを聽す。餘人には聽さゞればなり。

舍利弗よ、云何が名づけて行者と爲す。若し比丘ありて決定して發心し、我今世に於いて諸の結使を斷じ、當さに[三六]無餘涅槃に入りて聖道を修習すること頭然を救ふが如くなるべし、と。又當さに不善の惡法を除斷せん、と。是を行者と名づく。又能く一心に空無相・無願を信解し、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得んが爲めに諸の煩惱を斷ずるを名づけて行者と爲す。諸の善法を求めて常に諮問を行ずるを、名づけて行者と爲す。又能く發心して一切を度脫せんとするを名づけて行者と爲す。心を勸めて諸の助道の法を修習し、諸の經中に於いて說の如くに行じ、及一心に佛道を求むる者あらば、舍利弗よ、佛法の中に於いて是を行者と名づく。何をか得者と謂ふや。謂く、[三七]須陀洹を得て[三八]三惡道を脫するを名づけて得者と爲す。斯陀含・阿那含・阿羅漢、諸の煩惱を斷じ道を求め已りて息む。所作已に辦じて善く[三九]三學を學す。是を得者と名づく。我是の人の供養を受くることを得るを聽す。是の人、若し供養を受くれば、是を善く供養を受くるものと名づく。

舍利弗よ、清淨の持戒者[四〇]檀越を開化する者、及び多聞を修し經を讀誦する者とは、謂はく[四一]修妬路岐夜授記經・伽陀憂陀那・尼陀那を讀誦するなり。是の如きの諸經・本生經・方廣經・未曾有經・阿波陀那論議經なり。是の人又能く淸淨に持戒し瑕疵あることなし。不垢不濁にして自在にして著せず。智者の讃する所能く自ら具足す。[四二]禪定に隨順して時時坐禪を樂しむ。是の如きの比丘には我亦供養を受くることを聽す。

句を定めたる文體を云ふ。三、伽陀(Gāthā)諷頌と譯す。法句經の如き是なり。長行によらず直に偈頌の句を作すもの。四、尼陀那(Nidāna)因緣と譯す。諸經の序品の如きは是れなり。五、伊帝目多(Itivṛttaka)本事と譯す。佛弟子の過去世の因緣を說く經文。六、闍多伽(Jātaka)本生と譯す。佛自身の過去世の因緣を說ける經。七、阿浮達磨(Adbhuta-dharma)新に阿毘達磨と云ふ。未曾有と譯す。佛神力を變現したまふ事を記したもの。八、阿波陀那(Avadāna)譬喩と譯す。九、優婆提舍(Upadeśa)論義と譯す。十、優陀那(Udāna)自說と譯す。十一、毘佛略(Vaipulya)方廣と譯す、方正廣大の眞理を說く經文。十二、和伽羅(Vyākaraṇa)授記と譯す、菩薩に成佛の記を授くる經文。

【四二】禪定。九　頁參照。

【四三】戒。身、口、意の罪惡を爲さしめざる規定。梵語、尸羅(Sīla.巴Sīlam)の譯。別に律、破羅提木叉の語あり。

【四四】定。六度の一。三學の一。梵語、禪耶(Dhyāna)の譯。靜慮とも譯す。念を歛め心を一境に止めて散せざる事。尙禪定(二三四頁)を參照せよ。

【四五】慧、(Prajñā)心所の名。

舍利弗よ、身に法を證する者は疑悔あることなし。我是の人に高座にて說法することを聽す。是れ凡夫なりと雖も、淸淨に持戒し、心外道の經義に貪著せず。一心に勤めて沙門の上果を求む。利養を貪らずして、善巧に定んで說く。多聞廣喩なること倘大海の猶し。乃至命を失ふとも猶妄語せず。諍訟を樂しまずして自利し利他し、唯淸淨の第一實義を說く。說く所、是の如くにして亦是の如く行ず。舍利弗よ、是の如く說けば我れ說法を聽さん。如來の所說は能く諸法をして相違逆ならざらしむ。謂く、戒[四三]・定[四四]・慧[四五]・解脫[四六]・解脫知見[四七]を說くなり。舍利弗よ、利を求むる比丘は、佛の爲めに出家して而も戒品を破る。何ぞ說法を用ひんや。何を以ての故に、舍利弗よ、我經の中に說けり。

若し人自ら善寂ならざれば自ら護ること能はず能く他人の善寂をして自ら護らしめんとするに、是の處あることなし。人の自ら汚泥に沒して他人を出さんと欲するが如く、是の處あることなし。若し人能く自ら善寂ならば、能く汚泥を出でて他人を出さんと欲するに、則ち是の處あり。

是の故に、舍利弗よ、我れ今明了に汝に告げん。如來を誹謗する其の罪輕からず。實語の比丘には、應さに說法を聽すべし。妄語に非ざる者、持戒の比丘は則ち能く法施せん。舍利弗よ、高座說法は決定して疑を斷ぜん。最も是れ上事なり。若し持戒不淨にして外道の義に著せば、我則ち聽さず。及妄語する者、世樂を貴ぶ者、利養を求むる者、諍訟を樂しむ者も我亦聽さず。我は淨持戒者質直心者[四八]、諸法の實相に通達せる者に高座にて說法するを聽す。舍利弗よ、破戒の比丘寧ろ當さに捨戒すべし。聖人の相に袈裟を著せざれ、罪垢を覆藏して密に衆惡を作して人の信施を受くれば、舍利弗よ、小因緣を以て而も久遠に於て地獄の身を受くべし。

囑累品　第十

爾の時に阿難佛に白して言さく、世尊よ。爾の世時に當りて諸の比丘等、善法の中に於て云何が

簡擇の作用には、所緣法に於て得失邪正等を分別し、簡去し擇するを云ふ。

【四六】解脫。梵に木底(Mukti)木叉(Mokṣa)の譯。縛を離れて自在を得る義、惑業の繫縛を解き三界の苦果を脫すること。

【四七】解脫知見。五分法身の一。己が實に解脫(前項を見よ)せしを知るなり即ち後得智なり。

【四八】諸法實相。一切の諸法の眞實の體相の意。法華經方便品に「唯佛と佛とのみ乃し能く諸法實相を究盡したまへり」と。諸法は世間・出世間の一切の萬法にして即ち差別の現象隨緣の事を言ふ。實相とは其の眞實の體相にして即ち平等の實在、不變の理を云ふ。色心實相、方法一如、色香中道即事而眞等は同義の異稱也。大智度論卷三十二に「實相とは各々の相の中に於て分別して求むるに實に不可得なり不可破なり(中略)地若し實に是れ堅相ならば何を以ての故に膠蠟等の火と會する時、其の自性を捨てんや(中略)是の如く推求するに地相則ち不可得なり若し不可得なれば其の實皆空、空は則ち是れ地の實相なりと。

精進せん。

佛阿難に告げたまはく、且く置きて問ふこと莫れ、所以はいかん、佛の無量知所說の經典すら爾の時の比丘尚信ずること能はず、況能く勤行せんや、阿難よ、如來の有爲法の中に於ける所有智慧を、一切[一]辟支佛、[二]阿羅漢等も解知すること能はず。阿難よ、如來所知の法、若し汝が爲めに說かば、汝則ち迷悶せん。何況んや是の人、當に能く之を信ずべけんや。如來今に於いて是の如きの經を說く、爾時の癡人猶信ぜざるべし。何況んや能く說く所の罪報を信ぜんや。阿難よ、法應當に爾るべし。自身是れ惡にして餘も亦惡なりと謂ふ。如今の第一懈怠の比丘にすら爾の時の第一精進の比丘も及ぶこと能はざる所なり。若し所持の戒、威儀、智慧も相比(くらぶる)ことを得ず。如來若し此の人の所行を說かば、一切過惡轉じて身の受くる所なり。是の人信ぜずして更に重惡を起さん。汝等若し聞かば亦憂怖を得ん。其の受くる所の罪惡を量ること能はず。[三]阿難よ、如來の深結は受くる者有り難く、意に於いて云何。好床茵褥、豚子樂しむや、いなや。いななり世尊よ。阿難よ、我が阿耨多羅三藐三菩提は、此の法深妙にして智者の樂しむ所なり。是の人の信解通達すること能はずして、出家を得已つて自ら沙門と稱するも實の如く敎化を堪受すること能はず。此の法の中に於いて心を修むること能はず。滋味を得ず振手して去りて惡道に墮在せん。猶豚子の好床褥を捨つるが如し。何を以ての故に、阿難よ、是れ我が阿耨多羅三藐三菩提は甚深淸淨にして、化し難き者の能く信解する所に非ず。降伏し難き者、智慧なき者、滿じ難き者、養ひ難き者、破戒なる者、與(とも)に語り難き者、邪法に住する者、邪行を行ずる者、賤利を貴ぶ者、衣食を以て上とする者、威儀を破する者、戒德を破する者、墮頂なる者、弊惡なる者、懈怠なる者、小欲なる者、小精進なる者、無差なる者、耐差なる者、忽々として事業を營む者、沙門中の[四]旃陀羅、沙門中の白衣、沙門中の敗壞、沙門中の邪道を行ずる者、沙門に非ずして自ら是れ沙門なりと言ふ者、魔に呑まれたる者、外道の義と合す

【一】辟支佛。二一一頁參照。
【二】阿羅漢。二三一頁參照。
【三】阿難(Ānanda)。阿難陀と云ふ。佛十大弟子の一。多聞を以て第一と稱せられる略して阿難、慶喜と譯す。迦毘羅城釋氏の出にして提婆の弟。佛の從弟。第一結集に於て經を誦出す。
【四】旃陀羅。二〇二頁參照。
【五】阿耨多羅三藐三菩提。一八四頁參照。
【六】三千大千世界(trisahasra-mahāsahasram-lokadhātu-nah)。大千世界の事。小千世界の千を中千世界、中千世界の千を大千世界となす。故に三千大千世界即ち一世界たる日月、須彌山、四天下、四天王、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天、色界初禪の梵世天を千箇したるを一小世界。色界第二禪天之を覆ふ。此の小千世界を千箇合したるを一中千世界。色界第三禪天之を覆ふ。此の中千世界を千箇合したるを大千世界と云ふ。色界第四禪天之を覆ふ。中に百億の世界と百萬の二禪天一千の三禪天とあり之を三千大千世界。
【七】三毒。二四四頁參照。
【八】心行(Citta-carya)。心意所行の意。言語に對して心意の作用を云ふ。
【九】閻浮提(Jambū-dvīpa)。須彌四洲の一。須彌山の南方。

る者、説の如くに行ぜざる者、衆鬧を樂しむ者、散亂語を樂しむ者、魔事を共有せる者、魔に衰惱せらるゝ者、煩惱熾盛なる者、我見なる者、人見なる者、衆生見なる者、顚倒せる者、我が此の法に於いて若し能く信解通達せば、是の處あることなし。何を以ての故に、阿難よ、我が[五]阿耨多羅三藐三菩提は淸淨にして快大なり。此の惡人と相稱可せず。阿難よ。譬へば百千億[六]三千大千世界の中間曠遠なるが如し。此の弊惡人、沙門の法に遠きこと猶尙是の如し。况んや順忍を得んや、况んや涅槃を得んや。阿難よ、此の如き事は説くとも盡すべからず。當來の沙門は弊惡鄙賤にして深く慳貪を懷き、深く瞋恚を懷き、深く不信を懷き、[七]三毒熾盛にして[八]心行麁獷なり。制御すべきこと難し。阿難よ、譬へば、良田善く熟せば火を以て自ら燒くが如く、甘饍美食に而も自ら毒を著くるが如く、舍宅所有を火を以て自ら焚くが如し。應に爾りと爲んや、否や。否なり、世尊よ。阿難よ、是の如く未來世の癡人、我が法に因て以て供養を受くることを得、而も如來の功德を信解せず。又是の如き等の經を信ずること能はず。實の如く過を説くに堪忍すること能はず、自ら瘡疣を知りて而も我が説に逆ふ。是の如きの癡人は佛に依りて自活し、而も是の法に逆ふ。阿難よ、爾の時に[九]閻浮提の內是の如きの癡人其の中に充滿す。阿難よ、且らく置け、何ぞ此の愚癡の惡人を求め、徒らに生れ、徒らに老ひ、行ずる所惡事のみなるを用ひん。爾の時に阿難佛に白して言さく。世尊よ、當にいかんが此の經に名づくべき、云何が奉持すべき。

佛阿難に告げたまはく、此の經を名づけて佛藏と爲す。亦は[一〇]發起精進と名づく。亦は降伏破戒と名づく。亦は[一一]選擇諸法と名づく。當に之を奉持す可し。阿難よ、若し人是の經を誦持せば、得る所の功德無量無邊なり、所以はいかん、破戒の比丘、尙、信ずること讀誦すること人に敎ゆること能はず。况んや是の中に於いて歡喜の心を得んや。何を以ての故に、阿難よ、譬へば惡賊の王大臣に於けるが如し。敢へて自ら現に他の物を盜まざれば自ら賊と云はざるが如し。是の如く阿難

七金山と大鐵圍山の間にある大醎海の中にあり。漢字音贍部洲、琰浮洲、琰浮那、閻浮那提、閻浮提鞞波に作る。娑婆世界は此贍部洲の中に在り。

【一〇】發起精進。發起とは、菩提心を發起すること。佛果を求めんとする心の發るを云ふ。精進とは(Virya)。(一)懈怠に對しての語、勇猛勤策して惡を止め善を修すること を言ふ。(二)俗緣を絕ちて潔齊素食し佛門勤行に身を委ぬること。

【一一】選擇諸法。選擇とは、選とは遷捨遷取擇は簡擇と熟して事物を取捨するを言ふ。佛藏經の別名に選擇諸法經と言ひ以て諸法を取捨選擇する事を表す、賢劫經卷一(法供養品)に「選擇して困りて七十の正法に入れり、この選擇は竟に是れ三昧の威神なり」と。

【一二】法眼淨。聞法によりて能く眞理を見るを言ふ。淸淨法眼とも言ふ。五分律卷十五には憍陳如の佛説を解了せしことを記して「遠離、離垢、諸法の中に於て法眼淨を得たり」註維摩經卷一(僧肇)には「法眼淨とは須陀洹道なり、始めて道跡を見るが故に法眼の名を得」と。慧遠の無量壽經疏卷下には「須陀洹を成じて

よ、破戒の比丘、沙門に非ざる法を成就して、尚自ら是れ惡なりと言はず。況んや能く餘人に向つて說いて自ら罪人なりと云はんや。阿難よ、是の經の如きは、破戒の比丘隨つて聞くを得る時、能く自ら降伏し則ち慚愧あらん。持戒の比丘は自ら增長することを得ん。

是の經を說き給ふ時、無數の諸天は諸法の中に於いて[一二]法眼淨を得、惡魔及び諸の眷屬は皆大いに憂惱し、十六種の大坑に墮するが如く、大いに啼哭して言へり。瞿曇沙門は我を知り我を覺る。我常に長夜に、佛滅後に持戒者を破り破戒者を助けんと願ひ、諸の惡比丘をして佛法を知らしめんと欲し、但だ讀誦することを知る者は我佛法の中に於いて安隱の心を破らんと欲し、語りて此は佛法に非ず義趣あるなしと言はん。[一三]瞿曇今に於いて諸の天人大衆の中に在りて、是の法を守護して、我が所願を遮けりと。魔此れを說き已つて憂ひを懷き愁惱して忽然として現ぜず。爾の時に世尊、此の事を明了ならしめんと欲して、而も偈を說いて言はく。

我が說く所の諸の法は、第一義に隨順せり。有爲の不堅牢なること、夢の見る所の如し　我今此の法を說いて　未來の事を呵責し　第一義に隨順して　諸の惡人を防制せん。爾時の惡世の中に　比丘心燒動して、諍訟して是非を生じ　涅槃を得ること能はず、沙門及び白衣　說く所異りあることなし爾時に我が此の法は、俗の法と別なるなし、諸の在家のために說いて　汝我が希有なるを知り　我、佛法に於いて[一四]初道第一果を得たりと　更に比丘ありて云はん、我が說も是に異らず　此の人我と同じ　我は眞に法を見る者なり。法を見る者も見ざる者も、白衣を致さんが爲めの故に　各自らの法の中に於いて　而も其の議論を生ず　一切有と言ふものあり、一切空といふものあり、正道に任せずして　性惡にして我が法を毀つ　汝是の人に近づく事勿れ、　來りて我に親附すべし　汝のために眞の法を說かん　我の如く疾かに道を得んと是の如きの諸の音聲を　遠近に流布す、心を同じうする者は黨して助け、我か敎ゆる所の法を

四眞諦を見るを法眼淨と名づく」と。

【一三】瞿曇。憍答摩(Gautama)或は瞿答摩、憍答摩、具譚、俱譚、瞿曇に作る。古來地最勝、暗牛、泥土、地種、牛糞種、日種或は滅惡と譯せられる。佛敎の開祖釋迦牟尼の姓なりと。

【一四】初道第一果。四果の第一果(須陀洹果 srotāpanna) 預流向より進んで第十六心に至れば修道の始めにして梵語の須陀洹は舊譯に於て入流と云ひ新譯には預流といふ。「大毘婆沙論卷四十六に流は謂く聖道、預は謂く入なり」と。

【一五】有漏。sāsrava (巴 sāsava) 漏とは煩惱の異名、煩惱は有情の六根門より窮りなく漏泄し有情を生死に留住し流轉せしむるが故に言ふ。有とは、小乘の義にして煩惱を隨順し增上する法を有漏と云ふ。大乘の意にては俱の義にして煩惱と俱生但滅互に相增益する法を言ふ。

【一六】法王(dharmarāja)。佛の美稱、王は最勝と自在との義、佛は法門の主として以て衆生を化するに自在なるが故に。無量壽經に「佛は法王なり、尊きこの衆聖に超ゆ、普く一切天人の師となり心の所願に隨ひ皆得道せしむ」と法

破ること譬へば諸の惡賊の　惡を同じくする者共に侶と爲り　反逆して國土　城邑及び聚落を破るが如し　爾時に諸の比丘　開化し得べきこと難し　鈍根にして深く少智に　貪著して我人に依る　如來の隨宜の所説の法を解せず、[一五]有漏を説いて增上し　自ら是れ得道すと言ひ　大會の中に在りて多く諸の比丘ありて　皆智慧ありと云ひて　智を求むる者一人もなし、若し是の大會の中に　或は一の比丘ありて　如實に智慧あらば　皆呵して無智なりと云はん　諸天神等は[一六]法王の道散壞するを見て　咸く皆憂惱を懷きて　相對して啼泣せん、中に諸の樹神ありて樹より地に墮し　咸な言へり[一七]釋師子の妙法今悉く壞し　佛寶も法僧寶も　世に在ること猶未だ久しからざるに　如何んが今日に於いて　悉く皆當に散壞すべきや　我等復如來所説の法を聞かず

癡冥にして知る所なく　上道今將に滅ぜんとす　爾の時に諸の地神　皆大音聲を出す　如來の大法炬　今に於いて當に滅盡すべし　諸天諸神等　後に悔ゆる所ある莫れ　而も言へり見聞せざるに、佛道今已に滅ぜり。　如來は無量劫に　自ら利し亦人をも利し　諸の苦惱を忍受して　發願して成佛を得玉へり　釋師子大聖　諸の衆生を度し玉ふ者　清淨微妙の法　今將に滅盡せんと欲す　癡惡の諸の賊等は、今に於いて當に力を得べし　慈愍の心あるなく　互に相謗りて毀惱し　魔使及び魔民と　鈍根にして開化し難きもの　諂曲、懈怠の心　瞋恚して佛法を壞せん但だ空林の中に於て　自ら是れ羅漢なりと言ふも　坐禪して三月を滿じ　禪無し況んや道を得んや　得ざるに道を得たりと言ひ、死しては涅槃に入ると言ふ、　衆人は信じて塔を起す、而も自らは地獄に入らん　是の如く癡空の者、互に共に相輕恚す、我無量劫に於いて得る所今盡く壞せん、爾時に[一八]虛空神　共に釋師子の　妙法毀壞し敗るを見て聲を發して皆啼泣す。

[一九]四天王此れを聞き　皆共に憂惱を懷き、時に諸の天神と　僉々く皆共に手下す、阿羅迦槃城の

[二〇]夜叉神衆も來り僉く皆大いに啼哭して　畏るべき音聲を出す　諸の七寶の城あり、　嚴飾極め

華經譬喩品に「我は法王たり法に於て自在なり衆生を安穩せんが故に世に現ぜり」と。

【一七】釋師子。釋氏、佛門に歸入せし者の稱、釋は釋迦の略稱にして佛の種姓即ち釋迦牟尼の法孫たりとの意より佛門に出家せる者を釋子（Śākya-putra）又は佛子（Buddha-putra）とも言ふ。

【一八】虛空神。は（神名）梵語、舜若多（Śūnyatā）の譯、空を走る神、虛空（ākāśa）他を礙へず他にも礙へられず開避することなく一切の法を容受するもの即ち空間云ふ。小乘にては無爲法、虛空無爲と稱するあり。經論中譬喩に用ひらるること多くその義も多し、（一）横遍の義。横に無邊際なるの意。（二）竪常の義。竪に無變易なるを言ふ。（三）無碍の義。何者も虛空を障碍することなきを云ふ。（四）無分別の義。親近疏、遠近、愛憎の差別なきを云ふ。（五）容受の義。寬く一切を含容して餘す所なきを云ふ。

【一九】四天王。二三七頁參照。

【二〇】夜叉神（Yakṣa）。八部衆の第三、又藥叉、閱叉に作り、譯して威德、暴惡、勇健貴人又捷疾鬼、祠祭鬼と云ふ。羅刹と共に毘沙門天の眷屬と

て微妙なりしも　色を失ひて皆土の如く　諸天は住することを樂しまず　悲號して大いに啼哭し　處々より皆來集す、各共に憂惱を懷き　相見れども云ふこと能はず　宛轉として臥して地に在り　是の如きの音聲を發す、　共に閻浮提に行き　是の大怖畏を見る、佛子は共に鬪諍し法を破りて分散すと　皆天上より來りて　共に我が生處に詣る　天神の諸の寶城は　七日光色無し　各共に坐して啼泣し　七日滿ずれども起たず　如何なるか大精進　勇猛世間の尊よ、我等は此に住し給ふを見しに　今當に復見ざるべきかと　咸共に祇洹に詣り　相對して啼泣す佛此にて四諦を說き玉ひ　我等は此の中に聞けり　世間將に盲冥にして　互に相經んじ恚慢し但だ諸の惡業を起して　還惡道に墮せんとす　諸天の妙空殿　惜しむべし今將に空ならんとす

我等諸の天神　復救度する者なしと　爾時に閻浮提　毀壞して威色もなし　經行處の樹下にも山窟にも善人なく、一切諸の世間、悉く皆大嬈動し　諸天及び大神の　音聲怖畏すべし　爾時に忉利天は　手を擧げて大いに悲哭し　各空殿の中に於いて　聲を發して號哭す　諸天の空殿の中には　皆我を稱說して云ふ、永く大聖王の我が爲に　法を說く者を離ると　忉利天は六月(二二)修陀食を食はず　伎樂の音を聽かず　憂恚すること喪子の如し　諸の(二三)阿修羅衆　此の如きの事あると聞き　皆共に相命じて集まり　忉利天を攻めんと欲す、　時に諸の閻浮王　皆共に相征罰し　諸天阿修羅も　亦皆共に戰鬪す　爾時に諸の比丘　及び諸の比丘尼　多く惡道の中に墮し　少しく免るゝ事得る者有るも　破戒の諸の白衣は　惡比丘に隨順す　是の因緣を以ての故に　皆惡道に趣かん　(二四)諸の惡優婆夷は惡師に隨順するが故に　亦復惡道に入り　(二五)世間皆嬈動せん　有は城聚落に入り　有は山林の中に至り　東西に憂惱を懷きて　以て其の壽命を損ぜん

爾時に惡賊多く　多く諸の嶮道あり　五穀を種ゆるも生ぜず　若し生ずとも虫の食ふ所となり　爾時の世の人民　飢饉にして多く餓死せん　死して餓鬼の中に墮し　久しく諸の苦惱を受

なりて北方を守護す。註維摩經卷に鳩摩羅什の釋を揭げ「夜叉とは秦に譯して貴人、輕疾といひ三種あり。(一)は地に在り(二)は虛空に在り(三)は天の夜叉なり、地の夜叉は只財に施を以てするが故に空に飛ぶ能はず、天の夜叉は車馬を以て施すが故に能く飛行す、佛の法輪を轉ずる時地の夜叉唱へて空の夜叉聞き、空の夜叉唱へて四天王聞き、是の如にして梵天に至る」と。

【二一】祇洹。祇樹給孤獨園。(Jetavana-anāthapindu-syārāma)の略にして祇陀林、逝多林、勝林の名稱を用ふることあり。祇樹は破斯匿王の太子逝多の苑林の義。給孤獨とは舍衞城の長者にして波斯匿王の主藏吏たり。須達の異稱なり、須達此處に精舍を建て佛並に僧衆に献じたる所也。

【二二】修陀食。樹液より成る甘露味の一種、須陀飯蘇陀味と言ひ、天甘露食と譯す。玄應音義卷五に「須陀食とは或は修陀と言ふ、天食なり」と。

【二三】阿修羅(Asura)。六道の一。漢字音、阿須羅、阿素羅、阿蘇羅、阿素洛、阿須倫。阿素羅に作り略して修羅、非天、不端正、無妙戲、又無酒、不飲酒等と譯す。衆相山中又は

く　時の人佛に施せる物　塔及び四方の僧のものを　輙ち皆共に分ちて食はん　我が後の僧是の如し　阿難よ、汝等當に　力を勉め勤めて精進すべし　後の末世是の如き　衆の惡事を見ること莫れ　一切の諸の凡夫　愚癡にして智あるなく　諸の凡夫の業を起し　疾く惡道の中に墮せり汝等勤めて讀誦せよ、是を智慧の因と名づく　若し智慧の爲めの故ならば、疾く勝處に至るを得ん　我は世の正見を學せり　汝も亦我が如く學せよ　世の障礙の事を斷じて　疾く勝處に至るを得ん、勤めて[二六]八聖道を行せば　當に疾く涅槃を得べし　思量して自利を求めよ、我が說く所是の如し、是の劫過ぎ去りて後、六十劫佛なし　尙佛の音聲なし、況んや得道する者有らんや、時に世の諸の人民、飢餓に逼迫せられ　孝慈の心あるもの無く　母を食ひ兒の肉を食ひ　時に諸家子を生ぜば　常に護りて他の食はんことを恐る　誰か是の惡事を聞いて　復生死の業を起さんや　諸の苦は癡を本と爲し　五陰は貪を本となす　若し五欲を樂しまずんば　當に諸の貪著を斷ずべし　福の果報を受くる時、深く貪著の心を生じ　貪著の因緣の故に　惡を起して惡道に墮せん　無漏の法は空寂なれども　世間に牢堅なし　若し是の如く知る者は、汝等應に疾く行ずべし　無心に心想を生じ　而も自ら大いに驚畏して　我作すとせんや作さずとせんや　是の事云何とせんやと　是の如き諸の凡夫　思惟して籌量し　我當に云何が作すべきと　是の如く常に啼泣し　陰無うして陰想を生じ　我無くして我想を生ず　自想空の法を聞くとも　是の如く亦迷悶し　佛の如實の　所說の諸陰の義を知らず　聞けば則ち以て定と爲し畏處に畢想なし　我去來今に　諸陰皆空寂にして　三世悉く平等なること、猶虛空の如しと說けり　所有(あらゆ)の過去佛も　亦自想空なりと說き　未來世の諸佛も　亦自想空なりと說かん　我今世に出でて　亦一切の法　自性も自想も空なりと說く　三世に異りあることなし　當來の人佛所說の實義を知らず　我衆生に貪著し　常に惡道に墮せん　當來の世是の如く　大惡甚だ畏

大海の底に居りて常に三十三天と戰ふ天趣(或は鬼畜)の類なりと。

【二四】優婆夷(Upāsikā)。七衆の一。四衆の一在家の信女を言ふ、漢字音優婆私柯、優婆賜迦、鄔婆斯迦等に作る譯して近事女、近善女、淸信女等と言ふ。諸の善法に親近し修事し比丘尼に親近し承事し三歸を受け五戒に住したる者なり。

【二五】世間。世は隔別の義、間は間差の義、種々の諸法差別し、雜亂せずして存在するを云ふ。又世は遷流の義、過去、未來、現在の三世のために遷し流さるる諸法の差別して存在するを云ふ。又は世は可毀壞の義、有對治の義なり。是れ正しく有漏法の別名とする義なり。有漏法は有爲法なれば必ず生、住、異、滅の四相のために遷され刹那々々に毀壞さるゝが故に可毀壞の義なり。

【二六】八聖道。二四六頁參照。

るべし　汝等勤めて精進して　是の惡世を見ること莫れ

佛是の經を說き已つて、長老舍利弗及び諸の比丘、一切の世間天人大衆は佛の所說を聞いて皆大いに歡喜し佛語を信受せり。

佛藏經　終

諸法無行經解題

一、經錄より

一、出三藏記集第二、羅什譯經下に「諸法無行經一卷」

二、同集第五・新集抄經錄第一に竟陵文宣王抄として「抄諸法無行經一卷」

三、隋法經等衆經目錄第一・大乘修多羅藏錄第一に「諸法無行經二卷、後秦弘始年羅什譯」

四、同錄第四・五分疑僞の中に「諸法無行經一卷」

五、靜泰衆經目錄第二・大乘經重翻の中に「諸法無行經二卷三十一紙、後秦弘始年羅什譯。諸法本無經三卷三十八紙、隋開皇年闍那崛多及笈多等於大興善寺譯皇朝奏行、右二經同本異譯。」

六、大唐内典錄第三、羅什譯の下に「諸法無行經二卷、或一卷、見二秦錄」

七、同錄第四・求那跋陀羅譯の下に「諸法無行經」

八、同錄第六・大乘重譯の部に「諸法無行經二卷三十一紙、後秦弘始年羅什譯諸法本行經三卷四十八紙、隋開皇年崛多等於大興善寺譯、右二經一本異譯」

九、同錄第九・歴代衆經擧要轉讀錄第四に「諸法無行經二卷三十一紙、後秦羅什譯、右一經再譯、隋崛多所翻、爲諸法本無經三卷、詞力未足、同本故略」とありて隋譯は葬られた形である。

十、同錄第十・歴代所出疑僞經論錄第八に齊竟陵王所抄として「抄諸法無行經」をあげ之は抄本にして僧祐、長房の諸錄が之を疑經とするは誤れりといつてゐる。

十一、歴代三寶紀第十、求那跋陀羅譯の中に「諸法無行經一卷」

十二、同紀第十三・大乘修多羅有譯中に「諸法無行經二卷」

十三、同紀第八、羅什譯の下に「諸法無行經二卷　或一卷　見二秦錄」

十四、武周刊定衆經目錄第三・大乘重譯經目卷二に「諸法無行經一部二卷三十二紙、右後秦弘始三年沙門羅什於長安逍遙園譯、見長房錄。諸法無行經一卷、右宋帝代沙門求那跋陀羅譯、出長房錄。諸法本無經一部三卷三十八紙、右隋開皇十五年沙門闍那崛多及笈多於大興善寺譯　見長房錄、以前三經同本別譯」

十五、同錄第十三・見定流行入藏錄中に經の名を本無經と共につらねてある。

十六、古今譯經圖紀第三、羅什譯の下に「諸法無行經二卷」

十七、開元釋敎錄第四、羅什譯の下に「諸法無行經二卷　或一卷　與隋崛多諸

法本無經等同本、初出、見二秦錄及僧祐錄」

十八、同錄第十一に無行、本無二經をあげ「右二經同本異譯、前後三譯、一譯闕本」とある。

十九、同錄第十九・入藏錄上の中に、無行、本無二經の名を出だす。

二十、貞元新定釋教目錄第六、羅什譯の下に「諸法無行經二卷、或一卷、與隋崛多諸法本無經等同本、初出、見二秦錄、及僧祐錄」

二十一、同錄第二十一、大乘重譯の下に「前後三譯、一譯闕本」として隋譯を第三譯としてある。

二十二、同錄第二十四有譯無本錄中に「諸法無行經一卷、宋天竺三藏求那跋陀羅譯、第二譯、右一經前後三譯、二存一闕」

二十三、至元法寶勘同總錄第三に本行、本無二經をあげ「前後三譯、二具一缺與蕃本同」とある。

二、內容一般

法寶標目に云く「諸法無行經二卷と諸法本無經三卷と、右は本同譯別なり。佛、獅子遊步菩薩、文殊等と問答したまひ、一切の法性は畢竟空寂にして根本なく形相なく生滅なく依住なし。ま法門に入れば疾く無生法忍を得と說き、又た文殊と佛と往昔の因地に法性は寂滅眞空なりと說ける菩薩を毀謗したるが故に久しく大地獄に墮せりと說く」と。この經が特に文宣王により抄經として流布せられ、隋譯に到るまで三譯を重ね、さらに「佛說大乘隨轉宣說諸法經三卷」として宋明教辯才法師充譯經三藏沙門紹德等によりて奉詔譯せられて第四譯に及びたることはその大乘法門としての流行の程がわかる。特に我が日本佛教に於いて比叡山天台宗新僧團の獨立に際し、顯戒論の主張の重要なる典據となり、「未だ佛の智慧を得ずして人を評すれば罪過を得る明據を開示す、第四十二」と「入音聲慧法門の明據を開示す、第五十四」と「未だ音聲法門に入らざれば障礙の罪を犯す明據を開示す、第五十五」の三章にはすべてこの經をそのまゝ引文してある。凡夫の宗敎なりと同僚から誹謗せらるゝ中に敢然として立つて、凡夫の宗敎こそ正統の佛敎なりと主張し「貪欲これ法性」と全人間生活をそのまゝ肯定主張したる傳敎大師を後援したるところに此經の面目がある。大乘僧團の獨立の原理としての經と見るべきである。

三、國譯について

この國譯は石井亮甕、飛鳥井舜達兩氏を煩はす。

昭和八年四月三日

譯者　一宮守人識

諸法無行經

姚秦龜茲の三藏　鳩摩羅什譯す

巻の上

是の如く我聞けり。一時佛[一]王舍城の[二]耆闍崛山の中に在して、大比丘僧五百人と共に倶なりき。菩薩九萬二千人あり。其名を衆德莊嚴[三]菩薩摩訶薩・師子遊歩菩薩・光無障淨王菩薩・高山頂自在王菩薩・愛喜淨光菩薩・光徹日月菩薩・妙淨髻菩薩・身出蓮華光菩薩・梵自在王音菩薩・遊戲世師子王音菩薩・金色淨光威德菩薩・柔軟身菩薩・金色相莊嚴身菩薩・十光破魔力菩薩・諸根威儀善寂菩薩・德如高山菩薩・天王聲菩薩・法力自在遊行菩薩・山德淨身菩薩・妙德菩薩摩訶薩と云ふ是の如き等の九萬二千人なり、爾の時師子遊歩菩薩は是の大會を見て卽ち座より起ちて偏へに右肩を袒ぎ右膝を地に著け合掌し佛に向つて偈を以つて問て曰く、

[四]世尊大尊師よ、名德の稱無量なり、今此こに大衆集る、願くは寂滅の法を說き給へ、邪見諸の愛慢、嫉妬瞋恚の性は、云何が卽ち是れ道なる、大音方便の說は、云何[五]涅槃の相なり、世法と異なることなく、諸法二有ることなく、大悲爲に演說し給へ、云何が諸法の法なる、畢竟じて凝ある事なく、其法涅槃の如く、亦た[六]觧脫に同じ、縛無く亦觧も無し、亦復虛空の如し、[七]迦羅頻伽の音、大梵淸淨の聲、身色は天金に喩へ、淨命無量の德、實相の法を演說して、畢竟じて縛觧無し、云何此の五蓋にして、而も菩薩に等しきや、云何が是れ菩薩にして、卽ち諸の業性に同じきや、是れ、法是れ非法、云何がして同一相にして、是の如く畢竟淨なる、唯だ願はくは爲めに演說し給へ、數無く非數無く、諸法は畢竟滅なり。[八]一切種智の相、及び菩薩の

【一】王舍城(Rājagriha)。(巴・Rājagaha)中印度摩掲陀國上代の首府漢字音で羅閱祇・祇伽羅等佛の屢々止住し教化せし所。現今パトナ市の南方。

【二】耆闍崛山梵音(Grdhrakūṭa)。(耆闍崛)巴利語を(Gijjhakūṭa)をうつす、又伊沙掘等山の名。譯して靈鷲鷲峰等と作す山頂の形鷲に似又山中鷲多し故に言ふ。王舍城の東方。釋尊說法の地。

【三】菩薩摩訶薩(Bodhisattra-mahāsattra)。佛果を志求する大有情と譯す。菩薩とは菩提薩埵の略。摩訶は大、薩埵は有情なり。

【四】世尊。梵語、路迦那他(Lokanātha)。譯、世尊。佛尊號。佛は萬德を具するを以て世に尊重せらる故。又世に於て獨り尊きが故に。阿含經及び成實論、之を佛號中の第十とし、上の九號を具するを以つての故に世尊と名く。涅槃經、智度論、之を十號の外にをく。

【五】涅槃は梵音(Nirvāṇa)。又泥曰、泥畔、涅槃那等と言ふ。舊譯の諸師は滅、滅度、寂滅、不生、解脫等と譯し、新譯にては、利曬縛喃と云ひ圓寂と譯す。滅とは生死の因果を滅する義、滅と譯すを正譯

道、二法云何が無なる、惟だ願くは爲に演說し給へ、作無く非作無く、著無く非著無く、畢竟じて衆生無く、諸法の中礙無し、戒無く忍辱無く、亦毀戒有ること無し、智無く亦慧無し、亦智無きに非ざるなし、是の法常に清淨なり、唯だ願くは爲に演說し給へ、云何が一切法、寂滅にして虛空の如くなる、心心數の法無く、見無く證修斷す、一切の諸の衆生、同く虛空の相の如く、一相の法も亦た無く、心行も亦得る事亘し、諸法に生滅なく、學無く[九]羅漢無し、亦[一〇]辟支佛も無く、亦菩薩を求むる者もなし、住無く依止無く、來も無く亦去も無し、諸法に動相無く、常住なる事[一一]須彌の如し、相もなく亦色も無く、色の相卽ち是れ道なる、色相と佛道と一なり、是の如き法願くは說き給へ、云何が佛法無く、亦衆僧有るなく、この三寶一相なるや、唯だ願くは爲に演說し給へ、空無く無相無く、亦有も無く作も無く、合ならず又散ならず、名相の法も亦無く、諸法畢竟空にして、響の作者無きが如し、生無く無生も無く、滅もなく往來も無し、天無く龍神、[一二]夜叉[一三]緊那等無く、人無く地獄も無く、餓鬼畜生も無く、衆生[一四]五道も無し、願くは是の如きの法を說き給へ、導師佛世尊よ、外道邪見のもの、その演說する所有るや、云何が等しくして二無き、諸の文字語言、是の法皆一相なる、世尊大慈愍もて、願くは是の法門を開き給へ。 二

爾の時に世尊師子遊步[一五]菩薩摩訶薩を讃して言はく、善い哉、善い哉、[一六]善男子よ。汝が問ふ所は甚た希有なりと爲す。一切世間の信じ難き所、善男子よ、止みなん止みなん、問ふこと勿れ、所以は如何ん。新發意の菩薩は此の空の見、無相の見、無作の見、無生の見、無所有の見、無取相の見、佛の見、[一七]菩提の見に於て及ぶ能はざる所也。善男子よ。此の如き法は應さに新學の菩薩の前に在りて說くべからず、何を以ての故に、若し是の法を聞かば或は善業を斷じ、佛道の中に於て則ち邪道を行じ、若しくは[一八]斷滅に墮し、若しくは計常に墮し、[一九]如來の何なる方便を以て宜しきに

とす。

【六】解脫は梵に木底(Mokṣa)。譯、解脫。縛を離れて自在を得る義。惑業の繫縛を解き三界(欲界、色界、無色界)の苦果を脫すること。又涅槃の別稱、涅槃の體は一切の繫縛を離るるが故に。

【七】迦羅頻伽鳥の名。(Kalaviṅka)。又歌羅頻伽。羯羅頻迦。迦尾羅等と作す。譯して好聲。和雅。其の聲、美音にして和雅、人をして厭ひ無からしむと。

【八】一切種智は三智の一。佛智なり。三智は智度論の所說にして一に一切智、二に道種智、三に一切種智。佛智圓明にして總相、別相、化道、斷惑、一切種の法に通達するもの。法の勝劣に依れば一切種智は他の二智を兼ね含むなり。著は心情事物に纏綿して離れざるを云ふ。愛著、執著、貪著等。

【九】羅漢(Arhat)。(N.Sg.=m.Arhān)阿羅漢の略。小乘の極果。其の位名も阿羅漢と云ふ。譯して、一に殺賊。煩惱の賊を殺す意。二に應供、人天の供養を受くべき意。三に不生。永く涅槃に入て再び生死の果報を受けざる意なり。斯る意の位に在る小乘の佛徒を稱して羅漢と云ふ。

隨ひて說く所なるやを知らず　爾の時に師子遊歩菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊よ、世間を哀愍して願くは必ず爲に說き給へ、當來世の中に菩薩有つて空の見、無相の見、無作の見、無生の見、無所有の見、無取見の見、佛の見、菩提の見なるもの是れ空、是れ無相、是れ無作なりと分別し、好んで常に學を讃し、事業を勤め、文字に樂著し、辯說を以て（一一）妙と爲し、名利を貴む、是くの如きの人如來の是の無文字の法を畢竟淸淨なりと說くを聞きては當に是の諸の見を捨つべし。是の諸の菩薩は衆生の能く信解する所に隨つて（一二）方便力を以て爲めに法を說き、（一三）少欲知足を說くと雖も、而も以て最なりと爲さず、經戒を說くと雖も亦以て最なりと爲さず、在衆の過惡を說くと雖も亦一切法の遠離の相を知り、常に獨處の憒鬧に在らざるを稱讃すとも而も以て最なりと爲さず、（一三）發菩提心を讃すと雖も而も心性卽ち是れ菩提なりと知る。大乘經を讃すと雖も而も一切諸法は皆是れ大相なりと知り、菩薩の道を說くと雖も而も阿羅漢・辟支佛・諸佛を分別せず、布施を讃すと雖も而も布施の平等の相に通達し、持戒を讃すと雖も而も諸法は同じく是れ戒性なりと了知し、（一四）忍辱を讃すと雖も而も諸法の無生無滅無盡の相を知り、精進を讃すと雖も而も諸法の不發不行の相を知り、種々に禪定を讃歎すと雖も而も一切の常定の相を知り、種々智慧を讃すと雖も而も智慧の實性を了知し、貪欲の過を說くと雖も而も法に貪とす可き者あるを見ず、瞋恚の過を說くと雖も而も法に瞋とす可き者あるを見ず、愚癡の過を說くと雖も而も諸法の無癡無礙なるを知り、衆生（一五）三惡道怖畏の苦に墮すを示すと雖も而も地獄・餓鬼・畜生の相を得ず、是の如く諸の菩薩は、衆生の能く信解する所に隨つて方便力を以て而も爲めに法を說くと雖も而も自ら一相の法を信解す、所謂ゆる空無の相・無作・無生・無所有・無取の相なり。世尊唯だ願くは是の不可思議方便の法を說き給へ、一切の聲聞、辟支佛、及び新發意菩薩の能く及ばざる所、但だ甚深一相の法を信解せん者の爲めに之れを說き給へ、爾の時佛、師子遊歩菩薩摩訶薩に告げて言はく、善男子よ、汝今諦かに聽き、善く

【一〇】　辟支佛。辟支迦佛陀の略。(Pratyeka-buddha)。略して辟支、辟支迦佛、辟支佛と云ひ、又鉢羅翳迦佛陀に作る。舊譯に緣覺と譯し、新譯に獨覺と譯す。智度論、二名倶に存す。身無佛世の時に出て性寂靜を好み。加行滿じて師友なく自然に獨悟すれば獨覺と名づく。又內外の緣を觀待して（內は十二因緣）外は十二因緣（飛花落葉〔無常〕聖果を悟れば緣覺と名づく。

【一一】　須彌(Sumeru)。又修迷樓、蘇彌樓、須彌樓、須彌、に作る。新譯に蘇迷盧。山の名。一小世界の忠。妙高妙光、安明、善積、善高等と譯す。器世界(全宇宙)を最下を風輪とし、水輪、金輪、地輪、とし其の上に九山八海あり、持雙、持軸、擔木、善見、馬耳、象耳、持邊、須彌の八山八海と鐵圍山。其の中心の山卽ち須彌山なり。水に入ること八萬由旬、水を出づること八萬由旬の妙高山なりと。

【一二】　夜叉(Yaksa)。又閱叉と云ふ。新譯に藥叉、夜乞叉、に作る。譯して能噉鬼、捷疾鬼、輕捷、秘密等。

【一三】　緊那羅は緊那羅の略(Kinnara)、又緊捺羅、緊陀羅、眞陀羅、緊捺洛等。舊譯、人非人、疑神、新譯、歌人卽ち

之を思念せよ、吾れ當さに汝が爲めに此の義を解說すべし、唯だ然なり、世尊よ、我れ當さに之を受くべし、爾の時世尊、偈を以つて答へて曰はく。

若し成佛せんと欲せば、貪欲を壞すること勿れ、諸法は卽ち貪欲なり、是れを知れば卽ち成佛す。貪欲及び恚癡は、能く得する者有ること無し、是の法は皆空の如し、是れを知れば卽ち成佛す。見と非見は一相なり、著と不著も亦た然なり、此の無佛無法、是れを知るを大智と名づく。人の夢の中に於て、道を得て衆生を度するが如し、道無く衆生無し、佛法の性も亦然なり。道場も所得無く、若し得んとすれば則ち有らず、明と無明と一相なり、是れを知るを世尊と爲す。衆生卽ち菩提なり、菩提卽ち衆生にして、菩提と衆生と一なり、是の如きを世尊と爲す、譬へば巧なる幻師の、種々の事を幻作するが如し、所見に實有る事無く、無智の數若干にして、貪嗔癡は幻の如し。幻は[二六]三毒に異らず、凡夫は自から、我れ貪す我れ瞋恚すと分別す。是の如き愚癡の人は、則ち三惡道に墮せん、實相には貪恚なく、癡も亦不可得なり。如幻の法を分別して、自から煩惱の熱を[二七]生ず、實相には煩惱も無く、衆生も無く佛も無し。無生の法を分別して、凡夫は作佛を願ふ、諸佛の法を見ず、亦た衆生を見ざるなり。是の法の相を知る者は、疾やかに衆生の尊とならん、若し人菩提を求めんに、則ち菩提ある事無く。是の人菩提を遠ざかること、譬へば天と地との如し、諸法の如幻を知らば、速かに人中の上とならん。若し人[二八]戒を分別せんに、是れ則ち戒あることなし、若し戒を見るものあらば、是れ則ち戒を失すと爲せん。戒と非戒とは一相なり、是を知るを導師と爲す、夢に[二九]五欲を受けて、娛樂して自から快樂し。分別して女色を見るも、此の中實に女無きが如し。戒と毀戒とは夢の如くにして、凡夫は二と分別すれども、實には戒も毀戒も無し、是れを知るを導師と爲す。凡夫は[三〇]名字に著し、語言の性を知らず、名字と非名字と、是れを知れば[三一]無生を得。自から是れ

樂神の名。八部衆の一。

【一四】五道。有情の往來する所なれば道と言ふ。五處あり。一に地獄道、二に餓鬼道、三に畜生道四に人道、五に天道。五趣に同じなり。

【一五】菩薩摩訶薩。二六五頁參照。

【一六】善男子。佛常に在家出家の男女を通じて善男子善女人と云ふ。善とは佛を信じ法を聞くものを美稱するなり。

【一七】菩提(Bodhi)。舊に道と譯し、新譯に覺と譯す。道とは通の義。覺とは覺悟の義。

【一八】斷滅。諸法は因果別なれば常にあらず、因果相續すれば斷にあらず、この因果相續の理を撥無するを斷滅の見といふ。卽ち斷見。邪見中の極惡に屬す。

【一九】如來は梵語、多陀阿伽陀(Tathāgata)一に如來と譯す。佛十號の一。如は眞如なり、眞如の道に乘じ因より果に來りて正覺を成ずる故に如來と名づく。之眞如の如來。又眞如の道に乘じ三界に來りて他を乘るゝ故に如來と云ふ。是れ應身の如來。又諸佛の如くにして來る故に如來と名づく、此義前二身に通ず。

【二〇】妙。宮本には好。

【二一】方便力。方便の力用なり。方便とは、梵語、傴和(U

菩薩なりと謂ひ、讀誦し人の爲めに說かん、己が身所行無く、但だ種性に依恃し、但だ經を讀んで道を求め、常に他人の過を見て、威儀文頌に著し、人に敬せられて自ら貴び、種姓文頌を恃みて、法の實相を知らず、是の如きの人等は、終に佛を得ること能はず、爲めに諸法の空を說くとも、惡心にして諍訟を好む、是の人は佛法無く、亦た菩提有る事有し、瞋と忍と同相なるを知りて、是れに達すれば終に瞋らず、衆生の性を了ぜざれば、是れ則ち瞋恚を生ぜん、自から菩薩なりと言ふ者、復た是の如きの說を作さん、我れ一切を慈悲して、成佛して衆生を度せんと、他の惱みに瞋恚を生じ、忿を懷きて與に語らず、常に他人の過を求めて、鬪諍訟を樂しむ、亦た忍辱を稱歎し、及び諸法の空を說くとも、我心憍慢多くして、常に他人の過を觀じ、美味に貪著して、晝夜に五欲を念ふ、是の人城邑に入り、自から人を度す者なり、衆生を悲念して、常に爲めに饒益を求むと說く、口に是の如く說くと雖も、而も心は好んで他を惱ます、我れ未だ曾つ見聞せず、慈悲にして惱を行じ、互に共に相ひ瞋惱し、阿彌陀に[三三]願生するものを。　若し人恒沙の如く、惡にして刀杖を加へられんも、是の如きに皆能く忍べば、則ち淸淨土に生ぜん。　佛土と非佛土と、虛空の相の如しと知り、國土及び國土の功德を分別せず、是の如きの人等、能く諸佛の國に生ぜん、自ら衆惡を忍び、菩薩を見る事佛の如しと云ふとも、我れ未だ曾て、佛相にして瞋る者を見聞せず、各々からを美め他を毀り、相越智識を樂みて、我が教化するところ、護つて如法ならしむと云ふ、汝應に我が所度たる可し、餘人に親近する莫れ、彼の人の行は純ならず、常に憒鬧に處し、是の人佛道に於て、勤めて修業する事能はざる也、眞に佛道を求むる者は、晝夜各々三時に、諸の菩薩を頂禮し、應さに、恭敬の心を生ず可し、其の所行の道に隨ひて、其の過失を說かず、若し五欲に著するを見るも、其の過惡を說かず、應に彼の人を念ず可し、久しうして後亦道を得んと、次第に業道を行じ、頓に成

paya）般若、眞實に對して二釋あり、權道に通ずる智を方便とす。方は方法。便は使用。一切の衆生の機に契ふ方法を使用するなり。又方は方正。便は巧妙の言辭。種々の機に對して。方正の理と巧妙の言辭を用ふるなり。

【二二】　少欲知足。多く求めざるを少欲。少に於て懊惱せざるを知足、と云ふ。

【二三】　發菩提心。菩提は無上正眞道、無上正眞道を發する心を發菩提心とす。卽ち深く因果の理を信じ煩惱障を斷じ所知障を撥無して佛道を修して涅槃成佛せんことを願ふ心を發する心なり。

【二四】　忍辱。梵語、羼提（Kṣānti）諸の侮辱惱害を忍受して恚恨なきなり。六波羅蜜の一。

【二五】　三惡道、惡業に依つて往來すべき處。三所あり、一は地獄道、上品の十惡業を成ぜしもの之に趣く二に餓鬼道、中品の十惡業を成ぜしもの之に趣く三に畜生道、下品の十惡業を成ぜしもの之に趣く。此の三種の惡道を云ふなり。

【二六】　三毒。又三根。貪瞋癡の三煩惱を言ふ。一切煩惱の根本なり。

【二七】　生ず。卍字藏に依る。

【二八】　戒。梵名尸羅（Śīla）身

佛すべからざるものも、或は久しく發せるに非ざるものも、[三三]是の故に此の事を行じ、貪欲を分別する事勿れ、貪欲の性は是れ道なり、煩惱は先にも自ら無く、未來も亦有ること無し、能く是の如く信解せば、便ち[三四]無生忍を得ん、好惡の音聲を觀じて、非音聲の性を知り、當に無文字、實相の法に入る可し、若し能く是の法を信ぜば、則ち婬怒癡無く、貪欲愚癡と觀ずるに、卽ちこれ無量の相なり、是の二無文字なれども、文字を以ての故に說く、諸の文字有る處は、是れ皆實有ること無し、一切の諸の音聲は、是の一の音性なりと觀ず、佛說及び邪說は、是れ皆分別無し、法は言說を以つてすと雖も、實は無法無說なり、能く一相の門に入れば、則ち[三五]無上忍を得ん、是れ忍是れ悲忍なりと、是の分別を作すこと勿れ、瞋恚せんと欲する心に於て、其の中に利を計すること勿れ、是の二無生なりと知らば、當さに世の中の尊たる可し、東西南北方の、恒河沙の如き土を、皆碎いて微塵と爲し、一塵を一國とせん、中に諸の珍寶を滿たし、無央數の[三六]劫に於て、諸の如來を供養せん、其の所得の功德も、若し人にして是の經を聞かば、彼れに過ぐる事百千倍ならん、若し出家の人あつて、一心に佛道を求むるに、我れ是の人に、此の秘密の要法を[三七]囑累せん、若し是の經を誦するもの、及びその義を解する者あらば、無量[三八]總持の辯、自然に皆當さに得べし、利根無盡の慧、樂說の辯才は、無量億の諸佛、皆亦た是の人に與へん、諸經の妙法の寶を、自然に皆能く說かん。

爾の時師子遊步菩薩、佛に白して云さく、世尊よ、今是の偈を說くに、幾所(いくばく)の人有つてか自から利益を得るや、佛の云はく、善男子よ、汝是の大衆を見るや否や、唯だ然なり已に見たり、佛云(のたま)はく、今是の法を說く時會中に無量無數の衆生有つて共に集まり、天龍夜叉・[三九]乾闥婆・[四〇]阿修羅・緊那羅・[四一]迦樓羅・[四二]摩睺羅伽等滿ちて虛空に在り、說法の明を以つて乃至他方世界に饒益せらるゝ所多く九萬二千の夜叉、神皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、增上慢の比丘五百人有つて未だ得ざるに得

心の過を防禁すること。五戒、八戒、具足戒、菩薩戒、三聚淨戒等之なり。

【二九】五欲。色・聲・香・味・觸の五境に對して人の欲心を起すもの。是れ眞理を汚すものなれば塵とも名づく。

【三〇】名字は梵語、那摩(Nāma)譯名。阿乞史囉(Aksara)譯して字。名は實名。字は假名。總じて事物の名稱を言ふ。

【三一】無生。涅槃の眞理は生滅なければ無生と云ふ。依て無生の理を觀じて生滅の煩惱を破するなり。

【三二】願生。願往生の略。

【三三】是の故に三本・宮本に依る。

【三四】無生忍。無生法忍の略。無生法とは生滅を遠離せる眞如實相の理體なり。眞智此理に安住して動かざるを無生法忍と云ふ。初地及び七、八、九地に於て得べき悟なり。

【三五】無上忍。眞理を堪受する智を忍と云ふ。無上忍、寂滅忍など多種あり。無上は稱歎の語。

【三六】劫は梵語、劫簸(Kolpa)の略。譯して分別時節。通常の年月日時を以て算し能はざる遠大の時節を云ふ稱なり。故に又大時と譯す。

【三七】囑累。佛陀が弟子に附屬して聖王法を後世に傳持流布すべきことを命じたまふ事

たりと謂ひしが、是の法を聞いて[四三]增上慢無く、眞法を得て一切の法皆是れ一相なりと信解し、諸法を受けざるが故に漏盡きて解脫を得たり、是の菩薩衆中に於て六萬二千人諸法の無障礙の相を信解して無生忍を得たり、何を以ての故に、是の如きの說法は諸の說法の中に於て最も第一となす。善男子よ、我れの如きは[四四]然燈佛のみもとに於て諸法の一相にして無礙なるを信解し、然る後乃ち無生法忍を得て[四五]六波羅蜜を具足したり、所以は如何ん、若し菩薩恒河沙劫に於て、布施・持戒・忍辱・精神・禪定・智慧、若し是の如き法相を知らずんば是の人或は一切の善根を斷滅せん。善男子よ、汝提婆達多を見よ大功德善根有りて[四六]三十二大人の相を成就せり。是の如き功德有り、是の如き法の相を知らざるが故に善根を斷滅して大地獄に墮せん。善男子よ、當に知る可し。久しく發心して大功德有りと雖も、是の法門に入らずんば、皆能く善根功德を斷滅せん。善男子よ、過去無量無邊不可思議阿僧祇劫の如きに、佛有り、高須彌山王・[四七]如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・[四八]道法御・天人師・佛・世尊と名づく。壽命九千九百千萬億那由他歲にして、國土を金焰明と名づく、其國は皆黃金を以て地となし、其所說の法も亦[四九]三乘を以つて衆生を度脫す。其佛の初會に八十百千萬億那由他の[五〇]聲聞の弟子あり、次に第二會に七十百千萬億那由他の聲聞の弟子、第三會には六十百千萬億那由他の聲聞の弟子、第四會には五十百千萬億那由他の聲聞の弟子ありて、皆阿羅漢を得、諸の重擔を捨し己が利を逮得し諸有の[五一]結を盡し、正智にして解脫を得、比丘尼衆は上數に倍し、優婆塞衆も亦た上數に倍し、優婆夷衆も亦た上數に倍し、菩薩衆も亦上數に倍せり。皆[五二]阿惟越致無生忍を得、皆無量無邊の[五三]陀羅尼門、三昧門を得、能く不退の法輪を轉ぜり、何かに況んや新に菩薩の意を發する者をや、又辟支佛の道心を發する者も亦無量無邊なり、善男子、爾の時彼の佛の會中の弟子衆の數無量無邊なり、彼の金焰國中は七寶を以つて樹となし、其の寶樹に於て常に法音を出す、所謂ゆる一切諸法空の音、無相の音、無作の音、無生の音、無所有の音、無取相の音

なり。

【三八】 總持。梵語、陀羅尼(Dhāraṇī)。總持と譯す。善を持して失はず惡を持して起らしめざる義。念、定、慧を體となす。菩薩所修の念、定、慧に此功德を具するなり。

【三九】 乾闥婆(Chandharva)。又犍達婆、犍達縛、犍陀羅など。譯して香神、嗅香、行樂人等。八部衆の一。樂神の名。酒肉を食はず、唯香を求めて陰身を資け、又其陰身より香を出だせば、香神乃至尋香行と言ひ緊那羅と共に帝釋天に奉持し伎樂を奏するを司る。乾闥婆は修樂緊那羅は法樂。

なり。

【四〇】 阿修羅(Asura)。又阿須羅に作る。舊稱、阿修羅阿須倫等。新譯にては阿素洛。阿修羅等を譯して、無端、容貌、醜陋の義。阿素洛譯して非天。常に帝釋と戰鬪をなす神。六道の一。八部衆の一。

【四一】 迦樓羅(Caruḍa)。又迦留羅、舊譯に金翅鳥。新譯に食吐悲苦聲、妙翅鳥等。鳥の名。八部衆の一なり。

【四二】 摩睺羅伽(Rāhula)。舊に羅吼羅等、新に阿羅怙羅。佛の嫡子(釋迦の子)、在胎六年。舍利弗を和上として出家沙彌となる。十大弟子中密行第一となる。羅睺羅阿修羅王、

にして、其國の人民是の法音を聞いて、自然に皆諸法の實相を得。心に解脫を得、其佛の滅後法の住する事千歲にして、諸の寶樹の音復出でず。善男子よ、是の高須彌山王佛は、法を以て淨威儀菩薩に囑累して法を守護せしめたまひ、囑累し已つて後便ち[五四]無餘涅槃に入り給ふ。時に比丘有り、有威儀と名づけ、持戒清淨にして[五五]四禪・[五六]四無色定、及五神通を得、善く[五七]毘尼藏を誦し、苦行を樂む、善く他心を知る事能はず、その弟子も亦皆苦行し頭陀の法を貴ぶ。是の淨威儀法師は持戒清淨にして無所有の法の中に於て、巧方便を得たり。復たある時淨威儀法師は諸の弟子をひきいて、有威儀比丘の住處に到り與に共に同じく止まる。淨威儀法師は衆生を憐愍するが故に、所住の處より常に聚落に入つて食訖つて還り、百千萬家を教化し皆弟子と作し阿耨多羅三藐三菩提の心を發せしめたり。其の弟子衆も亦た善く教化し、諸の聚落に到つて說法を爲し、若干の百千の衆生をして皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發せしめたり。有威儀比丘は常に樂んで塔寺に住し、其弟子衆は淨戒を持たずして樂んで[五八]頭陀を行ず。有威儀比丘は勤行精進して其心決定して自ら所行を以つて諸の弟子を化したり。善法に貪著する有所得の見、所謂ゆる一切の有爲法は皆無常皆苦なり。一切法は無我なりと說き、善く諸の[五九]禪定の法を行ずる事能はず、亦た善く菩薩所行の道を善くする事能はず、本心純ならざるが故に、淨威儀法師は善く衆生の諸根の利鈍を知る。有威儀比丘の心を知るが故に、復た常に聚落に入らず。其諸の弟子は本の如くして異らず。有威儀比丘は淨威儀法師の諸の弟子衆常に聚落に入るを見、不淨の心を生じ、即ち[六〇]犍椎を鳴らし、衆を集め、制を立て、汝等自今已去應さに聚落に入る可からず。一心に靜默を[六一]修行する事能はず。數々聚落に入つて何等の利を得るや。佛の稱讚し給ふ所は[六二]阿練若住處なり。汝等當に禪を行ずべく、樂んで他家に入ること莫れと。淨威儀法師の諸の弟子衆は其の語を受けずして猶聚落に入る。後ち一時に於て有威儀比丘彼の弟子衆聚落の中より出づるを見て、更に犍椎を鳴らして比丘衆を集め說いて是の如く云

母胎六年蔽障の故に名づく。

【四三】 增上慢。我は增上の法を得たりと謂ひて慢心を起すを言ふ未だ聖道を得ざるを已に得たりと謂ふ如きなり。七慢の一。

【四四】 然燈佛。梵に(Dipaṃ-kara)提洹竭、提和竭羅と云ふ。瑞應經に錠光と譯す。錠は足、釋迦如來の因行中第二阿僧祇刧の滿時に此佛の出世に逢ひて五華の蓮を買て佛に供養し、髮を泥に布き佛をして之を蹈ましめ、以て未來成佛の記別を受けしなり。

【四五】 六波羅蜜。又六度とも云ふ。六種の波羅蜜なり。波羅蜜(Pāramitā)又波羅蜜多。究竟、到彼岸、又は單に度と譯す。菩薩の六大行なり。一、檀波羅蜜檀那即ち布施の行。二、尸羅波羅蜜、尸羅は戒と譯す。戒行なり。三、羼提波羅蜜、羼提は忍辱、忍辱の大行なり。四、毘利耶波羅蜜、毘利耶は精進、精進の行なり。五、禪波羅蜜、禪は禪那の略、三昧、定、と譯し、惟修の行なり。六、般若波羅蜜、般若は智慧と譯す通達智、證理慧の要法なり。

【四六】 三十二大人の相。又三十二相と云ふ。此の三十二相は佛に限らず總ての大人の相なり。此の相を具するものは

へり、「若し復た更らに聚落に入る者は、復此こに住することを得ざれ」と。

爾の時淨威儀法師は將に有威儀比丘を護らんとするが故に諸の弟子に告ぐ、「汝等今より已去聚落に入ること勿れ」と。卽ち師の敎の如く聚落に入らず。爾の時に諸の人民衆は其の師及び諸の弟子衆を、見ざるが故に皆憂惱を懷き善根を退出せり。淨威儀法師は三月を過ぎて[六三]自恣し竟り、是の中より出でて餘の僧坊に到り、其所に止まり、師徒還つて城邑聚落に入り、人の爲に法を說く。後に時に有威儀比丘は淨威儀法師のまた他家に入るを見、其弟子常の儀を毀失せるを見て復た不淨惡心を生じて是の念を作せり、「是の比丘破戒毀戒す何ぞ菩提有らん」と、便ち衆人に語つて是の比丘は雜行にして佛道を去ること甚だ遠しと、有威儀比丘是の業を起し已り、後時に命終して、是の業果報の故に[六四]阿鼻の大地獄に墮し、九百千億劫諸の苦惱を受け、地獄より出で〻六十三萬世、常に誹謗を破り、其罪漸く薄くして、後に比丘と作ること三十二萬世、出家の後是の業因緣にて道に反して俗に入る、又餘の罪業因緣の故に淨明佛のみもとに於て出家入道し、慇懃精進し頭然を救ふが如くなれども千萬億歲中乃至柔順の[六五]法忍を得ず、無量千萬世諸根闇鈍なり。師子遊步よ、「汝が意に於て云何、爾の時の有威儀比丘は豈異人ならんや、斯の觀を造す事勿れ、則ち我が身是れなり。我れ時に時の微細の不淨心をおこすすら此の罪業を受け地獄に墮せり。師子遊步よ」若し人是の微細の罪業を起すことを欲せざるものは彼の菩薩に於て應に惡心を起すべからず、菩薩の行ずる所の道は皆應さに信解す可し。應に瞋恨の心を起すべからず、應に是の念を作す可し。我れも亦善く他人の心を知ること能はず。衆生の所行是も亦知り難し、善男子よ、[六六]如來は是の利を見るが故に常に是の法を說きたまへり。是の故に行者は應に人を平量すべからず、唯だ如來及如來に似たる者のみ有つて乃ち能く是れを知る。是の故に行者若し自ら其身を護らんと欲せば愼んで人を平量して相ひ違逆すること莫れ、菩薩若し佛法を修集せんと欲せば常に晝夜に勤心專念す可し。深く菩薩

家に在りては輪王となり、家を出づれば無上覺を開と云ふ。是れ天竺(印度)國人相說なり。(1)足安平相(2)千福輪相(3)手指纖長相(4)手足柔軟相(5)手足縵網相(6)足跟滿足相(7)足趺高好相(8)腨如塵相(9)手過膝相(10)馬陰藏相(11)身縱廣相(12)手孔生青色相(13)身毛上靡相(14)身金色相(15)常光一丈相(16)皮膚細滑相(17)兩腋滿相等。

【四七】如來應供等。如來の十號なり。

【四八】道法御三本・宮本調御丈夫。

【四九】三乘・聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘にして、茲にては佛陀說法全體を言ふ。

【五〇】聲聞は梵語、舍羅婆迦、(Srāvaka)佛の小乘法中の弟子、佛の聲敎を聞いて四諦の理を悟り見思の惑を斷じ、涅槃に入るものなり。是れ佛道中の最下根なり。

【五一】結。繫縛の義。煩惱の異名なり。

【五二】阿惟越致。阿鞞跋致とも作る(Avaivartī)。譯して不退轉。成佛の進路を退轉せざる義。菩薩の階位の名。一大阿僧祇劫の修行を經て此の位に至る。

【五三】陀羅尼門。譯して總持門と云ふ。總持の法門。總持は前二七一頁を參照せよ。

の心を發するものは應に好んで人の長短を求む可からず、菩薩若し能く[67]三千大千世界の中の衆生を教へて[68]十善を行ぜしむとも菩薩の一食頃の如きも一心に靜處にて一相法門を念ずるに如かず、乃至聞受し讀誦し解說せば是の人の福德彼れに勝るゝこと甚だ多し、何を以ての故に、諸の菩薩は是の法門を用ひて能く一切業障の罪を滅し、亦た一切衆生の中に於て憎愛の心を離れて、即ち能く疾やかに[69]一切種智を得ん。爾の時に文殊師利法王子は佛に白して言さく、世尊よ、佛の所說の如きは業障の罪を滅す。云何んがして業障の罪を滅するや、佛文殊師利に告げたまはく、若し菩薩一切の法性の無業無報を見れば則ち能く畢に業障の罪を滅せん、又文殊師利若し菩薩貪欲の際を即ち是れ眞際なりと見、瞋恚の際は即ち是れ眞際なりと見、愚癡の際即ち是れ眞際なりと見れば、則ち能く畢に業障の罪を滅せん。又文殊師利よ、若し菩薩能く一切衆生の性即ち是れ涅槃の性なりと見れば、則ち能く畢に業障の罪を滅せん。所以は如何、若し人自から所見有れば即ち能く業を起し、知無く聞無し、凡夫愚人は諸法の畢竟滅の相を知らず、故に自から其の身を見亦た他人を見、是の見を以ての故に便ち身口意の業を起す。是の人妄見憶想分別して是の念を作さく、我が是の貪欲瞋恚愚癡もて是の如く分別するが故に佛法の中に於て出家し道を學すと。復た是の念を作さく、我れは是れ戒にして梵行を修する人なり。我れ當に生死を越度して涅槃を得て諸の苦惱を免る可しと。是の人諸法を分別して、是れ善、是れ不善なり、是れ應に[70]知る可し、是れ應に斷ず可し、是れ應に證す可し、是れ應に修す可しと。所謂ゆる苦は應に見るべし、集は應に斷ずべし、滅は應に證す可し、道は應に修す可しと。而も復分別せん、一切の諸行は皆悉く無常にして、一切の諸行は皆悉く是れ苦なり、一切の諸行は皆[71]三毒熾然たり。我れ當に疾やかに此の[72]有爲の法を捨すべし、常に是の如きの思惟を作さく、諸行の中に於て種々に相を取つて而も厭心を生ぜんと。

爾の時に便ち是の念を作さく、諸行を見ること是の如きを是を苦を見ると名づく。諸行を惡厭す

【五四】無餘涅槃（Anupadhiśeṣa-nirvāṇa）有餘涅槃に對す。新譯には無餘依涅槃。身智共に灰滅する涅槃なり。涅槃は二六五頁を參照せよ。

【五五】四禪。茲にては四禪定の意。四禪定とは、新譯には四靜慮と云ふ。四禪定を修して色界の四禪天に生ずるなり。四禪は初禪、二禪、三禪、四禪に分つ。

【五六】四無色定。又四空定とも云ふ。十二門禪中の四禪なり。是れ內法の修法な、外道は六行觀を以て之を修得す、一に空無邊處定、二に識無邊處定、三に無所有處定、四に非想非非想處定なり。

【五七】毘尼藏（Vinayapiṭaka）新譯に毘耶藏と云ひ、舊譯に毘尼藏と云ふ。三藏の一。如來所說の戒律の聖典を攝稱す。藏は包藏の義。一切の戒を含むが故に毘尼藏を作す。

【五八】頭陀（Dhūta）。又杜茶、杜多、譯して抖擻、抖練、洮汰、淙洗等、衣、食。住の三種の貪著を抖擻ふ行法なり。一般には行乞食の意に用ふ。十二頭陀の名數あり。

【五九】禪定。禪とは梵語、禪那の略。思惟修と作す。新譯にては靜慮。思惟修とは所對の境を思惟して研習する義。靜慮とは心體寂靜にして能く

るを是れを集を斷ずと名づく、諸行を分別するは[七三]滅諦を見るなり。即ち是の念を作さく、我れ今滅を見る是れを滅を證すと名づく、我れ當に道を修して便ち靜處に到りて是の如きの法を念ず可しと。是の念を作し已つて心を攝して定住す。是の人先に厭心を得、今定心を得るが故に諸行の中に於て心便ち捨離す、而も自から愧ぢ厭ひて喜ばず、樂まず。復た、是の念を作さく、我れ今一切法の中に於て已に解脫を得て更らに所作無し。我が身已に[七四]阿羅漢道を得たるなりと。是の人命終の時受生の處を見、卽ち菩提中に心に疑悔を生ず。此の疑を以ての故に命終の後大地獄に墮せん、何を以ての故に、是の人無生法の中に於て而も分別するが故なりと。

爾の時に文殊師利王子佛に白して言さく「世尊よ、今云如が應に四聖諦を觀ず可きや」と、佛文殊師利に告げたまはく、若し行者能く一切法は卽ち是れ無生の性なりと見れば、是れを苦を見ると名づけ、若し能く一切法の不集不起を見れば是れを集を斷ずと名づく。若し能く一切法の畢竟じて寂滅相なるを見れば是れを滅を證すと名づく。若し能く一切法の無有の性を見れば是れを道を修すると名づく。文殊師利よ、若し行者能く是の如く[七五]四聖諦を見れば是の人是の如きの分別を作さず、是の法は善なり是の法は不善なり、是の法は應に觀るべし、是の法は應に斷ず可し、是の法は應に證すべし、是の法は應に修すべし、所謂ゆる苦は應に見るべし集は應に斷ずべし、滅は應に證すべし、道は應に修す可しと。所以は云何ん、凡夫所行の貪欲瞋恚愚癡は行者是の法を見るに皆空・無生・無所有にして別す可からず、但だ虛妄と積集せるなりと。

爾の時法に於て取る所なく捨つる所なく、三界の中心礙ゆる所無し、一切三界は畢竟不生なりと見、一切の善不善の法は虛誑不實にして、幻の如く、夢の如く、影の如く、響の如く、焰の如しと見る、行者は貪欲の性は卽ち是れ涅槃の性、瞋恚の性卽ち是れ涅槃の性、愚癡の性卽ちこれ涅槃の性なりと見る。若し能く一切の法性の是の如しと見れば便ち一切衆生の中に於て憎愛を起さず。所

審慮する義。次に定とは梵語三昧の譯。心一境にして定止し散動を離るゝ義なり。即ち一心に物を考ふるが禪にて、一境に念を靜なるが定なり。

【六〇】 犍椎。犍椎、乾槌とも云ふ。梵語(Ghaṇṭa)譯して、鐘、磬、打木、等打と聲を作すべき物の通稱。大小別なし。

【六一】 修は三本・宮本に依る。

【六二】 阿練若。住處、阿練若(Araṇya)。寺院の總名。比丘の住處。又阿蘭那、阿蘭若迦、阿練若、阿蘭若等。譯して、閑寂。遠離處、人里を遠く離れたる處。

【六三】 自恣。每年雨期に修する夏安居(げあんご)の末日に於て大衆互に見・聞・疑の三事に就き罪過を指摘し、懺悔修福するを言ふ。梵名を鉢刺婆刺拏拏(Pravāraṇa)。譯して隨意。自恣。

【六四】 阿鼻(Avīci)又阿鼻旨。無間。無間地獄、阿鼻地獄是れなり。阿鼻は地下の牢獄。故に地獄となす。之地下の最底にあり、其の上に餘の大地獄あり。惡業の報いによつて極苦を受くる處。

【六五】 法忍。忍は忍許の義。今まで信じ難かりし理を信じうけて惑の出ぬ樣になること。即ち所觀の法に施して忍許す

以は云何ん、是の行者は是の法を得ずして若しくは愛處に生じ若しくは憎處に生ずとも虚空の中に安住して乃至佛を見ず、法を見ず、僧をも見ず、是れ則ち一切法を見ざるなり。若し一切法を見ざれば諸法の中に於て則ち疑を生ぜず、疑を生ぜざるが故に則ち一切法を受けず、一切法を受けざるが故に則ち自から寂滅す、文殊師利よ、長老[七六]須菩提は是の如き法を知るが故に來つて佛足を禮せず、須菩提尙ほ自から身を得ず、何に況んや如來の身を得んや。自の身を得ずして而も如來の身を得とは是の處り有ること無し。文殊師利よ、復た佛に白して言さく、世尊よ、行者は云何んが應に[七七]四念處を觀ず可きや。佛文殊師利に告げたまはく、當來の世に比丘有つて是の如く說かん、內の身處を觀ずるに若し不淨なりと觀ずれば是れ身念處、樂は皆空也と觀ずるは是れ受念處、心の生滅の性を觀ずるは是れ心無處和合の相を壞して但だ法の相を得と觀ずればこれ法念處なり。文殊師利佛に白して言さく、世尊よ、今云何が眞に[七八]四念處を觀ずるや、佛言まはく、止んなん止んなん、文殊師利よ問ふべからざるなり。如來の隨宜說法は解を得べきこと難し。文殊師利言さく、世尊よ、衆生を愍念し給ふが故に願はくは必ずために說きたまへ。佛文殊師利に告げたまはく、若し行者身を見ること虛空の如くならば是れ身念處となし、若し行者受を見るに內外兩聞を得ざれば是れを受念處となし、若し行者心は唯だ名字のみ有りと知らば是れを心念處となす。若し行者善法を得ず、不善の法も得ざれば是れを法念處となす。文殊師利よ、應さに是の如く四念處を觀ず可し。文殊師利復た佛に白して言さく、世尊よ、行者は云何が應に[七九]八聖道分を觀ず可きや。佛文殊師利に告げたまはく、若し行者一切法は平等にして無二無分別なりと見れば是れを正見と名づく。一切法の無思惟無分別を見れば、是の見を以ての故に是を正思惟と名づけ、一切法の無言說の相を見れば善く語言平等の相を修するが故に是を正語と名づく。一切法の不作の相を見れば作者不可得の故に是れを正業と名づく。正命と[八〇]邪命とを分別せず善く平等の命を修習するが故に是れを[八一]正命と名づ

【六六】……るなり。此の忍許に依つて惑を離れ已て理を照らす智の決定するを法智と云ふ。小乘に於ては苦法忍、道法忍あり。大乘に於ては無生法忍あり。其の他種々の法忍あり。

【六六】如來。二六八頁參照。

【六七】三千大千世界＝須彌山を中心として七山八海を交互に遶らし、更に鐵圍山を以て外廓となし之を一小世界と稱し、之を一千合せたるを小千世界更に一千合を加へたるを中千世界此の中千世界に一千合せたるを大千世界。即ち大千世界は一〇〇〇〇〇〇〇〇〇なり。三千は小千、中千、大千と三種の千より成立せしを示したるなり。此の一大千世界を以て一佛の化境となす。その廣さ恰も第四禪天と同じくして成、壞具に同時なり。全宇宙と云ふ程の意。

【六八】十善。十惡の反對なり。即ち、(一)不殺生(二)不偷盜(三)不邪淫(四)不妄語(五)不兩舌(新譯、雜穢語)(六)不惡口(七)不倚語(八)不貪欲(九)不瞋恚(十)不邪見の十種の善行なり。又新譯には、不殺生、不與取、不邪淫、虛誑語、離間語、麁惡語、雜穢語、(八)(九)(十)前と同じに作る。又十善業、十善道等之に屬す。

【六九】一切種智。二六六頁參照。

く。一切法を發せず起さず所行無きを以ての故に。是れを正精進と名づく。一切法に於て憶念する所無く諸の憶念の性を離るゝが故に是れを正念と名づく。一切法の性は常定なるを見る。不散・不緣。不可得なるを以ての故に。是れを正定と名づく。文殊師利よ、行者は應に是の如く八聖道分を觀ず可し。文殊師利復た佛に白して言さく「世尊よ、行者は云何が應に [八二] 五根を觀ず可きや」と。佛文殊師利に告げたまはく、若し行者一切法畢竟不生にして、本より已來常に自爾なるを信ずるが故に是れを信根と名づく。一切法の中に於て、心、所住無く遠近相離するが故に是れを精進根と名づけ、一切の法に於て憶念する所無く、緣性と離るゝが故に念を緣に繫けず. 是れを念根と名づく。一切の法に於て思惟する所無く、二法不可得なるが故に是れを定根と名づく。一切法のつねに空にして性相を離るゝを見るが故に是れを慧根と名づく。文殊師利よ、行者は應さに是の如く五根を觀ずべし、文殊師利復た佛に白して言さく、「世尊よ」「行者は云何が應に [八三] 七菩提分を觀ずべきや」と、佛言はく文殊師利よ、行者は能く一切法の憶念無きを見れば是れを念菩提分と名づく。若し一切法の若しくは善若しくは不善、若しくは [八四] 無記にして選擇すべからず、不可得にして決定なきが故に。是れを擇菩提分と名づく。若し一切の三界相を取らずんば善く三界を壞するが故に是れを精進菩提分と名づく。若し一切 [八五] 有爲法の中に喜相を生ぜずんば善く有喜の相を壞するが故に是れを喜菩提分と名づく。若し一切法中に其の心を除却せば緣相不可得の故に、是れを除菩提分と名づく。若し一切法は不可得なれば善く壞相を修するが故に、是れを定菩提分と名づく。若し一切法に於て依止する所無く、貪せず著せずんば一切法を見ざるが故に [八六] 捨心を得、是れを捨菩提分と名づく。文殊師利よ、行者は應に是の如く七菩提分を觀ずべし。若し行者、能く是の如く四聖諦・四念處・八聖道分・五根・七菩提分を見れば、我れ是の人に說いて名づけて已得度者と名づけん。彼岸に到り、陸地の無畏の處に出在せん。已でに重擔を離れ、諸の塵垢をのぞく。是の人を名づけて無所有者・無所憂

【七〇】 知るかし、宮本による。

【七一】 三毒。又三根。貪、瞋癡の三煩惱を言ふ。一切煩惱の根本なり。

【七二】 有爲。爲とは造作の義。造作を有するを有爲と云ふ。即ち因緣の生ずる所の事物は盡く有爲なり。無爲に對する語なり。

【七三】 滅諦。(Nirodha-arya-satya)。四諦の一。梵に尼樓陀。滅と譯す。滅は滅無の義即ち涅槃を體とす。涅槃は生死の因果滅無なる故に滅と云ふ此の理、眞理なれば諦となすなり。

【七四】 阿羅漢道。阿羅漢(Ar-hān)。小乘の悟を極めたる位の名。殺賊、應供、不生と譯し、此の小乘の極位を修する爲に作す道を阿羅漢道と云ふ。

【七五】 四聖諦。四眞諦とも云ひ、聖者の見る所の眞理。即ち苦集滅道の四を以て四諦と作す。梵にて(Catvāriāria-yastyāni)。

【七六】 須菩提(Subhūti)。又須浮帝、須扶提に作る。新譯にては蘇補底、蘇部底に作る。譯、善現、善吉、善業となす。又空生と稱す。釋迦十大弟子中、解空に於ける第一人者。佛此の人をして、般若の空理を說かしむ。

【七七】 四念處。身念所、受念所、心念所、法念所の四種な

者・無所畏者と爲し、是れを阿羅漢と名づけ、是れを沙門と名づけ、婆羅門と名づけ、是れを比丘と名づけ、是れを澡浴潔淨者と名づけ、是れを智者と名づけ、是れを辯脫者と名づけ、是れを聞者と名づけ、是れを佛子と名づけ、是れを釋子と名づけ、是れを破刺棘者と名づけ、是れを却關鍵者と名づけ、是れを已度塹者と名づけ、是れを出欲求者と名づけ、是れを開門扇者と名づけ、是れを賢聖族相者と名づくるなり。文殊師利よ、若し比丘有つて是の如きの法を成就せば天人世間に於て名づけて[八七]福田となし、應に供養を受くべし。文殊師利よ、是の比丘若し虛しく國中の施を食するを欲せざる者、魔網を破壞する者、生死の海を渡らんと欲する者、涅槃を得んと欲する者、一切の苦惱を脫せんと欲する者、一切の天人世間のために福田を作らんと欲する者は、應に勤めて是の如きの法を修習す可し。是の法を說きたまひし時三萬二千の諸天は諸法の實相を得、各々天の[八八]曼陀羅華を以て佛の上に散じ、白して言さく、世尊よ、若し人是の如き法を聞くことを得れば、是の人を名づけて善出家者と爲す。何に況んや信受し讀誦し、所說の如く行するものをや。世尊よ、若し[八九]須臾も是の法を聞くこと有らば是れ則ち名づけて增上慢なきものと爲す。

爾の時に文殊師利法王子佛に白して言さく、惟だ願くは世尊よ、當に[九〇]陀羅尼を說きたまへ。是の陀羅尼を以ての故に、諸の菩薩をして無礙の辯才を得しめ、諸の音聲に於て怖畏する所無く、よく諸法をして皆作佛の法ならしめ、復た諸法は皆是れ一相なりと信解せしめん。佛文殊師利に告げたまはく、汝今諦かに聽け、當に汝がために不動種性の法門を說く可し。諸の菩薩是の法門に入ることを得れば、能く智慧の光明を以て一切の法を照し疾やかに[九一]無上法忍を得ん、文殊師利佛に白して言さく、世尊よ、云何なるをか、不動處種性法門と名づく可きや」と。佛文殊師利に告げたまはく、一切衆生其の心は皆一なり、是れを種性と名づく、世尊よ、云何が是の事を名づけて、種性となすや、佛文殊師利に告げたまはく、一切衆生は皆心有ること無し、緣性不可得の故に是を種性と

り。又四意止、四念住とも云ふ。四顛倒の觀法なり。詳しくは次頁を見よ。

【七八】四念處(Catvari-smrit=yupathavāni)。即ち身念所(kāyā-a) 受念所(vedanā) 心念所 (citta-a) 法念所(dharma-a)の四種と作す。又四意止、四念住とも云ふ。三十七道品中の一種にして、身を不淨、受を苦、心を無常、法を無我と觀じて常、樂、我淨の四顛倒を治する觀法なり。

【七九】八聖道分＝又八正道分。倶舍論には八聖道支と作る。聖は正。其道偏邪を離るれば正道と云ひ又聖者の道なれば聖道(Āryamārga)と云ふ。(一)正見苦集滅道の四諦の理を見て分明なるを云ふ。是れ八正道の主體なり。(二)正思惟(三)正語(四)正業(五)正命(六)正精進(七)正念(八)正定の八種。此の八法は盡く邪非を離るれば正と云ひ、能く通じて涅槃に到れば道と云ふ。總じて無漏なり。

【八〇】邪命。正命の反對なり。身口意三業を汚穢し、五種の邪活法をなすもの。

【八一】正命。八正道の一。Ā=jīva 身口意の三業を淸淨にして正法に順ひて活命し、五種の邪活法を離るゝを云ふ。之無漏の戒を以て體とす。

名づく、文殊師利よ、一切衆生は皆同一量なり。是れを種性と名づく。

世尊よ、云何が是の事を名づけて種性となすや。佛言はく、一切衆生は皆虛空の量の如く、終に無障礙に歸す。是れを種性と名づく、文殊師利よ、一切衆生は皆是れ一衆生なり。是れを種性と名づく。世尊よ、云何が是の事を名づけて種性となすや。文殊師利よ、一切衆生は皆是れ一相なり。畢竟不生にして、諸の名字を離る。一異不可得の故に、是れを種性と名づく。文殊師利よ、貪欲は是れ不動の相なり。世尊よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。佛文殊師利に言はく、貪欲は是れ不動の相なり。法性の中に安住し、不住を以ての故に、是れ貪欲は性を得べからず。常に離るるが故に、是れを不動の相と名づく。文殊師利よ、瞋恚は是れ[九二]金剛なり、世尊よ、云何が是の事を名づけて金剛となすや。文殊師利よ、瞋恚は斷ずべからず、壞すべからず。亦金剛の如く、斷ず可からず、壞す可からず。一切の法も亦是の如く斷ず可からず、壞す可からざるなり。諸法本に決定せざるが故に、是れを金剛と名づく。文殊師利よ、愚癡は是れ智慧の性なり、世尊よ、云何が是の事を智慧の性と名づくるや。文殊師利よ、一切の法は智慧を離れ、亦愚癡を離る、譬へば虛空の如く、智慧有ること無く、亦た愚癡無し。一切法も亦た是の如く、智慧有ること無し、亦た愚癡無し、智慧も愚癡智も法として本從り已來た倶に寂滅なるを知る可きが故に。是れを愚癡智慧處と名づく。文殊師利よ、色陰は是れ不動處なり。世尊よ、云何が是の事を不動處と名づくるや。文殊師利よ、天帝の幢の、深根安固にして動搖すべからざるが如く、一切の法も亦た是の如し。不住法を以ての故に法性の中に安住す。是の法には來處も無く去處も無く、取も無く、捨も無し。無住の處に安住するが故に。是の故に色を不動の相と名づく。文殊師利よ、受陰は是れ滅の性なり。世尊よ、云何が是の事を名づけて滅の性と爲すや、文殊師利よ、一切の諸受の相性は常に寂滅なるが故に、諸受は内外に非ず、東方に非ず、南西北方四維上下より來るに非ず。何を以ての故に、若し樂受に

【八二】五根は根(Indriya)。能生の義。增上の義。機根、信根、根性等。五根に二種の釋あり、(一)は眼識等の五根即ち、眼根、耳根、鼻根、舌根、身根なり。(二)には信等の五根。一に信根、精進根、念根、定根、慧根。此の五法能く、他の一切の善法を生ずる本となれば五根と名づく。

【八三】七菩提分。又七覺支、七覺分と云ふ。七科道品中の第六なり。覺とは覺了、覺察の義、心の定慧に據るを明かに分けて偏に一方にかたよらしめず、定慧均等ならしむる法、故に等覺と名づく。覺法、七種に分るれば支或は分と云ふ。(一)擇法覺支(二)精進覺支(三)喜覺支(四)輕安覺支(身心)(五)念覺支(六)定覺支(七)行捨覺支念覺を除き他の六覺は行人の要に隨つて之を用ひ、此の七事を以て無學果(羅漢果)を證すしを得るなり。

【八四】無記。三性の一。(善、惡、無記なり)事物の性體中庸にして善と記すべからず、惡とも記すべからざるもの。又果に於ても又同樣なり。

【八五】有爲法。爲とは造作の義。造作を有するを有爲。能生の因緣は是れ所生の事物を造作するもの、所生の事物は必ず此の因緣の造作を有すれ

して內にあらば一切衆生常に應に樂を受く可し。若し苦受にして內に在らば一切衆生常に應に苦を受くべし。若し不苦不樂受にして內に在れば、一切衆生應に不苦不樂を受く可し。文殊師利よ、今一切諸受は實に內に在るにあらず、外に在るに非ず、兩中間に在るにあらず、東方南西北方四維上下に在るに非ず。是の故に一切の諸受は重木瓦石の如く、畢竟不生不滅無相なり。是の故に受を寂滅の相と名づくるなり。文殊師利よ、想陰は是れ種性なり、世尊よ、云何が是の事を名づけて種性となすや。文殊師利よ、是の想は皆憶想分別より起り、虛空の中より生ず。譬へば空拳の如く野馬の如く本性自ら離る。是の故に想陰を種性と名づくるなり。文殊師利よ、行陰は是れ種性なり。世尊よ、云何が是の事を名づけて種性となすや。文殊師利よ、一切の諸行は數無數を離れて平等の數に入る。譬へば芭蕉の畢竟實無くして本性自爾なるが如し。一切法も亦た是の如く、名字無く、性無きが故に。是の故に行陰を名づけて種性となす。文殊師利よ、識陰は是れ種性なり。世尊よ、云何が是の事を名づけて種性となすや。文殊師利よ、是の識は幻の如くにして、空無く、起無く、生無く、空無性無作にして、五指もて空を塗するに空に相の現るゝこと無きが如し。是の故に[九三]識陰を名づけて種性となすなり。文殊師利よ、色は是れ種性なり。世尊よ、云何が色を種性となすや。文殊師利よ、譬へば鏡中の像の目に見ると雖も而も實有ること無きが如し。一切の色も亦た是の如く、見ると雖も實無く、但た眼を誑し心を誑し虛妄にして不實なる也。是の故に色を種性と名づくるなり。文殊師利よ、聲は是れ種性なり。世尊よ、云何が聲を種性となすや。文殊師利よ、一切法は別異の相無し。畢竟空にして山中の響の如し。是の故に聲を種性となす。文殊師利よ、香は是れ種性なり。世尊よ、云何が香は是れ種性なりや。文殊師利よ、一切法は香の相性無し。知無きが故に空なること虛空の如し。鼻香識は不可得なり。是の故に香を種性となす。文殊師利よ、味は是れ種性なり。世尊よ、云何が味を種性なりとなすや。文殊師利よ、味性は卽ち是れ不可思議の性な

ば有爲法と言ふなり。卽ち、因緣生成の自然そのものに非ず遷流の法である。

【八六】捨心。四無量心の一。一切を棄捨して著せざるなり。四無量心とは、四業、四梵行と云ふ。十二門禪中の四禪。(一)に慈心無量心(二)非無量心(三)喜無量心(四)捨無量心卽ち之捨心なり。(一)(二)(三)の三心を捨して心に存着せざるなり。

【八七】福田。田は生長を以て義となす、應に供養すべき者に於て之を供養すれば能く諸の福報を受く。猶農夫の田畝に播種して秋に收利ある如し。故に福田と云ふなり。

【八八】曼陀羅華。(mandārava)又漫陀羅。花の名。譯して圓華。白團華、悅意華、適意華等を譯す。

【八九】須臾。暫時。時の量なり。

【九〇】陀羅尼。總持(Dhāraṇī)。陀羅那、譯して總持、能持能遮。善法を持し、惡法を持して干起する力用に名く。四種あり。法、義、咒、忍の各陀羅尼なり。

【九一】無上法忍。二七〇頁の無生忍の項參照。

【九二】金剛(Vajra)。梵に縛日羅。又曰字を日に作り古來兩用す。日を正しとする如

り。知る可からず、知を離るゝが故に。自性常に離るゝが故に是の故に。味を種性と名づく。文殊師利よ、[九四]觸は是れ種性なり。世尊よ、云何が觸を種性となすや。文殊師利よ、觸は虚空の如く其の性自ら離れ觸無く合無し。一切の法も亦た是の如し。善く身を壞するが故に。觸の相を離る。觸は不可得の故に。是の故に觸は是れ種性なり。文殊師利よ、法は是れ種性なり。世尊よ、云何が法を種性となすや。文殊師利よ、一切法は相無く心無し。心性を離れ、名字を離る。決定無きが故に。皆是れ法性の相なり。是の故に法は種性なり。文殊師利よ、地は是れ種性なり。世尊よ、云何が地を種性となすや。文殊師利よ、一切の法は堅の相無く、軟の相無し。虚妄の和合の人以て堅となす。是の故に地を種性となす。文殊師利よ、水は是れ種性なり。世尊よ、云何が水を種性となすや。文殊師利よ、一切の法は濕無く、合無く、野馬の水無きが如し。是の故に水を種性となす。文殊師利よ、火は是れ種性なり。世尊よ、云何が火は是れ種性なるや。文殊師利よ、一切の法は、熱無く、虚妄を離れ、熱の相本性寂滅にして、顚倒を離るゝが故に。其實を分別するに定無く生無し。是の故に火を種と名づく。文殊師利よ、風は是れ種性なり。世尊よ、云何が風を種性となすや。文殊師利よ、一切の法は障無く、礙無く、相無く、性無し。動搖せざるが故に、風の相を離るゝが故に、是の故に風を名づけて種性となす。文殊師利よ、佛は是れ種性なり。世尊云何がして佛を種性となすや。文殊師利よ、一切の法は[九五]覺無く知無し。知の相を離るゝが故に。是の故に佛を種性と名づく。文殊師利よ、法は是れ種性なり。世尊よ、云何かくて法を種性となすや。文殊師利よ、諸法は壞すべからず、斷すべからず。壞斷を離るゝが故に相無く、名無く、性無く、言語の道を出でたり。是の故に法を種性と名づくる也。

文殊師利よ、[九六]僧は是れ不動の相なり。世尊よ、云何がして僧を不動の相となすや。文殊師利よ聚衆は如法の性の實際・定亂・平等の中に安住し、智慧・愚癡・解脫・煩惱の平等一切法の中に安住し

し。金中の精なるもの。又世に云ふ金剛石の如し。

【九三】識陰。陰は舊、新譯にては蘊識。蘊は五蘊の一。境に對して事物を了別識知する心の本體なり。

【九四】觸。梵語、薩婆羅奢(Sparśa)五境の一。身根の觸るゝ所、所堅、溫煖、動等十一種あり。

【九五】覺は梵語、菩提(Bodhi)舊譯に道と譯し、新譯に覺と飜ず。覺察覺悟の兩義あり。覺察は惡事を察知するを言ふ。覺悟とは眞理を開悟するを言ふ。

【九六】僧は僧伽(Saṃgha)の略。和又は衆と譯す。四人已上の比丘和して衆と爲す。新譯家は三人已上とす。

て、心に所住無し。住不可得の故に。是の故に僧を不動の相と名づく。

文殊師利よ、一切法の行處を名づけて不動相となす。世尊よ、云何が是の事を名づけて不動の相となすや。文殊師利よ、一切虚空の行處、不可思議の行處、斷の行處は根本無く、別異無し、不可得の故に。是の故に一切法の行處を不動の相と名づく。文殊師利よ、一切法の無緣を不動の相と名づく。世尊よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。文殊師利よ、一切法は[九七]依止無く、住處無く、緣無く、願無し。諸の[九八]緣を離るゝが故に。是の故に一切法の無緣を不動の相と名づく。

文殊師利よ、一切法の不取不捨の相を不動の相と名づく。世尊よ、云何か是の事を不動の相と名づくるや。文殊師利よ、一切の法は皆[九九]如に歸し、法相に同ず。是の法取るべからず、捨つるべからず、求むることなく、願ふことなく、諸願斷ずるが故に。本從り已來常に寂滅の相にして虚空に同ず。是の故に不取不捨を不動の相と名づく。文殊師利よ、一切法の無咎を不動の相と名づく。世尊よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。文殊師利よ、一切法は無垢無所有にして、淸淨顯曜にして虚空の翳無きが如し。諸罪の空相不可得の故に。是の故に一切法の無咎を不動の相と名づく。

文殊師利よ、一切法の無歸處を不動の相と名づく。世尊よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。文殊師利よ、一切法は空にして根本無きが故に歸處も無し、是の故に無歸處を不動の相と名づく。文殊師利よ、一切法の無學を不動の相と名づく。世尊よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。文殊師利よ、一切法性は無學にして學すべからず、修す可からず、思ふべからず、念ずべからず、住すべからず、發す可からず、行ずべからず、斷ずべからず、證すべからず、語るべからず、言ふべからず、求むべからず、說くべからず、取るべからず、捨つるべからず、離るべからず、除くべからず。何を以ての故に、文殊師利よ、一切の諸相は畢竟して離るゝが故に、本從り已來所取無く、常に是れ捨の相にして、是の諸法は智慧の及ぶ所に非ず、愚癡の及ぶ所に非ず。是の故に無學を不動の相と名づくるなり。

【九七】依止。力あり德ある所に依賴して止住して離れざること。

【九八】緣（Pratyaya）。攀緣の義。人の心識が一切の境界に攀緣するを言ふ。能緣の心識が所緣の境界に向つて動く作用を緣と云ふ。卽ち心の境に對する作用にて、換言せば心の慮知なり。

【九九】如。諸法の實相也。

爾の時に文殊師利法王子佛に白して言さく、世尊よ、我れも亦樂んで不動の相を說かん。佛言はく、汝說く事を樂はゞ便ち之を說くべし。文殊師利言さく、世尊よ、一切衆生は皆菩提を得ん。是れを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切法は向無く得無く、一切衆生は皆菩提の中に入る。是の故に一切衆生は皆菩提を得と說くなり。又是の菩提は得の相に非ず。何を以ての故に、衆生の性は卽ち是れ菩提の故に、是の故に一切衆生は皆菩提を得るを不動の相と名づく。世尊よ、一切衆生は皆な一切の智慧を成就するを不動の相と名づく、文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切衆生は無性なり、無性の故に如來平等の中に入り、本より已來是れ一切の智慧の性なり。性同じきが故に不動の相と名づく。世尊よ、一切衆生は皆是れ道場なり、是れ不動の相なり。文殊師利よ。云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、道場とは何の義有りや。文殊師利よ、一切の法は寂滅相にして、無生の相、無所有の相・不可取の相の相なり。是れを道場の義と名づく。世尊よ、一切衆生は此の道場に入らざるや。佛言はく、如是如是。是の故に、世尊よ、一切衆生は皆是の道場を不動の相と名づく。世尊よ、一切衆生は皆[一]無性法忍を得るを不動の相と名づく、と。

文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切衆生は無盡・無生・無滅の性[二]にして[三]無性を離れて、平等の忍に入るが故に。是の故に一切衆生は皆無性法忍を得るを不動の相と名づく。世尊よ、一切衆生は[四]皆無礙辯才を得るを名づけて不動の相となす。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切衆生の諸の所有[五]樂說は十方界に於て索むとも得べからず。所以は云何ん。皆無礙辯才平等法の中に入るが故に。世尊よ、諸の樂說する所は自性と皆

【一】無性法忍。略して無性忍と云ふ。無性法とは生滅を遠離せる眞如實相の理體なり、眞如此理に安住して動かざるを言ふ。初地或は七、八、九、地に於て得べき悟なり。

【二】無性。性は體なり、一切諸法に實體なきを無性と云ふ。

【三】忍。(Kṣānti)。忍耐なり又安忍なり、道理に安住して心を動かさざるなり。

【四】無礙。又、無閡、無碍。自在に通達して礙りなきこと、自在に融通して一體となることなり。

【五】樂說。四無礙の第四、樂說無礙。菩薩樂んで法を說くこと。又衆生の樂欲に隨つて法を說くこと。

離る。決定無きが故に、所有なきが故に。是の故に一切衆生は皆無礙辯才を得るを不動の相と名づく。世尊よ、一切衆生は皆[六]陀羅尼を得るを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切衆生は衆生の相を以て能く色聲香味觸法を持し、虛誑不實憶想分別を以て相を取るが故に。是の故に一切衆生皆陀羅尼を得るを不動の相と名づく。世尊よ、一切衆生は皆慈心を得るを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切衆生は衆生の性なく、本從り已來(このかた)瞋無く慈無し。瞋慈の平等を得て分別なきが故なり。是の故に一切衆生は皆慈心を得るを不動の相と名づく。世尊よ、一切衆生は皆大悲を成就するを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切衆生は[七]無記無作の相にして、皆如來平等法の中に入り、大悲の性を出です。惱悲の分別無きを以ての故に。是の故に一切衆生皆大悲を成就するを不動の相と名づく。

世尊よ、一切衆生皆三昧を得するを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切衆生の性は常に定んで諸緣を離るゝが故に。若し衆生緣より知を生ぜば、緣の中に於て知を生ずるは名づけて知となさず。所以は云何ん。諸の知は念念無常にして畢竟空の故に。是の故に一切衆生は皆三昧を成就するを不動の相と名づく。世尊よ、一切の諸佛皆貪欲を成就するを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何んが是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切諸佛は皆貪欲の平等法の中に入りたまふが故に諍訟を遠離して、貪欲の性に通達し給ふが故に。世尊よ、貪欲は卽ち是れ菩提なり。何を以ての故に、貪欲の實の性を知るを說いて菩提と名づく。是の故に一切の諸佛皆貪欲を成就し給ふを不動の相と名づく。世尊よ、一切諸佛皆瞋恚を成就し給ふを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切諸佛皆[八]有爲法の過罪を說くものにして、瞋恚の平等性の中に安住して、瞋恚の性に通達するが故に、是れを

【六】陀羅尼(Dhāraṇī)。又陀羅那、陀隣尼。譯して、持、總持、能持能遮。善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名く。之を四種に分つ。一に法陀羅尼、二に義陀羅尼、三に咒陀羅、四に忍陀羅尼。

【七】無記。二七九頁參照。

【八】有爲法。爲とは造作の義。造作を有するを有爲。能生の因緣は是れ所生の事物を造作するもの、所生の事物は必ず此因緣の造作を有すれば有爲法と云ふなり。

一切諸佛皆瞋恚を成就すと名づけ、不動の相と名づく。世尊よ、一切の諸佛皆愚癡を成就するを不動の相と名づくるや。世尊よ、一切諸佛は能く一切貪著名字の衆生を度し、愚癡平等性の中に安住し、愚癡の性に通達するが故に是れを一切諸佛愚癡を成就すと名づけ、不動の相と名づく。世尊よ、一切諸佛皆[九]身見を成就するを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切諸佛は身見の性の中に安住し、一切法の中に於て、不遇・不畏・不動にして畢竟安住す。法に住せざるを以ての故に通達して身見を知るに無生無記無性の故に。是の故に一切の諸佛皆身見を成就するを不動の相と名づく。世尊よ、一切の諸佛皆是の邪見を不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、一切諸佛一切有爲法は是れ邪にして虛誑不實なれば、邪見の性平等なりと通達するが故に是の故に、一切諸佛は皆是の邪見を不動の相と名づく。世尊よ、一切の諸佛は[一〇]四顚倒・[一一]五蓋・[一二]五欲・[一三]三毒の中に住して[一四]阿耨多羅三藐三菩提を得るを不動の相と名づく。文殊師利よ、云何が是の事を不動の相と名づくるや。世尊よ、住處の性は卽ち是の非住處なり。文殊師利よ、非住處には何の義ありや。世尊よ、非住處とは動還の相と[一五]退轉せる卽ち是れ一切の凡夫人なり。一切の諸佛は是の貪欲・瞋恚・愚癡の[一六]四顚倒・[一七]五蓋・五欲の平等の中に安住す。是の諸佛は貪欲性に安住するが故に阿耨多羅三藐三菩提を得。瞋恚・愚癡・四顚倒・五蓋・五欲の性に安住するが故に、[一八]阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に一切の諸佛は四顚倒・五蓋・五欲・[一九]三毒の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るを不動の相と名づくるなり。

爾の時に佛、文殊師利法王子に告げたまはく、若し人有つて汝に問はん、一切の不善の法を斷じて一切の善法を成就するを名づけて如來と爲すや。汝云何が答へん。文殊師利言さく、世尊よ、若し人有つて我れに問はん、一切の不善の法を斷じて一切の善法を成就するを名づけて如來と爲すや、

【九】身見。五見の一。我見我所見なり。吾身は五蘊和合の假者なることを知らずして實に我身ありと計り、（我見）又我が身邊の諸物は一定の所有主なきを知らずして實に我が所有物なりと計度する（我所見）此の我見と我所見との二を合して身見と云ふ。

【一〇】四顚倒。又四倒と言ふ。四種顚倒の妄見なり。之に二種あり。有爲の四倒、無爲の四倒と二なり。有爲の四倒に執する者を凡夫、之を斷ずるを二乘、有爲無爲の兩四倒を斷ずるを菩薩とす。

【一一】五蓋。蓋は卽ち蓋覆の義。五法ありて能く心性を蓋覆して善法を生ぜざらしむるなり。貪欲、瞋恚、睡眠、掉悔、疑法の五種蓋なり。

【一二】五欲。色、聲、香、味、觸の五境。之人の欲心を起すものなれば、欲と名づく。是れ眞理を汚すものなれば塵とも名づく、

【一三】三毒。二七七頁次參照。

【一四】阿耨多羅三藐三菩提. (Anuttara-samyak-sambodhi)。佛の無上の覺知を云ふ。略して阿耨三菩提、阿耨菩提と云ひ、譯して無上正遍智、無上正等覺、無上正直道等と言ふ。

【一五】退轉。三本・宮本による。

と。我れ當さに是の如く答ふべし。善男子よ、汝先づ當さに[二〇]善知識に親近して善道を修集すべし、法に於て合する所無く散ずる所も無く、取ること勿れ、捨つること勿れ、緣ずること莫れ、求むる莫れ、擧ぐる勿れ下ぐる勿れ、求むること勿れ、覓むる勿れ願ふ勿れ、諸法は是れ上、是れ中、是れ下なりと分別すること勿れ、然る後當さに不可思議の行處・無行處・斷行處・佛所行處を知るべし、と。

佛、文殊師利に告げたまはく、汝の是の如く答ふは何の義を答ふると爲すや。文殊師利言さく、世尊よ、我れ是の如く答ふるを名づけて無所答と爲す。世尊よ、佛の道場に坐したまふが如きはまた法に生滅する所ありと見るや不や。佛言はく、不なり。世尊よ、若し法にして無生無滅ならば、是の法一切の不善を斷じて一切の善法を成就すと說くことを得べきや不や。佛言はく、不なり。世尊よ、若し法にして不生不滅ならば、一切の不善の法を斷ぜず、一切の善法を成ぜず、是の法何の所見、何の所斷、何の所證、何の所修、何の所得かあらん、と。

是の語を說ける時、虛空中の萬の天子は天の靑黃赤白の蓮華を以つて、佛及び文殊師利の上に散じ、皆下つて佛及び文殊師利の足を禮して是の言を作さく、世尊よ、文殊師利を名づけて無礙尸利と爲し、文殊師利を名づけて子二一尸利と爲し、名づけて無餘尸利と爲し、名づけて無所有尸利と爲し、名づけて如尸利・法性尸利・實際尸利・第一尸利・利上尸利・無上尸利と爲さん、と。

文殊師利、諸の天子に語つて言はく、止みなん、止みなん。諸の天子よ、汝等相を取つて分別する勿れ。我れ諸法の是れ上、是れ中、是れ下なるを見ず、汝の說の如くにあらざるなり。文殊師利言はく、義は、我は是れ貪欲尸利・瞋恚尸利・愚癡尸利なり。是の故に我れは文殊師利と名づく、諸の天子よ、我れは貪欲・瞋恚・愚癡を出でず。凡夫の人は諸法を分別して過と出と至と到とを求む。諸の菩薩は法に於て過も無く、出も無く、至も無く、到も無し。諸の天子言さく、菩薩にして十地

【一六】四顚倒。前頁註參照。
【一七】五蓋。同上。
【一八】阿耨多羅三藐三菩提。前註參照。
【一九】三毒。前二七七頁參照。
【二〇】善知識。知識とは其の心を知り、其の形を識る義。知人卽ち朋友の義なり。博知識の謂に非ず。善とは我に益を爲し、我を善道に導くものを云ふ。代表的のものとして三種善知識あり卽ち一、外護の善知識二、同行の善知識三、敎授の善知識、知識と云ふ語を布施と同意に解することは第一の意によるなり。
【二一】尸利。文師利、室利、室離、等と作す。譯して、首、勝、吉祥、德の四義あり。

に到らずんば佛法に至らざるや。文殊師利言はく、諸の天子の意に於て云何んぞや。幻人は能く十地に到つて佛法に至るや不や。諸の天子言さく、幻化の人は尙住處無し、云何に況んや、此の住地より餘地に至らんや。文殊師利言はく、諸の天子よ、一切法は幻の如くにして、去も無く、來も無く、出も無く、至も無く、到も無し。諸の天子言さく、汝は當さに阿耨多羅三藐三菩提を得べからざるや。文殊師利言はく、諸の天子よ、意に於て云何ぞや。凡夫は貪欲に心覆はれ、能く道場に坐して[二二]一切智を得るや不や。諸の天子言はく、不なり。諸の天子言さく、文殊師利よ、汝今貪欲に心覆はれるは是れ凡夫なりや。文殊師利言はく、如是如是。我れは是れ凡夫にして貪欲從り起り、瞋恚より起り、愚癡より起る。我れは是れ[二三]外道、是れ邪行の人なり。諸の天子言はく、何を以ての故に自から、我れは是れ凡夫にして貪欲より起り、瞋恚より起り、愚癡より起ると言ふや。文殊師利言はく、是の貪欲・瞋恚・愚癡の性は、十方に之を求むるに不可得なり。我れ不住法を以て是の性の中に住するが故に、我れは是れ凡夫にして三毒に覆はると說けるなり。文殊師利よ、汝云何が外道と名づくるや。文殊師利言はく、我れ終に外道に到らず。諸道の性は不可得の故に、我れは一切の道に於て外と爲す。諸の天子言はく、汝云何んが是れ邪行の人なりや。文殊師利言はく、我れは已に一切法は、是れ邪にして虛妄不實なりと知る。是の故に我れは是れ邪行の人なり、と。

是の法を說きし時、萬の天子は是の語を聞くことを得て、皆無性法忍を得たり。各〻是の語を作さく、是の諸の衆生は皆大利を得、眞正金剛の語句を聞くことを得。云何に況んや、聞き已つて信解し、受持し、讀誦し、人の爲めに解說し、說の如く修行するものをや。當さに無礙辯才を得て一切法の中に眞慧の照明を得、巧みに諸法の一相一門を說き能く衆生に一切諸法は皆是れ佛法なりと示すべし。

爾の時に華戲慧菩薩、佛に白して言さく、世尊よ、願はくは入音聲慧の法門を說いて、當來の菩

【二二】一切智。佛智の名。三智の一。一切の法を知了すること。此を一切種智に對して總別の二義あり。若し總義に依れば總て佛智に名く、一切種智と云に同じ。若し別義によらば一切種智は差別界の事相を視る智。一切智又平等界の空性を視る智。一切種智は二六六頁參照のこと。

【二三】外道。佛敎外に道を立つるもの。邪法にして眞理の外なるもの。三種、六師或は九十五種、九十六種の外道等あり。

薩をして是の如きの法を聞いて驚かず、怖れず、亦た一切の音聲の究竟の性を知り、疑はず、悔いず、諸の音聲に於て障礙する所無からしめよ。佛言はく、止んなん、止んなん。是の事を問ふことを爲す[二四]勿れ。是の入音聲慧の法門は、應さに新發意菩薩の前に於て說くべからず。所以は云何んとなれば、新發意の菩薩は、解する能はず、知る能はず、思ふこと能はざればなり。若し菩薩摩訶薩にして是の音聲慧の法門に入るものは、假使ひ人有つて[二五]恒河沙劫に於て惡口、罵詈誹謗毀呰すとも、是の人恚恨を生ぜず。若し人恒河沙劫に於て、一切の樂具を以て供養すとも、愛心を生ぜず。譬へば漏盡阿羅漢の、一切の愛心に愛心を生ぜず、一切の瞋心に瞋心を生ぜざるが如し。善男子よ、是の音聲慧の法門に[二六]入れる菩薩は、利衰・毀譽・稱譏・苦樂等の八法に於て已に過ぎて心傾動せざること、譬へば[二七]須彌山王の如くならん。

爾の時に華戲慧菩薩は復た佛に白して言さく、願はくは、必らず爲めに入音聲慧の法門を說きたまへ。當來の菩薩は是の法門を聞くことを得て、當に自ら過咎を知り、亦た餘人に教ゆべし。

爾の時に佛、華戲慧菩薩に告げたまはく、善男子よ、汝今諦に聽き、善く之を思念せよ。當さに汝が爲めに說くべし。唯だ然なり。世尊よ。佛、華戲慧菩薩に告げたまはく、若し菩薩にして貪欲の音聲を聞けば過罪の想を生じ、離貪欲の音聲を聞けば利益の想を生ずれば卽ち是れ佛法を學ばざるなり。若し瞋恚の音聲を聞いて過罪の想を生じ、離瞋恚の音聲を聞いて利益の想を生じ、若し愚癡の音聲を聞いて過罪の想を生じ、離愚癡の音聲に於て利益の想を生ぜば、則ち是れ佛法を學ばざるなり。若し少欲の音聲に於いては喜想を生じ、多欲の音聲に於て礙想を生ずるは卽ち音聲の法門を行ぜざるなり。不知足の音聲に於て礙想を生ぜば、則ち是れ音聲の法門を行ぜざるなり。若し細行の音聲に於て喜想を生じ、麁行の音聲に於て礙思を生ぜば、則ち是れ音聲の法門を行ぜざるなり。若し樂靜の音聲に於ては則ち喜び、憒閙の音聲に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるな

【二四】用或は「勿」字か。

【二五】恒河沙劫。恒河沙(Gaṅgā-nadī vālukā)。略稱、恒沙、恒河の砂の數にて吾人の思慮を絕する無量數。劫は數量なり。尙劫は二七〇頁を參照せよ。

【二六】入れる。三本・宮本によって加ふ。

【二七】須彌山王。須彌山のこと。(須彌山は二六七頁を參照せよ)。諸山の第一位に位すれば王と云ふ。

り。若し[二八]忍辱の音聲に於て利想を生じ、瞋恚の音聲に於て礙想を生ぜば、則ち是れ佛法を學せざるなり。若し[二九]精進の音聲に於て利想を生じ、懈怠の音聲に於て礙想を生ぜば、則ち是れ佛法を學せざるなり。[三〇]禪定の音聲に於て利想を生じ散亂の音聲に於て礙想を生ぜば、則ち是れ佛法を學せざるなり。智慧の音聲に於て利想を生じ、愚癡の音聲に於て礙想を生ぜば、則ち是れ佛法を學せざるなり。若し近道の音聲に於て卽ち喜び、遠道の音聲に於て卽ち礙ゆれば、則ち是れ音聲の法門を學せざるなり。生死に於て過咎を見、[三一]涅槃に於て利益を見れば、則ち是れ音聲の法門に入らざるなり。彼岸に於ては則ち喜び、此岸に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ音聲の法門を學せざるなり。聚落の音聲に於て礙想を生じ、空閑の音聲に於て喜想を生ぜば、則ち是れ音聲の法門を學せざるなり。若し獨行の音聲に於て喜想を生じ、衆行の音聲に於て礙想を生ぜば、則ち是れ音聲の法門を學せざるなり。比丘所行の音聲に於て喜想を生じ、白衣所行の音聲に於て礙想を生ぜば、則ち是れ音聲の法門を學せざるなり。有威儀に於ては則ち喜び、無威儀に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。淸淨行に於ては則ち喜び、不淸淨行に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。一行に於ては則ち喜び、雜行に於ては則ち礙ゆれば則ち佛法を學せざるなり。離欲行に於ては則ち喜び、婬欲行に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。離瞋の想に於ては則ち喜び、瞋の想に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。離癡の想に於ては則ち喜び、癡の想に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。空に於ては則ち喜び、有に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。無相に於ては則ち喜び、有想に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。[三二]無作に於ては則ち喜び、有作に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。菩薩行に於ては則ち喜び、聲聞辟支佛行に於ては則ち礙ゆれば、則ち是れ佛法を學せざるなり。若し菩薩の過咎を說かば、則ち阿耨多羅三藐三菩提に遠ざかり、亦た業障の罪を

【二八】忍辱。六波羅蜜、十波羅密の一。他の屈辱を忍耐するの意。梵語、羼提の譯。

【二九】精進。又勤と云ふ。小乘七十五法中大善地法の一、大乘百法中善の心所の一なり。勇猛に善法を修し、惡法を斷ずる心の作用なり。六波羅蜜の一。

【三〇】禪定。禪とは梵語禪那の略。思惟修と作す。新譯には靜慮と云ふ。思惟修とは所對の境を思惟して研習する義。靜慮とは心體寂靜にして能く審慮する義なり。次に定とは梵語三昧の譯なり。心一境に定止して散動を離るゝ義なり。卽ち一心に物を考ふるが禪にて、一境に念を靜むるが定なり。禪定は德なれども色界、無色界の界に屬する心德。且つ禪には審慮の用あるを以て眞理を觀念するには必らず禪に依る可きを以て最も學道の要とす。

【三一】涅槃。梵音(Nvirana)。又泥曰、泥畔、涅槃那など云ふ。舊譯の諸師は滅、滅度、寂滅、不生、解脫等と譯し、新譯、利曬縛吺(Parinirvana)と云ひ、圓寂と譯す。滅とは生死の因果を滅する義。滅度、寂滅、不生、解脫等は皆義翻、滅と譯すが正翻なり。

受けん。若し菩薩の威儀の過罪を說かば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を遠ざからん。若し菩薩にして他の菩薩に於て下想を生じ、已に於て勝想を生ぜば、則ち爲めに自から傷き、亦た業障の罪を受けん。若し菩薩にして餘の菩薩を敎へんと欲せば、當さに佛の想を生じ、然る後之を敎ゆべし。菩薩若し阿耨多羅三藐三菩提を捨てざらんと欲せば、應さに心に餘の菩薩を輕恚すべからず。善男子よ、功德を滅失し餘の菩薩を輕恚するが如き者有ること勿れ。是の故に菩薩若し功德善根を守護し、亦た一切法の中に於て無障礙の慧を得んと欲せば、當さに晝夜各〻三時に、一切の佛道を求むる菩薩を禮す可し。

爾の時に文殊師利法王子、佛に白して言さく、世尊よ、我が佛の所說の義を知れる如くんば、貪欲の音聲は佛の音聲と等しくして異あること無く、瞋恚の音聲は佛の音聲と等しく、愚癡の音聲は、佛の音聲と等しく、外道の音聲は佛の音聲と等しく、少欲の音聲は多欲の音聲と等しく、知足の音聲は不知足の音聲と等しく、細の音聲は麁の音聲と等しく、樂獨の音聲は樂衆の音聲と等しく、此岸の音聲は彼岸の音聲と等しく、遠の音聲は近の音聲と等しく、生死の音聲は涅槃の音聲と等しく、聚落の音聲は空閑の音聲と等しく、[三三]布施の音聲は慳の音聲と等しく、持戒の音聲は毀戒の音聲と等しく、忍辱の音聲は瞋恚の音聲と等しく、精進の音聲は懈怠の音聲と等しく、禪定の音聲は亂意の音聲と等しく、智慧の音聲は愚癡の音聲と等し、と。

爾の時に華戲慧菩薩は文殊師利法王子に問ふ、何の因緣を以ての故に皆な等しきや、と。文殊師利言はく、天子よ、意に於て云何ぞや。貪欲の音聲は云何が是と爲ん。天子言はく、貪欲の音聲は空の響の如し。文殊師利言はく、汝、佛の音聲を知るや、亦復た云何ぞや。天子言はく、空を出でざること亦た響の法の如し、と。文殊師利言はく、是の因緣を以ての故に我れ二聲は皆是れ平等なりと說けるなり。

【三二】無作。因緣の造作なきこと。有作に對す。無爲の如し。

【三三】布施。梵語檀那(Dāna)布施と譯す。福利を人に施與し與ふるなり。施行種種なれども財物を施與するを本義とす。六波羅蜜の一、

爾の時に佛、文殊師利に告げたまはく、汝先世初發意地に住し、未だ是の如き諸法の相に入らざる時、爲めに何の障礙の罪を起せるや。汝今之を說け。當來世の[三四]假名の菩薩は汝が說く所の障礙の罪を聞いて、當さに自から守護すべし。

文殊師利佛に白して言さく、唯だ然なり。世尊よ、我れ當さに自から障礙の罪を說くべし。若し之を聞く者は當さに憂怖あるべし。然も其れ能く業障の罪を滅し、また一切の中に於て無礙の慧を得ん。世尊よ、過去無量・無邊・不可思議・阿僧祇劫に。爾の時に佛有せり。[三五]師子吼鼓音王如來・應供・正遍智・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號したてまつる。其の佛の壽命は十萬億[三六]那由他歲なり。三乘の法を以て衆生を度し、國を千光明と名づけ、其の國の樹木は皆七寶より成り、其樹皆是の如きの法音を出せり。所謂ゆる、空の音、無相の音、無作の音、無生の音、無所有の音、無取相の音なり。是の諸法の音を以て衆生をして道を得せしめたまふ。其の師子吼鼓音王佛の初會の說法に、九十九億の聲聞の弟子皆阿羅漢を得、諸漏已に盡き諸の重擔を捨て、已が利を逮得し諸有の[三七]結を盡し、正智を以て解脫を得たり。菩薩衆も亦た九十九億にして、皆無生法忍を得、能善く種々の法門に入り、若干百千萬億の諸佛に親近し、供養し、亦た若干の百千萬億の諸佛の爲めに稱歎せられ、能く若干百千萬億の無量の衆生を度し、能く無量の[三八]陀羅尼門を生じ能く無量の百千萬億の三昧門を起せり。及餘の新たに菩薩の意を發せるものも稱數すべからず。其の佛の國土は無量莊嚴にして說いて盡すべからず。彼の佛世に住して敎化し已訖て[三九]無餘涅槃に入りたまふ。滅度の後、法の住すること六萬歲、諸樹の法音皆な復た出でざりき。

爾の時に菩薩の比丘有つて名づけて喜根と曰ふ。時に法師と爲り質直端正にして、威儀を壞せず、世法を捨せず、爾の時の衆生、普ねく皆利根にして樂しみて深論を聞く。

其の喜根法師は衆人の前に於て、少欲・知足・細行・獨處を稱讚せず、但だ衆人に諸法の實相を敎

【三四】假名の菩薩。假名菩薩は十信の菩薩を言ふ。十住已去を實行の菩薩とたす。假名、二釋あり、(一)、名につきて釋す。諸法もと名なし。人爲を以て假に名を付くるのみ。(二)、一切の名は虛假不實にして實に契はず。之を假名とす。菩薩具さに菩提薩埵、(Bodhisattva) 舊に大道心、衆生、道衆生等。新譯に大覺有情、又薩埵は勇猛の義。勇猛に菩提を求むるが故に菩提薩埵と云ふ。又高士、大士、とす。總じて佛果を求むる大乘衆に名く。

【三五】師子吼鼓音　如來。師子吼は佛大衆の中に於て決定の說を爲して畏るゝことなきを云ふ。佛名なり。

【三六】那由他歲。那由他(Nayuta)。又那庾多、那由多、那述と云ふ。數目の名、わが邦の億に當る。

【三七】結。結集の義。繫縛の義。煩惱の異名。

【三八】陀羅尼門。二七三頁參照。

【三九】無餘涅槃。二七四頁參照。

ゆ。所謂ゆる、一切の法性は卽ち貪欲の性、貪欲の性は卽ち是れ諸法の性、瞋恚の性は卽ち是れ諸法の性、愚癡の性は卽ち是れ諸法の性なり、と。其の喜根法師は是の方便を以つて衆生を教化す。衆生の所行は皆な是れ一相にして各ゝ相ひ是非せず、所行の道心に瞋癡無く、無瞋癡の因縁を以つての故に疾やかに[四〇]法忍を得。佛法の中に於て決定して壞せざりき。

世尊よ、爾の時に復た比丘法師の菩薩道を行ずるものあり、名づけて勝意と曰ふ。其の勝意比丘は禁戒を護持し、[四一]四禪[四二]四無色定を得、[四三]十二頭陀を行ぜり。世尊よ、是の勝意比丘に諸の弟子有り。其の心輕動にして他の過を見ることを樂しむ。世尊よ、後一時に勝意菩薩は聚落に入つて乞食し、誤つて喜根の弟子の家に至る。舍主居士の子を見て卽ち其の所に到り、座を敷きて坐し、居士が子の爲めに少欲知足の細行を稱讃し無利の語の過を說き衆を遠ざかり獨行を樂しむ者を稱歎す。又居士が子の前に於て喜根法師の過失を說きて、是の比丘は不實にして邪見の道を以て衆生を教化せり、是れ雜行者なり、婬欲は無障礙なり、瞋恚は無障礙なり、愚癡は無障礙なり、一切の諸法は皆無障礙なりと說く。是の居士の子は利根にして無生法忍を得。卽ち勝意比丘大德に語つて、汝貪欲は是れ何の法と爲すと知るや。勝意言はく、居士よ、我れ貪欲は是れ煩惱なりと知る。居士の子言はく、大德よ、是の煩惱は內に在りとせんや、外に在りとせんや。勝意言はく、內に在らず、外に在らず、と。大德よ、若し貪欲にして內に在らず、外に在らず、東西南北、四維上下、十方に在らざれば卽ち是れ無生なり。若し無生ならば云何んが若しくは垢、若しくは淨と言はんや。

爾の時に勝意比丘、瞋恚して喜ばず、座より起ちて去り、是の言ばを作さく、是の喜根比丘は、妄語の法を以て多くの衆人を惑はす。是の人は入音聲の法門を學せざるを以ての故に、佛の音聲を聞いては則ち喜び、外道の音聲を聞いては則ち瞋る。[四四]梵行の音聲に於ては則ち喜び、非梵行の音聲に於ては則ち瞋る。入音聲の法門を學せざるを以ての故に、淨なる音聲に於ては則ち喜び、垢な

【四〇】法忍。二八三頁參照。

【四一】四禪。二七四頁參照。

【四二】四無色定。二七四頁參照。

【四三】十二頭陀。（二七四頁參照）。修佛道行者が守る可き十二種の條項なり。（一）に、納衣、又糞掃衣と云ふ。（二）に、三衣、又僧伽梨、欝多羅、安陀會の三衣を着し餘長の衣を用ゐざるなり。已上の二種は衣服に屬す。（三）に、乞食又常乞食と云ふ。（四）不作餘食、午前中唯一度の正食をとるのみ餘の正食卽ち二度已上はとらず。（五）一坐食又一食。午前中一度の正食の外更に小食（餅、菓、粥等）をもとらず。（六）一揣食又節量食 食量を節するなり。（七）阿蘭若處又は空閑處。（前の本項を見よ）（八）塚間坐。墳墓の所に住す。（九）樹下坐。（十）露地坐。（十一）隨坐。草地あるに從つて住するなり。（十二）常坐不臥。（三）—（六）の四種は食に、（七）—（十二）の六種は住處に屬す。

【四四】梵行。梵は淸淨の義。婬欲を斷ずる法を梵行と爲す、卽ち梵天の行法なり。梵行を修して梵天に生るゝなり。一般に淸淨行、佛道修行を意味す。

る音聲に於ては則ち瞋る。入音聲の法門を學せざるを以ての故に聖道の音聲に於ては則ち喜び、凡夫の音聲に於ては則ち礙ゆ。入音聲の法門を學せざるを以ての故に、樂の音聲に於ては則ち喜び、苦の音聲に於ては則ち礙ゆ。入音聲の法門を學せざるを以ての故に、出家の音聲に於ては則ち喜び、在家の音聲に於ては則ち礙ゆ。入音聲の法門を學せざるを以ての故に、[四五]出世間の音聲に於ては則ち喜び、世間の音聲に於ては則ち礙ゆ。入音聲の法門を學せざるを以ての故に、布施に於ては則ち利の想を生じ、慳に於ては則ち礙の想を生ず。佛法を學せざるを以つての故に、持戒に於ては利の想を生じ、毀戒に於ては礙の想を生ず。

是の時、勝意比丘は其の舍を出で已り、還つて所止に到り、衆僧の中に喜根菩薩を見、衆人に語つて言はく、是の比丘は多く虛妄の邪見を以つて衆生を教化す。所謂ゆる、婬欲は障礙に非ず瞋恚は障礙に非ず、愚癡は障礙に非ず、一切の法は障礙に非ずと。

爾の時に喜根菩薩は是の念を作さく、是の比丘は必ず當さに障礙の罪業を起すべし。我今當さに爲めに是の如き深法を說き乃至修助菩提道法の因緣を作さしむべし、と。

爾の時に喜根菩薩は衆僧の前に於て、是の諸の偈を說けり。

貪欲は是れ涅槃なり、恚癡も亦た是の如し。此の如き三事の中に、無量の佛道有り。若し人有つて貪欲瞋恚癡を分別せんに、是の人佛を去ること遠し、譬へば天と地との如し。菩提と貪欲とは、是れ一にして二に非ず、皆一の法門に入り、平等にして異有ること無し。凡夫は聞いて怖畏し、佛道を去ること甚だ遠し。貪欲は生滅ならず、心を惱ましむること能はず。若し人我の心有り、及得見有れば、是の人を貪欲と爲す。將さに地獄に入らん。貪欲の實性は、卽ち是れ佛法の性なり。佛法の實性も、亦た是れ貪欲の性なり。是の二法は一相にして、所謂ゆる是れ無相なり。若し能く是の如く知らば、則ち世間の導ならん。若

【四五】出世間。世間の稱に對す。一切生死の法を世間とし、涅槃二六五頁參照の法を出世間とす。

し人あつて、是の持戒と毀戒とを分別し、持戒の狂なるを以ての故に、他人を輕蔑す。是の人菩提無く、亦た佛法も有ること無し。但だ自から安住し、有所得の見の中に立ち、若しくは空閑の處に住し、自から貴んで人を賤め、尙天に生ずることを得ず、云何に況んや菩提に於てをや。皆空閑に著し、邪見に住するに由るが故に。

邪見と菩提と、皆等しくして異り有ること無し。但だ名字の數の、語言を以ての故に別異す。若し人此れ通達せば、則ち菩提に近づくと爲す。煩惱垢を分別するは、即ち是れ淨見に著し、菩提も佛法もなく、有得見の中に住し若し佛法に貪著せば、是れ則ち佛法に遠ざかる。貪は無礙の法の故に、則ち還つて苦惱を受けむ。若し人、貪欲瞋恚癡を分別すること無ければ、[四六]三毒の性に入るが故に、則ち菩提を見ると爲す。是の人佛道に近づき、疾やかに無生忍を得ん。

若し有爲の法を見て、無爲の法と異らば、是の人終いに有爲の法を脫することを得ず。若し二性同じと知らば、必ずや人中の尊と爲らん、佛は菩提を見ず。亦た佛法を見ず。諸法に著せざるが故に、魔を降して佛道を成ずるなり。若し衆生を度せんと欲せば、其の性と分別することを勿れ。一切諸の衆生は、皆[四七]涅槃に同じ。若し能く是くの如く見れば、是れ則ち成佛を得ん。其の心閑寂ならず、而も閑靜の相と現ず。是れ人天の中に於て、則ち是れを大賊と爲す。是の人に菩提無く、亦た佛法も有ること無し。若し是の如きの願を作さば、我れ當さに作佛を得べし。是の如きの凡夫は、無明の力に牽かる、佛法は[四八]甚だ淸淨にして、其れを喩へば虛空の如し。此の中に取るべきものなく、亦た捨つるべきもの有ること無し。佛は佛道を得たまはず、亦た衆生を度したまはず。凡夫は强いて作佛と度衆生とを分別す。是の人佛法に於て、則ち甚大遠しと爲す。若し衆生の苦を見れば、則ち是れ苦を

【四六】三毒。二六九頁參照。
【四七】涅槃。前二八九頁參照。
【四八】本文は淸三本・宮本によつて甚だとす。

受くる者なり。衆生に衆生無く、而も衆生在りと說く、衆生の相の中に住せば、則ち菩提有ること無し。若し人衆生は是れ、畢竟解脫なりと見れば、婬恚癡有ること無し、是く知るを世の將と爲す。若し人衆生を見て、非衆生を見ざれば、佛法の實を得ず、佛は衆生の性に同じければなり。若し能く是の如く知らば、則ち世間の將と爲らん。

若し人成佛せんと欲せば、貪欲の性を壞する莫れ、貪欲の性は卽ち是れ、諸佛の功德なり。

若し人發心せんと欲せば、菩提の道に隨順して、自から心は菩提に異ると、分別有ること莫れ、發心は卽ち菩提なり、是れを知るを世の將と爲さん。

若し外道の惡を說いて、佛なり世中の尊なりと稱し、是の二異に非らずと說かば、是れ世の將たるを知る。若し人菩提を求むるに、是の人に菩提無し、若し菩提の相を見るに、是れ則ち菩提に遠ざかる。菩提は菩提に非ず、[四九]佛陀は佛陀に非ず、若し是れ一相なりと知らば、是れを世間の導と爲さん。

若し人是の念を作さば、我れ當さに衆生を度すべし、卽ち衆生の相に著せば、是の人に菩提無し、亦た佛法有ること無く、有見の中に住す、貪欲には內外無し、亦た諸方に在らず、是空の法を分別せば、凡夫の燒かるゝ所と爲す。幻の如く焰や響の如く、夢の[五〇]石女の兒の如し、諸の煩惱は是の如く、決定して不可得なり。是の空を知らざるが故に、凡夫は狂惑せらる、若し煩惱の性を求めば、煩惱は卽ち是れ道なり。若し人有つて是れ道、是れ非道なりと分別せば、是の人終に、無分別の菩提を得ず。凡夫は佛法を畏れ、佛を去ること甚だ遠し。若し空の法を疑はずんば、是の人菩提を得ん。一切の有爲の法は、卽ち是れ無爲の法なり。是の數は不可得、無數の故に無爲なり。若し菩提の心を以つてせば、自から高く畏るゝ所無し。自から當さに作佛すべしと念はゞ、是の人菩提無し、亦た佛法有ること無く、菩提の

【四九】佛陀三本、宮本による。

【五〇】石女＝女にしてなきもの。俗に「ウマズメ」と云ふ。又婬を爲し能はざるもの。

[五二]寶印と離れん。若し但だ經を讀み、憶想して分別を爲す有り、深く義趣を思はずして、但だ爲に名利を貪り、自から當さに作佛し、必ずや無有疑を成ず可しと念ひ、唯だ名利を貪り、讀經して閑靜に住し、少欲の行を分別して、還つて貪の爲めに牽かれ、若し貪を捨遠せんと欲するも、貪に遠ざかる事を得ず。　若し貪の實法に達せば、是の人能く貪を離れん、法の實際を得ずんば、長夜に持戒し、諸の無礙禪を得ると雖も、佛の法味に入らざるなり。　法に性有る無きを知らば、一切の法を壞せず。　戒非戒を言はずんば、有見の中に脱するを得ん。　持戒の性無きを以て、持戒の法を知る。　是の如く戒の相を知らば、終に戒を毀せず。　諸佛の法王、法藏思議すること叵し、無量の方便力を以て、諸の衆生を引導し、一相の法門を以つて、寂滅の道に入らしむ、　凡夫佛の、我無く法有ること無く、一相自性空なりと說きたまふを聞いて、信ぜずんば深坑に墮せん。　白衣は欲を受くと雖も、是の法を聞いて畏れず、頭陀するものゝ有見の中に、住在するに勝る。　現在十方の佛、諸の世間を利益したまふ。　法の虛空の如くなる事を知つて、皆以つて菩提を得ん。　若し無智なる者有つて、分別の法を樂しみ、是の實法を聞くもの、則ち疑を生じ怖畏せば、是の人無量劫に、備さに諸の苦分を受けん。と。

是の諸の偈の法を說きたまひし時、三萬の諸の天子は無生法忍を得、萬八千の人は漏盡し、解脫す。即ち時に地裂けて、勝意比丘は大地獄に墮し、是の業障罪因緣を以つての故に、百千億那由他劫、大地獄に於て諸の苦毒を受け、地獄より出でて七十四萬世、常に誹謗を被り、若干百千劫に乃至佛の名字を聞かず、是れより已後還つて佛に値ふことを得て、出家學道して而も忘樂あること無し。六十三萬世に於て常に道に反き俗に入り、亦た業障の餘罪を以ての故に、若干の百千世に於て諸根闇鈍なり。

世尊よ、爾の時、喜根法師は今の東方十萬億の佛土を過ぎて國有り、寶莊嚴と名づく。中に於て

【五二】實。宮本には十方。

阿耨多羅三藐三菩提を得。勝日光明威徳王如來・應供・正遍知と號(な)づけ、今に於て現在す。其の勝意比丘とは、今我が身是れなり。

世尊よ、我れ未だ是の如きの法相の門に入らざる時、是くの如きの苦・分別苦・顛倒苦を受く。是の故に若しくは菩提の心を發する者、若しくは小乘の心を發する者、是くの如きの[五二]業障の罪を起すことを欲せざるもの、是くの如きの苦惱を受くることを欲せざるものは、應さに佛法を拒逆すべからず。瞋の礙を生ずべき處(ことわり)ある無し。

佛、文殊師利に告げたまはく、汝是の諸の偈を聞いて何等の利を得るや、と。世尊よ、我れ畢に是の業障の罪を已るは、是の偈を聞ける因緣の故に。所生の處に在つて、利根智慧にして深法忍を得、決定の忍を得て深法を巧說せり。

文殊師利よ、誰が力の爲めの故に、能く是くの如き無量[五三]阿僧祇劫の罪業の因緣を憶ふや、世尊よ、諸の菩薩の念ずる所あり、說く所あり、思惟する所あるは皆是れ佛の神力なり。所以は云何ん。一切の諸法は皆佛より出づればなり。

佛、文殊師利に告げたまはく、若し佛の[五四]十力を得る者と、若しくは是の經を聞く者有らば等しく異有ること無く、若し無生法忍を得るものと、是の經を聞く者とは亦た等しくして異り無し。文殊師利言はく、我れ佛の所說の義を知るが如くんば、此の經を聞くものは、無量不可思議の功德の利を得ん。

文殊師利よ、如是如是(またまたかくのごとし)。是の經を聞かば、無量不可思議の功德の利を得ん。但だ佛は廣說せざるなり。何を以ての故に、修道せず、精進せざる者、是くの如きの惡人は是の利を說くを聞かば、則ち信受すること能はざればなり。

爾の時に文殊師利法王子及び[五五]彌勒(みろく)菩薩は佛に白して言さく、世尊よ、是の經を護念して、未來

【五二】業障。衆生が身、口、意に於て惡業を作りし爲めに、正道を蔽障するもの。

【五三】阿僧祇劫（Asaṃkhyeya-kalpa）。無數の劫。劫は年時の名。無央數時と譯す。

【五四】十力。如來の十力。（一）、處非處智力（二）、業異熟智力（三）、靜慮解脫等持等至智力（四）、根上下智力（五）、種々界智力（六）、遍趣行智力（七）、宿住隨念智力（八）、死生智力（九）、生死智力（十）、漏盡智力。以て一切を了知するなり。

【五五】彌勒（Maitreya）。新稱、彌帝隷、梅低梨、迷諦隷、等。慈氏と譯す。名は阿逸多、無能勝と譯す。或は阿逸多は姓、彌勒は名なりと。南天竺波羅門の家に生れ、釋迦如來の佛位を紹ぐ補處の菩薩となり、佛に先立ち入滅、兜率天の內院に生じ、人中の五十六億七千萬歲を經て人間に下生し、華林園の龍華樹の下に正覺を成ず、初め過去の彌勒佛に值て慈心三昧を修得せしより、慈氏、乃至成佛後も猶之の名を立つ。

【五六】聲聞。梵語、舍羅婆迦、（Śrāvaka）。佛の小乘法中の

世後五百歳に於て、當さに此經をして普ねく宣べ、流布して皆受持することを得せしめ、魔若しくは魔天をして其の便(たより)を得ざらしむべし。爾の時に佛はこの法を護念したまふが故に、左右顧視したまふ。卽ち時に十方恒河沙無量の國土は六種に震動す。是の如くにして則ち爲めに是の經を護念したまへり。及(また)十方恒河沙の諸佛も亦た是の經を護念せり。是の經を說きたまふ時、十方の國土中の恒等無量の衆生は無生法忍を得たり。云何に況んや聲、[五六]聞の[五七]無學を得る者をや、云何に況んや學地に住する者をや。

爾の時に[五八]阿難は卽ち座從り起ちて偏へに右の肩を袒(はだぬ)ぎ佛に白して言さく、世尊よ、當さに何を以て此經を名づけ、云何んが奉持すべきや、と。佛、阿難に告げたまふ、是の經を名づけて諸法無行と爲すと。是の經を說き已りたまふ時、文殊師利法王子・彌勒菩薩摩訶薩・師子遊步菩薩摩訶薩・華戲慧天子等、一切の菩薩衆及び阿難・[五九]天人・[六〇]阿修羅等、佛の所說を聞いて皆大いに歡喜したりき。

諸法無行經　終

弟子、佛の聖敎を聞いて四諦の理を悟り見思の惑を斷じ、涅槃に入るものなり。是れ佛道中の最下根なり。

【五七】無學。聲聞乘の四果の中に前三果を有學とし、第四の阿羅漢果を無學とす。學道圓滿して更に修學することなきを言ふ。

【五八】阿難（Ānanda）。阿難陀の略。譯、歡喜、慶喜。斛飯王の子、提婆達多の弟、佛の從弟にして十大弟子の一多聞第一。佛成道の夜に生る。佛壽五十五、阿難二十五の時出家佛に從ふこと二十五年、一切の佛法を受持す。結集に於ては經を誦出す。

【五九】天人。天と人。六趣の中　天趣と人趣。人趣、(Manuṣya-gati)人類の生所。閻浮提等の四大州に分る。天趣(Deva-gati)身に光明あり、自然に快樂を受くる衆生を天と名づく。欲界に六所あり、六欲天と云ふ及び色界無色界皆彼の生所。

【六〇】阿修羅（Asura）。又阿須羅に作る。舊稱、阿修羅、阿須倫、阿蘇羅等。新稱、阿素洛。阿修羅等譯して、無端、容貌醜陋の義。阿素洛、譯して非天。常に帝釋と、戰鬪をなす神。六道の一。八部衆の一。

持世經解題

一、經錄を抄す

一、出三藏記集第二に、羅什譯として「持世經四卷、或三卷」を出だし、竺法護譯として「持人菩薩經三卷」を出だす。

二、隋法經等衆經目錄第一・衆經異譯二に「持人菩薩所問經三卷、晋世竺法護譯。持世經四卷、亦名法印經、後秦弘始年羅什譯、右二經同本異譯」。

三、靜泰衆經目錄第二・大乘經重翻の中に「持人菩薩所問經四卷五十二紙、晋世竺法護譯。持世經四卷、亦名法印經、七十五紙、已上同上」。

四、大唐內典錄第六・大乘經單重翻本幷譯有無錄の中に大概同上の記事出づ。

五、武周刊定衆經目錄第四・大乘重譯經目卷三の中に「持人菩薩所問經、一部四卷、或三卷、六十一紙、右西晋沙門竺法護於長安譯、見內典錄。持人菩薩經一部三卷、右前秦建元年涼州沙門竺佛念譯、見長房錄。持世經一部四卷、亦名法印經八十九紙、右後秦弘始年沙門羅什於常安逍遙園譯、見長房錄。善臂菩薩所問經一卷二十九紙、右達摩笈多羅錄云後秦沙門羅什譯、與持人菩薩所問經同本異譯。善肩品抄經一卷、出善臂菩薩經、右出眞寂寺錄、右前五經同本別譯」。

六、同錄第十三・見定流行入藏錄卷上に「持世經一部四卷亦名法印經、八十九紙」と善臂菩薩所問經と持人菩薩所問經と並べあげてある。

七、古今譯經圖紀卷第二に竺法護譯として持人菩薩所問經三卷を、第三に羅什譯として持世經四卷をあげてゐる。

八、開元釋敎錄第十一・別分乘藏錄下に「持人菩薩經四卷、有加所問二字、或三卷、西晋三藏竺法護譯第一譯。持世經四卷、一名法印經、或三卷、姚秦三藏鳩摩羅什譯第三譯。右二經同本異譯、前後三譯、第二本闕」。

九、同錄第十九・入藏錄、大乘入藏錄上に「持人菩薩經四卷、初云持人菩薩所問陰種諸入以了道慧經、或三卷五十四紙、西晋三藏竺法護譯。持世經四卷、一名法印經、或三卷、七十八紙、姚秦三藏羅什譯」。

十、開元釋敎錄略出第一にも經名をあぐ。

十一、貞元新定釋教目錄第六、羅什譯の中に「持世經四卷、一名法印經、或三卷、第二出、與法護持人經等同本、見二秦錄、及僧祐錄」。

十二、同錄第二十一・有譯有本錄中に持人持世ならべあげ、同本異譯の旨を記

す。

十三、同錄第二十四・有譯無本錄中に「持人菩薩經三卷、竺佛念第二譯、右一經前後三譯二存一闕」。

十四、歴代三寶紀第六に竺法護譯持人菩薩所問經三卷を、同第八に竺佛念譯持人菩薩經三卷をあげ、更に羅什譯として「持世經四卷、第二出、與法護持人菩薩所問經本同譯異名別文小廣見二秦錄」とある。

二、内容について

法寶標目第三に云く、「持人菩薩經四卷晋譯と、持世經四卷秦羅什法師譯と、右二經の本は同じく譯は別なり、什師の所譯は文備はり詞順へり。持世菩薩、佛に問ふ。いかにして菩薩は能く諸法實相を知り、亦善く諸法の相を分別せん。云何が念力を得て身を轉じ、不斷念を成就し、乃至、無上菩提を得んと。佛、爲に問に隨つて開示したまふ。初品は所問の種々の法門に答へ、次の五陰品、次の十八性品、次の十二入品、次の十二因緣品、次の四念處品、次の五根品、次の八聖道品、次の世間出世間品、次の有爲無爲法品、品を逐うて、法義至つて詳かに至つて妙に、說いて過去諸佛の本事に及ぶ。此經に種々の大功德利益ありて、乃至、疾く無上菩提を得しむ」と。以て經の内容を知るべく、之を法印經と名づくる事は五陰十二入等の法印について、すべて大乘的の新解釋を加へ、「一切法これ如來法」なりと開會し、「一切衆生の疑を斷じ、一切衆生の心を喜ばしむる菩薩藏經」と印するによる。小乘の法相をそのまゝ大乘法門として解釋し、之によつて授記作佛を說き後五百歲の囑累に及びたる初期大乘法門の完璧である。武周刊定衆經目錄に善臂菩薩所問經と同本異譯といふは何かの誤りであらう。善臂菩薩所問經は大寶積經の第九十三、九十四兩卷に編入せられ、專ら菩薩の六度行を說いたものである。同じく羅什譯であるから連續するものとして見られぬこともない。因に持人經は、

卷第一　四事品第一、妙慧超王佛品第二。

卷第二　持施王品第三、闕第三品、十八種品第五、曉三界品第六、諸入品第七、十二緣品第八。

卷第三　三十七品第九。

卷第四　世俗度世品第十、有爲無爲品第十一、寶光菩薩品第十二、往古品第十三、颰陀和五百人品第十四、囑累品第十五。

となつてゐる。梵本に相違があつたものか、また羅什の譯經の妙がこの相違を來たしたものか、何れにするも竺法護と羅什が重要なる大乘經たとへばかの法華の如き、共に之を著眼して重譯したことは

二者が支那大乘佛教を組織するにあたり共通方針を以てした事が注意せらるゝ。出三藏記集第七、聖法印經記第十七に、「元康四年十二月二十五日、月支菩薩沙門法護、於酒泉演出此經、弟子竺法首筆受、令此深法普流十方、大乘常住」といへるは或はこの持世經すなはち法印經についていへるものかと思ふ。大乘法門流布の源流となるお經である事は疑を容れぬ。

三、國譯につき

この國譯は石井亮薫、飛鳥井舜達兩氏を煩はす。

昭和八年四月三日

譯者　二宮守人　識

持世經

四

持世經

巻の第一

初品 第一

姚秦龜茲の三藏[1] 鳩摩羅什譯す

是の如く我れ聞く。一時佛王舍城の[2]迦蘭陀竹園に在して、大比丘僧と俱なりき。爾の時世尊若干の百千萬衆に恭敬圍繞せれらて爲めに法を說きたまふ。會中に[3]菩薩摩訶薩有り名を持世と曰ふ。諸の菩薩摩訶薩の無量功德莊嚴の發心の爲に善く一切法の彼岸を知らんと欲し、善く無量の願を發して無量の莊嚴を具足する事を知らんと欲し、無量の諸法の決定の相に通達せんと欲し、無量の莊嚴の願を發して深心の所行淸淨ならんと欲し、善く淸淨具足の布施を知らんと欲し、善く畢定淸淨の持戒を知らんと欲し、善く具足の[4]忍辱柔軟の心を知らんと欲し、善く淸淨の精進を知らんと欲し 善く淸淨なる禪定を知らんと欲し、善く[5]般若波羅蜜の[6]彼岸に通達せん事を知らんと欲す。是の如き等の無量の功德を以ての故に、座より起ちて偏へに右の肩を袒ぎ、合掌して佛に向ひて佛に白して言さく。

世尊よ、我れ佛に問はんと欲す。一切衆生を利益し安樂ならしめんが爲に、及び諸の菩薩摩訶薩[7]佛種を斷ぜざる者をして威儀行處を具足して持戒に著せず。淸淨の戒を具足して大法を受行し、善く無量の行處道法を持する事を知つて、是の諸の菩薩の爲めの故に、今我れ佛[8]世尊に問ひ奉らん。云何が菩薩摩訶薩能く[9]諸法の實相を知り、亦善く一切法の章句を分別せん。云何が菩薩摩訶薩能

【一】 鳩摩羅什(Kumār jīva)。支那後秦代譯經家。諸法皆空の義を宣說し大乘の敎義を鼓吹したり、著書としては通三世論を著はして、以て因果を勗示す。而して彼の翻譯たるや實に、七十四部三百八十四卷に及び空前絕後と云ふべきである。

【二】 迦蘭陀竹園(Karandavenuvana)。中印度摩揭陀國王舍城の南方迦蘭陀村に在りて、伽蘭陀は或は伽隣、迦隣陀夷、迦蘭陀迦等とも作る。

【三】 菩薩摩訶薩(bodhisattva-mahāsattva)。佛果を志求する大有情と譯す。菩薩とは菩提薩埵の略、摩訶薩とは摩訶薩埵の略にして摩訶は大、薩埵は有情なり卽ち紳士、君士といふ義。

【四】 忍辱(kṣāntih) 六波羅蜜、十波羅蜜の一。他の屈辱を忍耐するの意。梵語羼提の譯又は安忍・忍とも云ふ。

【五】 般若波羅蜜(Prajñā-pāramitāh) 六波羅蜜の一にして智慧の意、すべての法を照し達する智慧のこと。

【六】 彼岸(pāramitā)。彼岸とは梵語、波羅蜜の譯語たる到彼岸の略にして生死を此岸とし、湼槃を彼岸とし、此岸より彼の岸に到達するをもつて彼岸となす。

く念力を得、亦身を轉じて不斷の念を成就し、乃至〔一〇〕阿耨多羅三藐三菩提を得んや。

爾の時　世尊持世菩薩に告げて言はく。善い哉善い哉、持世よ、汝能く諸の菩薩摩訶薩の爲の故に如來に是の事を問へり。當に知るべし。汝は則ち多所に衆生を安隱ならしめ、世間を憐愍し、諸天世人を利益し安樂ならしめ、亦今世後世の諸の菩薩の爲めに大光明を作れり。汝の功德限量すべからず、能く如來に是の如きの事を問へり。汝必ず一切衆生の疑を斷じ、一切衆生を愛護し、爲めに光明と作らんと欲し、衆生に義利を示さんと欲し。衆生をして嶮道を度る事を得せしめんと欲し、衆生の爲めに歸と作り、舍と作り、州と作り、救と作らんと欲し、〔一一〕三惡道の衆生を拔かんと欲し、衆生を〔一二〕無上道に置かんと欲し、衆生の生老病死憂悲苦惱を脫せしめんと欲し、衆生に無上〔一三〕涅槃の樂を與へんと欲す。汝後世に於て正法を守護せんと欲し、後の恐怖の惡世に於て衆生を度せんと欲す、持世よ、汝今善く聽きて諦かに之れを思念せよ。吾れ當に汝が爲めに此事を解說せん。

唯然なり世尊よ。佛持世に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩は四利を見るが故に、勤めて諸法實相を修習し、亦善く一切法の章句を分別す。

何等か四なる。當さに具足の念を得べし。當さに不斷念を得べし。當さに安惠を以て自ら增長の念もて、常在心なるべし。

持世よ、是の諸の菩薩摩訶薩、是の四利を見んが爲の故に、勤めて諸法實相を修習し、亦善く一切法の章句を分別す。持世よ、諸の菩薩摩訶薩は復た四利を見て、勤めて諸法の實相を修し、亦善く一切法の章句を分別す。

何等か四なる、當さに善く諸法の義と決定して知るべし。當さに善く諸法の義を知るべし。當に善く諸法の種々の因緣を知るべし。當さに善く諸法如實の門に入るべし。これを四となす。

持世よ、諸の菩薩摩訶薩は復た四利を見、勤めて諸法の實相を修習し、亦善く一切法の章句を分

【七】佛種。佛の種性の意・諸經に四說ありて第一に衆生本具の佛性、第二に煩惱を指して佛種となす、第三に菩提心をもつて佛種となし、第四に稱名を以て佛種となす。

【八】世尊。佛の德號にして衆德圓備しよく世間を利し、世に尊重せらるゝ。より此の名有り。如來十號の第十。

【九】諸法實相。一切諸法の眞實の體相の意。

【一〇】阿耨多羅三藐三菩提(anuttara samyak-sambodhi)。佛の無上の覺智を云ふ。略して阿耨三菩提、阿耨菩提と云ひ、譯して無上正遍智・無上正等覺・無上正眞道等と云ふ。

【一一】三惡道。地獄道・餓鬼道・畜生道の三道にして又三惡趣、三塗、三途・三惡とも云ふ。何れも苦惡の所にして、罪惡に依つて其の果報を受くる所なれば惡道と名づく。

【一二】無上道。佛果の名、阿耨多羅三藐三菩提の意。

【一三】涅槃(nirvāṇa)(巴)nibbāna)直譯して滅となす、而し此の意充分ならず。卽一切の繫縛を離れ眞に自由なる境地を指す。小乘は非活動的に見、大乘は活動的に見る。

別す。何等か四なる。當に善く無量の法相を知るべし。當に修習して善く決定無量の法を知るべし。當に無量の功德を行じて自ら增長すべし。當に諸法生滅の相を知見すべし。是れを四となす。

持世よ、諸の菩薩摩訶薩復に四利を見、勤めて諸法の實相を修習し、亦善く一切法の章句を分別す。何等か四なる、當に阿耨多羅三藐三菩提に近づくべし。當に疾く助菩提の法を具足すべし。當に他語に隨はず善く諸法の方便を知るべきが故に、當に善く一切の智慧を知るべし。

持世よ、是れ諸の菩薩摩訶薩四利を見んが爲の故に勤めて諸法の實相を修習し、亦善く一切法の章句を分別す。

持世よ、諸の菩薩摩訶薩に復四法有りて、勤めて諸法の實相を修習し、亦善く一切法の章句を分別す。何等か四なる。衆生を利益せんが爲めの故に心に堅垢無く、常に清淨戒を行じて[一四]毘梨耶波羅蜜に安住するが故に、精進を發行して休まず息まず。正しく思惟するが故に善く般若波羅蜜を行ず。是れ四となす。

持世よ、諸の菩薩摩訶薩に復に四法有り。勤めて諸法の實相を修習し、亦た善く一切法の章句を分別す。何等か四なる。深心清淨の願を成就し具足し、清淨所行の功德を具足成就し、柔和忍辱の功德に安住し、諸法實相の光明を分別する事を得ん。是れを四となす。

持世よ、菩薩摩訶薩に復に四法有りて、勤めて諸法の實相を修習し、亦た善く一切法の章句を分別す。何等か四なる。大欲を以て一切智を求め、善く分別[一五]禪定解脫の諸の[一六]三昧を知つて大欲を生じ、大慈悲喜捨の心を得んと欲するが故に方便して清淨の行處を行じ、善く決定の義を修習す。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有りて、勤めて諸法の實相を修習し、亦善く一切法の章句を分別す。何等か四なる。慧行を具足し、亦た清淨智の行處を求め、無礙智を樂(ねが)ひ、亦た常に一切智慧の

【一四】毘梨耶波羅蜜(virya-pāramitāḥ)。六波羅蜜の一にして、毘梨耶とは毘離耶とも書し精進と譯す。卽ち心を法に練り、精進務達する到彼岸の行なり。努力と意ふ意。

【一五】禪定。六波羅蜜の一種(dhyāna)。は梵語禪那の略、定は其の漢譯なり卽ち心を靜にして思慮するの意。

【一六】三昧(samādhi)。或は三摩地と摩提・三摩帝に作る定・正定・調直定等と譯す。卽心を一境に住せしめて散亂せざるを云ふ。

願を離れず。

持世よ、是れ菩薩摩訶薩に四法有つて勤めて諸法の實相を修習し、亦た善く一切法の章句を分別すと爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩は四利を見るが故に、能く念力を求む。何等か四なる。當に[一七]念根を修習具足すべし。當に安惠を行ずべし。當に不斷念を具足すべし。當に[一八]四念處を修習具足すべし。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩は復た四利を見て能く念力を求む。何等か四なる。諸の助菩提の法を具足するが故に常在心を念ず。念根を利するを以て善く宿命を修習し、清淨の智慧を具足するが故に當に疾く不斷念を得べし。當に一切智慧因緣を種ゆべし。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩は復た四利を見て能く念力を求む。何等か四なる。當に思惟方便を修習具足すべし。當に如實の智慧を修習すべし。當に勤めて精進を發して諸佛の法を得べきが故に。當に憶念を忘ぜず、不斷念力を得べきが故に。

持世よ、是れ菩薩摩訶薩四利を見るが故に能く念力を求むと爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に四法有つて能く念力を得ん。何等か四なる。安慧を念ずるが故に常に勤めて精進して休まず、息まず、常に其の心を一つにして諸法の實相を得るが故に、常に放逸ならず、正しく諸法を憶念するが故に。常に諸根を護り、正しく思惟するが故に。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有りて能く念力を得ん。何等か四なる。清淨なる持戒に安住し、清淨の[一九]威儀行處を成就し、心中の[二〇]五蓋を除き去り。世法の爲に染せられず、[二一]業障[二二]煩惱障を離る。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有つて能く念力を得ん。何等か四なる。不散の心を以つて善法を

【一七】念根(smṛti-indriya)。五根の中にして精進に依つて心、所緣の境に念住して忘るることなき能あるもの。

【一八】四念處(Catvari-smrityupathāvāni)。即ち身念所(kāya-a)、受念所(vedanā)、心念所(citta-a)、法念所(dharma-a)、にして四意止とも云ひ、四念住とも云ふ、三十七道品中の一科にして身を不情・受を苦・心を無常・法を無我と觀じて常・樂・我・淨の四顚倒を治する觀法なり。

【一九】威儀行處。仰ぎ敬の念を起さしむべき戒儀。

【二〇】五蓋。貪欲・瞋恚・惛眠・悼悔・疑の五煩惱を云ふ。蓋は煩惱の異名。覆蓋の義にして煩惱よく行者淸淨の善心を覆ひ、開發することを得ざらしむるが故に名づく。第一を貪欲蓋とし、第二を瞋恚蓋とし第三・第四・第五は愚癡の煩惱より開き出せるものにして即ちこの五毒に外ならず、もし開けば無量の煩惱なり。

【二一】業障。衆生が身・口・意に於て惡業を作りし爲めに、正道を蔽障するものを云ふ。

【二二】煩惱障。實我の執見より起る根本煩惱の意。衆生の身心を惱亂して涅槃を障礙するが故に名づく。

求め、勤めて一心の相を修習し、善く正しく諸法に入るの門を知り、憒鬧を樂はず、在家を遠離す。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有つて、能く念力を得と名づく。何等か四なる。[二三]善知識に親近し、常に深法を修習し、常に樂つて諸の佛菩薩の所に至り、常に樂つて智慧を諮問し修習す。持世よ。是れ菩薩摩訶薩四法有つて名けて念力を得と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩は四利を見て、能く一切法分別章句の慧を修習す。何等か四なる。當に善く一切諸法の實相を知るべし。當に一切法の所因を分別すべし。當に諸法の決定の義を知るべし。當に善く一切法の言語章句を知るべし。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩は四利を見て、能く一切法の分別章句の慧を修習す。何等か四なる。當に善く諸法の隨宜次第を知るべし。當に善く一切法の因緣方便を知るべし。當に具足して一切法の方便を修習すべし。當に分別して[二四]了義未了義の經を知るべし。是れを四となす。

持世よ、菩薩摩訶薩は復た四法利を見て、能く一切法分別章句の慧を修習せよ。何等か四なる。當に善く是れ道是れ非道の慧を學すべし。當に一切法義を說くの力を得べし。當に疾く清淨智慧の行處を得べし。當に具足して智の波羅蜜を修すべし。持世よ是れを菩薩摩訶薩四法利を見て能く一切法分別章句の慧を修習すと爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有りて、能く一切法分別章句の慧を修集せん。何等か四なる。善く諸法の集の相を修習するを知り、善く諸法の因の相を知り、善く諸法の緣の相を知り、能く因緣方便に入る。是れを四となす。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有りて、能く一切法分別章句の慧を修習せん。何等か四なる。善く諸法の苦を知り、善く諸法の集を知り、善く諸法の滅を知り、善く諸法の滅道を知る。是れを四

【二三】善知識。知識とは其の心を知り、其の形を知る義にて、知人卽ち朋友の義。博知博識の義に非ず。善とは我れに益をなし、我を善道に導くものを云ふ。此れに三種善知識と十種善知識有り。三種善知識とは一、外護の善知識自己を安隱に道を修することを得しめる。二、同行の善知識、我れと道を同じくし相互に切磋することを得るもの。三、敎授の善知識、聖言を宣傳して我れを訓戒し惡を去り善に赴かしめるもの。十種善知識とは、一、菩提心に住せしめる善知識。二、善根を生ぜしめる善知識。三、諸波羅蜜を行ぜしむる善知識。四、一切法を解說せしむる善知識。五、一切衆生を成就せしむる善知識。六、決定の辨才を得しむる善知識。七、一切世間に著せざらしむる善知識。八、一切の劫に於て修行し厭倦無からしむる善知識。九、普賢行に安住せしむる善知識。十、一切佛知の所入に入らしむる善知識なり。(華嚴には、五十三善知識有り。)

【二四】了義。未了義の語に對す。卽究竟顯了の義。

と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有つて、能く一切法分別章句の慧を修習せん。何等か四なる。善く諸法の合散を知り、方便して先因の力を得。善く諸法の宜しき所を知り、善く分別して文字章句を知らん。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有つて、能く一切法分別章句の慧を修習せん。何等か四なる。善く不了義の經を知り、了義經の中に於て他語に隨はず。善く一切法相の印を知り、亦善く一切法の[二五]無相智の中に安住す。持世よ、是れを菩薩摩訶薩に四法有つて能く一切法分別章句の慧を修習すと爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に四法有つて轉身して常に不斷の念を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん。何等か四なる。明かに善不善の法を了し、第一念安慧を成就し、能く五蓋心を離れ、終に阿耨多羅三藐三菩提心を念ずる事を忘れず。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有つて轉身して常に不斷の念を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん。何等か四なる。善く四念處を修習し、善く學分別の慧を修習し、諸の禪定に於て智慧を首となし、決定の智慧の中に於て通達を得ん。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有つて、轉身して常に不斷の念を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん。何等か四なる。諸の[二六]陀羅尼門を得。亦た[二七]無生智を修習し、[二八]盡智に入り、亦た滅智を觀す。是れを四と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た四法有つて、轉身して常に不斷の念を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん。何等か四なる。愛恚を斷じ、一切の[二九]有爲法に貪著せず、心無爲の智慧に通達し、如來の所行處に至る。持世よ、是れを菩薩摩訶薩に四法有つて轉身して常に不斷の念を得、乃至阿耨多羅三

【二五】無相智。世間の事相を緣ぜざるの智。

【二六】陀羅尼(Dhāraṇī)。又陀羅那、陀鄰尼とも云ふ譯して持・總持、卽ち善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用を云ふ。

【二七】無生智。無學位に於て起る智慧にして煩惱の起らざること、卽ち智の退せざるを知るの智慧のこと。盡智と共に二智と數へられ又は俗智と共に十智と數へらる。

【二八】盡智(kṣaya-jñāna)。無學位に於て起る智慧を云ふ。一切の煩惱の最後たる有頂第九品の修惑を斷盡し、其の擇滅卽漏盡の得と具生する智慧にして我已に苦を知り、我已に集を斷ず等と知るの行相あるものなり。

【二九】有爲法(Saṃskṛta)。有爲法とは造作の義造作有るを有爲となす。故に所生の事物は必ず此の因緣造作の義有れば有爲法と名づく。

藐三菩提心を得と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に五淨智力有つて能く具足して如上の功德を得ん。何等か五なる。深心淨智力・願淨智力・善根淨智力・廻向淨智力・障業淨智力、是れを五と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た五つの淨智力有つて、皆能く具足して如上の功德を得ん。何等か五なる。威儀行處の淨智力、念具足の淨智力、方便の淨智力、緣衆生の淨智力、緣相の淨智力、是れを五と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た五の淨智力有つて能く具足して如上の功德を得ん。何等か五なる。捨心の淨智力、利益衆生の淨智力、生大慈の淨智力、生大悲の淨智力、生大喜大捨の淨智力、是れを五と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た五の淨智力有つて皆能く具足して如上の功德を得ん。何等か五なる。持戒の淨智力、不著持戒の淨智力、忍辱の淨智力、不著忍辱の淨智力、多聞の淨智力、是れを五と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た五の淨智力有つて、皆能く具足して如上の功德を得ん。何等か五なる。深精進の淨智力、受精進の淨智力、禪定の淨智力、禪定方便の淨智力、止觀方便の淨智力、是れを五と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た五の淨智力有つて、皆能く具足して如上の功德を得ん。何等か五なる。慧の淨智力、多聞決定方便の淨智力、[三〇]世間[三一]出世間の淨智力、慧方便の淨智力、有爲無爲の淨智力、是れを五と爲す。

持世よ、菩薩摩訶薩に復た五の淨智力有つて、皆能く具足して如上の功德を得ん。何等か五なる。觀方便の淨智力、明解脫の淨智力、無生相の淨智力、一相無相の淨智力、第一[三二]義世諦義の淨智力な

【三〇】世間。世は隔別の義。間は間差の義種々の諸法を差別し、雜亂せずして存在するを云ふ。又世は遷流の義・破壞の義。或は世界の語と同意義に用ひらるゝ場合あり。一般には吾人の住せる社會或は社會關係を指す。而して此の世間に三種世間、二種世間を立てる。三種世間とは卽ち假名、五蘊・國土。二種世間とは器土世間・衆生世間(有情世間)なり。

【三一】出世間。世間に對す。世間とは有漏の別名にして、其の有漏を解脫し出離したるものを出世間と云ふ。滅道諦の無漏法卽ち此れなり。之よりして普通世俗の事を世間とし、佛法の事を出世間とす。

【三二】第一義世諦義。第一義とは、究竟の眞理に名づく。是れ最上であるから第一義と云ひ、深く理由あれば義と名づく。世諦とは世は世間の義、世俗。諦は事實又は道理。世間の事實の意。

り。持世よ、是れ菩薩摩訶薩是の五淨智力有つて疾く具足して、かくの如きの一切の功徳を得ると爲す。

持世よ、是の利を以つての故に、菩薩摩訶薩是の淨智力の中に於て應さに勤めて修習すべし。

持世よ、菩薩摩訶薩三法を成就して、是の淨智力の中に於て、能く勤めて修集せん。何等か三なる。一には欲、二には精進、三には[33]不放逸なり。菩薩摩訶薩此の三法を成就して、能く是の一切の功徳を具足せる淨智の中に於て能く勤めて修集せん。何を以つての故に。持世よ、欲精進不放逸は、皆是れ一切法の根本なり。菩薩摩訶薩是の淨智力を得て、能く疾やかに、一切智を得。亦た精進不退者と名づけ、亦た不退法者と名づく。亦た此の功徳を以つて疾かに增長を得、亦た一切法中に於て疾やかに淨智力を得ん。持世よ、若し人有つて、是の如く一切法中に淨智力を得ん者は、是れ世間の[34]福田と爲す。是の人我れに次いで能く[35]供養を消さん。是の人能く如來の行處に至り、是の人能く[36]如來の法を觀じ、是の人久しからずして能く如來の智慧を證せん。

持世よ、我れ本無量[37]阿僧祇劫に菩薩道を行ぜし時、[38]然燈佛我が與めに記を授けたまふ。汝、阿僧祇劫を過ぎて當さに作佛する事を得べし、と。其時に遍く是の如き淨智力を知る。

持世よ、若し人有つて一切法の中に於て、能く是の如く淨智力を成就する者、是の人は當に阿耨多羅三藐三菩提を得ること我れ今得るが如けん。是の人亦[39]法輪を轉ずること、我れ今轉ずる如けん。是の人亦獅子吼すること、我れ今獅子吼する如けん。是の人一切法中に於て自在の力を得ること、我が今の如くならん。持世よ、汝等此の淨智力の中に於て當に勤めて精進し、久しからずして自然に一切の智慧を具足すべし、

持世よ、過去無量阿僧祇劫に、佛在しき。智高王[40]如來・[41]應供・[42]正遍智・[43]明行足・[44]善逝・[45]世間解・[46]無上士・[47]調御丈夫・[48]天人師・[49]佛・[50]世尊と號く。持世よ、是の智高王如來に無量の聲聞僧有り、亦

【三三】不放逸(apramāda)。心處の名。倶舍にて大善地法の一、唯識にて善の一とす。心を護りて善を修し。惡を防ぐを云ふ。放逸の反對なり。

【三四】福田。福業を修すれば大利益を得ること田に種子を下して收穫するに異ならざるを云ふ。布施を行ずるに當りこれを受くるものを福田と云ふ。即ち施者は農人の如く、施物は種子、受者は田に相當するが故に名づく。

【三五】供養(pūjana)。供給資養の義。尊尙の意を表し或は嚴飾を加へ、或は飯食・衣服等を以て佛・法・僧の三寶及び父母・師長・亡者等に供へ之に資養するを云ふ。供養には供養物・供養方法供養の對象等に就て經論に種々の分類をなせり。

【三六】如來(tathāgata)。佛十號の一、梵語にて多陀阿迦陀と作り釋迦牟尼佛と稱す。十號品に如來とは如實道に乘じ來りて正覺を成ず、故に如來と云ふ。大智度論卷二には云何んが多陀阿迦陀と名づく。法相の如く解し、法相の如く說く諸佛安隱道より來る如く、佛亦是の如く來り、更に去りて有中に非ず是の故に多陀阿迦陀と稱すと有るが如し。

【三七】阿僧祇劫(asaṃkhya-ka=

無量の諸菩薩僧有りき。是の佛の本願因緣の致す所なり。是の智高王佛の土には三惡道なく。其の諸の衆生苦有る事を覺らず。畢竟じて安隱快樂を具足す。欲を離るゝ者多く、能く五蓋を障ゆ。是の諸の衆生是の如く清淨の快樂を成就して、人の[五一]第四禪の樂に入るが如し。是の智高王佛の壽、六百萬億[五二]那由陀劫なりき。

持世よ、是の時國土唯だ佛を王と爲し、更に王有る事なく、國土の衆生皆佛を號けて法王と爲す。是の智高王佛多く諸菩薩の爲めに是の一切衆生の疑を斷じ、一切衆生の心を喜ばしむる菩薩藏經を說けり。

爾時に五百の菩薩ありて、是の諸の菩薩の淨智力を聞きて、是の如き精進力を發し、形を盡して、坐心を生せず。形を盡して衣服の想を生せず。形を盡して我想衆生想人想男女想を生ぜず。[五三]形を盡して終に多食せず。但だ是の如く淨智力を修集し、勤めて精進を行ぜり。五百の菩薩是の善根の因緣を以て命終して皆東方十萬億を過ぐる國土に生じ、既に生じて久しからずして、是の法を修集するが故に[五四]宿命を識り得て、利根を成就す。其國土の佛を無量花積王と號け、現に在して法を說きたまふ。其の諸の菩薩始めて年十六にして、無量花積王佛の所に於て出家し、六十億歲まで童子の[五五]梵行を行じ、亦た是の如き精進を修行せり。

持世よ、是の五百の菩薩は是の如き等の二十億の佛に値ふことを得て、諸佛の所に於て勤めて精進を行じ、第一念の[五六]安慧を成就し、未だ後に無量力高王佛に値ひたてまつり、其の與めに授記せられ、萬劫を過ぎ已つて當さに阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。是の五百の人、萬劫の中に於いて二萬億の佛に値ひたてまつることを得て佛道を具足し[五七]一劫の中に於て次第に阿耨多羅三藐三菩提を得ん、と。

持世よ、當に知るべし。菩薩摩訶薩疾やかに阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すれば、是の淨智力

---

lpa)。無數の劫、劫は長年時の事。

【三八】然燈佛(Dipaṅkara)。過去の世に出で釋迦牟尼佛の爲めに成道の記莂を授けし佛なり。梵名、提和竭羅と云ふ。

【三九】法輪(dharmacakra)。佛所說の敎は轉輪聖王の寶輪の如く、向ふ所煩惱の怨敵を摧伏せしむるが故に斯く名づけらる。仍りて佛の說法を轉法輪と云ふ。

【四〇】如來(三一〇)參照。

【四一】應供(Arhat)。一切の惡を斷じて、人・天の供養を受くるに堪えたる人。

【四二】正遍知眞正に遍く一切法を知るを云ふ。

【四三】明行足(Vidyā-caraṇa-saṁpanna)。行足とは脚足の義。戒定慧を指す。佛は戒定慧の脚足に依って、阿耨多羅三藐三菩提を得すれば明行足と云ふ。

【四四】善逝(Sugata)。如實に彼岸に去つて、再び生死界に退沒せざる意。

【四五】世間解(Lokavid)。世間の有情・非情のことを究竟じて知る。故に佛を呼びて…と云ふ。

【四六】無上士(anuttara)。無上の士夫なり、人中最勝之に過ぎたるものなければ無上士と云ふ。

の中に於て應さに欲精進不放逸を生ずべし。何を以つての故に。持世よ、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は、皆欲精進不放逸を以つて根本と爲し、餘の助道の法に反し、能く佛法を具足する者なり。

持世よ、我れ是の如く精進して二十億の佛に値ひたてまつることを得て、諸法の中に於いて世世に念力を成就し、世世に宿命を識ることを得、此の法を修行して不休不息、我れ終に是の欲精進不放逸を失はず。我れ當に欲精進不放逸を成就すべし。

爾時に世尊大慈悲の心を以て四方を顧視したまひ、神通力を現じて[五八]三千大千世界の諸の[五九]閻浮提に皆化佛あらしめ、諸の衆生の爲めに是の斷一切衆生疑喜一切衆生心菩薩藏經を説かしめたまふ。復た神力を以て竹園中の在會の大衆をして皆諸佛遍ねく閻浮提に各々説法したまふを見せしめたまふに、大衆みなよろこび、坐より起ちて皆共に佛を禮して是の言をなさく。

希有なるかな世尊よ、諸佛如來の神力不可思議にして、無量の不可思議の法を成就したまふ。

爾時、佛大衆に告げたまはく、諸の善男子よ。如來に是の事を未だ難しとなすに足らず。所以は何ん。如來は善く能く法理に通達するが故に、若し一毛孔より神通力を出さば、光明普ねく十方[六〇]恒河沙の世界を照し、法音を演説し、一毛孔の百千萬億分に未だ其の一を盡さず。如來は是の如く不可思議の功德を成就したまふ。

諸の善男子よ。如來は深く衆生の心を觀じて、爲めに法を説きたまふ。諸の善男子。今の世の衆生は是の法の中に於いて能く欲樂を行ずるもの有ること少し。諸の善男子よ。今の世の衆生は是の法の中に於いて能く精進を行ずるもの有ること少し。諸の善男子よ。今の世の衆生是の法の中に於いて能く不放逸を行ずるもの あること少し。何を以ての故に。如來は今[六一]五濁惡世に出づ。所謂[六二]衆生濁・[六三]見濁・[六四]命濁・[六五]煩惱濁・[六六]劫濁なり。諸の善男子よ。若くは乃至一人の能く是の如き甚深清

【四七】 調御丈夫(Puruṣa-damya-sārathi)。一切の可度の丈夫を調御して修道に入らしむるを云ふ。

【四八】 天人師 (Deva-manuṣya-śāstṛ)。天と人との教師なれば天人師と名づく。

【四九】 佛 (buddha)。一切諸法を了了に覺知する意。

【五〇】 世尊 (Lokanātha)。佛は萬德を具するを以て世に尊重せらる故に世尊と名づくなり。

【五一】 第四禪。四禪天の第一にして、但意識のみにして捨受ありて此れと相應するのみなり。無雲・福生・廣果の三天と、無煩以上の五淨居天より成る。

【五二】 那由陀劫(nayuta)。那由陀とは大數の名目、阿由多の百倍にして種々異義あり。玄應音義卷三には十萬となし、佛本行集經に依りては萬億となし、同卷二十二には千億に當ると云へども、其の取捨を示さず。若し倶舍論の説に依らば阿由陀は千萬なれば、其の百倍千億とす。故に那由陀劫は千億劫の意にして無數の年時を示す。

【五三】 形を盡して。命終迄或は一生涯といふ程の意。

【五四】 宿命。前生の意。或は前世の業果報による今世の運

淨の法を信受するもの有らば能く[六七]佛慧に至らん。是れを希有なりと爲す。何に況んや。能く如來の所行を信解せんをや。諸の善男子よ。我常に長夜に是の如き願、是の如き精進忍辱の行を莊嚴せん。苦惱の衆生、救護無き者、依止無き者、多く惡道に墮する者の爲に、我れ爾時に於て當に佛道を成じて、無量阿僧祇の衆生を利益せん。諸の善男子よ。當に知るべし。如來の恩力本より清淨の願を精進するが故に、能く無量阿僧祇の衆生をして是の如きの深法を信解し受持せしむ。

善男子よ。我れ先世に於いて衆生を教化せしに、是の諸の衆生は能く我が法を解したりき。諸の善男子よ。今佛[六八]十力・[六九]四無所畏を以つて、少に能く衆生をして是の如き甚深の法を信解せしめたり。若し衆生有りて是の法の中に住する者は、皆是れ如來恩力の方便の故に、我れ長夜に是の如き深法を離れず。我れ亦長夜に[七〇]大慈大悲大喜大捨もて衆生を攝取し、少かに如來有りて五濁の世に出でゝ衆生を利益したまふ。何を以ての故に。諸の善男子よ。我れ先世に於いて、大精進力大方便力を以つて衆生を教化し、是の阿耨多羅三藐三菩提を習したりき。諸の善男子よ。我れ過ぎし世を念ふに、一日の中に千の身を捨して布施し衆生を利益したりき。諸の善男子よ。我れ若干の千萬世に於いて、飢餓せる衆生を見しが故に、自ら身の肉を割き煮て、以て之に與へき。我れ爾時に於いて心に憂悔なかりき。但だ衆生に於いて普ねく大悲を行ぜしなり。

諸の善男子よ。當に知るべし。我れ是の如きの大精進、大方便力を以て衆生を教化し、此の阿耨多羅三藐三菩提を習せり。此の故に諸の善男子よ、應に是の如きの欲と精進と不放逸とを發し、阿耨多羅三藐三菩提を修習すべきこと、我が菩薩道を行ぜし時の如くし。汝等も亦た當に我が如く衆生を利益し教化すべし。諸の善男子よ。是の[七一]賢劫の中に諸佛出世して、我れを讃して是の如きの言を作さざるなし。釋迦牟尼佛深く精進を行ずること是の如く、釋迦牟尼佛精進を具足すること是の如し。釋迦牟尼佛精進波羅蜜を具足すること是の如し。釋迦牟尼佛菩薩道を行ずる時衆生を教化

命。

【五五】梵行。梵は清淨の義、婬欲を斷ずる法を梵行となす。即ち梵天の行法なり。梵行を修して、梵天に生ずるなり。

【五六】安慧。意を智慧に安置して動さぬ事。

【五七】一劫(kalpa)。梵語劫波、劫簸の略、時分、大時、長時、等の譯あり。印度にては通常之を梵天の一日、即ち人間世界の四億三千二百萬年とせるも佛教にては算數の及ばざる長年時となせり。或は譬喩を用ひて此れを顯わす。即ち芥子、拂石の譬へなり。

【五八】三千大千世界。須彌山を中心として七山、八海を交互に繞らし、更に鐵圍山を以て外部となし、此れを一小世界となし、此の一小世界を一千集めたのを小千世界と云ひ、此小千世界を千、集めて大千世界とす。大千世界の上に三千と有るは、此の大千世界は小千と中千と大千とより成立せしを示したるなり。內容は即ち一大千世界なり。此の一大千世界を以て一佛の化境となす。

【五九】閻浮提(jambu-dvipa)。須彌四洲の一、須彌山の南方七金山と大鐵圍山の間に在つて、漢音にてけ琰浮洲、琰浮

することと是の如し。五濁に出でゝ無量阿僧祇の衆生を利益したまふと。諸の善男子よ。是の如く道を行ずるが故に、應さに勤めて欲と精進と不放逸を生ずべし。諸の善男子よ。我れ今阿耨多羅三藐三菩提を得と雖も、精進して猶休息せず、涅槃に至る時まで猶ほ精進を發し。身骨を碎いて芥子の如くし支節を解し散ぜん。何を以ての故に。未來世の衆生を憐愍するが故に。我れ先世に菩薩道を行ぜし時、所化の衆生或は錯謬を行じて諸の難處に墮せり。之れを勉濟せんと欲し大悲心を起し、舍利を分布し、乃至芥子の如くして皆神力もて與へしなり。

我れ滅度の後、若し衆生有つて應さに舍利を以て度する者は、心清淨なるを得、清淨なるを得已つて、處々の地中に隨つて成就す。諸の善男子よ。我れ先世に道を行ぜし時、衆生の中に於いて是の如き悲心を成就し、身舍利を碎いて普ねく分布せしむ。是れ我が本願なり。

我れ是の如き無量福德因緣の大悲心を以ての故に。後の惡世に於て普ねく衆生を覆はん。諸の善男子よ。若し諸の菩薩此の法が中に於て能く欲と精進と不放逸を生じ、必ず是の願を發せよ。後の末世に於て受持し讀誦して人の爲めに廣く是の如き等の經をかんに、我れ當に神力を以て諸の菩薩をして受持し讀誦して人の爲に廣く說かしめん。我れも亦是の如きの經を以て是の諸の菩薩に[七二]囑累せん。其の能く受持し讀誦して人の爲めに廣く說くを以ての故に。所以は云何ん。諸の善男子よ。是の經の所住に隨て、當に知るべし。其土に佛有つて滅したまはず。是の故に如來は是の經を以て諸い菩薩に囑累したまふ。諸の善男子よ。當に知るべし。我れ宿世に是の如き因緣を以て衆生を[七三]攝取せり。今世も亦復衆生を攝取せり。後世も亦復衆生を攝取せん。所謂是の如き經法を護念して、後の五百歲に於て普ねく流布するが故に。

諸の善男子。若し今世若しくば我滅後に於いて若しは聚落城邑山林曠野に、是の如き等の經有つて、若し能く受持し讀誦して人の爲めに解說せば、當に知るべし。此の中に則ち佛有りと爲す。何

那、閻浮那提等と云ふ。吾人の住せる沙婆は實に此の中にありと云ふ。

【六〇】恒河沙(Gangā-nadī-v-ālukā)。恒河の砂の數にて物の多きに譬ふ。此れに三恒河、八恒河沙等有り。

【六一】五濁。惡世に起る五種の滓濁、五滓とも云ふ。即ち住劫中の人壽二萬劫已後に於て漸濁不淨の法に五種あり此れを五濁と云ふ。

【六二】衆生濁(sattva-kaṣāya)。劫濁時の衆生は見濁、煩惱濁の効果として人間の果報をとろへ心鈍く、身弱り、苦多く、福少なきを云ふ。

【六三】見濁(dṛṣṭi-kaṣāya)。衆生諸の惡見に住し、劫濁時の衆生盛に此れを行ふを云ふ。

【六四】命濁(āyuḥ-kaṣāya)。煩惱濁。衆生濁の結果として壽命少なく乃至十歲に至るを云ふ。

【六五】煩惱濁(kleśa-kaṣāya)。貪瞋痴等の一切修惑の煩惱。劫濁時の衆生、盛に此れを起す。

【六六】劫濁(kalpa-kaṣāya)。二萬歲已後に於て見等の四濁起る時を云ふ。

【六七】佛慧、諸佛、證する所の大智慧を云ふ。法華經方便品に「如來の出づる所以は佛慧を說かん爲めの故なり」と云ふが如し。

を以ての故に。我れ諸佛は是れ即ち[十四]法身なりと說く。法を見るを以ての故に、則ち佛を見ると爲す。佛は應さに[十五]色身を以て見るべからず。

若し人、法を信じ法を聽けば、是の人は則ち佛を信じ、亦佛語を聽くと爲す。若し人、此の法の中に於て、能く說の如く修行せば、是の人、則ち佛を見ると爲す。此の人を名づけて、實語の者、法語の者、隨法行の者と爲す。

諸の善男子よ。我が身、法に非ず、非法に非ず、是れを隨法行と名づけ、是れを第一の[十六]法施と名づく。所謂法に著せず、非法に著せず、何を以ての故に。若し法に著する者は佛を見たてまつると名づけず。

諸の善男子よ。一切法に著せざるを名づけて佛を見たてまつると爲す。若し一切法の中に於て見る所無き者は、是れ佛を見たてまつると名づく。何を以ての故に。如來は法を以て說くべからず。非法を以て說くべからず、亦法を以て見るべからざるなり。所以は何ん。諸の善男子よ。經の中に說けるが如し。汝等比丘、若し我が法を栰の喩の如くなりと知らば、法尙應さに捨つべし。何に況や非法をや。若し能く法と非法とを捨てんに、是れを佛を見たてまつると名づく。何を以ての故に。如來は名づけて、一切法を捨つるものと爲す。諸法の[十七]名字を貪らず、受けず、名字の法の中に墮せず。何に況や非法の名字の中に墮せんや。

諸の善男子よ。一切の法の名字を捨離せるを、名づけて如來と爲す。能く是の如く見る者を名づけて如來を見ると爲す。何を以ての故に。一切法を捨離するが故に、名づけて如來を見たてまつると名づく。一切法は不可得なるを以ての故に。實の如く一切法を知見するが故に。名づけて如來を見たてまつると爲す。

諸の善男子よ。若し一切法は不可得にして、一切法を捨離すれば、是の中に即ち[十八]戲論無く、是

【六八】十力(Daśa-balāni)。如來の十力なり。佛不共の十種の知力、以て一切を了知するなり。
第一に處非處智力(sthānāsthāna-jñāna-balam)。
第二業異熟智力(karma-vipāka-j.)。
第三靜慮解脫等持等至智力(sarva-dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpatti-saṃkleśa-vyavadāna-vyutthāna-j.)。
第四根上下智力(indriya-parāpara-j.)。
第五種々界智力(nānādhimukti-j.)。
第六遍趣行智力(nānādhātu-j.)。
第七宿住隨念智力(sarvatragāmini-pratipaj-j.)。
第八死生智力(pūrva-nivāsānusmṛti-j.)。
第九生死智力(cyuti-upapatti-j.)。
第十漏盡知力(āśrava-kṣaya-j.)。
【六九】四無所畏(catvāri-vaiśāradyāni)。佛、菩薩が說法する時畏るゝことなき四種の智力あるを云ふ。菩薩四無畏もあり。四種とは一に正等覺無畏(sarva-dharma-abhisambodhi-vaiśāradyaṁ)。
二に漏永盡無畏(sarva-āśrava-kṣaya-jñāna-v.)。
三に說障法無畏(antarāyika-

の法と非法との名字無く、行無く示無し。是れを如來を見たてまつると名づく。若し人能く是の如く法を見れば、是れを如來を見たてまつると名づく。若し能く是の如く如來を見たてまつれば、是れを正見と名づく。若し見を異にする者は名づけて[七九]邪見と爲す。若し邪見の者は則ち妄見と爲し、是の人を名づけて眞見と爲さず。

諸の善男子よ。[八〇]眞見の者は一切の語言の道を斷じ、眞に非ず、妄に非ず、有に非ず、無に非ず。一切の法を離れ一切の法を取らず。一切の法を得ず。是の如く見る者を名づけて如來を見たてまつると爲す。何を以ての故に。諸の善男子よ。如來は法性の見を以てせずして、一切の法性の離るゝを見る者を、名づけて如來と爲す。若し能く是の如く見れば、名づけて正見と爲す。

諸の善男子よ。汝等應さに是の如くして如來を見たてまつるべし。汝等且らく觀ぜよ。我が所說の如く如來を觀ぜよ、是の如く觀ぜば、當に知るべし。一切法皆是れ如來なり。當に一切法の如を得べし。當に一切法の實相を得べし。當さに一切法の非虛妄相を得べし。當に知るべし。一切法は是れ如來の法なりと。當に知るべし。一切法は是れ如來の行處なりと。當に知るべし。一切法は是れ不可思議の行處なりと。

諸の善男子よ。是の故に我れ一切法は是れ如來の行處なりと說けり。如來の行處は是れ無行處なり。何を以ての故に、一切法の行處は是の中に法として行ずべき無し。是の故に無行處は是れ如來の行處なりと說く。一切法の行處は卽ち是れ無行處なり。無行處は卽ち是れ如來の行處なり。何を以ての故に。一切法の行處は所有無きが故に。無行處は是れ如來の行處なり。一切の行處は如來の行處に入れば、則ち行處に非ず。如來は通達して是の法を證りたまふが故に、是を無行處は是れ如來の行處なりと名づくるなり。

諸の善男子よ。能く一切法の無行處を知れば、是の人、能く如來の行處に入り、是の人 能く如

dharma-ananyathātua-niści-ta-vyākarana-v.)。四に說出道無畏(samyn-sam-pad-adhi-gamāya-nairvāṇi-ka-pratipat-tathātva-v.)なり。

【七〇】 大慈大悲。佛、菩薩等が一切衆生を度せんとする所の大慈悲心のことなり。

【七一】 賢劫(bhadra-kalpa)。三劫の一たる現在の劫を云ふ。過去莊嚴劫・未來星宿劫に對す。大智度論卷三十八には之を善劫と名づけ、千萬劫の過去あり、空にして佛有ることなし此の一劫の中、千佛興ることあり。諸の淨居天觀喜するが故に名づけて善劫となすと。

【七二】 囑累。佛陀が弟子に附屬して聖法を後世に傳授流布すべきを命じ給ふこと。法華文句中に囑とは是佛所ニ附囑一累是煩ㇾ爾宣傳セシム

【七三】 攝取(parigraha)。事物を選擇して攝の取ること。賢劫經卷一に「攝ニ取無量淸淨佛土」と云ふが如き其の例なり。引いて佛陀の救濟。

【七四】 法身(dharmakāya)。佛の自性の眞身を云ふ。此れ根元的、基本的の佛身なり。二身・三身・四身等の隨一とせられ、大乘・小乘・に於て種々にして一準ならず。

來の行處を觀じ、是の人、能く如來の行處を求め、是の人亦如來の行處に著せず。何を以ての故に。是の人無行處は是れ如來の行處なり、離行處は是れ如來の行處なりと知り、所謂一切法は不可得にして、分別すべからず、貪るべからざるが故に。是を非行處は是れ如來の行處なりと名づけ。是を智の行處に入ると名づく。一切法に入らざるが故に。何を以ての故に。一切法には門無きが故に。是の門を以て入るなり。

諸の善男子よ。一切法は入無く出無し。一切法は形無し。所以は何ん。如來は法に於いて無所得なれば何なる法をも若しは出し若しは入れ、若しは見、若しは說きたまふなり。諸の善男子よ。是れを一切法の門に入ると名づく。不入相を以ての故に、一切法は合なく散無く縛無く觧無し。是れ一切の法門は無門なるを以ての故に、是の門を說て名づけて、不可出門不可入門、不可歸門不可說門、畢竟無生門と爲す。是の法門を以て、法に於て所知無し、所見無し。是の法門を以て、法に於て證無く所入無し。何を以ての故に。諸の善男子よ。一切法には門無し。門は不可得の故に。虛空は是れ一切の法門なり。本より已來性淸淨なるが故に。無斷は是れ一切の法門なり。斷は所有無きが故に。無邊は是れ一切の法門なり。邊は不可得なるが故に。無量は是れ一切の法門なり。量は不可得の故に。無際は是れ一切の法門なり。諸際は無所有なるが故なり。

諸の善男子よ。若し善男子、善女人有て、能く是の法門に入る者は則ち一切の法門に入り、則ち一切の法門を知り、則ち一切の法門を說かん

五陰品　第二の一

爾の時に佛、持世菩薩に告げたまはく。

持世よ。若し菩薩摩訶薩一切法の實相を得んと欲し、若くは善く一切法の章句を分別せんと欲し、

【七五】色身。有色有形の身・廣く肉身の稱なれども多くは佛、菩薩の相好身を云ふ。卽ち無色無形の法身に對して有色有形の身相を稱するなり。

【七六】法施。二種施又は三施の一、世間、出世間に於ける諸善法を人に說き聞かしむるを云ふ。

【七七】名字。梵語那摩(nāmai)譯、名。阿乞史囉(Aksara)譯、字。卽ち、名は實名、字は假名、總じて事物の名稱を云ふ。

【七八】戲論。義理なく理益なき言論分別を云ふ。是れ徒らに言論分別を弄するに過ぎざるものなれば戲論と稱す。

【七九】邪見。不正なる執見にして主として正しい因果を無視し僻信して禍を求むるが如きを云ふ。五見の第三番目、

【八〇】眞見。正しき理解。

【八一】無生門。諸法無生の理なり。この無生を觀ずるは、佛道の始終を一貫する入道の初門とす。

若くは念力を得んと欲し、若くは轉身具足して不斷の念を得んと欲し、乃至は阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に疾かに是の如きの法門に入るべし。是の法門に於て智慧光明を得ん。何を以ての故に。此の法の中に於ては疾かに具足を得べきが故なり。

又復持世よ。菩薩摩訶薩は勤めて是の如きの法門を修習し、是の法の方便門に入れば、則ち能く[一]陰の方便、[二]界の方便、[三]入の方便、因緣生法の方便、四念處の方便、[四]五根の方便、[五]八聖道分の方便、世間出世間法の方便を分別し、有爲と無爲の法の方便を分別することを得ん。

持世よ。何をか菩薩の[六]五陰を分別するの方便と謂はん。菩薩摩訶薩は正しく五取の陰を觀ず。所謂無明の陰は是れ五取陰なり。苦陰は是れ五取陰なり。癡陰は是れ五取陰なり。病陰癰陰、箭の身に入るが如き陰は是れ五取陰なり。菩薩は色取の陰を分別し、觀察し、選擇す。云何が色取陰を分別し觀察し、選擇すと爲せんや。是の色取の陰は四大より生ず。假に名づけて色取の陰と爲す。是の色陰は自性あることなし。但だ四大[七]和合すること以て假に名づけて[八]色陰と爲す。色陰は作者あること無く。使作者無く。無作無起無出なるを、名づけて色陰と爲す。但だ先業の因緣四大所攝の數を以て色陰と名づく。非陰は是れ色陰なり。譬へば虛空の如く、陰は實に生相無く、若し虛空の陰を說けば、是の中に法の生ずる有ること無し。但だ名字のみ有り。故に名づけて虛空の陰と爲す。[九]凡夫は此の無陰に於て陰相あり。顚倒心を以ての故に實無きに實相あり。我の五陰我所の五陰に貪著し、[一〇]我の色陰、[一一]我所の色陰も、是の如く貪著す。

是の諸の凡夫色に貪著し已て、色の中に於て我々所に依止して、色有り色を受け、色を取し、色に著し、色に依り、種々の惡不善の[一二]業を受行せん。我等應さに凡夫の學に隨ふべからず。我等應に勤めて助菩提の法を修集すべし。今應さに正しく色陰を觀ずべし。菩薩正しく色陰を觀ずるの時は、水沫聚に同じと知る。云何が水沫聚に同じと知るや。無聚は是れ水沫聚なり。但だ衆緣より生

【一】陰(skandha)の譯語。蘊に同じ蘊は積集の義にして多數の法を類に依つて、一聚としたるものを云ふ。五陰。

【二】界(dhātu)。種族の義。倶舍論卷一に「法の種族の義なり。一の山中に多くの銅鐵・金・銀・等の族あるを說いて多界を名くるが如し」と十八界。

【三】入(āyatana)。十二入のこと處に同じ。一切諸法を三科に分類する隨一にして、之に十二種あるより通常十二處と云ふ。舊譯に入と云ふ。心王、心所か之を所依として生長することを得るに名づく。若し之を離るれば全く成長すること能はず。

【四】五根。眼根(caksus-indriya)、耳根(śrota-indriya)、鼻根(ghrāṇa-indriya)、舌根(cihva-indriya)、身根(kāya-indriya)の五根にして色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ味を嘗め、觸を覺す。

【五】八聖道分(āryāṣṭāṅgika-mārga)。具さに八聖道支とも云ひ、正道は又由行、遊行、道行、直行、直道、賢聖道等と云ふ。正見、正思惟、正語、正業、正會、正命、正精進、正念、正定の八支なり。菩薩か涅槃にいたる修行法方なり。

【六】五陰。蘊に同じ梵語塞健陀の譯にして舊譯に陰、衆

じ。執捉すべからず。堅牢あることなし。水沫聚の中には聚の相あることなく。無聚は是れ水沫聚なり。色陰も亦是の如し。色陰の中には陰の相有ることなし。菩薩是の如く觀ずる時是の念を作さく。凡夫は正しく虛妄の色を觀ずること能はず。實の如く色の無情を知る能はず。實の如く色の相を知る能はず。我等正道に入り應さに虛妄に貪著すべからず。色に貪著すべからず。何を以ての故に。色は是れ貪著すべからずの相なり。色は但だ名字のみ有て決定の相なし。當に是の色は決定の相無しと觀ずべし。名字を離るゝが故に之を名けて色と爲す。又色を說いて惱壞相と名づく、智者は通達して是れ無相なりと知る。我等當に善く知りて、色無相の方便を修集すべし。色の相に貪著せざれ。若し人、色の相に貪著せば、卽ち色に貪著するなり。我等應さに善く知つて色の相に入るべし。菩薩是の如く正しく觀ずる時、實の如く色を觀察し選擇す。是の色陰は皆凡夫の憶想分別より起る。若し法は憶想分別より起らば、卽ち是れ不生なり。一切の憶想分別は皆眞實に非ざればなり。凡夫は顚倒所起の色に依止して、色の爲めに縛せられ、色の爲めに害せられ、往來に苦惱す。[一三]無明癡闇の故に。色を貪つて捨てず。色を見るに常に牢固有りとす。是れを凡夫人色縛と爲す。色に縛せらるゝが故に。地獄・畜生・餓鬼・天人を往來し、深く色味を貪り、色の中に諸の過惡有るを觀ぜず。我等は應さに凡夫の學に隨ふべからず。應さに觀察し、選擇（せんちやく）し、分別して、色の方便を修習すべし。色を分別し、觀察し、選擇する時、色性を見る事夢の如し。譬へば夢が中の色の如くに、皆憶想分別の覺觀より起る。曾て見聞覺知せし所の因緣より起る。是の夢中に亦た彼我を知り、亦た地水火風を見、亦た、山河藪林を見るも、夢が中の色相なれば、決定有る事なし。但だ憶想を以ての故に有り。色陰の相も亦た是の如し。先世の業因緣より出でゝ決定の性有ること無し。菩薩は是の如く思惟して色若しは我、若くは我所を取らざれ。但だ正しく色は實の如く無常の相にして、虛妄顚倒なりと觀ぜよ。衆生は顚倒し、貪著して、色　若しくは我の色、若しくは我所の色、若し

聚としてゐる。積集の義に依り蘊と名づく。何れも現・過・未の三世・內外・麁細・勝劣遠近等の別有るものを類に依りて一聚に積集したるものなるが故に蘊と云ふ一に色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊なり。

【七】　四大。色法の所依たる四種の法を云ふ。卽ち四大種の略稱にして地（Prithivi）、水（ap）、火（tejas）、風（Vayu）、此れなり。又四界とも云ふ。

【八】　色陰、五陰の一五根・五境・無表色なる十一種の色法を云ふ。

【九】　凡夫。凡庸劣夫の義、佛敎には大・小乘共に見道已前、卽ち正理を正見せざる以前は、悉く凡夫と稱す。

【一〇】　我（atman）。體、常一にして、自在なる作用を有する個人。又は宇宙的のもの。已が身に一の主宰有りて常住なるもの。

【一一】　我所。我れの所屬と云ふ意。我所見の前に有る情相を云ふ。百法問答鈔卷第一に「所とは所屬なり。餘法を我物に屬するが故に我所と名づく」とある。

【一二】　業、身口意に善惡等種種のことを造作するを云ふ。梵語羯磨の譯。造作の義。此の業因となりて、苦樂染淨の果を感じ、衆生と器界との報

くは彼の色、若しくは彼所の色を取る。是の如く正しく色を觀察し、選擇する時、色を得ず。色の性を見ず。亦た色の無常に貪著せず。菩薩爾時、色が中に於て、愛念貪著を皆悉く除き、斷じて善く色の正相を知り、善く色の平等相を知り、善く色の滅相を知り、善く色の[一四]滅道の相を知り、善く色陰の從つて來る所無く、亦た知る所無きを知つて、是の念を作さく。是身の色陰は皆業の[一五]果報覺觀より起る。四大所攝の是れ身の色陰にして。我に非ず、彼に非ず、所屬ある無く、從つて起る所無し。色陰を觀ずること是の如くなれば、內色は貪らず、受けず。外色を貪らず、受けず。過去の色も貪らず受けず。未來の色も貪らず、受けず。現在の色も貪らず、受けず。卽ち一切の色陰は是れ[一六]無生の相なりと知る。是れ菩薩爾時に色を滅せず、亦た色を滅するの法をも求めず。

持世よ。菩薩摩訶薩色取の陰を觀察し選擇すること是の如し。持世よ。何をか菩薩摩訶薩受取陰を觀察し、選擇すと謂ふや。菩薩是の思惟を作さく。是の苦受と樂受と不苦不樂受とは皆因緣より生ず。諸の因緣に屬して[一七]受の相の中に入る。此の中に受者有ること無し。但だ貪著を以ての故に。貪著は卽ち是れ不眞、虛妄にして憶想分別より起る。是の菩薩是の如く思惟する時、是の念を作す。是の凡夫は虛妄の受の爲に縛せられ、三受の爲に害せらる。所謂苦と樂と不苦不樂受なり。是の凡夫若し樂を受くれば、愛[一八]結の爲に使はれ。愛結に使はるゝを以ての故に、能く惡業を起す。若し苦を受くれば恚結の爲に使はれ、恚結の爲に使はるゝが故に諸の惡業を起す。若し不苦不樂受を受くれば無明結の爲に使はる。是の人無明結に因つて使はるゝが故に、憂悲苦惱を脫せず。我れ今應さに凡夫の學に隨ふべからず。應さに正しく諸法を觀じて、我等應さに實の如く諸受を觀ずべし。菩薩は實の如く受の陰を觀じて是の念を作さく。非陰は是れ受陰なり。憶想分別より起り、顚倒相應して受なる者有ること無し。但だ先世の業因に從り、今世の緣を起すが故に。諸の受は自性空にして、受の中に受の相有ること無し。菩薩は受陰を觀達す。譬へば雨渧水泡の如く、生有り滅有り、

を得。若し迷界に於て云わんか煩惱よりして業を起し、業よりして苦果を感じ、迷界の依正二報を現出するものなり。

【一三】無明(avidyā)。煩惱の別名。法に於て明了なる所なきを云ふ。明は智慧學識の義にして無は無智の義なり。雜集論述記卷三には、之に六義有り、始めに非の義。二に無の義。三に異の義。四に惡の義。五に少の義。六に離の義なり。

【一四】滅道。滅諦と道諦なり滅は生死の因果を滅したる涅槃なり。道は涅槃を證する道なり。滅は果にして道は因なり。

【一五】果報。行業の因に報いたる結果。現今は幸福なるものを果報者と云ふ。是は善因に福樂を感ずる結果よりして轉じて用ひられたるなり。

【一六】無生。諸法の實相は生滅無きを云ふ。無生滅又は無生無滅と云ふに同じ。一切の凡夫は此の無生の理に迷ふて、生滅の煩惱を起すが故に生死に流轉すとなす。

【一七】受(Vedanā)。心所の名。小乘俱舍家にては十大地法の一とし。大乘唯識家に於ては五遍行の一とす。領納を義とす。

【一八】結。煩惱、又は繫縛の

決定有ること無し。受陰も亦た是の如し。次第の因緣より起り。諸の因緣に屬し住する時あること無し。虛妄不實にして憶想顚倒相應從り起る。菩薩は爾時に是の念を作さく。凡夫は愍む可し。諸受の爲に制せられ、正しく受陰を感ぜざるが故に、故に樂受を得て著を生じ、苦受を得て亦た著を生じ、不苦不樂受を得て亦た著を生ず。諸受の爲に縛せられ、馳走往來す。身從り身に至り結の諸縛を受く。[一九]五道に輪轉して休息有ること無し。是の凡夫諸受に著し、受の爲に制せられ、受の爲に繫がれ、受陰を脫せず。受陰の所に於て出處を見ず。受陰を正觀することを知らざるが故に、實の如く受陰の無常を觀ずることを知らず。受陰の中に於て欲[二〇]染の爲に縛せられ、受陰の如實の相を知らず。我等今應さに凡夫の學に隨ふべからず。應さに實の如く受陰を觀察し、選擇すべし。卽ち時に實の如く受陰を觀じ、無陰は是れ受陰なり。不眞陰は是れ受陰なり。顚倒陰は是れ受陰なり。不住陰は是れ受陰なりと。是の時受陰の如實の相を見るに、作者有ること無く。使作者有ること無し。受陰の中に於て受陰の相を見ず。是の如く受陰を觀ずるに、受陰に內に在るを見ず。受陰外に在るを見ず。受の我に著せず、受の彼に著せず、受陰の從つて來る所無く、屬するところ有ること無しと知る。法の能く受を生ずるもの無し。但だ顚倒・[二一]相應・先世業の果報の數に從つて受陰と名づく。受陰は虛妄の因緣相續の行と見る。爾時に、過去の受陰を受けず、貪らず、著せず。未來の受陰も亦受けず、貪らず、著せず。現在の受陰も亦た受けず、貪らず、著せず。是の人、樂受の中に於て愛結を除却し、苦受の中に於て恚結を却除し、不苦不樂受の中に無明結を知見するが故に、勤めて精進を行ぜん。

菩薩爾時に、若し樂受を受くるも、心に愛を生ぜず。若し苦受を受くるも、心に恚を生ぜず。若し不苦不樂受を受くるも心に癡を生ぜず。

持世よ。凡夫は多く樂受に於て愛を生じ、苦受に恚を生じ、不苦不樂受に癡を生ず。是れ諸の凡

義。

【一九】五道。五趣に同じ。迷界をして（一）地獄（二）餓鬼（三）畜生（四）人間（五）天上(1)(nirriti)(2)(preta)(3)(tiryagyoni)(4)(manusya)(5)(deva)に分けたるを云ふ。又は五惡趣五惡道とも云ふ。

【二〇】染(kliṣṭaḥ)。染汚と同じ煩惱の異稱。或は離染とも云ふ。其の體不淨なるが故に此の名有り。

【二一】相應。二物相稱れて離鯑することなきを云ふ。

夫は愛と恚と癡とを以ての故に深く闇冥に入り、實の如く受陰を知ること能はず。亦た愛と恚と癡との相を知らずして、深く愛と恚と癡とに貪著す。所謂是れは我々所なり。是れは此れと彼等なり。持世よ。菩薩摩訶薩は此の中に於て正しく受陰を觀ずれば、愛と恚と癡の爲に索かれず。若し愛恚癡を生ずれば、卽ち能く除斷して正道を行ぜん。樂受の中に於て愛の結使を斷ずるが故に、勤めて精進し、苦受の中に於て恚の[二二]結使を斷ずるが故に、勤めて精進し、不苦不樂受の中に於て癡の結使を斷ずるが故に、勤めて精進して實の如く三受の相を知る。

爾時に所受に若しは苦、若しは樂、若しは不苦不樂受有らんに、皆離れて著せず。愛の結使を離れ恚の結使を離れ癡の結使を離れ、諸受起る時皆能く知見して受陰は如實無常なりと知らん。若し能く是の如く知り已れば、受陰の中に於て欲染悉く斷ぜん。受陰を斷じて、欲染道の中に入るも、諸受の爲に汚されず。是れ菩薩若し是の如く正しく受陰を觀ずれば、實の如く受陰を知り、受陰の集集、受陰の滅、受陰の滅道を知り、然して後に實の如く受陰は是れ無生相なりと知り、無生の相を以つて、受陰は無相なりと通達せん。

持世よ、菩薩摩訶薩は是の如く受陰を觀察、選擇す。持世よ。何をか菩薩摩訶薩想陰を觀察し、選擇すと謂ふや。菩薩摩訶薩正しく[二三]想陰を觀ずる時、想陰を見るに、皆顚倒從り起り、虛妄にして堅固ならず。眞實ならず。本より已來(このかた)相を生ぜず。因緣和合を以つて、先世の業力によつて起る。是の念を作さく。非陰は是れ想陰なり。虛妄の陰は是れ想陰なり。顚倒の陰は是れ想陰なり。想陰の中に想陰相なきこと、譬へば春後の[二四]月焰の如し。名字を以つての故に、名づけて焰と爲す。想陰も亦是の如く、[二五]識の相を以ての故に、說いて想陰と名づく。凡夫此に於て虛妄の想の爲に繫がる。或は樂を識り、或は苦を識り、或は不苦不樂を識り、或は寒熱を知り、或は男女を知り、或は五道生死を知り、或は合を識り、或は散を識り、或は過去を識り、或は未來を識り、或は現在を識

【二二】結使。煩惱の異名。諸の煩惱は衆生を纒縛して生死を出でざらしむるが故に結と云ひ、衆生を驅役して惱亂するが故に使と云ふ。

【二三】想陰。五蘊の一つなり。境の像を取る想の心所。

【二四】月は、三本・宮本には日。

【二五】識。五蘊の一にして心王の一法なり。

り、或は好を識り、或は醜を識り、或は有を識り、或は無を識る。是れ凡夫の想にして、皆顚倒虛妄の爲に、諸の因緣に屬す。但だ[二六]假に名づけて想陰と爲す。此の中、若は內若は外に、想なるものの有ること無し。凡夫人は虛妄の想に繫がるゝが故に、或は貪欲を識り、或は瞋恚を識り、或は愚癡を識り、或は妻子を識る。凡夫は是の想陰に依止し、虛妄に貪著し、是の想陰を以つて、馳走往來し、實の如く想陰は是れ虛妄なりと觀ずること能はず。凡夫は我の想、彼の想、男女の想を以つて、想陰に繫がれて脫を得ること能はず。想陰に貪著して我は是れ想陰なり。我所は是れ想陰なりとす。

我等應さに凡夫の學に隨ふべからず。菩薩摩訶薩是の如く正しく想陰を觀ずるに、想陰の中に想陰の相を得べからず。焰の陰の中焰の如く、陰相は不可得なり。菩薩想陰は焰の性の如しと見れば、過去の想陰も貪せず。受せず。著せず。未來の想陰も亦貪せず。受せず。著せず。現在の想陰も住せず。若は我、若は彼を分別せず。卽ち彼の想受陰の道を滅し、想陰は是れ無生なり。と通達し、想陰の若は來處、若は去處を見ず。但だ顚倒を以つて先世の業因に相應して起る所、現在の緣の繫る所、無陰は是れ想陰なり。想陰を觀察し、選擇するに、從て來る處なく、亦た所去無く。卽ち想陰は無生なりと通達して、亦想陰の滅を分別せず。但だ一切の想受の陰を滅せんが爲めの故に。亦如實知見に住するが故に。菩薩實の如く想陰を觀ずる時、一切の想道の心を遠離し、亦た一切の想道に住せず、但だ知見の想陰、亦た如實の想陰、不貪著の想陰に住し、實の如く一切の想陰を觀察し、實の如く、想陰の集滅盡を知る。

持世よ。菩薩摩訶薩是の如く正しく想陰を觀察し、選擇すれば、則ち想陰の欲染を離れ、亦た能く想陰の欲染を斷ずる道を行ぜん。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩[二七]行陰を觀察し、選擇すと謂ふや。持世よ。菩薩摩訶薩行陰を觀ずる

【二六】假。虛假の義。俗に云ふかりにの意。實體なくして名に因りて有るを假名有と云ふが如し。

【二七】行陰。五蘊の一。造作遷流の義。

に顚倒より起り、虛妄の憶想分別假借す。而も菩薩有つて、爾時に若は身行・口行・意行・皆不淨無常苦空無我なりと觀ず。是の如く觀ずる時、是の念を作さく。非陰は是れ行陰なり。菩薩は是れ行陰なり。因緣生陰は是れ行陰なり。像陰は是れ行陰なり。諸の行陰は無增無滅無集なり。若し身行・口行・意行は作者有ること無し。智者は受は是れ行陰なりと貪らず。何を以ての故に。是の諸の身行は身の內に在らず。身外に在らず。中間に在らず。口行、意行も亦た是の如く、意の內に在らず、意の外に在らず。中間にも在らず。行陰の中に行陰の相無し。何を以つての故に。是の行陰は衆の因緣の顚倒より起り、虛妄不眞にして、先業の果報の攝する所、亦た因緣に繫がれて、能く所行有り。諸の所有の行は、若は身行、若は口行、若は意行、皆眞行に非ず。是れ無所有の行。是れ虛妄の行、是れ顚倒の行なり。是の故に非陰は是れ行陰なりと說く。何を以つての故に。智者は決定して行陰の相を得ず。是れ身行なり、是れ口行なり、是れ意行なり。此處彼處、若は內、若は外、又は身口意の行、尙ほ決定の行相を說く可く得可きもの無し。何に況や行陰の得可く說く可きをや。是の故に無陰は是れ行陰なりと說く。凡夫顚倒の想を起し、身口意行に貪著し、憶念して是れ行陰なりと分別し、行陰の爲めに縛せられ馳走往來す。是れ凡夫人顚倒を以つての故に身口意の行を起し、起し已つて貪著し歸趣するに、法無きに法の想を生じ、陰無きに陰の想を生ず。顚倒の行に貪著するが故に、行陰の爲めに繫がれ、五道に往來して常に身口意の行に隨つて、實の如く身口意の行を觀ずること能はず。實の如く行陰を觀ずること能はざるが故に、身口意を以て諸行を起す。是れ諸の凡夫顚倒に著するが故に。不眞の法に著するが故に。虛妄に著するが故に。〔二八〕數を行陰と名づく。

持世よ。菩薩は、是の中に於いて是の如く正しく諸行は根本あることなしと觀ず。羸劣無力なるも衆緣和合するを以つて行陰を說くべし。此の中に眞實の行陰あることなし。無陰は是れ行陰にして本より已來生ぜざるは是れ行陰なり。無性は是れ行陰なり。諸行の前際は不可得なり。後際も不

【二八】數。數量にて、色身の諸法一々の差別を表す上に於て立つ。

可得なり。中際も不可得なり。住する時、有ること無く、諸行は念々に生滅す。

持世よ。菩薩は是の如く正しく行陰を觀ずるに空不可得、不堅牢の相なり。乃至毫釐も亦不可得なり。是の念を作さく。是れ諸の凡夫は不堅牢の法の爲めに繫がれ、行陰に繫がれ、貪著に縛せられ、身口意の行を起すに、我は是れ行なり、我所は是れ行なり、是の如き業を起し、行陰の爲めに縛せられ、行陰の性を知らずして無明の癡冥に入り、諸行の中に於て眞實の相を生じ、顚倒を以つての故に受取行陰に貪著す。是の人、受取行陰に貪著するが故に。或は樂の行を起し、或は苦の行を起し、或は不苦不樂の行を起す。是の人樂行を起し已つて樂身を得、苦行を起し已つて苦身を得、不苦不樂行を起し已つて、不苦不樂の身を得。是の人、樂身を得已つて愛を生じ、苦身を得已つて瞋を生じ、不苦不樂の身を得已つて愚癡を生ず。是の人、愛と瞋と癡とを以ての故に、諸行の過惡を見ず。身口意の行を清淨ならしむる能はず。是の人、身口意の行清淨ならざる故に、不清淨道の中に墮す。所謂[二九]地獄・[三〇]畜生・[三一]餓鬼なり。或時には暫らく天人の中に生じて、身・口・意行に貪著し、深く行陰に著す。菩薩摩訶薩應さに是の如く正しく觀ずべし。今我等、應さに凡夫の學に隨ふべからず。我等應さに身に意の行を清淨にすべし。應さに行陰に貪著すべからず。應さに行陰の過惡を觀ずべし。應さに行陰を出づるの道を求むべし、と。是の如く觀ずる者を名づけて實の如く正しく行陰を觀ずと爲し、亦た正しく行陰の無常を觀ずと名づく。卽時に實の如く諸行と諸行の集と諸行の滅と諸行の滅道とを觀じ、諸行を受けず、貪らず、著せず、亦た行陰に貪せず、著せず、是の如く觀ずる時、行相を遠離し、亦た無行陰の道を行じ、卽ち諸行の空を觀じ、一切諸行の中に於て、驚怖して、厭離の心を生じ、但だ清淨の身口意の行を起さん。行相を壞するが故に。行陰の相を離るゝが故に。是の人、有所得の身、皆是れ清淨なり。何を以つての故に。是の人、身業清淨・口業清淨・意業清淨・身行清淨・口行清淨・意行清淨なり。是の人、行陰の相を遠離し、諸法及び根本

【二九】 地獄(Naraka)(Niroya)。那落迦、泥犂などとも云ひ不樂、可厭、苦具、苦器、無有などゝ譯す。地獄は地下に有る牢獄なりとの義譯なり。

【三〇】 畜生(Preta)。底栗車とも云ひ畜養する生類なるが故に畜生と名づく。一切世人は或は驅使の爲めに噉食の爲めに、此の生を畜養す。

【三一】 餓鬼(Tiryagyoni)。常に飢へ渇するの苦しみを受くる一種の鬼である。此の鬼類の中には藥叉羅刹の大威德を有するものあれば、新譯には鬼と云つて餓と云わず。然るに舊譯の經論に多く餓鬼と云ふは、鬼類の中餓鬼最も多きが故なり。

の相を壞せん。是の如く正しく觀ずる時、行陰の從つて來る處無く、亦た去る處も無きを見、諸行の決定生の相を得ず。亦決定滅の相をも得ず。卽ち諸行の無生滅の相を觀じ、一切の諸行も亦た生滅無し、是の人、一切諸行の無生滅の相を觀じて、厭離の心を生じ、正しく諸行の集滅の相に通達す。諸行の無生の相を證すと雖も、而も善く諸行の相に通達す。何を以つての故に。

持世よ。是の行陰決定の相の無きこと、譬へば芭蕉の如く、堅牢の相も得べからず、無堅牢の相も亦た得べからず。行陰も亦た是の如し。堅牢の相も得べからず。無堅牢の相も亦た得べからざるなり。

持世よ。菩薩摩訶薩是の如く觀察し、選擇し、思惟して行陰に入らん。

卷の第二

五陰品　第二の二

持世よ。何をか菩薩摩訶薩正しく[一]識陰を觀察し、選擇すと謂ふや。菩薩摩訶薩は非陰は是れ識陰、顚倒陰は是れ識陰、虛妄陰は是れ識陰なりと觀ず。何を以つての故に。持世よ。是の識陰は顚倒より起り、虛妄の緣に繫せられ、先業より有り、現在の緣に繫せられ、衆の因緣に屬す。虛妄は所有無く、憶想分別より起り、識より生ず。所識有り故に之を名づけて識と爲す。憶想分別より覺觀生ず。假借にして有り、所識有るが故に、數を名づけて識と爲す。諸の物を識るを以つて故に。心業を起すを以つて故に。思惟を以つての故に。衆緣の生相の故に。種々思惟を起すが故に。數を識陰と名づく。識る所有るに從つて識の像の出づるあり。心業を示すが故に。思惟を攝するが故に。數を識陰と名づく。或は名づけて心と爲す。或は名づけて意と爲す。或は名づけて識と爲す。皆是れ意業の分別なるが故に識陰の所攝にして。識の相、識の行、識の性を示すが故に、數を識陰と名づく。是の如く非陰は是れ識陰なり。不生不起不作にして、但だ顚倒を以つて、相應して虛妄の識を得ず。故に數を識陰と名づく。何を以つての故に。是の識陰は衆の因緣より生じ自性無く、次第に相續して生じ、念念に生滅す。是の識不生陰の相を緣ず。何を以つての故に、是の識陰の[二]生相不可得なり。決定の相も亦不可得なり。生の相も不可得なるが故に、決定の相も不可得なるが故に、根本所有無きが故に、自性無きが故に、堅牢にして不可得なるが故に、智者、正しく觀察選擇して非陰は是れ識陰なりと通達せん。凡夫は非識陰に於て識陰の相を生じ。覺觀分別の憶想を以つて、顚倒相應虛妄に縛せらる。強いて名づけて識陰と爲す。

是の識陰に貪著し、所識に依止し、識に依止し、種々思惟を示すが故に、識陰を生起す。是の人

【一】識陰。五陰の一。心王の一法なり。一般に云ふ意識作用なり。

【二】生相。色心の諸法の生起する相。

種々分別し、內識に貪著し、外識に貪著し、內外識に貪著し、遠識に貪著し、近識に貪著し、識相を以つての故に、分別して、識陰を起す。是の人憶想分別を以つて、若くは心、若くは意、若くは識を、假借して强いて名づけて、是れ心、是れ意、是れ識と爲す。是の如く種々の心相生ずるを知る。是れ凡夫識陰に貪著して、識陰の爲めに縛せらるゝなり。心意識合するが故に、種々の識陰を起す。虚妄の事を分別するが故に。一相を以つて故に。決定相を以つての故に。能く是れ心、是れ意、是れ識を得。能く分別愛著を得。是の人識陰に依止して深く識を貪るが故に。亦た過去の識陰を得て貪著の念有り。亦た未來の識陰を得て貪著の念有り。亦た現在の識陰を得て貪著の念有り。諸の凡夫、見聞覺知の法の中に於て、識陰を計得して貪著の念有り。是の人、見聞覺知の法に貪著して、識陰の爲めに縛せられ、其の所知を貴び、心意識の合繫を以つての故に、馳走往來し、所謂此の世より彼の世に至り、彼の世より此の世に至り、皆識陰に縛せらるゝが故に、實の如く識陰を知ること能はず。識陰は是れ虚妄不實顚倒と相應す。見聞覺知の法に因つて起り、此の中に實の識なるもの有ること無し。若し是の如く實に觀ずること能はず。或は善識を起し、或は不善識を起し、或は善不善識を起す。是の人常に識行に隨ひ、識の所生の處を知らず、識の如實の相を知らざるなり。持世よ。菩薩摩訶薩は此の中に於て是の如く正しく觀じて識陰は虚妄の識より起ると知るべし。所謂見聞覺知の法の中衆因緣より生ず。法無くして法の想を生ずるが故に識陰に貪著す。我れ等應さに凡夫の學人に隨ふべからず。我れ等に如實に正しく識を觀察選擇して、如實に正しく識陰を觀察し選擇せん。是れ諸の菩薩如實に觀ずる時、識陰は虚妄不實と知つて本從り已來常に生ぜざるの相を知り、非陰は是れ識陰なり。像識は是れ識陰なり。幻陰は是れ識陰なりと知る。譬へば幻の化する所の人の識の如く、內に在らず、亦た外に在らず、亦た中間に在らず。識の性も亦た是の如く、幻の性の如く、虚妄の緣より生じ、憶想分別より起り。實事有ること無く、[三]機關の木人の如し。識

【三】 機關の木人。人形の意。

も亦た是の如く顚倒より起り、虚妄の因緣和合の故に有るなり。是の如く觀ずる時、識は皆無常苦不淨無我なりと知り、識の相は幻の如しと知り、識の性は幻の如しと觀ず。

菩薩爾時に是の念を作さく。世間は甚だ狂癡と爲す。所謂憶想分別より識を世間に起し、心意識と合し、三界は但だ是れ識なり。是の心意識は亦た形無く方無く、法の內に在らず、法の外に在らず、凡夫虚妄相應の爲めに縛せらるが故に。識陰の中に於て若は我、若は我所に貪著す。是の人識陰內に在りと貪著し、識陰は外に在りと貪著し、識陰は內外に在りと貪著し、識陰は彼我に在りと貪著す。是の人、此の識著を貴んで識陰の爲めに縛せらる。識陰の味を受けて識陰の相を說く、所謂若しくは心、若しくは意、若しくは識、味行に隨ふが故に識陰を貪受す。是の人、識の爲めに縛せらる。識陰合すが故に、心意識の爲めに索がる。心意識は因緣力を以っての故に是の凡夫を生ず。若し下の思を起せば下の身を得。若は上の思を起せば上の身を得。若は中の思を起せば中の身を得ん。是の人、心意識の力に隨ふが故に生じて[五]諸の入に依止し、識陰に貪著するが故に。生老病死憂悲苦惱を脫せず。菩薩此の中に於て、實の如く正しく識陰を觀じ、選擇せん。實の如く正しく識陰無常の相を觀ずるが故に。過去の識陰を貪せず、著せず、念せず、非陰は是れ識陰なりと知る。未來世の識陰も亦た貪せず、著せず、念ぜず。非陰は是れ識陰なりと知る。現在の識陰も亦た依止せず。實の如く識陰無常の相を知り。實の如く識陰生滅の相を知る。若し是の如く思惟して正しく識陰を觀ずる、是を正しく觀じて識陰の道に入ると名づく。所謂實の如く識を知り、實の如く識の集を知り、實の如く識の滅を知り、實の如く識の滅道を知る。是の人實の如く識陰の集滅の相を觀じ、能く識陰を壞し、能く一切の相を斷じ、識陰の集滅の相を知り、亦た識陰の集滅の相に通達す。菩薩爾時に亦た識陰を生ぜず。亦た識陰を滅せず。是の識陰は本より已來(このかた)生無し。是の如く觀ずる時、識の滅相を分別せず。識陰無生の相に通達す。何を以っての故に。持世よ。是の識陰は生無く、

【四】三界(trayo dhātavah)。迷つてゐる衆生の居る世界を其の程度に於て三分類せり、此れを三界と云ふ。即ち、(1)貪欲、婬欲、睡眠欲の存する欲界。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、及び六欲天此れなり。(2)淨妙なる色法の存する色界。四禪天此れなり。(3)色法存することなき所の無色界となり。

【五】入。十二入。

相無く、成無きなり。是の識陰の生性虚妄の故に、無生の相の中に入在す。持世よ、色陰は終に生成の相有らず。是の識陰の相は衆の因緣より生ず。

持世よ。菩薩摩訶薩是の如く因緣の法を觀ずるに非陰は是れ識陰なり。觀察選擇信解證知し、諸の所有の識に通達して悉く皆實を知る。菩薩識陰の實を知るが故に、是の如く一切の所緣皆破壞すと知る。

持世よ。菩薩摩訶薩は是の如く識陰を觀じ、是の識陰は生無き者、作無き者、起無き者、受無き者、所受無き者と知る。但だ衆緣を以つて生じ、衆緣合する故に有り、見聞覺識の法を緣するが故に有に繫す。本より已來(このかた)常に畢竟空なり。是の如く識陰を觀ずる時、即ち識陰は是れ無作[六]無起の相なりと知つて、貪せず、著せず。

持世よ。菩薩摩訶薩是の如く正しく觀察選擇して識陰に入る。若し菩薩能く是の如く方便して[七]五陰に入り、能く是の如く方便して正しく五陰を觀ずれば、是を通達して五陰の集滅道に入ると名づく。皆能く諸の陰相を斷じて、眞に五陰の方便を知る。是の方便を以つての故に、五[八]取陰の中に於て貪せず、著せず、縛せず、繫せず。實の如く色を知り、實の如く色の無常の相を知る。是の菩薩若し色に於て、欲染有らば則ち能く除斷せん。亦た實の如く受想行識を知り、亦た實の如く受想行識の無常の相を知り、若は受想行識の中に於て、欲染有らば即ち能く除斷せん。菩薩五取陰の中に於て欲染を除斷するが故に、隨順して決定五陰の方便に通達す。是の如く觀ずる時、能く五取陰、微細の生滅の相を知る。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩能く五受陰の細微の生滅の相を觀察し選擇すと謂ふや。菩薩摩訶薩は衆生初めて胎に入る[九]歌羅羅の時を觀じて、先に五陰滅して、即ち更らに五陰の生あり。是れより已來(このかた)五陰の生滅の相を觀ず。先に識滅すと雖も亦た五陰は斷滅の相の識に非ざることを知る。歌羅

【六】無記。三性の一。善惡何れにも屬せざる中性。
【七】五陰。舊譯にては五蘊、五衆、五聚と云ふ。即ち色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊、を云ふ。蘊とは梵語塞健陀(Skandha)。
【八】取。受なり。
【九】歌羅羅(kalala)。胎內五位の一、又羯羅藍、歌羅邏等に作る。凝骨又は和合と譯す。託胎以後初七日間の狀態を云ふ。

羅に依止すと雖も、亦た五陰の不至不常を知る。是の如く初め入胎の一念、五受陰生滅の相、歌羅羅より乃至出生し、及び後に增長し、乃至死する時を觀じ、此の五受陰念念生滅の相を觀じ、是の如く五陰受微細の生滅の相を觀察し、選擇す。

持世よ。是の五受陰微細生滅の相は所謂先に五受陰滅すれば、次第に物として胎に至るものあること無く、識初めて合する時、五陰卽ち生滅有り。歌羅羅に因る五受陰を假りに名づけて人と爲す。所以は云何ん。持世よ。識は所依無ければ則ち能く住せず、識の所依は五受陰是なり。

持世よ。又無色界の中の諸天、五受陰細微の生滅の相も亦た應さに是の如しと知るべし。

持世よ。是の如き細微の五受陰の生滅の相は、辟支佛の智慧も及ぶ能はざるところ、何に況や聲[10]聞の智慧に於ておや。惟だ諸佛如來のみ善く五受陰を知り、初め入胎の細微の生滅の相より、及び無色天の諸陰の念念生滅に及ぶ。所謂一切の智慧、出一切世間の智慧なり。菩薩摩訶薩は無生法忍を得て、佛慧の境界に至る。是の人是の如く五受陰細微の相を觀察し選擇すと雖も、初め入胎より乃至無色天まで、亦た諸佛所知の如く究盡すること能はず。

持世よ。諸佛如來は隨他の智慧有ること無し。自然に一切の智慧方便を得、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。諸佛の智慧は達せざるところ無く、諸佛は[11]無礙の智慧もて、一切法の中に於て決定の慧を得、一切の法の中に於て自在の力を得たまふ。何を以つての故に、無量無數千萬億[12]阿僧祇劫に於て深法を行じたまふが故なり。

持世よ。一切の凡夫は是の如く方便して五受陰を觀ずること能はず、何に況や五受陰細微の生滅の相に於てをや。何を以つての故に、諸の凡夫人は五受陰の如實を知ること能はず。凡夫は取を知らず。受陰を知らざればなり。

持世よ。何をか謂て取と爲す。取とは我取・衆生取・見取・戒取・五陰取・[13]十八性取・[14]十二因緣取、に

【一〇】聲聞(śravaka)。二乘又は三乘の一、佛の聲(說法)を聞きて修行證果する小行、小果の人を云ふのである。直譯すれば佛語を聽聞する人の義なり。

【一一】無礙の智。佛の智慧の通達自在なるを、云ふ。無礙其のものの字の意味は一切の外物に於て障礙せらるること無きを云ふ。無礙人と云ふは其の例なり。

【一二】阿僧祇劫(asaṅkhya)。阿僧祇とは大數の名目。漢字音にて阿僧祇耶、阿僧企耶と作る。譯して無數、無央數、又は數の極となせり。劫とは無數の長年時故に極めて長き年時。

【一三】十八性。十八界のことにして、性とは有情的の見方其の內容なり。界とは種族、種類等の義あり。種族は自類を相續して生ずるの義。種類は各別の品類等の義。卽ち十八の種類自性相續して存在するを界と云ふ。

【一四】十二因緣(dvādaśāṅga-pratītya-samutpādaḥ)。三界に於ける迷の因果を十二に分たるものにして、また十二緣起、十二有支、十二支等とも云ふ。無明(avidyā)、行(saṃskāra)、識(vijñāna)、名色(nāma-rūpa)、六處(ṣaḍāyatana)

名づく。是れを名づけて取と爲す。乃至所有の法、若は內、若は外、所謂欲取・有取・見聞覺識取・我我所取なり。

持世よ、凡夫は此の虛妄の取に於て知らず、見ず、顚倒の因緣よりして諸法を取す。是の人取の爲めに繫せられ、無明の因緣もて諸行を取し、諸行の因緣もて識を取し、識の因緣もて名色を取し、名色の麁相に衆生は染著し、歸趣す。所謂色は色の合、色の縛を取し、及び四無色陰と受想行識を取し分別して名と爲す。

持世よ。若し諸佛無んば衆生則ち知る所無く、見る所無く、正しく五受陰を觀ずる事能はず。諸佛は世間に出て衆生依止の色を壞し、依止の受想行識を壞し、和合の一相を壞するが故に、諸佛如來は是の如き分別の說を作さく、汝等の所依所歸、是を名づけて色と爲す。是の色は但だ[15]四大を以つて和合す。受想行識は但だ名字のみ有り。名色の相成就するが故に五受陰と說く。汝等衆生此不堅牢の五受陰に貪歸する事莫れ。

持世よ。如來は何が故に五受陰を說きたまふや。持世よ。是れ凡夫人は顚倒より生じて無明の網に入り、馳走往來して何の歸趣する所やある。五受陰の相を貪受して是の念を作さく、我れ此に依止して當に以つて樂を得べし、と。是の人此の樂の相を以つて五陰に貪歸す。凡夫人の所歸所依止の處、是れを五陰と名づく。

持世よ。諸の凡夫人、生れてより以來盲にして五陰は是れ何等たるを知らず、五陰は何の所より來るかを知らず、五陰の如實を知らざるが故に、五陰を貪受す。是の故に說て受陰と名く。此の中に於て、誰れの受者かあらん。此の中の受者は不可得なり。但だ顚倒と貪著と分別と虛妄と自縛と無明と癡闇とを以つての故に。我を取し、我所を取し、此彼を取す。是の故に受陰を是れ五陰なりと說く。取有ること無きものは、亦決定の相なし。是の故に智者非陰は是れ五受陰なり。顚倒陰は

tana)、觸(sparśa)、受(vedanā)、愛(tṛṣṇā)、取(upādāna)、有(bhava)、生(jāti)、老死(jarā-maraṇa)の十二種なり。

【一五】四大。三一九頁參照。

是れ五受陰なりと知る。凡夫此に於て爲めに繫縛せられ、五取陰に貪歸す。貪歸を以つての故に何等か是れ取なるや。何等か是れ取陰なるやを知らず。但だ所歸の五陰に貪著する爲めに生死に往來し、是の五陰に貪著するが故に諸[一六]趣に馳走す。何等に貪歸するや。見に貪歸し、聞に貪歸し、覺に貪歸し、識に貪歸し、愛に貪歸し、無明に貪歸す。是れ諸の凡夫愛縛の爲めに縛せられ、五受陰に貪愛し、諸蓋の爲めに覆はれて無明の闇冥に入る。我等今何の處に貪歸し、何の處に繫縛するやを知らず、覺らず。知らざるを以つての故に、地獄、畜生、餓鬼、人天道の中に往來し、生死縛せられ、生死に貪歸し、放れず捨てず、五陰を斷ぜず、亦た五陰の如實の相を知ること能はず。實の如く知らざるが故に。種々苦惱の爲めに害せられ、虛空の獄に墮して出る處を知らず。是の人出るの道を見ざるが故に、無始よりの生死道の中に於て、諸の生死を受く、是の故に生老者死憂悲苦惱を脫するを得ること能はず。亦た無量の生死の險道を度ることを得ず。亦た諸の大苦聚を脫することを得ず。還た復た苦に歸趣し、苦に貪著し、苦の爲めに使はる。何等をか苦と爲す。五受陰是れなり。生の時は但だ苦の生なり。滅の時は但だ苦の滅なり。

持世よ。我れ是の因緣を以つての故に、弟子の爲めに說法す。汝等比丘當さに正しく色陰を觀ずべし。亦た當さに實の如く色無常の相を知るべし。汝等若し色の中に於て欲染有らば、當さに疾やく斷除すべし。汝等當さに受想行識を正觀すべし。亦た當さに實の如く受想行識の無常の相を知るべし。若し受想行識の中に於て欲染有らば、當さに疾く除斷すべし。欲染を除斷するが故に心正しく解脫を得べし、と。

持世よ。若し人有て我が所說の法の義を知つて是の如く能く說の如く修行せば、當さに生老病死憂悲苦惱を脫する事を得べし。若し人、說の如く修行する能はずんば、色縛の爲めに縛せられ愛繫の爲めに繫せられ、無明の闇冥に入つて五陰を貪取せん。是の人、五陰を貪取するが故に、生死の

【一六】趣(gatiḥ)。業因に依りて趣向する所。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣を云ふ。

險道を脫すること得る能はず。

持世よ。此義を以つての故に、我れ說く世間[17]は我れと諍へども、我れは世間と諍はず。何等をか世間と爲す。所謂五受陰に貪著する者は、世間の所攝と爲す。是の人、五陰に貪歸して、五陰の爲めに縛せられ、五陰の性を知らず、五陰の空の相を知らず、而して我と諍ふ。是の人佛語に違逆して、佛と共に諍ふが故に大衰惱に墮す。若し人有て佛の在世若くは佛の滅後に於て、能く是の如く虛妄の五受陰空無所有は顚倒無明闇冥より起り、虛誑の妄想は但だ凡夫を誑かし、五陰に非ざるを五陰に似たりと觀ず。是の如きの人、佛と諍はず。佛の語に逆らはざるが故に、地獄畜生餓鬼の苦惱を脫がるることを得ん。持世よ。諸佛は人と諍はず。一切の諍訟を斷ず。是れを名づけて佛と爲す。但だ衆生の爲めに實の法を演說して是の言を作さく。汝等先に取るところは皆是れ顚倒なり。一切衆生顚倒の力の故に、五陰に貪歸し世間に往來せん。是の人、五陰に貪歸し已て種々の邪見を起し、種々の名字に貪歸し、種々の憂悲苦惱に貪歸す。是の人、種々の邪見、煩惱、種々の憂悲苦惱の爲めに殘害せられ、能く救を作し、舍を作し、歸と作し、趣を作すもの有ることなし。唯だ佛のみ能く救ひたまふ。凡夫は小心小智慧の故に[18]五欲に貪嗜し、多過の五陰に依止す。是れ凡夫人は救者と歸者と依者と脫一切苦惱者と而も共に諍訟す。

持世よ。我れ今擧手して其の五陰を見る者、五陰の相を見る者、五陰を貪する者有れば、我れ則ち是の人の與めに師と爲らず。是の如きの人、亦た我が弟子に非ず。我れに隨つて出家せず。我れに隨つて行ぜず。我れに歸依せず。是の人、邪道に入り、虛妄の道に入りて不實を取るものなり。是れ顚倒の爲めに佛意を知らず、佛隨宜の說の五陰を知らず。佛の第一義を知らず。是の人、佛の教を受けず。應さに[19]供養を受くべからずして、是の人我れ尙ほ出家を聽さず。何に況や當さに人の供養を受くるを得べけんや。何を以つての故に、是の如きの人は是れ[20]外道の徒黨なり。所謂五

【一七】世間。三〇九頁參照。

【一八】五欲。色、聲、香、味、觸、の五境のこと。五欲は直に欲に非ざれども。有情爲めに、妄分別を起して淨妙なりとして欲を起すが故に欲と云ふ。

【一九】供養(pûjanâ)。供給資養の義。

【二〇】外道。印度にて佛教者が他の教門を呼びたる語。儒家に謂所ゆる異端の語に相當す。字の意味は正說者、苦行者等の意義を有するも、佛教の內道に對して外道と譯せるなり。即ち佛教の書を內典と稱し、他を外典と云ふが如し。

陰の相を生ずる者、五陰に貪著し歸趣する者なり。

持世よ。當來の世後、五百歳に法の滅せんと欲する時、我が法中に於ける出家は多くは是れ五陰の相を生ずるものにして、決定して五陰の相を說き深く五陰に著し、虛妄の邪道に入て、我が法の中に於て出家を得、[二一]袈裟を咽に遶らし、常に[二二]白衣の居家に往來するを樂ふ。當さに知るべし、是の人外道と異り無く、亦た我が法を以つて多く衆人の爲めに恭敬し供養せらる。

持世よ。我れ說く。是れ五陰を見る者、決定して五陰の相を說く者、五陰に貪著する者にして人の一杯の水を受くるをも聽さず。所以は何(いか)ん。是の人我が法の中に於て乃至柔順の法忍有ること無く、是の人我が法に違逆して聖行を背捨すればなり。

持世よ。是の故に菩薩摩訶薩は後の惡世に於て、應さに是の如き大誓願を發すべし。

我が是の如き甚深の經典に於て當さに共に護持し、亦た衆生五陰の見を斷ずるが故に、而も爲めに說法すべし。

持世よ。我れ、是の經の中に一切の陰相を破し、貪著を離れたる陰の相を說かんに。爾時に多くの在家出家有りて、是の如き等の經を聞きて、諍訟を起し、實の相を生ぜず。菩薩摩訶薩此の中に於て應さに大誓願を發すべし。我等後の惡世に於いて五陰に貪著せる邪見の衆生に、大利益を作さん。所謂貪著して五陰を見るの衆生を度脫し、隨宜に方便して法を以つて利益す。是の故に、持世よ。菩薩摩訶薩若し善く諸法の實相を知り、亦た善く諸法の章句を分別する事を得んと欲し、念力を得んと欲し、轉身に不斷の念を成就し乃至阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、應さに常に是の五陰無常の相、苦の相、[二三]無我の相、虛妄の相、不堅牢の相、畢竟空の相は本より已來(このかた)不生の相なりと觀ずべし。常に正觀の時五受陰の中に所有(あらゆる)欲染は則ち能く除斷し、亦た是の如き等の深法中の方便を得ん。

【二一】袈裟(kaṣāya)。僧の用ひる三衣に對する總稱にして、不正色又は壞色と譯す。

【二二】白衣。在俗の人を白衣と云ふ。印度にては沙門を除き人皆鮮白の衣を用ふ。故に俗士を指して白衣と云ふなり。

【二三】無我。外道の執ずる實我、及び凡夫の妄情に存する我の空無なることを云ふ。

持世よ。過去無量阿僧祇劫なりき。爾時に佛有り。大意山王如來應供正遍明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と名づけたてまつる。

持世よ。是の大意山王佛に八十億那由他の聲聞衆有りき。皆是れ阿羅漢にして、諸[二四]漏已に盡き、及び八十億那由他の學地の[二五]阿那含あり。諸の菩薩摩訶薩衆四十億那由他あり。是の大意山王佛は壽八萬歲なり。

持世よ。爾時に王有り、名づけて得益と爲す。是の得益王に二萬の大城有り。具足豐樂人民充滿せり。其の城七重縱廣十二[二六]由旬、[二七]四寶もて合成せる七重の塹有り。皆欄楯に七重の行樹有り。諸寶の羅網遍く其の上を覆へり。城塹、諸樹及び上羅網は、皆黃金、琉璃、車璖、馬瑙の四寶を以つて合成せり。一一の大城に各〻五百の園林有り、皆七寶の衣樹有て其の中に充滿せり。一一の園林に各〻五百の寶地有つて、[二八]八功德の水皆其の中に滿てり。

持世よ。是の得益に八萬の婇女有り。其の大夫人に二子有り、一を無量意と名づけ、二を無量力と名づく。

持世よ、是の二王子、各年十六にして、夢中に佛の端正無比にして閻浮提金幢の如くなるを見たてまつり、見上つて大いに歡喜し、覺め已つて各〻偈を說いて曰く、其の一人の言さく。

我れ今夢に[二九]二足尊を見上つる。　金色にして[三〇]百福の相莊嚴せり。
無量の諸の功德を成就したまへり。　見已つて心に大歡喜を得たり。　と。

第二の人の言さく、

我夢に佛を見上つるに明らけき日の如し、　端正殊妙にして第一の尊なり。
猶し須彌の衆山の王なるが如く、　巍々として高く顯はれ、見る者歡喜す。　と。

持世よ。卽ち時に無量意、無量力の二子は、父母の所とに詣りて、具さに是の事を說き、父母に

【二四】漏(āsrava)。煩惱の異名なり倶舍論卷二十に「有情を稽留して久しく生死に住せしめ、或は生死の中に流轉して有頂大より無間地獄に至らしむ。彼の相續に由りて六瘡門に於て泄過窮まり無きが故に名づけて漏となす」と。

【二五】阿那含(Anāgāmin)。聲聞四果の第三。阿那伽彌、阿那伽迷とも云ひ、不還不來と譯す。

【二六】由旬(yojana)。印度の里法に於ける單位。由延、踰闍那、踰繕那とも云ふ。聖王一日の行程にして支那の四十里に當り。約日本の七里に當る。

【二七】四寶。黃金、琉璃、車璖、馬瑙の四種を云ふ。

【二八】八功德。極樂の莊嚴を說いて寶池を八種の功德水と云ひ、經釋に依て同じからず。稱讚淨土佛攝受經に(一)澄淨、(二)淸冷、(三)甘美、(四)輕輭、(五)潤澤、(六)安和、(七)飮食除飢渴等無量過患、(八)飮已定能長養諸根(倶舍論卷十一)には甘、冷、輭、輕、淸せ、不臭、飮食不損喉、飮已不傷腹、(成實論卷三)輕、冷、輭、美、淸淨、不臭、飮食、調適、飮已無患なりと。

【二九】二足尊。兩足尊とも言ふ。二脚を有する生類中に於

白して言さく、今我れ二人夢中に佛を見上つる、惟だ願はくは父母、當さに我等をして倶もに佛の所とに詣づる事を聽さるべし。佛久しく世に出でますに、我等放逸にして、覺知すること能はず、[三一]五欲の泥に沒し、色縛の爲めに縛せられ、受想行識の縛の爲めに縛せらる。我等家に在りて放逸を以つての故に、佛を見上ること能はずと。

持世よ。是の二王子は父母の爲めに是の事を説き已つて、即ち大意山王佛の所に詣る。到り已つて頭面に佛足を禮して、佛及僧に請すること三月なり。[三二]四事の供養、衣服飲食臥具醫藥なり。大城の邊に莊嚴せる得益王の所遊の園林に於て、繒旛蓋を懸け、寶華もて地を覆ひ、佛及び僧を奉じて其の中に止らしめまつり、其の二王子は三月の中、一切の樂具を以つて佛及び僧に供し、供養し已つて佛法の中に於て倶に出家す。

持世よ。其の大意山王佛は此の二王子の深心の所願を知つて、爲めに廣く是の五陰、[三三]十二入、十八性の菩薩の方便の經を説きたまふ。四萬歲の中に於て終に睡眠せず。常に服に食を滿さず、亦た傾臥せず。若しは坐若しは經行す。又四萬歲中に於ては餘事を念ぜず、但だ五受陰虛妄空の相を念じ、是の五受陰は顚倒より起ることを知り、是の五受陰の相に通達す。其の年壽を畢るまで常に[三四]梵行を修し、命修して即ち[三五]兜率天上に生じ、佛の滅後に於て、還つて閻浮提の大居士の家に生れて、年十六に至つて復た夢に佛の爲めに五陰十八性菩薩の方便經を説きたまふを見上り、是の法を聞き已つて即ち覺めて驚怖し、復た佛法に於て滿萬歲中常に梵行を修し、亦た復た方便して深く五陰十二入十八性の菩薩所行の方便經を觀じ、命終して[三六]忉利天上に生じ、天の壽畢つて、閻浮提の大姓[三七]婆羅門の家に生れ、大意山王佛法末後の千歲の中に其の二人本因緣を以ての故に、復た出家學問し、其の智海の如く、亦た善く是の五陰の性を觀察し、選擇し、法に入つて實の如く通了し、其の世の中に於て二萬の人及び二拾億の天を阿耨多羅三藐三菩提に敎化せり。

て最も尊きもの、以て佛の尊號とす。又二足は福、智、の二つに譬ふ。

【三〇】百福莊嚴の相。如來の三十二相は一一に百福の業因によつて感得せしものなれば百福莊嚴の相と云ふ。威容尊特にして比類なきの稱。

【三一】五欲。(三三四頁參照)。

【三二】四事供養。四事とは衣服供養、飲食供養、臥具供養、醫藥供養。

【三三】十二入。十二處とも云ふ即ち、眼處、耳處、鼻處、舌處、身處、意處、色處、聲處、香處、味處、觸處、法處、是れなり三科一にして色に迷ふこと偏に重き故に、色を開きて十となし、心を合して二となして十二入を立つるなり。

【三四】梵行(brahmacarya)。五行の一にして、清淨なる行業のこと。

【三五】兜率天(Tuşita-deva)。欲界六天の第四、梵語では都史多と云ひ妙足、智足、喜足と稱す即ち多く自分の受くる所に於て喜足の心を生ずるが故に此の名有り。

【三六】忉利天(Trayastrimśa-deva)。欲界六天の第二。須彌山の頂上に有り。梵名にては多羅夜登陵舍と稱へ、三十三天と譯す、忉利とは梵名の略稱にして、中央の大城には

持世よ。是の二菩薩は是れより已後、世々心を同うして、共に千億那由他の佛に値ひたてまつりて、然る後に乃ち無生法忍を得、法忍を得已りて又一億那由他の佛に値ひ、然る後に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。二人同劫に次第して佛と作る。一を無量音と名づけ、二を無量光と名づく。

持世よ。是の故に菩薩摩訶薩若し疾く阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當さに是の清淨無染法の中に於て是の陰入性及び餘の[三八]有爲法の中に說く實知見の相を勤行し、修集すべし。

十八性品　第三

持世よ。何をか菩薩摩訶薩善く十八性を知ると謂ふや。菩薩摩訶薩は方便して十八性を正觀し、是の念を作さく。眼性は眼性の中には得べからず。是れ眼性は、我無く、我所無く、常無く、堅無く、自性空の故に。眼性の中に眼性は不可得なるが故に。こ性は虛妄無所有にして、憶想分別より起り、眼性は決定の相有ること無く、虛空の性是れ眼性なり。譬へば虛妄の決定の相無きが如し。根本無きが故に。眼性も亦た是の如し。決定の相無く、亦た根本の無きが故に。何を以つての故に、眼性の中に實事は不可得の故に。眼性は處無く方無く、內に在らず、外に在らず、中間に在らず。眼性は決定の相無く、事無きを以つての故に、眼性の事は不可得なり。衆の因緣生の故に、眼性は過去ならず、未來ならず、現在ならず。眼性と眼相は不可得なり。眼性は但だ先業の果報なるを以つて、現在の緣に屬するが故に數々眼性と名づく。眼性は卽ち是れ無性、眼性の中に眼性は不可得なり。識の行處なるが故に數々眼性と名づく。若し眼根淸淨ならば、色は可見の處に在つて意根と相應し、三事の因緣合するを以つて、說て名けて眼性と爲し、眼性の中に決定の根性の相無く、智者は無眼性是れ眼性なりと通達す。

持世よ。菩薩摩訶薩、若し能く是の如く根性を觀察選擇せば、卽ち無性は是れ色性なりと通達せ

帝釋天有りて眷屬たる□衆此れに止住す。合して三十三天となる。此れ名稱の起れる所以なり。

【三七】婆羅門(Brāhmaṇa)。印度に於ける四姓の一。或は婆羅賀摩拏、婆羅欲末拏に作り淨行・淨志、外意、承習、靜胤等と譯す。自ら梵天の後裔なりと稱し、四吠陀を讀誦し、祭祀を行ひ、四姓中の最上位に位す。

【三八】有爲法。三〇八頁參照。

ん。何を以つての故に、色性の中に色性は不可得なり。是　色性は不合不散にして、色の決定の相無きが故に說て色性ゝ名づく。色は根本無く、分別も無し。何に況や、色性をや。色性は則ち是れ亦た根本無く、色性は色の內に在らず、色の外に在らず、中間に在らず。但だ憶想分別を以つて、色は可見の處に在り、眼根淸淨にして意識相應するを以つて、現在の色を見るが故に、數ゝ色性と名づく。譬へば鏡中の面像の如く、若し鏡明淨なれば則ち色相生じ、鏡中の色に決定の相無く、鏡中に人無くして而も色像を見る。但だ外に鏡有つて內に色相を起すを以つてなり。是の如きの現象は淸淨にして、所緣の色は可見の所に有り、鏡中の像の如く數ゝ色性と名づく。色に性相無く、形性無く、決定の性無し。是れを色性と名づく。諸の色相は無我の故に、數ゝ色性と名づく。衆生の所智に隨ふが故に說て色性と名づく。若し菩薩是の色性を知つて卽ち無性は是れ色性なり、無生の性是れ色性なり、無作の性是れ色性なりと知る。何を以つての故に。是の色性は過去ならず、未來ならず、現在ならず。亦た所有の性、亦た虛妄の性、亦た假名の性、無きを名づけて色性と爲す。是の如く色の性を觀察し選擇するは是れ菩薩正しく眼識の性を觀察し、選擇するなり。所謂眼識の中には眼識なく、眼識の性無くして常性有ること無く、眼識の性、根本有ること無ければ、決定の法無く、眼識の性に所示無し。是れ眼識の性は合に非ず散に非ず根本有ること無し。但だ先業の因緣を以つて起り、現在の緣に屬して色緣を繫するが故に、數々名づけて眼識の性と名づく。凡夫顚倒の心に隨ふが故に、數ゝ眼識の性と名づく。賢聖は眼識の性は則ち是れ性に非ずと通達す。何を以つての故に、眼識の性は決定無きが故に。衆の因緣從り生じ、諸の因緣に屬するが故に數ゝ眼識の性と名づく。識の所行處是れ眼識の性なり。是の識決定無きが故に、決定の相無しと說く。無生の故に、虛妄を示すが故に、善く色相を分別するが故に、能く緣を示すが故に、是れ眼識の性なりと說く。衆生の所知に從つて如來方便分別し、和合一相を破するが故に十八性を說いて識無決定

の相を示す。但だ眼清淨なれば能く色の相を知る。二法和合するが故に眼識の性を說き、眼識の實相を示すが故に眼識の性を說く。眼識の性は眼の所行處を示し。能く色は是れ眼識なりと識り、性は即ち是れ無性と說く。何を以つての故に智者は眼識の性の中に眼識の性相を求むるに不可得なり。眼識の性中に亦た眼識の性の根本をも得ざるなり。所以は如何ん、結定の性無きは此れ眼識の性なり。眼識の性は假名を以つて說く。說くところの性は即ち是れ說いて義を取らず。能く所見有る處、是れ眼識なり。【一】意業起るは是れ眼識の相なり。故に名づけて眼識と爲す。眼性色性眼識性の三事の和合を說いて、以つて諸緣の相を知るが故に。即ち是れ諸性の義を離る。所謂是れ眼の性、是れ色の性、是れ眼識の性、是の如き數有つて、衆生をして實道に入らしむる事を得。此中實に眼の性、色の性、眼識の性、無し。諸の如來は是の諸の性相の方便を知見することを說き、分別し、是の諸の性を說く。若し人是の諸性の方便に通達せば、則ち三性の無性を知らん。何を以つての故に、諸性の中、性相無きが故に。諸性の中、相は不可得なるが故に。耳性聲性耳識性も、鼻性香性鼻識性も、舌性・味性・舌識性も、身性・觸性・身識性も、皆亦た是の如し。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩意性を觀擇すと謂ふや。菩薩是の念を作さく。意性は決定無く、根本所有無きが故に、意性の中に意性無く、決定の性無し。是の意性は譬へば諸の種子を大地に種ゆるが如し。水の潤ひに因り、日を得、風を得て、漸々に芽出で、芽は種子より出でず。種子は亦た芽を和合せず。芽生ずれば則ち種子壞す。種子は芽を離れず。芽は種子を離れず、芽の中に種子無し。意性も亦た是の如し。能く意業を起すが故に。意識を示すが故に。種の芽を示すが如く意性と名づくることを得ん。意性を離るれば則ち意なく、意性は意を知ること能はず。假の名字の故に說いて意性と爲す。是の意性は意の內に在らず、意の外に在らず。中間に在らず。但だ先の業因緣を以つての故に起る。識は是れ意業の故に。所緣を知るが故に。諸性の名字合するが故に。現在に緣起す

【一】意業。心に善惡等の事を思作すること。身、口と共に三業の一。

るが故に。數〻意性と名づく。卽ち是れ不決定の意業の相、卽ち是れ衆緣和合の相なり。亦た意性は和合より起り衆生の所智に隨ひ、第一義中に意性有ること無しと說く。何を以っての故に、根本に所有無きが故に無生是れ意性なり。生は所有無きが故に意性卽ち是れ世俗語なり。第一義中決定して意性無し。過去未來現在は不可得なり。智者は無性は是れ意性なりと通達し、諸の菩薩は法性を觀擇して無性は是れ法性。法性は自性なし。自性は不可得なり。決定の性無きは是れ法性なり。法性の根本は不可得なるが故に、決定の事も亦た不可得なるが故に、但だ爲めに顚倒の衆生虛妄の結縛を起す。所知有るが故に、說いて法性と云ふ。衆生をして無性に入らしめんと欲するが故に、是れを[二]法性なりと說く。何を以っての故に、法性の中に法性の相無し。是の法性は衆緣從り生ず。衆緣より生ずる法は卽ち自性無し。諸の因緣の中自性有ること無く、諸の因緣は皆衆緣和合に從ふ故に相續して生ず。如來は此に於て衆生を敎化せんと欲して是の法性を說く。世俗の語言を以つて無性の法を示す。是の法性は內に在らず、外に在らず、中間に在らず。但だ衆生をして善不善の法を知見せしむ。法性を以つて一切法の相を離ると說き、畢竟空の相を知見するが故に、畢竟空は卽ち是れ法性なりと說く。何を以っての故に、所有無きは是れ法性なり。法性の中決定して有の相無し。譬へば虛妄の決定の相無くして而も數〻虛空と名づくるが如く、法性も亦た是の如く決定の相無し。法相を破するが故に說いて法性と名づく。法性は卽ち是れ無性なり。何を以つての故に、是の法性は過去に在らず、未來に在らず、現在に在らず。但だ衆緣に屬して緣と合するが故に數〻法性と名づけ、說いて法性と名づく。衆生の所知の如きが故に、智者は無性は是れ法性なりと證知す。法性は合に非ず、散に非ず。法性の中に法性の相無く、多も無く、少もなし。性の方便を示すを以つての故に、法性を說いて名づけて性と爲す。

若し行者實に是の法性の相に通達せば、卽ち無性を知見す。是の三界の法性中に分別の相無し。

【二】法性。又實相と名け眞如、法界、涅槃等と名く、性とは體の義、不改の義、眞如が萬法の體となり。染に有るも、淨に有るも、有情に有るも、非情數に有るも其の性不改不變なれば法性と云ふ。

衆の因緣和合の故に。諸法を分別するが故に。是の法性を說いて、無決定の性是れ法性なりと示す。智者は法性の相を以つての故に法性を見るに非ず。法性は是れ無生の相なり。何を以つての故に。法性中に相有ること無し。智者無相は是れ法性なりと通達せば、法性中に分別の相無し。相無く、分別無きが故に、說いて法性と名づく。法性の中に住處有ること無し。處も無く、起も無く、住も無く、依止も無し。是の法性は本より已來不生の故に。是の法性は生者有ること無し。何を以つての故に。法性の中性無き故に。又法性は合を以つて有るに非らず。合無く散無く、作無く、決定無きを、名づけて法性と爲す。菩薩摩訶薩法性を觀擇すること是の如くなれば、所謂無性は是れ法性なりと。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩意識の性を觀擇すと謂ふや。菩薩摩訶薩は是の念を作さく。不生の性は是れ意識の性なり。不決定の性は是れ意識の性なり。意識の性は根本無く、定法あること無し。意識の性を以つて無性の相を示す。何を以つての故に、意識性の中に意識性は不可得なり。是の意識性は虛妄にして所有無し。顚倒相應し、意を以つて首と爲す。諸法を識るが故に名づけて意識と爲す。凡夫の行ずるところに隨ふが故に意識性を說く。賢聖は非性は是れ意識性なり、虛妄無所得は是れ意識性なりと觀知す。但だ因緣の法を示すを以つての故に。意を以つて首と爲すが故に。諸緣合すを知るが故に說いて意識性と爲す。衆生の所知に隨ふが故に是の如く說く。智者は非性は是れ意識性なりと知り。衆の因緣より生じ、憶想分別より起り、性相有ること無し。卽ち是れ[三]第一義中に性相の義無し。[四]世俗法の中に衆生を引導せんが爲めの故に是の意識性を說き、衆生をして無性は是れ意識性なりと知らしめんと欲す。但だ小法を以つて諸性を壞離するが故に、是の意識性を說く。

何を以つての故に、聖人は之を求むるに不可得なり。意識は意識性の內に在らず、意識性の外に

【三】第一義(Paramārtha)。第一義の略。世俗諦に對する語。又勝義諦、眞諦等と云ふ最勝たる眞理の意。

【四】世俗法。勝義諦に對す。二諦の一、有相顯現して、空理を隱覆するを世俗と云ひ、若しは有、若しは無の如實にして虛謬ならざるを諦と云ふ。

在らず、中間に在らず。智者は性に合はざる是れ意識性なり、意識性は意の性を知らず、意の性は意識性を知らず。但だ衆の因緣より生じ、顚倒より起り、意を以つて首と爲すと通達し、諸緣に於いて、二事和合するを知る。が故に、虛妄に著するが故に覺觀より起りて衆生に識の相を示すが故に說いて意識の性と名づく。

是の意識は過去に在らず、未來に在らず、現在に在らず。是の意識は從來する所無く、亦所去も無く、處住有ること無し。本從り已來不生の相なり。意識の中に根本の定法無し。何を以つての故に、是の意識の性相は卽ち是れ二相無く、卽ち是れ無相なり。是の相は二相を以てせざるが故に有り。所示の性無きは是れ意識性なり。智者は意識性に通達すること是の如し。是の意識性は一切法の中に在らず。處無く、方無く。法と若くは合せず若くは散ぜず。聖人は不生相は是れ意識の性なりと通達す。是の意識性は來なく去なく緣なし。何を以つての故に。第一義の中の意識性は緣無くして、不可得、不可示なるが故に。

智者は意識の性に通達す。不作は是れ意識性なり。作者は不可得の故に。無生は是れ意識性なり。生相は所有無きが故に。

持世よ。菩薩摩訶薩は是の如く意識性を觀擇す。諸の菩薩は是の觀を作す時、欲界色界無色界は皆是れ無生性無所有性なりと觀擇す。云何んが觀なる。所謂欲界中に欲界無く、色界中に色界無く、無色界中に無色界無し。界を以つて無界の法を示す。欲界の相を取する者の爲めに是の欲界を示し、色界の相を取する者の爲めに是の色界を示し、無色界の相を取する者の爲めには是の無色界を示す。界を以て無界を寄說す。智者の所知の如く、無所有界は是れ欲界、色界、無色界なり。智者は欲界、色界、無色界を得ず。是の三界は皆根本無く、定法有ること無し。衆緣より起る。是の故に智者は無界是れ三界なりと知見す。此の中界の相有ること無し。是の三界は皆虛妄にして顚倒の行と合す。

何を以つての故に、智者は三界を得ず。三界を說かず。若は過去若は未來若は現在を說かず。賢聖は是の三界の虛妄の無所有に通達し、自性無く、諸法を離る。但だ顚倒より起る。衆生の顚倒を斷ぜんが爲めの故に。三界を知見するが故に。

如來は分別して三界の相を說きたまふ。衆生をして無界の義を知らしめんと欲するが故に。三界性相を以つて有るに非ずと說く。智者は三界の相は是れ無界の相なりと知見す。

持世よ。菩薩摩訶薩は是の如く觀ずる時衆生性、我性は卽ち是れ虛空性、無所有性、無生性なりと觀ず。何を以つての故に、衆生性・我性・虛空性は別無く、異無し。是の如く諸性は皆虛妄より出づ。但だ衆の緣より生ずるが故に之を名づけて性と爲す。此の中決定して性相無し。何を以つての故に、虛空の中に一定の性相無く、是の諸の性相皆虛空に入る。是れ無所有の義なり。

譬へば虛空の無相なるが如し、是の法は畢竟じて相を離れ所有の相無し。一切の諸法も亦た是の如く性相を離れ、諸性の中に性相無く、性相は內に在らず、外に在らず、中間に在らず、性の中に性有ること無く、性の中に性を攝せず。性は性に依止せず、一切の性は依止する所無く、一切の性は生せず。智者は諸法の性の中に於いて生の性を得ず、滅の性を得ず、住の性を得ず、一切の諸性不生不起不住にして、本より已來(このかた)不可得なり。

智者は諸性の假名に貪せず、著せず、受けず、念ぜず。是の故に智者は一切の諸性皆是れ無生の相なりと通達し、知見す。若し是の無生の相は卽ち滅有ること無し。第一義の中には一切の諸性不可得なり。世俗の法の故に分別して諸性を說き、第一義の中には諸性を說かず。智者は一切の諸性は第一義の如しと知見し通達す。

持世よ。菩薩摩訶薩は是の如く十八界の性及び、三界の衆生性、我性、虛空性を觀擇し通達す。諸の菩薩是の如く觀擇し通達する時　性を得ず、性を見ず。亦た一切の諸性の假の名字に通達し、

亦た諸入の一切の性、是れ無性なりと信解し、亦た分別して諸性を知る。世俗を以つての故に分別して諸性を說き、一切の諸性をして第一義の中に入らしむ。亦た善く無性の方便に通達し、亦た衆生の爲めに分別して諸性を說き、亦た衆生をして善く諸性に住ぜしむ。世俗の語言を以つて衆生の爲めに無性の法を說く。亦た二相を以つて諸相を示さず。一切の諸相の無二を知ると雖も亦た方便を以つて諸性は因緣より起ると說く。世俗の語言を以つて衆生を引導すと雖も而も衆生に第一義を示す。善く分別の諸性を知ると雖も、而も一切諸性の無所有を信解し通達す。何を以つての故に。

持世よ。如來は第一義を以つての故に、性に於て無所得なり。亦た諸の性相を得ず。

持世よ。我れ諸法に於て所斷無く所壞無し、阿耨多羅三藐三菩提を得。何を以つての故に、第一義の中に諸性無く、一切の諸性所有無く、決定無し。一切の性は虛空に同じく、一切の性虛空に入る。一切の性は生相無し。如來は一切の性に通達すること是の如し。

持世よ。如來は諸の性相を說かず、亦た諸法の力勢を說かず、何を以つての故に、若し法に所有無ければ、更に無所有の性相を說くべからず。

持世よ。如來は亦た無所有の性相を說くに、此中實に所說の性相無し。

持世よ。是れを善く諸性を分別すと名づく。菩薩摩訶薩は是の善分別を得て、能く一切諸性の假名を知り、能く世俗の相を知り、能く第一義の相を知り、能く諸性の決定を知り、能く世諦を知り、能く諸相を分別し、能く隨宜を知り、能く諸相の合を知り、能く諸相の旨趣を知り、能く諸相の所入を知り、能く諸相を分別し、能く諸相の無性を知り、能く一切の諸性をして虛空に同じからしめ、亦た諸性に於て差別を作さず、諸性の中に於て差別を得ず、差別を說かず、亦た衆生の爲めに善く諸性を破壞することを說く。

持世よ。譬へば巧なる幻師の如く、能く衆生に種々の幻事を示し、種々の幻相を知らしむ。若し

示す。若し智者有れば則ち是の幻を知らん。

持世よ。世間の性は幻の如し。諸の菩薩摩訶薩は此の幻の法の中に入り、世間は是れ幻性なりと知り、世間の所行は幻の如く、是の人方便力を以つて、衆生に、世間は幻の如しと示す。若し深智の利根有つて之に開示せば自ら能く知ることを得ん。諸法の空は幻の如く實無く根本有ること無しと知り、一切の法は皆凡夫を誑し、一切の法は皆虚妄の縁の中に繋ると知る。

持世よ。是の故に諸の菩薩摩訶薩若し是の如き諸性の方便に入らんと欲せば、是の如き等の深經に於いて染無く、得無く、一切の諸性知見の相を說き、一切の諸性の無文字、無和合を說き、亦た諸性の方便智慧を說き、亦た因緣所作の旨を說き、亦た一切諸法の如實の相を說き、所謂世間出世間、有爲無爲、繋不繋に、善く方便の旨趣を知り、第一義世俗の義の了義經、未了義經を說き、種々の因緣もて解說し、是の甚深の經中に於て、應さに勤めて精進すべし。

巻の第三

十二入品[一]　第四

佛。持世に告げたまはく、何をか菩薩摩訶薩善く十二入を知ると謂ふや。菩薩摩訶薩は正しく十二入を観擇する時、是の念を作さく。眼の中に眼入は不可得なり。眼の中に眼入は無決定なり。又眼入の根本は不可得なり。何を以ての故に、眼入は衆縁より生じ顚倒して起る。色を縁ずるを以ての故に色に繋在せり。二法、合するが故に有り。色に因て眼入あり。色に因て眼入と說く。二法相依る故に說いて眼色と名づく。所謂眼色とは、色は是れ眼入の門、縁と與なるが故に。眼は是れ色入の門、見と與なるが故に、是の故に入と說く。色入の門を縁ずるを以ての故に眼入と說き。眼を以て見るが故に色入と說く。但だ[二]世諦を以ての故に說く。其の實眼は色に依らず。色は眼に依らず。眼は眼に依らず。色は色に依らず。但だ衆縁より起り色を縁と作すが故に說て眼入と名づく。又衆の因縁より眼の所知見を起すが故に說いて色入と名づく。云何んが說となす。世俗顚倒の法に隨ふが故に說く。第一義の中に眼入は不可得なり。色入は不可得なり。智者、諸入を求むるに實に入あるを見ず。但だ凡夫顚倒相應を以て、二相を以て、此の眼入是れ色入なりと說く。是の眼入と是の色入とは、則ち是れ虛妄の入を示す。衆生をして實の如く諸法の實相を知らしめんと欲するが故に。是の諸入は皆衆因縁より生じ、顚倒相應して行ずと說く。此の中諸入の相、實は不可得なり。何を以ての故に、若くは眼入、若くは色入は內に在らず、外に在らず、中間に在らず。眼入色入は亦過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。但だ現在の因緣は道を知るが故に眼入を說くこと、凡夫の所行の如し。智者は諸入は皆是れ虛妄無所有にして、憶想顚倒の分別從り起ると通達し、非人は是れ入なりと知見し、諸入の性を說かず。諸入は決定の相無く、但だ衆因縁を以て生ずるが故に說

【一】十二入十二處のこと。即ち、眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・意入・色入・聲入・香入・味入・觸入・法入の十二種（三三七頁參照）。

【二】世諦。世俗諦の事三四二頁參照。

く。如來は是の諸入の知見の相を説きたまふ。所謂ゆる是の諸入は虚妄無所有にして、諸の因緣顚倒相應の行に屬す。諸入は作者有ること無く、使作者無し。眼入は色入を知らず分別せず。色入も亦た眼入知らず分別せず。二倶に相を離る。若し法が相を離るれば、此の中に分別すべからず。是の入相は皆因緣より生ずと説く。凡夫の顚倒の如きは、賢聖の通達する所の如し。是の眼入色入は、無性無滅、不來不去の相なり。眼は眼を知らず。眼は眼を分別せず。色は色を知らず。色は色を分別せず。何を以ての故に、二倶に空なるが故に。二皆離するが故に。眼は眼の性を知らず。色も亦た色の性を知らず。眼と色と皆無性無法なり。此中一の決定の相無し、眼自ら作さず、眼亦自ら知らず。色自ら作さず。色も亦自ら知らず。二倶に無所有なるが故に、眼、是の念を作さず、我れは是の眼なりと。色も又此の念を作さず我れは此れ色なりと。眼色の性は幻性の如く、虚妄の假名を以ての故に。是の眼、是れ色なりと説く。諸の菩薩摩訶薩[三]眼入色入を觀擇すること是の如し、耳、聲、鼻、香、舌、味、身、觸、も亦た是の如し。

持世よ、何をか菩薩摩訶薩意入を觀擇すと謂ふや。菩薩摩訶薩は意入を觀擇する時、是の念を作さく。意入の中に意入を得べからず。意は決定入の相無し、意入に根本無し。何を以ての故に、意入は即ち是れ衆因緣より生ず。顚倒より起る。法入の緣に繫り、二法和合して能く所作有り。是の意入は法入に因つて起り、法入に因つて分別して説くべし。是の二、相依る。意は是れ法入の處、意は是れ法入の門、法入は是れ意入の門、是の故に説いて法入と名づく。法を緣ずる入門なるが故に是れ意入なりと説く。意相の門を示すが故に是れ法入なりと説く。世諦を以ての故に説く。其の實、意は法に依らず。法は意に依らず。因緣生の故に諸法を以て緣と爲すが故に意入と説く。因緣生の故に意の相を示すが故に法入と説く。世諦の顚倒に隨ふが故に説く。第一義中に意入は不可得にして、法入も亦不可得なり。智者諸入を求むるに實あるを見ず。但だ凡夫は顚倒相應して、二相

【三】眼入・色入は十二入の内。

を以て是の意入は是れ法入なりと說く。是の意入と法入は虛妄にして所有無し。如來は實の如く通達するが故に是の諸入を示す。是の如く諸入は因緣より生じ、顚倒相應して行ず。此の中に意入法入は實には不可得なり。又意入法入は內に在らず、外に在らず、中間に在らず、又意入は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。但だ能く現在の因緣を覺るが故に、意入と法入を說く。凡夫の心に隨ふ故に說く。智者は是の意入法入は虛妄無所有にして憶想顚倒の分別より起り、非入は是れ入なり。と通達す。何を以ての故に、諸入の中に決定して入の相無し。智者は是の諸入は虛妄にして無所有なり。[四]意入法入の自性不可得なりと通達し、亦た是の意入法入所起の實相も得せず。是の意入法入は但だ因緣生なり。如來は是の諸入知見の相を說きたまふに、是の諸入は虛妄無所有にして、顚倒相應行は諸の因緣に屬し、意入法入は作者有ること無く、使作者無く、意入は法入を知らず分別せず。法入も又意入を知らず分別せず。何を以ての故に、二俱に離るるが故に。若し法、相を離るれば此中に分別すべきもの無し。是の諸入は皆因緣より生ず。凡夫顚倒の心に隨ふが故に說く。賢聖の通達する所の如く、意入法入は不生不滅・不來・不去なり。意入は意を知らず、意を分別せず。法入は法を知らず、法を分別せず。二俱に空なるが故に、二俱に離るるが故に。意は意の性を知らず。法は法の性を知らず。是の二性所有無し、此の中一の決定法無く、意は意を成就する事能はず、意を壞する事能はず。法は法を成就する事能はず、法は法を壞すること能はず。二俱に所有無きが故に。意入は是の念を作さず。我は是れ意入なりと。法入は是の念を作さず。我は是れ法入なりと。是の二俱に空にして、皆幻の相の如し。但だ假の名字の故に分別して說く。菩薩摩訶薩は意入法入を觀擇すること是の如し。

持世よ、何をか菩薩摩訶薩正しく內の[五]六入、外の六入を觀擇すと謂ふや。所謂是の十二入皆、虛妄にして、衆緣より生じ、顚倒と相應し、二相を以つての故に、內外の用あり。凡夫は眞の法を

【四】意入。十二入の一。法入。十二入の一。

【五】六入。入は趣入の義にして眼等の六根が六識の所依となりて能く六塵に入るを云ふ。即ち眼・耳・鼻・舌・身・意の六根にして、我等の感覺機官の總稱。

聞かず、十二入の如實の相を知らざるが故に、眼入に貪著し、我は是れ眼入、我所は是れ眼入なり、色入に貪著し、我は是れ色入、我所は是れ色入なりと。耳聲鼻香舌味身觸意法も亦是の如し。我は是れ意入、我所は是れ意入なりと。我は是れ法入、我所は是れ法入なりと。貪著を以つての故に、十二入の爲めに縛せられて、[六]五道生死に馳走往來し、道を出づる事を知らず。

菩薩摩訶薩は此の中に於て正しく十二入を觀づる時、是の十二入、虛誑、不堅牢、空如幻の相なるを見、眼入に、若しは我、若は我所を貪著せず。乃至法入に、若しは我、若しは我所を貪著せず。貪著せざるを以つての故に、憶念分別せず。

菩薩は是の如く善く十二入を知る。

持世よ。菩薩摩訶薩は是の如く諸入の方便を得、一切の十二入の中に於て、繫せず、縛せず、亦た諸入を證して能く諸入を分別す。亦た衆緣生の法を以つて十二入に通達し、亦た無相の相を以つて十二入を壞し、亦た是の諸入所依の道の中に墮せず。亦た諸入の性は則ち是れ無性なりと知り、亦た諸入の方便究竟して到る邊を知る。

持世よ。譬へば機關の水を出すに四面倶に灑ぐが如く、十二入も亦た是の如し。內外の因緣能く所作あり。此の中の實事は不可得なり。是の十二入は、先業の機關に繫せらるゝが故に、能く所作有り。

持世よ。所謂入者とは此れ諸の凡夫、智見無きものの煩惱處入の門なり。眼は、是れ色の門、愛恚を生ずるを以つての故に。色は是れ、眼の門、愛恚を生づるを以つての故に。耳鼻舌身意は是れ法の門、愛恚を生ずるを以つての故に。法は是れ意の門、愛恚を生ずるを以つての故に。是の如くの十二入は愛恚を合するが故に實相を知らず。

持世よ。菩薩摩訶薩は此の中に於て、善く諸入の性を知り、是の法入の實相を知るが故に、愛恚

【六】五道。五趣に同じ、迷界を地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五種に分類したるを云ふ。五惡趣・五惡道とも云ふ。

めに制せられず。

持世よ。菩薩摩訶薩は善く諸入を知ること是の如し。

十二因縁品第五[一]

持世よ。何をか菩薩摩訶薩、善く十二因縁を觀擇すと謂ふや。菩薩摩訶薩は十二因縁を觀擇するに、所謂無有の故に説いて[二]無明と名づけ、無明の中に於て法無きが故に説いて無明と名づけ、明を知らざるが故に説いて無明と名づく。

云何が、明を知らざる。無明の中に決定法の不可得なるを知らざる、是を無明と名づく。何を以つての故に、無明の因縁、諸行を説くに諸行は無所有にして、而も凡夫作を起すが故に、無明因縁の諸行を説く。[三]行從り起るが故に、[四]識有つて生ず、是の故に諸行の因縁は識從り生ずと説き、識從り名色の二相生ず。是の故に識の因縁、[五]名色を説き、名色從り[六]六入生ず。是の故に名色の因縁の六入を説き、六入從り[七]觸を生ず。是の故に六入の因縁の觸を説き、觸より[八]受を生ず。是の故に觸の因縁受を説き、受より[九]愛を生ず。是の故に愛の因縁[一〇]取を説き、取より[一一]有を生ず。是の故に取の因縁有を説き、有より[一二]生を生ず。是の故に有の因縁生を説き、生有より[一三]老死、憂悲、苦惱の聚集有り。是の故に生の因縁老死、憂悲、苦惱の聚集を説く。

是の如き大苦惱の聚、此の中に於いて何の法を集むと爲す。但だ顚倒と明と相違するを知り、無明の聚を後身の愛と爲す。喜染に依止して處處に生ずる事を求む。則ち是れ愛の集なり。

持世よ。世間は是の如く十二因縁の爲めに繋縛せられ、盲は無眼の故に無明の網に入つて黑闇の中に墮す。無明を首と爲すが故に、具足して十二因縁を起す。諸の菩薩は是の如く思惟して、無明の實相を觀じ、無明は空と知るが故に本際より不可得なり。何を以つての故に、無明は無の故に

【一】十二因縁（Dvādaśāṅga-Pratītyasamutpāda）。新には十二縁起と云ふ。又單に、因縁觀・支佛觀とも云ふ。即ち、無明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老死なり。（三三一頁參照）。

【二】無明。過去の世に於て諸の煩惱を起してより現在の識支起るまでの惑を無明とを云ふ。

【三】行。過去世に於て善惡業を起してより、識支の起るまでの造業に對する五蘊を體とす。此れを行と云ふ行は業に同じ。

【四】識。此れ過去世の惑業によりて、心識始めて母胎等に託生する、一刹那の位なり。

【五】名色。六根未だ備へざる位なるが故に、六處の前にして、此の位は託生の第二刹那已後なりとす。名とは心法を指す。色とは色法を指す。

【六】六入。六根なり。即ち胎内にて眼等の六根具足するを云ふ。

【七】觸。觸とは心所の名、根と境と識と和合するとき此の心所起るなり。例へば眼色

本際無、智者は非際は是れ本際なりと觀ず。則ち本際を分別せず。憶想分別を斷ずるが故に。無明に貪著せず、一切法の無所有を知り、是の法その所說の如くにあらず、若し一切法の無所有を說かば、即ち是れ無明を知見すと說く。

能く一切法の無所有に通達せば、是れ即ち明を得と爲す。此の中に於て更に餘の明無し。但だ無明を知見して、是れを名づけて明と爲す。

云何んが無明を知見すと爲す。所謂一切法の無所有、一切法の無所得、一切法の虛妄顚倒、一切法はその所說の如くにあらずと。是れを無明を知見すと名づく。

無明を知見するを即ち是れ明と爲す。何を以つての故に、明は無所有の故に。

無明の因緣の諸行とは諸法は無所有なり。凡夫は無明の闇冥中に入つて、誑惡して諸の[一四]行業を作す。是の行業は無形、無處にして、是の無明は行業を生ずること能はず。法として起作すること無きが故に無明の因緣の行業を說く。行業は聚集有ること無く、若は是の處、若は彼の處より來る諸の行業なり。亦た過去に非ず、亦た未來に非ず、亦た現在に非ず。無明は無明の性空なり。行業は行業の性空なり。諸の行業は所依無く、但だ無明に依つて諸の行業を起す。諸の行業は無明に依らず、無明は行業に依らず、無明は無明を知らず、行業は行業を知らず。是の如く無明、諸の行業は、顚倒を以つての故に無明より生ず。此の中に無明を得ず、諸の行業を得ず。無明の性を得ず、諸の行業の性を得ず。但だ闇冥を以つての故に數々闇冥と名づく。是の無明闇冥を以つての故に、分別して行業を說くに、無所有の法從りして起作するが故に、無明行業皆所有無し。

行業因緣の識とは、識は行業に依らず。亦た行業を離れずして、識を生じ。行業亦た識を生ぜず。何を以つての故に、行業は行業を知らず、行業も亦持來する者無し。但だ顚倒の衆生、行業從り識を生ず。是の識、行業の內に在らず、行業の外に在らず、亦た中間に在らず、是れ識生する者有る

の起る時、眼識と眼根と色境と和合するに當り、此の觸の心所起りて同時の心・心所をして所緣の色境に觸對せしむる用をなすなり。此れは二・三方迄の位にして無思慮無分別に前後の苦樂を顧念することなく眼前の事物に觸對するのみなり。

【八】受。心所の名、即ち領納の心所にして可愛の境をば樂なりと領受し、不可愛の境をば苦なりと領受し、中庸の境をば捨なりと領受す。四、五歳より十四、五歳迄にして境の愛・非愛を分別す。

【九】愛。愛とは貪愛なり。即ち十六・七歳以後にして、愛心次第に增長し戀愛に貪著し、衣服の美を求む。

【一〇】取。三十歳以後の位にして、貪心執取し名利欲求の情息まず、貪欲の爲めに日夜匆々たるを云ふ。

【一一】有。業の異名なり。現在の因に當來世の果を有ち、善惡の四種能く苦樂生死の萠芽を胚胎せる位なり。

【一二】生。現在の業因に依りて、當來の苦果の生ずる一刹那の五蘊にして、現在より始めて未來に續生する初念なり。

【一三】老死。衰變を老と云ふ。壞滅を死と云ふ。未來の老死は現在の名色・六處・觸・受の

こと無し、亦た生ぜしむる者無し。但だ行業を緣ずるに相續不斷なるが故に識の生ずる有り。智者は識の相を求むるに不可得なり。亦た識の生を得ず。識は亦た識を知らず、識は亦た識を見ず。識は識に依らず。

識の因緣の名色は、この名色は識に依らず、亦た識を離れずして名色を生ず。是の名色は亦た識中より來らず、但だ識を緣ずるが故に。凡夫闇冥にして名色に貪著し、識は亦た名色に至らず。智者は此に於て名色を求むるに得べからず、見るべからず。是の名色は形無し、方無く、憶想より分別して起る。是の名色の相は識の因緣の故に有り。識の性、倘得べからず。何に況んや、識緣より名色を生ぜん。若し決定して名色の性を得とは是の處有ること無し。

名色の因緣の六入とは、是の六入は名色に因つて起る。名色身中に在るが故に出入の息、利益身、及び[一五]心、心數の法有り。是の六入皆虛誑にして所有無く、分別より起り、顚倒の用有り。

六入の因緣の觸とは、是の觸は色に依つて有り。觸は色に觸せず、何を以つての故に、色は所知無く、草木瓦石と異り無し。但だ六入より起るが故に分別して是れ觸と說く。何を以つての故に、六入倘ほ虛妄して所有無し。何に況んや、六入より觸を生ぜんや。觸は空にして所有無し。憶想顚倒より起る。是の觸は方無く、處無し。觸は空にして觸の性無きを以つての故に、觸六入を知らず。六入も亦た觸を知らず。

觸の因緣の受とは、是の乘は觸の內に在らず、觸の外に在らず、中間に在らず。是の觸も亦た餘處より受を持ちて來るにあらず。而して觸より受を起す。是の觸倘ほ虛妄にして所有無し。何に云んや、觸より受を生ぜんや。諸の受に一の決定の相無く、諸受皆所有無く、顚倒より起り、顚倒の用有り。

受の因緣の愛とは、是の受は餘處より愛を持ち來るにあらず。受も亦た愛を合せず。受も亦愛を

四位に同じで老は定んであるにも非ざるが故に死に合して名を立て、病は遍く三界に通ぜざるが故に別に立てず。

【一四】 行業。身・口・意三業を造作すること。多く結果に趣すべき因法とせらる。

【一五】 心・心數の法(Citta-caitta)。心王、心所の法のこと。心王は心の主體にして。心所は心の從屬せるものを云ふ。これ精神現象の二大別なり。即ち心王は其の大體を緣じて、其の細義に亘らず。恰も國王が政治の大綱を總貫するが如し。心所は此れに對して心王に所有せらるゝと云ふ意味にて心王に伴なつて起る。心王に六識を立て、心所にては、四十六法を立つ。

知らず、愛を分別せず。愛も亦た受を知らず、受を分別せず。愛は受と合せず。是の愛も亦た受に依らず。亦た受を離れずして、愛有り。受の中に尚ほ受の相無し。何に況んや受の因緣、愛を生ぜんや。愛は受の中に在らず、受の外に在らず、中間に在らず。愛も亦た愛の內に在らず、亦た愛の外に在らず、亦た中間に在らず。愛の中に愛の相、不可得なり。是の愛は但だ虛妄憶想從り顚倒相應するが故に名づけて愛と爲す。是の愛、過去未來現在に非ず、是の愛、縛相を以つての故に起るに非ず、是の愛亦た縛相に非ず。但だ因緣相續不斷を以つての故に、受の因緣愛を說く。智者は是の愛の無處、無方空にして牢堅なく、虛妄にして所有なきを知見す。

愛の因緣の取とは、愛は餘處より取を持し來るにあらず。愛は取と合せず、愛も亦た取を生ずること能はず。愛有るが故に說いて取と名づく。因緣和合に隨ふが故に說く。取は愛と合せず、亦た散せず。愛は取と合せず亦た散せず。取は愛の內に在らず、愛の外に在らず、亦た中間に在らず。愛尙ほ有ること無し。何に況んや、愛の因緣、取を生ぜん。諸取の決定の相は得べからず。智者は是の取を知見するに虛妄無所有なり。取の中に取の相無く。是の取過去未來現在に非ず。取は取の內に在らず、取の外に在らず、中間に在らず。但だ顚倒從り起り、本緣に因つて生ずと。衆緣合するが故に取有り。法に若しくは合、若しくは散有ること無し。是の取根本有ること無く、一定の法の得べき無し。凡夫の受は是れ虛妄の取なり。是の諸行は皆虛妄の故に世間は取の爲めに繫縛せられ、智者は是の取は虛妄空にして牢堅無く、根本有ること無く、一定の法得べき無しと通達す。

取の因緣の有とは、是の取は有を持ち來らず。是の取は有を生ずること能はず。而して取の因緣の有を說く。是の有は取の內に在らず。取の外に在らず、中間に在らず。有は取を依止せず、取は有と合せず、亦散せず。但だ衆緣和合するを以つての故に取の因緣の有を說く。取は有を生ずること能はず、取は有を分別せず、取は尙ほ虛妄にして所有無し。何に況んや、取の因緣より有を生ぜ

んや。有は持ち來る者有ること無く、有の中に有を得べからず。有、內に在らず、有、外に在らず、有、中間に在らず。是の有、過去未來現在に有らず。智者は此の有に、虛妄顚倒と相應し合なく散無きことに通達す。有は所知無く、分別する所無く、是の有は處無く、方無く、是の有は前際無く後際無く中際無く、是の有は有に非ざるが故に。無に非ざるが故に。但だ十二因緣に隨順するが故に是の有を說く。智者は有の相、空にして牢堅無きに通達す。

有の因緣の生とは。是の有生を持ち來らず、生も亦た有と合せず亦た散せず。是の生、有の內に在らず、有の外に在らず、中間に在らず。有は生を生ずること能はず、亦た有を離れずして生を生ず。但だ十二因緣の相續を示して有の因緣の生を說く。有は生と緣に非ず、不緣に非ず。有尙ほ不可得なり。何に況んや、有より生を生ぜんや。智者は是の生は有に依らざることに通達す。生の中、生の相無く、生の中に自性無く、生の中に根本無く、一定の法の得べき無し。智者は是の生、無性、無所有なりと通達し、但だ十二因緣の和合相續を示す。故に有の因緣の生を說くに、生は法の若くは合、若くは散なること無く、生は有の內に在らず、有の外に在らず、亦た中間に在らず。是の生は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。是の生は前際・後際・中際・不可得なり。是の生は根本不可得なり。智者は衆因緣より生ずる顚倒と相應する、虛妄にして、所有無き幻化の如き相に通達す。

生の因緣の老死・憂悲・苦惱とは。是の生は老死・憂悲・苦惱を持ち來らず。生は亦た老死・憂悲・苦惱を生ずる能はず。老死、憂悲、苦惱は生の內に在らず、生の外に在らず、中間に在らず。老死・憂悲・苦惱も亦た生に依らず。生を以つての故に老死・憂悲・苦惱を說く可し。但だ衆因緣生の法を示すが故に生は老死・憂悲・苦惱と合せず、亦た散せず。生の中に生尙ほ不可得なり。何に況んや、生の因緣の老死・苦惱をや。老死・苦惱の中に老死・苦惱は不可得なり。何を以つての故に、老死苦

惱は老死苦惱の内に在らず、亦た外に在らず、亦た中間に在らず。老死・苦惱は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。老死・苦惱は老死と合せず、亦た散ぜず。但だ顚倒と相應し、衆緣和合し、十二因緣を具足す。故に生の因緣老死苦惱と說く。老死、老惱は依止する所無し。老死・苦惱の決定の相は不可得なり。老死・苦惱は前際・後際・中際・不可得なり。智者は老死・苦惱は虛妄にして所有無し、顚倒相應にして根本有ること無く、不作不起不生なりと通達す。

是の如く十二因緣の法を觀ずるに、因緣の法は若しくは過去、若しくは未來、若しくは現在を見ず。亦た因緣の相を見ず。但だ因緣は是れ緣無く、生無く、相無く、作無く、起無く、根本無く、本從已來一切法の所有無きを知るが故に、是の十二因緣に通達す。亦た是の十二因緣の作者、受者有ること無きを見る。若し法は因より生ずる所なれば、是の因無なるが故に、是の法も亦た無なり。

菩薩は無明の義に隨ふが故に、一切法不可得なり。是の如き觀中に入れば、無緣は即ち是れ十二因緣、此の中に所生無し。

菩薩は十二因緣を觀ずるに、是れ虛妄の生にして無明の義に隨順す。十二因緣に通達するに、若し法無ければ是の法も亦た無し。是の故に無明の義に隨順して十二因緣に通達すると說く。

無明は是れ不生、不作、不起、根本無無く、一定の法無く、緣無く、所有無し。菩薩爾時に是れ明、是れ無明なりと分別せず。無明の實相は卽ち是れ明、無明に因るが故に一切法、所有無し。一切法緣無く、憶想分別無し。是の故に無明の義に隨順して十二因緣に通達す。

持世よ。是れを菩薩摩訶薩の十二因緣の方便智慧と名づく。若し菩薩は能く、是の如く十二因緣の合散に通達すれば、是れを菩薩善く無生の智慧を得と名づく。何を以っての故に、生滅を以って觀ずれば則ち善く十二因緣を知ること能はず。若し十二因緣の集散を觀ずれば、是れを無生の智慧を得と名づく。若し無生の智慧を得れば、是れを十二因緣に通達すと名づく。

持世よ、是の故に菩薩摩訶薩、通達に入らんと欲し、無生の智慧を證せんと欲せば、應さに是の如く十二因縁の智慧を勤行、修習すべし。則ち能く十二因縁の無生の相を觀じ證す。

持世よ。若し菩薩摩訶薩、無生は卽ち是れ十二因縁なりと知らば、卽ち能く是の如き十二因縁の方便を得ん。是の人、無生の相を以つて[一六]三界を知見し、疾やかに[一七]無生法忍を得ん。當さに知るべし、是の菩薩諸の現在の佛に近づき阿耨多羅三藐三菩提の記を受くる事を得ん。是の菩薩久しからずして受記し、次第に[一八]受記を得べし。

持世よ。是の如き善人、受記を與ふるに因つて安穩心を得て、一切法の旨趣方便の中に於いて智慧光明を得ん。是の人、十二因縁は是れ無生なりと通達して、是の人、現在の諸佛に近づく事を得、是の人諸の惡魔に怖畏する所無く、是の人、生死の流れを度り陸地に到るを得、是の人、無明の泥を度り得、是の人、安穩の處に到るを得ん。

持世よ。若し今世、若しは我が滅後に於て、若しは聞き、若しは信じ、若しは讀誦し、若しは是の十二因縁の方便を修習せば、我れ是の人に受記を與へ、久しからずして、當さに無生法忍を得べし。我れも亦是の人を記し、久しからずして當さに現在の諸佛の所に於て阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得べしと。

[一]四念處品　第六

佛、持世に告げたまはく、何をか菩薩摩訶薩善く四念處を知ると謂ふや。菩薩摩訶薩は四念處を觀擇して、身に順じて身を觀じ、受に順じて受を觀じ、心に順じて心を觀じ、法に順じて法を觀ず。何をか身に順じて身を觀じ、受・心・法に順じて受・心・法を觀ずと爲すや。

持世よ。菩薩摩訶薩は身に順じて身を觀ずる時、實の如く身の相を觀ず。所謂是の身、無常苦に

【一六】三界。欲界・色界・無色界の三界なり。(三二九頁參照)

【一七】無生法忍。三忍又は五忍の一にして、無生の法を忍可したるを云ふ。

【一八】受記。佛、聖弟子の生處及び修證の得失差別を記するを云ふ。梵語、和伽羅那の譯說示、分解、記法等の義有り。

【一】四念處。身念所・受念所・心念所・法念所なり。

して病の如く瘡の如く、苦惱・憂衰・動壞之相なり。是の身不淨、[二]惡露惡む可し。身中種々其の内に充滿せり。九瘡孔中常に臭穢流れ、身の不淨猶し行厠の如し。

是の如く正しく身を觀ずる時、是の身一毫の淸淨にして惡む可からざる者無きを得ず。是の身、骨體・筋纒・皮肉、裹む所と知り、本より業因緣の果報より起る所、[三]集取の縛する所なるを知る。何等をか集と爲し、何等をか取と爲す。先の因緣より起る是の身、是を名づけて取と爲す。今の沐浴・飯食・衣服・床臥・被褥・醫藥、是を名づけて集と爲す。是の如き現在の因緣、集取の爲めに縛せられ、[四]本業果報力の故に用有り。又此の身、四大所造にして決定の實無く、色陰の所攝を數々名づけて身と爲す。

何が故に說いて名づけて身と爲すや。能く所作有るが故に說いて名づけて身と爲す。依止の處に貪著するが故に說いて名づけて身と爲す。意に隨つて用有るが故に、說いて名づけて身と爲す。憶想分別より起るが故に、說いて名づけて身と爲す、假合の作の故に說いて名づけて身と爲す。業と合するが故に說いて名づけて身と爲す。是の身久しからずして終に壞敗に歸す。無常、無定、變異の相なり。是の身は身の內に在らず、身の外に在らず、中間に在らず。是の身は身を知らず、亦た身を見ず、是の身は作無く、動なく、願求有ること無し。亦た心有ること無く、草木瓦石等と異り有ること無く、身中に決定の身の相有ること無し。是の如く正しく身を觀擇すれば是の作者有ること無く、亦た使作者有ること無きを知る。是の身は前際無く、後際無く、中際無し。是の身一の常定堅牢の相無く、水沫の聚まる如く撮摩すべからず。是の身八萬の虫の所住の處なり。是の身、百種諸病に侵惱せらる。[五]三苦を以つての故に是の身を苦と爲す。救ふ者有ること無し。所謂[六]行苦・[七]壞苦・[八]苦苦なり。是の身は衆苦の器なり。是の如く正しく身を觀ずる時、又復た思惟すらく。是の身我に非ず、彼に非ず、自在を得ず、隨意に是と作し是と作さゞるを得ず。是の身根本無く、一

【二】惡露。身體より出る汚物を云ふ。うみの樣なもの。

【三】集取。煩惱の總名なり。卽所對の境界を取着するを云ふ。愛の異名なり。

【四】本業。過去に作れる業の意なり。

【五】三苦。苦の性質に行苦、壞苦、苦苦の三種あり。此れを三苦と云ふ。

【六】行苦。行は遷流の義。法の總てが無常遷流なるに依りて苦となるを云ふ。

【七】壞苦。心身を悅樂せしむるものゝ破壞するに依りて苦となるを云ふ。

【八】苦苦。心身に逼迫する苦を苦とするを云ふ。

定の法の得べき無し。是の身性空にして一の決定の相無く、是の身虛妄より起る所、機關の作法に繫る。本業因緣より起る。應さに身中に於て我々所の想を生ずべからず。我等應さに身壽命を惜むべからず。菩薩是の如く觀ずる時、身の若しは合若しは散を得ず。從つて來る所有り、去るに所至有り、所住の處有るを見ず。是の身、若くは過去、若くは未來、若くは現在なりと分別せざれば、則ち身命に依止せず。身の若は我、若は我所に貪著せず、常に身受を離る、是れ菩薩、身を觀ずるに空我無く、我所無く、是の身中に我々所を得べからざるが故に。是の身の相不可得なり、是の菩薩若し身の相を得ざれば、卽ち身の入を願はず。身道を起作せず。

云何んが入と爲すや。是の身作者有ること無く、起者有ること無し。是の身不作不起の相、衆の因緣より生ず。是の因緣能く身と和合し、而して是の因緣も亦た虛誑所有無く、顚倒と相應して、空にして牢堅なし。亦た是の因緣を以つての故に是の身生ずる事を得、是の因緣も亦た生無く、相無し。是の如く身を卽ち身は無生相の中に入ると觀じ、入り已つて身の無相を觀ず。無相の相を以つて正しく身を觀じ、是の身無相なりと知る。相は不可得の故に無生なり。是の身過去の相、未來の相、現在の相、不可得なり。何を以つての故に、是の身に根本無く、一定の法の得べき無し。是の身若くは此、若くは彼、不可得なり。是の如く觀ずる時、身の從來する所無く、亦た所去無きを知り、卽ち身の不生、不滅の道に入る。

持世よ。菩薩摩訶薩、是の如く身に順じて身を觀じて、如實の相に入る。身の欲染に於て則ち能く除斷し、疾やかに其の念として身の中に正住せしめむ。是れを身に順じて身を觀ずと名づく。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩、受に順じて受を觀ずと謂ふや。菩薩摩訶薩は苦受、樂受、不苦不樂受を觀じ、是の三受を見て從來する處なく、亦た去る所無し。但だ虛妄の緣合し、本業果報の持する所、顚倒と相應す。諸の受は虛妄の憶想分別より起ると知る。菩薩是の如く諸受を觀じ、過去の

受を得ず、未來の受を得ず、現在の受を得ず。是の菩薩、過去の諸受を見るに空にして我なく、我所無く、常無く、牢堅無く、不變異の相無しと觀ず。是の如く過去の諸受の空の相、寂滅の相、無相の相を觀ず。未來の諸受の空、無我・無我所・無常・無牢堅・無不變異の相を觀じ、未來の諸受の空の相、寂滅の相、無相の相を觀ず。是れ菩薩是の如く觀ずる時、是の念を作さく。諸受決定の相無く、根本有ること無く、一定の法無く、相似せざるが故に、新々に生滅し、諸受の住する有る無し。菩薩是の念を作さく。是の諸受作無く、亦た作者無し。但だ凡夫顚倒相應の心中に三種の受を起し、本と業因緣に屬し、今世の緣合するが故に是の諸受有り。是の諸受皆空牢固有ること無く、虛妄の法にして猶し空拳の如し。

　是の如く受を觀ぜば心、一處に住せん。菩薩、爾時に諸受の集、沒滅の相に通ずることを得て、諸受の不合、不散を見、又受の中に受を見ず、是の念を作さく。諸受の空の性空なるが故に即ち諸受の無生の相に通達す。是の諸受、無生無滅にして或相有ること無く、是の諸受皆相無く、成相無し。是の如く思惟せば、諸受を受くる時皆能く著せず。實の如く諸受の相を知見し、諸の所受を離れ、此の諸受に於いて亦た所依なし。諸受の中に於て心皆放捨すれば則ち疾かに捨三昧を得ん。

　持世よ。菩薩摩訶薩は是の如く受に順じて受を觀ず。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩、心に順じて心を觀ずと謂ふや。菩薩摩訶薩は心の生滅住異の相を觀ず。是の如く觀ずる時、是の念を作さく。是の心從來する所無く、亦た去る所無く、但だ識相を緣ずるが故に生じ、根本有ること無く、一定の法の得べき無し。是の心來無く去無く、住異の得べき無し。是の心、過去・現在・未來に非ず。是の心識の緣の故に憶念より起り、是の心、內に在らず、外に在らず、中間に在らず。是の心一生の相無く、是の心、性無く、定無く、生有る者無く、生ぜ使むる者無く、雜業を起す故に說いて名けて心と爲す。能く雜緣を知るが故に說いて名づけて心と

爲す。念々生滅相續して不斷の故に說いて名づけて心となす、但だ衆生をして心の緣相に通達せしむるが故に、心中に心相無く、是の心本より已來、不生、不起にして性は常に淸淨なり。[九]客塵煩惱に染まるが故に分別有り。心は心を知らず、亦た心を見ず。何を以つての故に、是の心の空性自ら空の故に。根本に所有無く、是の心に一定の法無く、定法、不可得の故に、是の心法に、若くは合、若くは散無く、是の心、前際に不可得、後際も不可得、中際も不可得なり。是の心形無く、能く見る者無し。心は自ら見ず、自ら性を知らず。但だ凡夫、顚倒と相應す。虛妄を以つて識相を緣ずるが故に起る。是の心、空にして我無く、我所無し。常無く、牢無く、堅無く、不變異の相無し。是の如く思惟せば順心の念處を得ん。

是の人爾時に是心、是非心を分別せず。但だ善く心無生の相を知り、是の心の無生の性に通達す。何を以つての故に、心に決定の性無く、亦た決定の性無く、亦た決定の相無し。智者は是の心の無生無相に通達す。爾時に實の如く心の生、集、滅の相を觀じ、是の如く觀ずる時、心の若は集の相、若は滅の相を得ず。復た心の滅不滅を分別せず。而して能く心の眞淸淨の相を得ん。菩薩この淸淨心を以つて、客塵の惱まし能はざる所とす。何を以つての故に。菩薩の見は心の淸淨の相を知る。亦た衆生心の淸淨の相を知り、是の念を作さく。心垢なるが故に衆生垢なり。心淨なるが故に衆生淨なり。是の如く思惟する時、心の垢の相を得ず、心の淨の相を得ず。但だ是の心の常淸淨の相を知る。

持世よ、菩薩摩訶薩は是の如く心に順じて心を觀ず。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩は法に順じて法を觀ずと謂ふや。菩薩は一切法を觀ずるに內を見ず、外を見ず、中間を見ず。亦た諸法の若は過去、若は未來、若は現在を得ず。但だ諸法は衆緣より生じ、顚倒して起るを知る。諸法は決定の相有ること無し。所謂是の諸法は是の人に屬し、諸法の本

【九】客塵。客は主に對して、本來の存在に非ざるもの。又動にして安淨ならざるものゝ意。塵は微細なるもの、又は動ずるものゝ意にして、煩惱の性質是の如きなるが故に客塵と云ふ。

體は諸法の中に於て諸法無く、諸法は諸法の內に在らず、諸法の外に在らず、中間に在らず。諸法は諸法と合せず、亦た散せず。一切法は根本無く、一定の相無し。諸法は所有無きが故に不動不作なり。一切法は虛空の如く所有無きが故に、一切法は虛誑にして幻の如し。幻相は所有無きが故に、一切法は常に淨相にして倶に汚がれざるが故に。一切法は是れ不受の相なり、諸受所有無きが故に。一切法は夢の如く、夢の性は所有無きが故に。一切法は形無く、形は所有無きが故に。一切法は像の如く、性常に無きが故に。一切法は名無く、相無し。名相は所有無きが故に。一切法は響の如し。虛妄の所作所有無きが故に。一切の法は性無し。性不可得の故に。一切の法は焰の如し、所有無しと知るが故に。菩薩、是の如く一切法を觀ずる時、諸法の、若は一相、若は異相を見ず。亦た法の法と若くは合し、若くは散ずるを見ず。亦た法の法に於て依止するを見ず。是の如く觀ずる時、一切法の從來する所無きを見、亦た一切の住處を見ず。何を以つての故に、一切法は住無く、依無く、起無し。一切法は住處無く、住處に所有無きが故に。住處不可得の故に。

　持世よ。諸法に差別有ること無く、一切法に分別の相無く、衆生顚倒に從ふが故に用有り。是の諸法は處無く、方無し。智者は諸法の非一の相、非二の相、非異の相を得。何を以つての故に、持世よ、一切法は不生、不作、不起にして能作者無く、一切法は根本を離れ、一切法は自性無し、諸法の性を過るが故に。一切法は歸處無く、諸の歸處は所有無きが故に。是の如く諸法を觀ぜば、善く諸法の無我、無人を知り、諸法の性、空なるを觀擇せん。是の諸の法は皆空なり。性自ら空なるが故に。諸法に相無し、相を見ざるが故に。諸法の中に於て願を起さず、卽時に一切法の無生を觀擇して、是の念を作さく。此の中實の法有ること無く、若は生、若は滅、是の如く觀ずる時、心一處に住す。

　爾時に便ち一切法の無生に通達する事を得、亦た一切法の集、盡、滅を知見し、亦た能く一切法

の離相、離性に入らん。何を以ての故に、持世よ、一切法は決定の性無く、智者は諸法の無相、離相に通達す。

持世よ、菩薩摩訶薩は法に順じて法を觀ず。是の如きの觀は法に於て所得無く、所受無く、法に於て生と爲さず、住と爲さず、滅と爲さず。故に行じて一切法、盡滅の相、寂滅の相を見る。持世よ。是れを菩薩摩訶薩善く四念處を觀ずと名づく。

何が故に說いて念處と名づくるや。念處は卽ち是れ一切法は處無く、起處無く、所有の處無し。能く是の如く一切法に入れば則ち念亂せず、名づけて念處と爲す。又念處は是れ一切法の住せず、生ぜず、取せず、實の如く知見する處を名づけて念處と爲す。

五根品[一]　第七

持世よ。何をか菩薩摩訶薩善く諸根を知ると謂ふや。菩薩摩訶薩は正しく出世間の五根を觀ず。何等か五なる。所謂[二]信根・[三]精進根・[四]念根・[五]定根・[六]慧根なり。菩薩は五根を修習する時、一切法は皆衆の因緣より生じ、顚倒より起る所、虛妄の緣と合し、[七]火輪に似如たり。又夢性の如しと信じ、一切法は無常・苦・不淨・無我にして病の如く瘡の如く堅牢有ること無く、虛僞・不實・敗壞の相を信じ、又一切法は虛妄、無所有猶し空拳の如く、虹の雜色の小兒を誑かすが如く、憶想、分別により假借して有り、本體有ること無く、一定の法無しと信じ、又一切法は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ずと信じ、一切法は從來する所無く又所去無しと信じ、一切法は空無相無作なりと信じ、一切法は無生・無作・無起・無相にして諸相を離ると信じ、而して持戒淸淨・禪定淸淨・智慧淸淨・解脫淸淨・解脫智見の淸淨を信ず。

菩薩は是の如く信根を成就し、[八]不退轉を得、信を以つて首と爲すが故に能く持戒に住す。是の信

【一】　五根。根と云ふは根は勝用增上の義。信根、精進根、念根、定根、慧根の五種を云ふ。

【二】　信根　(Sraddhā-indriya)。佛の說法を信じて破壞せらるゝことなきを云ふ。

【三】　精進根(Virya-i.)。教法を信ずるに依りて其の如く勤修することを云ふ。

【四】　念根(Smriti-i.)。精進に依りて、心所緣の境に安住して、忘るることなきを云ふ。

【五】　定根(Samā-dhi-i.)。念住するに依り、定心を得て心亂散せざるを云ふ。

【六】　慧根(prajñā-i.)。定を得るに由りて觀智起り、實の如く諦理を知ることを云ふ。

【七】　火輪。旋火輪の異名、火を回轉して輪の形をなすもの。是れ輪の形を見るも、輪の實體なし以て有爲法の念々相續して種々の形あるを見るも其の實體なきを云ふ。

【八】　不退轉。佛道修行して聖果を得るに定まれば下位に退轉せざること。

常に退せず、失せず、不退の法を成就し、安住して動ぜず、信の中常に業の果報に隨ひて信人を成就し、一切の邪見を斷じ、法を離れず。師を求むるに但だ諸佛を以つて師と爲す。常に諸法の實相に隨つて僧の正道を行ずるを知り、清淨の戒に住して忍辱を成就す。是の如く不動、不壞の信、增上の信を得るが故に名づけて信根を成就すと爲す。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩正しく精進根を觀ずと謂ふや。精進根を成就して善く精進根を知る。菩薩摩訶薩は精進を行じて休せず、息せず。常に五蓋を除かんと欲するが故に精進を勤行す。乃至是の如き等の深法を聽かんが爲めに、名づけて精進と爲す。是れ菩薩、法を求めて休まず、息まず、精進して退せず、亦た諸の障礙の法を斷ぜんと欲するが故に精進を勤行して怯弱ならず。亦た種々の惡・不善・衰惱の法を斷ぜんが爲めの故に精進を勤行し、又種々の善法を增長せんが爲めの故に精進を勤行す。是れ菩薩決定して精進を成就し、是の精進に貪著せずして、是の平等の精進に入り、不退の精進を成就す。是の人、正方便の爲めの故に一切法に通達するが故に精進を發行し、精進の中に於て他人に隨はず、精進中に於て智慧の明を得、不退の相を成じ、能く是の如き不退の精進、增長の精進を得るが故に精進根を成就すと名づくる事を得。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩能く念根を得と謂ふや。善く念根を修習し、菩薩摩訶薩は常に念を一處に攝して布施、柔和にして、梵行を具足して、畢竟清淨の戒衆、定衆、慧衆、解脫衆、解脫知見衆を持して常に淨き身口意業を思念し、常に其事を究竟せんと思念し、常に一切法の[九]生滅住異の相の方便を思念し、常に苦集滅道の[一〇]四諦を知見せんと思念し、常に諸根の力、覺、道、禪定、解脫の諸の三昧の方便を思念し、常に一切法の不生不滅、不作、不起、不可說の相を思念し、常に思念して、無生の智慧を得んと欲し、常に思念して具足の[一一]忍智、離智、滅智を得んと欲し、常に思念して佛法を具足するを得んと欲し、常に思念して聲聞、[一二]辟支佛の法をして心に入らしめず。常に無

【九】生滅住異の相。四有爲相と云ふ。諸法の生滅變遷を說明する名目にして、此の四種は善く諸法の有爲なることを表示する標相なるが故に四有爲相と名ぐ。略して四相と云ふ。大・小乘に依りて所說一定ならず。今俱舍論の說明に依らば「相は謂く諸の有爲の生じ住し異し滅する性なり。(中略)これ諸法に於て能く起すを生と名づけ、能く安ずるを住と名づけ、能く衰へしむるを異と名づけ、能く壞するを滅と名づくと云ふ。」と。

【一〇】四諦(Catvāriāryasatyāni)。四聖諦又は四眞諦とも云ふ。聖者の見る所の眞理である。即ち苦、集、滅、道の四を以て四諦とす。

【一一】忍智、離智、滅智、世間智、出世間智、出世間上上智を云ふ。即ち忍智は外道凡夫の智慧。離智は聲聞圓覺の智慧。滅智は諸佛、菩薩の智慧の智慧なり。

【一二】辟支佛(巴)Paccekabuddha) (Pratyeka-buddha)。三乘の一、緣覺、獨覺、因緣覺とも云ふ。他の輔佐を借らず、獨り解脫道に向ふ者。

礙の智慧を思念し、常に是の念を忘れず、失せず、退せず。是の如き觀の中に入つて而して他に隨はず、是の人是の如き堅牢、增上の念を得るが故に名づけて念根を成就すと爲す。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩能く定根を得、能く定根の方便を得と謂ふや。菩薩摩訶薩は聖地の中に於て常に禪定を行じ、禪定に依らず、禪定に貪せず、善く禪定の相を取り、善く禪定の方便を得、善く禪定を生ずることを辨し、亦た能く無緣の禪定を行じ、悉く諸の禪定の門を知り、善く知つて禪定に入り、善く知りて禪定に住し、善し知りて禪定より起ち、而して禪定に於て依止する所無し。善く所緣の相を知り、善く眞相を緣ずることを知り、亦た禪味を貪受せず、諸の定中に於て、自在[一三]遊戲にして、他に隨はず。亦た禪の生ずるに隨はず。諸の定中に於いて自在の力を得、諸の定中に於て以つて難しと爲さず、以つて少しと爲さず、意の欲するところに隨ふ。是の人、是の如きの增上の禪定を得るが故に、定根を得、定根の方便を得と名づく。

持世よ。何をか菩薩摩訶薩、慧根を成就し、慧根の方便を得と謂ふや。菩薩摩訶薩は能く慧根を成就し、通達し、所謂能く正しく諸の苦を滅す。是の人、是の通達の慧を成就し、處々に用ゆる所皆觀を離れ、觀を捨することを得て、隨涅槃の智慧を成就す。是の慧根を成就するが故に善く三界は皆悉く熾然なりと知り、善く三界は皆是れ苦なりと知り、是の智慧を以つての故に三界に處せず、是の人、三界は一切皆空、皆な無相、無願、無形、無生、無作、無起なりと觀擇し、一切の有爲法の道を出づるを見、諸の佛法を具足せんが爲めの故に、精進を勤行して[一四]頭然を救ふが如くす。

是の菩薩の智慧は能く沮壞すること無し。是の通達の智慧を以つて能く三界を出で、亦た三界の事に依止せず。一切の有爲法の中の喜を斷じ、一切の可染、可著の繫縛の法の中に心、貪嗜せず。諸の[一五]五欲に於て心皆な厭離す。心亦た色、無色界に住せず。增上の智慧を成就し、無量の功德を成就すること猶し大海の如し。是の智慧を以つての故に、一切法の方便中に於て疑難有ること無く、

【一三】遊戲。佛、菩薩神通に遊んで人を化して以て自ら娛樂するを遊戲と名づく。

【一四】頭然。然は燃なり。頭上火燃ゆるなり。危急に譬ふ。

【一五】五欲。五妙欲と云ふも同じ。色・聲・香・味・觸の五境のこと。卽有情は妄分別をもつて淨妙なりとして欲を起すが故に欲と名づく。

是の人是の智慧を以つて、三界に通達し、三界の中に於いて心、繋する所無く、是の增上の慧を得るが故に說いて名づけて慧根の方便を得。

持世よ。何の故に之を名づけて根と爲すや。增上の故に說いて名づけて根と爲す。不動の義の故に說いて名づけて根と爲す。能く壞する無きが故に說いて名づけて根と爲す。能く退する無き故に說いて名づけて根と爲す。他に隨はざるが故に說いて名づけて根と爲す。退轉せざるが故に說いて名づけて根と爲す。能く牽くこと無きが故に說いて名づけて根と爲す。正法に隨順するが故に、說いて名づけて根と爲す。貪著せざるが故に說いて名づけて根と爲す。雜へざるが故に說いて名づけて根と爲す。

又持世よ。菩薩摩訶薩は善く衆生の諸根を知り、亦た能く分別の諸根を學す。菩薩は染欲の衆生の諸根を知り、離染欲の衆生の諸根を知り、瞋恚の衆生の諸根を知り、離瞋恚の衆生の諸根を知り、愚癡の衆生の諸根を知り、離愚癡の衆生の諸根を知り、惡道に墮せんと欲する衆生の諸根を知り、人中に生ぜんと欲する衆生の諸根を知り、天上に生ぜんと欲する衆生の諸根を知り、軟心の衆生の諸根を知り、上の衆生を知り、中の衆生を知り、下の衆生の諸根を知り、壞敗、不壞敗の衆生の諸根を知り、勤修と不勤修の衆生の諸根を知り、巧と不巧の諸根を知り、有罪と無罪、有垢と無垢を知り、瞋礙と不瞋礙とを知り、隨順と不隨順とを知り、障礙と不障礙との衆生の諸根を知り、欲界行と色界、無色界行との衆生の諸根を知り、厚善根と薄善根とを知り、畢定と不畢定と邪定との衆生の諸根を知り、[一六]慳貪と離慳貪とを知り、戲調と不戲調とを知り、狂惑と不狂惑とを知り、輕躁と不輕躁とを知り、瞋恚と不忍とを知り、柔軟と能忍とを知り、深厚の慳を知り、具足施の衆生の諸根を知り、信者を知り、不信者を知り、恭敬者を知り、不恭敬者を知り、具足持戒を知り、淸淨持戒を知り、具足忍辱を知り、懈怠を知り、精進を知り、散心を知り、得定を知り、無智慧を知り、

【一六】慳貪。物を惜しみて人にあたへず。貪り求めて飽きたらざる心。

有智慧を知り、闇鈍を知り、不闇鈍を知り、[一七]增上慢を知り、不增上慢を知り、行の正道を知り、行の邪道を知り、妄念を知り、得念安慧を知り、散根を知り、攝根を知り、壞根と不壞根と知り、淨根と不淨根とを知り、明根を知り、[一八]小乘を發する根を知り、發辟支佛乘根を知り、諸の菩薩根を知り、發佛乘根を知る。是の菩薩、是の如く諸根を得度し、方便を分別す。是の如き等の衆生に於て諸根を分別し諸慧中の方便を分別し、他に隨はざるが故に說て諸根の方便を得と名づけ、亦た他の爲めに索がれずと名づけ、亦た不可破壞と名づけ、亦た不退轉と名づけ、亦た得方便力と名づけ、亦た得人根と名づけ、亦た得[一九]諸天龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人・等根と名づけ、亦た得最自在と名づけ、亦た得不壞不動と名づけ、亦た到彼岸者と名づく。是の如き功德を成就する者は一切法の中に於て疾やかに自在の力を得ん。

【一七】增上慢。七慢の一、未得に於て得と云ひ、心を高擧ならしめるを云ふ。

【一八】小乘(hīnayāna)、小根の人の所乘とする所の法門。所修の敎理、行、果、能修の機根ともに小劣なるを云ふ。而しながら此れは決して右に述べたる樣な意味に非ずして大乘が起つて勝手に小乘とつけたるに過ぎず。乘とは運載の義。佛果にいたらしむるの乘物の事なり。

【一九】一、天(deva)二、龍(nāga)三、夜叉(yakṣa)四、乾闥婆(gandharva)五、阿修羅(asura)六、迦樓羅(garuḍa)七、緊那羅(kinnara)八、摩睺羅伽(mahoraga)八部衆と云ふ。佛法の守護に從事する大力の諸神の名なり。

卷の第四

[一]八聖道分品　第八

持世よ、何をか菩薩摩訶薩善能く道を知ると謂ふや。菩薩摩訶薩は道の中に安住す。何等か道なる。所謂ゆる八聖道分にして正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。持世よ、何をか菩薩摩訶薩名づけて八聖道分を行ずるとなすと謂ふや。何をか名づけて八聖道分の方便を得と爲すと謂ふや。[二]菩薩摩訶薩は正見を得。正見に安住して一切の見を斷ぜんが爲めの故に道を行じ、一切の諸見を斷ぜんが爲めの故に道に安住し、乃至涅槃の見、佛の見を斷ず。何を以ての故に。持世よ、一切の諸見は皆な名づけて邪となす。乃至涅槃の見、佛の見、一切の貪著の諸見を破壞するが故に名づけて正見と爲す。又諸見無く、諸見を取ること無く、一切の諸見を念ぜず、貪著せず、緣ぜず、行ぜず、分別せず、是れを正見と名づく。是の正見を以て、何等をか見るとなすや。一切世間の虛妄顚倒にして、諸見の爲めに縛せらると見る。是の如く見る時、名づけて斷一切見に安住すとなす。是の正見に於て亦た、乃至涅槃の見、佛の見を念ぜず、見ず、貪著分別せず、一切の見を起さざらんが爲の故に行ず。云何が名づけて正見とかなす。一切法は寂滅にして、相をして不生不滅ならしめ、[三]涅槃に同ぜしむ。是の如く亦た、是の一切法を念ぜず、分別せず。念ぜず、分別せず、現在前せず、正ならざる、邪ならざる、取せざる、捨せざる、此れを出世間の正見と名づく。何が故に名づけて出世間の正見とか爲す。是の人世間を得ず、出世間を得ず、世間を度し已て分別する所なし。是の故に名づけて出世間の正見と爲す。正見とは世間を知見するが如く、出世間も亦是の如し。是の人復た是れ世間なり、是れ出世間なりと分別せず。諸の憶想分別を斷ずるを、名づけて出世間の正見となす。是の人邪を見ず、正を見ず、一切の心の所念を斷ずるを名づけて正見と爲す。又正見

【一】八聖道分。三一八頁參照。

【二】菩薩摩訶薩は。以下正見の說明。

【三】涅槃。三〇四頁參照。

とは諸法の中に於て更に差別なし、是の故に說いて正見と名ずく。又正見とは實の如く諸の邪見の義を知る。又正見とは諸の邪見卽ち是れ平等なりと觀ず。是れを菩薩摩訶薩正見に安住すと名づく。

四 持世よ、菩薩摩訶薩は正見の中に住して、實の如く正思惟を知り、是の念を作さく。一切の思惟は皆是れ邪と爲す。乃至涅槃の思惟、佛の思惟、皆是れ邪思惟なり。何を以ての故に、諸の分別を斷ずるを名づけて正思惟と爲す。分別する所無きを名づけて正分別と爲す。分別を斷ずるは是れ正分別なり。何を以ての故に。是の人一切の思惟の想を知見し已れば、則ち邪有ること無く、是の人更らに是れは此、是れは彼なりと分別せず。是の如く正分別の中に住して、更らに諸の分別の、若しくは正、若しくは邪を得ず。是くの如きの人諸の分別を離れ、諸の分別を過ぐるが故に說て正思惟と名づく。正思惟とは、卽ち是れ一切の分別は皆虛誑不實にして、顚倒より起ると分別し知見す。諸の分別の中には、分別有ること無し。是の人正思惟に安住して、更らに分別の、若くは正、若くは邪を得ず。諸の分別を離れ、諸の分別を過ぎ、諸の分別を斷ずるが故に說て正分別と名づく。是の人爾時に一切の分別中に於て繫縛する所無く、諸の分別の性は皆な平等なりと說見するが故に、是れを正見性に安住すと名づく。

五 持世よ、菩薩摩訶薩は正語を勤集す。是の人一切の語言、虛妄不實にして顚倒より起り、但だ憶想分別の衆の因緣によつて有りと見て、是の念を作さく。是の語言の相、語言の中に不可得なり。一切の語を滅し、實の如く一切の口業を知るを、名づけて正語と爲す。是の語言從來する所無く、亦た所去無し。能く是の如く見る者を、名づけて正語と爲す。是の人爾時に、實想の中に安住し、有所語言皆是れ正語なり。是の故に正語の中に安住すと說く。是の人第一淸淨の口業に住することを得。亦た、諸の口業の相を知見し、亦た一切の語言に通達す。是の人の所說、終に邪有らず。是の故に說いて正語に住すと名づく。

【四】持世よ。以下正思惟の說明。

【五】持世よ。以下正語の說明。

[六]持世よ、菩薩摩訶薩は善く一切の語業は皆是れ邪業なりと知り、一切の諸業は虚妄にして、無所有・不作・不起なりと知る。何を以ての故に、諸業の中、一の決定無し、一切の業を滅するを、名けて正業と爲す。正業とは、業に於て若くは正、若くは邪なりと分別せず。諸業の平等に入るが故に、業の若くは正、若くは邪を分別せず。是の故に說て正業と名づく。又正業とは則ち是れ三界に繫せざるの義、實の如く知見するの義、實の如く平等の中に於て、更らに是れ正、是れ邪なりと分別すること無し。菩薩は是の如く正業を行じ、實の如く一切の業を知見するが故に、實の如く法に於て取無く、捨も無し。是の故に說て正業を行ずと名づく。正業の中には邪業有ること無し。是の人實の如く知見するが故に、說て正業の中に住すと名づく。

[七]持世よ、何をか菩薩摩訶薩善く一切の諸命、皆是れ邪命なりと知ると謂ふや。何を以ての故に、若し命の相、法の相、取の相、乃至涅槃の相、佛の相、乃至は清淨佛法の相有らんに、是の中に住して、清淨の命を作すを、皆な邪命と名づく。正命とは諸の資生の所著を捨し、諸の販賣を斷じ分別せず、戲論せず。一切の戲論を過ぐる、是れを正命と名づく。正命の中に更らに是れは邪命なり、是れは正命なりと分別せざれば、卽ち一切清淨の命を得ん。是の故に說いて清淨の正命を得と名づく。又一切の諸命は皆、不生にして邪正有ること無し。是の人を名づけて清淨の命を得と爲す。正道に安住して戲論有ること無く、是の正命の中に住して正命を取らず、邪命を捨てず、是の故に說て正命の中に住すと名づく。是の人爾時に正に住すと名けず。邪に住すと名づけず。清淨平等の命を得て命の相を離れて、動無し、作無く、命を念ぜず、非命を念ぜず、但名づけて[八]如實知者・[九]如實見者と爲す。是の故に說いて正命の中に住すと名づく。

持世よ、何をか菩薩摩訶薩善く正精進を知ると謂ふや。菩薩摩訶薩は正精進に住す、若し菩薩は一切の精進の道を斷ぜんが爲の故に、名づけて正精進に住すと爲す。何を以ての故に、一切の精進

【六】持世よ。以下正業の說明。

【七】持世よ。以下正命の說明。

【八】如實知者。佛の德號。諸法の實相を知れる人。

【九】如實見者。佛の德號。諸法の實相を謬らず觀察する人。

は皆是れ邪と爲す。諸の所發有り、作有り、行有るものを皆な名づけて邪と爲す。何を以ての故に、一切の法は皆是れ邪の作なり。發作する所有れば、皆是れ虚妄なり。若し虚妄の者は即ち亦是れ邪なり。正精進とは、無發・無作・無行・無願にして、一切の中、有の所作を斷ず。是の菩薩、一切法中に於て有の所作を斷じ、乃至涅槃の相、佛の相の中に有の所作の相を生ぜず。是の人善く一切の所作は皆虚妄と爲すと知り、所作無き爲めの故に道を行ず。若し是の正とは、則ち、所作無く、一切法平等無差別にして、所作有ること無し、所作の相を過ぐ。是の菩薩善く精進は是れ精進の道に非ずと知り、取らず、捨てず、故に說いて正精進に住すと名づく。正精進とは即ち是れ諸の精進不可得の義なり。即ち是れ諸法を如實に知見するの義なり。所謂ゆる正精進を是の如く見る者は、復た是れは邪精進なり。是れは正精進なりと分別せず。是の故に說いて正精進と名づく。

〔一〇〕持世よ、何をか菩薩摩訶薩善く正念を知ると謂ふや。菩薩摩訶薩は一切の念は皆是れ邪念なり、有所（あらゆる）念處は皆此れ邪念なりと知見す。何を以ての故に、一切の念は是れ邪念、若し處所に於て念生ずれは、皆是れ邪念なり。無憶、無念是れを正念と名づく。何を以ての故に、一切の念は虚妄の因緣從り起る。是の故に念を生ずる處有れば、皆邪念と爲す。若し處所に於て無生滅なる、是れを正念と名づけ、處所に念業の起ることなき、是れを淸淨念中に安住すと名づく。處として邪念生ずること無し。是の人一切法は皆是れ邪と爲すと知見し、是の正法の中に於て念無し。是の故に正念の中に安住すと說く。又正念とは、法に於て是れは正念、是れは邪念なりとの分別有ること無し。是の人一切の念は皆、無念の相なりと通達して、常に六捨心を行ずるが故に、說いて正念に住すと名づく。是の人更らに貪樂する所無く、亦た是れ無念なりと分別せず。諸法の平等を以て、一切の念に通達す。是の人實の如く一切の念を知見するが故に、若くは念、若くは悲念を取ること無く、捨することなし。是の故に正念の中に安住すと說く。是の人の所念、更らに是れ等是れ不等なりと分

【一〇】持世よ。以下正念の說明。

別せず、念非念に於て隨はず、緣ぜず。緣無きを以ての故に、一切の念非念を知る。若くは念、若くは非念、復た心に在るに非ず。是の人正念に安住するが故に說くべからず、示すべからず。一切の語言を斷じ、一切の語言を離れ、實の如く一切の語言を知り、此と彼とを分別せざるが故に、說いて正念に安住すと名づく。

〔二〕持世よ、何をか菩薩摩訶薩正定に安住すと謂ふや。菩薩摩訶薩は一切の定、皆是れ邪定なりと觀ず。何を以ての故に、凡そ諸法の中、取る所の緣の定相、取る所の知の定相、取る所の三昧、〔三〕戲論(けろん)の定相を皆名づけて邪と爲す。邪とは卽ち是れ貪著の戲なり。是の定は爾らず。所緣の相を取る如く相を取らず、法無く、戲論無く、憶念無きを名づけて正定となす。若し貪著せず、此と彼と分別せず、貪著の喜を斷じ、定の味を受けず、取定の相を壞して所住無き、此れを正定と名づく。又正定とは一切の定中に依止せず。而して戲論せず。實の如く法の本體に通達し、善く定の相を知り、心に貪著せず。彼此の念道を破せんと欲し、是の如き語も亦た分別せず。一切の分別を斷ずるが故に名づけて正定と爲す。又正定の中に更らに邪正の想を生ぜず、一切の想を破し、一切の想を斷じ、一切の想を滅するが故に名づけて正定と爲す。正定とは、邪正を生ぜず、邪正を分別せず、是れを正定と名づく。何を以ての故に、是れ菩薩は諸の定の方便に通達して是の正定中に住す。復た若くは定、若くは定相に繫せらると爲さず。諸の定の相を過ぐるが故に、說いて正定と名づく。正定は法に於て戲論する所無きに名づく。諸法の平等の中に所謂る是れは正、是れは邪なりと戲論すること有ること無し。正定とは卽ち是れ諸法平等の義なり。正定とは能く諸の禪定三界一切の有爲法を出で、能く實の如く一切の五道の生死の義を知見す。持世よ、是れを諸の菩薩摩訶薩、是の如き定の中に住すと名づく。名づけて正定の方便を得と爲し、名づけてよく道を知り、よく道の方便を知るとなす。所謂ゆる實の如く知見して、能く涅槃の道に至らん。

【二】持世よ。以下正定の說明。

【三】戲論。非論、理の言論、無義の言論。

世間出世間品　第九

持世よ、何をか菩薩摩訶薩善く【一】世間、出世間の法を知ると謂ふや。何をか世間、出世間の法の方便を得と謂ふや。持世よ、菩薩摩訶薩は正しく世間、出世間の法を觀ず。何等をか世間の法と爲し、何等をか出世間の法と爲す。菩薩是の念を作さく、凡そ所有法の憶想分別は顚倒より起り、衆の因縁を生じ、虚妄の緣に繫がれ、二相より起り、空無所有にして、虹の雜色の如く、亦た火輪の如く凡夫を誑す。破壞の義の故に、假りに世間と名づく。是の故に世間と名づく。是れ諸の世間の法は皆是れ實に非ず。虚妄の緣より起る不作不起の相なり。但だ陰界入色聲香味觸法に因るが故に說き名色に因るが故に說く。凡夫人の心の貪著する所に隨ひ、又種々の貪著邪見に隨ひ、亂糸の諸無きが如く、茅根蔓草互に相ひ連著せるが如く、顚倒に隨ひて相應するが故に、說て世間の法と名づく。何等をか出世間の法と爲す。是の如き世間の法は本より已來、實の如く性を離る、是れを出世間と名づく。何を以ての故に、智者世間の法を求むるに不可得なり。出世間の法を求むるも不可得なり。世間無く、出世間無し。是の中に處して是れ世間、是れ出世間なりと分別すること無し。但だ世間の爲めの故に出世間を說き、世間の實相卽ち是れ出世間なり。何を以ての故に、世間に定相の得べき無く、世間相は本より已來た常に空なり。世間の法は決定せざるが故に、世間は本より已來た是れ寂滅の相なり。是れ菩薩、是の如し世間、出世間を觀ずるに世間を得べからず。亦出世間に貪著せず。是の人世間、出世間を念ぜず、著せざるが故に。世間と諍訟せず。何を以ての故に、智者は世間は是れ虚妄の相なりと通達し、世間の實相を見るが故に。更らに是れ世間、是れ出世間なりと分別せず。何を以ての故に、持世よ、世間は卽ち是れ五受陰の義なり。一切の世間の法皆中に攝在し、智者陰を求むるに陰を得ず。陰の性を得ず。陰の來處を得ず。住處を得ず。去處を得ず。五陰・

【一】世間。出世間三〇九頁參照。

十二入・十八性も無く、分別無く、名字無く、性無く、相無く、行無きを卽ち出世間と名づく。

持世よ、菩薩は世間、出世間の法を觀ずる時、世間と出世間と合するを見ず。出世間と世間と離るるを見ず。是の人世間を離れて出世間を見ず。是の人復た二行を緣ぜず。所謂ゆる是れ世間、是れ出世間なり。何を以ての故に、持世よ、世間如實の相は卽ち是れ出世間なり。世間の中に世間の相は得べからず。世間の法の中に世間の法は得べからず。所有無きを以ての故に。是の法卽ち出世間なりと通達す。持世よ、出間と出世間と異ならば諸佛世に出でまさず。諸佛は亦た一切世間は不可得、一切世間は不生にして實の如く一切世間を知見すと說かず。持世よ、一若し世間を得ず、世間を取らずんば、卽ち是れ出世間なり。是の故に當に知るべし。實の如し世間を知見すれば、世間の不可得に通達するが故に。卽ち出世間を說く。是の故に諸佛世間に出でまし、一切諸法は若しくは世間、若しくは出世間にして、不二不分別を以て實の如く知見を證するが故に、卽ち是れ出世間の法を說くなり。持世よ、是の如く世間は甚深にして底を得べきこと難し。世間の法に依るもの。世間の法を得する者、世間の法を希望する者、世俗の語に於て第一義を生ずる者、二法に住在する者は、是の如き法の中に入ることを得る能はず。何を以ての故に、是の人世間を知らず、出世間を知らず、是れ皆二法を行ずるものなり。

持世よ、二法を行ずる者は世間、出世間に通達すること能はず。持世よ、菩薩摩訶薩は是の如く善く世間、出世間の法を知り、亦た世間出世間の法の方便を得ん。

[一]有爲無爲法品　第十

持世よ、何をか菩薩摩訶薩善く有爲、無爲の法を知り、有爲無爲の法の方便を得すと謂ふや。持世よ、菩薩摩訶薩は正しく有爲無爲の法を觀擇す。云何んが正しく觀擇を爲すや。是の有爲法は作

【一】有爲法。無爲の對、有刹那、世路、言依有離、有事等とも云ふ。生滅變化の性を有する諸法を有爲法となづけ、之と異なる法を無爲法と名づく。俱舍論卷五に曰く「相は謂く諸の有爲の生じ住し異し滅する性なり。此の四種は是れ有爲の相なるに由る。法のもし此れを有するは是れ有爲なるべし、此れと相違するは此れ無爲法なり」と云ふが如し、

者有ること無く、受者有ること無し。是の有爲法は自ら生じ自ら數の中に墮す、是の故に有爲法と名づく。是の有爲法は虛妄の因緣を以て和合して行ず。云何んが行じて自ら數中に墮すと爲すや。二相の緣を以て知るが故に、有爲の法生ずと名づく。是の法作者有ること無く、使作者無し。是の法自ら生じ能く起作する者無し、是の故に說いて有爲法と名づく。是の諸の有爲法內にならず、外に在らず、中間にならず、不合・不散・虛妄の根本分別從り起り、無明の因緣の故に皆所有無し。但だ諸の行力を以ての故に用有り。是の法作者有ること無く、起者有ること無し。是を有爲と名づく。有爲とは卽ち是れ繫の義、凡夫の顚倒に貪著する所に隨って說く。智者は通達して有爲の法を得ず。有爲所攝の法を得ず。智者は數ならざる所の故に有爲法と名づく。何を以ての故に。諸の智者は有爲の分別を得べからず。凡夫世俗假名の爲めの故に、是れ有爲なりと分別す。賢聖は一切諸法の名數に墮せず。諸の賢聖は諸法の名數を離る。是の故に無爲を得る者と說き、名づけて賢聖と爲す。智者は一切の有爲法は皆是れ無爲なりと通達す。是の故に復た諸の業を起作せず。智者は一切の有爲法の起相虛誑妄想を知見す。是の故に復た有爲を起作せず。何を以ての故に。有爲の法は定性有ること無し。一切の有爲法は、皆性無く、起作無し。何を以ての故に。持世よ、有行有爲の緣無くして而も能く無爲に通達す。無爲に通達せば、更らに復た有爲を緣ぜず。云何んが通達と爲すや。智者は一切の有爲法皆虛妄にして根本あること無く、繫屬せらる所無しと見て、數の中に墮せず、是の如く觀ずる時復た有爲の緣に貪著せず。亦た有爲の法を取らず。何を以ての故に、持世よ、有爲を離れて無爲を得するに非ず。無爲を離れて有爲を得するに非らず。有爲の如實の相を、卽ち無爲と名づく。何を以ての故に、有爲の中に有爲無く、無爲の中に無爲無し。但だ顚倒相應の衆生をして有爲の法を知見せしめんが爲めの故に、分別して、是れ有爲の法、是れ無爲の法、是れ有爲の相、是れ無爲の相なりと說く。是の中に於て何等をか有爲の相となす。所謂ゆる生滅住異なり。何

等をか無爲の相と爲す。所謂ゆる無生・無滅・無住異なり。是れ有爲の相、無爲の相なり。但だ凡夫を引導せんが爲めの故に說く。

持世よ、有爲の法は生の相無く、滅の相無く、住異の相無し。是の故に生滅住異の相は無相、無生なりと說く、若し是の有爲の法にして定んで三相有らば、佛當さに決定して說くべし。是の如きの相是れ生なり。是の如きの相是れ滅なり。是の如の相、住異なりと。持世よ、如來は一切の法は皆是れ無相なりと說く。持世よ、無生若し當さに相有らば無滅にして、若し當さに相有らば無住異若し當さに相有らば佛應さに決定して是れ無爲の相なりと說かん。

持世よ、若し無爲に相有り說有らば、卽ち無爲に非ず。說と相とを以ての故に。但だ凡夫は數法を以ての故に、有爲の三相所謂ゆる、生滅住異、無爲の三相、所謂ゆる無生・無滅・無住異を說く。持世よ、若し人有爲、無爲の法に通達し知見せば、是の人更らに復た生滅住異有らず。是の故に無爲を得る者と說く。持世よ、生・滅とは卽ち是れ集沒を見るの義なり。若し法に集無ければ沒有ること無し。若し集起らずんば則ち退有らず。亦た住異無けん。持世よ、是れを有爲を如實に知見すと名づく。若し人、實の如く有爲を知見せば則ち數の中に墮せず。所謂ゆる生滅住異なり。菩薩是の如く有爲無爲の法を思惟せば、有爲の法と無爲の法と合するを見ず。又無爲の法と有爲の法と合するを見ず。但だ是の念を作さん。有爲の法の如實の相は卽ち是れ無爲なれば、則ち更に復た分別する所有らず。若し有爲無爲の法を分別せずんば卽ち是れ無爲の法なり。若し是れ有爲、是れ無爲なりと分別せば、則ち無爲に通達すること能はず。一切の分別を斷ずるを是れを無爲に通達すと名づく。實の如く緣性に通達して諸緣を斷ずるが故に。數に在るにあらず、數に非ざるに在らず。持世よ、是れを菩薩摩訶薩の有爲無爲法の方便と名づく。所謂ゆる諸法に於て所住無く、所繫無く、亦た若くは有爲、若くは無爲の法を貪愛せず。

持世よ、若し菩薩摩訶薩能く是の如く、五陰を知り、善く十八性を知り、善く十二入を知り、善く十二因緣を知り、善く四念處を知り、善く五根を知り、善く八聖道分を知り、善く世間、出世間の法を知り、善く有爲無爲の法を知らば、當さに善く[一]諸法實相を知ることを得。亦た善く一切法の文辭・章句を知り、亦た念力を得、是の念力を以て轉身して不斷の念を成就し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

持世よ、過去無量阿僧祇劫、爾時に佛有りき。閻浮檀金須彌山王[二]如來・[三]應供・[四]正遍知・[五]明行足・[六]善逝・[七]世間解・[八]無上士・[九]調御[一〇]丈夫・[一一]天人師・[一二]佛世尊と號す。持世よ、是の閻浮檀金須彌山王佛は壽命五劫にして、無量の聲聞衆有り。其の佛の國土清淨に嚴飾し、豐樂安隱なり。其の諸の衆生は快樂を具足す。貪欲瞋恚愚癡少なくして、化し易く、度し易く、淨め易し。持世よ、是の[一三]閻浮檀金須彌山王佛は諸の菩薩の爲めに、亦た是の斷衆生疑菩薩藏經を説き給ふ。持世よ、時に菩薩有り、名けて寶光と曰ふ。此の陰・界・入・緣・四念處・五根・八聖道・世間・出世間・有爲・無爲法の方便を聞き、卽ち時に精進を發し、二十億歲終に惡心、若しくは貪欲、若しくは瞋恚、若しくは愚癡、若しくは利養、若しくは飮食、若しくは衣鉢を生せず。但だ是の如き法の方便の間に入らんが爲めの故に、常に精進を勤む。持世よ、是の寶光菩薩は閻浮檀金須彌山王佛の所に於て其の形壽を盡すまで、常に梵行を修し、命終の後、還て其の佛の國土の人中に生じ、年少にして命終し、卽ち復た還て其の佛の所に生じ、梵行を修行し、一一の劫に於て五百の生死あり。最後に閻浮檀金須彌山王佛の涅槃したまはんと欲する時に生じ、第五劫に在つて是の如き多聞の法を成就し、亦た是の如き諸法實相の方便を得て、佛に從つて聞く所の諸法を皆能く憶念す。是の如き念力を得るが故に、佛に曰し

【一】諸法實相。是れ究極の眞理に名くる或は法性、眞如、實際と云ふ。實相とは本來虛妄の相をはなれて相相皆實なるを言ふ。

【二―一二】如來等。三一一頁參照

【一三】閻浮檀金(Jambunada-suvarṇa)。又炎浮檀金、閻浮那提金、剡浮那他金、金の名。其色赤黃にて紫焔氣を帶ぶ、閻浮は樹の名檀又は那提は譯、河。閻浮樹の下に河あり、閻浮檀と云ふ、此河中より金を出す故にかく云ふ。

て言さく、我れ廣く諸法を演ぶるを聽き、即ち其の世の中に於て、無量無邊の衆生を度脱し、阿耨多羅三藐三菩提の道の中に住せしむ。この閻浮檀金須彌山王佛の涅槃に入りたまふ時、法を持せんが爲めの故に、寶光菩薩を[一四]護念し、佛滅度の後、法の住すること一劫、是の人、是の一劫に於て五百世中に常に人間に生じ、出家して道を學し、亦た常に是の諸法實相に於て自ら增長を得、亦た復た無量無邊の衆生を利益す。

持世よ、是の寶光菩薩は是の如く展轉して、萬億の諸佛に值ふことを得て、末後に無量光佛其の爲めに授記せり。阿僧祇劫を過ぎて當さに阿耨多羅三藐三菩提を得べく、阿僧祇劫の中に於て更らに百千萬億那由他の諸佛に值はん。後に阿耨多羅三藐三菩提を得て、成佛して、一切義決定莊嚴如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御・丈夫・天人師・佛世尊と號けんと。無量無邊阿僧祇の菩薩衆と、無量の聲聞僧有りて佛壽二劫ならん。其の佛の國土豐樂安穩にして普ねく皆莊嚴せんと。

持世よ、此の故に菩薩若し是の如き法の中に、善く方便を知ることを得んと欲せば、當さに勤行精進し、勤求し、讀誦して是の如きの法を修習すべし。又た復た菩薩摩訶薩是の如き諸法の方便を得んと欲するが故に、四法の中に於て勤行精進せん。何等をか四と爲す。一には出家、二には獨行、三には持戒清淨、四には除懈怠心、此れを四と爲す。菩薩に是の四法有つて、多聞を勤求し、忍辱に安住せば、當さに疾かに四法に值遇することを得べし。何等か四なる。一には中閻浮提に生じ、二には佛に值ふことを得、三には法に隨つて行じ、四には罪業の障を除く、是れを四と爲す。又た復た持世よ　菩薩摩訶薩は是の如き法の中に勤行精進して、當さに清淨の布施力、清淨の持戒、清淨の忍辱、清淨の精進、清淨の禪定、清淨の智慧力を得べし。菩薩摩訶薩は是の法の中に住して、疾かに是の如き方便の力を得ん。又持世よ、菩薩摩訶薩は頭陀の細法を行ずと雖も、亦た能く常に

【一四】護念(Parigraha)。佛、菩薩、諸天等が行者を護持して障礙なからしむことを云ふ。或は攝受と譯す。

衆生に於て大悲心有り。是の人大悲心に入り、是の法の方便中に於て勤行精進せん。

持世よ、復た菩薩摩訶薩有つて是の如き法を得んと欲せば、當さに諸の陀羅尼門に入つて勤行精進すべし。何をか、[一五]陀羅尼門に入るが故に勤行精進すと謂ふ。所謂ゆる善く一切法の無量の緣を觀じ、一切法の無量の方便を觀じ、亦た無量の方便の起を觀ず、是の如く觀ずる時三昧門の方便を以て、善く諸の法門の無量の緣に入り、亦た無量の方便に入り、亦た無量の方便の起に入る。是の法の中に於て力を得するが故に、善く諸法の實相を知る。亦た善く一切の文辭章句を分別す。亦た念力を得て、亦た轉身して不斷の念、不退の法を成就するを得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん。又た復た、持世よ、菩薩摩訶薩は諸の陀羅尼門に入るが故に、一切諸法の隨宜の因緣に通達し、一の因緣を以て能く千種の因緣に入り、智慧の力に隨つて諸法の方便を得ん。又た復た、持世よ、菩薩摩訶薩は是の如き法の中に勤精進するが故に、一相門の三昧に入り、[一六]一相門の三昧を得るが故に、無量相門の三昧に入らん。是の如く入り已つて種々の因緣方便を以ての故に、能く是の諸法の門に入る。是の如く諸の菩薩は一切諸法の門に入り已つて、當さに一切諸法の方便を得べし。又た復た、持世よ、菩薩摩訶薩は多く智慧を行ずるが故に、善く諸の禪定の相を知り、又善く無緣の三昧を知り、是の三昧力の故によく能善無量の緣、無量の禪定の起を知る。是の菩薩此の地中に住して、能く一切の諸法實相の方便を得ん。

又た復た持世よ、菩薩摩訶薩は常に世間の緣方便を觀じ、常に有爲法緣の方便を感じ、常に世諦の緣の方便を觀じ、亦た常に壞散一切法緣の方便を勤行し、亦た貪著する處無し。是の菩薩、是の如き法を修習して、疾かに諸法實相の方便を得ん。

又た復た、持世よ、菩薩摩訶薩は精進を勤行して方便力を起し、而して亦た常に諸法の實相を觀じて、世樂に依止せず、亦た世間の法を雜行せず。是の如き法を成就せば、疾やかに諸法の實相を得。

【一五】陀羅尼(Dhāraṇi)。總持、能持、等と譯す。種々の善法に於て散失せず。廣大無量の義理を持し、諸の障礙を遮するものに名づく。

【一六】一相門の三昧。眞如三昧又一行三昧とも云ふ。即ち眞如法界は平等一相なりと觀ずるを云ふ。

又た普く一切法の文辭章句を分別し、亦た念力を得。亦轉身して不斷の念を成就するを得。乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

持世よ、是の故に菩薩摩訶薩にして、是の如く諸法彼岸に度る事を得んと欲せば、當さに是の法に於て說の如く修行すべし。

持世よ、汝等是の法の中に於て勤行精進せんに、汝等久しからずして、當に此の法に於て無礙の智慧を得べし。持世よ、過去無量無邊不可思議阿僧祇劫、爾の時に佛有り、無量光德高王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御・丈夫・天人師・佛・世尊と號す。是の無量光德高王佛の壽命一劫にして其の佛の國土は七寶の網羅を以て其の上を覆ひ、普ねく七寶の諸の[一七]多羅樹を以て世尊を莊嚴せり。是の諸の多羅樹は、亦た復た七寶の網羅を以て其の上を覆ひ、一一の樹下に[一八]獅子座を敷き、諸の多羅樹は皆天衣を出し、諸座は皆琉璃寶・閻浮檀金・赤眞珠を以て成ずる所なり。諸の多羅樹は四邊皆香樹、華樹有つて圍繞莊嚴せり。一一の樹下に各々池有つて、八功德の水其の中に充滿せり。諸の池は皆頗梨・車𤦲・赤眞珠を以て成ずる所にして、諸の地は水上に皆青赤白紅の蓮華有つて遍ねく水上を覆ひ、諸の地皆七寶を以つて欄楯と爲せり。

持世よ、彼の佛の國土は、皆是の如き衆寶を以つて世界を莊嚴せり。四邊に復た寶樹有り、忉利天の波利多羅迦[一九]拘毘陀羅樹の如し。是の如き寶樹千萬億數世界を圍繞せり。是の諸の寶樹の光明は、一切日月の光明を障蔽して、復現ぜしめず。

持世よ、是の無量光德高王佛は、是の因緣を以て敎化し、無量無邊の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提を成就せしむ。其の佛の國土に菩薩摩訶薩其の數甚だ多し。持世よ、彼の佛の滅後、法の住すること半劫なり。是の無量光德高王佛は滅度の後、法の盡んと欲する時、下方[二〇]十佛の世界を過ぎて、菩薩有つて無量意と名づく。命終し、來生して始めて年十六にして出家して道を學し、無量光

【一七】多羅樹(Tāla)。樹の名、譯して岸樹、高竦樹、この木は幹を中斷すれば再び芽を生ぜず依て經中比丘が波羅夷の重罪を犯すに譬ふ。

【一八】師子座。佛は人中の師子なれば、佛の所坐を總じて師子座と名く。

【一九】拘毘陀羅樹。拘は三本・宮本による。大正藏は持毘陀羅樹とある。

【二〇】十佛。諸經に依つて種々有り卽ち稱讚淨土經十佛。十住毘婆沙論易行品十佛。十吉祥經十佛。華嚴十佛等有り。

德高王佛の法滅せんと欲する時に於て、是の菩薩摩訶薩䏻說陰界入方便經を聞き、是の無量意菩薩は此經を聞き已つて、大精進を發し、是の法の中に於て盡く其の邊に到り、深く方便力を成就す。是の菩薩善根因緣の故に、彼の命終に於て二十億の佛に値ふことを得て、皆是の如きの法を成就することを得。常に宿命を識り、童眞にして出家し、梵行を修行して、常に念力を得、世々是の如きの法を離れず。世々不斷の念を成就して、然る後阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得て、無量光莊嚴王佛と號す。

持世よ、是の故に菩薩摩訶薩にして若し疾やかに阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲し、若し疾やかに一切智慧を具足することを得んと欲せば、我が滅後後の五百歲惡世の中に於て、當さに勤めて護持し大誓願を發すべし。當さに大欲・大精進・大不放逸を生ずべし。後世の中に於て常に當さに是の如き等の經を護持すべし。

爾の時跋陀婆羅伽羅訶達多菩薩等を上首と爲して座より起ち、佛に向つて合掌し、佛に白して言さく、世尊よ、我等佛滅後後の五百歲法の滅せんと欲する時に於て、我等當さに爲めに是の如き等の經を守護し、勤行精進し讀誦聽受すべし。亦た當さに復た他への爲めに廣說すべし。復た若干千數の菩薩有つて、生より起ち合掌して佛に向ひ、尊顏を瞻仰し、是の願を發して言さく、世尊よ、我等後世に後の五百歲に是の誓願を作さん。是の如き等の甚深無染汚の諸佛の所に於て能く菩薩の諸善功德を生じ、能く諸の菩薩の助、菩提の法を具足するを聽き、我等當さに共に護持して、是の如き法を聞くべし。當さに大淸淨にして其の心觀喜し、專心に勤求し、受持し、讀誦すべし。佛便ち微笑したまふ。卽ち時に[二二]三千大千世界は無量の光明、其の中に遍滿し、三千大千世界は[二三]六種に震動す。爾の時阿難座從り起ち、遍へに右肩を袒ぬぎ、右膝を地に著け合掌して佛に曰して言さく、世尊よ、何の因緣の故に、今者微笑したまひ、地大いに震動せるや、佛阿難に告げたまはく、

【二二】 三千大千世界(trisāhasramahāsāhasrāṃ-lokadhātuvaḥ)。小千世界の千を中千世界、中千世界の千を大千世界となす。故に三千大千世界と云ふ。但し小千世界とは一世界たる日、月、須彌山、四天下、四天王、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天及び色界初禪の梵世天を千箇合したるを一小千世界と名づく。

【二三】 六種震動。世に祥瑞ある時、六地の震動す相を云ふ。卽ち舊譯華嚴經卷二に動(kampitaḥ)、起(calitaḥ)、覺(garjitaḥ)、震(kṣubhitaḥ)、吼(raṇitaḥ)、涌(vedhitaḥ)、の六種とす。細別して十八相道とすることあり。

汝、此等の菩薩大誓願を發して、後世に是の如き甚深無染汚の法を護持せるを見るや否や。阿難よ、是の諸の菩薩は但だ今世に是の誓願を發せるに非ず。阿難よ、我れ念らく諸の菩薩は、無量無邊の諸佛の所に於て是の如き誓願を發し、三時に諸佛の法を護持し、亦た能く無量の衆生を利益せり。今は亦た復た三時に我が法を護持して、今現在及び我が滅後法の滅せんと欲する時に於て、亦た大いに無量の衆生を利益せん。

持世よ、跋陀婆羅等の如き三時に我が法を護持し、亦た復た、此の賢劫の中に於て三時に諸佛の法を護持し、亦た未來の諸の所に於て、三時に是の如きの法を護持せん。阿難よ、我れ今是の人を讃說するも、成就せる是の如き無量の功德は說くとも盡すべからずして、衆生を憐愍し、利益し、安隱ならしめん。

阿難よ、若し我れ悉く是の人の、是の如き功德を說かば人信ずる能はず。若し人佛の語を信ぜずんば、是の人長夜に利益を失ひ、諸の苦惱を受けて、惡趣に墜墮せん。

阿難よ、我れ今粗々是れ等の菩薩衆生を利益するを說かんに、假使三千大千世界滿中の衆生皆大地獄の中に墮するが如くならんも、中に一人有り、諸の衆生に語る、汝等怖るゝ莫れ、我れ今一一汝に代つて此の大地獄の苦を受けんと。是の人卽ち時に地獄より衆生を出し、一一皆な多くの爲に千萬歲地獄の苦を受く。

阿難よ、汝が意に於て、云何んぞや是の人大利益大安樂を爲せるや不や。阿難言さく。世尊よ、大利益大安樂となせるなり。阿難よ、是の人諸の衆生を出だし已つて其の力勢を現じ、皆世間第一の快樂を成就することを得せしむ。阿難よ、是の人を能く恩有り、能く衆生に樂を與ふと爲すや不や。

阿難言さく。世尊よ、是の人の利益する所、言の說く所にあらず。阿難よ、我れ今更に是の跋陀

婆羅伽羅訶達多菩薩等衆生を利益するを說かんに、此の人衆生を利益し、是の二の利益安樂の事、算數譬喩を以つて比と爲すべからず。何を以ての故に、阿難よ、是の人の樂具は皆、是れ有爲相違の法にして、厭足と爲さゞるが故に、離欲と爲さゞるが故に、智慧と爲さゞるが故に沙門の果と爲さゞるが故に、涅槃となさゞるが故に。

阿難よ、是の諸の菩薩等は、衆生を利益し無上の樂を與へ、一切智人の樂つて佛道を求むる者の爲めに、皆佛事を作し、未だ正位に入らざる者には聲聞・辟支佛地を得しめ、佛法を以つて諸の菩薩を化し、示敎利喜す。

阿難よ、是の諸の菩薩は能く示敎利喜し、諸の菩薩衆は佛種を斷ぜざる爲めの故に、一切智種を守護せんが爲めの故に世間に住す。阿難よ、是の人過去に、もと菩薩道を行ぜし時、無量百千萬億那由他劫、皆佛を有らしめ、斷絕せざらしむ。亦た未來無量百千萬那由他劫に於て、皆佛有つて亦斷絕せざらしむ。何を以ての故に、阿難よ、是の諸の菩薩もと菩薩道を行ぜし時、旣に無量の諸佛をして佛道に住せしめ、是の諸の菩薩、世世に護持し、敎化し、百千萬億の諸佛を成就し、皆阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしむ。是れ從り以後、亦た復た、無數の百千萬億の衆生を敎化して佛道に住せしむ。敎化力の故に佛法を具足し、亦た皆當さに阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

阿難よ、是の䟦陀婆羅等は、衆生に佛の樂、一切智慧の樂を與へん爲めの故に勤行精進せり。阿難よ、若し人實を說かん、何等か是れ諸の菩薩の父母救舍依洲に生ず。諸の菩薩は當さに、是の䟦陀婆羅伽羅訶達多等の五百の菩薩は是れなりと說くべし。

阿難よ、若し人實に何等か是れ諸の菩薩の種なりやとゝはゞ、當さに云ふべし。䟦陀婆羅伽羅訶達多等の五百人是れなりと。是の如き善男子等は佛種を斷ぜず。一切智慧の種を斷ぜざらんが爲めの故に、世間に住す。是の善男子等は亦た後の世の後の五百歲に於て、是の敎化方便の力を以ての

故に樂因緣を以つて、諸の衆生をして三惡道の中に墮せざらしめ、亦た無量の百千衆生をして[二三]菩薩乘に住せしむ。

阿難よ、若干の千佛、是の善男子等の功德を說くとも盡すことを得べからず。何を以ての故に、是の善男子等は是の如き不可思議の功德を成就すればなり。阿難よ、我れ無量百千萬億阿僧祇劫に於て集むる所の法藏にして、是の善男子等能く受け護持せるなり。

阿難よ、我れ今是の無量億劫に集むる所の法寶を以つて是の人に囑累せんに、是の善男子等無量阿僧祇國土中に現在せる諸佛の護念す所と爲る。

阿難よ、是の善男子等は一切天人世間の禮事に應ずる所なり。

阿難よ、是の人十方の千佛法を講說したまふ時、常に讚歎せらる。阿難我れ已に[二四]印可せり。一切衆生の疑を斷ぜんが爲めの故に。若し人後の末世に於て、是の經を受持し、讀誦し、通利し、人の爲めに廣く說かば、當さに知るべし、是の善男子善女人は[二五]一切種智に近づくべしと。人有つて後の末世に於て乃至是の如き[二六]深經を聞くことを得。信解して誓願を發し、我れ皆と共に阿耨多羅三藐三菩提の記を受けん。若し後の世の後の五百歲に於て、信解の心生じ、勤行精進して此の經を護持せんに、是の善男子善女人は、我れ今亦是の阿耨多羅三藐三菩提の法を以て、之に囑累せん。若し聲聞の人、是の如き深法を信受して、心に違逆無くんば我れ受記を與へん、後に當さに彌勒の佛會に値ふことを得べしと、若し佛道を求むる者、是の如き法を聞き受持し信解せば、是の人皆彌勒佛の爲めに授記せられ、本願を以ての故に出家して道を學せん。

阿難よ、當さに知るべし。是の善男子善女人等、若し後の世の後の五百歲の時に於て、是の法の中に於て、勤行精進せば、當さに知るべし、是の人善根猛利ならん。

【二三】菩薩乘。菩薩の修すべき六度の法門を云ふ。乘は乘物にして運載を義とす。菩薩を運載して佛果に至らしむる故に菩薩乘と云ふ。

【二四】印可。印信許可の義。又は印定稱可の義。先達が後進の得法、說法等の事を證明認可するを云ふ。

【二五】一切種智。三智の一、能く一種の智を以て一切道を知り、一切種を知り、一相寂滅の相、種々の行類を能く解するを云ふ。

【二六】深經の經は三本、宮本には法。

囑累品　第十二

爾の時に、持世菩薩摩訶薩佛に白して言さく、世尊よ、惟だ願はくは、諸の菩薩摩訶薩を利益せんが爲めの故に此の經を護念し給へ。菩薩摩訶薩若し後の世に於て、是の法を聞くことを得て心淨喜樂ならん。亦た是の如きの法を具足せんが爲めの故に、勤行精進せん。爾の時世尊は是の經を護念したまひ、卽ち神力を以つて、此の三千大千世界をして香氣遍滿せしめたまひ、未だ曾つて有らざる所にして、一切衆生は慈心もて相ひ向ふ。佛護念し已つて、持世菩薩に告げたまはく、持世よ、我れ今是の法印品經を護念せり。一切の經を斷ぜんが故に。持世よ、若し能く是の經を受持し讀誦する者有らば、久しからずして當さに一切智慧を得べし、惟だ本願を除く。我今亦た是の人に受記を與へん、疾やかに一切智慧を具足することを得るが故に。

持世よ、菩薩摩訶薩若し是の法印品經を受持し讀誦し思惟し廣く人の爲めに說かんに、是の人久しからずして當さに疾やかに五陰・十二入・十八界・十二因緣・四念處・五根・八聖道分・世間・出世間の法、有爲無爲法の方便を得べし。亦た疾やかに諸法の實相を得。亦た疾やかに一切法の章句を分別することを得。亦た疾やかに念力を得。亦た疾やかに轉身して不斷念を成就することを得、乃至阿耨多羅三藐三菩提の法を得ん。

持世よ、是の經は後世に能く衆生の與に大法明・大智慧光・福德の因緣となり、亦た能く諸の菩薩の與に阿耨多羅三藐三菩提を與くる法を具足せん。

持世よ、若し諸の菩薩は後の末世の時に於て、是の經及び餘の深經に値ふことを得。菩薩藏の所攝にして、諸の波羅蜜と相應す。是の人魔事に覆ふ所とならず。業障の爲めに惱まされず。

持世よ、若し此の人、未だ無生法忍を得ざれば我れ受記を與へ、當來の世、第二第三佛に於て當

さに無生法忍を得べし。已でに無性法忍を得れば、一切法の中に於て疾やかに自在の力を得、疾やかに淨佛國土を得、疾やかに無量の聲聞界を得、疾やかに無量の菩薩衆を得んと。

持世よ、我れ今是の法印を説く、後世の一切の疑を斷ぜんが爲めの故に。

持世よ、菩薩摩訶薩は四利を見るが故に、後の末世に於て是の如き等の經を護持して誓願を發さん。何等をか四となす。諸の菩薩は是の念ひを作さく、我れ當さに疾やかに無量無邊の功德を得べし。亦た衆生をして大善根を生ぜしめ、亦た諸佛の爲めに正法を護持し、亦だ諸佛の持[一]法藏の人と作り、亦た無量の諸佛の爲めに讃歎せらる。此れを四と名づく。

持世よ、菩薩摩訶薩は復た四利を見て、後の末世に於て是の經を護持して誓願を發さん。何等をか四となす。諸の菩薩是の念を作さく、我等後の恐怖惡世に於て法を守護せんが故に、大精進を行じ、後の惡世に正法壞せん時に於て能く法藏を持して此の難事を爲し、後の惡世中、法亂れ、衆生亂るゝ時に於て、我れ等法を守護するが故に其の心亂れず。爾の時當さに忍辱を具足し得て、無瞋道を以て法を守護すべし。是れを四と名づく。

持世よ、菩薩摩訶薩は是の四利を見るが故に、後の惡世に於て是の如き等の深經を護持して誓願を發さんと。

跋陀婆羅伽羅訶達多等の五百の菩薩及び餘の菩薩は是の法印品經を聞くことを得て、佛の前へに合掌し、後の惡世に於て發願し、是の深經を護持するものならんと。佛右の手を以つて皆其の頭を摩し、是の如きの言を作さく、諸の善男子よ、我れ無量阿僧祇劫に於て集むる所の阿耨多羅三藐三菩提の大法寶藏は、甚だ難集となす。諸の無量無邊の憂悲苦惱を受け、亦た無量無邊の歡喜快樂を捨てたり。今以て汝等に囑累す。後の末世に於て當さに是の無量劫に集むる所の法藏を以て善く人の爲めに開けよ。廣く[二]四衆の爲めに分別解脫して、此の正法の種をして斷絕せざらしめよ。汝等亦た

【一】法藏。佛所說の法門を云ふ。即ち如來、如來藏の意なり。他にまだ種々の用例有り。

【二】四衆。佛說法の會座の列衆の上に四種を分てるものなり。即比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四種なり。

當さに大法の炬を然すべし。諸の善男子よ、如來今は汝等に請ふ。佛子よ、佛の住する所に住して我が是の無量百千萬億阿僧祇劫に於て集むる所の法寶藏を、諸の天人の爲めに、廣宣流布せよと。卽ち時に跋陀婆羅伽羅訶達多等、卽ち佛足を禮して是の如きの言を作さく、我れ等力の能ふ所に隨つて、亦た佛の威神を受け、當さに後世に於て是の法寶藏を廣宣流布すべしと。是の法印品經を說き給ふ時、無量無邊阿僧祇一生の諸の菩薩は善根成說し、亦た無量百千萬億の衆生有つて、阿耨多羅三藐三菩提の心發し畢つて、定んで阿耨多羅三藐三菩提の記を受けたり。佛是の經を說き已つて持世菩薩及び跋陀婆羅伽羅訶達多等、及び餘の菩薩、幷びに諸の四衆一切天人阿修羅等、佛の所說を聞き、皆大いに歡喜せり。

持世經 終

滅盡定 130
滅道 320
滅諦 277
免離 94

—モ—

聞持陀羅尼 97

—ヤ—

夜叉 267
夜叉神 260

—ユ—

由旬 184, 336
瑜伽 68
遊戯 368

—ヨ—

欲食 26

—ラ—

羅漢 266
樂法樂 76

—リ—

離染の菩提分 83
了義 307

—ル—

流轉眞如 81
羸少隨眠微細隨眠 115

—ロ—

漏 147, 336
六師 200
六種 107
六種震動 381
六道 177
六入 349
六波羅蜜 272

—經集部三索引終—

非善清淨言教の相 130
悲清淨 100
比丘 247
苾芻 34
毘舍闍 188
毘濕縛藥 63
毘奈耶 84
毘尼藏 274
毘梨耶波羅蜜 305
畢竟空 91
百千俱胝那庾多劫 61
百福莊嚴の相 337
白衣 145, 201, 335
白毫相 252
辟支佛 174, 261, 267, 364
表示 25

—フ—

不依法 34
不散亂依處の事 125
不退轉 213
不男の人 247
不別眞如 81
不放逸 310
不了義經 57
布薩 205
布施 290
補特伽羅 33
富樓那 231
福田 280, 310
福德資糧 102
福德智慧二種の資糧 54
佛 312
佛慧 314
佛種 304

—ヘ—

別解說 125
別解相應の法 125
偏知の相 85
遍計所執 20
遍計所執相 44
遍處 94
邊際相所緣識 94

—ホ—

輔翼 14
菩薩乘 384
菩薩摩訶薩 183, 265, 303
菩提 189, 268
菩提分 189
菩提分法 97
方便力 268
法王 259
法界 38, 86
法假安立 68
法眼淨 67, 258
法住 130
法住智 42
法性 341
法身 147, 316
法施 317
法想 124
法藏 386
法爾道理 127
法忍 188, 216, 275
法樂 18
法輪 311
傍生 53
北拘盧洲 26
發菩提 269
本業 358
本師 20
本性空 91
凡夫 319
梵行 292, 313, 337
煩惱濁 314
煩惱障 306
煩惱障所知障 57
煩惱雜染 53

—マ—

末羅羯多 47
摩睺羅迦 270
曼殊室利 116
曼陀羅華 280

—ミ—

彌勒 239, 297
微細相所緣識 94
蜜石蜜 26
蜜意 50
名字 270, 317
明行足 238, 311
明觸生の受 94
命濁 314

—ム—

無爲 146, 184
無央數 240
無我 212, 233, 247, 335
無學 298
無記 279, 330
無戲論 117
無礙 283
無礙の智 33
無見無相見 61
無間 104
無作 290
無色界 41
無所依三摩靜慮 110
無所得 191
無生 270, 320
無生智 308
無生忍 239, 270
無生法忍 67, 254, 280, 283
無生滅 184
無生門 317
無性 192, 283
無性空 91
無性自性空 91
無上士 311
無上道 235, 270, 304
無上菩提 210
無常 212
無先後空 90
無先後性 81
無相作意 98
無相三昧 188
無相智 308
無相の所行 25
無相の法 48
無着無礙 98
無二住 18
無分別影 68
無變異空 91
無明 147, 235, 320
無餘涅槃 94, 191, 274
無量の後後慧 75
無量相所緣識 93

—メ—

禪定 143, 234, 274, 289, 305

—ソ—

麁重 99
麁重の所依 75
麁重縛 30
相應 321
相眞如 81
相續 54
相縛 30
僧 281
僧伽梨 252
總持 271
總別 130
雜受俱行識 94
雜染相 31
增上慢 34, 190, 232, 272, 367
增益 53
屬類 246

—タ—

他勝 126
他世有の性 128
多聞 234
多羅樹 380
陀羅尼 130, 280, 284, 308, 379
陀羅尼門 273
耐怨害忍 105
諦 36
諦察法忍 105
諦道 176
大義 98
大空 91
大空無相 16
大慈大悲 316
大淨福田 18
大乘光明三摩地 115
大相所緣識 93
大念慧行 16
大波羅蜜多 113
大寶華王衆 17
第一義 342
第一義世諦義 309
第一現法樂住 18
第四禪 312
斷見 233
斷滅 268
檀越 230

—チ—

知法知義 77
畜生 325
長老善現 34
調御丈夫 312
調達 211
調適 178

—ツ—

頭陀 274
頭然 365
通達作證 24
通達智 93

—テ—

帝釋 146
天王 214
天眼 147
天人 298
天人師 312
展轉 147
轉依 116
轉輪聖王 236

—ト—

兜率天 337
兜羅綿 33
忉利天 201, 337
到彼岸淸淨 100
等至愛 98
等持 92
同事 206
道果 187, 210
動法 48
動輪輕躁 144
騰躍跳躑 144
貪婬 177
貪欲 190

—ナ—

那由陀 230, 290
那由陀劫 312
那落迦 53
內空 91
內外空 91
內自の所證 25

—ニ—

二足尊 336
二百五十戒 169
尼揵 224
尼揵子 248
入 318
如實見者 370
如所有性 81
如來 186, 298, 242, 268, 310
如來の十號 377
人見 232
任運轉 77
忍 283
忍辱 269, 289, 303

—ネ—

涅槃 142, 187, 265, 289, 304
念住 37
念根 305, 363
然燈佛 272, 311

—ノ—

能取 90
納衣 252

—ハ—

波羅提木叉 142
波羅蜜多 113
頗胝迦寶 47
婆羅痆斯 64
婆羅門 208, 338
薄伽梵 13
背趣 98
八支聖道 38
八直聖道 246
八聖道 262, 318
八聖道分 278
八難 208
發起精進 287
發光地 76
般涅槃 52
般若波羅蜜 303

—ヒ—

比量 129
日の後分 35
彼岸 203, 303
彼利を修習する事 125
被甲精進 106
非圓成實の相 130

捨相 77
奢摩他 68
邪見 317
邪命 278
釋師子 259
釋提桓因 245
寂靜聖默の樂 26
須陀洹 171
須陀洹果 253
須跋陀羅 141
須菩提 277
須彌 184, 267
須彌山王 288
須臾 280
種性 55
衆生見 232
衆生濁 314
衆魔 16
衆魔怨敵 18
修妬路 202
修陀食 261
趣 333
受 320
受記 357
受軌則の事 125
受用の受 94
壽命見 232
順忍 227
宿命 175, 312
出慧 18
出世間 248, 293, 309
出世間の慧 23
出道 148
集取 358
修道 93
執受 40
十九天 171
十善 276
十地 95
十佛 380
十二有支 63
十二因緣 331, 351
十二頭陀 292
十二入 213, 337, 347
十八界 213
十八性 331
十力 129, 297, 315
住持 15
住法 48
所依麁重の受 94
所依能依相屬相 85
所行 17
所作 147
所作成辦所緣境事 69
所調伏界 86
初轉法輪 141
書寫 66
處 36
諸慧 18
諸行 28
諸結 189
諸根 38
諸法空 244
諸法實相 304, 377
諸法の相 44
觴 281
囑累 316
濁水器 88
小乘 367
小相所緣識 93
正順解脱 149
正性離生 93
正斷 38
正遍知 311
正法輪を轉ず 64
正命 278
生清淨 100
生相 327
生滅住異の相 364
淸淨地 98
精進 221, 289
精進根 363
精進平等性 110
聖諦 23
勝義空 91
勝解行地 27, 97
勝解忍 97
勝決擇慧 18
勝處 94
勝利を修習する事 125
聲聞 273, 298, 331
證成道理 127
定根 363
常見 233
淨不淨業無失業の性 128
心意識の祕密 39
心行 257
心住 94
心清淨 109
信解 55
信根 176, 363
身口意 194
身口意業 219
身見 285
眞見 317
眞實に通達する事 125
眞如作意 83
神足 38
盡所有性 81
盡智 308

—ス—

隨眠 103

—セ—

世間 262, 309
世間解 238, 311
世俗法 342
世尊 183, 265, 304, 312
聖敎量 129
聖行を攝する事 125
聖行の眷屬を攝するの事 125
刹那の性 128
攝取 316
仙人隨處施鹿林 64
栴檀 207
旃陀羅 202
選擇諸法 258
贍部洲 82
善護助 147
善根 14
善淸淨慧 92
善淸淨心 92
善修治三摩地靜慮 110
善逝 238, 311
善說善制法毘那耶 57
善知識 103, 147, 190, 229, 286, 307
善男子 20, 268

苦々 358
苦集等 83
劬勞伽行を修習する事 125
垢清淨 109
俱分三摩地靜慮 110
恭敬 60
鳩槃茶 188
鳩摩羅什 303
瞿曇 258
愚癡 99
愚弊 172
空 90, 212
空華 52
空寂 194
空空 91

—ケ—

化身 117
袈裟 335
外道 242, 247, 289, 334
解脫 94, 255, 266
解脫身 117
解脫知見 255
結 320
結便 322
見 199
見取 60
見濁 314
見清淨 109
見諦 30
見佛養承事清淨 100
乾闥婆 188, 271
慳貪 244
眷屬 14
賢劫 316
眼入 348
現入 129

—コ—

虛空神 260
顧戀の受 94
五陰 213, 318, 330
五我 177, 174
五逆罪 242
五蓋 285, 306
五眼 144
五根 279, 318, 363
五彩 175
五事 173
五濁 314
五道 268, 321, 350
五怖畏 18
五部 211
五明處 111
五欲 144, 270, 285, 334, 365
牛跡 60
語清淨 109
護念 378
功曹 177
劫濁 314
恒河沙 314
恒河沙劫 288
黑沈 33
業 92
業障 297, 306
極喜地 76
近波羅蜜多 113
金剛 280
言說熏習 53
言說隨眠 53
言說隨覺 53
含識 169

—サ—

作用道理 127
薩迦耶滅究竟涅槃 26
最勝子 19
三惡道 269, 304
三有爲相 126
三界 329, 357
三苦 358
三種 73, 122
三十二種大丈夫の相 128
三十二大人の相 272
三尊 172
三千世界 186
三千大千世界 257, 276, 381
三千大千佛土 118
三毒 269, 277, 285
三摩地 71
三昧 305
三明 18

—シ—

止相 76
尸羅 92
尸利 286
四威儀 206
四師 229
四事供養 236, 337
四衆 386
四種清淨 96
四種の緣 126
四聖諦 277
四眞道 169
四禪 274
四數 113
四諦 364
四大 176, 319
四天王 260
四天下 185
四顚倒 285
四念處 277, 278, 306, 357
四寶 336
四無色定 274
四無所畏 129, 315
此餘異類可得の相 130
此餘同類可得の相 129
師子吼鼓音生如來 291
斯陀含 171
資具の受 94
自依心 131
自恣 206, 275
自相空 248
自庋 145
地獄 325
事業 16
事邊際所緣境事 68
慈氏菩薩 68
慈悲喜捨 74
色陰 319
色身 317
食 36
識陰 281, 329
七菩提分 279
沙門 169, 211, 248
沙門果 84
娑羅雙樹 141
舍利弗 183
捨心 280

索　引

(頁數は通頁を表す)

—ア—

阿修羅 261, 271, 298
阿僧祇劫 231, 297, 310, 331
阿陀那識 42
阿那含 170, 336
阿難 298
阿若憍陳如 141
阿㝹樓陀 147
阿耨多羅三藐三菩提 30, 184, 304
阿毘曇 202
阿鼻 275
阿鼻地獄 225
阿頼耶識 42
阿羅漢 130
阿羅漢道 277
阿蘭若 251
阿練若 34
阿練若住處 274
惡趣 203
惡知識 190
惡露 356
安慧 313
安受若忍 105
安立眞如 87

—イ—

已斷未斷觀察善巧 124
異生 22
異熟因 112
異類譬喩所得の相 130
威儀行處 306
威德淸淨 100
意業 340
一究竟淸淨 55
一向趣寂の聲 56
一劫 147, 313
一切異類可得の相 130
一切智 175, 287
一切種智 266
一切同類可得の相 130
一切法空 90
一妙淸淨道 55
印可 384
陰 318

—ウ—

有爲 277
有爲異相相 93
有爲法 279, 284, 308, 338, 374
有色界 41
有所得 191
有所得の現觀 35
有尋有伺三摩地 76
有漏 259
憂婆夷 261
優婆塞 172
蘊 35

—エ—

依止 282
依持の受 94
依他起相 45
依他心 131
依法 74
廻向菩提の聲聞 56
圓成實相 45
圓滿三摩地靜慮 110
遠塵離垢 67
遠離の樂 26
慧根 363
壞色の衣 145
緣 282
緣起 36
閻浮提 257, 313
閻浮檀金 377

—オ—

王舍城 183, 265
應器 145
應供 311

—カ—

彼の光明の念 75
過客 178
過患功德 85
果已成滿麁重の受 94
果報 320
果未成滿麁重の受 94
迦葉佛 177, 222
迦羅頻伽 266
迦蘭陀竹園 303
迦樓羅 271
訶梨 33
歌羅羅 35
我見 191, 226, 232, 319
我所、攝受 26
餓鬼 325
戒取 209
界 37, 318
害伴隨眠 114
覺 281
覺支 38
客塵 361
簡擇思惟 55
觀自在菩薩 95
觀對道理 127
願生 270

—キ—

器世界 82
祇洹 261
耆闍崛山 265
義の義 85
戲論 147, 317
擧相 77
行陰 323
行界勝義 34
行若 354
樂說 283
緊那 267

—ク—

九事 123
共有 94
共相 31
供養 310, 334
拘毘陀羅樹 380
苦有變異性相 93

昭和八年四月十五日印刷
昭和八年四月二十日發行

不許複製

國譯一切經 經集部 三

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番地

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 東京市芝區芝公園七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（二）一一六番
（三）〇四〇番

製本所　兩角製本所

36

36

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 5865